

V. 考 察

1. 土 器

A. 大梁川遺跡遺物包含層・遺構出土土器の共伴・対応関係

大梁川遺跡遺物包含層・遺構出土土器は、南側遺物包含層出土土器の共伴関係を軸に、第3表に示す時間的対応関係の下に把握された。

これらの共伴・対応関係によって導き出された土器の諸類型を第3表右欄のように各々「大梁川後期初頭土器」・「大梁川第Ⅰ層土器」・「大梁川第Ⅱ層土器」・「大梁川第Ⅲ層土器」・「大梁川第Ⅳ層土器」と命名し、これらの諸類型が「土器型式」としての条件を満たし得る内容を持つか否かを検討し、その分析過程で現行の「土器型式」との関連性を見出して行く。

「土器型式」の概念規定については、諸々の研究者の研究対象やそれに付随する実践的な方法、あるいは依拠するところの歴史観や認識主体の存在位置から諸々の見解が述べられている。本稿では山内清男が縄文土器編年体系を完成させた「縄文土器型式の細別と大別」(1937)の中述べている「所謂型式学は取るに足らず、…これらを層位又は他の自然現象に応じて年代順を定める。」という時間軸設定にあたっての自然科学的で実証性に富んだ方法に準拠し、各層位において抽出された「一定の形態と装飾」(山内; 1964)が他遺跡においても確認検証し得て初めて型式属性としての恒常的・本質的規定要件が満たされたものと考えて行く。このような検証作業を通して、土器型式の地域的なあり方や他の文化要素の地域的な展開様式との関連性を把握して行く。

B. 土器群の編年的位置と地域性

(1) 大梁川第Ⅳ層土器

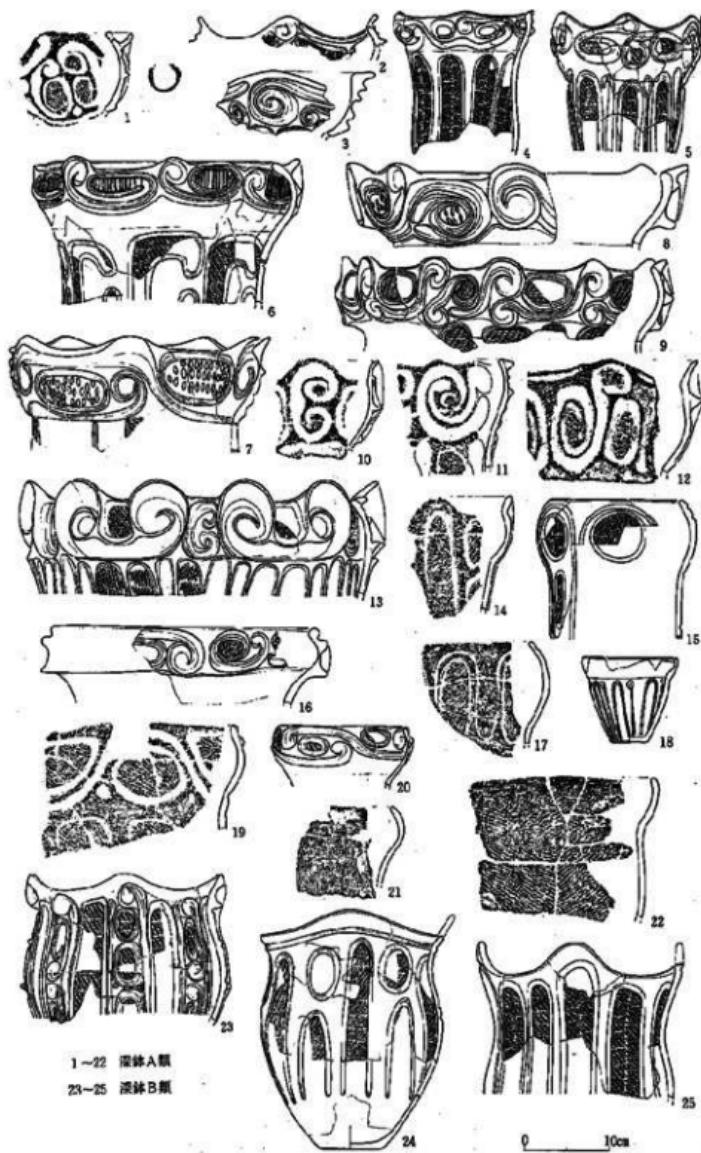
a. 土器群の内容

大梁川第Ⅳ層土器は南側遺物包含層第Ⅳ層から発見されているのみで遺構などは検出することができなかった。従って土器群の内容については pp. 22~23 の小結において述べた通りで補足事項はない。第299~301図に本層の主要土器を集成する。

b. 土器群の編年的位置

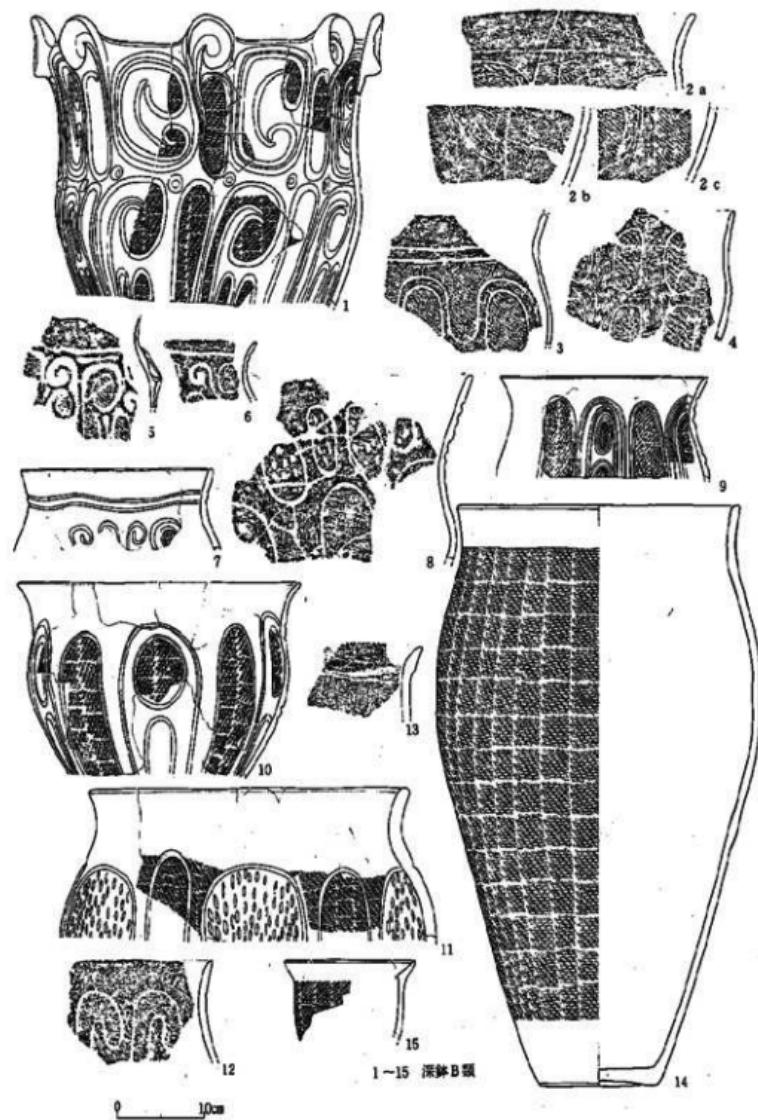
大梁川第Ⅳ層土器は県内では大木町貝塚(小岩; 1961, 原・馬目; 1968)・南境貝塚(林; 1965, 後藤; 1968-1969)、梨木町貝塚(芳賀; 1968)、七夕遺跡(斎藤; 1968)、青島貝塚(加藤・後藤ほか; 1975)、山前遺跡(宮城県教育委員会; 1976)、上深沢遺跡(後藤ほか; 1978)、北前遺跡(斎野ほか; 1982)、梨野A遺跡(佐藤・主浜ほか; 1983)などで出土しており、大木9式

第3表 通物包含層・遺構の対応関係

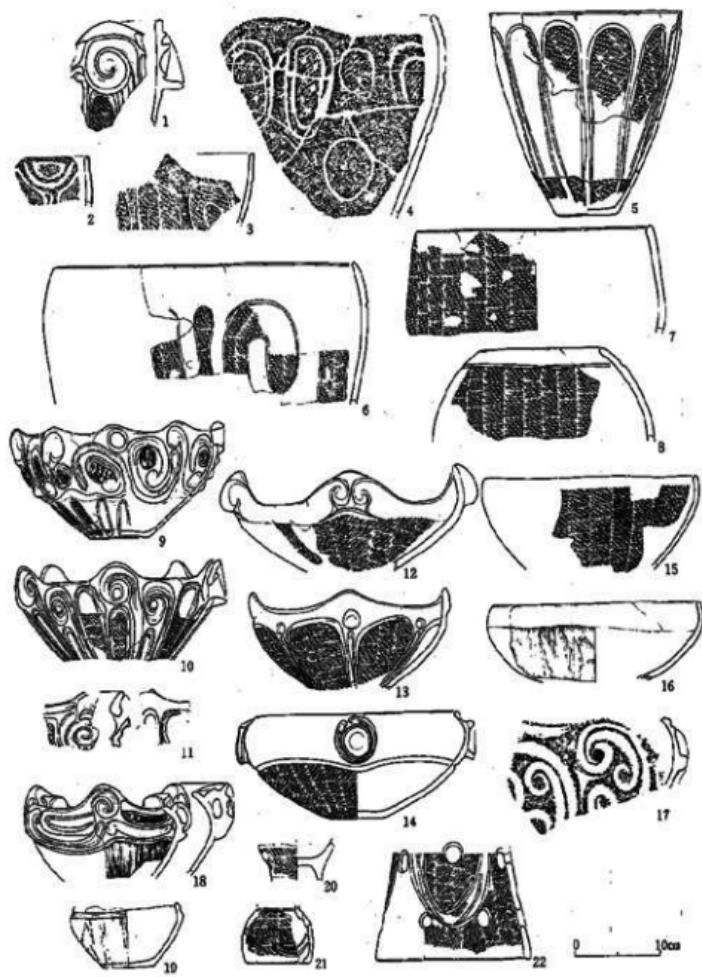


第299図 大梁川第N層土器抄録 (1)

1-22 漆鉢A類
23-25 漆鉢B類

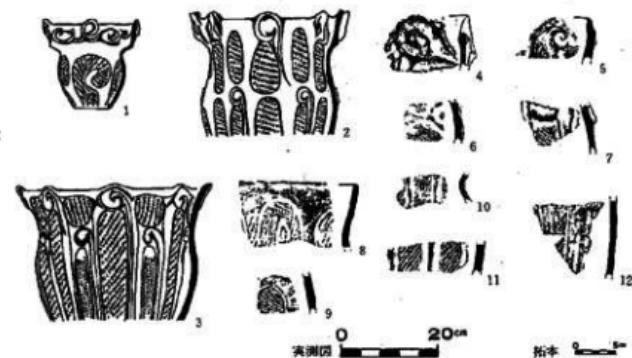


第300図 大糸川第IV層土器抄録 (2)



1~8 深鉢C類
 9~16 浅鉢A類
 17 浅鉢B類
 18~19 足A類
 20 台付鉢
 21 盆
 22 四台

第301図 大栗川第IV層土器抄録（3）



第302図 梨木圓貝塚破碎貝層出土土器

(山内; 1937・伊東; 1957) の範疇で捉えることができる。現在、大木9式は大木9a・b式(古・新式)(林; 1965)を嚆矢に、大木9a・b式(丹羽; 1971)、大木9a・b・c式(柳沢; 1980)、大木9a式・9b式古段階・9b式新段階(須藤; 1985)など様々な細分案が提出され、多少の混乱も見られる。

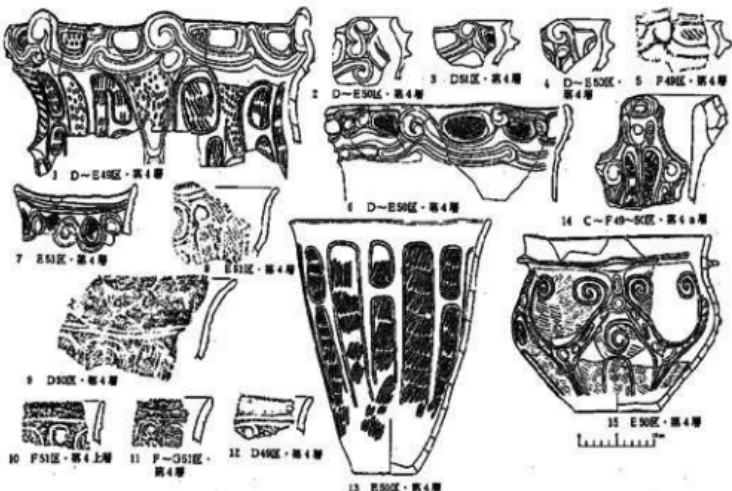
ここでは大梁川第IV層土器に比較的近いと考えられる梨木圓貝塚破碎貝層、上深沢遺跡遺物包含層、山前遺跡遺物包含層出土土器と比較検討を行い、大木9式前半期の細別問題について考えてみる。

①梨木圓貝塚破碎貝層出土土器: 梨木圓貝塚は宮城県鳴瀬町宮戸島字里浜に所在し、1961年東北大教育学部歴史研究室によって発掘調査が行われた。

第302図に示した土器は発掘区最下層の「粉碎された真珠質の貝層」から出土したものすべて共伴関係にある資料である。

器種は深鉢のみが確認され、器形としては口縁部が内弯する深鉢A類(1)、口縁部が外反する深鉢B類(2、3、8)がある。口縁部の形状は1~4が(II)平縁に半円形の突起の付されるもの、8が(III)平縁に該当する。これらの器形上の特徴は大梁川第IV層土器に共通しており、特に平縁に半円形の突起が付されるものが主体をなす点はほぼ完全に一致した様相といえよう。

口縁部文様はおおむね逆巻き「C」字状文の範疇で捉えられ、隆線と沈線で形成される太描き部と細描き文からなるものである。太描き部の渦巻き文は半円形の突起と一体化しており器形と分かち難い特徴的な文様である。胴部文様は橋円文・「匚」状文によって構成され、隆線と



第303図 上深沢遺跡遺物包含層出土土器抄録

沈線あるいは沈線単独で文様が形成されている。1のようにステッキ状の文様の施されるものも見られる。これらの文様上の特徴も大梁川第IV層土器とほぼ共通するものであり、顕著な地域差は認められない。

ところで、本層土器の8・9のような沈線単独で文様の描かれる土器を、いわゆる「手抜きの方向性」から新しいとする見方がある。しかし、本層土器は極めて特徴的な「粉碎された真珠質の貝層」出土の共伴土器であり、このような文様論的説は明らかに誤りである。

②上深沢遺跡遺物包含層出土土器：上深沢遺跡は宮城県大衡村駒場字上深沢に所在し、1973～4年にかけて宮城県教育庁文化財保護課によって発掘調査が行われた。遺物包含層は小さな谷状の凹地に向かって堆積する基本的には単層のシルト質包含層で、部分的に上・下層あるいはa・b層に細分された。遺物はすべて「層理面に沿って……折り重なった状態で」発見されており、明らかに共伴関係にある資料（第303図）である。

器種は深鉢・浅鉢・台付鉢・有孔土器がある。深鉢は口縁部が内湾する深鉢A類（1～6）、口縁部が外反する深鉢B類（7～13）、口縁部が外傾するもの（14）がある。口縁部の形状では7・8が（I）波状縁、1～4が（II）半円形の突起が平縁に付されるもの、14が把手の付されるもの、他はすべて（III）平縁である。これらの器形上の特徴はほぼ大梁川第IV層土器に共通するものである。



第304図 山前遺跡遺物包含層第2層出土土器抄録

口縁部文様では、1・6が太い渦巻き～波状文間に梢円文が充填されるものである。文様の全体形が明らかなものは少ないが、おおむね逆巻き「C」字状文の範疇で捉えられよう。胴部文様では、梢円文・「匂」状文を基調に文様が構成され、7～12、15のように渦巻き文と組むものも見られる。1はステッキ状文・梢円文・「匂」状文が施され、縄文帯と刺突帯が交互に展開している。

これらの器形・文様上の特徴は大槻川第IV層土器とほぼ共通するものであり、梨木団貝塚と同様に顕著な地域差は認められない。また、当遺跡の遺物包含層についても15を古いものと考え、13を新しいものとする見方があるが、13・15は同一グリッドの同一層から出土したものであり、同一時期のものと考えるのが妥当と思われる。

③山前遺跡遺物包含層出土土器：山前遺跡は宮城県小牛田町北浦字山前・新山前に所在し、1975年宮城県教育庁文化財保護課によって発掘調査が行われた。遺物包含層は3層に大別され、第1層は表土、第2層は炭化物・焼土を含む黒褐色土層、第3層は黒褐色シルト層、第4層は黒褐色中砂層で、第2層が大木9式、第3層が素山上層式、第4層が大寺式の遺物包含層である。本遺跡では保存のために遺物包含層のうちBL～BN-35区の3グリッドのみが精査され、他の地区は第2層の上面の検出をもって調査は打ち切られている。精査地区の第2層上部資

料・下部資料を比較しても顕著な違いは認められず、一括して扱い得るものと判断される（第304図）。

器種は深鉢・浅鉢がある。深鉢には口縁部の内湾する深鉢A類（1～9）、口縁部の外反する深鉢B類（10～14）がある。口縁部の形状は1・10・12・13が2～4単位の（I）波状縁で他は（III）平縁である。（II）半円形の突起が平縁に付されるものは確認されない。

口縁部文様は3類型に分けられる。①波頂部から垂下する大形の渦巻き文と小形の渦巻き文間に楕円～馬蹄形状の文様が施されるもの（1）、②横位渦巻き文・楕円文の施されるもの（2～4・6・8）、③縦位構成のもの（7）ほかがある。これらの文様はおおむね2本隆線・3本沈線で形成されるものである。

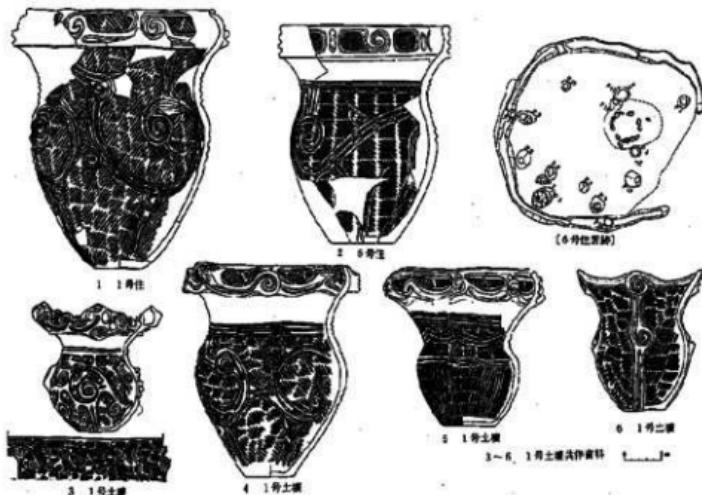
胴部文様は2類型に分けられる。①胴部中央に「6」あるいは「6」状の大形の渦巻き文と小形の渦巻き文を配し、その間に楕円～馬蹄形状の文様が施されるもの（10・11）、②縦位渦巻き文・楕円文の施されるもの（9・12）などがある。胴部文様は概して1～3本沈線で構成されるが、9・14のように隆線文と沈線文で構成されるものもある。9の渦巻き文と「U」状文の間は舌先状突起が形成されている。

浅鉢は3単位波状縁で波頂部に注口が設けられ、注口部内面には「ル」字状の隆線文が貼付されている。

これらの器形・文様上の特徴は明らかに大梁川第IV層土器・梨木團貝塚破碎貝層土器・上深沢遺物包含層土器とは細部において異なるものである。特に①逆巻き「C」字状文の未発達、②半円形の突起が確認できない点、③大形渦巻き文と小形渦巻き文間に楕円～馬蹄形状の文様が施されるものの存在、④2本隆線・3本沈線文によって描かれるものが多い点は大木8b式により近い様相を呈しているものと考えることができる。

大木8b式後半期（丹羽；1981・高橋；1982）～9式への変遷過程については、豊富な切り合いで関係・炉の形態変遷などとともに岩手県大地渡遺跡（相原；1981）・柿ノ木平遺跡（岩手大学考古学研究会編；1982）、秋田県天戸森遺跡（秋元；1984）、新潟県八反田遺跡（渡辺編；1984）などにおいて極めて連続的かつ漸移的に変化していることが指摘されている。宮城県内ではまだ1遺跡においてこのような変遷が確かめられてはいないが、中ノ内B遺跡・小梁川遺跡白ハゲ地区において一応の様相を窺い知ることができる。

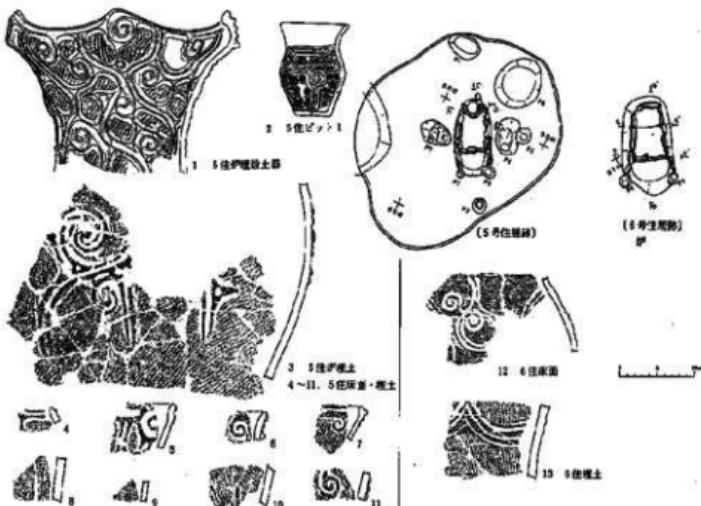
① **中ノ内B遺跡**：中ノ内B遺跡は宮城県川崎町大字前川字垣ノ内に所在し、1985～6年宮城県教育庁文化財保護課によって発掘調査が行われた。堅穴住居跡8軒、土壙2基ほかが検出され、すべて大木8b式後半期の集落として把握（伊藤・須田；1987）された。住居跡の炉はすべて方形石囲炉である。



第305図 中ノ内B遺跡出土土器抄録

第305図は主要な深鉢形土器のみを抄録した。1～5が口縁部の内寄する深鉢A類、6が口縁部の外反する深鉢B類で器形的には大木9式の類型とほとんど変わらない。口縁部の形状ではやはり山前遺跡同様、半円形の突起の付されるものが欠けている。口縁部文様ではA類型では渦巻き文・楕円文が横方向に展開し、比較的平板な表現のもの（1・2）と立体的な表現のもの（3～5）から成っている。前者に類似する構成のものは山前遺跡でも確認されるが、後者の文様は全く認められない。

胴部文様は①「の」あるいは「6」状の大形の渦巻き文と小形の渦巻き文が横方向に連結し、胴下部に数単位の懸垂文の施されるもの（1～4）と②横位置弧状文・平行沈線文が描かれ、胴下部に数単位の懸垂沈線文の施されるもの（5）ほかがある。これらの文様は①胴部中央の大形の渦巻き文が連結することなく、楕円～馬蹄形状の小区画が設けられている点、②胴下部の懸垂文には単位が認められず、「匁」状文として全面的に垂下している点、③充填～磨り消し繩文が認められる点が異なっている。



第306図 小梁川遺跡白ハゲ地区5・6号住出土土器抄録

② 小梁川遺跡白ハゲ地区：白ハゲ地区は小梁川遺跡の中でも北側部分に当たり、大木8b式の住居跡が5軒検出されている（真山ほか；1987）。住居跡の炉は方形石囲炉2基、「祖形複式炉」（目黒；1982）の範疇で捉えられる短い袖部を持つもの2基、「コ」字状を呈するもの1基である。これらはおおむね同一時期のものとされている。

第306図は5・6号住出土の文様の施される土器を抄録したものである。1・4・7が口縁部の内湾する深鉢A類、2・5・6が深鉢B類である。文様の全体形が明らかなものはないが、胴部文様は①横方向に連結する渦巻き文と単位懸垂文及び②連弧状文から成っており、大筋では中ノ内B遺跡の土器と同類形のものである。ただし、①全体を取り巻く渦巻き文間に橢円～不定形の小区画文が設けられるもの（1）や②磨り消し手法が見られる点（8・13）など細部の特徴は異なっている。これらの土器は東北地方南部（目黒；1982）や、北部（中村；1982）で捉えられている複式炉初原期の土器の様相に一致しており、形式内容としては不十分なものではあるが、時期差を示すものと考えられる。

以上、宮城県における大木8b式後半期～9式前半期の土器型式・住居跡炉形態の変遷は次のように整理される。

| 大木8b式 | | 大木9式 | |
|-------|----------|-------|--------------------------------|
| 後半期 | | 前半期 | |
| 中ノ内B | 小梁川白ハグ地区 | 山前第2層 | 大梁川第IV層 梨木圓破碎貝層 上深沢遺物包含層 |
| 石圓炉 | 祖形複式炉 | | 複式炉 |

※小結

- 大梁川第IV層土器は大木9式前半期に位置付けられ、梨木圓貝塚破碎貝層出土土器・上深沢遺物包含層出土土器の様相と一致する。
- 大梁川第IV層土器の成立をめぐっては、大木8b式後半期の中ノ内B遺跡・小梁川遺跡白ハグ地区的土器を母胎とし、大木9式初頭の山前遺跡遺物包含層第2層土器に続くものと考えられる。

c. 土器群の地域性

土器型式に地域性が見られる点については考古学研究者すべてが認めるところである。しかし、そのアプローチについては極めて曖昧で、時間軸設定に当たっての層位学的研究のような統一的な方法論が欠落しており、個々の研究者が無秩序に「××系土器」と呼称し、しかも層位的裏付けを持たない文様論に結びつけ、あたかも自明の前提として土器型式の「伝播」があつたかのような認識をする者すら見られる。

本稿では、①分層発掘による時間軸の設定⇒②共伴関係による土器セットの認識⇒③パラメーター変換による分布の階層性実体化、の手順により土器型式の地域性分析の客觀化をここにみた。最後のパラメーター変換とはある土器型式がA・B・C・D…のセットから成る場合、その器種に応じた器形や文様あるいは地文の種類など様々な変数（分析項目）を設けることによって、分布の様態が閑散のように変化することで、多く研究者が意識的あるいは無意識的に用いている地域性分析手法である。

このようなパラメーター変換手法に基づき、①・②の手順によって得られた土器セットのうち、分布構造の認識の上で特に重要と考えられるいくつかの類型や文様を抽出し、土器型式の地域性を明らかにして行く。

大梁川第IV層土器のセットの中核を占めるのは口縁部の内弯する深鉢A類と口縁部の外反する深鉢B類である。その中でも特にA(II)類とB2類が顕著な特徴を具えており、この2類型をパラメーターとして設定する。

① 福島県では同期の遺跡として、いわき市大畑貝塚(馬目編; 1975)、平田村三斗蔵遺跡(田中・福島大学考古学研究会編; 1978)、本宮町上原遺跡(目黒・丹羽; 1970)、鮫川村壇ノ岡遺跡(丹羽; 1971、梅宮; 1971)、相馬市馬見塚遺跡(鈴鹿ほか; 1982)、飯館村萱苑庭B遺跡(竹島; 1977)・上ノ台A遺跡(鈴鹿; 1984)、大熊町砂出遺跡(酒井編; 1984)・南沢遺跡(酒井編; 1984)・越巻遺跡(酒井編; 1984)、新地町三貴地貝塚田丁場A地点(玉川ほか; 1978)、玉川村堂平B遺跡(松本ほか; 1985)、二本松市原瀬上原遺跡(目黒編; 1969・丹羽; 1971)、高郷村博毛遺跡(古川; 1985)、会津高田町道上遺跡(芳賀; 1985)などがあげられる。

このうち深鉢A(II)類が確認されるのは、福島県北部の三貴地貝塚田丁場A地点・馬見塚遺跡・原瀬上原遺跡である。福島県南部では胴部文様の楕円文・「匁」状文が施されず、縦位沈線文が連続して施される深鉢A類(第307図△)が主として分布している。このような類型は大梁川遺跡でも少数ながら確認(例一第29図7)されており、宮城県南部～福島県北部は二つの類型が重複しているものと思われる。深鉢B2類については福島県南部の堂平B遺跡でも確認されている。

福島県南部の土器様式を大木文化の範疇で捉えるか、加曾利文化の範疇で捉えるかについては様々な議論があるが、これらの遺跡の多くが複式炉を明らかに伴っており、北関東の栃木県機沢遺跡(海老原・八巻; 1980)等も含め、大木文化の太平洋側限地帯の土器様式と考えておく。

② 山形県では同期の遺跡として村山市中山遺跡(佐藤; 1977)・中村A遺跡(渋谷・名和; 1983)、小国町下野遺跡(阿部・名和; 1981)、最上町水上遺跡(佐藤ほか; 1980)、寒河江市うぐいす沢遺跡(佐藤・渋谷; 1981)、山形市熊ノ前遺跡(佐々木ほか; 1979)などがあげられる。特に中山遺跡3号住居跡はその豊富な遺物量とともに、4号住→3号(g→f→d→e→c→b→a号)住の切り合い・拡張関係が把握されており、住居跡・炉形態の変遷を知る上でも極めて重要な指標となるものである。

このうち深鉢A(II)類が確認されたのは、中山遺跡、中村A遺跡、うぐいす沢遺跡、下野遺跡、水上遺跡、熊ノ前遺跡があげられ、山形県全域に分布している。また、熊ノ前遺跡では胴部文様に楕円文・「匁」状文が用いられず、連続して縦位沈線文が施される深鉢A類も確認されている。

深鉢B2類は、中山遺跡、中村遺跡、下野遺跡、熊ノ前遺跡で確認され、やはり山形県全域に分布している。

総じて、山形県下の状況は大梁川遺跡の様相に酷似し顕著な違いは見出せない。

③ 新潟県では津南町沖ノ原遺跡(江坂・渡辺; 1977)・八反田遺跡(渡辺; 1984)、見附市羽黒遺跡(金子・寺崎ほか; 1982)、長岡市岩野原遺跡(新潟県編; 1983)、妙高松松ヶ峰遺跡

(新潟県編; 1983)などによても大木9式前半期の様相を知ることができる。

このうち深鉢A(II)類は羽黒遺跡に疑問例1点が認められるに過ぎず、深鉢B2類については分布を確認することができない。代わって、八反田遺跡に典型的に見られる隆線上及び梢円形区画文内にヘラ状工具による刻み目文が極めて多く用いられ、文様構成そのものは大梁川遺跡のものと大きく異なるものが広く分布している。このような類型は福島県会津～中通り地方(例 二本松市上原A遺跡、福島市月崎遺跡ほか)、宮城県南部(白石市荒井遺跡ほか)、山形県(村山市中山遺跡、山形市熊ノ前遺跡ほか)にも認められ、大梁川遺跡でも1例(第11図11)が認められる。また福島県南部に主として認められた胴部文様の梢円文・「匁」状文が施されず、縦位沈線文が連続して施される深鉢A類は新潟県中南部の岩野原遺跡、松ヶ峰遺跡に認められる。

これらの遺跡の多くが複式炉を明らかに伴っており、大木式文化の日本海側南限地帯の土器様式と考えておく。

④ 岩手県では大迫町観音堂遺跡(中村; 1986)、大船渡市蛸ノ浦貝塚(西村; 1958・1969)、花泉町貝取貝塚(草間・金子編; 1971)、大槌町崎山弁天遺跡(草間編; 1975)、盛岡市堂ヶ沢遺跡(高橋; 1980)・南ノ又遺跡(上野・工藤; 1980)・繁V遺跡(盛岡市教育委員会; 1984)・柿ノ木平遺跡(岩手大学考古学研究会; 1982、盛岡市教育委員会; 1985ほか)、松尾村長者屋敷遺跡(佐々木ほか; 1984)、二戸市荒谷A遺跡(鈴木ほか; 1983)、軽米町吼屋敷Ia遺跡(小平ほか; 1983)などがあげられ、観音堂遺跡第25号住居跡には良好な一括資料が認められる。

このうち深鉢A(II)類が確認されるのは岩手県全域に及び、蛸ノ浦貝塚、観音堂遺跡、貝取貝塚、崎山弁天遺跡、堂ヶ沢遺跡、南ノ又遺跡(?)、柿ノ木平遺跡、荒谷A遺跡、吼屋敷Ia遺跡(?)があげられる。

深鉢B2類が確認されるのも深鉢A(II)類同様に岩手県全域に及ぶ。蛸ノ浦貝塚、観音堂遺跡、貝取貝塚、崎山弁天遺跡、堂ヶ沢遺跡、南ノ又遺跡(?)、柿ノ木平遺跡、長者屋敷遺跡、荒谷A遺跡があげられる。このうち、荒谷A遺跡では口縁部がすぼみ加減に外反する深鉢B類で幅広の無文帶をもつ最花式類型に近いものが見られる。

⑤ 秋田県では鹿角市天戸森遺跡(秋元; 1984)、秋田市坂ノ上E遺跡・坂ノ上F遺跡・湯ノ沢D遺跡(菅原ほか; 1985)、田沢湖町黒倉B遺跡(第2次)(田沢湖町; 1986)などがあげられる。

このうち深鉢A(II)類が確認されるのは天戸森遺跡(?)、坂ノ上F遺跡、湯ノ沢D遺跡、黒倉B遺跡、深鉢B2類が確認されるのは天戸森遺跡、湯ノ沢D遺跡、黒倉B遺跡で、ともに秋田県全域に分布を確かめることができる。

⑥ 青森県では深鉢A(II)類・B2類とともに現状では確認されず、代わって最花式土器が分

布している。このような土器は岩手県北部の二戸市荒谷A遺跡・軽米町呉屋敷Ia遺跡や秋田県北部の鹿角市天戸森遺跡でも確認されている。

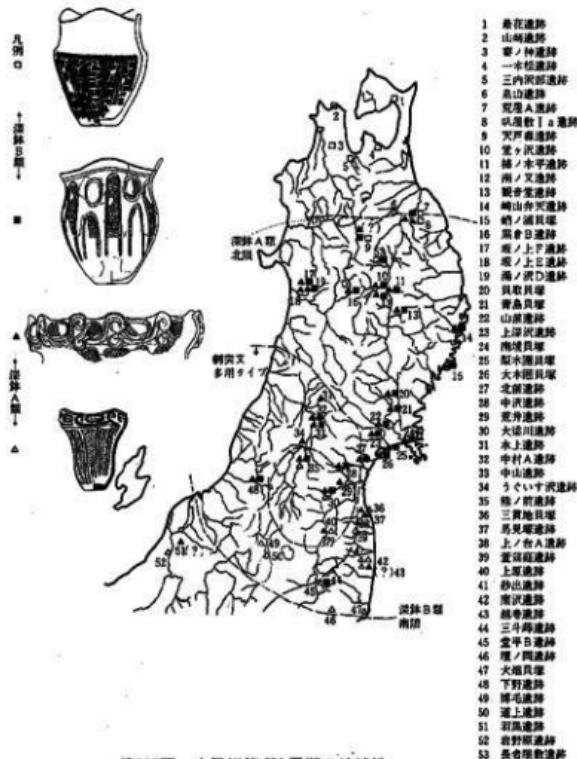
最花式土器は器形的には口縁部がすぼみ加減に外反する深鉢B類とその変異形によってセットが構成され、口縁部が内湾する深鉢A類を基本的には含まない。このような器形は、「形態の単純さと画一性」から長谷部言人によって命名された「円筒土器」(1927)の延長線上において把握されるものであり、文様はともかくその本質部分についてはいささかも変わってはない。小笠原の主張する「大木式文化による円筒文化に対する全面的な統合・一体化」(1974)は決して行われてはいない。同様に北海道南部～胆振・後志地方に分布する「大木系土器」と呼称される土器群(高橋; 1981)も、管見ではすべて口縁部が外反する深鉢B類から成り立ち口縁部の内湾する深鉢A類を含んでおらず、大木文化圏からの直接的な搬入については再考の余地があるものと思われる。

また、最花式土器の器形の単純さから大木式に比べ器形分化が遅延したとする見方もある。しかしながら、巨視的に見た場合、加曾利文化が口縁部の内湾する深鉢A類を主体とし、「ボストン円筒文化」が口縁部の外反する深鉢B類を主体としており、單にその中間地帯の大木文化が深鉢A・B双方を主体とすると見ることもでき(第307図)、一概には大木式土器の器形分化が進んでいたとは言えない。いわゆる後期的な器形分化は注口土器や壺あるいは縦位2個1対の組掛け状突起が付される深鉢D類の出現など別次元でより深く進行している。

住居跡炉形態については、「榎林式期～最花式期～大木10式並行期」にかけて住居内特殊施設から「複式炉」へ東北地方南部と連動しながらも自律的な展開過程を辿ることが確実に把握(三浦; 1986)されており、大木式文化の範疇で理解されよう。

以上、大梁川第IV層土器のうち深鉢A(II)類(▲)と深鉢B2類(■)の分布は福島県北部、新潟県、山形県、岩手県、秋田県の広大な地域に及ぶものである。ただし、大梁川第IV層土器のセットの一部を占める胴部文様に連続して縦位沈線文が施される深鉢A類(△)や、新潟県に多く見られた刺突文多用の類型との複合様式という見地に立った場合、山形県南部～宮城県南部～福島県北部のより高い等質的地域(第307図)を見出だすことができる。

注) 繩文前期円筒下層式の土器文化は形態以外でも①織維混入手法、②押圧縄文の多用と「続上川名文化」的色彩が濃厚で前期大木文化とは大きく異なるものである。中期円筒・大木式土器は、とりわけ大木7b式以降になると、文様的には円筒・大木式とともに高い相關関係を示し、文様から一面的な規定は難しくなる。中期円筒・大木式土器の本質的規定条件は長谷部言人の指摘する円筒土器の「形態の単純さと画一性」に外ならない。



第307図 大梁川第IV層期の地域性

※小 結

1. 大梁川第IV層土器に類似する土器は福島県北部、新潟県、山形県、岩手県、秋田県に分布している。このうち山形県南部～宮城県南部～福島県北部により高い等質的地域が見られる。
2. 該期の大木式文化は複式炉との関連で見た場合、青森県～新潟県・北関東に広がるものであり、土器の様式としては①青森県～岩手・秋田県北部、②岩手・秋田県南部～山形・福島県北部、③福島県南部～北関東、④新潟県の4地域に大きく分けられる。

(2) 大梁川第Ⅲ層土器

a. 土器群の内容

大梁川第Ⅲ層土器は南側遺物包含層第Ⅲ層及び第2・3号炉から発見されている。よって土器群の内容についてはpp.55~57の小結において述べた通りで、特に補足事項はない。第308~310図に本層の主要土器を集成する。

b. 土器群の編年的位置

大梁川第Ⅲ層土器は大梁川第Ⅳ層土器に続く大木9式（山内；1937・伊東；1957）後半期に位置付けられる。大木9式後半期については宮城県内では④南境貝塚出土土器（林；1965）、⑤青島貝塚Fトレンチ第4層出土土器（丹羽；1981）などを充てる見解が提出されている。

ただし、林説は層位関係が明示されておらず、図示された土器も1点のみで具体的にどのようなセットが想定されたのかは全く不明で詳しいことはよく分からぬ。一方の丹羽説は基本資料の内容や層位関係が明示されてはいるものの、青島貝塚Fトレンチ第4層は発掘調査当事者の所見（土岐山；1975）によれば、「何重にもなって堆積する」ヌマガイ主体層・黄色土層・木炭層からなる「全体として20~30cm」の大別層位としての「貝層」に過ぎず、出土遺物（第9a~d類）を見る限り、大梁川遺跡南側遺物包含層第Ⅳ~Ⅱ層土器を幅広く含んでおり分層が不充分であった可能性が否めない。

以上、現状では宮城県内で大木9式後半期の土器が層位的まとまりをもって出土している例は見出し難く、従って他県に類例を求めるを得ない。ここでは、地理的にも近接し丹羽編年の根幹を成す福島県二本松市原瀬上原遺跡と比較したい。

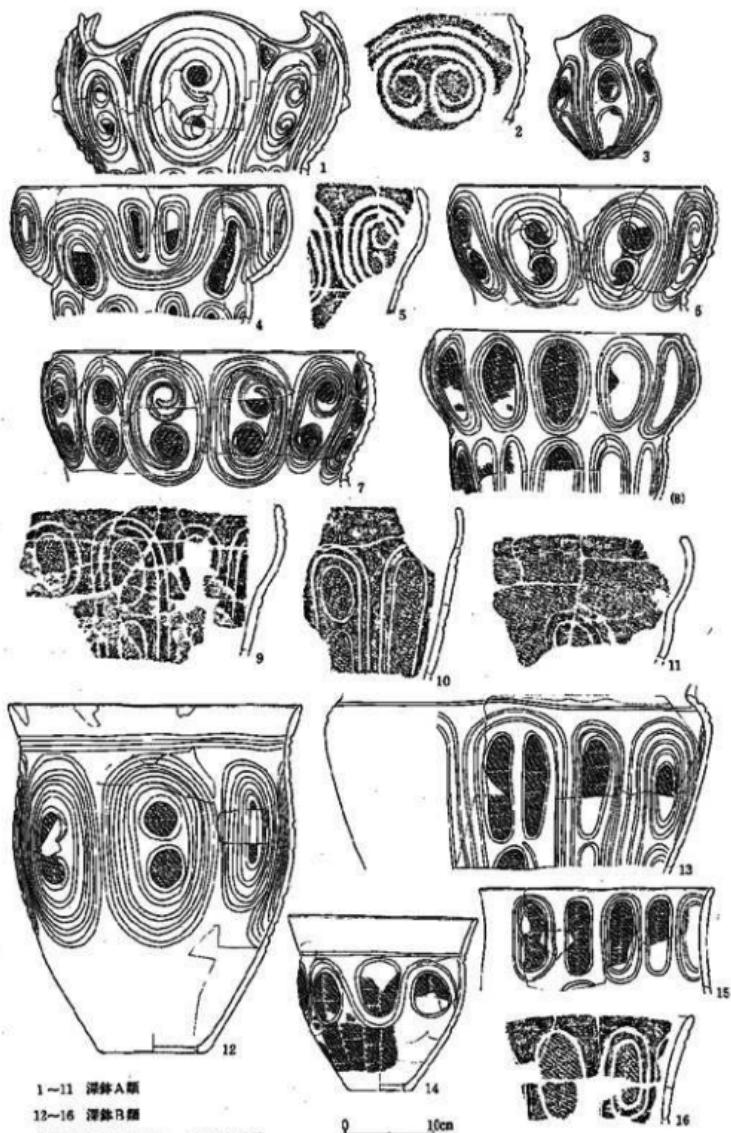
福島県二本松市原瀬上原遺跡第12号住（第311図1~8）（丹羽；1971）

1968年に発掘調査が行われ、19軒の住居跡が発見された。丹羽の大木9式細分説の根幹をなすのが第12号住炉埋設土器（「9a」式）及び埋土出土土器（「9b」式）である。

1~3・7は梢円文・大小の「匁」状文の上位・中位・下位などを連結した縦長の文様である。4・5は口縁部に逆巻き「U」字状文・円形文を「人面状」に配し、胸部に「匁」状文を施すものである。6は多条沈線文による「匁」状文が描かれたもので、これらはすべて大梁川第Ⅲ層土器とほぼ共通する特徴を持つものである。

このような原瀬上原遺跡第12号住埋土出土土器とほぼ同じ内容のものは、同市塩沢上原A遺跡II区3号住（第311図9~14）（目黒・一条・森ほか；1975）においても確認され、9・12のような縦長の縄文帶の中位を連結した「H」字状、「U」字・逆「U」字状文や、13のように逆巻き「U」字状文を「人面状」に配した浅鉢などがある。

丹羽の示した原瀬上原遺跡第12号住は深鉢についてしか明らかでないのに対し、塩沢上原A遺跡II区3号住は11・13の浅鉢、14の台付鉢が含まれており、極めて良好なセットから成り立つ

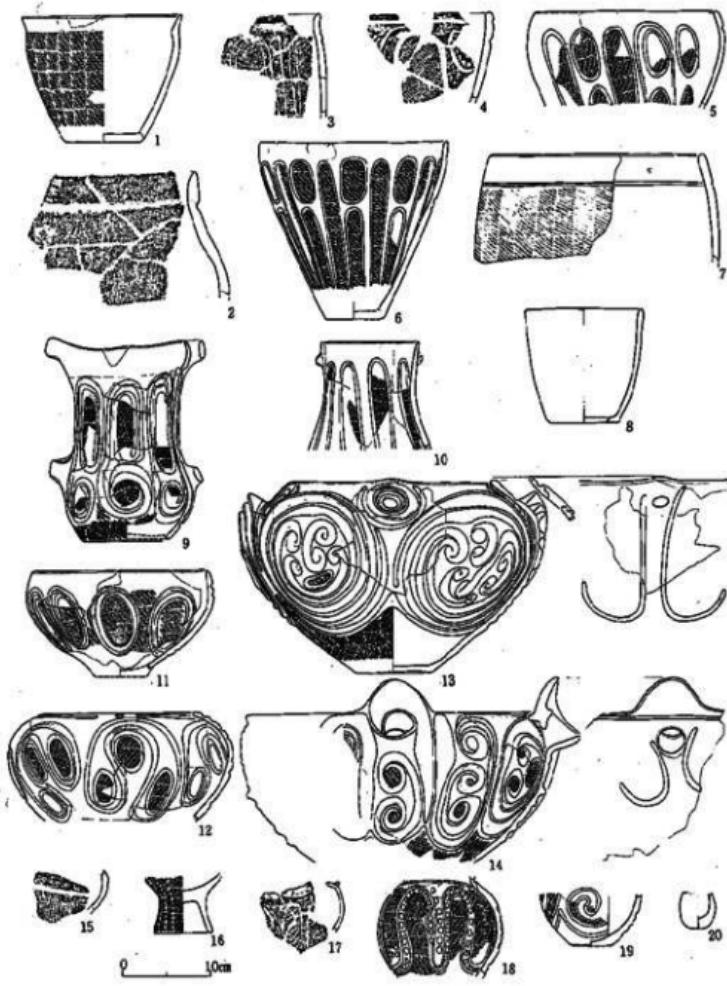


1-11 深鉢A類

12-16 深鉢B類

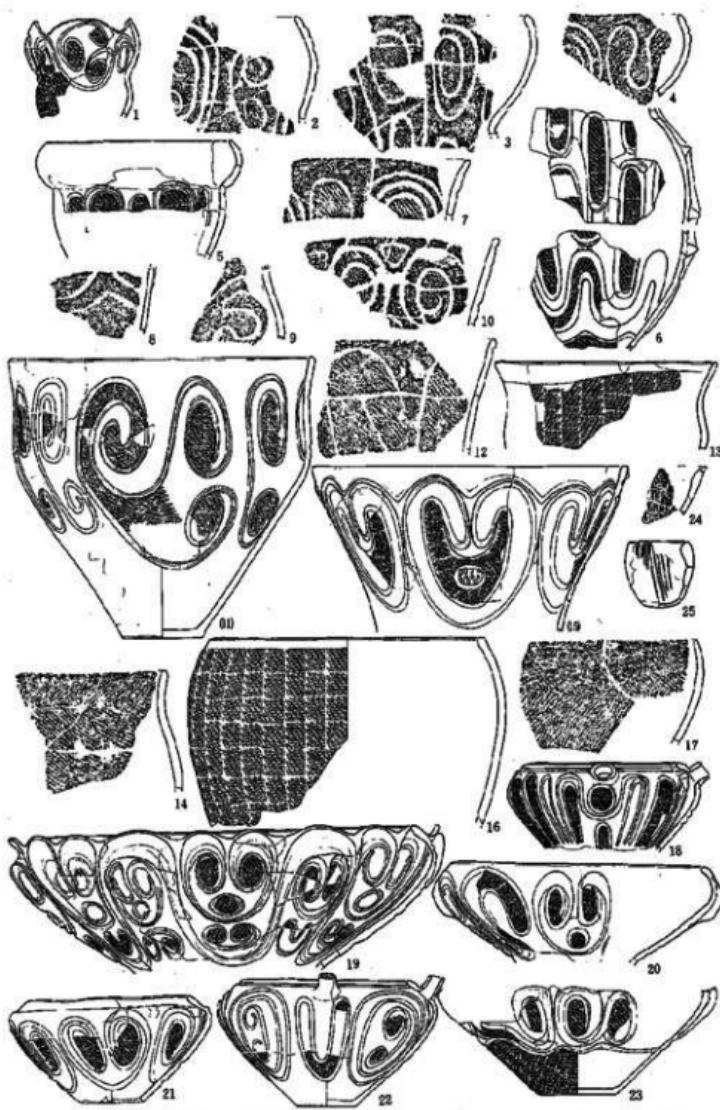
(数字)は正廣出土のc-d層対比土器

第306図 大栗川第III c-d層土器抄録(1)



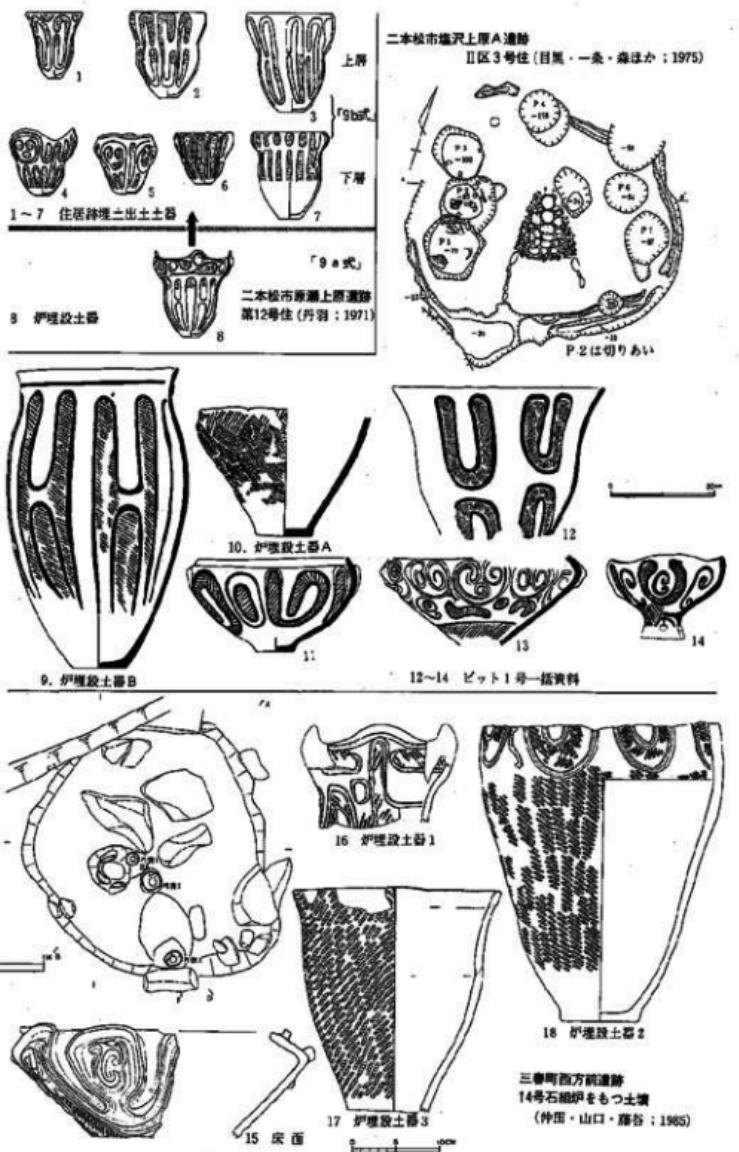
1~2 深鉢B類 11 浅鉢A類 16 台付鉢
 3~8 深鉢C類 12~14 浅鉢B類 17 有孔土器
 9~10 深鉢D類 15 鉢A類 18~19 壺
 20 袖珍土器

第309図 大塚川第II c ~ d 層土器抄録 (2)



1-6 深鉢A類
 7-14 深鉢B類
 15-17 深鉢C類
 18-23 浅鉢B
 24 鉢A
 25 純土器
 (数字)は田畠出土のa-b層対比

第310図 大槻川第Ⅲa～b層土器抄録



第311図 福島県の大木9式後半期の土器

ている。これらはほぼ大梁川第Ⅲa～b 層土器に対比されるものであり、報告者の森貢喜も大木10式以前の「過渡的段階」に位置付けた。

以上、福島県二本松市原瀬上原遺跡第12号住炉埋設土器及び埋土出土土器において大梁川第Ⅳ層土器から大梁川第Ⅲ層土器への変遷が確認される。ただし、大梁川第Ⅲc～d 層土器から大梁川第Ⅲa～b 層土器への変遷は同住居跡埋土において一応の傾向性が捉えられるものの、明記性には欠けている。

二本松市塩沢上原A遺跡Ⅱ区3号住では、大梁川第Ⅲa～b 層土器とほぼ同じ内容から成るセットが把握されている。特に原瀬上原遺跡では発見することができなかった浅鉢や台付鉢が含まれており重要である。

大梁川第Ⅲc～d 層土器は今のところ層位的なまとまりをもって検出された例は大梁川遺跡以外には見られず、現状では「土器型式」までは高め得ない。「大梁川第Ⅲ層土器」内の一つの傾向として把握し、今後の類例の増加を待つ判断したい。

注) 「過渡的段階」とは丹羽(1971)によって示唆された「大木9b式の中に包括される類型期」を指すものである。

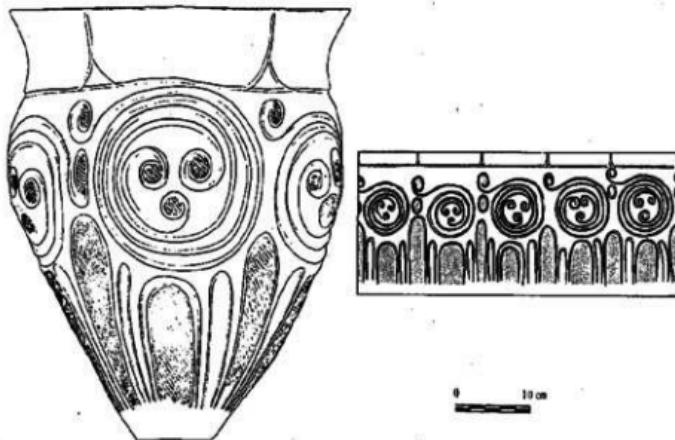
※小 結※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

1. 大梁川第Ⅲ層土器は大木9式後半期に位置付けられるもので、福島県二本松市原瀬上原遺跡第12号住で確かめられた炉埋設土器→埋土出土土器への変遷にほぼ対応するものである。
2. 大梁川第Ⅲ層土器は第Ⅲa～b 層土器・第Ⅲc～d 層土器に細分される。大梁川第Ⅲa～b 層土器は福島県二本松市塩沢上原A遺跡Ⅱ区3号住にほぼ同一のセットからなる類例が見られる。大梁川第Ⅲc～d 層土器は現状では層位的なまとまりをもって検出された例は大梁川遺跡以外に見られない。

C. 土器群の地域性

大梁川第Ⅲa～b 層土器・第Ⅲc～d 層土器は大木9式後半期に位置付けられた。大木9式後半期については異論も多く他地域の併行する類型を選定することは甚だ困難であり、岩手県北部(鈴木ほか; 1983、小平ほか; 1983)・秋田県北部(秋元; 1984)あるいは福島県南部(中村・先崎; 1984、福島; 1987)において住居跡などのセット関係から地道に把握して行く研究方法がようやくその緒に就いたばかりであり、研究成果の行方を見守りたい。

ここでは、大梁川第Ⅲc～d 層土器・第Ⅲa～b 層土器の分布状況とその南側・北側の代表的な遺跡として①福島県三春町西方前遺跡と②岩手県大迫町観音堂遺跡について考えるに留めたい。

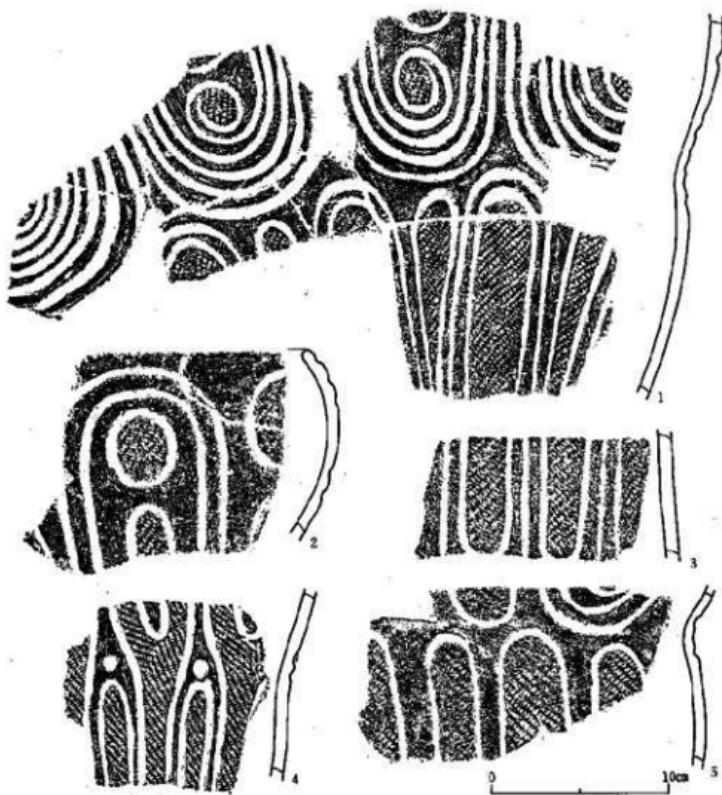


第312図 山形県山形市熊ノ前遺跡121号住居炉埋設土器

④ 大梁川第Ⅲc~d層土器

大梁川第Ⅲc~d層土器のセットの中核を占めるのは口縁部の内弯する深鉢A類及び口縁部の外反する深鉢B類である。この中でも特に、深鉢A(I)類で波頂部下に巨大な渦巻き文・楕円文が設けられ、その内部に逆巻き「C」字状文が施されるもの及び深鉢A(III)2類の平縁で多重渦巻き文・逆巻き「C」字状文が施されるもの及び深鉢B類が顕著な特徴を具えており、これらの類型をパラメーターとして設定する。

深鉢A(I)類は宮城県川崎町西林山遺跡（手塚・相原ほか；1987）、山形県寒河江市うぐいす沢遺跡（佐藤・渋谷；1981）、深鉢A(III)2類は宮城県白石市大鷹沢出羽津堂遺跡遺物包含層（第313図）、川崎町中沢遺跡（後藤ほか；1975）・中ノ内C遺跡（斎藤・相原；1987）、福島県飯館村日向南遺跡（第3次）遺物包含層（鈴鹿；1987）、山形県寒河江市うぐいす沢遺跡、秋田県秋田市台A遺跡（？）（菅原；1986）があげられる。深鉢B類については山形県山形市熊ノ前遺跡第121号住居跡炉埋設土器（第312図）に好資料が見られるのみで今のところ他例については明らかではない。これらは大梁川第IV層土器の中でもより高い等質的地域として指摘した



第313図 宮城県白石市大庭沢出羽津堂遺跡遺物包含層出土土器

山形県南部～宮城県南部～福島県北部の分布域をベースとしており、当地域だけで比較的短期間のうちに推移した可能性も考えられよう。

⑥ 大梁川第Ⅲa～b層土器

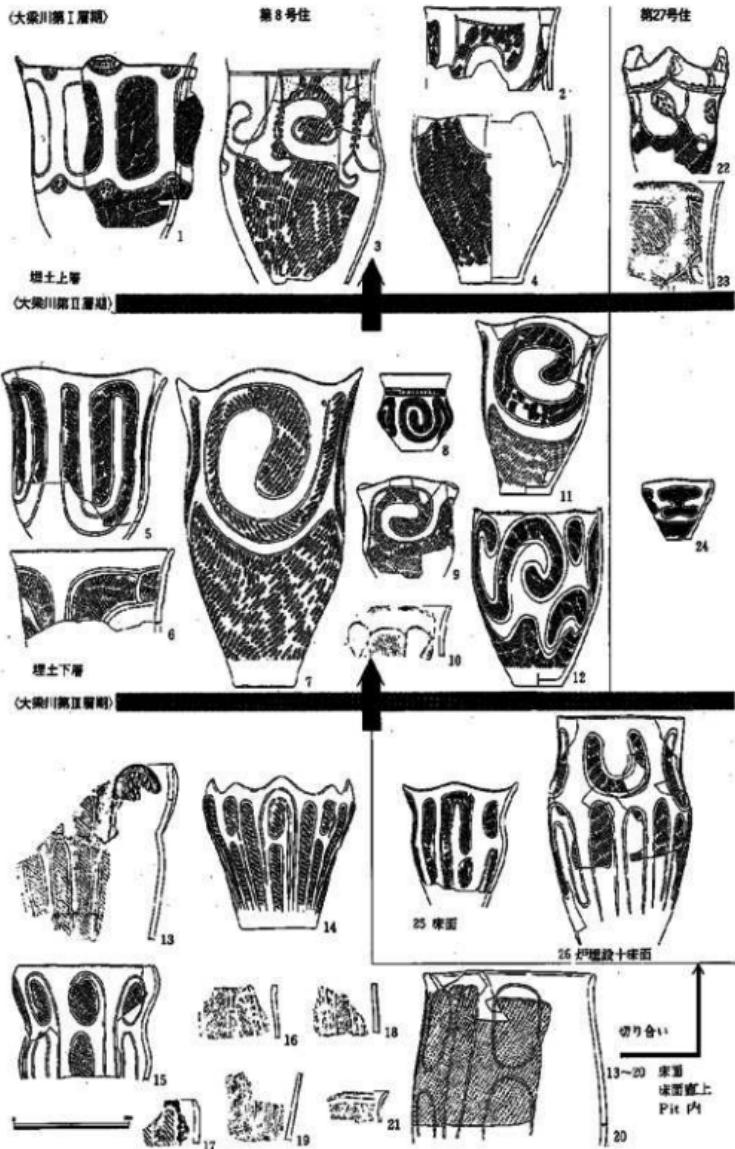
大梁川第Ⅲa～b層土器のセットの中核を占めるのはやはり口縁部の内弯する深鉢A類及び口縁部の外反する深鉢B類である。ここでは逆巻き「U」字状文の施される深鉢A類、縦長のステッキ状文の施される深鉢B類、逆巻き「U」字状文の施される浅鉢B類をパラメーターとして設定する。

逆巻き「U」字状文の施される深鉢A類は、福島・宮城・山形・岩手県でその分布を確かめることができる。①福島県では二本松市原瀬上原遺跡（丹羽；1971）・塩沢上原B遺跡（永山・木本；1972）、飯館村上ノ台A遺跡（鈴鹿；1984）、山都町上林遺跡（芳賀ほか；1983）などに分布している。②宮城県では本遺跡のほかに、蔵王町二屋敷遺跡（加藤・阿部ほか；1984）及び石巻市南境貝塚（後藤；1968・69）で中央に円形文が充填される、いわゆる「人面状」を呈する平縁の深鉢が確認されている。③山形県では長井市長者屋敷遺跡（佐藤；1984）、④岩手県では大迫町観音堂遺跡（中村；1986）で各々1例ずつ確認されている。

縦長のステッキ状文の施される深鉢B類は、福島・宮城・岩手・秋田県でその分布を確かめることができる。①福島県ではいわき市大畑貝塚（馬目編；1975）、石川町小田口D遺跡（福島ほか；1985）、滝根町観音山遺跡（中村・先崎；1984）、玉川村堂平B遺跡（松本ほか；1985）、山都町上林遺跡（？）、高郷村博毛遺跡（古川；1985）、二本松市原瀬上原G遺跡・塩沢上原A遺跡、飯野町南和台遺跡（八巻ほか；1977）、飯館村上ノ台A遺跡などの福島県全域で発見されている。福島県では小田口D遺跡や塩沢上原A遺跡などに代表されるように、炉埋設土器として利用される頻度が極めて高い類型である。②宮城県では、本遺跡のほか七ヶ宿町小梁川東G遺跡（真山ほか；1985）、蔵王町二屋敷遺跡、仙台市梨野A遺跡（佐藤・主浜ほか；1983）、南方町青島貝塚（加藤・後藤；1975）、③岩手県では、大迫町観音堂遺跡、花泉町貝取貝塚（金子・草間編；1971）、松尾村長者屋敷遺跡（佐々木ほか；1984）、④秋田県では由利町石坂台I遺跡（高橋；1985）において発見されている。なお、秋田県千畑村内村遺跡（畠山；1981）では、縦長のステッキ状文こそ検出されていないが、その変異形とみられる縦長文が数多く発見されており極めて重要である。

逆巻き「U」字状文の施される浅鉢B類は本遺跡のほかに、福島県山都町上林遺跡、二本松市塩沢上原A遺跡で確認されているに過ぎない。

以上、逆巻き「U」字状文の施される深鉢A類・浅鉢B類はほぼ同様の分布構造を示すのに対し、縦長のステッキ状文の施される深鉢B類は広く福島県南部にまで分布が及んでおり、異なる分布構造を示している。その原因としては分布の階層性に留まらず、①大梁川遺跡南側遺物包含層のデータでは、前者の逆巻き「U」字状文が大木9式後半期にほぼ限定できるのに対し、後者の縦長のステッキ状文は大木9～10式にまたがる文様で、時期の限定性に乏しい点、②詳細は次項において述べるが、福島県南部においては大木10式成立の一つのメルクマークとされる胴中位区画文が完全な形では成立しておらず、加曽利文化との接触地帯としての福島県南部の地理的・歴史的条件などについて考えてみる必要性があろう。



第314図 岩手県大迫町御音坐遺跡第8号住・第27号住出土土器抄録

① 福島県三春町西方前遺跡 (第311図15~18) (仲田・山口・藤谷; 1985)

1984年に三春町教育委員会によって発掘調査が行われた。発見された遺構は配石遺構、「石組炉をもつ土壙」ほかである。大木9式後半期の一括資料は第14号「石組炉をもつ土壙」から出土している。

15が浅鉢B類、16が深鉢A類、17・18が深鉢B類である。細部の文様構成には違いが認められるものの、基本的な形態や文様構成は大梁川遺跡第III層土器と異なるものではない。深鉢A類の口唇部に認められる波状沈線文は福島県南部に多く見られる特徴である。また、炉形態については本例のような石組炉が福島県南部で必ずしも一般的というわけではないが、平田村三斗蔵遺跡などでも見られるようにすべてが複式炉ではない点も改めて注意されよう。

② 岩手県大迫町観音堂遺跡第8・27号住 (第314図) (中村; 1986)

1979~81年にかけて大迫町教育委員会によって発掘調査が実施された。発見された遺構は29軒の住居跡ほかである。ここでは豊富な一括資料が得られた第8・27号住の遺物について考えてみたい。

第8号住は6~8角形を呈する大形多角形住居跡、第27号住は小形の円形住居跡で第8号住を切って作られている。ただし、双方の床面形成の時期は大きく異なるものではないとされている。

第8号住の床面・床面上から13~20の土器が出土している。13~17が口縁部の内寄する深鉢A類で、20が口縁部の外反する深鉢B類である。文様の基本形は大梁川第III層土器と異なるものではないが、13に見られる口縁部に「匁」状隆線文を設け内部に刺突文を充填する手法は見られない。このような土器は秋田県鹿角市天戸森遺跡第101号住(秋元; 1984)や岩手県松尾村長者屋敷遺跡(佐々木ほか; 1984)などで発見されており、岩手・秋田両県北半の地域性を示すものと思われる。

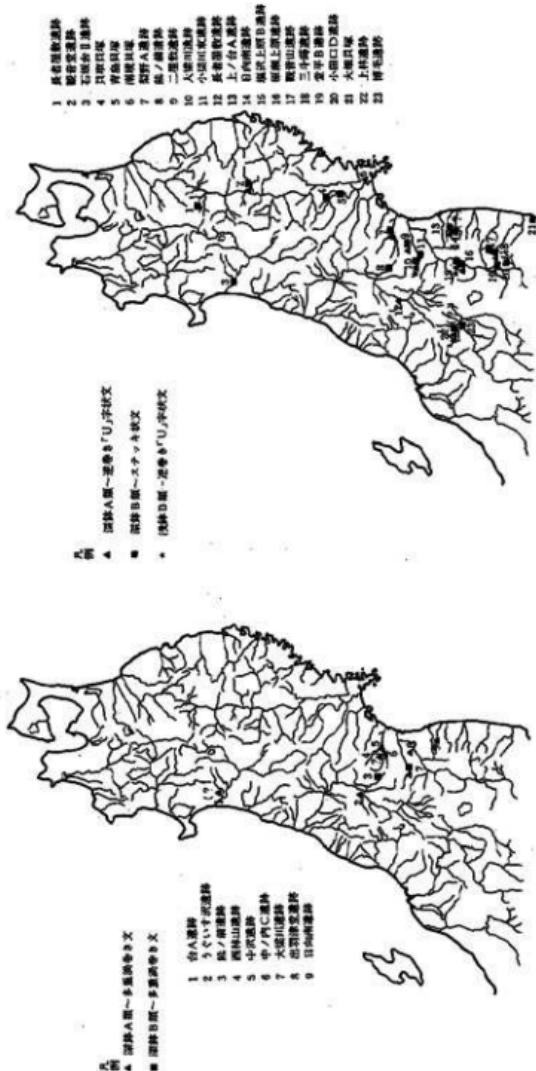
第27号住の床面出土・炉埋設土器が25・26である。25は波頂部下の縦位縄文帶上部が連結されステッキ状文の構成されたもの、26は縦位縄文帶の中位が連結され「U」字・一部逆「U」字状を呈するものである。これらは文様的には東北地方南部のものと異なるものではない。

※ 小 結 ※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

1. 大梁川第III層土器は大梁川第IV層土器同様、秋田県、山形県、岩手県~福島県に分布する。中でも山形県南部~宮城県南部~福島県北部がより高い等質的地域としてあげられ、特に大梁川第IIIc~d層土器の分布は現状ではほぼ当地域に限られている。
2. 大梁川第III層土器の南側・北側には各点①福島県三春町西方前遺跡、②大迫町観音堂遺跡に代表される土器が分布している。

第315図 大森川第III層土壌の分布

b. 大森川第III層土壌の分布



(3) 大梁川第II層土器

a. 土器群の内容

大梁川第II層土器は南側遺物包含層第II層及び第1~6、9~10A、B号住居跡、第4号炉・第2号土壤・第1、4~7、10号埋設土器遺構から発見されている。細部の出土層位や出土状況については第3表(→pp.396)を参考されたい。

第317~322図に本層土器を集成する。

本層土器の大筋の理解としてはpp.96~97の小結において述べた通りである。ここでは遺構出土土器についての若干の補足説明を加えたい。①住居跡炉埋設土器として利用される深鉢B類のうち文様の施されるものについては、(a)頸部に横位沈線文が施され、胴部に「e」~「C」字状をなす渦巻き状縄文帶の施されるもの(2住-第317図(5))、(b)胴上部に横位波瀾文が配され、以下地文の縄文が施されるもの(1住-第319図(1))、(c)波状縄文帯間に縦位梢円文・「S」字状文などが配され以下地文の縄文が施されるもの(1・4住-第317図(3)・(4))、(d)雁段状をなす分節波瀾文の施されるもの(3・5・6・10B住-第320図(2)・(3)・第321図(1)・(2))の4類型があり、特に(c)・(d)については炉埋設土器としての強い規制が窺われる。②埋設土器遺構に用いられている深鉢はA・B両類型からなり、文様的には1号と6号が「C」状あるいは「コ」状をなし同類形として捉えられるが、他は様々な文様が施されており、炉埋設土器のような顕著な規制は見られない。

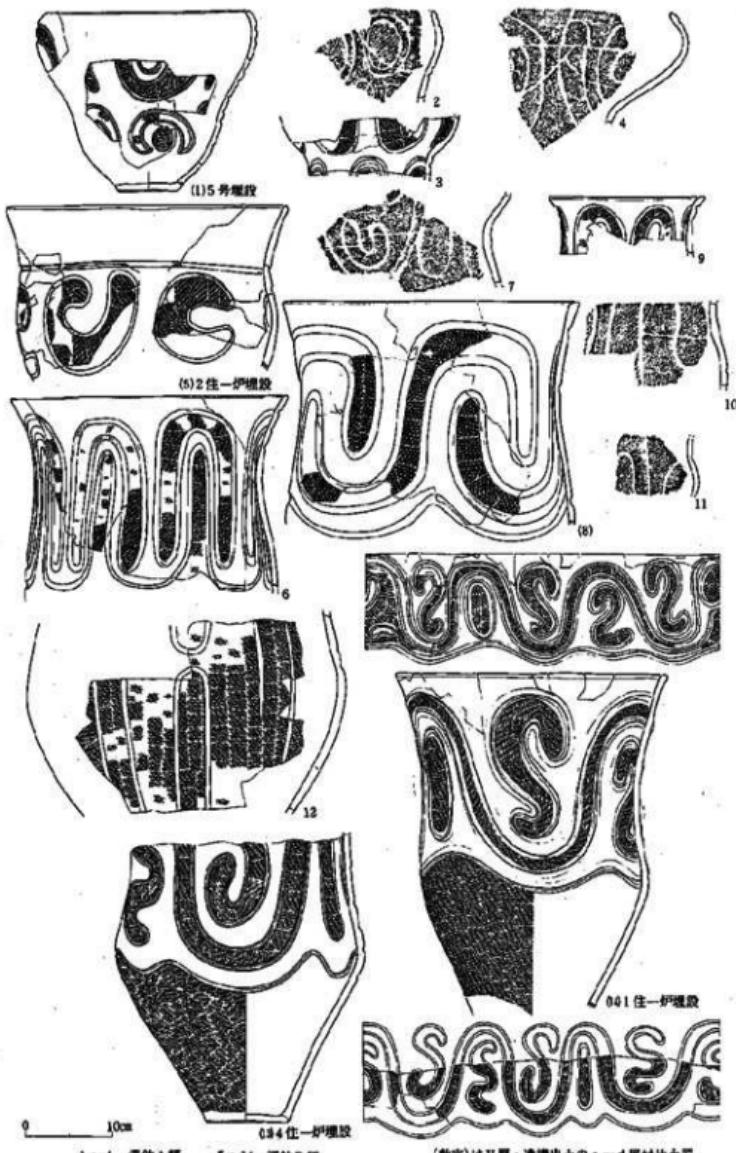
b. 土器群の編年的位置

大梁川第II層土器は大梁川第III層土器に続く大木10式(伊東; 1957)前半期に位置付けられる。伊東は大木10式について2つの類型を示している。一つは多くが隆带をもち縦走撚糸文の施されるもので、狭義の大木10式(山内; 1937)である。もう一つは白石市荒井遺跡出土土器(第316図)(伊東; 1957、佐藤・片倉; 1958)を標識資料とする太描きの沈線文様内部に縄文の施されるもので、この両者は当初大きく大木10式に包括される地域差として把握(伊東; 1957、佐藤・片倉; 1958)されていた。1968年の長根貝塚の調査(伊東ほか; 1969)を経て、これらが新旧の時間差を示すものとして理解され、いわゆる「荒井式」は大木10式前半期に位置付けられた(須藤; 1985)。

大木10式前半期は丹羽茂によって10a・10bの2類型期(丹羽; 1971)が本宮町上原遺跡(目黒・丹羽; 1970)第5号住及び二本松市塩沢上原A遺跡(目黒他; 1975)の切り合い関係に基づく住居跡資料によって設定された。10a・10b式は「两者とも口縁部が外反する深鉢形の器形を示し、文様帶が横方向に展開するなど共通性を有するが、後者は胴央部に大波状の沈線(凹)

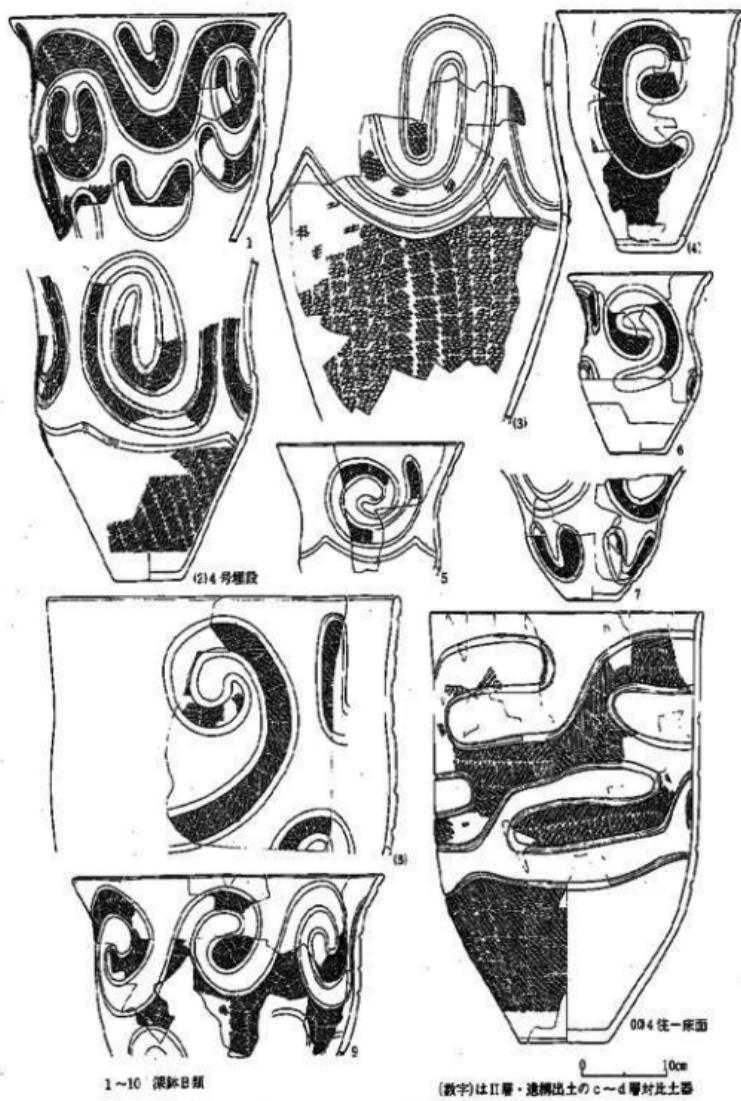


第316図 荒井式土器
標識資料

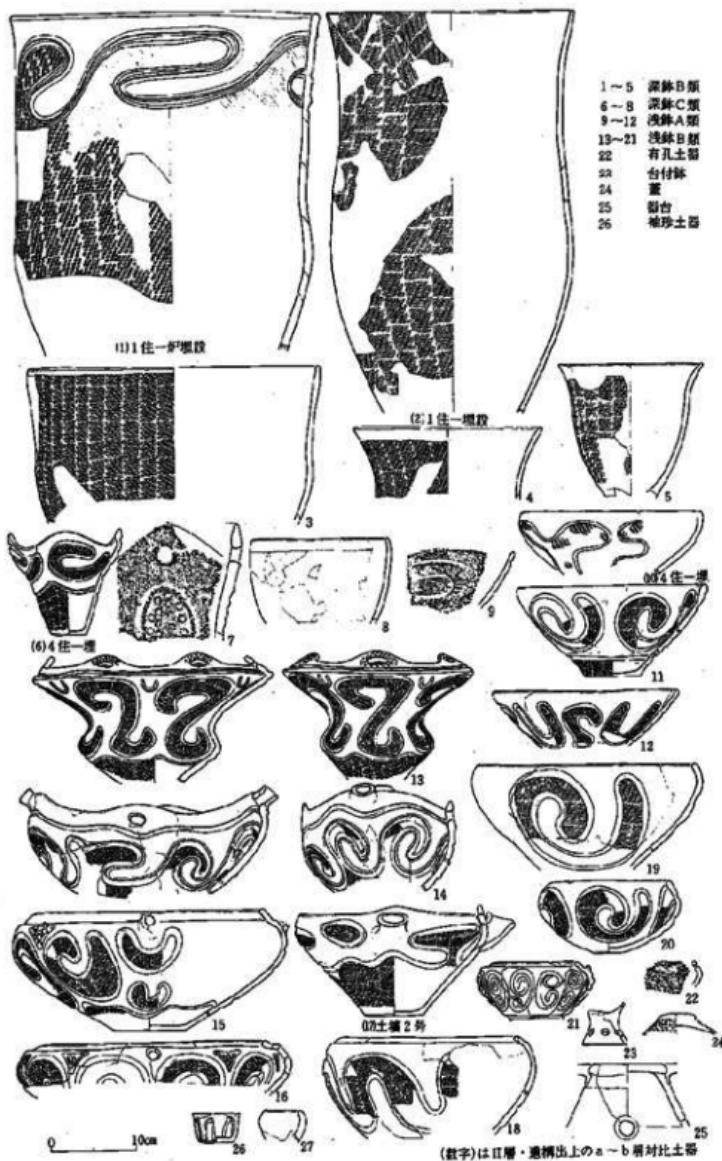


1～4 深井A類 5～14 深井B類 (数字)はⅡ層・造構出土のc～d層対比土器

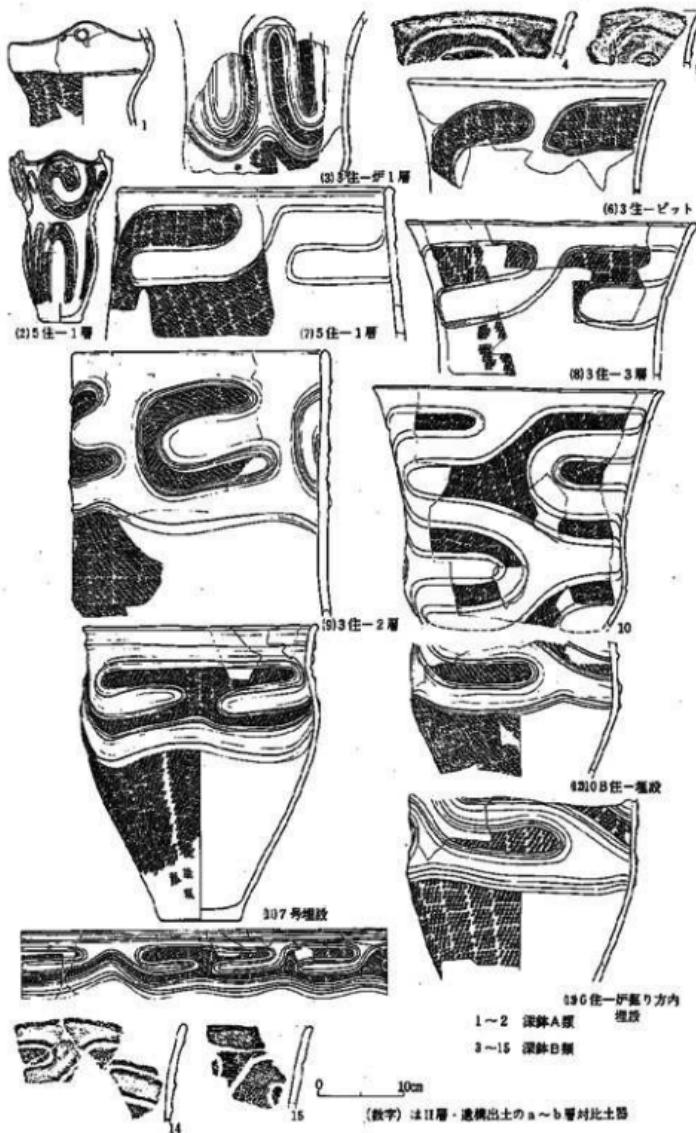
第317図 大桑川第II c～d層土器抄録 (1)



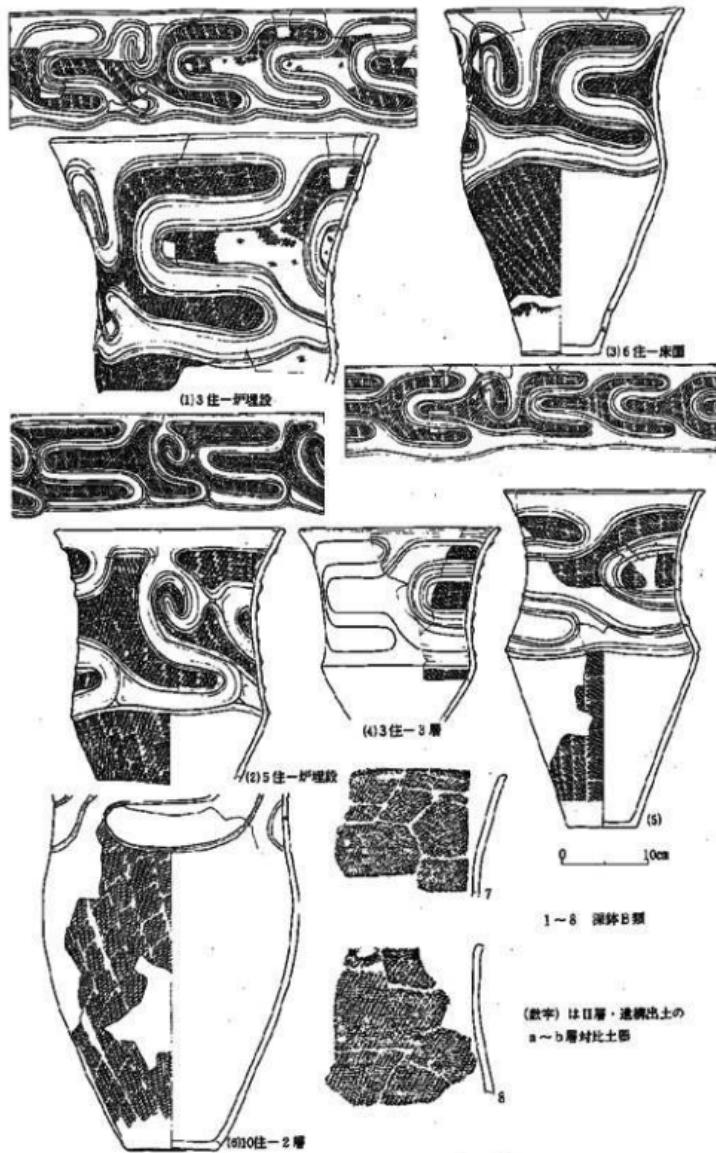
第318図 大塩川第II c~d層土器抄録 (2)



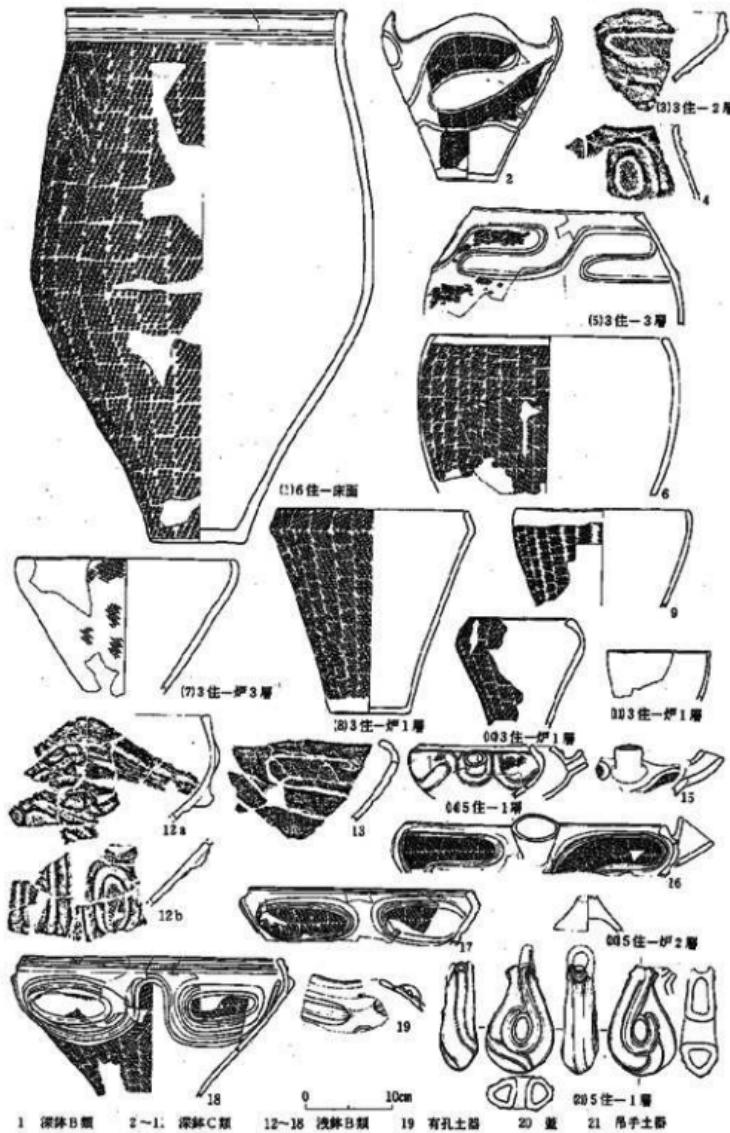
第318図 大奥川第II c～d層土器抄録 (3)



第320図 大糸川第II a~b層土器抄録 (1)



第321図 大塩川第II a~b層土器抄録 (2)



第322図 大槻川第II a~b層土器抄録 (3)

線)が巡らされ胴上部文様と胴下部文様に区画される。」ことを重視した。このような胴中位区画線は関東地方などには見られない東北地方大木10式における固有の様式であり、丹羽の指摘の通り大木10式の成立あるいは地域性を考える上で極めて重要な指標となるものである。

ただし、丹羽自身「類型期(亜型式)」と把握せざるを得なかったように、資料数の制約から「型式概念」にまで高めることはできなかつた。後年、丹羽はこれらの土器をベースに大木10式「第1段階」・「第2段階」を設定(丹羽; 1981)するが、胴中位区画線の有無だけでは発掘調査における多様な出土状況を包括できるものではなく、「第1段階」・「第2段階」の一部をまとめて「古段階」(鈴鹿; 1984)として把握すべきではないか、などの疑問が寄せられている。

大梁川遺跡南側遺物包含層の出土状況においても鈴鹿の指摘のように、ある層を境にして胴中位区画線の施されるもののみとなるような状況は把握されなかつた。代わって、胴中位区画線は浅鉢では大木9式前半期の第IV層から認められ、深鉢でも大木9式後半期の第IIIa~b層からわざかではあるが、第310図6・8のような例が見られ、第IIc~d層からa~b層に向かつて飛躍的に増加する傾向性が見られた。以上の調査所見からも、胴中位区画線は時期区分の重要な一指標とすることはできても、単にその有無によって時期区分を行うことはできないものと考えられる。

大梁川第IIc~d層から第IIa~b層土器への変遷は①宮城県岩出山町玉造遺跡(千葉; 1980)②福島県飯館村上ノ台A遺跡(鈴鹿; 1984)第4・7号住居跡の切り合い関係や第12号住居跡においても確認することができる。

① 宮城県岩出山町玉造遺跡第7号住居跡(第323図1~11)(千葉; 1980)

玉造遺跡は1979年宮城県教育委員会によって発掘調査が行われ、大木10式に属する4軒の堅穴住居跡ほかが検出された。

第7号住居跡埋設土器は4単位波状縁の深鉢形土器で、波頂部下に「S」字状文が配され、第317図6にみられる「匚」状文を組み合わせたような振幅の大きい縦長の波状文が描かれるもので、大梁川第IIc~d層土器の特徴と一致するものである。

床面及び住居跡埋設土器は横位波濤文を基調とする深鉢・浅鉢形土器が発見されている。横位波濤文の種類は連結波濤文及び「匚」状を呈する分節波濤文が施されている。雁股状文については確認されていない。胴上部に連続刺突文の施されるものが多く、地文はほとんどが縄文である。これらは大梁川第IIa~b層土器とほぼ同じ特徴を有しており、細部の違いについても地域差に基づくものと思われる。

② 福島県飯館村上ノ台A遺跡第4→7号・第12号住居跡(第323図13~19)(鈴鹿; 1984)

上ノ台A遺跡は1982年福島県教育委員会・福島県文化センターによって第1次発掘調査が行われ、12軒の堅穴住居跡・6基の配石遺構・17基の土壙ほかが検出された。このうち第4号住

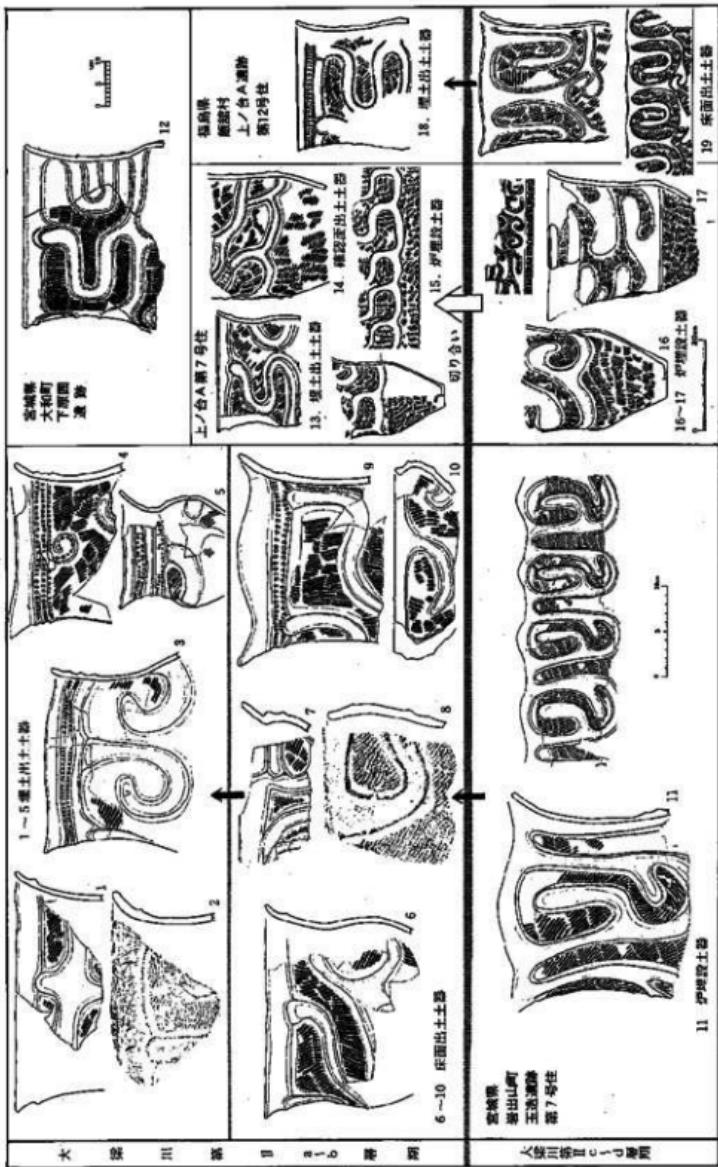


図323 四 宮城県・福島県北部における大木10式前半期土器の変遷

と第7号住は切り合い関係が確認され、第4号住が古く、第7号住が新しい。

16・17は第4号住居跡炉埋設土器で、16は胴上部に横「S」字状をなす渦巻き状縄文帯が配され、17は横位～渦巻き状を呈する連結波溝文が不規則ながら複数段展開する、ともに胴中位区画文以下地文の縄文が施される深鉢形土器である。これらは大梁川第IIc～d層土器の範疇で把握されるものである。13～15は第7号住居跡から出土したもので、15は胴上部に「フ」状を呈する分節波溝文、14は雁脛状文をさらにいくつかの小区画に分割した文様、13も雁脛状文をベースにした横位波溝文が配されている。これらは大梁川第IIa～b層土器の特徴ほぼ一致した様相を示しているといえよう。

同様の変遷は第12号住居跡の床面出土土器（炉埋設土器は調査区外）から住居跡埋土出土土器（第323図18～19）への変遷においても確かめられる。

※小 結

1. 大梁川第II層土器は大木10式前半期に位置付けられ、内容的にはいわゆる「荒井式」を包括するものである。
2. 大梁川第II層土器は第IIc～d層土器・第IIa～b層土器に細分される。同様の変遷は①宮城県岩出山町玉造遺跡、②福島県飯館村上ノ台A遺跡において確認される。

c. 土器群の地域性

大梁川第II層土器のセットの中核を占めるのは口縁部の外反する深鉢B類で、口縁部の内寄する深鉢A類は量的には激減している。ここでは大梁川第IIc～d層土器のパラメーターとして第325図aに記した4類型、大梁川第IIa～b層土器のパラメーターとして第325図bに記した1類型を選定し、各々その分布状況について考えて見る。

① 深鉢B類で、いわゆる「荒井式」土器標識資料に見られる入組み横「S」字状縄文帯の配される類型は、ひろく福島・宮城・秋田・岩手・青森県で確認される。②福島県では滝根町観音山遺跡（中村・先崎；1984）、二本松市塩沢上原A遺跡（？）（目黒ほか；1975）、飯館村上ノ台A遺跡（鈴鹿；1984）、日向遺跡（芳賀ほか；1982）、相馬市馬見塚遺跡（鈴鹿ほか；1982）、⑤宮城県では本遺跡のほかに、白石市荒井遺跡（伊東；1957、佐藤・片倉；1958、片倉・中橋ほか；1976）、⑥秋田県では増田町梨ノ木塚遺跡（畠山；1979）、秋田市台A遺跡（？）（菅原；1986）、坂ノ上E遺跡（菅原；1985）、地蔵田B遺跡（菅原；1986）、⑦岩手県では大槌町崎山弁天遺跡（草間編；1975）、大迫町観音堂遺跡（？）（中村；1986）、⑧青森県では平鹿町井沢遺跡（高橋；1976）に見られ、一応東北地方全域にその分布を確かめることができる。ただし、福島県滝根町観音山遺跡例は口唇部に縄文帯をもつもので福島県南部の固有の特色を示し、青森県

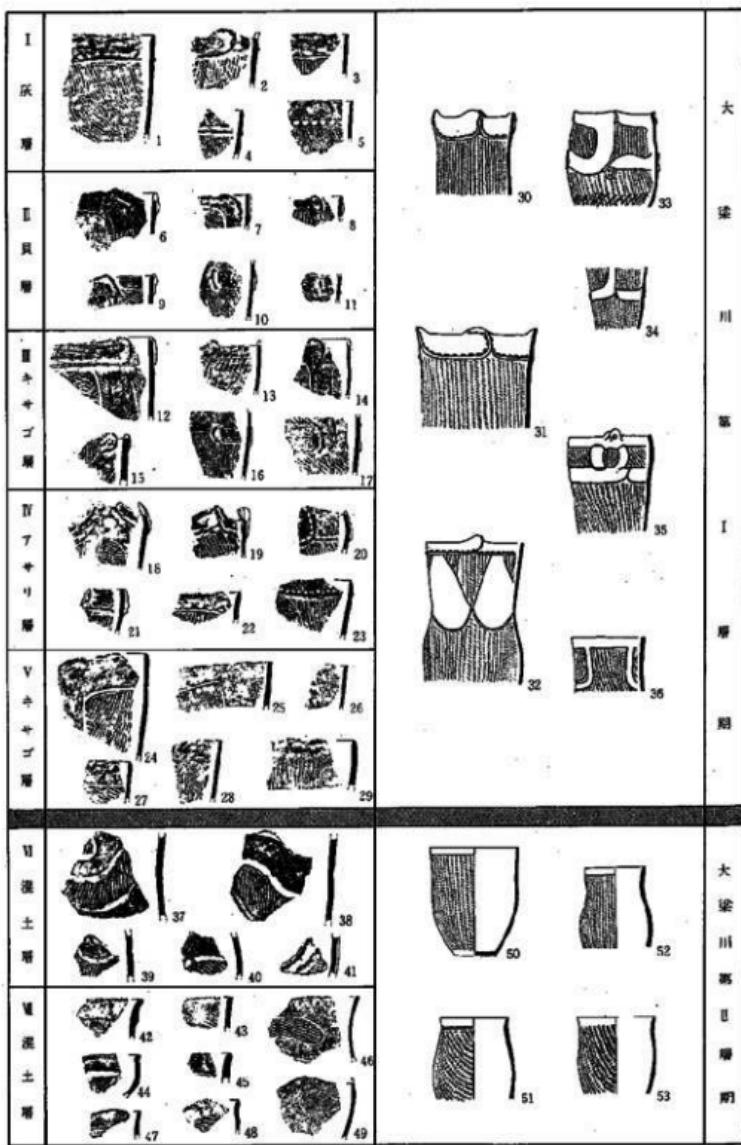
平鹿町井沢遺跡例も口唇部がすぼみ加減に外反する形状の最花式深鉢 B 類に比較的近いもので固有の地域色を有している。

② 深鉢 B 類で「e」～「C」・「U」字状などの渦巻き状縄文帶をもつものは、福島・宮城・山形・新潟・岩手・秋田県で確認される。④福島県では鮫川村壇ノ岡遺跡（梅宮；1971）、石川町小田口 D 遺跡（？）（福島ほか；1985）、平田村三斗町遺跡（田中・福島大学考古学研究会；1978）、滝根町觀音山遺跡、会津高田町十五壇遺跡（石本ほか；1983）、高郷村博毛遺跡（古川；1985）、山都町上林遺跡（？）（芳賀ほか；1983）、二本松市田地ヶ岡遺跡（梅宮・八卷ほか；1975）・塩沢上原 A 遺跡、飯野町南和台遺跡（八卷；1977）、⑤宮城県では本遺跡の他に七ヶ宿町小梁川東遺跡（真山ほか；1985）、藏王町二屋敷遺跡（加藤・阿部ほか；1984）、川崎町中沢遺跡（後藤ほか；1972）、鳴瀬町梨木貝塚混土層（第324図37～53）（芳賀；1968）、石巻市南境貝塚（林；1965・須藤；1985）、南方町青島貝塚（加藤・後藤ほか；1975）、岩出山町玉造遺跡（前掲）、⑥山形県では米沢市堂森 A・F 遺跡・八幡原 A・B 遺跡（加藤ほか；1977）・大清水遺跡（手塚・菊地・村山；1986）、小国町墓塚遺跡（佐藤・名和；1982）・下野遺跡（阿部・名和ほか；1981）、長井市長者屋敷遺跡（佐藤；1984）、東根市小林遺跡（佐藤；1976）、⑦新潟県新発田市北平 B 遺跡（田中；1985）、⑧岩手県では花泉町貝取貝塚（金子・草間編；1971）、陸前高田市門前貝塚（吉田；1960）、大迫町崎山弁天遺跡、大槌町觀音堂遺跡、盛岡市広瀬 II 遺跡（松野；1980）・繁 III 遺跡（高橋ほか；1980）、⑨秋田県では千畑村内村遺跡（畠山；1981）、秋田市台 A 遺跡（菅原；1986）・坂ノ上 E 遺跡・地蔵田 B 遺跡などにおいて確認され、青森県～岩手・秋田県北部では明らかではない。

③ 深鉢 B 類で波状文間に「S」字状文をするものは、福島・宮城・山形県で確認される。④福島県では会津高田町十五壇遺跡、二本松市塩沢上原 A 遺跡、⑤宮城県では本遺跡のみ、⑥山形県では東根市小林遺跡、村山市中村 A 遺跡（名和・渋谷；1983）、長井市長者屋敷遺跡（？）などに見られ、福島県北部～宮城県南部～山形県にはほぼ限定される。この地域の炉埋設土器として利用される頻度が比較的高い類型である。

④ 深鉢 A 類で福島県二本松市塩沢上原 A 遺跡第 I 区第 15 号住居跡で共伴の確認されている隆線による渦巻文外部に地文の縄文が施されるものは、福島県内の鮫川村壇ノ岡遺跡、石川町小田口 D 遺跡、玉川村堂平 B 遺跡（？）、二本松市塩沢上原 A 遺跡・田地ヶ岡遺跡、飯館村上ノ台 A 遺跡（？）などに見られ、さらに栃木県櫻沢遺跡（海老原・八卷；1980）などの北関東に広がる類型である。この地域では深鉢 B 類で同様の隆線による渦巻文の施されるものも見られる。また、大梁川遺跡で確認される外反形の深鉢 B 類や胴中位区画文の急増傾向を確かめることのできない地域もある。

⑤ 深鉢 B 類で横位分節波溝文のうち雁股状をなすものは福島・宮城・新潟・秋田県で確認

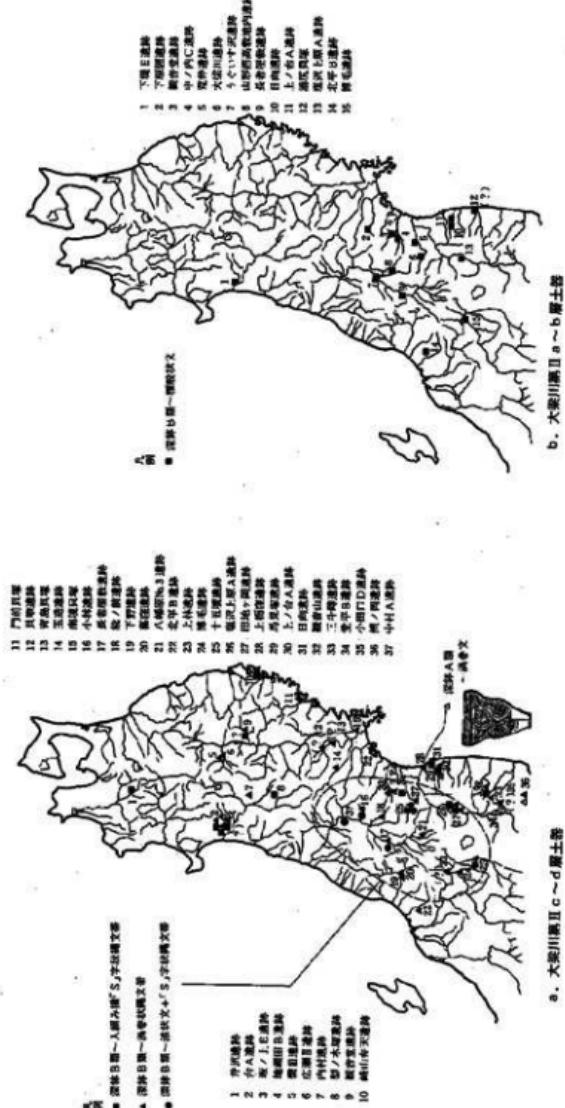


第324図 梨木西貝塚灰層～泥土層出土土器

されている。④福島県では小高町浦尻貝塚第1号住居跡(?)（福島大学考古学研究会；1971）、二本松市塩沢上原A遺跡、飯館村日向遺跡・上ノ台A遺跡、高郷村博毛遺跡、⑤宮城県では本遺跡のほかに、白石市荒井遺跡、川崎町中ノ内C遺跡（斎藤・相原；1987）、仙台市（旧宮城町）観音堂遺跡(?)（今野；1986）、大和町下原田遺跡（第323図12）（高橋；1975）、⑥山形県では長井市長者屋敷遺跡、寒河江市うぐいす沢遺跡、山形市山形西高敷地内遺跡（佐藤；1979）、⑦新潟県新発田市北平B遺跡、⑧秋田県秋田市下堤E遺跡（菅原；1985）などで確認されている。分布構造としては、大梁川第IIc～d層期の③深鉢B類で波状文間に「S」字状文の配される分布域を基本的に継承しながらも、日本海側では新潟県北部から秋田県南部に拡大している。

※小 結

1. 大梁川第IIc～d層土器のうち深鉢B類についてはパラメーターを変換することにより、東北地方全域から福島県北部～宮城県南部～山形県の比較的狭い地域まで、重層的な分布構造を知ることができた。
2. 深鉢B類で波状文間に「S」字状文を配するもの及び彌股状文を配するものは、ともに炉埋設土器として利用される頻度が高く、福島県北部～宮城県南部～山形県南部を中核とする比較的狭い範囲に集中的に分布している。
3. 深鉢A類で隆線による渦巻文外部に地文の縄文が施されるものは福島県南部～北関東に分布している。この地域では大梁川遺跡で確認される外反形の深鉢B類や胴中位区画文の急増傾向を確かめることはできない。



(4) 大梁川第I層土器・後期初頭土器

a. 土器群の内容

大梁川第I層土器は南側遺物包含層第I層及び第1・2・5・6号住の埋土上部、第1・3(?)・4号土壤、第3号埋設土器遺構(?)から発見されている。うち、第6号住居跡埋土上部の人為的堆積土中には一括土器が廃棄されており、該期を考える上で重要な共伴資料である。大筋の理解としては、pp. 131~132の小結において述べた通りであるが、南側遺物包含層第I層で確認することができなかった円形刺突文・竹管文が第6号住などで確認された点を付け加えておく。第326~328図に主要土器を集成する。

b. 土器群の編年的位置

大梁川第I層土器は大梁川第II層土器に続く大木10式(伊東; 1957)後半期に位置付けられる。大木10式後半期とは、多くは隆帶を持ち縦走撚糸文の施される頻度が高いもので、山内が示した狭義の「大木10式」(山内; 1937、小岩; 1961)である。

大木10式後半期は丹羽茂によって次のような検討が加えられている。

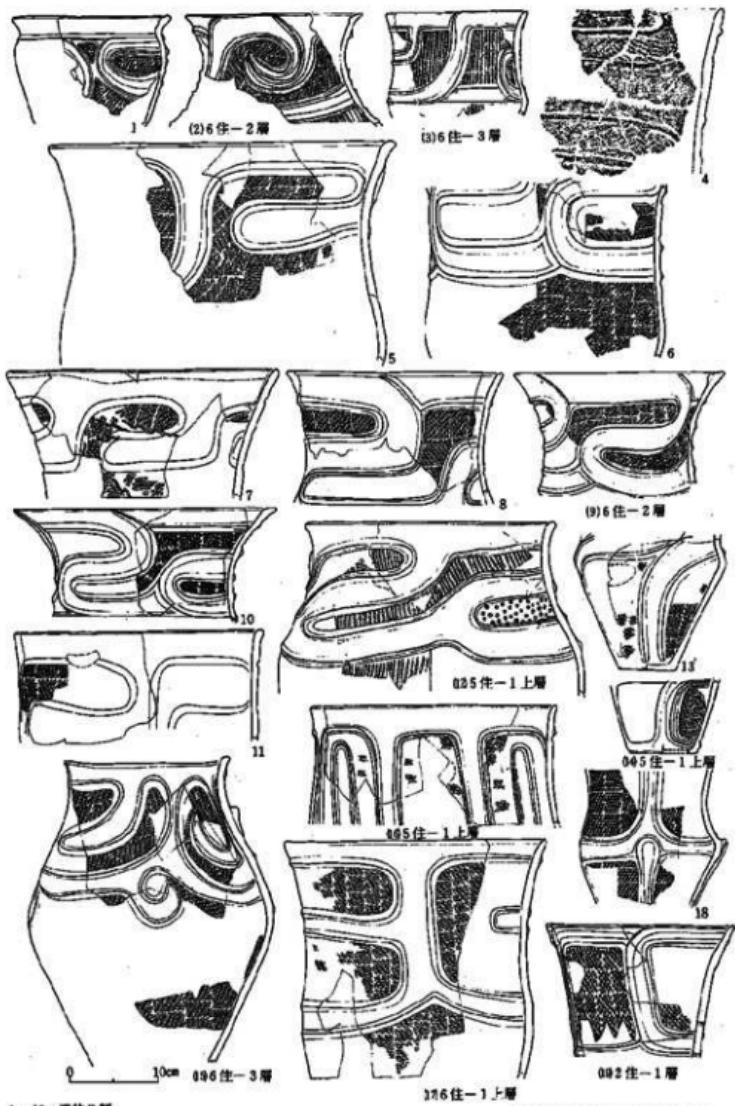
① 「縄文時代における中期社会の崩壊と後期社会の成立に関する試論」(1971)

福島県二本松市塩沢上原A遺跡第2号住居跡・第8号住居跡の埋土上層から発見された口縁部の外反する深鉢形土器に基づいて「大木10a・b式期」に続く「大木10c式期」の類型期が設定された。胴上部文様には「フ」状を呈する分節波瀾文が配され、無文部は入組み状に展開しいわゆる「ヒレ状突起」の付されるものである。さらに伊東と同様に「重要なこととして地文に撚糸文が施されるものが含まれる」点を指摘し、仙台湾における西ノ浜貝塚第4層土器(第330図)や梨木圓貝塚第1群土器(第323図1~36)と概ね併行関係にあるものとして把握し、地域性として「福島県の内陸部では西ノ浜第4層土器は未検出」である点を指摘した。

② 「大木式土器」(1981)

小野寺祥一郎の梨木圓貝塚の再検討(アサリ層~混土層では「連結『S』文・連結波形文」などの文様をもつものが多い点)により、「フ」状を呈する分節波瀾文等はすべて「第II段階」に繰り上げられた。しかし、④具体的な再検討の中味は未公表の小野寺論文によるものとされ、詳細が不明である点、⑤梨木圓貝塚の大別層位の認識が発掘調査当事者の所見とくい違っている点、⑥「第II段階」に丹羽が層位的根拠をもって分離した先の「10b式」と「10c式」の一部が繰り込まれ、ふたつの型式内容が共存しその関係が明示されなかつた点に問題を残すことになった。

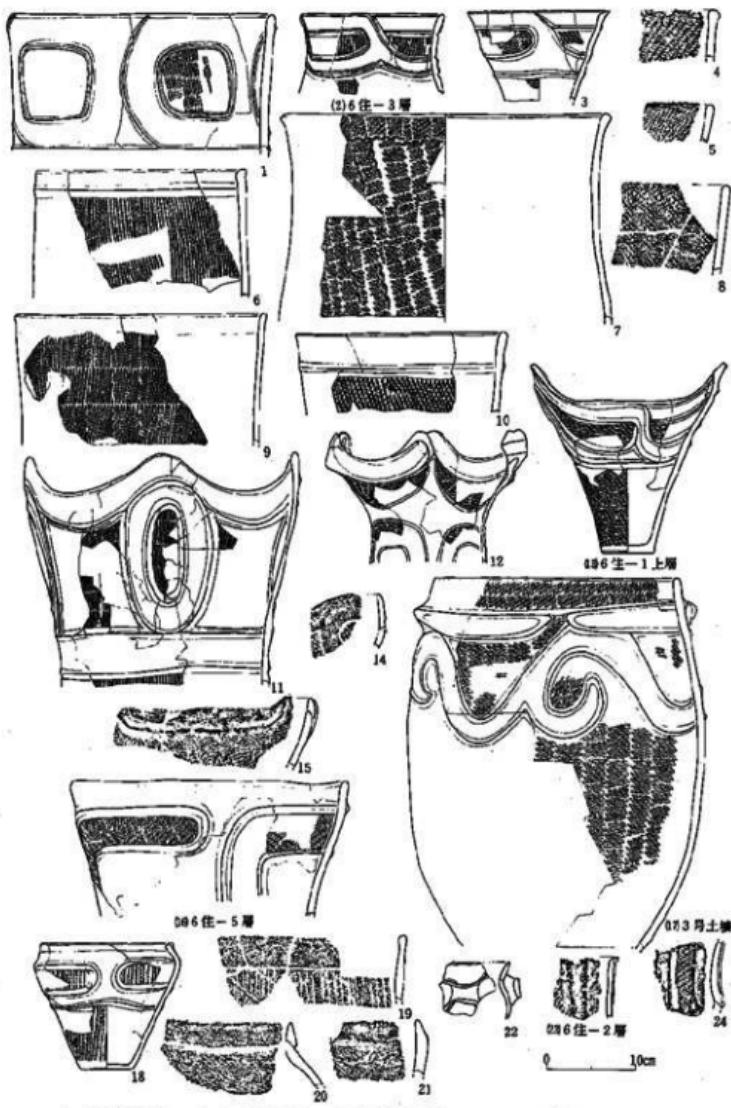
さらに「第II段階」の後続段階として「第III段階」・「第IV段階」が設けられ、「第III段階」として西ノ浜貝塚Aトレンチ第4層出土土器が示され、「第IV段階」はその存在が示唆されたに過ぎない。



1~19 深井B類

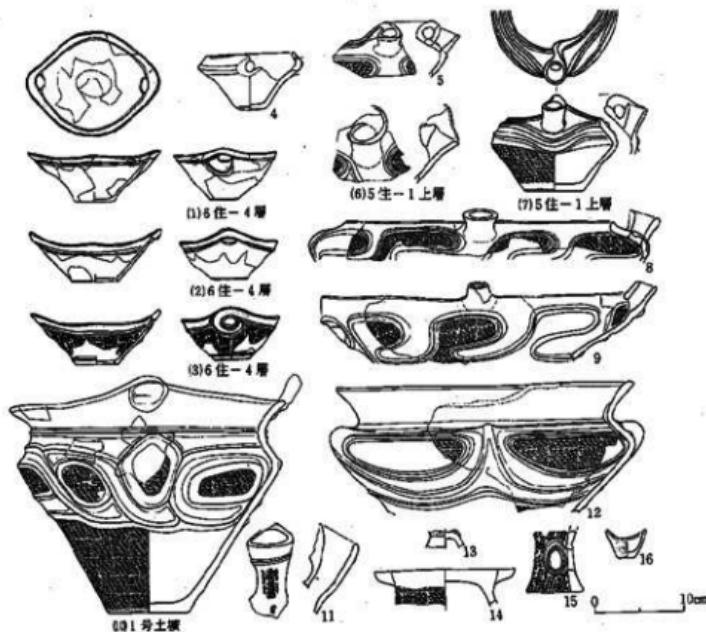
第326図 大桑川第I層土器抄録(1)

(数字)は邊構出土のI層対比土器



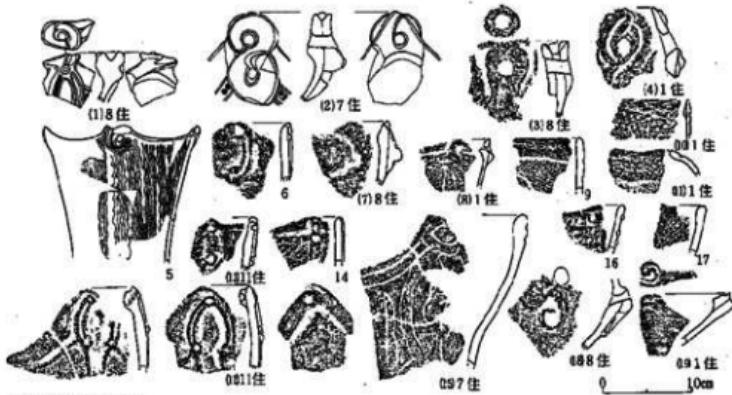
1~10 深鉢B類 11~21 深鉢C類 22~24 深鉢D類 (数字)は連携出土のI層対比土器

第327図 大栗川第I層土器抄録(2)



1-3 深鉢A類 4-9 深鉢B類 10-12 鉢B類 13 台付鉢 14-15 帯台 16 純珍土器
(数字)は追査出土の1層付比土器

第328図 大栗川第1層土器抄録（3）



(数字)は追査出土土器

第329図 大栗川後期初頭土器抄録

以上、論文の掲載が概説書という制約もあるが、結果的には細分の具体的根拠が明らかにされないまま、先の論文で地域性として把握された土器が時間差として認識された。

③「菅生田遺跡」(1982)

菅生田遺跡第2号住居跡と第10号住居跡の様相の違いから「第II段階」はさらにふたつの「第IIA段階」・「第IIB段階」に区分（第330図参照）された。

「第IIA段階」：連結「S」字状文様（第330図16）、玉抱連結「S」字状文様A（第330図12）（第2号住）

「第IIB段階」：玉抱連結「S」字状文様B（第330図14、18）、玉抱変形「S」字状文様（第10号住）（第330図11）、「コ」字状文様（第330図4）

問題点としては、④第2号住と第10号住とが切り合い関係を持つものではなく、主として「S」字状文様の連結から「コ」字状文様の生成という文様論的見地から設定された段階である点、⑤基準とされた資料が数少ない点——特に第2号住、⑥「第II段階」は「10b式」と「10c式」の一部から構成されている点については既述の通りであるが、ここで論じられている「第IIA段階」・「第IIB段階」は旧「10c式」部分についての細分であり、旧「10b式」——具体的には塩沢上原A遺跡等との関係については触れられていない点があげられよう。

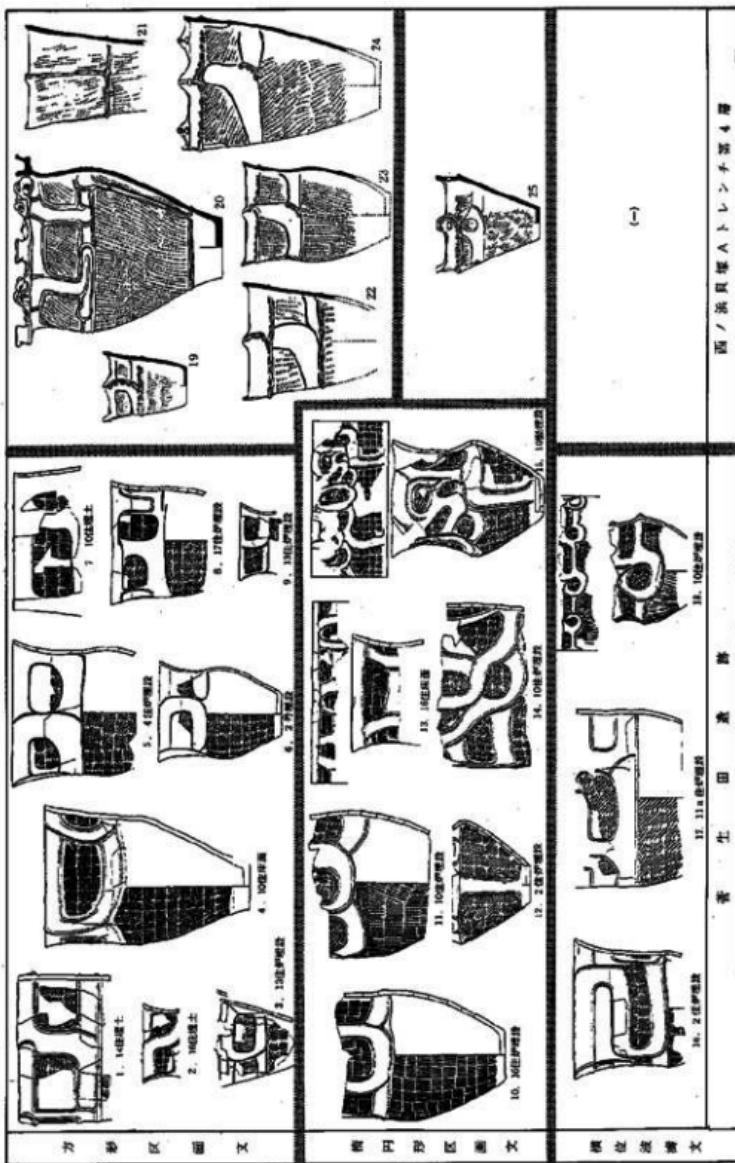
一方、先の論文で示唆された「第IV段階」が「その全容を知り得るものではない」とした上で、沼津貝塚・六反田遺跡で出土している方形区画文を特徴とする土器と明記された。

丹羽の大木10式後半期の編年は①「大木10c式」（1971）、②「大木10式第II段階」→「第III段階」→「第IV段階」（1981）、③「大木10式土器期第IIA段階」→「第IIB段階」→「第III段階」→「第IV段階」（1982）とされ、大木10式編年研究は完成されたとする見方を表明する研究者も見られる。しかし、丹羽が最初に提起した福島県内陶部における西ノ浜貝塚第4層土器の未発見という問題は何ら変わることなく残されており、地域差・時期差両面からの検討が再度必要なものと思われる。

① 宮城県白石市菅生田遺跡（丹羽・阿部・小野寺；1982）

菅生田遺跡は1968・71～72年に宮城県教育庁文化財保護課によって発掘調査が行われ、15軒の竪穴住居跡、11基の小竪穴遺構、遺物包含層ほかが検出されている。

「大木10式土器期第II段階」とされた土器（第330図1～18）は、ほぼ「大槻川第1層土器」と同じ内容からなり、すべて「方形区画文」・「楕円形区画文」・「横位波瀧文」いずれかの範疇で捉えられるものである。また、「第IIA段階」及び「第IIB段階」設定の根拠とされた第2号住居跡と第10号住居跡出土土器の違いは第2号住居跡の方形区画文の欠落に外ならず、第2号住居跡は他の住居跡に比して遺物量が少なく、偶然方形区画文の施される土器が欠落した可能性も否定できない。しかも、15軒の住居跡のうち「第IIA段階」とされたのは第2号住居跡1



軒のみであることも考慮しなければならないものと思われる。

② 松島町西ノ浜貝塚A トレンチ第4層出土土器（後藤・斎藤；1967）

西ノ浜貝塚は1966年宮城教育委員会によって第1次発掘調査が行われた。第1層・表土、第2層・混貝層、第3層・上部貝層（第1貝層）、第4層・下部貝層（第2貝層）で、第3層が宮戸I式、第4層が大木10式である。

第4層出土の深鉢形土器を抄録したのが第330図19～25である。19～21が方形区画文の施されるものである。細部の特徴では④比較的不整な横長の方形で、一部に隆線表現が用いられ、隆線に沿って連続刺突文が施されるもの（19・22～24）、⑤ほぼ正方形に近く、無文部が入組み状に展開するもの（20）、⑥口縁部から直接垂下する縦長の長方形形状を呈するもの（21）の3類型がある。25が梢円形区画文の施されるものである。口縁部無文帯部分は短く外反しているが、一応深鉢C類の範疇で把握されよう。口縁部には連続刺突文が施され、文様類型的には方形区画文の④に近いものである。

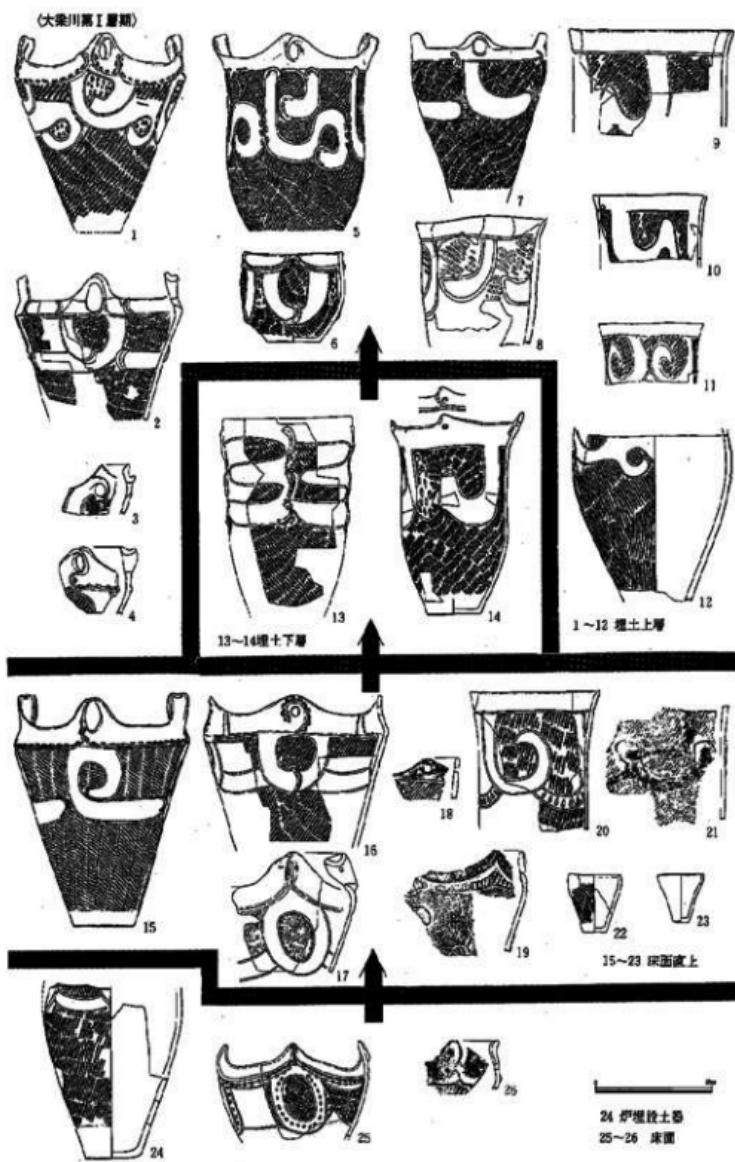
これらの土器と大梁川第I層土器とを比較した場合、西ノ浜貝塚のものは連続刺突文が多く用いられているものの、文様類型的には方形・梢円形区画文からなりほぼ大梁川第I層土器と同様の範疇で捉えられる。西ノ浜貝塚における横位波溝文の欠落は、丹羽の主張する時期差の可能性とともに、偶有性の可能性も否定できず、少なくとも1遺跡の1トレンチで「段階設定」を行うことは困難であると思われる。このような意味でも1967年に実施された第1次調査の2倍以上の面積に及ぶ第2次調査（加藤；1968）の詳細の公表が強く望まれる。

③ 岩手県大迫町観音堂遺跡第7号住居跡出土土器（中村；1986）

第331図は観音堂遺跡第7号住居跡出土土器を抄録したものである。第7号住居跡は直径約7.5mの円形住居跡で、40～50cmの覆土には大量の土器が廃棄されている。

土器の文様は大別して④西ノ浜貝塚の梢円形区画文に酷似する「O字文系」、⑤方形区画文の範疇で捉えられる「L字文系」、⑥横位波溝文の範疇で捉えられる「J字文系」から成り立っており、基本的には大梁川第I層土器と同様のものである。刺突文の多用など細部の状況は、西ノ浜貝塚Aトレンチ第4層と類似しており、内容的にも観音堂遺跡第7号住居跡例が西ノ浜貝塚例を包括するものである。

以上、菅生田遺跡例は大梁川第I層土器に、西ノ浜貝塚Aトレンチ第4層土器は観音堂遺跡例に包括され、この両者の多くは隆帶を持ち縦走燃糸文の施される頻度が高い点に加えて、①梢円形区画文②方形区画文③横位波溝文から成り立っており、大枠では同一時期の地域性を示すものと考えられる。具体的な分布状況については次項の「土器群の地域性」において検討する。



第331図 岩手県大迫町観音堂遺跡第7号住出土土器抄録

大梁川後期初頭土器は pp. 361 において述べた通り、南境式(伊東; 1957)に位置付けられるものである。器形・文様の全体形を知り得るものはなく、ここでは近接する藏王町二星敷遺跡出土の深鉢形土器(第332図)を用いて、南境式と大木10式との関連について検討を施し、本項の結びとしたい。

二星敷遺跡の深鉢形土器の器形は、①口縁部の外反する深鉢B類と②口縁部の内湾する深鉢C類に大別され、セットの基本構成は大筋では大木10式と変わらない。これらの土器の多くは「隆線文は口縁部に圧縮」(伊東; 1957)されて種々の突起や把手が形成され、胴部には①楕円形区画文系、②方形区画文系の文様が懸垂文と複合して施されており、これらの胴上部文様は①楕円形区画文系の場合、楕円形・渦巻形・ワラビ状等を呈し、②方形区画文系の場合、方形部の対角線上に「>」状・「」状等の文様が描かれ、文様構成からも大木10式の延長線上において捉えることができる。横位波瀬文については、15~17の展開図に明らかのように波瀬文が文様割り付け線として用いられたり、横位波瀬文に顕著に見られた無文部と縄文部の面積比の均衡関係が形を変えながらも残存しており、文様的には内在化し直接その存在を確認することはできない。地文には縄回転による縄文・撚糸文に代わって、斜・横回転による縄文・撚糸文が主体を占めている。

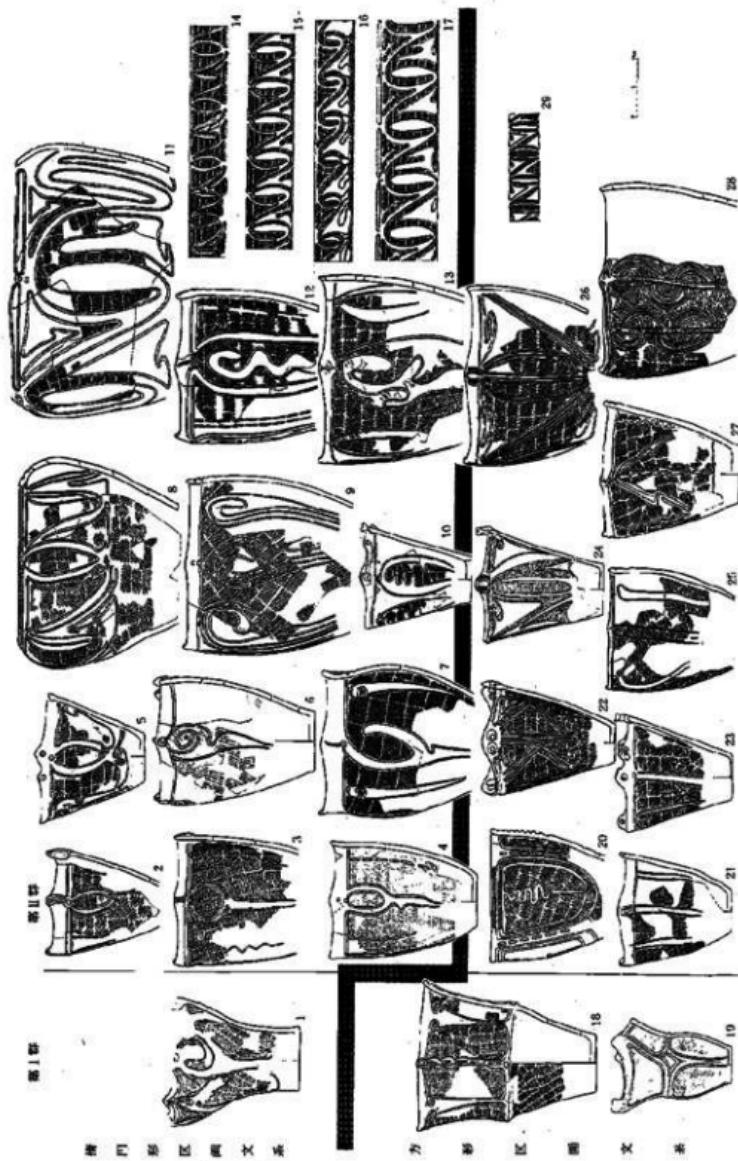
南境式の生成をめぐっては「大木10式土器期第IV段階」(丹羽; 1982)の方形区画文からの展開を想定する考え方がある。しかし、現実には東日本全域を縦観しても、方形区画文の施される土器だけが出土する遺構も貝層・包含層も存在しない。かつての「門前式」が一つの土器類型のみを意味したように、「大木10式土器期第IV段階」は文様論的な虚構の可能性が強い。そして、現実に存在しないものから南境式の生成を考えることはできない。

「後期の初めの南境式土器は大木10式の延長と見てよい。」とする伊東の古典的な理解(1957)が、南境式の本質を最も簡明に表しており、事実大梁川遺跡のほかにも多くの集落遺跡が縄文時代中期後葉から後期前葉への高度な継続性を示し、そこに文化の断絶は見出しがたく、縄文時代中期文化から後期文化への移行は極めて連続的かつ自律的な展開過程のもとに把握される。

※ 小 結

1. 大梁川第I層土器は大木10式後半期に位置付けられ、県内では菅生田遺跡・西ノ浜貝塚Aトレンチ第4層土器の様相に概ね一致する。
2. 大梁川後期初頭土器は南境式に位置付けられ、「大木10式の延長」上に連続的かつ自律的の展開過程のもとに把握される。

图322 双模黑毛王阿二型虫害防治技术模式图



第一行 第二行

c. 土器群の地域性

大梁川第I層土器のセットの中核を占めるのは口縁部の外反する深鉢B類と口縁部の内弯する深鉢C類である。ここでは第333図に示した土器をバラメーターとして設定し、地域性を検討する。

① 福島県では同期の遺跡として、石川町小田口D遺跡(福島ほか; 1985)、国見町岩淵遺跡(福島大学考古学研究会編; 1976)、滝根町観音山遺跡(中村・先崎; 1984)、飯館村上ノ台A遺跡(鈴鹿ほか; 1984)、福島市(旧松川町)日向道内遺跡(梅宮; 1960・柳沢; 1980)、会津高田町十五塙遺跡(石本ほか; 1983)、高郷村博毛遺跡(古川; 1985)、二本松市田地ヶ岡遺跡(八巻ほか; 1975)、岩代町高稲場遺跡(鈴鹿ほか; 1981)、相馬市馬見塚遺跡(鈴鹿ほか; 1982)、川俣町庚申森遺跡(鈴鹿ほか; 1983)、二本松市塩沢上原A遺跡(目黒ほか; 1975)などがあげられる。

椭円形区画文の施されるものでは、口縁部の外反する深鉢B①類及び口縁部の内弯する深鉢C①類・③類が分布している。深鉢B①類は岩淵遺跡、小田口D遺跡で確認されるが、類例に乏しく詳細は不明である。深鉢C①類は観音山遺跡、小田口D遺跡、日向道内遺跡、岩淵遺跡(?)、上ノ台A遺跡(?)で確認され、福島県全域に及ぶものと思われる。深鉢C③類は上ノ台A遺跡、観音山遺跡で発見されている。

方形区画文の施されるものでは、口縁部の外反する深鉢B②類が福島県北部に分布しており、十五塙遺跡、田地ヶ岡遺跡、高稲場遺跡、上ノ台A遺跡、岩淵遺跡及び若干形状の異なるものが博毛遺跡で発見されている。

分節波構文では「フ」状をなす深鉢B⑤類のみが福島県北部を中心に分布し、馬見塚遺跡、上ノ台A遺跡、日向道内遺跡、庚申森遺跡、上原遺跡、田地ヶ岡遺跡、博毛遺跡(?)、小田口D遺跡(?)で発見されている。

福島県下の該期の状況をまとめると、④福島県南部、特に阿武隈山地南半の岩代町高稲場遺跡第1号住居跡、滝根町観音山遺跡J-3号、J-6号住居跡、石川町小田口D遺跡7号包含層→5号住居跡などの共伴資料を見る限り、口縁部の内弯する深鉢C類が比較的多く、胴下部に及ぶ長大な椭円文(深鉢C①類)や「匁」状文が施され、胴中位区画文は一部に見られるのみである。⑤福島県北部は、口縁部の外反する深鉢B類が主体を占め、椭円形・方形区画文及び「フ」状を呈する分節波構文からなり、大梁川遺跡第I層土器の状況に酷似している。深鉢C①類については確実な例では日向道内遺跡で発見されている。

② 宮城県では、同期の遺跡として、七ヶ浜町大木園貝塚(小岩; 1961・原・馬目; 1968)、川崎町中沢遺跡(後藤; 1975)・湯坪遺跡(一條; 1978)・本屋敷遺跡(鈴木ほか; 1987)、蔵王町二星敷遺跡(加藤・阿部ほか; 1984)、白石市菅生田遺跡(丹羽・阿部ほか; 1982)、色麻町

大谷地遺跡（茂木；1984）、雄勝町天雄寺貝塚（邊見；1976）、築館町鰐沢遺跡（阿部；1975）、仙台市（旧宮城町）観音堂遺跡（今野；1986）・下ノ内遺跡（篠原；1983）・梨野A遺跡（佐藤・主浜ほか；1983）、鳴瀬町梨木畠貝塚（芳賀；1968）・里浜貝塚（藤沼ほか；1986）、石巻市沼津貝塚（中村編；1976）・南境貝塚（後藤；1968・69、須藤；1985）、女川町出島山下貝塚（邊見；1973～74）、松島町西ノ浜貝塚（後藤・斎藤；1967、加藤；1968）、涌谷町長根貝塚（伊東ほか；1969）、南方町青島貝塚（加藤・後藤；1975）、柴田町向畑遺跡（芳賀；1983）などがあげられる。

楕円形区画文の施されるものでは、口縁部の外反する深鉢B①類及び口縁部の内弯する深鉢C②類・③類が分布している。深鉢B①類はほぼ県下全域に認められ、中沢遺跡、二屋敷遺跡、菅生田遺跡、大谷地遺跡、大木畠貝塚、観音堂遺跡、下ノ内遺跡、天雄寺貝塚で発見されている。

深鉢C②類については、大木畠貝塚、西ノ浜貝塚、沼津貝塚、梨木畠貝塚、出島山下貝塚の仙台湾北部から三陸地方の沿岸部に片寄った分布状況を呈している。仙台市下ノ内遺跡では、若干形状の異なる本類土器の変異形の範疇で把握し得る土器が出土している。なお、仙北湖沼帶の様相はいずれも小片で詳細は不明である。

深鉢C①類については県内では未発見であるが、大梁川第I層土器の第327図12・15は福島県石川町小田口D遺跡で深鉢C①類と共に伴しており、今後発見される可能性が高い。深鉢C①類と深鉢C②類は第333図aに示したように、東北地方中部を境にほぼ偏在的な分布状況を呈している。

方形区画文の施されるものでは、口縁部の外反する深鉢B②類・③類・④類が分布している。深鉢B②類はほぼ県下全域に認められ、本遺跡のほかに菅生田遺跡、二屋敷遺跡、中沢遺跡、梨野A遺跡、観音堂遺跡、梨木畠貝塚（？）、西ノ浜貝塚、大谷地遺跡、鰐沢遺跡で発見されている。

深鉢B③類は向畑遺跡、下ノ内遺跡、梨野A遺跡、大木畠貝塚、西ノ浜貝塚、沼津貝塚、南境貝塚、青島貝塚、出島山下貝塚の仙台湾沿岸部から仙北湖沼帶以東に片寄る分布状況を呈している。

深鉢B④類は二屋敷遺跡、梨野A遺跡、西ノ浜貝塚、里浜貝塚西地区、沼津貝塚、南境貝塚などがあげられ、ほぼ深鉢B③類の分布状況と変わらない。県南部の二屋敷遺跡の小型品4個体については搬入品の可能性も考えられよう。

分節波濤文の施されるものでは「フ」状を呈する深鉢B⑤類のみが分布し、深鉢B⑥類については現状では確認されていない。遺跡としては、本遺跡のほかに、菅生田遺跡、二屋敷遺跡、観音堂遺跡、大谷地遺跡などがあげられ、宮城県西部に分布している。仙台湾周辺の分布につ

いては不明である。

宮城県下の該期の状況をまとめると④宮城県北東部の仙台湾沿岸から仙北湖沼帯以東には深鉢C②類・B③類・B④類が分布している。⑤宮城県南西部の山麓丘陵地には、深鉢C①類が未確認ではあるが、福島県北部とほぼ同じ組成から成り立っている。

③ 山形県では、同期の遺跡として、山形市山形西高敷地内遺跡(佐藤ほか; 1979)・熊ノ前遺跡(佐々木ほか; 1981)、大江町橋上遺跡(犬飼・高橋ほか; 1984)、村山市中村A遺跡(渋谷・名和; 1983)などがあげられる。

楕円形区画文の施されるものでは、口縁部の外反する深鉢B①類及び口縁部の内弯する深鉢C①類・③類が分布している。深鉢B①類は山形西高敷地内遺跡、橋上遺跡、中村A遺跡、深鉢C①類は中村A遺跡、深鉢C③類は中村A遺跡、橋上遺跡で発見されている。

方形区画文の施されるものでは深鉢B②類が認められ、橋上遺跡、中村A遺跡、山形西高敷地内遺跡で発見されている。分節波溝文の施されるものでは深鉢B⑤類が認められ熊ノ前遺跡、中村A遺跡で発見されている。

山形県下の該期の状況は、福島県北部や宮城県南西部の様相と大きく異なるものではない。ただし、日本海沿岸地方については資料が少なく詳細は不明である。

④ 新潟県では、同期の遺跡として小千谷市城之腰遺跡(新潟県編; 1983)、六日町宮下原遺跡(富樫・佐藤; 1985)、新発田市北平B遺跡(田中; 1985)などがあげられる。

楕円形区画文の施されるものでは深鉢C①類が宮下原遺跡、深鉢C③類が北平B遺跡、宮下原遺跡(?)で発見されている。方形区画文の施されるものでは深鉢B②類に類似するものが宮下原遺跡で、分節波溝文の施されるものでは深鉢B⑤類が北平B遺跡で発見されている。

現状では比較対象となし得る遺跡が少なく詳細は不明であるが、おおよそ新潟県中南部の様相は福島県南部の状況に類似し、北平B遺跡を見る限り新潟県北部は福島県北部～宮城県南西部～山形県の状況にほぼ一致している。

⑤ 岩手県では、大船渡市蛸ノ浦貝塚(西村; 1958・69)、陸前高田市堂の前貝塚(及川ほか; 1972)・門前貝塚(吉田; 1960、及川・遠藤; 1974)・中沢浜貝塚(佐藤・蒲生; 1987)、北上市鬼柳西裏遺跡(熊谷; 1982)・八天遺跡(本堂; 1978・79)・樺山遺跡(斎藤; 1977)、九戸村江刺家V遺跡(国生・佐々木; 1983)、都南村湯沢遺跡(国生ほか; 1983)、軽米町入屋敷Ia遺跡(小平ほか; 1983)、大迫町観音堂遺跡(中村; 1986)、一戸町田中4遺跡(高田; 1981)、花泉町貝取貝塚(草間・金子編; 1971)、松尾村長者屋敷遺跡(佐々木ほか; 1984)などがあげられる。

楕円形区画文の施されるものでは、口縁部の外反する深鉢B①類及び口縁部の内弯する深鉢C②類・③類が分布している。深鉢B①類は岩手県全域にその分布を確かめることができ、八

天遺跡、鬼柳西裏遺跡、湯沢遺跡、吼屋敷 Ia 遺跡、長者屋敷遺跡、江刺家 V 遺跡があげられる。深鉢 C ②類は樺山遺跡（？）、八天遺跡、観音堂遺跡、蛸ノ浦貝塚（？）、湯沢遺跡、深鉢 C ③類は長者屋敷遺跡で発見されている。

方形区画文の施されるものでは、口縁部の外反する深鉢 B ②類・③類・④類が分布している。深鉢 B ②類は長者屋敷遺跡、田中 4 遺跡、観音堂遺跡、湯沢遺跡、深鉢 B ③は門前貝塚、中沢浜貝塚、貝取貝塚、八天遺跡、深鉢 B ④類は八天遺跡、鬼柳西裏遺跡、長者屋敷遺跡で発見されている。

分節波濤文の施されるものでは「S」状を呈する深鉢 B ⑤類と「J」状を呈する深鉢 B ⑥類の双方が分布している。深鉢 B ⑤類は堂の前貝塚、八天遺跡、湯沢遺跡、長者屋敷遺跡、深鉢 B ⑥類は八天遺跡、観音堂遺跡、長者屋敷遺跡、吼屋敷 Ia 遺跡で発見されている。

岩手県下の該期の状況は宮城県北東部の様相と大きく異なるものではない。ただし、岩手県北部では深鉢 C ②類や B ④類の隆線に沿って刺突文が多く用いられる類型は顕著な分布を示さない。

⑥ 秋田県では、同期の遺跡として、男鹿市泉野遺跡（磯村ほか；1976）、鹿角市御休堂遺跡（秋元；1981）・天戸森遺跡（秋元；1984）、秋田市坂ノ上遺跡（菅原；1976）・下堤 E 遺跡（菅原；1985）・下堤 F 遺跡（菅原；1985）・湯ノ沢 C 遺跡（菅原；1984）・湯ノ沢 H 遺跡（菅原；1984）・地蔵田 B 遺跡（菅原；1986）・坂ノ上 E 遺跡（菅原；1984）、比内町本道端遺跡（田村ほか；1986）、河辺町風無台 I 遺跡（高橋；1985）などがあげられる。

梢円形区画文の施されるものでは、口縁部の外反する深鉢 B ①類及び口縁部の内寄する深鉢 C ②類（？）、③類が分布している。深鉢 B ①類は湯ノ沢 H 遺跡、下堤 F 遺跡、本道端遺跡、深鉢 C ②類（？）は坂ノ上遺跡、深鉢 C ③類は泉野遺跡、天戸森遺跡で発見されている。

方形区画文の施されるものでは、口縁部の外反する深鉢 B ②類・③類が分布している。深鉢 B ②類は湯ノ沢 C 遺跡、下堤 E・F 遺跡、天戸森遺跡において見られ、天戸森遺跡例は若干形状を異にしている。深鉢 B ③類は坂ノ上 F 遺跡で発見されているが、バラメーターとして設定した B ②～④類とは異なる様相を呈している。

分節波濤文の施されるものでは、「S」状を呈する深鉢 B ⑤類と「J」状を呈する深鉢 B ⑥類の双方が分布している。深鉢 B ⑤類は坂ノ上 E 遺跡、地蔵田 B 遺跡、下堤 E 遺跡（？）、深鉢 B ⑥類は地蔵田 B 遺跡、本道端遺跡で発見されている。

秋田県下の該期の状況は岩手県や宮城県北東部の様相と大きく異なるものではない。ただし総じて隆線に沿って刺突文が多用される類型は太平洋側程顕著には見られない。

⑦ 青森県では、同期の遺跡として弘前市大曲 I 号遺跡（田村；1968）、今別町山崎遺跡（小笠原ほか；1982）、三戸町泉山遺跡（市川ほか；1976）、平賀町井沢遺跡（高橋；1976）、六ヶ所

村弥栄平(1)遺跡（三浦；1986）などがあげられる。このうち、六ヶ所村弥栄平(1)遺跡は豊富な切り合い関係に裏付けられる多くの土器が出土しており、当地の様相を把握する上で極めて重要な遺跡である。

楕円形区画文の施されるものは口縁部の外反する深鉢B①類及び口縁部の内弯する深鉢C③類が分布している。深鉢B①類は泉山遺跡、山崎遺跡、弥栄平(1)遺跡、深鉢C③類は泉山遺跡、弥栄平(1)遺跡で発見されている。

方形区画文の施されるものは、一応山崎遺跡や弥栄平(1)遺跡などで発見されているが、パラメーターとして設定したB②～④類とは異なる様相を呈している。

分節波溝文の施されるものでは「J」状を呈する深鉢B⑥類が分布し、深鉢B⑤類は分布しない。大曲I号遺跡、井沢遺跡、山崎遺跡、弥栄平(1)遺跡の青森県全域において発見されている。

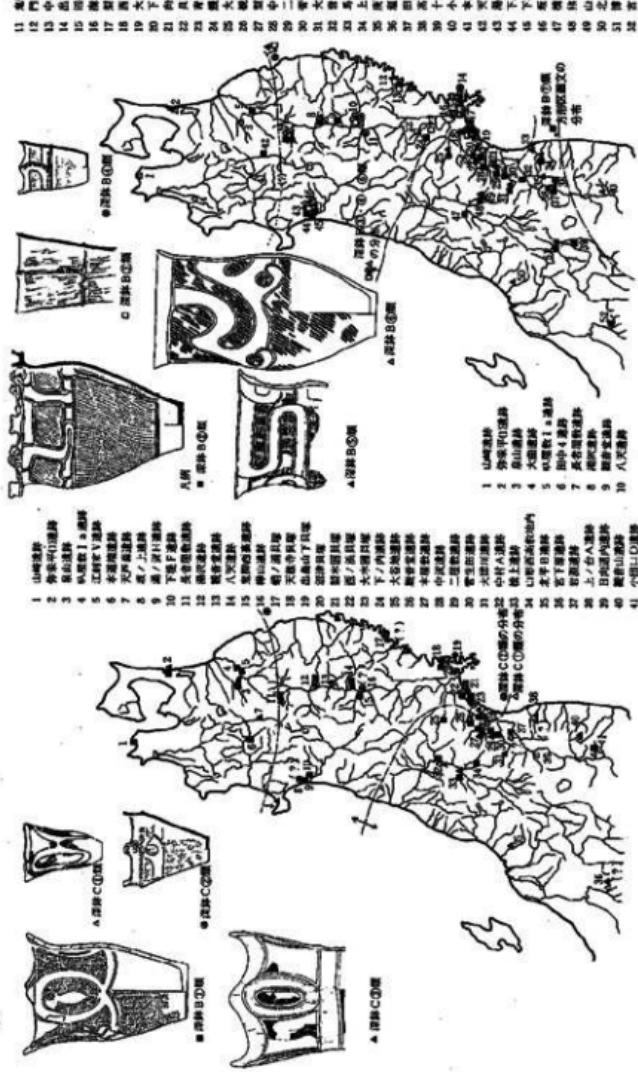
青森県下の「大木10式並行期」の土器は口縁部の外反する深鉢B類を主体とし、口縁部の内弯する深鉢C類を僅少ながらも含んでおり、基本的には他の東北地方と同様の器種構成から成っている。地文には撚糸文の施される土器が比較的多く、文様的にも①楕円形区画文、②方形区画文、③横位波溝文の範疇で理解できる。

青森県下の「大木10式並行期」の固有の特色としては①口縁部の外反する深鉢B類が圧倒的に多い点、②地文上に文様意匠が描かれたままで、磨り消し部を持たない土器が見られる点、③楕円形区画文で「8」字状に2段重ねに構成されるものが見られる点、④押圧縄文の施される土器が見られる点をあげることができる。これらの類型は秋田・岩手両県北部においても確認される。また、④の押圧縄文については北海道南部との関連が考えられよう。

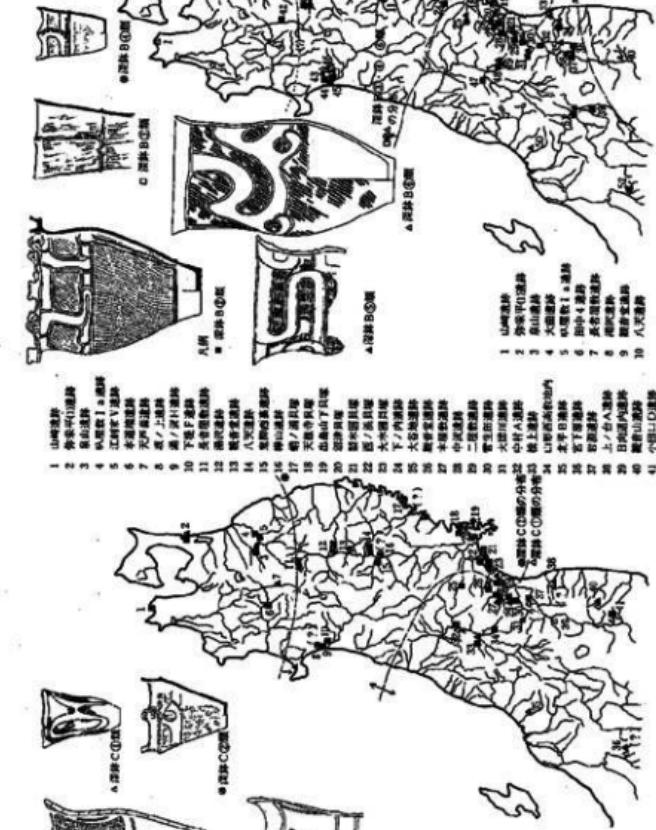
以上、大木10式後半期の東北地方の様相は、青森～秋田・岩手県北部の口縁部の外反する深鉢B類を主体とする地域、福島県南部の口縁部の内弯する深鉢C類を主体とする地域、及びその中間地帯に分けられる。秋田・岩手県中部から福島県北部に及ぶ中間地帯は土器文様としては、①秋田県～岩手県中部～宮城県北東部及び②宮城県南西部～山形県～福島県北部に大きく2分され、各々その北部あるいは南部の土器様式との深い関連が窺われる。

このような様相は縄文時代後期初頭においても基本的には変わらず、東北地方北部が外反形深鉢を主体とし、東北地方南部あるいは南部以南においては内弯形深鉢を主体とし、その中間地帯が双方の深鉢形土器から成り立っている。また、中間地帯の土器文様は南部の「向畑（菅生田）一二屋敷第II群一二屋敷第III群」系列と北部の「青木畑・大谷地・金取（南境B）～南境C」系列に分けられ（加藤・阿部ほか；1984）、大木10式の地域圈のあり方を大筋で継承するものである。

A圖



a. 構造区分圖



b. 方位区分圖・分析地図文

第333回 大栗川第1期の地域性

- 11. 長崎河川魚類
- 12. 門田川魚類
- 13. 中淀川魚類
- 14. 出島川下流
- 15. 矢張川
- 16. 萩原川
- 17. 鮎木川
- 18. 西ノ浜川
- 19. 大木屋川
- 20. 下ノ内河
- 21. 井出川
- 22. 月出川等
- 23. 青島川等
- 24. 鶴次川
- 25. 小谷治川
- 26. 鮎谷川
- 27. 鮎谷川上流部
- 28. 二瀬川
- 29. 早川
- 30. 佐野川
- 31. 大淀川
- 32. 鮎谷川
- 33. 男見川
- 34. 上ノ谷川
- 35. 氷川
- 36. 氷川上流部
- 37. 四日十川
- 38. 氷川中流部
- 39. 十五瀬川
- 40. 小田口川
- 41. 千波湖
- 42. 天ヶ瀬川
- 43. 海ノ元川
- 44. 下日日川
- 45. 大田代川
- 46. 新ノ上川
- 47. 丹波川
- 48. ノ前川
- 49. 山形川
- 50. 北平川
- 51. 丹波川
- 52. 丹波川

外反形深鉢と内弯形深鉢の東日本における南北間の対置的構造は、縄文時代後期中葉の加曾利B=宝ヶ峯式の成立をもって完全に解消する。縄文時代晚期には、器形や文様にみられる地域性に代わって粗製土器地文の分布状況にほぼ同様の地域圈が残存することが指摘（佐藤；1985）されており、指標を変えながらも本稿で検討を重ねて来た地域圈は継承されてゆくものと考えられる。

※小 結

1. 大梁川第1層土器の地域性は①青森県～秋田・岩手県北部、②秋田・岩手県中部～宮城県北東部、③宮城県南西部～山形県～福島・新潟県北部、④福島・新潟県南部に大別される。
2. 深鉢形土器の器形は、青森～秋田・岩手県北部が外反形深鉢を主体とし、福島・新潟県南部が内弯形深鉢を主体とし、その中间地帯は双方の器形から成り立っている。このような外反形深鉢と内弯形深鉢の東日本の南北間における対置的構造は、縄文時代中期の円筒～「ボストン筒」一大木～加曾利文化の展開において一貫して認められ、縄文時代後期中葉加曾利B=宝ヶ峯式の成立において完全に解消する。

C. 土器群の組成と用途について

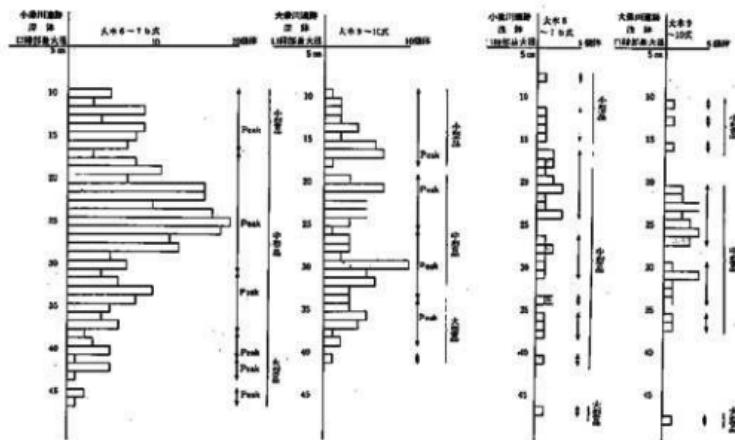
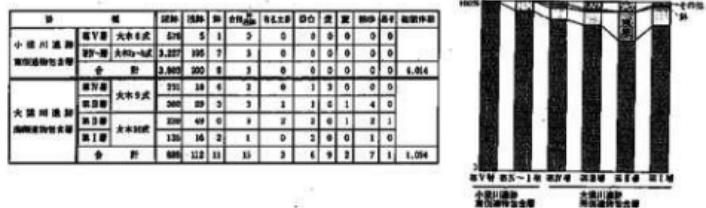
大梁川遺跡は遺跡全体の発掘調査が行われてはいないので、土器の総個体数や組成のすべてが明らかにされたわけではない。ここでは大木6～7b式の小梁川遺跡東側遺物包含層出土土器（相原ほか；1986）と大木9～10式の本遺跡南側遺物包含層出土土器との概略的な比較を行いたい。

大梁川遺跡南側遺物包含層出土土器の総個体数は1,054点である。その内訳は深鉢形土器888点(84.2%)、浅鉢形土器112点(10.6%)、鉢形土器11点(1.0%)、台付鉢形土器15点(1.4%)、有孔土器3点(0.3%)、器台形土器6点(0.6%)、壺形土器9点(0.9%)、蓋形土器2点(0.2%)、袖珍土器7点(0.7%)、吊手土器1点(0.1%)である。

小梁川遺跡東側遺物包含層出土土器の総個体数は4,014点である。その内訳は深鉢形土器3,803点(94.7%)、浅鉢形土器200点(5.0%)、鉢形土器8点(0.2%)、台付浅鉢形土器3点(0.1%)である。

① 大梁川遺跡では、有孔土器・器台形土器・壺形土器・蓋形土器・袖珍土器・吊手土器が新たな器種として確認される。ただし、量的にはすべて加算しても2.8%に過ぎず、依然として主体を占めるのは深鉢・浅鉢形土器である。

② 深鉢形土器の口縁部最大径は大梁川遺跡では10～41cm、小梁川遺跡では10～46cmと、



第334図 小梁川遺跡と大梁川遺跡の器種組成

小梁川遺跡の方が大型品のレンジが広い。小型品の口縁部最大径は大梁川遺跡では10~18 cm、小梁川遺跡では10~17 cm、小さ目の中型品は大梁川遺跡では20~26 cm、小梁川遺跡では17~31 cm。大き目の中型品は大梁川遺跡では26~34 cm、小梁川遺跡では31~38 cmと、小型品のレンジはほぼ同様なのに対し、中型品については小梁川遺跡のレンジそのものが広い。ただし、量的には小梁川遺跡では小さ目の中型品が多く、大梁川遺跡では大き目の中型品が多い。深鉢形土器は小梁川遺跡・大梁川遺跡ともに底部を欠失するものが圧倒的に多く、使用過程において“底ヌケ”を起こして廃棄された可能性が強い。炭化物付着状況については、全体的にくすんだ感じに吸着されているもの、煤状を呈するもの、縄文の節部分に薄くこびりつくものが認められるが、あまり明瞭なものはない。

③ 浅鉢形土器の口縁部最大径は大梁川遺跡では11~48cm、小梁川遺跡では8~47cmとほぼ同じで、大型品・中型品・小型品の分布状況もあまり変化が見られない。

炭化物付着状況については小梁川遺跡では深鉢形土器とあまり変わらず明瞭なものはほとんど認められなかつた。大梁川遺跡では厚く膜状に付着するものが特に注口の付される中型品に多く見られ(写真図版第59図)、大梁川遺跡の浅鉢形土器がカニ状の食品の調理用具として機能分化してきたことを示すものと思われる。ただし、このような浅鉢形土器の量的ピークは大梁川第Ⅱ層期(大木10式前半期)で、以後減少に転じている。これは中期においては注口付の浅鉢形土器が土鍋的用途を持つものに対し、後期においては土鍋的用途のほかに、非煮沸の土瓶的用途に一段と機能分化を深めており、大梁川第Ⅰ層土器がこのようない過渡的段階にあるのと無関係ではないものと思われる。

④ 鉢形土器は、小梁川遺跡・大梁川遺跡第Ⅳ~Ⅲ層期(大木9式期)ともに稀少性・朱彩率の高さから、非日用品の可能性が高い。大梁川第Ⅰ層期(大木10式後半期)の鉢B類については、炭化物付着の状況から浅鉢形土器から新たに分化したものと考えられる。

⑤ 小梁川遺跡の台付浅鉢も鉢形土器と同様に稀少性・朱彩率の高さから非日用品の可能性が考えられた。大梁川遺跡の台付鉢は胴下部~台部に二次的な加熱の痕跡が残っており、煮沸用と思われる。器台形土器も炭化物付着状況・二次加熱の痕跡から、浅鉢形土器の煮沸時の台と考えるのが妥当と思われる。

⑥ 壺形土器は大梁川第Ⅳ~Ⅲ層期(大木9式期)に限って認められる。すべて小型品で朱彩の施されるものが多く、非日用品の可能性が高い。なお、縄文時代後期の壺形土器は縦位2個1対の紐掛け状突起を持つものが多く、大梁川遺跡第Ⅲ~Ⅰ層期(大木9式後半~10式期)の深鉢D類の系譜を連なるものである。

以上のように、縄文時代前期末葉から中期末葉にかけての器種分化は、非日用品の領野を主体とするものと考えられる。日用の浅鉢・深鉢類の分化傾向は大木10式後半期の大梁川第Ⅰ層期に顕在化している。

2. 石器

A. 器種分類

大梁川遺跡には縄文時代中期後葉から後期前葉の時期の遺物がある。これらは時期的に連続し、共通する器種も多い。したがって共通した分類を設定して記述する（第335図～第337図）。

剥片を除いた石器群から以下のような順序で各器種を抽出し、分類を行った。①石鎌、尖頭器、石錐、石匙、箇状石器、磨製石斧。②磨凹敲石類、石皿、石棒。③石核、両極剥離痕のある石器、石製品。④残った石器群から一定形態を志向していると考えられる石器を抽出し、不定形石器Ⅰ類を設定した。⑤さらに残った石器群から特定刃部の形状を志向していると考えられる石器を抽出し、不定形石器Ⅱ類を設定した。⑥以上の抽出から残った顕著な二次加工を有しない剥片石器を「二次加工のある剥片」として一括した。

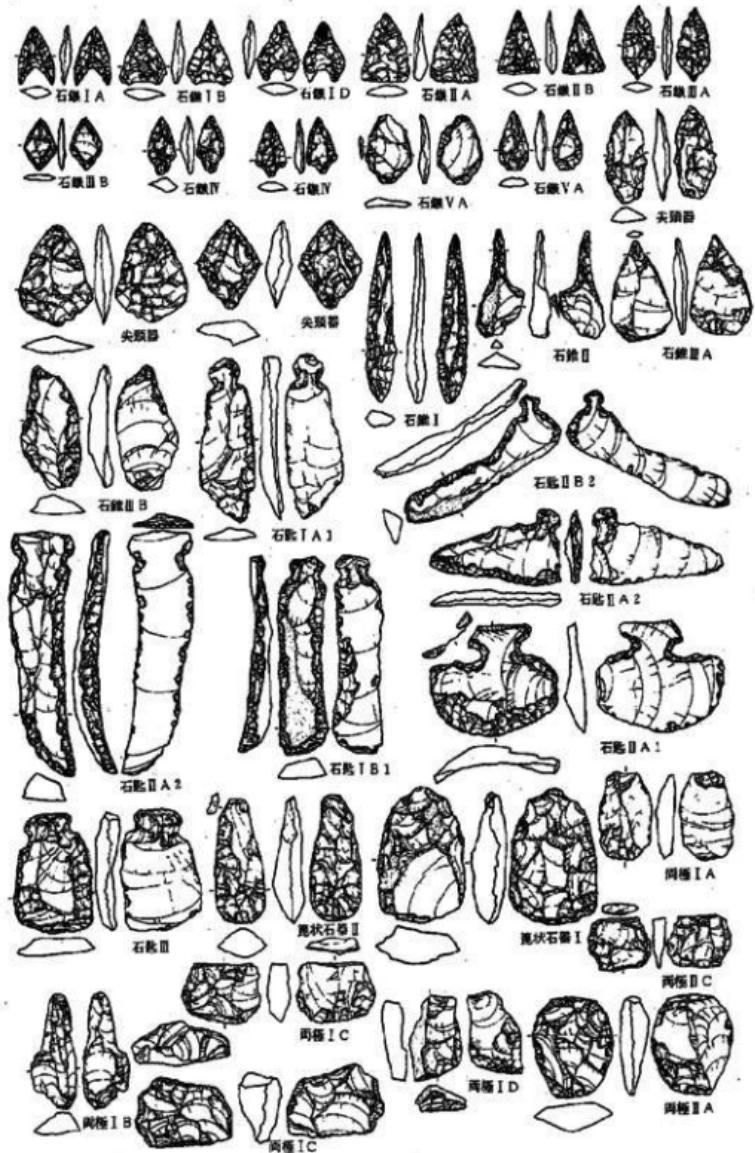
(A) 定形的な剥片石器、石核、両極剥離痕のある石器

石鎌 偏平、左右対称で原則として基部に「返り」を有する小形の尖頭部作出石器を石鎌とする。基部形態と側辺の形態とによって主として分類した。基部形態については凹基（I類）、平基（II類）、凸基（III類、IV類、V類）とがある。凸基のうちIII類は二側辺と基部が連続的で、全体形が菱形を呈する種類である。IV類は二側辺から基部が明瞭に変化する種類でいわゆる「有茎石鎌」である。III、IV類以外の丸凸基の石鎌をV類とする。VI類は以上の分類に適合しないものとする。側辺形態には外弯（A類）、直線（B類）、内弯（C類）、および尖頭部付近で内弯し基部付近で外弯する（D類）とがある。

尖頭器 原則として偏平、左右対称の尖頭部作出石器を尖頭器とする。細分は行わない。

石錐 棒状の尖端部を有する石器で、石鎌、尖頭器に含まれない器種を石錐とする。つまみ部が無く、棒状の種類（I類）、つまみ部と錐部とからなる種類（II類）、つまみ部と錐部との区分が不明瞭な種類（III類）とがある。III類は全体形が尖頭器状の種類（A類）とA類以外で不整形な種類（B類）とに細分される。

石匙 原則として両側辺からノッチを入れることによって作出されたつまみ部を有する石器で、かつ刃部と判断できる形状の縁辺部（身部）を有する器種を石匙とする。つまみ部を上にした場合、身部が縦長になる種類（I類）、横長になる種類（II類）、I・II類の中間形態の種類（III類）に大別する。I類の身部の形状は二縁辺構成（A類）と三縁辺構成（B類）があり、つまみ部が一般的な大きさの種類を1類、大きな種類を2類とする。II類はつまみ部の対辺の刃部が水平な種類をA類、斜交する種類をB類とする。また、つまみ部が刃部の中央にある種類（1類）とつまみ部が刃部の一端にある種類（2類）とがある。IV類は不定形の身部を



第335圖 石器器種分類圖 (1) $S = \frac{1}{4}$

有するものを一括する。

鎌状石器 平面形が撥形あるいは短冊形で一端に刃部を作出する器種を鎌状石器とする。厚みがあり、片面加工が多く、側辺の二次加工がステップ状の不整な種類をⅠ類、やや薄手で、両面加工が多く、側辺の二次加工が連続する種類をⅡ類とする。Ⅲ類は加工が粗雑で不整な種類を一括する。

磨製石斧 大形の種類(Ⅰ類)と小形の種類(Ⅲ類)とがある。Ⅰ類はやや厚手で断面形が梢円形の種類(Ⅰ類)とやや偏平で側面と正面との間に稜線の通る種類(Ⅱ類)とに細分する。

両極剥離痕のある石器 両極剥離痕の対数と刃部の形状によって以下のように分類する。両端に一对の両極剥離痕を有する種類をⅠ類、明確な複数対の両極剥離痕を有する種類をⅡ類とする。刃部の形状としては、対となる線状の刃部を有する種類(Ⅰ類)、線状の刃部を1ヶ所に有するが、反対側は点状もしくは潰れた状態(両極剥離以後の折れ面を含む)となる種類(Ⅱ類)、両極剥離以前の平坦面を一端に有する種類(Ⅲ類)、両端に両極剥離以前の平坦面を有する種類(Ⅳ類)がある。実際には以上の分類の組み合わせとなる。

石核 剥離作業面の数とそれらによる形態によって以下の様に分類する(後藤秀一; 1979b)。Ⅰ類; 剥離作業面が一面で、それに対し複数の打面が任意に作出される。長方体を呈する。Ⅱ類; 剥離作業面が表裏両面だけに設定され、その剥離作業面に対して求心的に石核の周辺から任意に剥片生産を進める。円盤状またはチョッピングツール状を呈する。Ⅲ類; 剥離作業面が二面以上設定され、その剥離作業面に対し、任意に複数の打面を作出し、剥片生産を進める。立方体または多面体を呈する。

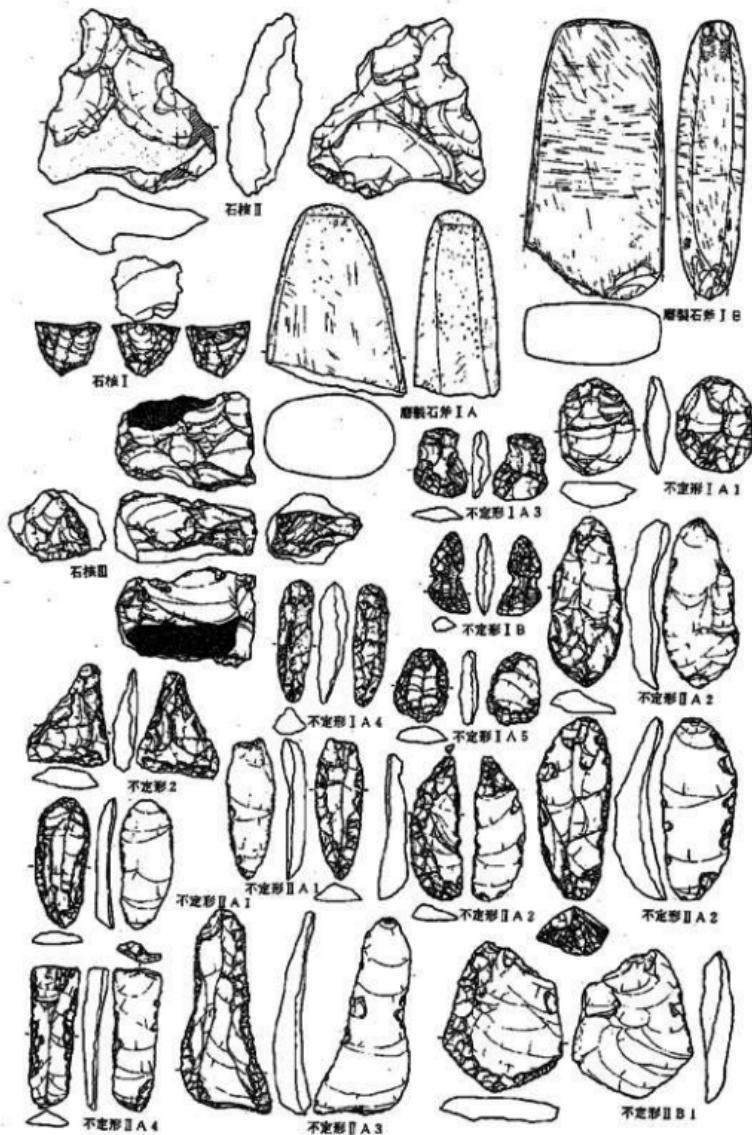
(B) 不定形石器

不定形石器は2種類に大別される。不定形石器Ⅰ類は二次加工が全周に及び、素材の形態を大きく変化させ、刃部以外にも一定の形態的まとまりを志向する不定形石器である。不定形石器Ⅱ類は素材の形態を余り変化させず、部分的な二次加工によって必要とする特定の刃部を作出する不定形石器である。大梁川遺跡では不定形石器Ⅰ類は極めて少ない。以下細分類について説明する。

不定形石器ⅠA類 両面加工で全体形が整形される種類である。全体形によって梢円形(1類)、三角形(2類)、台形(3類)、厚手の棒状(4類)、1類より小形で円形または半円形を呈する種類(5類)に細分される。

不定形石器ⅠB類 いわゆる両尖匕首である。

不定形石器ⅡA類 スクレイバーエッジを有する石器で、ネガティブバルブの発達しない器体に沿って奥まで入る連続した二次加工の刃部を有し、顕著な縦長の形態を呈する。以下のように細分される。



第336図 石器器種分類図 (2) S=½

- II A₁類：両側刃加工で素材の一端に尖端部が作出される種類。
- II A₂類：スクレイバーエッジで素材の一端に強い丸凸刃が作出される種類。いわゆる「エンドスクレイバー」である。
- II A₃類：両側刃加工のスクレイバーで、素材の長軸の二側刃が丸凸刃と直または凹刃とで交差し、長軸と斜交する尖端部が作出される種類。
- II A₄類：素材の先端に加工が無く、長軸の1～2側刃に加工が集中する種類。いわゆる「サイドスクレイバー」である。

不定形石器II B類 スクレイバーエッジを有する石器で、ネガティブバルブの発達しない器體に沿って奥まではいる連続した二次加工の刃部を有し、顕著な縦長の形態を呈さない。以下のように細分される。

- II B₁類：尖端部が形成され、二次加工がほぼ全周に及ぶ種類。
- II B₂類：尖端部が形成され、二次加工が尖端部に集中する種類。
- II B₃類：長軸の一端に強い丸凸刃を作出する種類。広義の「エンドスクレイバー」である。
- II B₄類：弱い凸刃を作出する種類。
- II B₅類：それ以外の粗雑なスクレイバーエッジを有する種類を一括する。

不定形石器II C類 尖端部が作出される種類である。折断面が直接的に尖端部作出に関与する種類をII C₁類とし、それ以外で二次加工がほぼ全周に及ぶ種類をII C₂類、尖端部に集中する種類をII C₃類とする。

不定形石器II D類 不定形石器II C₁類、II K₁類以外で折断面を打面として連続的な剥離が行われる種類である。この二次加工部位が機能刃部とは考えられず、複数の種類を含んでいると推定される。打断面からの剥離以外に顕著な二次加工が無い種類を1類、両極剥離痕のある石器II D類の破損品または両極剥離痕が関係している可能性がある種類を2類とする。

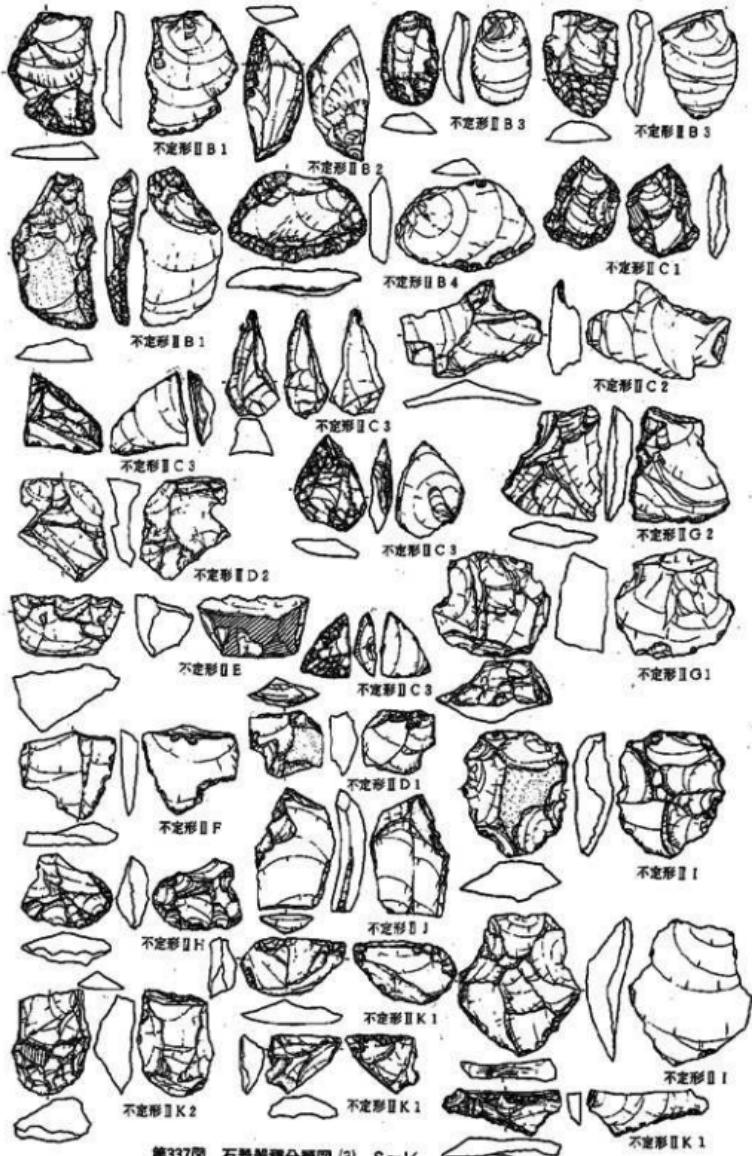
不定形石器II E類 折断面以外の平坦面または節理面を打面として連続的な二次加工が行われる小形の種類である。

不定形石器II F類 ノッチ状の二次加工を有し、尖端部が作出されない。いわゆる「ノッチ」である。

不定形石器II G類 正面観が特に鋸歯状の刃部を有する。いわゆる「デンティキュレイト」である。ネガティブバルブが発達する急角度の二次加工を有する種類(II G₁類)、とそれ以外の種類(II G₂類)とがある。

不定形石器II H類 厚手の素材にやや急角度で奥まで入る加工を間隔をおいて連続的に施し、立面観が鋸歯状となる刃部を有する。いわゆる「交互剥離状石器」の一種である。

不定形石器II I類 素材の打面部付近を背腹両面からやや奥まで入る不整な二次加工で除去



第337圖 石器岩種分類圖 (3) S-1

し、素材の鋭い縁辺に小剥離や微細剥離痕などの使用痕がある。二次加工部位は锯歯状を呈するが、「刃潰し」または着柄のための加工と考えられる。機能部位は使用痕のある鋭い縁辺部で、「ナイフ状石器」または「バットブレード」の一種に相当する。

不定形石器IIJ類 拐断面を打面とする槌状剥離を有する種類である。いわゆる「彫刻刀形石器」である。

不定形石器IJK類 素材の一または二側辺を折断し、台形または三角形に整形される。先端の縁辺に刃部が作出される。いわゆる「折断調整石器」(岡村道雄; 1979b) である。拐断面を打面とし、素材の背面または腹面に連続的な基部加工(?)がある種類を1類、それ以外を2類とする。1類については岡村(1979)の「折断調整石器」の定義には適合しない。

(C) 磨凹敲石類

磨凹敲石類に見られる使用痕は、磨面(線条痕が伴う例がある)、凹部、敲打痕(剥離痕を含む)などに分類される。敲打痕はさらに平坦面を形成しない敲打痕(敲打痕1)と平坦面(敲打面)を形成する敲打痕(敲打痕2)とに分類される。敲打痕2は柴田郡川崎町中ノ内A遺跡(古川一明他; 1987)で磨面2、刈田郡七ヶ宿町小梁川遺跡(本所所収pp. 748)では「ザラ面」と称されていたものであるがこれらは硬質で平坦な台石の上での被加工物などの粉碎などによって形成されると考えられ、敲打痕の一種で、平面を形成する種類であると考えるに至った。

これらの石器は使用痕によって分類される石器で、ほとんど加工されることではなく、素材の選択の段階で形態が規定され、使用によってその属性が変移する。したがって、特殊な形態として大形磨石を設定し、他は使用痕の種類の組み合わせによって、磨石、磨凹石、磨凹敲石I類(敲打痕1のみを有する)、磨凹敲石II類(敲打痕2を有する)、磨敲石I類(敲打痕1のみを有する)、磨敲石II類(敲打痕2を有する)に分類し、属性による分類は考察で行う。

(D) 石皿

石皿は大形の種類(1類)と小形の種類(2類)とに分類する。小形の種類は有脚の種類が多い。これに対し、大形の種類は脚部が無い。

(E) 石棒

石柱状の石棒である。

(F) 石製品

今までの分類にあてはまらない種類を石製品とする。垂飾品、石刀、円盤状石製品など雑多な種類を含む。

第4表 各器種の分類と組成

| 分類 | IA | IB | IC | ID | IIA | IIIB | IIIC | IID | IIIA | IIIB | IIIC | IID | VA | VB | VI | 合計 |
|----|----|----|----|----|-----|------|------|-----|------|------|------|-----|----|----|----|-----|
| W | 2 | 9 | 9 | 0 | 1 | 2 | 0 | 0 | 2 | 4 | 2 | 1 | 9 | 1 | 0 | 15 |
| Ⅲ | 1 | 3 | 9 | 0 | 2 | 3 | 6 | 6 | 0 | 7 | 6 | 9 | 1 | 1 | 2 | 20 |
| Ⅳ | 1 | 2 | 8 | 0 | 2 | 3 | 1 | 8 | 1 | 3 | 6 | 4 | 0 | 1 | 1 | 19 |
| Ⅴ | 1 | 0 | 1 | 9 | 0 | 2 | 2 | 0 | 0 | 9 | 1 | 8 | 0 | 0 | 0 | 6 |
| 不明 | 0 | 1 | 1 | 0 | 2 | 1 | 6 | 0 | 9 | 1 | 0 | 0 | 1 | 2 | 1 | 9 |
| Ⅵ | 1 | 1 | 6 | 3 | 3 | 1 | 0 | 0 | 9 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 8 |
| Ⅶ | 2 | 10 | 2 | 3 | 2 | 12 | 2 | 2 | 3 | 4 | 6 | 0 | 1 | 1 | 3 | 35 |
| 合計 | 12 | 24 | 2 | 6 | 13 | 24 | 4 | 1 | 4 | 23 | 2 | 1 | 3 | 6 | 7 | 138 |

④-1 石鏃の分類と組成



| 分類 | I | II | III | IV | 合計 |
|----|----|----|-----|----|----|
| W | 3 | | | | 3 |
| Ⅲ | 7 | | | | 7 |
| Ⅳ | 2 | | | | 2 |
| Ⅴ | 2 | | | | 2 |
| 不明 | 9 | | | | 9 |
| Ⅵ | 5 | | | | 5 |
| Ⅶ | 5 | | | | 5 |
| 合計 | 20 | | | | 20 |

| 分類 | I | II | III | 合計 |
|----|---|----|-----|----|
| Ⅲ | 6 | 0 | 0 | 6 |
| Ⅳ | 7 | 1 | 1 | 9 |
| Ⅴ | 2 | 1 | 1 | 4 |
| Ⅵ | 2 | 0 | 0 | 2 |
| 不明 | 1 | 3 | 1 | 5 |
| Ⅶ | 1 | 0 | 0 | 1 |
| Ⅷ | 2 | 2 | 2 | 6 |
| 合計 | 7 | 14 | 17 | 42 |

④-2 尖頭器の組成

④-3 石鏃の分類と組成

| 分類 | IA1 | IA2 | IB1 | IB2 | IIA1 | IIA2 | IIIB | IV | 合計 |
|----|-----|-----|-----|-----|------|------|------|----|----|
| W | 0 | 1 | 2 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 2 |
| Ⅲ | 9 | 3 | 6 | 0 | 1 | 3 | 1 | 1 | 13 |
| Ⅳ | 2 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 4 |
| Ⅴ | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 |
| 不明 | 9 | 9 | 2 | 0 | 0 | 0 | 2 | 1 | 21 |
| Ⅵ | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| Ⅶ | 2 | 0 | 1 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 5 |
| Ⅷ | 0 | 4 | 8 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | 24 |
| 合計 | 2 | 5 | 12 | 0 | 5 | 1 | 4 | 4 | 38 |

④-4 石匙の分類と組成

| 分類 | IA | IB | II | 合計 |
|----|----|----|----|----|
| W | 4 | 4 | 0 | 4 |
| Ⅲ | 9 | 5 | 0 | 9 |
| Ⅳ | 1 | 1 | 0 | 2 |
| Ⅴ | 0 | 1 | 1 | 2 |
| 不明 | 2 | 2 | 0 | 4 |
| Ⅵ | 0 | 0 | 1 | 1 |
| Ⅶ | 1 | 0 | 2 | 3 |
| 合計 | 4 | 10 | 4 | 27 |

④-5 磨製石斧の分類と組成

| 分類 | IA | IB | IC | ID | IIA | IIIB | IIIC | IID | 合計 |
|----|----|----|----|----|-----|------|------|-----|-----|
| W | 5 | 0 | 3 | 8 | 2 | 3 | 1 | 0 | 13 |
| Ⅲ | 14 | 1 | 2 | 1 | 2 | 1 | 0 | 0 | 20 |
| Ⅳ | 12 | 4 | 5 | 2 | 4 | 3 | 1 | 0 | 30 |
| Ⅴ | 1 | 0 | 0 | 2 | 1 | 3 | 1 | 1 | 6 |
| 不明 | 6 | 0 | 1 | 1 | 2 | 3 | 0 | 0 | 10 |
| Ⅵ | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 3 | 0 | 0 | 4 |
| Ⅶ | 17 | 1 | 0 | 1 | 2 | 3 | 2 | 1 | 22 |
| 合計 | 56 | 6 | 19 | 8 | 13 | 9 | 9 | 0 | 118 |

④-7 両極制動盤を有する石器の分類と組成

| 分類 | I | M | II | 合計 |
|----|---|----|----|----|
| W | 1 | 2 | 0 | 3 |
| Ⅲ | 1 | 4 | 3 | 8 |
| Ⅳ | 2 | 1 | 0 | 3 |
| Ⅴ | 1 | 2 | 0 | 3 |
| Ⅵ | 0 | 1 | 0 | 1 |
| Ⅶ | 0 | 2 | 0 | 2 |
| Ⅷ | 1 | 2 | 2 | 5 |
| 合計 | 7 | 15 | 0 | 22 |

④-8 石核の分類と組成

| 分類 | IA1 | IA2 | IA3 | IA4 | IA5 | IB | 合計 |
|----|-----|-----|-----|-----|-----|----|----|
| W | 1 | 1 | 0 | 1 | 2 | 4 | - |
| Ⅲ | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 2 | 2 |
| Ⅳ | 3 | 0 | 1 | 0 | 0 | 3 | 3 |
| Ⅴ | 1 | 1 | 0 | 0 | 1 | 2 | 4 |
| 不明 | 1 | 0 | 0 | 2 | 2 | 3 | 6 |
| Ⅵ | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 2 |
| Ⅶ | 1 | 1 | 0 | 2 | 2 | 4 | 10 |
| 合計 | 7 | 3 | 2 | 7 | 11 | 12 | 46 |

④-9 不定形石器 I 類の分類と組成

| 分類 | IA1 | IA2 | IA3 | IA4 | IA5 | IB1 | IB2 | IB3 | IB4 | IB5 | IB6 | 合計 |
|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| W | 2 | 2 | 0 | 1 | 9 | 5 | 2 | 1 | 2 | 8 | 9 | 36 |
| Ⅲ | 4 | 2 | 1 | 4 | 9 | 12 | 2 | 2 | 7 | 1 | 0 | 36 |
| Ⅳ | 7 | 3 | 2 | 1 | 15 | 2 | 2 | 4 | 2 | 3 | 16 | 54 |
| Ⅴ | 1 | 2 | 3 | 5 | 0 | 9 | 2 | 0 | 0 | 2 | 1 | 4 |
| 不明 | 4 | 2 | 3 | 0 | 9 | 7 | 4 | 2 | 1 | 6 | 1 | 37 |
| Ⅵ | 3 | 2 | 0 | 1 | 7 | 5 | 1 | 0 | 2 | 1 | 9 | 26 |
| Ⅶ | 6 | 0 | 1 | 3 | 14 | 2 | 2 | 4 | 3 | 8 | 22 | 55 |
| 合計 | 28 | 17 | 8 | 12 | 46 | 36 | 38 | 12 | 18 | 36 | 36 | 226 |

④-10 不定形石器 II A・II B 類の分類と組成

| 分類 | HCl | HCr | HCl | 合計 | HDH | HDQ | 合計 | HE | HF | HG1 | HG2 | 合計 | HH | HJ | HJ | HJ | HJ | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|----|-----|-----|----|----|----|-----|-----|----|----|----|----|----|----|----|
| I | 2 | 2 | 5 | 9 | 9 | 2 | 6 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 2 | 0 | 1 | 0 | 1 | |
| II | 2 | 1 | 7 | 10 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 2 | 3 | 2 | 0 | 2 | 2 | |
| III | 3 | 2 | 7 | 12 | 9 | 2 | 2 | 1 | 4 | 0 | 4 | 1 | 3 | 0 | 0 | 0 | 6 | |
| IV | 0 | 1 | 3 | 4 | 1 | 3 | 4 | 1 | 9' | 1 | 0 | 2 | 1 | 1 | 0 | 1 | 1 | |
| 不規 | 2 | 5 | 1 | 8 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 1 | 2 | 1 | 1 | 2 | 0 | 6 | |
| 固 | 1 | 0 | 4 | 5 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 1 | 0 | 1 | 2 | 2 | |
| 液 | 8 | 9 | 15 | 32 | 1 | 0 | 1 | 2 | 1 | 5 | 0 | 5 | 2 | 7 | 0 | 3 | 8 | |
| 合計 | 16 | 20 | 42 | 80 | 4 | 9 | 9 | 9 | 3 | 11 | 1 | 12 | 13 | 16 | 4 | 12 | 9 | 23 |

④-10 不定形II-C類～II-K類の分類と組成

B. 各器種の分析

1. 石 鐵

石鐵は140点出土し、定形・不定形石器(929点)の8.9%を占める(第352図)。そのうち完形を中心に128点を図化した。

石材は64%が珪質頁岩で、そのほか珪質凝灰岩(15%)、玉髓(13%)で、黒曜石は3点(2%)であった。

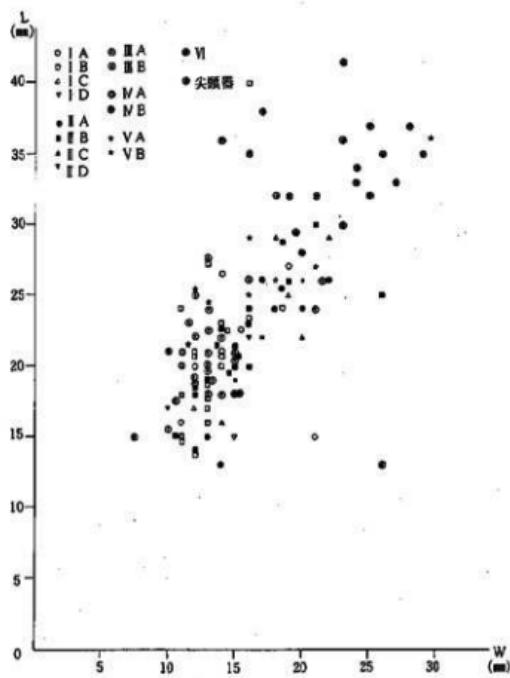
石鐵の長幅分布を338図に、長重分布を339図に示した。長幅分布では長さ13～40mm、幅8～26mmのなかにあるが、長さ13～25mm、幅10～16mmの範囲にある小形のものと長さ22～30mm、幅16～23mmの範囲にあるやや大形の2つまとまりが見られる。小形の方にはI・III類は90%、II類は60%、IV類は全てが含まれる。大形は小形に比べ少ないが、そのなかでII類の占める割合が高い。またV類は両方に分布する。長重分布も同様の傾向性がある。

素材の用い方については第5表に示した。素材の末端に尖頭部を作出する場合がやや多いが、形態との相関は見出し難い。ここで同様の検討を行っている小梁川遺跡(本書所収pp. 735)と比較すると、側辺が外弯するA類は素材の末端に尖頭部を作り、側辺が直線的になるB類は打面部に作出す傾向があり、当遺跡と素材の用い方に相違が認められる。また二次加工の前に折断を行なって石鐵の粗形を作出する例や二次加工が少なく素材の形状をよく残した例もある。したがって、製作する際の素材の用い方および二次加工には柔軟性があったと思われる(小川・村田; 1986)。

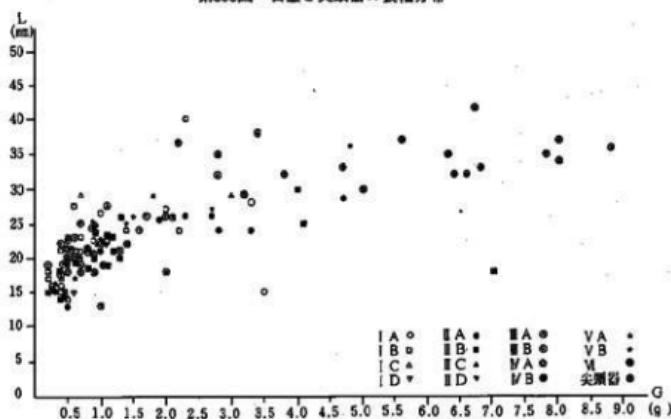
時期ごとの組成は以下のとおりである。大木9式期は35点でI類(17%)、II類(23%)、III類(37%)、IV・V類(各9%)、VI類(5%)となる。大木10式期は85点でI類(38%)、II類

第5表 石鐵の素材の用い方

| 分類 | I A | I B | I C | I D | II A | II B | II C | II D | II A | II B | II C | II D | II E | II F | II G | II H | II I | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|---------|------|---------|---------|
| 打面部 | 2 | 4 | 0 | 3 | 2 | 7 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 3 | 2 | 0 | 1 | 26 0262 |
| 側辺部 | 1 | 3 | 0 | 0 | 0 | 5 | 2 | 0 | 2 | 2 | 1 | 0 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 27 0350 |
| 底面部 | 4 | 7 | 0 | 1 | 4 | 6 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 4 | 3 | 39 0350 | | | |
| 本 頭 | 5 | 10 | 3 | 2 | 0 | 7 | 2 | 0 | 2 | 4 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 36 0276 | |



第338図 石器と尖頭器の長幅分布



第339図 石器の長重分布

(36%)、III類(13%)、V類(7%)、VI類(6%)となる。後期前葉は8点でI類が5点、II類が2点、III類が1点である。大木9式期ではI類とII類で40%を占め、III類も比率が高い。またIV類はこの時期にだけある。大木10式期はI類・II類で74%を占め、III類は減少する。以上のことから大木9式期と10式期とでは石鏃の組成に相違が認められるものの、I類・II類が主体を占め、III類がそれに次ぐ比率を占めることで共通する。

特徴的な形態としてはIA類中に基部付近で強く外弯する石鏃がある(第124図1、第142図1、第207図1、第232図1~3)。大木9式期は縦長であるのに対し、10式期では幅のある形状となる。この石鏃は遡って大木8b式期の川崎町中ノ内B遺跡(伊藤・須田; 1987)、大和町勝負沢遺跡(丹羽・阿部・小野寺; 1982)からも出土している。大梁川遺跡と比べて「えぐり」が深く、やや様相に差異が認められるものの大木8b~10式期にその存在が確認できた(伊藤・須田; 1987)。

III類は菱形を呈する。小形で薄く、長幅・長重分布では他の型式と比べてまとまる傾向がある。大梁川遺跡では大木9式期に高い比率を示し、大木10式期になって比率は低くなるが後期前葉まで継続する。類例は第354図、第13表に示したが、そのなかでも白石川水系に多く見られ、石鏃III類の分布の中心部的な様相を呈する。

後期前葉は出土量が少なく明確ではないが、そのなかで1D類がまとまって出土している。回基で側刃の上部が内弯し、下部が外弯する。基部の「えぐり」は深い。大木10式期の白石市菅生田遺跡(丹羽・阿部・小野寺; 1982)、川崎町中沢遺跡(後藤勝彦他; 1972)、後期前葉の藏王町二屋敷遺跡(加藤・阿部・小徳; 1984)、仙台市六反田遺跡(佐藤洋他; 1987)からも出土している。

2. 尖頭器

尖頭器は33点出土し、定形・不定形石器(929点)の3%を占める(第352図)。完形を中心的に20点を図化した。

形態は細長い第111図18、第124図21、第125図2、第201図11と幅のあるものに分けられる。幅のあるものは平基と凸基がある。また凸基のなかで第125図3、第182図21は菱形を呈する。

長幅分布を第338図に、長重分布を第339図に示した。長さは28~41mm、幅は14~29mmの範囲にあり、小形である。また厚さに関しては、細長い形態は平均5.8mmと薄手であるのに対し、幅のある形態は平均8.9mmとやや厚手になる傾向を示す。

加工状況は全面加工が第232図16で、両面が周辺部加工されたものは6点あり凸基に多い。その他は素材面を残す半両面加工である。

3. 石錐

石錐は47点である。形態としては棒状になる種類（I類）と錐部とつまみ部の境が明瞭な種類（II類）があり、それ以外をIII類とし、尖頭器状を呈する種類（III A類）と二次加工が尖端部に集中し素材の形態を多く残す種類（III B類）とがある。I類は7点（15%）、II類は14点（30%）、III類は26点（55%）になる。

石材は珪質頁岩が42点（89%）と大部分を占め、他に玉髓が3点、珪化凝灰岩が2点である。

長幅分布を第340図に示した。長さは19~64mm、幅は9~33mmの範囲にある。I類は幅は10mm前後にあるが、長さは31~64mmと開きがある。II類は長さによって24~29mmと34~43mmとの2つのまとまりがある。III A類も長さによって19~30mmと38~45mmとの2つのまとまりが見られる。

素材の用い方として錐部が素材の末端部に作られる場合が全体の55%であった。細長い錐部を作出する際、加工を簡略にするために幅の狭い末端部を選択したものと思われる。次いで打面側に作られた例が28%、側辺と末端の交点に作出している例が14%である。

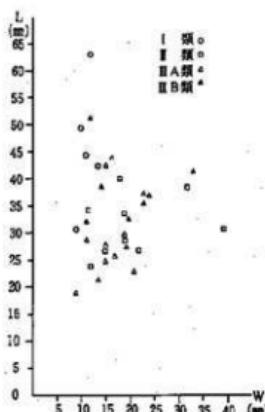
また折断面が錐部作出に関与している例が3点ある。第111図20は素材の打面部、第125図10は末端部を折断し側辺との交点に錐部を作出している。第280図11は全面加工のため折断面の確認しかできなかった。これらは折断によって錐部の粗形を作出し、加工の簡略化を行ったと考える。

破損部位はほとんどが錐部で分類別ではI類は7点中3点、II類は14点中5点、III類は26点中3点あり、錐状尖端部が長いI・II類に破損しやすい傾向がある。

4. 石匙

大槻川遺跡の石匙の特徴は形態・素材（縦長剥片の有無）・つまみ部の作出位置の三つの要素が関係して、つまみ部の作出に折断面が関与する種類が類型化される点である。

組成 石匙は全体で54点出土し、39点が図化されている。中期の時期の包含層と遺構とから出土した38点の石匙の組成はIA類が3点、IA₂類が5点、IB₁類が11点、IB₂類が1点、IIA類が6点、IIB類が4点、III類が6点である。形態と二次加工の特徴から前期初頭と考えられる



第340図 石匙の長幅分布

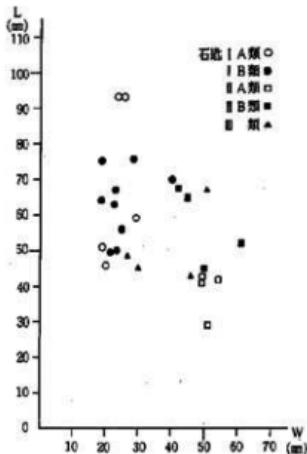
2点（第126図1、第167図2）については集計から除外する。

形態 第341図に石匙の長幅比のグラフを示す。I類は縦長の形態の種類でまとまるが、II B類は対辺が斜交する種類でII A類に比較して縦長となり、I・III類との区別が不明瞭となつてゐる。しかし、II B類は縦長剥片を素材として横長の形を維持するために、つまみ部を側辺との交点や末端部に作出する点などII A類との関係が深い。

素材 縦長剥片の使用率を示す。I類は100%、II A類が50%、II B類が75%、III類は0%となる。横長の形態を呈するII類にも縦長剥片を使用する比率が高い点が注目される（第6表）。

つまみ部作出位置 石匙の形態を決定するつまみ部の作出位置については以下の点を指摘できる。I類では打点部に作出される例が多く、II類では打点部を避けて作出される例が多い。III類については打点部に作出される例と、打点部以外に作出される例が相半ばする（第6表）。

折断面 個々の石器の説明でも述べたつまみ部作出の位置とそれに関与する折断面の効果について以下の点が指摘できる。つまみ部が打点側に作出されるI類



第341図 石匙の長幅分布

第6表 石匙のつまみ部作出位置

| 分類 | I A1類 | I A2類 | I B1類 | I B2類 | II A類 | II B類 | III類 | 総 |
|------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|----|
| つまみ部作出位置 | 縦長 | 横長 | 縦長 | 横長 | 縦長 | 横長 | 縦長 | 横長 |
| 打点部 | 3 | 0 | 2 | 0 | 9 | 0 | 0 | 0 |
| 末端部 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 |
| 打点部と側辺との交点 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 側辺部 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 折断面なし | | | | | | | | |
| 打点部 | 0 | 0 | 3 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 |
| 末端部 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 打点部と側辺との交点 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 |
| 側辺部 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 |
| 合計 | 3 | 0 | 5 | 0 | 11 | 0 | 1 | 36 |
| | ↑ | ↓ | ↑ | ↑ | ↑ | ↑ | ↑ | |
| A | B | C | D | E | F | G | H | |

ではつまみ部が大きい I A₂, I B₂ 類に打面部が折断されている例が多い。II 類ではつまみ作出の場所に関係なく、折断が見られる。III 類では打面部以外に作出される例が多い(第6表)。この理由としては II, III 類については、縦長剥片を使用し横長の形態を作るためには、つまみ部を打面以外の場所に作出しなければならない。しかし側辺や末端は幅が広くノッチ状の加工だけではつまみ部を作出することは困難である。このような部位は素材厚が薄いので折断を利用してつまみ作出部位の幅を狭め、ノッチ状の加工を簡素化したのである。明確ではないが、I 類のつまみが大きい種類に見られる打面部の折断は加工しにくいため打面部の肥厚部分を避けるためではなかったかと推測される。折断面が関与する種類と、折断面が見られない種類とでは形態に差は認められない。つまり折断技術という新しい技術を使って新しい型式を作るのではなく素材の形態に即して折断技術の採否がかなり柔軟に決定されるのである。

二次加工 石匙の身部の二次加工の特徴について述べる。石匙の刃部はスクレイバーエッジとなるものが多い。両面加工を有するのは6点(16.7%)である。特に I 類は不定形石器 II A 類と同様の身部を有する例が多い。したがって大梁川遺跡の中後葉の石匙はつまみ部(携帯のための紐掛け突起)が付いたスクレイバーで、不定形石器 II A 類は後述するように着柄されたスクレイバーである。

まとめ 大梁川遺跡の中後葉の石匙の特徴をまとめると以下の諸点が指摘できる。

- (1) II, III 類ではつまみ部が打面部以外に作出される種類が多い。これはつまみ部にあまり力の悬らないような使われ方に石匙の用途が変化したためと考えられる。中期中葉以前と比較して、大梁川遺跡の II 類と III 類の一部のつまみ部は素材の薄い部分に作り出されていて華奢であり、着柄のための基部としての機能は果たせなかつたと考えられる。
- (2) 縦長剥片の安定的な供給が前提となって、石匙の素材に縦長剥片を使用する傾向が強い。特に横長の形態の種類でも縦長剥片を使用する例が多い点は注目すべきである。
- (3) (1), (2)で指摘した石匙の素材的、使用法的な変化に対応して縦長以外の石匙のつまみ部は破損しやすいが加工が容易な末端部や側辺に作出されるようになった。幅の広い部分にノッチを作出する必要性と素材厚が薄く加工が容易である有効性から折断技術がつまみ部の作出に関与するようになったと考えられるが、折断技術の採否は素材の形態に応じてかなり柔軟に行われている。
- (4) このような傾向は中期後葉の石匙全体の変化であったと考えられるが、厚手のつまみ部が打面側に作出される I 類・一部の III 類とつまみ部が打面以外に作出される II 類・一部の III 類とは用途や着柄の有無などに関して差があった可能性も高い。
- (5) 石匙の身部の加工はほとんどがスクレイバーであり不定形石器 II A, II B 類との共通性が強い。

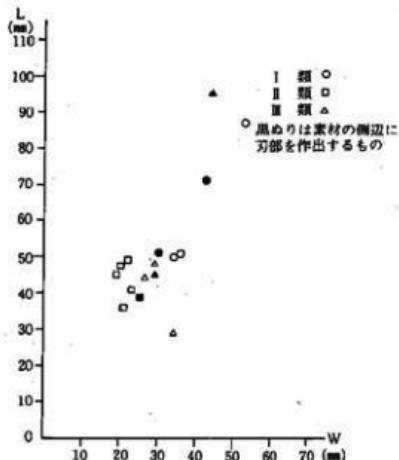
5. 篦状石器

箒状石器は18点出土し16点図化している。第342図の長幅のグラフからII類には大きさにまとまりがあることがわかる。それに対してI類、III類はあまりまとまりがなく大形の種類が多い。この大きさのまとまりはII類が両面加工の種類が多い点と関連がある。

次に使用されている素材の特徴について述べる(第7表)。箒状石器は素材剥片の末端に刃部を作出する例が多いが、横長の素材の側辺に刃部を作出する例や打面側を折断し側辺に刃部を作出する例もある。素材の側辺に刃部を作出する種類はI・III類の大形の種類に多い。スクレイバー状の刃部を持つことで共通する石匙や不定形石器II A類に縦長の剥片を利用する例が多いとの比較して特徴的である。これは前期前葉以来の箒状石器の素材利用の一貫した傾向である(小川・村田; 1986)。箒状石器の先端の刃部にはある程度の幅が必要とされていたと考える。

箒状石器の二次加工の状態を分類との関係で見ると、両面加工はII類に多く、I、III類は片面加工がやや多い(第8表)。このように先端の刃部も両面加工で小形の箒状石器は小梁川遺跡(本所所収 pp. 738)では中期前葉からすでに分化している。このような点から、I類とII類とは箒状石器のなかの型式差とするより別の器種とすべきかも知れない。

箒状石器は先端にスクレイバー状の刃部を持つ点で不定形石器II A類と類似するが、素材の利用法は異なる点が多い。したがって箒状石器の数が少ない理由を同様の刃部を持つ不定形石器II A類が補完したからであると単純に考えることはできないようと思われる。



第342図 篒状石器の長幅分布

第7表 篒状石器 素材の用い方

| 分類 | A | B | C | D | 不明 | 合計 |
|------|---|---|----|---|----|----|
| I類 | 3 | 0 | 1 | 1 | 0 | 5 |
| II類 | 3 | 2 | -1 | 0 | 1 | 7 |
| III類 | 1 | 0 | 1 | 1 | 1 | 4 |

第8表 篒状石器の加工状態

| | I類 | II類 | III類 | 計 |
|--------|----|-----|------|----|
| 側辺片面加工 | 3 | 0 | 1 | 4 |
| 側辺両面加工 | 2 | 8 | 2 | 12 |
| 刃部片面加工 | 3 | 0 | 2 | 5 |
| 刃部両面加工 | 2 | 8 | 1 | 11 |

6. 両極剥離痕のある石器

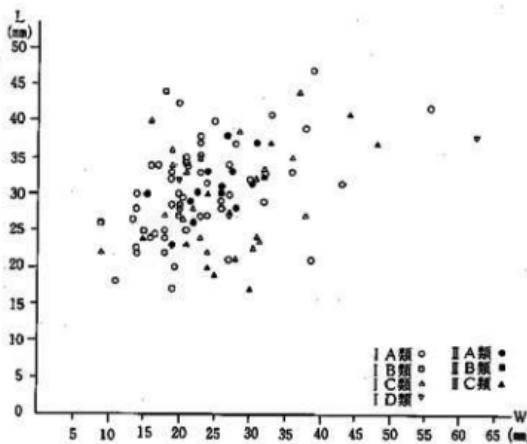
両極剥離痕のある石器は147点出土し、定形・不定形石器（929点）の12.6%を占める（第352図）。そのうち完形を中心に112点を図化した。

両極剥離痕が一对のI類は88点（79%）ある。I類のなかでは両端に線状の刃部を有するIA類が56点と多い。両極剥離痕が複数のII類のうち、三対の刃部を有する第233図8以外は全て二対である。II類は24点（21%）で、線状の刃部を有するIIA類（13点）と一端が平坦面となるIIC類（9点）が多い。

石材は光沢があり緻密で硬質のものが用いられる。全体の62%が珪質頁岩で過半数を占め、次いで珪化燧天岩が22%、玉髓が10%である。

長幅分布は第343図に示した。長さ17~47mm、幅9~62mmの範囲に納まるが、特に長さ22~38mm、幅14~32mmの範囲に集中する。I類とII類を比べた場合、I類の方がやや縦長気味になる。この他に第145図4、第158図17、第202図4は長さ55~64mm、幅40~45mmと、他と比較して極めて大きい。

これらの石器のうち両極剥離以前の二次加工が見られるものがある。その中の既存の石器の破損品を用いて両極剥離が行なわれたと明確に判明するものは13点（11.6%）ある。なお小梁川遺跡（本書所収pp.739）ではこのような石器をIE類として分類したが、2点（4.6%）と少ない値であった。大梁川遺跡ではスクレイバー等の石器が破損した後、これを再利用して両極剥



第343図 両極剥離痕のある石器の長幅分布

離を行なう頻度が高かったと思われる。

このような両極剥離痕のある石器はピエス・エスキューとして取り上げられている（岡村道雄：1976、阿部朝衛：1979）。しかしその特徴にあてはまらないものがある。それは一端もしくは両端が平坦面となるC類とD類で、合計37点が出土し全体の3割になる。A類と長幅を比較しても差異は認められなかった。現段階ではピエス・エスキューに新しく含まれるものなのか、または全く別の用途に用いられたものなのか、その性格については不明である（山田晃弘：1984）。なお刃部の一端が点状になるB類は使用等による破損であろう。

7. 磨製石斧

磨製石斧は27点である。大形が23点と多く、小形は4点であった。大形の断面形状は分厚く楕円形を呈するもの（IA類）と偏平で稜が見られるもの（IB類）とがあり、IA類が4点、IB類が19点ある。

素材を窺い知る資料はなかったが、剥離一敲打一研磨の製作過程がなされている。また小形の第215図11に擦り切り痕が見られる。

大形の完形品は2点あり、残りの21点は破損している。破損の位置は基部付近が6点、体部中央が7点、刃部付近が3点である。また基部と刃部付近の2ヶ所破損しているのが4点あった。破損面はその多くが体部主面に対して直角に近い角度で破損している。このように基部付近と体部中央が非常に多く、これらは着柄部からの破損と思われる（岡村道雄：1979a、笠原・茂木：1986）。

小形は4点全てが破損している。破損位置は基部付近が1点、体部中央が2点、刃部が1点で、破損状況は大形との違いはない。

石斧のほとんどは刃部に「歯こぼれ」が見られ、再び研磨して繰り返し使用している。また3点の刃部に使用による線条痕が観察できた。第128図11、第235図2は刃部に対し線条痕が斜走し、また片減りも見られる。第159図5、第215図12は線条痕が縱走する。このような使用痕の違いは機能の差異によると考えられる。すなわち主面に対して前者は弧を描くような運動が予想され縦斧として、後者は直線的な運動が予想され横斧としてそれぞれ使用されたと思われる（佐原真：1977）。

破損後の再利用が行なわれた痕跡が認められる資料がある。破損面や側面に敲打痕があり敲石として用いられたと思われる。

8. 石核

中期の時期に属すると考えられる石核は不明瞭なものも含めて49点出土し、22点図化されて

いる。図化された22点のうちI類は6点、II類は11点、III類は5点である。打面と作業面とが固定的な1類は3点あり、第6号住居跡ピット5出土の接合資料に見られるように固定的な打面と作業面とにに対する志向があるようである。それらの石核からは好条件のときは縦長の剥片が剥離されているが連続的ではなく、石刃状の縦長剥片が剥離されたものとは異なる。

前述したように石核の数は大梁川遺跡で49点、小梁川遺跡で83点で大梁川遺跡の石核の数は少ない。第344図に石核の長幅分布を示す。小梁川遺跡の石核の長幅のグラフ(第114図)と比較して、大形の群(A群)が欠落していることがわかる。また素材の珪質頁岩の比率は42%で、他の器種の珪質頁岩の比率と比較してかなり低い(第12表)。

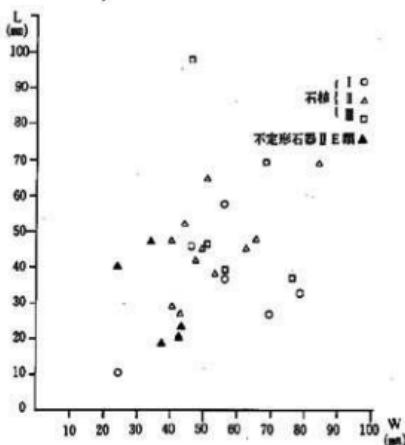
大梁川遺跡の石核の特徴として以下の点を指摘できる。石核の絶対数が少なく、また剥片石器の主要な石材である珪質頁岩の石核の量が少ない。また縦長剥片を剥離した石核が全く検出されない。これらの点から、大梁川遺跡の石器の素材の大半を占める日本海側の珪質頁岩は原石としてではなく剥片の形でかなりの量が集落内に搬入された可能性が高い。

9. 不定形石器IIA類

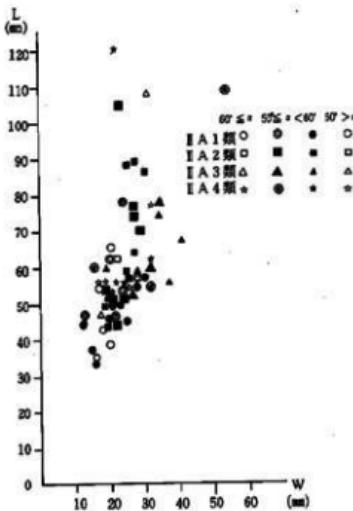
縦長の形態を呈する両側刃加工のスクレイパー・エンドスクレイパー・サイドスクレイパーを不定形石器IIA類とする。

全体で87点図化した。IIA類が22点(24%)、IIA₂類が27点(31%)、IIA₃類が15点(17%)、IIA₄類が14点(16%)である。このうち完形品は66点である。

素材剥片はほとんどが良質の珪質頁岩が使用されている。珪質頁岩以外の石材は6点で全体の7%である。第345図に不定形石器IIA類の長幅分布を示す。IIA類はやや小形の部分に、IIA₂類、IIA₃類はやや大形の部分に分布する。IIA₁、IIA₂、IIA₃類の刃部を素材の末端部以外に作出した例はIIA₁類で2点(8%)、IIA₂類で5点(19%)、IIA₃類で0点である。2類に打面側に刃部を作出した例が多い。これは2類の刃部にはある程度の厚みが必要であったからと考えられる。また3類には打面側に刃部を作出した例がない。これは3類の刃部が縦長剥片の末端の



第344図 石核・不定形石器IIA類の長幅分布

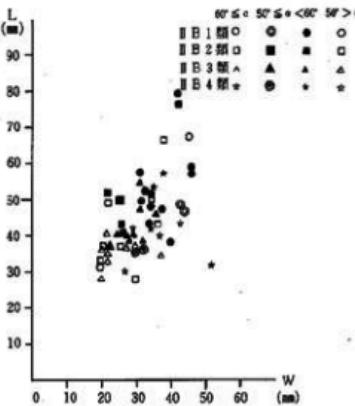


第345図 不定形石器IIA類の長幅分布

肥厚部(末端部肥厚剥片 犬飼・高橋他; 1984)の形状を利用しているからであろう。

二次加工が全周におよぶものは2類と3類が多い。とくに2類は14点で完形品の73%を占める。それに対して、1類は尖端部を中心とした二側刃、4類は一側刃または二側刃を中心となる。また基部加工があるものは2類と1類とに多い。基部加工としては、基部のみが両面加工となり、基部の幅が狭められる種類-834(第169図5)、457(第169図6)、60(第184図10)や、両面加工の尖端部状になる種類-635(第131図10)、388(第160図1)、17(第185図2)、基部が折断と二次加工で狭められる種類-851(第131図12)、700(第281図6)、199(第234図7)などがある。これらは基部が狭くなると言う共通点があり着柄されて使用されたと考えられる。

刃部再生を示唆すると考えられる資料は比較的多い。これらについては考察で述べる。第345図は長幅のグラフと刃部の角度との相関を示すが、刃部角の大きいものが必ずしも長幅比が小さな値を示していない。おそらく素材の選択の段階でのばらつきがあるのであろう。不定形石器II B類でも明瞭な傾向性は出ていない(第346図)。



第346図 不定形石器IIB類の長幅分布

第9表 不定形石器II A類の属性表

| 分類 | II A1 | II A2 | II A3 | II A4 | 不明 | 合計 |
|--------------|---------|---------|---------|---------|-------|---------|
| 総計(A) | 24(28%) | 27(31%) | 15(17%) | 14(16%) | 7(8%) | 87 |
| 完形品(B) | 22(33%) | 19(29%) | 12(18%) | 13(20%) | 0 | 66 |
| 全面加工(I/B) | 8(36%) | 14(52%) | 6(50%) | 0 | - | 28(42%) |
| 基部加工(I/B) | 6(27%) | 7(27%) | 2(17%) | 2(15%) | - | 17(28%) |
| 打痕に刃部作出(I/A) | 2(8%) | 5(35%) | 0 | - | - | 7(11%) |
| 複数質問(I/A) | 1 | 3 | 1 | 0 | 1 | 6(7%) |

10. 不定形石器II C類

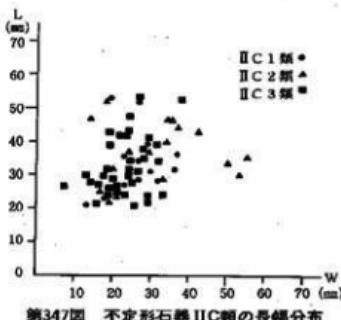
不定形石器II C類は尖端部を作出する種類であり、定形石器の未製品など雑多な種類を含んでいる。したがって考察では比較的まとまりのある不定形石器II C類についてのみ考察する。不定形石器II C類は折断面が尖端部作出に直接的に関与する種類である。西側基本層位第II層を含めて43点認定した。素材の用い方がわかる41点を折断面の位置との関係で分類すると以下のようなになる(第10表)。

- 打面側を折断し、側刃との交点に尖端部を作出する。
- 末端側を折断し、側刃との交点に尖端部を作出する。
- 側刃を折断し、打面部の幅を狭めて尖端部を作出する。
- 側刃を折断し、末端部の幅を狭めて尖端部を作出する。
- 側刃を折断し、末端部との交点に尖端部を作出する。
- 二折断面の交点に尖端部を作出する。
- その他。

折断面が打面部にかからない(a)、(b)、(d)の類型が比較的高い比率を占めるが、これは肥厚する打面部を正確に折断するのが難しいことによる有意性であろう。したがって、これらの石器では考え得る折断位置のはほとんどが採用されていて、決まった箇所を折断し特定の形態が作られるのではなく、素材の形態に応じて折断箇所が決定されるような状況であったと考えられる。これらに共通する点は、縁刃と鋭角に交差する折断面を作出して、尖端部作出が行われている点である。一般的な加工では尖端部が作出困難な素材でも折断面と縁刃との角度を調節すれば容易に尖端部を作出できる。数量的な点を問わなければ、尖端部作出に折断が関与する器種が縄文時代を通じて普遍的に存在する理由はこのような折断面の有効性によるものであろう。不

第10表 不定形石器II C類の折断面の位置

| A | B | C | D | E | F | G | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|----|----|----|----|
| 15 | 8 | 4 | 8 | 3 | 2 | 1 | 43 |
| 37% | 20% | 10% | 20% | 7% | 5% | 2% | |



第347図 不定形石器II C類の長軸分布

定形石器II A類の破損部を尖端部に加工している例が4例あり、このような尖端部作出技術は石器製作の経験から不斷に抽出される経験的な技術であったと考えられる。

大梁川遺跡では石錐に分類された中にも折断面が残存するものが3点あるが、折断で製作される種類は二次加工が尖端部のみに集中し、短い尖端部を有する種類が多い。この点が錐状尖端部を有する定形的な石錐が比較的多く製作される小梁川遺跡と異なる。

折断面が関与する尖端部作出石器は前期前葉の名取市今熊野遺跡（小川・村田；1986）で注目されたのが最初である。中期前葉の七ヶ宿町小梁川遺跡でも不定形石器II類の約20%を占めるが、同時期の川崎町中ノ内A遺跡（古川一明他；1987）では顕著ではない。大梁川遺跡では43点と高い比率を占める。近接した地域に属し、時代を異にする二遺跡（小梁川遺跡・大梁川遺跡）でこのように尖端部作出に折断面が関与する種類が共通して高い比率を占めることはそのような技術が特定地域内で継承された可能性があり、地域内または他地域間での検討が必要と考える。

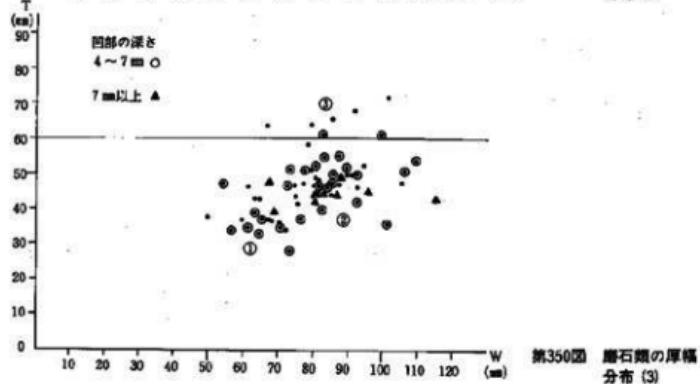
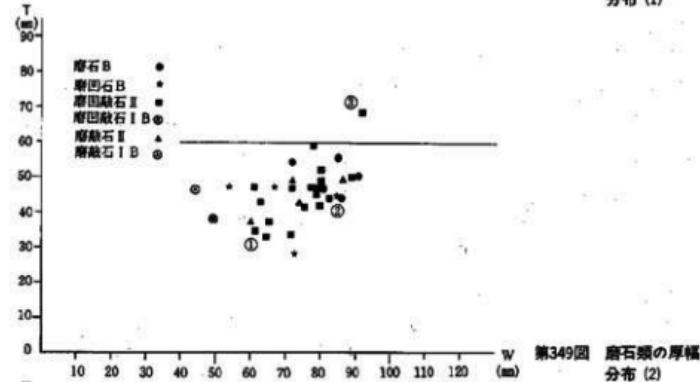
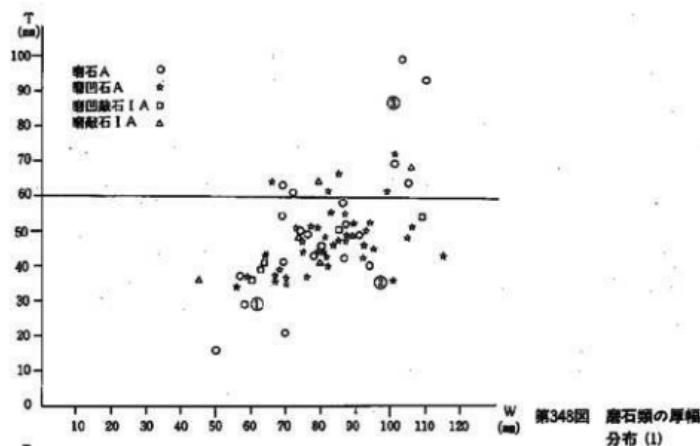
11. 不定形石器II I類

不定形石器II I類は打面部が鋸歯状または交互剥離状の二次加工で除去され、対辺の縁辺に二次加工や使用痕のある石器である。あまり明瞭でないものも含め、16点認定した。これらうち定義に厳密にあてはまるものは9点にすぎず、簡単な考察にとどめる。これらは基部加工の在り方から腹面に加工がある種類（1類）、両面加工の種類（2類）、腹面を打面とし背面に加工がある種類（3類）に分類できる。1類は側辺や末端部に基部加工があるものが多く、明瞭な種類は少ない。2類は556（第135図3）、563（第151図9）、626（第161図12）などを典型とし、やや小形の種類が多い。3類は642（第117図5）、905（第135図2）などを典型とし、やや大形の種類が多い。

この種類は小梁川遺跡において初めて確認された類型だが、数量も少なく小梁川遺跡ほど明瞭ではない。しかしこの器種が中期に一貫して存在する器種であることが明らかとなった。また他の遺跡では同種の石器は確認されていないが、これが単なる分類上の不徹底によるものか、特定地域内の技術の継承によるものかは不明であり、今後の研究の進展に期待する。詳細は小梁川遺跡の不定形石器II F類の考察を参照していただきたい。

12. 磨石類

発掘時の伝聞によれば、膨大な数の磨石類が出土したことであること、現場で選択されて一



部分のみ採集されている可能性が大きい。したがって定量的な分析は限界がある。磨石、磨凹石、磨凹敲石Ⅰ、磨凹敲石Ⅱ、磨敲石Ⅰ、磨敲石Ⅱの6種類に分類する。分類で述べたようにⅠ類とⅡ類を区別するのは平坦面を形成する敲打痕2の有無である。また分類の章には表れないが、磨面が二面のみで構成される種類をA類、三面以上で構成される種類をB類とする。したがって磨石、磨凹石、磨凹敲石Ⅰ、磨敲石ⅠはA類とB類とに二分されることになる。一般的にA類は断面形が楕円形になり、B類は断面形が多角形になる。さらに敲打面を持つ磨凹敲石Ⅱ、磨敲石Ⅱは主面以外に側面にも機能面を持つ点ではB類に近いと言えよう。

第348、349図に包含層の磨石類の幅厚分布を示す。第348図は磨面および敲打面が主面の表裏の二面構成の種類であり、第349図は主面以外に側面にも磨面がある種類および側面に敲打面を持つ種類である。やや不明瞭ではあるが、以下の三種類に分類される。

- ① 幅が50~80mmで、幅/厚が1.5~1.7に分布する種類。
- ② 幅が80~120mmで、幅/厚が1.5~1.6に分布する種類。
- ③ 幅が80~120mmで、幅/厚が1.3~1.5に分布する種類。

各分類の分布を見ると磨面が主面の表裏2面構成の磨石A、磨凹石A、磨凹敲石ⅠA、磨敲石ⅠAは上記の①~③の各類に散漫に分布する。それに対して、磨面が主面の表裏以外に側面にもある磨石B、磨凹石B、磨凹敲石ⅠB、磨敲石ⅠBは①、②に分布する。さらに敲打面を持つ種類である磨凹敲石Ⅱ、磨凹石Ⅱは機能面が二面のみの種類に比べて分布は狭く、①と②を中心で分布する。以上から主面の表裏以外に側面にも機能面を有する種類は③の範囲への分布が顕著ではないことがわかる。

このような磨面および敲打面を中心とした使用痕による形態の違いはどのような差に基づくのであろうか。機能面が主面の表裏のみの種類は厚さが減少するに対し機能面が三面以上の種類は使用によって厚さのみでなく幅も減少する。したがって使用による変化は主面の表裏のみの種類は③から②にグラフ中で垂直に移行する。それに対し、主面以外の側面にも機能面がある三面以上の種類は③から①にグラフ中で斜め下に移行する。このように、使用による変化は機能面の数によって変異の方向が異なり、厚幅分布による三種類の分化は機能面の構成に密接に関連していることがわかる。

次に凹部の深さはどのような形態的特徴と相関するのであろうが。第350図には7mm以上の深さを持つ磨石類を示しているが、①と②とに分布が限られ、凹部の形成と磨面の形成には相関があることがわかる。このように磨石類に見られる主な使用痕である磨面を形成する使用痕（ミガク）、敲打面を形成する使用痕（タタク）、凹部を形成する使用痕（？）は、本来磨石類に共通して内包されているものであり、使用の頻度によりそれらの使用痕が顕在化すると考えられる。磨石類は一般的に素材の選択の段階で形態が決定される（後藤秀一；1979a）が、使

用による形態の変化（小川・村田；1986）も無視できない要素と考えられる。

13. 石皿

石皿は大形の種類の1類と小形の種類の2類とに分類できる。第1号住居跡と第6号住居跡との床面からは原位置を示すと考えられる石皿1類が出土している。主要な機能面は一面で無脚である。2類は住居跡内で原位置を示すものはない。2類は裏面に脚部を持つものが大半で、全体形が成形されている。このように中期後葉の石皿には住居の床面などに固定的に設置された大形の種類（石臼的）と移動可能な小形の種類（摺鉢的）とに分化していたことがわかる。このような大きさによる分化は小梁川遺跡の前期後葉から中期中葉の時期でも指摘されているが、被加工物の差として捉えられている。また、有脚の石皿は小梁川遺跡には無く、中期後葉以降の特徴となろう。

住居跡内の石皿の出土位置 二棟の住居跡で原位置を示すと考えられる石皿が検出された。第1号住居跡では複式炉の掘り込み部から見て奥壁側の長軸の右側で同一側には埋設土器がある。第6号住居跡では複式炉の掘り込み部付近の右側で、同一側にはピット5、およびC区床面の剥片一括資料の出土地点がある。柴田郡川崎町中ノ内C遺跡第2号住居跡（斎藤・相原；1987）では台石と2個の磨石が前庭部から見て奥壁側の右側に残存していた。これら3例は右側である点は一致するが、有意性があるか否か不明である。複式炉を有する住居跡は方向性が良くわかり、床面出土遺物の記録の集積が望まれる。

14. 石製品

石製品は16点出土している。垂飾品、石刀、円盤状石製品、その他に分類した。

有孔の石製品で装身具と推定されるものを垂飾品とする。形態は楕円形（第157図3）、三角形（第157図2）、管玉（第238図6・7）、棒状（第187図4）、環状（第217図7）がある。第217図7以外は全て光沢がない軟質の凝灰質砂岩である。製作過程は敲打の後、研磨し成形している。第157図2・3、第187図4の貫通孔は両端が広く中央で狭くなるため両側から穿孔したことが分かる。第187図4は破損しているが、秋田県鹿角市天戸森遺跡（秋元信夫他；1984）、岩手県北上市滝ノ沢遺跡（稻野裕介他；1983）から棒状を呈しその両端に貫通孔をもつ垂飾品が出土しており同様の形態を呈すると思われる。第238図6・7は管玉である。貫通孔を観察すると螺旋状の穿孔痕が見られ（写真図版89A）、研磨剤と管骨類や竹管類の管錐とを用いて穿孔されたと思われる。類例として天戸森遺跡、岩手県都南村湯沢遺跡（三浦謙一；1983）から出土

している。第217図7は破損しているが環状になると思われる。断面は不正円形で図右側の破損面で最も厚く、徐々に薄くなる。石材は硬質の石英安山岩製である。

第174図2・3は石刀の破損品と思われる。製作時の剥離痕や敲打痕が観察できる。また研磨は丁寧になされている。第174図2の図右側に明瞭な稜が見られ背の部分と思われる。この2点は石質から別個体として扱った。

円盤状石製品は第141図6、第165図3、第238図9、第284図5である。成形は研磨によるものと周縁を打ち欠いているものとがある。第141図6は3ヶ所に剥離によるノッチが施されており石錐の可能性もある。

そのほか第195図4、第238図8は橢円形に、第238図10は西洋梨形に研磨によって成形している。第141図7は破損しているが円柱状を呈し長軸に沿って溝が1本走る。類例として小梁川遺跡（本書所収pp.636）、秋田県小坂町大岱IV遺跡（熊谷・大野；1984）にみられる。

なお管玉をはじめ5点の石製品が、特殊な行為による一括廃棄と考えられる第6号住居跡の堆積層から出土しており、その出土状況は注目に値する。

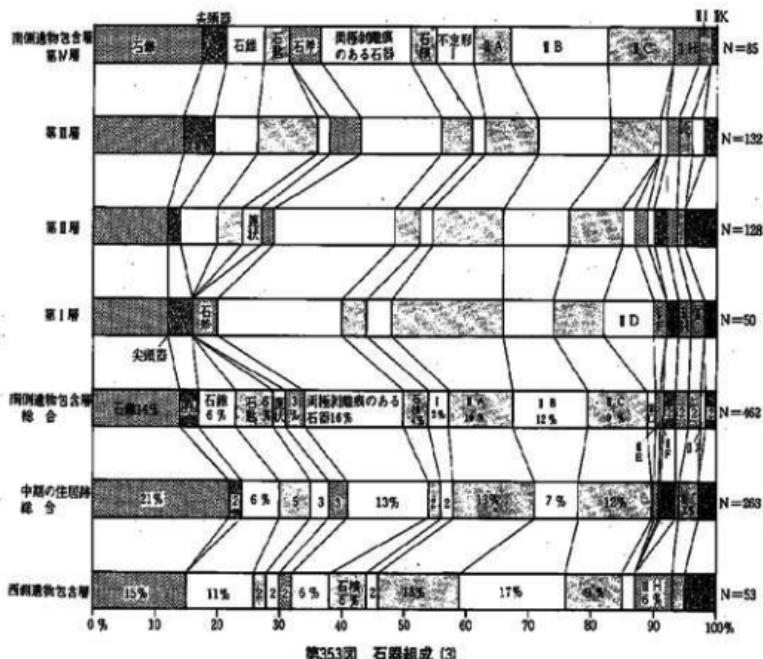
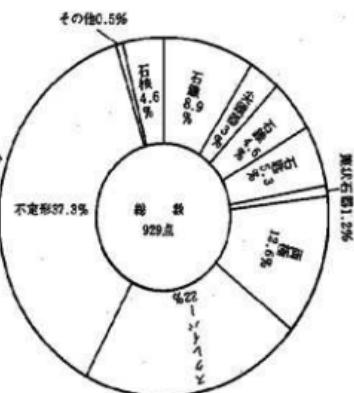
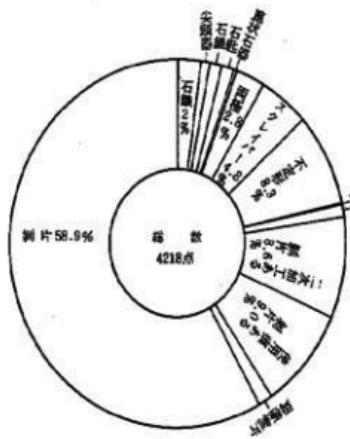
C. 石器の考察

1. 石器組成

大梁川遺跡の石器組成を南側遺物包含層を中心に述べる。磨石類、石皿は発掘時に選択され採集された可能性が大きいので今回は組成には含めない。第351、352図の南側遺物包含層の石器組成の円グラフは初期に剥片石器の集計のために作成した資料に基いているので石斧が欠落し、また分類に多少の相違点がある。対象とした石器は約4218点である。スクレイバーと分類した器種は現在の不定形石器II A類とII B類とを含むものと考えて良い。総数から使用痕ある剥片、二次加工ある剥片、両極碎片、剥片を除いた929点の組成を第352図に示す。第353図は実測された石器について層位ごとに組成を示したものである。第352図の組成と第353図の南側遺物包含層総合の組成、中期の住居跡総合の組成とは石礫の組成が高いほかほぼ一致する。

次に小梁川遺跡の前期後葉から中期前葉の石器組成と比較する。小梁川遺跡と大梁川遺跡とは組成の算定の方法がやや異なっている。大梁川遺跡の第351図のグラフは小梁川遺跡の第104図(1)のグラフ(pp.734)と対応する。小梁川遺跡の第104図(2)のグラフは実測された石器の組成であり、大梁川遺跡の第353図に相当する。大梁川遺跡の中期後葉の石器組成は小梁川遺跡の前期後葉から中期前葉の石器組成と比較して以下のような特徴がある。

- (1) 大梁川遺跡の定形石器の組成比は小梁川遺跡の組成比に比べて高い。定形的剥片石器と不定形石器の組成比は大梁川遺跡は約7.8:8.3(N=4218)であり、小梁川遺跡の4.6:



12.2(N=5574)である。ただし大梁川遺跡ではスクレイパーを不定形石器から独立させている。

- (2) 大梁川遺跡のスクレイパーの組成比は極めて高い。大梁川遺跡のスクレイパーの組成は22% (N=921) であり、小梁川遺跡のスクレイパー(不定形石器II A類)の剥片石器に占める組成は約10% (N=710) である。大梁川遺跡では不定形石器II A類などの特定素材と結び付いた定形的な種類が多い点が注目される。またスクレイパーの増加は石匙などに見られるようにスクレイパーエッジなどの平坦剥離に対する志向の高まりと関係があると考えられる。
- (3) 大梁川遺跡の両極剥離痕のある石器の組成比は高い。また既存の石器が破損後に、転用された種類が多い。大梁川遺跡の両極剥離痕のある石器は2.8% (N=4218) である。小梁川遺跡は0.6% (N=5574) であり、既存の石器が破損後に転用された例(IE類)は3例にすぎない。
- (4) 大梁川遺跡の石核は少ない。大梁川遺跡の石核は49点(1.2% N=4218)で、小梁川遺跡の石核は83点(1.5% N=5574)である。
- (5) 以上から、大梁川遺跡で組成比が顕著に増加する器種はスクレイパー・両極剥離痕のある石器であり、顕著に減少する器種は大形の尖頭器・箇状石器・鋸歯縁石器と交互剥離状石器・石核である。小梁川遺跡は多様な不定形石器を特徴とする石器群であり、大梁川遺跡は多様なスクレイパーを特徴とする石器群である。

2. 石材

小梁川遺跡と大梁川遺跡の主要な器種の石材の組成比の表を提示する(第11表・第12表)。小梁川遺跡では石核を含めた各器種の珪質頁岩と非珪質頁岩の組成比が一定している(75~85% : 15~25%)。大梁川遺跡では石核の珪質頁岩の比率が低く(42%)、また石匙・不定形石器II A類は珪質頁岩の比率が非常に高く(約94%)、各器種の石材の組成は一定していない。また、大梁川遺跡は良質な珪質頁岩の比率が高いが、小梁川遺跡は粗粒な珪質頁岩の比率が高い。これらの理由として、小梁川遺跡では自己の領域内の石材を利用して集落内で剥片剥離作業がかなり行われていたのに対して、大梁川遺跡では良質の珪質頁岩を他領域(最上川水系)から剥片(または製品)で搬入するシステムが確立していたことが考えられる。その結果として、大梁川遺跡では剥片石器の素材は良質な珪質頁岩が大半を占めるにもかかわらず、集落内で剥片剥離作業が行われる現地産の石材(非珪質頁岩)の石核の比率が増加する。

このような剥片(または製品)の流通は単に中期後葉の時期の特徴ではなく縄文時代を通じて行なわれていたが、各時期によって石材を自己の領域内で自給する比率と他の領域から搬入

第12表 小梁川遺跡の石材

| 石 材 | 地 質 石 材 | | 本 地 石 材 | | 合 计 |
|-----------------------|----------|----------|----------|----------|-----|
| | 有 裸 あり | 無 裸 なし | 有 裸 あり | 無 裸 なし | |
| 石 岩 | 16.0.30 | 24.0.20 | 4.0.150 | 5.2.200 | 41 |
| 石 鹿 | 07.0.100 | 16.0.100 | 07.0.150 | 16.0.100 | 111 |
| 石 鮎 | 22.0.100 | 19.0.100 | 8.0.140 | 7.0.130 | 58 |
| 岩 砂岩 | 27.0.100 | 18.0.100 | 5.0.1250 | 4.0.800 | 42 |
| 其他(縦長の石片) | 22.0.100 | 21.0.100 | 5.0.1300 | 3.0.1700 | 40 |
| スクリーパー (エンドスクリーパー) | 11.0.100 | 14.0.100 | 2.0.150 | 7.0.900 | 76 |

第12表 大梁川遺跡の石材

| 石 材 | 地 質 石 材 | | 本 地 石 材 | | 合 计 |
|--------------------------|----------|----------|----------|---------|-----|
| | 有 裸 あり | 無 裸 なし | 有 裸 あり | 無 裸 なし | |
| 石 岩 | 4.0.100 | 8.0.100 | 5.0.150 | 9.0.150 | 24 |
| 石 鹿 | 44.0.100 | 8.0.100 | 36.0.100 | 2.0.100 | 134 |
| 石 鮎 | 22.0.100 | 8.0.100 | 1.0.100 | 1.0.100 | 22 |
| 岩 砂岩 | 6.0.100 | 4.0.100 | 2.0.100 | 2.0.100 | 27 |
| 其他(縦長の石片) | 42.0.100 | 8.0.100 | 30.0.100 | 8.0.100 | 102 |
| 日本海側加工の石片 | 44.0.100 | 8.0.100 | 6.0.100 | 9.0.100 | 60 |
| 日本海側加工の石片 (エンドスクリーパー) | 54.0.100 | 10.0.100 | 5.0.100 | 3.0.100 | 74 |

する比率とには変動があったと考えられる。二遺跡の比較によって前期後葉から中期前葉は自己の領域内で剥片石器の石材を自給する比率が相対的に高まった時期であり、中期後葉は他の領域（日本海側）の供給に依存する比率が高まった時期と考えることができる。このような剥片石器の素材の利用可能度が二遺跡の石器群の特徴に大きな影響を与えていたと推定される。

3. 縦長剥片と縦長剥片生産技術

縦長剥片生産技術 縦長剥片を連続的に剥離する技術を縦長剥片生産技術と定義する（阿部朝衛；1986）。縦長剥片を連続的に剥離するには打面と作業面との関係を固定し、打面再生・作業面の稜調整などの石核調整を行うことが必要だが、第6号住居跡のピット5出土の剥片接合資料に見られるように、好条件が揃えば縦長剥片が偶発的に剥離される。また縦長の石匙には縦長剥片が使用されることが多い、縦長剥片の量の多少については資料の提示の仕方で受け印象が異なる。したがって縦長剥片生産技術が存在したか否かは器種の素材となった剥片の分析だけでは不十分で、石核およびそれらの接合資料の分析によらなければ確実には判断できない。

大梁川遺跡では二側辺が平行し、背面構成の稜があり、形態が整った縦長剥片が多く、剥片からは縦長剥片生産技術の存在を示唆するが、それらの石核は出土せず、また接合資料もそれらとは無関係な技術を使用している。これらの点からは大梁川遺跡に縦長剥片生産技術が存在したことは否定的である。しかしこのような特徴こそが大梁川遺跡などの太平洋側の様相を反映すると考えるに至った。

大梁川遺跡の特徴

大梁川遺跡の石器群について以下の特徴を指摘できる。

- (1) 縦長剥片は単設打面の石核から剥離されたと考えられる。明確に両設打面の石核から剥離されたと推定できるものはない。石核作業面の稜調整の痕跡を示す剥片（クレステドフレイク）が存在する。
- (2) 縦長剥片は特定の器種の素材として供給関係が固定している。特定の器種とは、縦長の石匙I類と横長の石匙II類、縦長のスクレイバー（両側辺加工のスクレイバー・エンドスクリーパー）である。末端が肥厚する剥片を使用してエンドスクレイバーが作出される傾

向がある。横長の石題は形態と直接結び付かないが、縦長剥片が使用されている。また両側刃加工のスクレイパーは縦長剥片が前提となって出現した新しい器種である。

(3) これらの縦長剥片はほとんどが良質な珪質頁岩素材であり、縦長剥片が剥離された石核は見つかっていない。

宮城県の特徴 このような傾向は単に大梁川遺跡に見られる特異性ではない。宮城県内の縄文時代中期後葉（大木10式期）から不明瞭だが後期前葉の遺跡で縦長剥片が多く出土することは最近になって注目されてきた。縦長剥片が量的にかなりまとまって出土した遺跡としては刈田郡蔵王町二屋敷遺跡（加藤・阿部・小信他；1984）、白石市菅生田遺跡（丹羽・阿部・小野寺；1982）、柴田郡川崎町中沢遺跡（後藤勝彦他；1975）、旧宮城郡宮城町観音堂遺跡（今野隆他；1986）、仙台市六反田遺跡（佐藤洋他；1987）、仙台市下ノ内遺跡（篠原信彦；1982）、仙台市山田上ノ台遺跡（渡部・主浜他；1981）があり、今回の刈田郡七ヶ宿町大梁川遺跡を含めると8遺跡が確認できる。下ノ内遺跡、山田上ノ台遺跡は概報による情報で不十分である。それらの遺跡で共通する点は既に観音堂遺跡の考察で簡潔にまとめられている（今野隆他；1986）。

(1) これらの縦長剥片は偶然に剥離されたものではなく、意図的に打面、作業面を固定し、作業面の形態や稜を意識した剥片剥離技術によるものである。観音堂遺跡では両設打面の石核から剥離された剥片が存在し、石核の作業面の稜調整の痕跡を示す剥片（クロステドフレイク）は大梁川遺跡、二屋敷遺跡で確認されている。

(2) これら縦長剥片を連続的に剥離した石核が出土していないことは共通している。

(3) また縦長剥片は石匙と縦長のスクレイパー（二側刃が収斂し、尖端部が作出されるものとエンドスクレイパー状になるものがある。）と顕著な結び付きを持っているようである。このように器種と素材の一定した関係が成立することは縦長剥片の供給がかなり安定したものであったことが推定される。

(4) 縦長剥片を素材とする石器が顕著に出土する遺跡の分布範囲は、阿武隈川水系最下流の白石川水系域から名取川水系域までの地域である。鳴瀬川水系・北上川水系・松島湾沿岸部などの宮城県北東部には分布しない。縦長剥片を素材とする石器はこの地域の中期後葉から後期前葉の遺跡にはかなり安定して出現するようである。

これらの地域における縦長剥片と一般的な剥片との二重構造はどのようにして形成されたのであろうか。縦長剥片を剥離したと考えられる石核が出土していないことは8遺跡で共通しているので、縦長剥片を連続的に剥離する技術が成立した地域は宮城県などの太平洋側ではないと考えられる。

山形県の特徴 山形県では縦長剥片を顕著に有する中期後葉の遺跡としては村山市中村A遺跡（渋谷・名和；1983）、寒河江市うぐいす沢遺跡（佐藤・渋谷；1981）、寒河江市向原遺跡¹¹

(佐藤・渋谷; 1981)、大江町橋上遺跡(大飼・高橋他; 1984)、などがあり、以下のような特徴を指摘できる。

- (1) 縦長剥片を連続的に剥離した石核が多量に出土した遺跡は、橋上遺跡、向原遺跡がある。橋上遺跡では接合資料が存在し、剥片生産技術が復元されている。それによると様々な石核調整が頻繁に行われ、石核の作業面の稜調整・両設打面の石核も存在する。
- (2) 縦長剥片のみを有する遺跡は、中村A遺跡、うぐいす沢遺跡がある。
- (3) 縦長剥片を素材とする石器は縦長のスクレイバー・石匙・箆状石器で箆状石器以外は宮城県と共通する。

山形県で宮城県と異なる点は縦長剥片を剥離した石核を有する遺跡が発見されていることである。特に橋上遺跡では石核作業面の稜調整によるクレステドフレイクや両設打面の石核の存在や、剥片末端部が幅広くなる(阿部朝衛; 1986 pp. 37)など宮城県側と共にした特徴を有する。この地域の集落のすべてで生産が行われたのではなく、現在知られている橋上遺跡、向原遺跡は特殊な集落(縦長剥片生産をある程度専業とする集落)で、周囲には縦長剥片の供給を受ける中村A遺跡、うぐいす沢遺跡などの石核が出土していない集落が存在したと想定できる。

石材の供給と需要 このような状況的な根拠により、山形県の最上川水系中流域の特定の地域で生産された縦長剥片は剥片(または製品)の形で脊稜山脈を越え、太平洋側にもたらされたと考える。最上川水系は良質の珪質頁岩の産出地であり、宮城県は良質の石材に恵まれず縄文時代を通じて石器素材を日本海側の珪質頁岩に求めてきた。付加価値を有する縦長剥片ほどは顯著ではないが、珪質頁岩製の剥片または製品が太平洋側にもたらされることは縄文時代を通じて行われたと考えられる。

縦長剥片生産技術の発生 中期後葉の時期に最上川水系域で発生した縦長剥片生産技術が特徴的な剥片を太平洋側に提供したことによって生産地である最上川水系域と消費地である白石川・名取川水系との関係を明瞭に示すことになった。このような例は特殊であり、自然化学的分析によらなければ原産地と消費地との関係は特定できない。珪質頁岩の産地同定の試みはほとんど行われていない。その理由として、珪質頁岩はグリーンタフ地帯の各所に見られ、原産地を細かく特定することが困難である点が指摘されている(蟹沢; 1986)。しかし、東北地方の縄文時代を通じて剥片石器の主要な石材は珪質頁岩である。最上川水系や東石川水系などを生産地とする大規模な生産-消費関係が不明瞭ながら判明しつつある状況では、自然化学的な分析方法による珪質頁岩の産地同定の必要性は黒曜石以上に強まっていると考える。

大梁川遺跡は縦長剥片の供給を受けた遺跡であり、最上川水系で縦長剥片生産が発生(または再生)した契機については本報告では扱いにくい。縦長剥片生産技術の発生については「石器を介して、技術が生業形態に対して共変関係にある」として、縦長形態の石器を必要とする

生業形態を重視する見解がある(阿部朝衛; 1986)。しかし、縦長のスクレイバー類を必要とする生業形態の具体的な内容は不明で、生業形態の変化を示唆する資料も顕著ではない。したがって、前述の見解には賛同できない点がある。前時期と比較して中期後葉の時期の太平洋側の地域の顕著な特徴は日本海側の地域の石材の供給に依存する傾向が強まることである。縄文時代の縦長剥片生産技術は石材の原産地に近接した地域で発生している例が多く(阿部朝衛; 1986 および山田晃弘氏の教授による)、最上川水系中流域も例外ではない。このような点から、石材の希少な地帯への供給を前提とする効率的な剥片生産に最上川水系中流域の地帯が対応する過程で縦長剥片生産技術が発生した可能性がある。縦長剥片生産技術は確認されてはいないが、縄文時代早期後葉から前期前葉の時期も縦長の形態の石器が顕著な時期であり、太平洋側では良質の珪質頁岩が剥片石器の石材の主体を占め、大木10型式期と類似した様相を示す。縄文時代の東北地方中部地域においては、搬入された石材(珪質頁岩)の比率が太平洋側で高まる時期に日本海側の原石産出地帯で縦長剥片生産技術が発生する傾向がある点を指摘する。

4. 刃部再生について

大梁川遺跡の石器群には刃部再生を示唆すると考えられる資料が比較的多い。特徴的な資料は機能刃部以外の部位にある摩滅と二重バティナ石器である。

(1) 背面構成・腹面・側辺などに見られる著しい摩滅

素材の機能刃部以外の箇所に摩滅が認められる例はやや多い。その中で顕著な例を指摘する。560(不定形石器II A類 第148図5)は破損しているが、両側辺の摩滅が著しい。両側辺から両極で剥離がはいる部分には摩滅はない。両極剥離は刃部再生の一種ではないかと考えられる。856(不定形石器II A類 第131図11 写真図版88C)の背面構成が摩滅するが、先端の刃部に摩滅は認められない。822(笠状石器 第167図4 写真図版88E)は側辺に著しい摩滅があるが、先端の刃部にはあまり摩滅がない。375(笠状石器 第167図5)も両側辺に摩滅があるが先端の刃部は摩滅がない。しかも先端の刃部の二次加工は側辺の加工を切っている。673(不定形石器II A類 第281図8)は先端の刃部に摩滅はないが、背面構成の稜が摩滅している。670(不定形石器II B類 第282図4)は腹面側が摩滅しているが、刃部付近に摩滅は認められない。691(不定形石器II B類 第283図2 写真図版88D)は全体的に摩滅しているようだが、背面構成の稜と腹面の摩滅が特に著しい。143(不定形石器II B類 第202図6)は背面構成は剥離面が観察できないほど著しく摩滅し、末端の折断面の稜も摩滅する。しかし、二次加工部位の摩滅はそれほどではない。165(不定形石器II A類 第216図6 写真図版89c)は背面構成の稜の一部が摩滅するが、先端の刃部の摩滅は認められない。

(2) 二重バティナ石器

刃部再生を示唆すると考えられる二重バティナ石器の例はあまり多くはない。401(籠状石器第144図1 写真図版89B)の先端の刃部の二次加工のバティナは新しく、それらは剥離面の切り合いで観察によっても確認される。またバティナに差はないが、背面左側辺の小剥離が及ばない部分だけ摩滅しているので、加工には少なくとも三段階があったことがわかる。656(不定形石器II B類 第282図3 写真図版89D)の側辺のスクリーントーンの部分の加工のバティナは新しい。一部に古い加工が残っているが、その部分は摩滅している。

石器の縁元縁辺の摩滅は石器の着柄や使用法とも関係しているので一概に使用によるものであるとは断定できないが、背面構成や腹面、側辺が機能刃部と比較して著しく摩滅している例が多くあり、二重バティナ石器の例とも考え合わせると、刃部再生による現象であると考えられる。

刃部再生が顕著な石器は籠状石器と不定形石器II A、II B類などのスクレイバーエッジを持つ石器に多い点が指摘できる。

5. 大梁川遺跡の中後葉の石器群の特徴について

小梁川遺跡の前期後葉から中期前葉の石器群（中期中葉の石器群は数が少なく性格は不明である。）との比較を中心にして中期後葉の石器群の特徴について考察する。

小梁川遺跡と大梁川遺跡 小梁川遺跡との比較によって大梁川遺跡の石器群の特徴として、以下の点を指摘できる。

- (1) 大梁川遺跡で組成比が顕著に増加する器種はスクレイバー・両極剥離痕のある石器であり、顕著に減少する器種は大形の尖頭器・籠状石器・不定形石器I類・鋸歯縁石器と交互剥離状石器・石核である。小梁川遺跡は多様な不定形石器を特徴とする石器群で、大梁川遺跡は多様なスクレイバーを特徴とする石器群である。
- (2) 大梁川遺跡の石器は器種・型式的にまとまりがある。小梁川遺跡の石器は器種・型式の変異が大きく典型的な型式を捉えにくく。
- (3) 大梁川遺跡では珪質頁岩と非珪質頁岩の比率は各器種で変化が大きい。珪質頁岩率は石核が低く、石匙・不定形石器II A類が高い。小梁川遺跡では一定である。また、大梁川遺跡は良質の珪質頁岩の比率が高く、小梁川遺跡では、粗粒な珪質頁岩が比較的多い。
- (4) 石器一般について二遺跡を比較すると、大梁川遺跡の石器は小ぶりであるのに対し、小梁川遺跡の石器は大ぶりである。
- (5) 二次加工の形状では薄手の素材にスクレイバーエッジなどの平坦剥離が施される例が多く、綺麗で端整な石器という印象を受ける。小梁川遺跡では厚手の素材に交互剥離状や鋸

- 歯状のバルブの発達する二次加工が施される例が多く、粗雑な石器という印象を受ける。
- (6) 残存する石核が少なく、それらは珪質頁岩以外の石質が多い。小梁川遺跡では良質でない珪質頁岩が多く、石核は多く残存している。
 - (7) 石刃状の縦長剥片が石匙・縦長のスクレイバーなどの特定器種の素材として使用されている。これらは最上川水系で生産されたと推定される。小梁川遺跡の石匙には縦長剥片が素材として使用される例があるが、顕著ではない。
 - (8) スクレイバーエッジなどに顕著な使用痕を有する石器が多く、刃部再生が頻繁に行われたことを示す石器も多い。小梁川遺跡ではそのような石器は少ない。
 - (9) 両極剥離痕のある石器や不定形石器Ⅱ C類などに破損したスクレイバーなどを使用している例が多い。小梁川遺跡では両極剥離痕のある石器（IE類）に少数あるのみで顕著ではない。

石材供給と石器群の特徴 二遺跡の石器群に見られるこのような差はどのような要因に基付き、どのように相関するのであろうか。Binford は複数の用途に使用でき、将来の使用を見越して製作され、何度も再生され、他の用途に転用される管理的な石器である Curated な石器とその場かぎりの目的に合わせて作られ、使われ、捨てられる便宜的な石器である Expedient な石器と言う概念を提示している (Binford; 1979)。石材の乏しい地域では、小さなまたは少ない石材を効率的に利用するためには、自ら刃部再生を繰り返し長く使う石器が多くなり、結果的には石材の利用可能度が Curated な石器と Expedient な石器の割合を決定するという Bamforth (1986) の仮説から、梶原は宮城県の旧石器の特徴を考察し、以下のような指摘を行っている (梶原; 1986b)。「石材の乏しい地域では……剥片の時には鋭かった縁辺をその鋭さを余り減少させないようにしながら、刃部再生をするためには平坦剥離や押圧剥離を用いて、刃角を維持する必要に迫られたばかりでなく、貴重な石材を目的に添った機能を持たせるように加工するには、単純な縁辺部加工では不十分で平面形だけでなく、厚さの調整が可能な平坦剥離や押圧剥離が不可欠とされる」。

石核および石材の分析から小梁川遺跡では剥片石器の石材を自己の領域内で自給する比率が高く、大梁川遺跡では石材を他領域から搬入する比率が高いことが判明した。石材の利用可能度と製作される石器群の特徴とに関するこのような仮説から、両遺跡の存在する白石川水系域では以下の解釈が可能である。前期後葉から中期前葉の時期は石材を自己の領域内で自給する比率が増大した時期である。粗悪ではあるが豊富な石材を利用して、刃部再生などはあまり行わず、短期間で消費する不定形石器を特徴とする石器群を有した時期である。中期後葉の時期は、日本海側の珪質頁岩への依存を相対的に強めた時期である。良質ではあるが貴重な石材を長期間使用するため、刃部再生を頻繁に行う必要性からスクレイバーエッジなどの平坦

剥離を多用して、スクレイバーを多く有する石器群を作り上げた時期である。また破損した石器をピエスエスキューや石錐に転用するなど石材の徹底した使用が行われる。系譜は不明だが最上川水系では縦長剥片生産技術を有し縦長剥片を生産する集落が成立し、その一環として太平洋側にその製品が供給された。

6. 大梁川遺跡を指標とする石器群の分布圏について

大梁川遺跡の中期後葉の石器群は以下の特徴を有する。このような特徴を有する中期後葉の石器群を大梁川遺跡を指標とする石器群と仮称する。

- (1) 定形的剥片石器・スクレイバーが多く、不定形石器は前時期に比較して少ない。
- (2) 石錐の組成は凹基・平基が主体で凸基は少ない。凸基の一種の石錐 III 類（全体形が菱形を呈する）が客観的に存在する。尖頭器は小形である。
- (3) 石匙は縦長の形態・横長の形態共に縦長剥片が使用され、横長の形態の石匙はつまみ部が側辺部に作出される例が多い。身部はスクレイバー状の刃部を持つ。
- (4) 篓状石器は少ない。両極剥離痕のある石器はきわめて多い。
- (5) スクレイバーは極めて多いが、中でも縦長剥片を素材とした特定器種として、両側辺加工のスクレイバー・エンドスクレイバーなど定形的なスクレイバーがかなりある。
- (6) 前述したように、縦長剥片が特定器種の素材として固定的に使用される。
- (7) 石皿には無脚で大形の種類と小形で有脚の種類がある。

石器群の比較には石器組成が重要であるが、信頼できる組成比が提示されている報告書は少ない。したがって大梁川遺跡の石器群の特徴的な器種・型式を指標とし、その分布範囲から大梁川遺跡を指標とする石器群の分布圏を決定する。定形的で比較的数が多く把握しやすい石錐の型式および組成と、縦長剥片を素材とする特定器種（石匙・両側辺加工のスクレイバー・エンドスクレイバー）とを指標器種・型式とする。

1. 大梁川遺跡を指標とする石錐組成の分布圏

大梁川遺跡の石錐の組成は以下の特徴を示す。

- (1) 石錐の組成は基部形態が凹基・平基の種類が主体であり、凸基の種類は少ない。
- (2) 凸基の石錐のなかで、全体形が菱形を呈する石錐 III 類が特徴的な型式として存在する。石錐 III 類は全体形が菱形を呈する種類で、定形性（菱形という形）により分布範囲がとらえやすい。まず石錐 III 類を指標として分布範囲を押え、大梁川遺跡を指標とする石錐組成の分布圏を明確にしたい。石錐 III 類は第354図に示すような分布で17遺跡に見られた。

【馬淵川水系】 二戸市荒谷A遺跡（鈴木優子他；1983）

【雄物川水系】 秋田市坂ノ上遺跡（菅原俊行他；1976）、千畠町内村遺跡（窟山憲司；1981）



第354図 指標石器の分布地図

第13表 第354図付遺跡一覧表

| No. | 遺跡名 | 石器出現 | 石器消失 | 石器 | 目 |
|-----|----------------|------|------|----|---|
| 1 | 筑波山遺跡群/上遺跡 | ○ | | | |
| 2 | 筑波山下遺跡群/下遺跡 | ○ | ○ | ○ | |
| 3 | 磐梯山二ノ川遺跡群 | ○ | | | |
| 4 | 山形県山形市中内遺跡 | ○ | | | |
| 5 | 山形県東根市小中遺跡 | ○ | | | |
| 6 | 山形県東根市ひくい町遺跡 | ○ | ○ | ○ | |
| 7 | 山形県東根市大内遺跡 | ○ | ○ | ○ | |
| 8 | 山形県大崎市高田遺跡 | ○ | ○ | ○ | |
| 9 | 山形県山形市原ノ新道跡 | ○ | ○ | ○ | |
| 10 | 山形県西村山郡高畠町御所野 | ○ | ○ | ○ | |
| 11 | 山形県小国町高畠遺跡 | ○ | | | |
| 12 | 山形県小国町下野原遺跡 | ○ | | | |
| 13 | 宮城県仙台市内柴町遺跡群 | ○ | | | |
| 14 | 宮城県仙台市内柴町上ノ金砂跡 | ○ | | | |
| 15 | 宮城県仙台市内柴町下ノ金砂跡 | ○ | | | |
| 16 | 宮城県仙台市大河原遺跡 | ○ | ○ | ○ | |
| 17 | 宮城県刈田郡大河原町 | ○ | ○ | ○ | |
| 18 | 宮城県刈田郡刈田町 | ○ | ○ | ○ | |
| 19 | 福島県喜多方市喜多方山遺跡 | ○ | ○ | | |
| 20 | 福島県喜多方市喜多方山遺跡 | ○ | | | |
| 21 | 福島県喜多方市喜多方山遺跡 | ○ | ○ | ○ | |
| 22 | 福島県喜多方市喜多方山遺跡 | ○ | ○ | ○ | |
| 23 | 福島県喜多方市大里大里遺跡 | ○ | ○ | ○ | |
| 24 | 福島県喜多方市可茂遺跡 | ○ | | | |
| 25 | 福島県喜多方市見立遺跡 | ○ | | | |
| 26 | 福島県喜多方市上白人遺跡 | ○ | | | |
| 27 | 福島県喜多方市大里大里遺跡 | ○ | | | |
| 28 | 福島県喜多方市上白人遺跡 | ○ | | | |
| 29 | 福島県喜多方市喜多方山遺跡 | ○ | | | |
| 30 | 福島県喜多方市喜多方山遺跡 | ○ | | | |
| 31 | 福島県喜多方市喜多方山遺跡 | ○ | | | |
| 32 | 福島県喜多方市喜多方山遺跡 | ○ | | | |
| 33 | 福島県喜多方市喜多方山遺跡 | ○ | | | |
| 34 | 福島県喜多方市喜多方山遺跡 | ○ | | | |
| 35 | 福島県喜多方市喜多方山遺跡 | ○ | | | |

【最上川水系】 寒河江市うぐいす沢遺跡（佐藤・渋谷；1981）、山形市熊ノ前遺跡（佐々木洋治他；1979）

【荒川水系】 小国町墓窓遺跡（佐藤・名和；1982）、小国町下野遺跡（阿部・名和；1981）

【名取川水系】 川崎町中沢遺跡（後藤勝彦他；1972）

【白石川水系】 藏王町湯坂山B遺跡（中橋彰吾；1987）、白石市五輪坂遺跡（片倉・中橋・後藤；1976）、藏王町二屋敷遺跡（加藤・阿部・小徳；1984）、白石市菅生田遺跡（片倉・中橋・後藤；1976）

【阿武隈川水系中流域】 梁川町夏庭遺跡（日下部善己他；1978）、二本松市塩沢上原A遺跡（目黒吉明他；1975）

【福島県沿岸部】 相馬市馬見塚遺跡（鈴鹿良一他；1982）、飯館村上ノ台A遺跡（鈴鹿良一他；1984）、浪江町順礼堂遺跡（木本元治；1977）

このなかで荒谷A遺跡は他の遺跡と石鏃の組成が異なり、基部形態は凸基が多い。これは馬淵川水系の伝統的特徴で中期後葉から後期後葉の時期の八戸市丹後谷地遺跡（八戸市教育委員会；1986）でも同様であり、馬淵川水系は大梁川遺跡を指標とする石鏃組成の分布圏からは除外する。馬淵川水系の荒谷A遺跡を除いたこれらの遺跡の石鏃の組成は凹基・平基の石鏃が主体で菱形の石鏃が客体的に少数存在することで共通する。したがって山形県・宮城県（北部を除く）・福島県北部・秋田県南部を大梁川遺跡を指標とする石鏃組成の分布圏と考える。

2. 縦長剥片を素材とした特定器種

縦長剥片を素材とした石匙・両側刃加工のスクレイパー・エンドスクレイパーの分布は第354図に示す。なお第354図の「石核」は縦長剥片を剥離した石核で、「石匙」は縦長剥片の側刃などにつまみ部を作り出し、横長の形態にした石匙の分布である。以下の17遺跡があり、これらは山形県・宮城県を中心に秋田県南部にも分布する。

【雄物川水系】 千曲町内村遺跡

【最上川水系】 村山市中村A遺跡（渋谷・名和；1983）、東根市小林遺跡（佐藤鎮夫他；1976a）、寒河江市うぐいす沢遺跡、寒河江市向原遺跡³¹（佐藤・渋谷；1981）、大江町橋上遺跡（犬飼・高橋他；1984）、山形市熊の前遺跡、長井市長者屋敷遺跡（佐藤正四郎；1984）

【名取川水系】 旧宮城町観音堂遺跡（今野隆他；1986）、仙台市山田上ノ台遺跡（渡部・主浜他；1981）、仙台市下ノ内遺跡（篠原信彦；1982）、仙台市六反田遺跡（佐藤洋他；1987）、川崎町中沢遺跡、川崎町湯坪遺跡（一条孝夫；1978）

【白石川水系】 藏王町湯坂山B遺跡、藏王町二屋敷遺跡、白石市菅生田遺跡（丹羽・阿部・小野寺；1982）

前述したように、これらの遺跡で縦長剥片を剥離した石核が出土している遺跡は最上川水系

中流域の橋上遺跡、向原遺跡のみであり、縦長剥片生産技術を有したこれらの地域の生産遺跡から供給されたと考える。したがって縦長剥片の生産は一元的であった可能性が高いが、それらが素材となる器種がこれらの地域では共通することは、このような縦長のスクレイパーを必要とした生業形態の共通性を示唆すると考えられる（阿部朝衛；1986）。

3. 大梁川遺跡を指標とする石器群の分布図

大梁川遺跡を指標とする石器群の分布図と縦長剥片を素材とした特定器種の分布範囲とはほぼ一致する。したがって山形県・宮城県（北部を除く）を中心とし、不明瞭だが福島県北部・秋田県南部に及ぶ範囲を大梁川遺跡を指標とする石器群の分布とする。これらの地域の生業形態の類似性を示すものと考えられる。特に両側刃加工のスクレイパー・エンドスクレイパーが松島湾沿岸部・三陸沿岸部の貝塚地帯に顕著ではなく、これらの器種をもつ大梁川遺跡を指標とする石器群は内陸に適応した生業形態をもつ集団による石器群であると考えられる。縦長剥片の供給から見るかぎり、これらの地域は最上川水系の珪質頁岩の石材供給圏であり、生業形態が類似する地域間で石材の流通関係が成立している点は注目される。

註記

註1：寒河江市向原遺跡（寒河江高校社会部；1969）から大木10式土器とともに出土した縦長剥片とその石器は、寒河江考古第3号（安彦・東海林；1972）では旧石器時代の遺物としている。しかし、東北大学考古学研究室助手会田容弘氏から、現在では大木10型式期の遺物として認識されているとの御教示を賜った。

7. 中期後葉から後期前葉の剥片石器素材の供給関係

剥片石器の主な素材である珪質頁岩、珪化凝灰岩はグリーンタフ地域の各所に見られ、产地を特定することは困難であり、それらに近接する地域では小規模な石材供給関係が複数成立していたと考えられる。グリーンタフが広範囲に渡って分布しない地域としては馬淵川水系、三陸沿岸部・北上川水系、白石川・名取川水系、福島県沿岸部・阿武隈川水系・阿賀野川水系があり、これらの地域では石器素材の供給を他地域に依存しなければならなかつたと考えられる。また、これらの地域と良質な石材が产出する地帯との間に比較的大規模な石材供給関係が成立した可能性がある。特徴的な縦長剥片の分布圏から最上川中流域を生産地とする山形県・秋田県南部・宮城県・福島県北部を中心とする珪質頁岩の石材（剥片）流通圏が不明瞭ながら判明してきた。その他の地域の様相は限られた資料から推測するしかないので、剥片剥離の特徴や石核が極めて多い遺跡などから生産・消費の関係を類推し、各水系ごとにまとめる。

(1) 馬淵川水系

九戸郡蛭米町君成田IV遺跡F49住居跡（後期前葉）（鶴藤勝博他；1983）・丹後谷地遺跡第56号住居跡（後期前葉以前）（八戸市教育委員会；1986）の住居跡床面の剥片貯蔵ピットから両極

剥離で剥離された剥片が出土している。丹後谷地遺跡の原石は径2～4 cmの珪質頁岩の小円礫である。基部加工があり搬形を呈する小形のエンドスクレイパーと石鏃とがこれらの剥片が素材となった石器として指摘されている。

馬瀬川水系では後期前葉の様相しかわからぬが、小円礫を両極剥離で剥離し、小剥片で特定の石器を製作するシステムが成立している。この原因是大形の石材の利用可能度が低く、小転礫から石器を製作する必要性から成立したと考えられる。大形の石材は搬入であろうが、供給地は不明である。

(2) 三陸沿岸部—北上川水系

石材(剥片)生産地 石核が比較的多く残されている遺跡が零石川流域にある。盛岡市繁V遺跡(盛岡市教育委員会; 1984)では中期後葉を主体とする包含層から大形の石核が多く出土している。零石町広瀬II遺跡(松野恒夫; 1980)では中期後葉(大木10式期)を主体とする遺物包含層から、54点の大形粗製刃器(自然面を打面とし、1作業面を持つ石核)が出土している。このような石核は盛岡市繁IV遺跡(上野・工藤; 1980b)、上野遺跡(工藤利幸; 1980)、南ノ又遺跡(上野・工藤; 1980a)などの零石川流域の中期後葉の遺跡から出土している。

中期後葉の時期に零石川流域の遺跡で石核が顕著に増加することは確実である。このような剥片生産がどの程度の規模を有するのかはわからぬが、自己の領域を越えて周辺地域に供給された可能性がある。零石川水系で生産された剥片は技術的な特徴が明確ではないので、縦長剥片のようにその供給圏を明確には出来ない。また、奥羽山系から注ぐ各支流にもこのような石材(剥片)生産の集落が複数成立した可能性がある。

また、三陸沿岸部の頁岩の石材採集遺跡である大船渡市碁石遺跡(芹沢長介他; 1974)などの時期・供給圏などは不明である。

北上川水系中・下流域・三陸沿岸部・鳴瀬川水系・松島湾沿岸部 これら地域の中期後葉の遺跡には縦長剥片が顕著ではないので、最上川流域以外の供給源が考えられる。おそらく北上川水系の奥羽山系の石材(剥片)または大船渡市碁石遺跡などの頁岩などの供給を受けていた可能性がある。気仙沼市田柄貝塚では珪質頁岩、珪化珊瑚岩の産地を奥羽山系のグリーンタフ地帯と同定している(蟹沢; 1986)。また石核が少ないとから、剥片の形で石材が搬入された可能性を指摘している(笠原・茂木; 1986)。

(3) 白石川—名取川水系域

前述のように最上川水系中流域の縦長剥片の分布圏であり、珪質頁岩の供給を最上川水系中流域に依存した地域である。

(4) 福島県沿岸部—阿武隈川水系—阿賀野川水系

阿武隈川水系・阿賀野川水系で石材の供給地帯は不明である。福島県沿岸部の北部および阿

武隈川水系の下流部は南部と比較して珪質頁岩が多く、縦長の剥片も見られる。そのような遺跡としては、相馬郡飯館村上ノ台A遺跡(鈴鹿良一他; 1984)、相馬郡飯館村日向南遺跡(鈴鹿良一他; 1986)、二本松市田地ヶ岡遺跡(梅宮・八巻他; 1975)がある。福島県においては北部では最上川水系の石材の供給を受けた可能性がある。大沼郡会津高田町十五塙遺跡(石本弘他; 1983)などの阿賀野川流域では石質は瑪瑙質など様々で、石材が豊富な印象は受けない。阿武隈川水系・阿賀野川水系では明確な生産-消費関係は成立しなかった可能性が高い。

まとめ 不明瞭ではあるが、中期後葉に零石川水系域と最上川水系中流域とに自己の領域を越えて、他の領域に剥片を供給する剥片生産の拠点的集落群が成立した可能性が高くなった。前者については北上川水系・三陸沿岸部を中心とする供給圏が想定され、後者が東北地方中部を供給圏とすることは縦長剥片の分布からほぼ確実である。このような生産地域はさらに存在する可能性があるが、報告書から把握するのは困難である。中期後葉(大木10型式期)にこのような生産地域が顕著になる理由は明確ではない。しかし白石川水系の大梁川遺跡に見られるように、良質の石材を産出する他地域に石材供給を依存する割合を前時期に比べて強めた領域の増加が背景にあることは確実であろう。中期後葉の東北地方では、このような現象はある程度普遍性を持ち、最上川水系中流域の縦長剥片生産技術はこのような状況に対応して効率的な剥片供給を行う過程で発生(または再生)したと推定される。

3. 遺構

A. 壇穴住居跡の特徴

大槻川遺跡から発見された壇穴住居跡は11軒であるが、そのうち6軒が重複あるいは削平などによって壊されており全体形を残していない。このため、全ての住居跡を同等の基準で扱うには不備な点が多い。しかし、各住居跡の特徴を整理した第14表からも明らかのように、大木10式期の壇穴住居跡では柱穴の配置・炉跡の形態および構造に極めて強い類似性があり、これらを基にするならば壊された住居跡もある程度までは復元することが可能と考えられる。以下では初めに住居跡の時期を述べ、次に時期別の住居跡の特徴について述べてゆくこととする。

(1) 住居跡の時期

検出された住居跡は出土遺物の検討から以下の2時期に大別することができた。

縄文時代中期後葉（大木10式期）——第1号住居跡～第6号住居跡・第9号住居跡

第10A・B号住居跡 計9軒

このうち、第1号住居跡と第2号住居跡・第2号住居跡と第9号住居跡・第10A号住居跡と第10B号住居跡に重複関係があり、第2号→第1号、第2号→第9号、第10A号→第10B号（→は旧→新を表す）と言う時間差が認められている。すなわち、すべての住居跡が同時に存在するものではなく、後述するように同一土器型式期に数軒単位での変遷があったものと考えられる。

縄文時代後期前葉（南境式期）——第7号・第8号住居跡 計2軒

(2) 大木10式期の壇穴住居跡（第355図）

9軒の住居跡における平面形・規模・柱穴・周溝・炉跡・出入口について項目毎にまとめ、その總体としての当該期の住居跡について考えていきたい。

1. 平面形・規模：9軒の壇穴住居跡のうち6軒がほぼ完全な形を留めており（第1・3・4・5・6・9号住居跡）、これらの平面形には円形基調のもの（第1・3・6・9号住居跡）と隅丸方形のもの（第4・5号住居跡）がある。ただし、円形基調とした第3号住居跡は東壁側が僅かに張り出しオムスピに近い形状を呈するなどそれぞれの中で細かな違いも見られる。

なお、部分検出である第2・10A・10B号住居跡の3軒は残存部から推して前者の形である可能性が高い。

| 主 烟 跡 | 平 面 形 | 性 穴 | 周 長 | 炉 | 面 号 | 時 期 |
|--------|--------------------------|--------------------------|---------------|--|--|-----------------------|
| 第1号住跡 | 直径3mの円形 | 主柱3本(三 角形)と補助 柱 | 周長 24m | 炉の部分を除いて 土器埋設石周縁式炉: 土器埋設石周縁・敷石 周縁・石器埋込部(窓口) 幅員: 240×200cm | 新潟北部に複数土器あり 第2号住跡を含む | 大木10式前半 大木川第II層土器類 |
| 第2号住跡 | 直径3m(?) の円形内側 内側) | 主柱3本(三 角形)と補助 柱 | 周長 21m | 炉の部分と一部二重 周縁式炉: 土器埋設石周縁(周縁 上に2カ所)・敷石周縁 周縁: 130×90cm | 炉の外周部に複数土器あり 其1、9号住跡に切られる | 大木10式前半 大木川第II層土器類 |
| 第3号住跡 | 直径4.25m・ 周縁3mの外 ム式 | 主柱2本と補 助柱(直方形) | 周長 17m | 炉の部分を除いて 土器埋設石周縁式炉: 土器埋設石周縁・敷石 周縁・石器埋込部(窓口) 周縁: 180×100cm | 炉と対応する他の窓が現り出す 他の窓の位置は複数の窓で、この部分 の周縁に1箇のビットあり(出入口) | 大木10式前半 大木川第II層土器類 |
| 第4号住跡 | 直径3.4m・ 周縁3mの内 丸方形 | 主柱3本と補 助柱(直方形) | 周長 12m | 炉の部分を除いて 土器埋設石周縁式炉: 土器埋設石周縁・敷石 周縁・石器埋込部(窓口) 周縁: 150×90cm | 炉の外周の位置が複数に現り出し、そ の中央に新たに現られた1箇のビット あり(出入口) | 大木10式前半 大木川第II層土器類 |
| 第5号住跡 | 直径4.2m・ 周縁3mの内 丸方形 | 主柱3本(三 角形)と補助 柱 | 周長 15m | 東壁・炉側面を除 いて立ち、西面で は斜面が現り 立派な壁 | 立派な周縁が現れる部分は出入 口の可能性あり | 大木10式前半 大木川第II層土器類 |
| 第6号住跡 | 直径3.0m～5.9 mの内側式 | 主柱3本(三 角形)と補助 柱 | 周長 12m～18m | 土器埋設石周縁式炉: 土器埋設石周縁・敷石 周縁・石器埋込部(窓口) 周縁: 280×150cm | 炉裏4方向に2箇の複数土器あり 但馬御前の東面の現れる部分は出入りの 可能性あり | 大木10式前半 大木川第II層土器類 |
| 第7号住跡 | 直径4m(?) | 平面 | 無(?) | 地盤炉: 幅90cm | | 複数式炉跡 |
| 第8号住跡 | 直径4m(?) | 不平 | 無(?) | 地盤炉: 幅90cm | | 複数式炉跡 |
| 第9号住跡 | 直径3.0m(?) の内側式 | 主柱・補助柱 の配置(少 少)(?) | 周長 10m | 土器埋設石周縁式炉: 土器埋設石周縁・敷石 周縁・石器埋込部(窓口) 周縁: 180×90cm | 第2号住跡を切る | 大木10式前半 大木川第II層土器類 |
| 第10号住跡 | 直径4m(?) | 主柱・補助柱 の配置(少 少)(?) | 周長 12m | 無(?) | 第10号住跡に切られる | 大木10式前半 大木川第II層土器類 |
| 第11号住跡 | 直径4m(?) | 主柱・補助柱 の配置(少 少)(?) | 周長 12m | 土器埋設石周縁式炉: 土器埋設石周縁・敷石 周縁・石器埋込部(窓口) 周縁: 180×90cm | 第11号住跡を切る | 大木10式前半 大木川第II層土器類 |
| 第12号住跡 | 直径4m(?) | 主柱・補助柱 の配置(少 少)(?) | 周長 12m | 無(?) | 第12号住跡に切られる | 大木10式前半 大木川第II層土器類 |
| 第13号住跡 | 直径4m(?) | 主柱・補助柱 の配置(少 少)(?) | 周長 12m | 土器埋設石周縁式炉: 土器埋設石周縁・敷石 周縁・石器埋込部(窓口) 周縁: 180×90cm | 第13号住跡を切る | 大木10式前半 大木川第II層土器類 |
| 第14号住跡 | 無(?) | 無(?) | 無(?) | | | 複数式炉跡 |

第14表 大木川遺跡住跡一覧

規模については第6号住跡が直径約5.9mで最も大きく、次いで第1・2・5号住跡が直径約5m、第3・10A・10B号住跡が直径4～4.25mで、第4・9号住跡は直径3.2～3.4mと最も小さい。平面形に関係なく、それぞれに大小の別があると言えよう。

2. 柱 穴:すべての竪穴住跡で検出されており、部分検出のものでも残存部から全体の配置を推測することが可能である。柱穴の配置は後述する炉跡と密接な関係を示しており、以下の4通りの形態が見られる。

a : 主柱3本+補助柱 —— 第1・2・5・6号住跡

主体は1本が炉の長軸線上壁沿いに、他の2本は炉の長軸線からほぼ対称の土器埋設石周縁部両側にそれぞれ位置し、この3本を結ぶ線は第1・2・5号住跡で正三角形を、また第6号住跡では二等辺三角形を呈している。なお、前述した各住居の記載では第1・5・6号住跡の主柱は炉の長軸線上の掘込み部端に位置する1本を含め4本の可能性もあるとしたが、この柱が他の3本に較べて規模がやや小さく、かつ浅いこと、第2号住跡のように必ずしも認められない例もあることなどから判断して補助柱の一つとして理解した。また、他の補助柱は周溝内に位置する場合が多く、いわゆる壁柱穴としてもよいものである。これらの配置にも主

柱同様に規則性が見られ、石壠部両側の主柱の延長線上で炉の長軸線と平行する位置に2~4本が配されるものが多い。

b : 主柱2本+補助柱? —— 第3・4号住居跡

主体は炉の長軸線からほぼ対称の土器埋設石壠部と敷石石組部の境目の両側に配され、補助柱は2本の主柱の延長線上(炉の長軸方向に平行)の周溝内にそれぞれ1本と炉の長軸線上の掘込み部端に位置する1本である。主柱2本と延長線上の補助柱2本を結ぶ線は第3号住居跡では正方形・第4号住居跡では長方形を呈している。

c : 主柱と補助柱の区別なく4本 —— 第9号住居跡

規模・深さがほぼ一定する4本の柱穴が炉の長軸線上で土器埋設石壠部を中心に対称の位置にそれぞれ1本(1本は炉の掘込み部端に位置)と炉の長軸線上で先の2本の柱間隔の3/4の位置からほぼ対称にそれぞれ1本が配されている。4本を結ぶ線はタコ形を呈する。

d : 主柱と補助柱の区別なく6本(以上?) —— 第10A・10B号住居跡

重複する2軒でほぼ同様の柱配置が見られる。推定に拠る部分が多いがcと似た柱穴が壁沿いに多角形状(?)に配されるものと思われる。

3. 周溝: 第9・10A号住居跡を除く7軒で認められる。いずれも堅穴住居跡の壁沿いを全周するものではなく、部分的に途切れている。周溝の在り方には次の5通りがある。

a : 炉の掘込み部を除いて認められるもの —— 第1・3号住居跡

幅は15~20cmでほぼ同じであるが、深さは両住居跡ともに一定せず部分的に深い場所・浅い場所がある。

b : 炉の掘込み部と壁沿いの一部を除いて認められるもの —— 第5・6号住居跡

第5号住居跡では東壁側と炉の左側(南壁西側)になく、西壁側のほぼ中央部で断続する部分がある。また、第6号住居跡では西壁側のほぼ中央部と炉の右脇側が途切れている。

c : 壁沿いの一部を除いて認められるもの —— 第4号住居跡

炉の左側(南壁部分)になく、その北側では部分的に幅広くなっている。

d : 壁沿いの一部にしか認められないもの —— 第2・10B号住居跡

炉と反対側の壁沿いに部分的に見られる。両住居跡ともに部分検出であるためこれが本来の在り方が否かは明らかではない。第2号住居跡では二重に見られる部分もある。

e : 認められないもの —— 第9・10A号住居跡

4. 炉跡: 第10A号住居を除く8軒で検出されており、いずれも「複式炉」である。炉の大きさは住居跡のほぼ半径に相当し、住居の中心から壁際に接する長大なものである。炉の長軸(主軸)方向は住居跡の長軸に一致するものが多い(第4号住居跡のみが住居長軸に直交)。また、構造的には極めて類似性が強く、土器埋設部・敷石石組部・掘込み部の3部からなって

いるが、細部では違いも認められ、以下のように分けられる。

a : 土器埋設石囲部+敷石石組部+石囲掘込み部(開口)からなるもの

—— 第1・4・5・6号住居跡

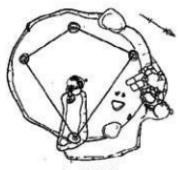
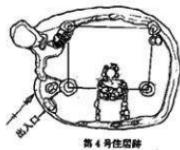
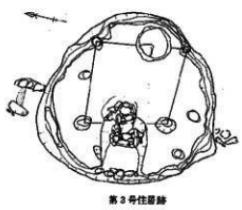
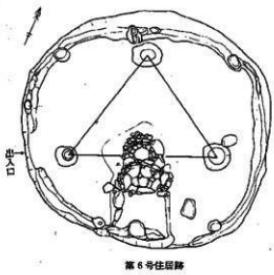
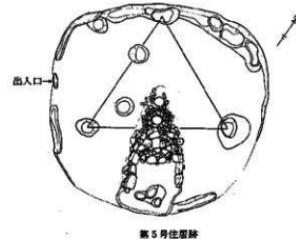
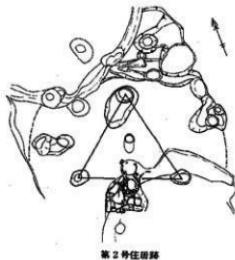
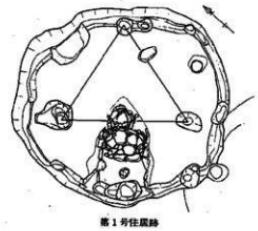
円形の土器埋設石囲部に長方形の敷石石組部および石囲掘込み部が取りつく形状を呈し、土器埋設石囲部と敷石石組部の境には括れが見られる。埋設土器はいずれも深鉢形土器で第5号住居跡で2個、他では1個が見られ、長軸線上に位置している。第1・5号住居跡(5号は埋設土器1)のものは底部を欠き、第4・6号住居のものは口縁部を欠いている。第5号住居の埋設土器2は胴部だけを据えたものである。また、石の配置について見ると第5号住居跡では偏平なものを幾重にも丁寧に敷き並べて埋設土器を囲うのに対し、第4号住居跡では挙大なもので一重にのみ囲うという違いが見られる。第1・6号住居のものは両者の中間的なものである。

次に敷石石組部について見ると、炉の長軸線に直交する長軸あるいは長辺を持つ椭円形・長方形を呈し、断面形は逆台形状のものが多い。底面は比較的小さく、偏平な石数個で作られているが、壁面は下段に大きな石を配し、左右の側壁ではその上に一回り小さな石を3~4段に積み重ねている。また、奥壁および石囲掘込み部側の前壁は側壁以上に大きな石が使用され、第4号住居跡のように一枚石で奥壁を作るものもある。壁面の傾斜は奥壁側が最も緩く、側壁側が急になっている。住居床面から敷石石組部底面までの深さはいずれも30cmほどである。

石囲掘込み部は幅が敷石石組部とほぼ同じでは正方形に近い形状である。掘込みの側壁に方形で偏平な30~50cm大の石を長辺を炉の軸に揃え、側面を下にして配されており、敷石石組部の外縁から連続するものが多い。底面は敷石石組部底面より10~20cm高くなっている。第6号住居跡では端部が溝状にほりこまれている。なお、各部位の外周に使用された石の上面のレベルは住居床面のレベルより僅かに高くなっている。

b : 土器埋設石囲部+敷石石組部+掘込み部(開口)からなるもの —— 第9号住居跡
平面形態はaとはほぼ同様であるが、aに比して敷石石組部から掘込み部にかけての幅が狭くなっている。埋設土器は深鉢形土器の胴部だけを据えたもので炉の軸線上に位置している。石の配置は残存状態が悪いせいかaに比して雑である。住居床面から敷石石組部底面までの深さは12cmでaに比して浅い。

c : 土器埋設石囲部+敷石石組部+掘込み部(閉鎖)からなるもの —— 第3号住居跡
掘り方・土器埋設石囲部の形状および石の配置・敷石石組部の石の配置はaの第4号住居跡とはほぼ同様であるが、敷石石組部はaに比して幅が狭く、側壁に使用されている石の上面のレベルも住居床面より10~20cm低くなっているなどの違いがある。住居床面から敷石石組部底面までの深さは各類を通して最も深く40cmを測る。掘込み部の側石および閉塞石の有無を除



0 3m

第355図 大栗川遺跡大木10式期堅穴住居跡集

けば基本的にはa同様のものと言えよう。埋設土器は底部を欠く深鉢形土器である。

d：土器埋設部+敷石石組部+石囲掘込み部（開口）からなるもの——第10B号住居跡a～cとの違いは埋設土器の周囲を石で囲っているか否かだけで、これを除いてはa同様と言える。

埋設土器は口縁部を欠く深鉢形土器である。

なお、第2号住居跡については残存部から推して構造的にはa～cのいずれかに属するものと思われるが、同じく複数の埋設土器をもつ第5号住居跡の炉平面形に比して敷石石組部と土器埋設石囲部の境に括れがないこと、敷石石組部に平坦な底面がなく、前後の壁面がV字状になっていることなど細部に違いがみられる。

5. 出入口：周溝の切れ・小ピットの配置・壁の緩やかな傾斜などから出入口を推測できる住居跡が4軒ある（第3・4・5・6号住居跡）。位置について見ると、いずれも住居あるいは炉の長軸線から外れており、炉の両脇に位置する主柱に近い左右いずれかの側（第4・5・6号住居では左側・第3号住居跡では右側）にある。地形との関係では斜面の低い側に位置するとも言えよう。

以上、9軒の住居跡について項別に述べてきたことに若干の私考を加え、大梁川遺跡大木10式期の住居跡について小結とする。

1. 平面形には円形基調と隅丸方形基調の二者があり、前者が多い。また、規模は径あるいは長軸長が3.2～5.9mまであり、4～5mのものが主体を占める。

2. 柱穴の配置には4つのパターンがあり、主柱3本と補助柱の組み合形状態（aタイプ）が特徴的である。また、炉脇に位置する主柱に着目するとaタイプと主柱2本と補助柱の組み合うbタイプはその配置が基本的には同様のものであり、bタイプの在り方は住居規模に相応した主柱の削除と見ることができよう。さらに、主柱・補助柱の区別なく4本配されるcタイプ、多角形に配されるdタイプは主柱の配置と言う基本線でa,bタイプとは異なっているがaタイプの補助柱を結んだ形状はdタイプに近い形状であり、bタイプにしても住居規模に相応するaタイプからの変形として理解できるものである。dタイプは他の3タイプに較べて住居内面積より広くとるための柱構造・柱配置の変化を考えることもできよう。また、大きな捉え方としては、a+bタイプを炉と一体化した柱配置で大梁川遺跡大木10式期住居跡の基本的な柱構造・柱配置とすることができる。

3. 炉の構造は細部において若干異なる所もあるが、基本的には土器埋設石囲部・敷石石組部・石囲掘込み部の3部から成る複式炉で形態も極めて類似性が強い。位置は土器埋設石囲部の先端部がほぼ住居の中心にあたり（第5号住居跡のみ住居の中心が2個の炉跡埋設土器の間に位置）、規模は住居のほぼ半径に相当し端部が壁際に接する。埋設土器は1個の

ものが5軒で2個のものが2軒ある。いずれも炉の長軸線上に位置し、完全な形のものはない。

4. 炉両脇の主柱を結ぶ線（梁）が第1・6号住居跡では炉埋設土器の上を通り、第2号住居跡では2個の炉埋設土器の間を、第3～5号住居跡では土器埋設石圓部と敷石石組部の境を通っている。すなわち、炉脇の主柱は炉の燃焼部（土器埋設石圓部・敷石石組部）を意識した配置が為されていると言える。
5. 周溝は多くの住居跡で認められているが、全周するものはない。また、周溝の途切れ・小ピットの配置などから出入口を推定できる住居跡がある。出入口は住居あるいは炉の主軸からはずれ、炉の両脇に位置する主柱に近い左右いずれかの側の炉寄りにある。地形的には斜面の低い側に位置している。
6. 住居平面形、炉の構造・形態、住居規模に相応した柱の配置、出入口の位置など、住居構造は極めて企画性の強いものである。そして、これらの住居跡すべてが、同時存在しない中において連続して見られる住居構築の技術からは集団（集落）内における住居構築の相互規制・技術の伝達等を知ることができる。

（3）南境式期の住居跡

竪穴住居跡2軒がある。いずれも全体の半分以上が壊されており、住居構造については不明な部分が多いが、推測も含めて簡単にまとめておきたい。

1. 平面形・規模：ほぼ円形を呈すると考えられ、規模は径2.7～3mの小さいものである。
2. 住居内の施設で明らかなものは炉である。これは径50～60cmの地床炉で住居のほぼ中央部に位置している。なお、柱穴・周溝は検出されていない。

県内において当該期の遺物の検出は多く知られているが、住居跡の検出は少なく、仙台市六反田遺跡（佐藤洋；1987）での8軒が最もまとまった検出例である。六反田遺跡の住居跡は平面形が梢円形を呈する例が多く、規模は長軸が4.2～6.6mで本遺跡例に較べて大形である。周溝は認められない例が多く、柱穴は4～6本が方形基調あるいは多角形に配されている。炉は石圓炉が多く、他に土器埋設石圓炉、土器埋設炉があり、本遺跡のような地床炉はない。炉は住居中央部に位置するもの、壁寄りに位置するものがある。

本遺跡例は断片的検出であり六反田遺跡例と比較するには無理な面も多いが、規模・炉の構造には大きな違いがあると言えよう。また、中期末葉の大木10式期に主体的であった複式炉が全く認められない事も当該期の住居跡の大きな特徴であろう。しかし、未だ検出例が少なく、総体としての住居跡の検討は今後の類例の増加を待つて行うべきと考えられる。

(4) 3本柱構造住居跡の検討

大梁川遺跡の大木10式期の堅穴住居跡で主柱3本を持つ住居跡が構造的特徴として抽出された。この柱構造を持つ住居跡は1970年代の初め頃から福島県中央部の縄文時代中期後葉の遺跡で主に発見されており、従来までの4本～6本あるいはそれ以上の主柱を持つ住居跡に較べ、その特異性から多くの関心を集めてきた。また、検出された住居跡がいずれも複式戸を有することから「複式戸住居の上屋構造は3本柱を基本として案出された」という考え方も示され(梅宮; 1974)、その原因としては「炉の大規模化に応じ、床面積における使用有効面積の拡大、複式戸の石組部上に梁を通さないと言う構造上の必要性があったため」(目黒; 1976)等が考えられている。本項では、この特異な3本柱構造の住居跡がどのような分布を示すのかを検討し、若干の考察を加えてゆくことにする。

1. 3本柱構造を持つ堅穴住居跡の分布と特徴について

手元にある資料をもとに標記の堅穴住居跡の分布を見ると、太平洋側では岩手県の北部から栃木県の北部にかけて、日本海側では秋田県の中央部から山形県の全域、すなわち複式戸の分布する範囲とほぼ同じような分布を示すことが看取される。また、これらを時期別に見ると岩手県の一部の住居跡を除いて大木10式期の前半に集中して認められる傾向が指摘される。

第356図は東北地方南部を中心とした大木10式期の主な集落跡の位置を示したもので、●印は3本柱構造を持つ住居跡が検出された遺跡を表している。以下では、これを基に検討を進めていきたい。

3本柱構造を持つ堅穴住居跡は秋田県で1遺跡1例、岩手県で5遺跡14例、宮城県で7遺跡13例(本遺跡例を含む)、山形県で6遺跡9例、福島県で12遺跡36例、栃木県で1遺跡1例が知られる。

a. 秋田県

秋田市四ツ小屋下堤B遺跡で1例(S42J5住)が検出されている(第357図1・2)。

径3.4mを呈する円形の住居跡で、住居の中心からやや壁寄りの部分に埋設土器1個と掘込み部から成る複式戸(両者の間に立石)を有している。柱の配置は戸の主軸線上に1本と主軸線とほぼ直交する戸の両脇にそれぞれ1本である。埋設土器の年代から大木10式期と考えられている。

b. 岩手県

県北部の二戸郡輕米町呉屋敷Ia遺跡で3例(BII-4、6、10住)、同郡九戸村江刺家遺跡で1例(FI-1住)、同江刺家IV遺跡で1例(DAI0-1住)、同獄II遺跡で1例(第15住)、岩手郡松尾村長者屋敷遺跡で8例(HII-2、HVII-20、IVII-1、JVII-13・20、OI4-1、



第356図 大木10式期の主な集落跡（●印は3本柱構造住居検出遺跡）

第15表 3本柱構造の堅穴住居跡の分布と大木10式期の主な集落跡

| 図番号 | 遺跡名 | 所在地 | 文献 |
|-----|---------|----------------------|-------------------|
| 1 | 下堤B | 秋田県秋田市四小屋小河地 | 齊藤後行 (1976) |
| 2 | 内村 | 秋田県仙北郡千畠村千葉字内村 | 島山憲司 他 (1981) |
| 3 | 梨ノ木塚 | 秋田県平鹿郡塙田町吉野 | 島山憲司 他 (1979) |
| 4 | 臥屋敷a | 岩手県九戸郡輕米町大字軽米 | 小平忠孝 他 (1983) |
| 5 | 崖口 | 岩手県九戸郡輕米町大字江刺家 | 鳴千秋 他 (1984 b) |
| 6 | 江刺家宮 | 岩手県九戸郡輕米町大字江刺家 | 國生尚 他 (1985) |
| 7 | 江刺家 | 岩手県九戸郡輕米町大字江刺家 | 鳴千秋 他 (1984 a) |
| 8 | 松尾長者屋敷 | 岩手県岩手郡松尾村字松尾 | 瀬川司男 他 (1980) |
| 9 | 湯沢 | 岩手県紫波郡南浦村第1地割字湯沢1の12 | 高橋文夫 他 (1978) |
| 10 | 観音堂 | 岩手県御賀郡大迫町大追第十二地割他 | 牛村良泰 (1986) |
| 11 | 五十瀬特社前 | 岩手県江刺市相澤字中島128地 | 菅原弘太郎 (1979) |
| 12 | 宮沢原E | 岩手県胆沢郡胆沢町若柳字五大堂 | 伊藤鉄夫 (1976) |
| 13 | 玉造 | 宮城県玉造郡出山町一栗 | 千葉久 (1980) |
| 14 | 長根 | 宮城県遠田郡涌谷町小里字長根 | 伊東信雄 他 (1989) |
| 15 | 山前 | 宮城県遠田郡小牛田町北浦字山前 | 宮教委 (1979) |
| 16 | 大谷地 | 宮城県和美郡色麻町小桑山 | 茂木芳光 (1984) |
| 17 | 大木園 | 宮城県宮城郡七ヶ浜町大字東合浜字大木 | 八谷正文 他 (1974) |
| 18 | 観音堂 | 宮城県仙台市下愛子字観音堂 | 今野 雅 (1985) |
| 19 | 山田上ノ台 | 宮城県仙台市山田上ノ台 | 渡部弘美 他 (1981) |
| 20 | 下ノ内 | 宮城県仙台市富沢 | 鶴原信彦 (1983) |
| 21 | 湯坪 | 宮城県柴田郡川崎町今宿字上ノ台 | 一條拳夫 (1978) |
| 22 | 中沢 | 宮城県柴田郡川崎町大字内字中沢 | 後藤勝彦 他 (1975) |
| 23 | 二層敷 | 宮城県刈田郡蔵王町宮守二層敷 | 鈴藤道男 他 (1984) |
| 24 | 菅生田 | 宮城県白石市福岡町菅生田 | 丹羽 茂 他 (1982) |
| 25 | 大塩川 | 宮城県刈田郡七ヶ浜町大塩川 | 本書 |
| 26 | 小塩川東 | 宮城県刈田郡七ヶ浜町小塩川 | 真山 慎 (1984) |
| 27 | 馬見塚 | 福島県相馬市麻木字芹谷地字馬見塚 | 鈴鹿真一 他 (1982) |
| 28 | 岩淵 | 福島県伊達郡見附市大字立字岩淵 | 日高 吉昭 他 (1976) |
| 29 | 上ノ台A | 福島県相馬郡飯舘村大倉字上ノ台 | 鈴鹿真一 他 (1984) |
| 30 | 日向・日向南 | 福島県相馬郡飯舘村大倉字日向 | 芳賀(1982)・鈴鹿(1986) |
| 31 | 鬼沢上原A・B | 福島県二本松市原瀬上原 | 日高他・木本元治(1970) |
| 32 | 原瀬上原 | 福島県二本松市原瀬久保ノ上 | 日高他明 他 (1969) |
| 33 | 田地・岡 | 福島県二本松市鬼沢 | 日高他明 他 (1970) |
| 34 | 上林 | 福島県耶麻郡山都町木幡東原 | 秀賀英一 他 (1983) |
| 35 | 觀音山 | 福島県日村郡猪俣村大字猪俣字大平 | 中村五郎 他 (1984) |
| 36 | 三斗尋 | 福島県石川郡平林村上通字三斗尋 | 田中正姓 他 (1978) |
| 37 | 中村A | 山形県村山市大字湯野沢字中村 | 名和達朗 他 (1983) |
| 38 | 小林 | 山形県東根市東根字小林 | 佐藤正俊 他 (1976) |
| 39 | 樺上 | 山形県西村山郡大江町樺上 | 高橋邦夫 他 (1984) |
| 40 | 山形西高 | 山形県山形市鉄砲町 | 佐藤庄一 他 (1979) |
| 41 | 熊ノ筋 | 山形県山形市熊ノ筋 | 佐々木洋治 他 (1981) |
| 42 | 長者屋敷 | 山形県長井市草間長者原 | 佐藤正四郎 (1984) |
| 43 | 下野 | 山形県西置賜郡小国町増岡 | 佐々木洋治 他 (1981) |
| 44 | 墓塚 | 山形県西置賜郡小国町増岡 | 佐藤正俊 他 (1982) |
| 45 | 大清水 | 山形県米沢市万世町 | 手塚幸 他 (1986) |
| 46 | 根沢 | 福島県須坂郡西郷町根沢 | 澤老原部雄 他 (1980) |

SV-5a・b住)が検出されている(第357図3~17)。

住居跡の平面形には円形(江刺家、嶽II、長者屋敷IVII-1・JVII-20住)、楕円形(吠屋敷Iaの3例、長者屋敷HVII-20・JVII-13、OVII-1住)、隅丸方形(江刺家IV、長者屋敷HII-2・SV-5a・b住)の三者がある。規模は長者屋敷OIV-1住が主長軸6mと大形であるが、他は長軸あるいは直径が3.5m~4mほどの小形である。長者屋敷JVII-13住を除いて周溝はない。

炉の構造には複式炉(2ヶ所の石壠部あるいは石壠部と掘込み部から成り埋設土器はない)……吠屋敷Iaでの3例、江刺家での1例、長者屋敷JVII-20住)、土器埋設石組炉(埋設土器は1個……長者屋敷OVI-1、SV-5a住)、石組炉(江刺家IV、嶽II、長者屋敷HVII-20住)、土器埋設炉(長者屋敷IVII-1住)、地床炉(長者屋敷JVII-13住)の5タイプがある。

柱配置は複式炉の場合は炉の主軸線上に1本と主軸に直交する炉の両脇にそれぞれ1本が位置する場合が多いが、石組炉の場合は江刺家I V DAI0-1住、嶽II 15住のように炉の主軸線上に直交する線上に1本とそれに対応する壁際に2本が配されるものと、長者屋敷HVII-20住のように炉の中心を通って住居長軸線上壁寄りに2本と住居短軸線上の壁寄りに1本が配されるものがある。土器埋設石組炉は石組炉の後者同様の配置である。一方、後二者の場合は炉を中心に正三角形状の配置がなされ、柱は壁寄りに位置している。

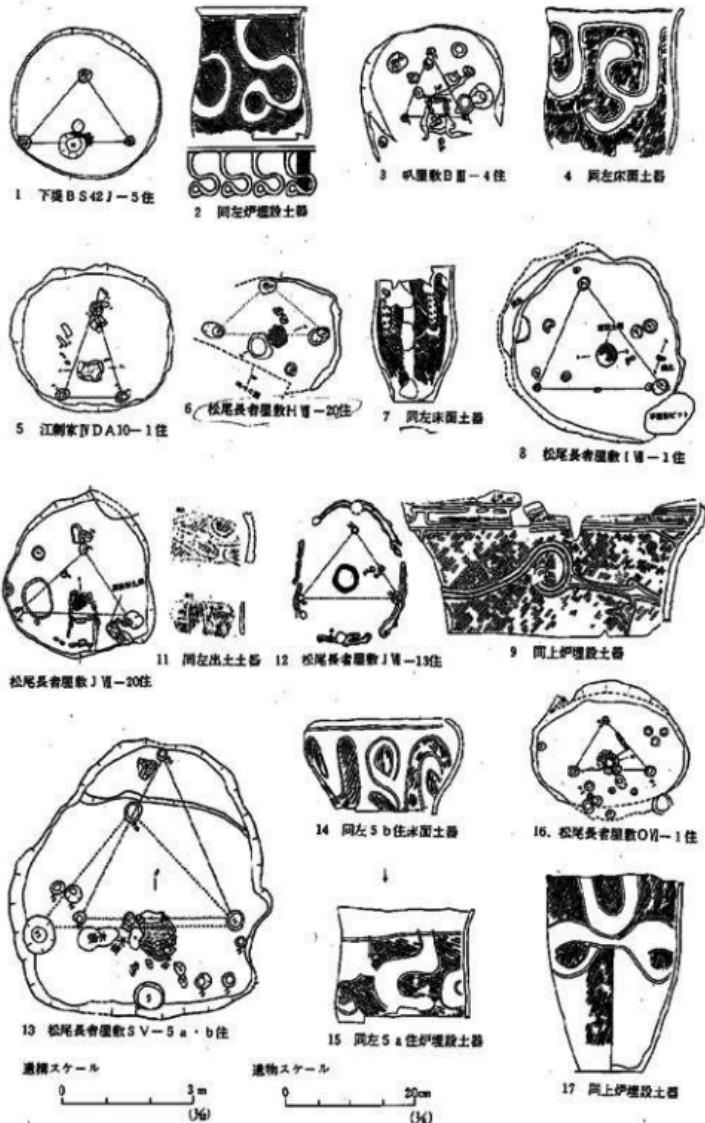
住居跡の時期は埋設土器あるいは床面出土土器の年代から長者屋敷IVII-1住が大木8b式期、JVII-20住・HVII-20住が大木9b式期、吠屋敷Ia、江刺家IV、江刺家、嶽II、長者屋敷OVI-1、SV-5a・b住は大木10式期と考えられている。他の住居跡については住居に伴う遺物がなく、その時期は明らかではない。

c. 宮城県

県北部の加美郡色麻町大谷地遺跡で2例(第1、3住)、県南部の仙台市(旧宮城町)観音堂遺跡で2例(第1、2a住)、柴田郡川崎町中沢遺跡で2例(第1・2住)、同湯坪遺跡で1例(第1住)、白石市菅生田遺跡で1例(第4住)、刈田郡七ヶ宿町小梁川東遺跡で1例(第8住)が検出されている(第358図1~13)。

平面形は大谷地1・中沢2住が円形、大谷地3住・観音堂の2例・小梁川東8住が隅丸方形に近いもので、規模は直径あるいは長軸が4~5.1mである。(中沢1・湯坪1・菅生田4住は平面形・規模ともに不明)。周溝は観音堂1住、中沢1・2住では認められるが、他の遺跡例では認められない。

炉はいずれも土器埋設石組複式炉で先に分類した本遺跡の炉aと似ているが、大谷地3住では石組部底面に敷石がなく、小梁川東8住では掘込み部底面の一部にも敷石が見られるなど細部では違いも見られる。また、菅生田4住では炉の土器埋設部北側の床面(住居のほぼ中央部



第357図・3本柱構造の住居跡 (1)



図358図 3本柱構造の住居跡 (2)

にあたる)に敷石が見られる。埋設土器は菅生田4住では三重になって検出され、また、小梁川東8住では2個が並列して見られるが、他はいずれも1個である。すべてが炉の主軸線上に配されている。

柱配置は炉の主軸線上の柱が炉側に寄っているもの(大谷地3住、観音堂2a住)、炉脇の2本が壁沿いに位置するもの(大谷地1住)、炉の主軸線からはずれて三角形状に配されるもの(小梁川東8住)もあるが、周溝が巡る観音堂1住・中沢2住では周溝内の補助柱の配種なども含め基本的に本遺跡例とほぼ同様である。

住居跡の時期は埋設土器あるいは床面出土土器の年代などからいざれも大木10式期と考えられている。

d. 山形県

県中央部の村山市中村A遺跡で2例(第1・3住)、東根市小林遺跡で1例(B区3住)、西村山郡大江町橋上遺跡で1例(第11住)、県南部の長井市長者屋敷遺跡で3例(第1・4・10住)、西置賜郡小国下野遺跡で1例(第6住)、米沢市大清水遺跡で1例(第3住)が検出されている(第358図14、第359図1~4)。

平面形は中村A・橋上での3例・長者屋敷10住が円形で、他は隅丸方形である。規模は小林3住が長軸3mと小さいが、他は4~5mである。周溝は中村A3住・橋上・長者屋敷遺跡での5例に認められる。

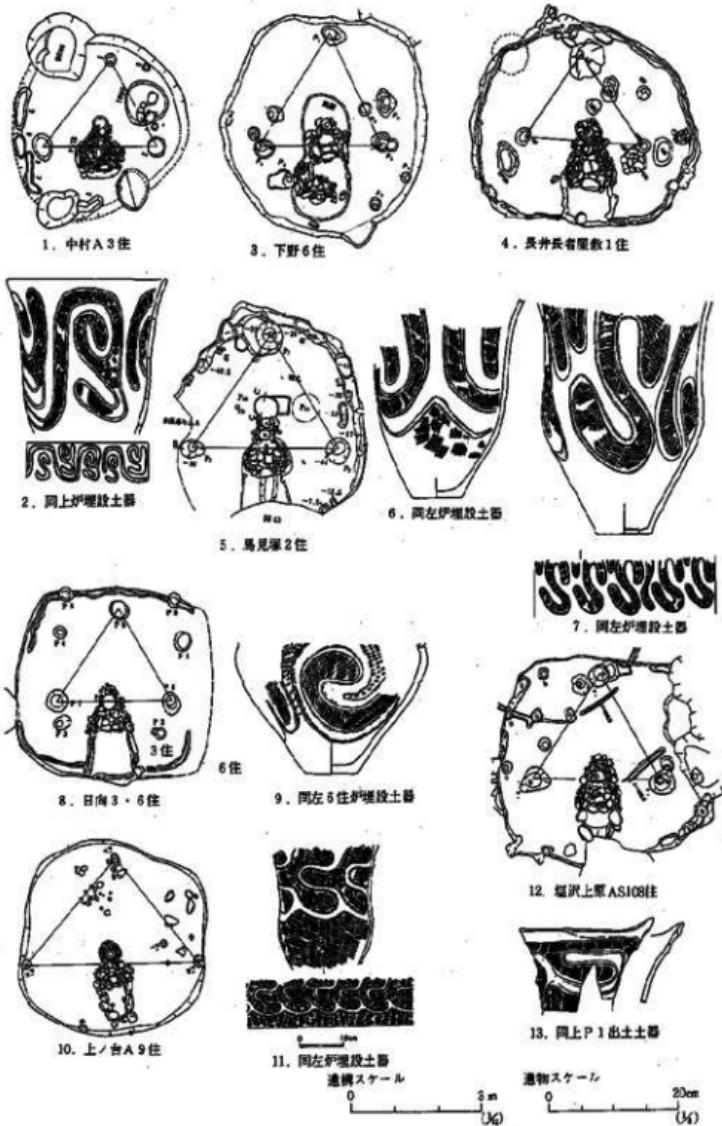
炉はいざれも土器埋設石組複式炉で、中村A3住では掘込み部がない。埋設土器の数は長者屋敷1住が2個、他は1個で、いざれも炉の主軸線上に配されている。柱は小林3住のみ炉の主軸線と関係ない配置を呈しているが、他の例は基本的に本遺跡例と同様である。

住居跡の時期は埋設土器あるいは床面出土土器の年代から大木10式期と考えられている。

e. 福島県

県北部の伊達郡国見町岩瀬遺跡で2例(第1、2住)、相馬市馬見塚遺跡で1例(第2住)、相馬郡飯館村上ノ台A遺跡で2例(第4、9住)、同村日向遺跡で1例(第6住)、同村日向南遺跡で1例(第21住)、二本松市塩沢上原A遺跡で7例(I区3・6・9・12・II区1・S I08・S I09・S I16住)、同上原B遺跡で1例(第5住)、同原瀬上原遺跡で9例(第1・2・5・8の第2層住・9・10の第2層住・11・13・14住)、同田地ヶ岡遺跡で8例(第3・9・10・11・12・14・15・18住)、耶麻郡山都町上林遺跡で1例(第2住)、県南部の田村郡滝根町観音山遺跡で1例(J-1住)、石川郡平田村三斗寺遺跡で1例(第19住)が検出されているなど、県中央部以北の遺跡に多く分布している(第359図5~13、第360図1~11)。

平面形には円形、隅丸方形、六角形の三者があり、以下のようになる。



第359図 3本柱構造の住居跡 (3)

- 円形（16軒）………岩渕1・2、塩沢上原AI区3・6・9、SI09、原瀬上原1・2・8
 の第2層・9・11・13・14、田地ヶ岡3、上林2、観音山J-1住
- 隅丸方形（16軒）………上ノ台A4・9、日向6、塩沢上原AI区12・II区1・SI08、同B5原
 瀬上原5・10の第2層住、田地ヶ岡9・10・11・12・14・15・18住
- 六角形……………馬見塚2、日向南21住
- 不明……………三斗蒔12・塩沢上原AS I16住

規模は岩渕1住が直径7.4m、原瀬上原13住が直径6.25m、同8の第2層・三斗蒔12住が直径あるいは長軸が5.7mと大きいが、他は直径あるいは長軸が4.5～5mの大きさである。周溝は上ノ台A9、田地ヶ岡3・12・15、観音山1住を除いて認められる。

炉はいずれも土器埋設石組複式炉で、岩渕2・上ノ台A4・三斗蒔12住では掘込み部がなく、塩沢上原AS I08・09、田地ヶ岡18住、上林2住を除いて掘込み部端が住居壁に接している。埋設土器は岩渕2住で5個が3ヶ所にあり、うち1ヶ所で3重になっている。（炉の主軸に対する位置関係は不明？）塩沢上原AS I09住で3個（炉の主軸線上に並列して2個、土器埋設部と石組部の境目右側に1個）・上ノ台A4住、塩沢上原AI区12住、II区1住、田地ヶ岡18住で2個など複数個が認められるが、他は1個だけである（1～2個の場合は炉の主軸線上に位置している）。

柱配置は3本を結ぶ線が正三角形あるいは二等辺三角形を呈し、本遺跡同様に炉の主軸線上に1本、炉脇に主軸線から対称に2本が配され、補助柱と組み合うものが多く見られる。

住居跡の時期は埋設土器あるいは床面出土土器の年代からいざれも大木10式期と考えられている。

f. 栃木県

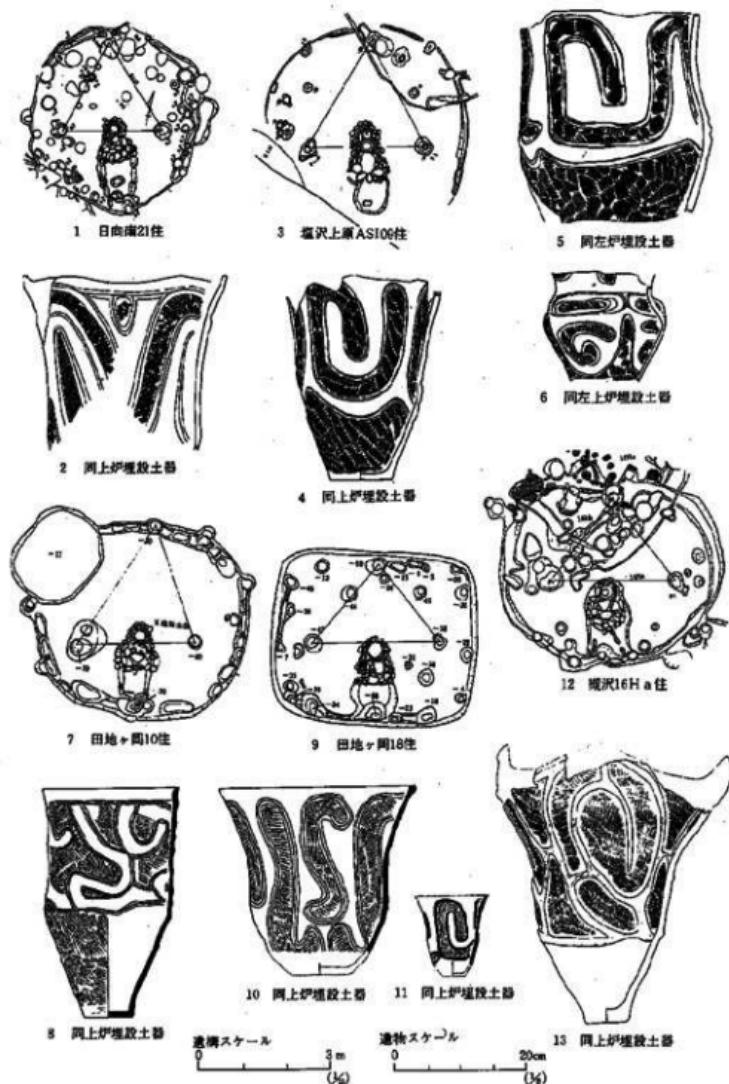
県北部の那須郡西那須町棚沢遺跡で1例（第16Ha号住）が検出されている（第360図12・13）。

平面形は隅丸方形で、規模は長軸5.2m・短軸4.5mである。住居には周溝が巡り、炉は土器埋設石組複式炉で埋設土器は1個である。主柱・周溝内の補助柱ともその配置は本遺跡例に似ている。

住居跡の時期は埋設土器の年代から大木9b式期と考えられているが、福島県石川町小田口D遺跡での出土例を見る限り（福島他；1985）、本遺構の時期は大木10式期としてよいであろう。

以上が手元にある資料から知り得る3本柱構造を持つ住居跡である。これを各遺跡の立地を含め整理すると次のようにまとめられる。

a. 3本柱構造の住居跡は岩手県北部から栃木県北部にかけて分布が見られ、標記の遺構が検出された遺跡はいざれもその地域を流れる大小の河川流域に形成された段丘あるいは丘陵・



第360図 3本柱構造の住居跡 (4)

台地上に立地し、山間地を主とした内陸部に分布する傾向が指摘される。

b. 標記の遺構の分布は大きく二つの地域に分けられる。一つは栃木県北部～宮城県北部・山形県中央部以南の地域であり、福島県中央部から宮城・山形県の南部に集中（以下 A 区）して見られる。他の一つは岩手県～秋田県中央部の地域であり、岩手県北部に集中（以下 B 区）して見られる。

c. A 区・B 区で検出された住居跡での共通する特徴としてはいずれも大木式土器を使用する住居であること、複式炉を有する住居跡では同時に 2 本の柱が位置する場合が多いことなどがあげられるが、出現する時期、住居の規模、複式炉も含めた炉の構造などには地区による違いが顕著に表れている。

d. 標記の住居跡は均理設土器あるいは床面出土土器など住居跡と密接な関係を示す遺物が提示されている例から見ると、B 区では大木 8b 式期に出現し大木 10 式期まで見られ、A 区では大木 10 式期初頭に見られ、その前半期に集中する傾向がある。

e. 標記の住居跡の平面形はともに円形・隅丸方形が主体で梢円形あるいは多角形のものが稀に見られる。この在り方は先に掲げた各遺跡内で検出された標記の柱構造を有する以外の当該期の住居跡の平面形あるいは酒井宗孝・大野憲司・児玉準の集成した当該期の住居跡平面形（酒井；1987、大野・児玉；1983）に対して特殊な形状を示すものではない。

f. 規模は A 区では直径あるいは長軸が 4～5 m が主であり、当該期の他の住居跡の規模もほぼ同様の大きさである。一方、B 区では 3m ほどのものが主であり、当該期の他の住居跡の規模（4～5 m が多い）に較べて小さいものが多い。B 区での標記の柱構造住居跡について小平忠孝は「規模が小さい住居の特徴的柱構造」（小平他；1983）としている。

g. A 区・B 区の標記の住居跡では炉の構造における差異が大きい。A 区で検出されている炉は各点に若干の違いは認められるものの丹羽茂の分類（丹羽；1971, 1974）による「上原型複式炉」に属するものであり、中でも b 類とされるものが多い。一方、B 区では大木 8b 式期に「単式炉」が見られ、大木 9 式期以降は、「複式炉」と共存している。ただし、「複式炉」は丹羽茂によって定義づけられた「複数の燃焼部を有する炉」（丹羽；前掲）よりも「石囲炉に掘込み部が付属するなど広義の複式炉」（中村；1982, 1986）の形態であることが多い。

なお、地区別の炉の構造には上記のような差異が見られるが、同一地区内では当該期の他の柱構造を持つ住居跡の炉と差異はない。

以上のように標記の住居跡の分布は大きく二つの地域に分かれ、それぞれの地域で住居の規模、炉の構造に共通性があり、炉の構造の差異に地域としての大きな特徴が認められた。A 区・B 区では出現時期に差があるが、検出例が多い大木 10 式期で比較した場合「上原型複式炉」の

分布域が A 区・B 区の区分をより明確に示していることが伺われる。

「上原型複式炉」の分布について見ると、その北限は現在のところ大木10式期の集落跡である秋田県仙北郡内村遺跡（畠山；1981）であり、岩手県では県南部の胆沢町宮沢原A・E遺跡（伊藤；1876）で大木9式期に完成された形で出現し、以後の大木10式期では江刺市五十瀬神社遺跡などで退化した形態が認められるに過ぎないとされている（中村；1982）。主体となる炉の形態は先にも述べた広義の複式炉であり、「上原型複式炉」は一部で共存するだけである。さらに宮城県での分布について見ると、菅生田遺跡の報告（丹羽他；1982）でも述べているように県南部では主体を占めているが、県東北部の涌谷町長根貝塚では石組複式炉であり、また、大谷地遺跡に近い県西北部の岩出山町玉造遺跡では5基検出された炉のうち「上原型複式炉」は1基だけで、他に石組複式炉2基、楕円形石組内土器埋設炉1基、詳細不明の土器埋設炉1基であるなど、炉の形態にも地域差が認められている。県西北部の例などは岩手県南部の炉の在り方に共通する面が多いようにも思われる。

すなわち、3本柱構造と「上原型複式炉」が組み合う住居跡の分布は宮城県南部～福島県中央部・山形県中央部以南がその中心域であり、宮城県北部域はその北限地域と見ることが可能である。

なお、3本柱構造住居跡の出自については炉跡の形態との密接な関係が示唆され、B 区での例から地床炉→石組炉、さらに複式炉と変化する炉跡の変遷に呼応する住居構造の変化と考えることができよう。つまり、地床炉は柱配置が終了してから任意の場所に設けられる可能性の強い炉であり、石組炉あるいは複式炉はその場が設定された後に柱配置がなされる可能性が強いと考えるのである。そして、「複式炉」が盛興した大木9式期～大木10式期の中でも大木10式期の前半期を主に、限定された時期の柱構造の一形態として「上原型複式炉」を主体的に構築する A 区において3本柱構造が取り入れられたと理解するものである。

縄文時代中期の住居跡についてその柱配置の変化を県内での例で見ると、七ヶ宿町小梁川遺跡（真山他；1987）では大木8b式期以前と以後で柱配置に変化が見られ、この変化は炉跡の形態変化、すなわち地床炉から複式炉への変化の過程において理解が可能である。地床炉の場合は住居平面形と柱配置に相関性が見られ、楕円形の住居跡では住居の長軸線を境に長方形状の配置を示し、円形の場合に多角形状の配置を呈する場合が多い。一方、石組炉や複式炉の場合は炉の場所を意識した柱配置に変わっており、炉の主軸線上あるいは主軸線を境に対称に配置される傾向がある。この傾向性は中期前葉の集落跡である川崎町中ノ内A遺跡（古川他；1987）や中期後葉の集落跡である大衡村上深沢遺跡（後藤他；1987）でも認められており、先に述べた岩手県での在り方と共通するものと言えよう。

東北地方の縄文時代中期後葉の住居跡では炉跡の形態に前代との大きな違いがあり、その兆

しは中期中葉の段階にすでに現れている。さらに、炉跡の変化に伴って住居構造・住居構築技術にも大きな変化が見られ、この変化は生活そのものにも反映されたものと考えられる。そして、これまで述べてきた3本柱構造住居跡もこうした変遷の中の通過点における住居構造の一形態として位置づけることが可能であり、文化圏あるいは地域圏を知る一つの指標となる遺構と考えられる。

B. 他の遺構の年代と特徴

1. 敷石遺構

事実記載で第11号住居跡として述べた遺構である。外周の石が長辺を揃え、側面を下にして壁を形成すること、敷石が平坦で壁沿いの石の配置に規則性が見られることなどから住居跡の可能性を考えたが、検討の結果、内部構造において住居跡とする根拠に乏しく、ここで敷石遺構として住居跡とは一応区別するものである。出土遺物から南境式期初頭に位置づけられる。

県内での類似遺構としては白石市菅生田遺跡（丹羽他；1982）、仙台市下ノ内遺跡（篠原；1983）同山田上ノ台遺跡（渡部・主浜；1981）などの中期末大木10式期の集落跡で検出されている敷石住居跡、藏王町二屋敷遺跡（加藤他；1984）で埋設土器6基を伴う後期前葉の配石遺構（第1号配石遺構）、七ヶ宿町小梁川東遺跡（真山；1984）で検出されている中期末あるいは後期前葉と考えられる敷石遺構がある。大木10式期の例とは石を敷き詰めていると言う現象面での類似性はあるものの、内部における炉、柱穴などの構造面に大きな違いがある。また、二屋敷遺跡の例は長軸11m、短軸9mの規模の大きな楕円形状のもので、40cm大の河原石の間に10cm前後の小砾を詰め込んでいる。配石には部分的に弧状の石列や小単位の石組と見られる個所もあるが、明確な単位を示すものではない。炉、柱穴などは伴わず、配石下と配石面の双方から埋設土器が検出されており、埋葬に関連した配石遺構と考えられている。小梁川東遺跡例は敷石に焼け面が伴うものであるが、大部分が重複する遺構に壊されており全体の様子は知りえない。二屋敷遺跡例とは大木10式期の住居跡以上に類似性を見る事ができるが、本遺跡例では敷石が認められているだけに過ぎず、その性格づけを行うことは無理である。

2. 炉跡

6基の炉跡は各々が住居跡に付随するものであるならばその位置関係からすべてが同時存在するものではない。炉の構造は第1号～第4号の4基が複式炉で、他の2基については残存状況が悪く判断しがたい。時期については6基のうち3～5号の3基に埋設土器が見られ（第3・5号で2個、第4号で1個）、また2号でも掘り方（？）から深鉢形土器の出土があり、その文様等から推定が可能である。南側遺物包含層出土土器との対応でみると以下のようになる。

大木9式後半期—第2・3号炉 計2基

大木10式前半期—第4号炉 計1基

不明——第1・5・6号炉 計3基（第5号炉埋設土器は地文のみのため）

すなわち、住居外の炉跡には最低でも大木9・10式期の2時期のものがあるわけで、以下では先に述べた住居跡の炉（a～d）と簡単な比較をしておきたい。

大木9式期の2基は擾乱等により残存状況が悪く、構造の一部が知られるだけである。第2号炉は焼面の状況から燃焼部が第3号住居跡寄りに位置することが考えられ、敷石部分は火を受けていないことから掘込み部と考えた。つまり、a～dの掘込み部とは敷石の有無と言ふ違いが見られる。一方、第3号は基本的にはdの構造に近いものであるが、掘込み部の状況は第2号に似ている。また、埋設土器を2個配置するなどaの第5号住居跡やa～cのいずれかと考えられる第2号住居跡炉の埋設土器の配置と共通する部分もある。

また、大木10式期の第4号はbとdの中間的な構造であり、当該期のものと同様である。

3. 埋設土器遺構

住居外で検出された9基のうち土器の文様等から年代を知り得るものが8基ある。これらはいずれも大木10式期のものと考えられ、南側遺物包含層出土土器との対応関係は以下のようになる。

大木10式前半期—第1・4～8・10号埋設土器遺構 計7基

大木10式後半期—第3号埋設土器遺構 計1基

不 明——第2号埋設土器遺構（出土土器の存在不明） 計1基

ただし、大木10式前半期としたものはすべてが同時存在するものではなく、第7・10号埋設土器は第IIa～b層出土土器に類似し、第4・5号埋設土器は第IIc～d層出土土器に類似するなど同一土器期としたものの時間差が認められ、段階的に構築されたものと考えられる。

掘り方は埋設する土器よりわずかに大きい程度のものが多く、円形あるいは椭円形を呈している。また、使用されている土器はいずれも深鉢形で、正位に配され、第3・8号を除いては底部を有している。器高は30～35cm（推定を含む）のものが多く、文様を有する土器の使用が多い。底部の有無を除く傾向性は住居内の炉を含む埋設土器にもほぼ同様のことが言える。

埋設土器遺構は貝塚を中心に土器内部から人骨が検出される例が多く（菊地：1983）、埋葬に関連した遺構とする見解が多い。本遺構の場合も土壤分析等の理化学的処理を行っていないものの他の類例との類似性から同様の見解をとりたい。

4. 土 壤

検出された4基から土器が出土しているが、底面から出土しているのは第1号土壙だけで他の3基は堆積土中からの出土である。堆積土は第1号土壙では明らかではないが、他は自然流

入と考えられるものである。したがって、土器の年代が必ずしも遺構の年代を示すものではないが、近接した時期の遺構と見ることは可能と思われる。南側遺物包含層出土土器との対応関係は以下のようになる。

大木10式前半期—第3号土壙 計1基

大木10式後半期—第1・2・4号土壙 計3基

次に、土器の出土状況を見ると第1・3号はほぼ完全な形であり、前者では鉢形土器が横円形を呈する土壙の長軸側の端で斜位に、後者では注口付き浅鉢形土器が円形の土壙の中央部で正位で検出されている。また、第2号では方形の土壙の全体に及ぶように深鉢形土器が横位で押しつぶされた状態で検出され、土器は底部が欠損している。第4号の場合は2個体分の深鉢形土器破片資料である。つまり、検出状況がいずれも異なっており、出土土器の形態も埋設土器等に較べて多様になっている。

これらの土壙の性格については明らかでないが、第2号については中期前葉～中葉の七ヶ宿町小梁川遺跡で検出されている埋設土器遺構（真山他；1987）の在り方に類似するものであり、この形態が中期後葉の仙台市御堂平遺跡（齊藤・佐々木；1983）でも検出されていることと合わせて埋設土器遺構の一形態である可能性も考えられる。

C. 遺跡の構成

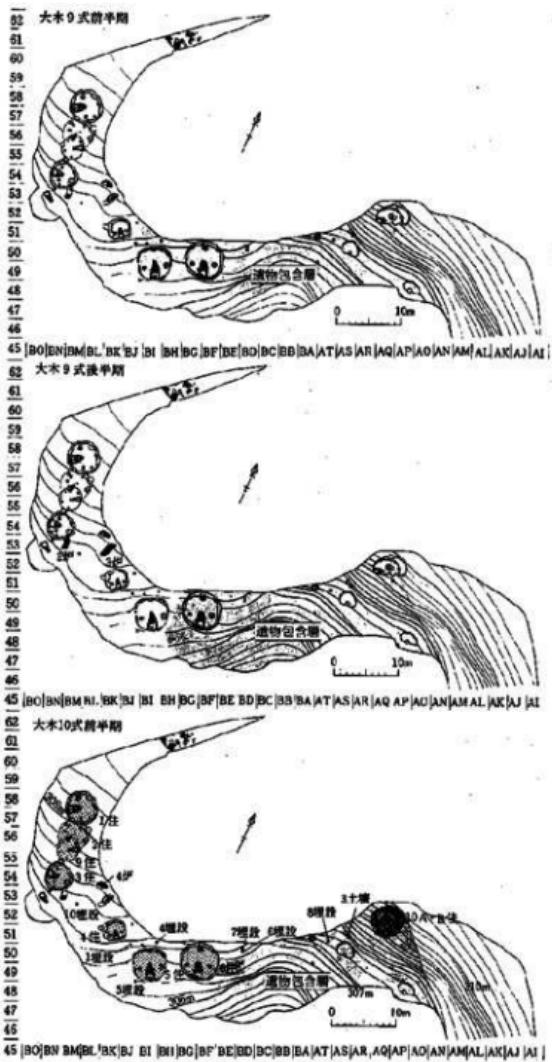
大梁川遺跡は白石川支流の大梁川に面して舌状に張り出す南向きの丘陵緩斜面（標高300～310m）に立地する遺跡で、南北約80m・東西約50m（約4000m²）ほどの広がりをもつ。

調査区は平坦面から緩斜面に移行する標高306～307mの部分にあたり、地形同様の「U」字状の区画であるが、幅が狭く調査面積も約1000m²で遺跡全体の1/4程度に過ぎない。したがって、集落全体の構成については不確定な部分も多いが、本項では検出された遺構をもとに大梁川遺跡における遺構の変遷等を推測してみたい。

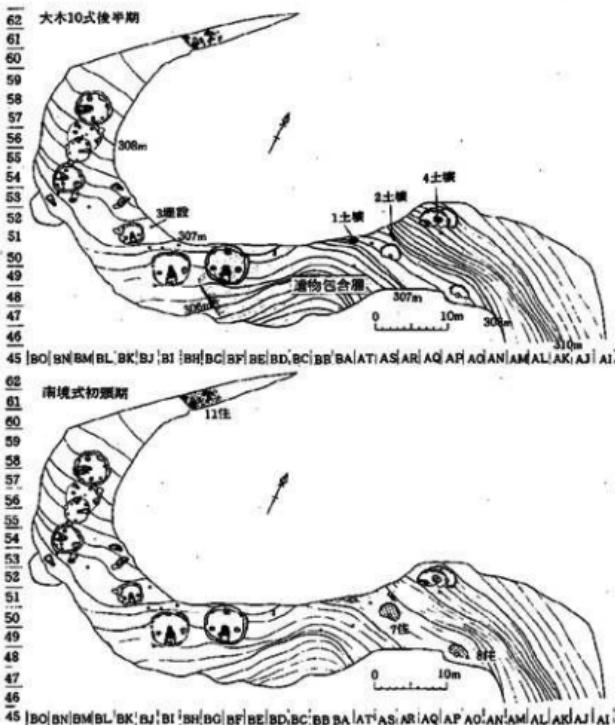
大梁川遺跡の遺物で最も遡るのは縄文時代前期初頭の上川名上層式後半期の土器で、遺構や遺物包含層から数点が検出されている。また、縄文時代中期中葉の大木8b式土器も一片が見られるが、これらに伴う遺構の検出はない。遺構としては大木9式期のものが最も古く、後期初頭までのものがほぼ連続して検出されている。以下、南側遺物包含層出土土器から設定した時期に合わせて各期の遺構の変遷について述べてゆく。

大木9式前半期【第IV層期】（第361図）

沢状の地形になるBA・BB50・51区を中心に複数の層からなる遺物包含層の形成が見られ、包含層末端の伸びはAN～BJ・48区から北側に広がっている。本期では住居跡等の遺構は検出されていないが、地形から判断すると調査区北側の平坦面にその存在が予想される。



第361図 遺跡の変遷（1）



第362図 遺跡の変遷 (2)

大木9式後半期 [第III層期] (第361図)

前代とほぼ同じ地区に同様の遺物包含層の形成が見られ、遺物は前代に較べて斜面の下位まで広く分布している。また、包含層から西へ約25~30m離れた地区で2基の複式炉が検出されている。炉の周辺からは柱穴・周溝などの検出がなく、住居跡と断定することはできないが、仮に住居跡であっても重複するものではなく、炉の構造や住居主軸方向の共通性から同時存在は可能と考えられる。包含層の規模などから見て、2軒単位ぐらいの小単位から形成される集団がある程度の間を数単位存在していた可能性が考えられる。

大木10式前半期 [第Ⅱ層期] (第361図)

前代同様の地区にやや斜面下位まで広がる遺物包含層があり、この西側地区を主に竪穴住居跡9軒・炉跡1基・埋設土器遺構7基・土壙1基など本遺跡で検出された遺構の大部分が本期に属する。ただし、住居跡には重複するものもあり、すべての遺構が同時存在するものではない。住居跡の配置・構造について見ると、第10A・B号遺物包含層北側の標高310mほどの最も高い斜面部分に位置し、柱配置・炉の構造に他の住居跡と違いを示している。一方、他の住居跡は遺物包含層西側の標高306～308mの平坦面に位置し、柱配置・炉の構造など基本的な住居構造は極めて類似している。さらに、近接する第4～6号の3軒では炉の主軸方向・出入口の位置にも共通性を示し、同様に近接する第1・9・3号、第4号炉でも炉の主軸方向に共通性が見られるなど、小単位でまとまりが示唆される。

このように住居跡は遺物包含層を境に構造の異なる二群に分けられるが、第10B号の炉に使用された埋設土器と第6号の炉掘り方向埋設土器は土器・文様の在り方がまさに同じものであり、あえて分離する必要のない同一集団内における差異と考えられる。

重複関係、配置の状況、炉埋設土器の文様等から本時期における住居跡の在り方としては、第2号・第10A号→第1・9・3号=第4～6号=第10B号が考えられ、第6号での遺物廃棄の在り方からこの土器期でさらに新しい段階の住居跡の存在も予想される。検出された住居群からは3軒単位ほどの小単位から形成される集団が数単位存在したことが予想され、その単位集団の総体としての配置が遺物包含層を境に環状あるいは馬蹄形状の配置をとることが考えられる。また、埋設土器遺構を埋葬施設と見た場合、住居域・墓域は分離することなくほぼ同じ地区に存在していると言えよう。

大木10式後半期 [第Ⅰ層期] (第362図)

遺物包含層と埋設土器遺構1基・土壙3基が検出されただけで、前代に多く見られた住居跡は調査区内では検出されていない。遺物包含層の分布は前代とほぼ同様であるが、複数の層が認められた地区はない。土壙は沢状地形上位の遺物包含層あるいは住居跡を切って構築されており、ほぼ等間隔で東西に並んでいる。埋設土器遺構は南側遺物包含層の西側に位置し、土壙とは約25m離れている。水期の遺構の配置・場の使用については調査区の限定もあって、これ以上言及することはできない。

南境式初頭期 (第362図)

竪穴住居跡2軒と敷石遺構1基が検出されている。住居跡は前代まで遺物包含層が形成されていた地区で10mほどの距離を置いて東西に並んでいる。また、敷石遺構は住居跡とは約40m離れた調査区の西北端に位置している。調査区の限定もあって集落全体における遺構の存在は知り得ないが、前代の住居域で1軒の住居跡も検出されていないことから推定すると環状ある

いは馬蹄形状の集落配置を呈するものではないと思われる。

大梁川遺跡における集落の変遷は以上の通りである。大木9式前半期～南境式初頭期までほぼ連続する遺構が認められたが、調査区の限定もあって集落内における「場」についてまで言及することはできなかった。ただし、最も集落が拡大した大木10式前半期では3軒単位ほどの小集団が数単位存在し、その集合体としての環状あるいは馬蹄形状の住居配置が推定された。そして、北側に広がる平坦面は集合体としての共有の場であり、共有の空間である可能性が考えられる。

VI. 総 括

大梁川遺跡の分析を大きく土器・土製品、石器・石製品、遺構の3側面から論じてきた。本章ではこれらの分析成績に基づく有機的な関連性を把握し、大梁川遺跡総体としての位置付けを示し、本報告の結びとしたい。

遺跡内における縦時的な変化は、①土器・土製品、②遺構において捉えることができた。

① 出土土器は縄文時代中期から後期に及び、縄文時代中期は南側遺物包含層における分層発掘によって、「大梁川第Ⅳ層土器」・「大梁川第Ⅲ層土器」・「大梁川第Ⅱ層土器」・「大梁川第Ⅰ層土器」に大別され、大木9~10式に位置付けられた。また、「大梁川第Ⅲ層土器」・「大梁川第Ⅱ層土器」は上部資料・下部資料に土器組成や文様に傾向性の違いが認められた。「大梁川後期初頭土器」は中期土器に比べまとまりの乏しいものではあったが、「大梁川第Ⅰ層土器」からの連続的な延長線上において捉えられるものと把握された。

出土土製品のうち土偶は形態及び文様に若干の差異が認められた。ただし、すべて破片資料のため、必ずしも土偶の全体像あるいはセット等が把握できたとは言えず、今後の調査に待つところも大きい。

② 遺構は中期後葉~後期初頭までのものが継続して認められ、大木10式前半期のものが主体を占めた。当該期の住居跡は平面形(円形あるいは隅丸方形)、規模(4~5mが多い)、炉の構造・形態(上原型複式炉に属するもので住居半径に近い規模)、住居規模に相応した柱配置(5m前後のものでは3本主柱+補助柱が特徴的、3~4mでは2本主柱+補助柱、いずれも主柱のうち2本は炉燃焼部の左右に規則的に位置)、出入口の位置(炉脇に位置するが炉の主軸からはずれる、地形的には斜面の低い側に位置)等に極めて強い企画性を示し、2~3軒単位から成る小単位集団が数単位で一集落を形成し、馬蹄形あるいは環状の集落構成をとることが推測された。さらに、この企画の強い住居構造の分布については福島県中央部から宮城・山形県の南部域が一つの核を形成し、南は栃木県北部、北は宮城県北部がその分布端域である可能性が示唆された。

なお、後期の住居跡は部分的な把握に留まっているが、規模が小さい(径3m前後)こと、炉が複式炉から単式炉(地床炉)に変わっていること等に中期の住居跡との違いが見られた。

このような土器・土製品あるいは遺構には、縦時的な変化が顕著に認められるのに対して、石器の器種組成あるいは形態には大きな変化は認められず、次のような特徴が一貫して認められた。

⑧ 小梁川遺跡と比較して大梁川遺跡で組成比が増加する器種はスクレイバー・両極剥離痕のある石器であり、顕著に減少する器種は大形の尖頭器・笠状石器・不定形石器Ⅰ類・鋸歯縁石器

と交互剥離状石器・石核である。大梁川遺跡の石器群は多様なスクレイバーを特徴とする石器群と言えよう。

⑥ 剥片石器は良質な珪質頁岩の比率が高いのに対して、石核は個体数自体が少なく珪質頁岩の比率も低い。特定器種の素材として利用されている縦長剥片の石核は発見されておらず、最上川産の珪質頁岩の搬入の可能性を考えられた。

⑦ 石器の器種・型式にまとまりが見られる。また全般に小ぶりなものが多く、2次加工の形状はスクレイバーに顕著なように丁寧な平坦剥離が多く認められる。

⑧ 刃部再生あるいは破損石器の転用例が比較的多く認められる。

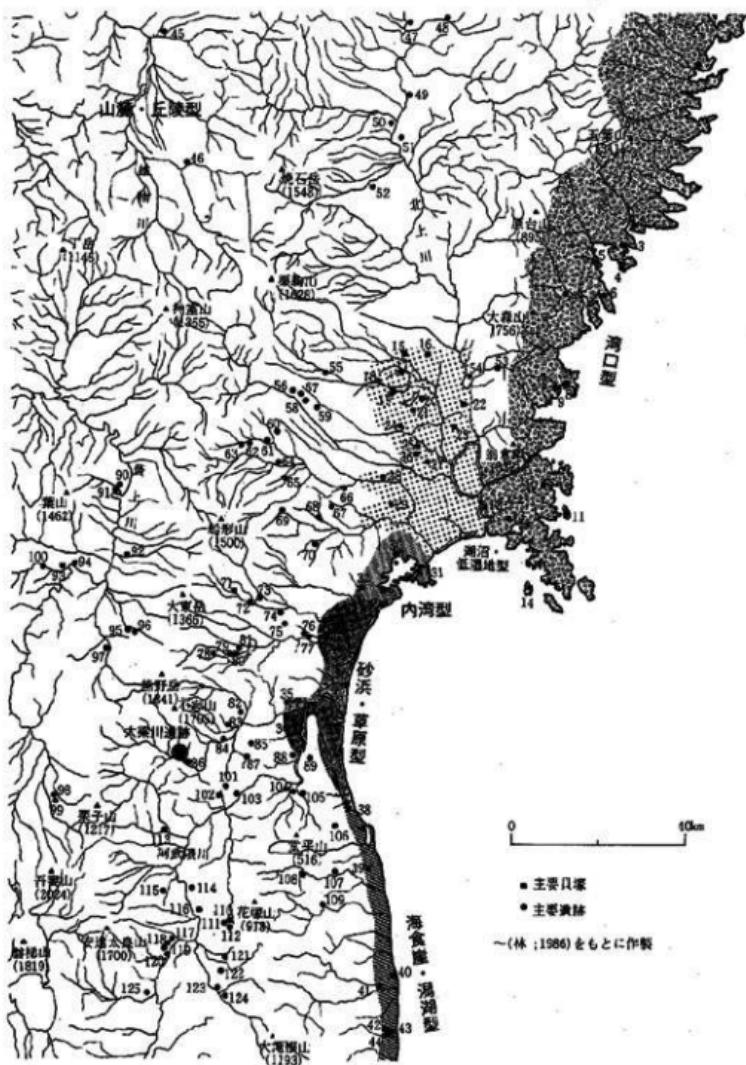
これらの特徴に繩文時代中期後葉から後期前葉において、基本的な生業形態に何ら変更が見られず、安定的な展開過程をたどってきたことを意味するものにはならない。

縄文時代の最も基本的な生業類型は、その生業基盤に基づき沿海型及び山麓・丘陵型の2類型に分類することができよう。沿海型については自然地形の微環境や貝塚研究の成果を受け、さらにいくつかの生業類型に細分（林；1986）されている。山麓・丘陵型の生業類型は、沿海型に比べ扱いの考古資料の限界性から、現状ではその実体に迫ることは極めて困難である。ただし、東北あるいは関東・中部地方を含めた大半の山麓・丘陵は植生的には落葉広葉樹林に覆われており、狩猟・採集対象の動・植物類あるいは内水面漁労対象の魚介類には大きな違いは認め難く、基本的には均質的な生業形態として把握されよう。

このような均質的な生業類型の中でも、いくつかの文化要素には顕著なまとまりが見られ、一定の文化地域を把握することができた。大梁川遺跡では、住居跡に見られる居住様式、あるいは土器に見られる日用の什器類や石器に見られる労働用具の様相、土偶に垣間見ることのできる精神文化の一端は各々強固に結び付きながら、福島県北部～宮城県南西部～山形県を中心とする地域に分布していることが確かめられた。当地域の特色は次のように整理されよう。

まず第一に、地理的条件として、福島県北部～宮城県南西部と山形県との間に位置する奥羽山脈が交渉不可能な壁として屹立するのではなく、相互に比較的容易な交渉を保証しうる規模のものである点があげられよう。すなわち、当地域の主峰は、吾妻山以外はすべて1000m級で特に太平洋側では山頂付近までブナ・ミズナラ林に覆われたる生業の場として積極的に評価されるし、加えて鳴子・最上間の354mの峠をはじめとする七ヶ宿・高畠間の二井宿峠（568m）など1000m以下の峠が数多く存在し、分水嶺を越えた交流が比較的容易に行い得る素地を形成している点である。

第二に、このような極めて均質的な自然あるいは地理的条件にもかかわらず、縄文文化の労働用具の中で極めて重要な位置を占める剥片石器母材の偏在性があげられよう。当地域では最



第363図 開文時代中期～後期前葉の遺跡分布と生業類型

| 西 口 部 | 湖 池・低地 地 型 | 内 池 型 | 海食崖・海崖型 |
|-----------|------------|-------------|-------------|
| 1 岩山山麓跡 | 15 八幡 通跡 | 30 蔵ノ浜貝塚 | 38 三重地貝塚 |
| 2 焼ノ浦貝塚 | 16 丹波風塚 | 31 大木郡貝塚 | 39 八幡 通跡 |
| 3 門前風塚 | 27 大船貝塚 | 32 蔵原貝塚 | 40 湘南貝塚 |
| 4 中沢貝塚 | 18 津 通跡 | 33 大木田貝塚 | 41 梅北貝塚 |
| 5 古ノ下貝塚 | 19 津土通跡 | | 42 南沢通跡 |
| 6 宮越貝塚 | 20 桜在通跡 | | 43 砂出通跡 |
| 7 四郷貝塚 | 21 青島貝塚 | | 44 越寺遺跡 |
| 8 長者塙貝塚 | 22 滝谷貝塚 | | |
| 9 町南貝塚 | 23 御王寺貝塚 | | |
| 10 天保貝塚 | 24 美吉原貝塚 | | |
| 11 出島山下貝塚 | 25 黒根貝塚 | | |
| 12 沖塙貝塚 | 26 山王宮貝塚 | | |
| 13 浅井貝塚 | 27 金沢水道跡 | | |
| 14 仁斗田貝塚 | 28 山前通跡 | | |
| | 29 石竹貝塚 | | |
| 山麓・丘陵型 | | | |
| 45 内村通跡 | 65 大谷地通跡 | 86 小瀬川風通跡 | 107 上野原通跡 |
| 46 斎ノ水寧通跡 | 66 三本木山通跡 | 87 出羽津堂通跡 | 108 吉原・中島通跡 |
| 47 高畠通跡 | 67 上原汎通跡 | 88 開通達跡 | 109 紫雲霧日通跡 |
| 48 駒幸通跡 | 68 安樂院通跡 | 89 桜町通跡 | 110 和合通跡 |
| 49 八天通跡 | 69 下原町通跡 | 90 中山通跡 | 111 広中幸通跡 |
| 50 先御西高通跡 | 70 摺原通跡 | 91 中村A通跡 | 112 波照通跡 |
| 51 韶山通跡 | 71 川崎通跡 | 92 小仲通跡 | 113 月峰通跡 |
| 52 松原通跡 | 72 野川通跡 | 93 向浜通跡 | 114 鳴鉢通跡 |
| 53 松坂通跡 | 73 日代通跡 | 94 うぐいす浜通跡 | 115 白山通内通跡 |
| 54 丸森山通跡 | 74 紙背堂通跡 | 95 山形高萩地内通跡 | 116 向山通跡 |
| 55 寒木橋通跡 | 75 開興A通跡 | 96 鹿ノ前通跡 | 117 駒引上原日通跡 |
| 56 白口通跡 | 76 之前通跡 | 97 二井田通跡 | 118 駒引上原A通跡 |
| 57 沼月沢高通跡 | 77 下ノ内通跡 | 98 八幡原A・B通跡 | 119 田原ヶ岡通跡 |
| 58 五通通跡 | 78 港平通跡 | 99 大瀬水通跡 | 120 原瀬上原通跡 |
| 59 九十九次通跡 | 79 中ノ内C通跡 | 100 檜上通跡 | 121 高橋場通跡 |
| 60 二ツ原通跡 | 80 宇置通跡 | 101 山田通跡 | 122 武平通跡 |
| 61 駒通跡 | 81 中沢通跡 | 102 岩瀬通跡 | 123 前田通跡 |
| 62 三ツ内通跡 | 82 二居原通跡 | 103 高瀬通跡 | 124 宮ノ前通跡 |
| 63 沼上通跡 | 83 空井通跡 | 104 烏通跡 | 125 空井上原通跡 |
| 64 寺市通跡 | 84 菅生田通跡 | 105 七ヶ通跡 | |
| | 85 鶴六通跡 | 106 馬見塙通跡 | |

第16表 遺跡地名表

上川産の珪質頁岩が最も良質で、太平洋側の名取川・白石川産のものは品質が劣り、阿武隈山地では頁岩自体分布しない。石器母材の偏在性は必然的に交易の契機を生み、最上川中流域には高度な専門性をもって主として縦長剥片を生産したと考えられる橋上遺跡や向原遺跡等が見られ、太平洋側に剥片を供給していたものと思われる。

このような石器母材の供給地は零石川産の「珪質泥岩」の剥片生産に関わっていたと考えられる繁遺跡群にも見られ、北上川流域・三陸沿岸・松島湾の供給圏が想定される。この地域は土器・土製品、石器・石製品、遺構にもじて固有の特色が認められ、当地域同様、一定の文化地域を形成していたものと考えることができる。また、この地域の文化は大木10式期では、宮城県沿岸部伝いに南下している様相が土器類型や土偶様式から窺うことができた。

以上のような大槻川遺跡をとりまく地域的なあり方はおそらく縄文時代を通じて、その密度なり、規模の差があるにしても、一貫して変わらない基礎的諸条件の一つと考えることができよう。

引用・参考文献 (五十音順)

- 相原康二 (1981) : 「大地渡遺跡」『岩手県文化財調査報告書』56
- 相原淳一 他 (1986) : 「小梁川遺跡遺物包含層土器編—七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書II」『宮城県文化財調査報告書』117
- 赤木 清 (1937) : 「考古学的遺物と用途の問題」『ひだびと』五九 pp. 1-4
- 阿部彦彦・名和道朗 (1981) : 「下野遺跡発掘調査報告書」『山形県埋蔵文化財調査報告書』38
- 阿部朝衛 (1979) : 「第5章石器 VIIビエス・エスキーコ」『聖山考古学資料集別冊2』東北大文学部考古学研究会 pp. 153-159
- 阿部朝衛 (1986) : 「縄文時代の綫長剥片生産技術」『法政史学』vol. 38 pp. 18-45
- 阿部 恵 (1975) : 「鶴沢遺跡—宮城県文化財発掘調査略報(昭和50年度)」『宮城県文化財調査報告書』40 pp. 129-132
- 秋元信夫 (1981) : 「御林堂遺跡発掘調査報告書」『鹿角市文化財調査資料』19
- 秋元信夫 (1984) : 「天戸森遺跡」『鹿角市文化財調査資料』26
- 石本 弘 他 (1983) : 「十五堆遺跡」『会津高田町文化財調査報告書』36 pp. 40-72
- 磯村朝次郎 (1976) : 「泉野遺跡発掘調査概報別」『男鹿市文化財調査報告書』1
- 市川金丸 (1976) : 「泉山遺跡発掘調査報告書」『青森県埋蔵文化財調査報告書』
- 市川金丸 (1979) : 「東北北部の縄文時代中期の堅穴住居跡」『考古学ジャーナル』No.170
- 一條孝夫 他 (1972) : 「山田遺跡調査報告書」『国見町文化財調査報告書』1
- 一條孝夫 (1978) : 「湯坪遺跡発掘調査概報」『宮城県文化財調査報告書』54
- 伊藤 裕 (1985) : 「文様帶系統論ノート」『赤い本』pp. 1-3
- 伊藤 裕・須田良平 (1987) : 「中ノ内B遺跡—東北横断自動車道遺跡調査報告書II」『宮城県文化財調査報告書』121 pp. 401-466
- 伊藤鉄夫 (1976) : 「宮沢原E遺跡」『宮沢原E・赤利遺跡調査報告書』
- 伊東信雄 (1967) : 「縄文式文化の変遷古代史」『宮城縣史』1 pp. 32-51
- 伊東信雄 他 (1969) : 「埋蔵文化財緊急発掘調査概報—長根貝塚一」『宮城県文化財調査報告書』19
- 稻野裕介 (1983) : 「横穴遺跡発掘調査概報」『北上市文化財調査報告』28
- 稻野裕介 他 (1983) : 「滝ノ沢遺跡(1977~1982年度調査)」『北上市文化財調査報告書』33
- 大庭安太郎・高橋郁夫他 (1984) : 「橋上遺跡」『大江町埋蔵文化財発掘調査報告書』1
- 岩手大学考古学研究会編 (1985) : 『柿ノ木平遺跡』盛岡市教育委員会
- 岩見誠夫 他 (1982) : 「鳥居平遺跡」「飛鳥平遺跡」「北の林遺跡I」『秋田県文化財調査報告書』89
- 上野・工藤 (1980a) : 「南ノ又遺跡」『岩手県埋文センター文化財調査報告書』13
- 上野・工藤 (1980b) : 「繩IV遺跡」『岩手県埋文センター文化財調査報告書』13
- 梅宮 茂 (1960) : 「無野白山住居跡調査報告書」『福島県文化財調査報告書』8
- 梅宮 茂 (1964) : 「田上遺跡」「細越遺跡」「日向道内遺跡」『福島県史』6

- 梅宮 茂 他 (1969) :「上棚窪遺跡」「前田遺跡」『福島県史』1
- 梅宮 茂 (1971) :「東白川郡陰沢村岡ノ岡遺跡資料集」『しのぶ考古』2
- 梅宮 茂 (1974) :「複式炉文化論」『福島考古』15 pp.1-13 福島県考古学会
- 梅宮 茂・八巻一夫他 (1975) :「田地ヶ岡遺跡」『福島県文化財調査報告書』47
- 江坂輝亦・磯崎正彦 (1964) :「縄文土器型式の編年比較表」『日本原始美術』1 付表
- 江坂輝亦 (1965) :「各地域の縄文式土器東北」『日本考古学講座』3 pp.91-124
- 江坂輝亦・渡辺誠 (1977) :「沖ノ原遺跡」『沖南町文化財調査報告書』12
- 海老原郁夫・八巻一夫 (1980) :「棚沢遺跡」『栃木県埋蔵文化財調査報告書』34
- 海老原郁夫 (1981) :「北関東の大木式土器」『縄文文化の研究』4 pp.32-41
- 遠藤勝博 他 (1983) :「君成田IV遺跡発掘調査報告書」『岩手県埋文センター文化財調査報告書』62
- 及川 淳・遠藤勝博 他 (1972) :「室の前貝塚」『陸前高田市教育委員会』
- 及川 淳・遠藤勝博 (1974) :「門前貝塚」『陸前高田市教育委員会』
- 大野憲司・児玉 準 (1983) :「秋田県の縄文・弥生時代の堅穴住居跡」『秋田県埋蔵文化財センター研究協議資料』2
- 小笠原幸範他 (1982) :「山崎遺跡」『青森県埋蔵文化財調査報告書』68
- 小笠原好彦 (1974) :「円筒式文化の崩壊とその意義」『東北の考古歴史論集』pp.55-77
- 岡村道雄 (1976) :「ビエス・エスキーネについて」『東北考古学の諸問題』東北考古学会 pp.75-96
- 岡村道雄 (1979a) :「第5章石器 IX石斧」『聖山一考古学資料集別冊2』東北大学文学部考古学研究会 pp.159-161
- 岡村道雄 (1979b) :「縄文時代石器の基礎的研究とその具体例—その1—」『東北歴史資料館研究紀要』vol.5 pp.1-19
- 小川 出・村田晃一 (1986) :「今熊野遺跡II 縄文・弥生時代編」『宮城県文化財調査報告書』114
- 笠原信男・茂木好光 (1986) :「田柄貝塚II-1土製品・石器・石製品編」『宮城県文化財調査報告書』111
- 梶原 洋 (1986a) :「第II章 青葉山地区の調査 B. 石器の二次加工技術について」『東北大学埋蔵文化財調査年報』2 東北大学埋蔵文化財調査委員会 pp.39-49
- 梶原 洋 (1986b) :「第II章 青葉山地区の調査 6 石器群分析の可能性」『東北大学埋蔵文化財調査年報』2 東北大学埋蔵文化財調査委員会 pp.62-70
- 片倉・中橋・後藤 (1976) :『白石市史別巻一考古資料篇』白石市史編纂委員会
- 加藤 孝 (1968) :「埋蔵文化財第二次緊急発掘調査概報—西ノ浜貝塚—」『宮城県文化財調査報告書』16
- 加藤孝・後藤勝彦 他 (1975) :「宮城県登米郡南町青島貝塚発掘調査報告」『南方町史資料編』pp.1-274
- 加藤 稔 他 (1977a) :「八幡原N25(八幡原A)遺跡」『米沢市八幡原中核工業団地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書』3
- 加藤 稔 他 (1977b) :「八幡原N26(八幡原B)遺跡」『米沢市八幡原中核工業団地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書』3
- 加藤・阿部・小徳 (1984) :「二屋敷遺跡—東北自動車道遺跡調査報告書IX」『宮城県文化財調査報告書』99

蟹沢聰史 (1986) : 「田柄貝塚から出土した石器類の石材について—田柄貝塚II—」『宮城県文化財調査報告書』

111 pp. 309-320

金子拓男・寺崎裕助 他 (1982) : 「羽黒遺跡」『新潟県見附市羽黒遺跡発掘調査報告』見附市教育委員会

金崎住生 他 (1971) : 「福島県郡山市安利町丁跡の上遺跡発掘調査概報」郡山市教育委員会

菊池啓治郎 他 (1968) : 「考古資料」『北上市史』1

菊地 実 (1983) : 「壇棺葬縄文人の精神文化」『縄文文化の研究』9 pp. 57-71

木本元治 (1977) : 「順礼堂遺跡」『浪江町埋蔵文化財発掘調査概報』

日下部善己 他 (1978) : 「夏庭遺跡」『梁川町文化財調査報告書』4

日下部善己 他 (1984) : 「高稻場遺跡」『岩代町文化財調査報告書』5

草間俊一 他 (1968) : 「北上市福浦山遺跡緊急調査報告」『北上市文化財調査報告』3

草間・金子編 (1971) : 「貝島貝塚」岩手県花泉町教育委員会

草間俊一編 (1975) : 「焰山弁天遺跡」大槌町教育委員会

楠本政助 (1973) : 「仙台湾における先史縄糸文化」『矢本町史第I巻先史』pp. 47-265

工藤利幸 (1980) : 「上野遺跡」『岩手県埋文センター文化財調査報告書』13

熊谷太郎・大野憲司 (1984) : 「岱岱IV遺跡—東北縦貫自動車道発掘調査報告書XII」『秋田県文化財調査報告書』

120

熊谷常正 (1982) : 「岩手の土器—県内出土資料の集成ー」岩手県立博物館

熊谷常正 (1986) : 「門前式土器の検討」『岩手県立博物館研究報告』4 pp. 39-61

小岩末治 (1961) : 「上古篇」『岩手県史』1

郡山市教育委員会 (1982) : 「仁井町遺跡・上納豆内遺跡」『河内下郷遺跡群II』

国生 尚・佐々木清文 (1983) : 「江刺家IV・V遺跡発掘調査報告書」『岩手県埋蔵文化財センター調査報告書』

59

国生 尚 他 (1983) : 「湯沢遺跡発掘調査報告書」『岩手県埋蔵文化財センター調査報告書』66

越田和夫 (1972) : 「縄文時代中期における住居跡（炉址）について」『福島大学考古学研究会研究紀要』2 pp.

23-40

小平・種市 (1981) : 「越戸II遺跡」『岩手県埋文センター文化財調査報告書』21

小平忠孝 他 (1983) : 「呉屋敷 Ia遺跡」『岩手県埋文センター文化財調査報告書』61

後藤勝彦・齊藤良治 (1967) : 「西ノ浜貝塚緊急発掘調査概報」『宮城県文化財調査報告書』13

後藤勝彦 (1968) : 「埋蔵文化財第4次緊急発掘調査概報—南境貝塚—」『宮城県文化財調査報告書』15

後藤勝彦 (1969) : 「南境貝塚」『宮城県文化財調査報告書』20

後藤勝彦 他 (1972) : 「中沢遺跡発掘調査報告」『川崎町史』pp. 681-810

後藤勝彦 他 (1978) : 「上深沢遺跡—東北自動車道遺跡調査報告書I」『宮城県文化財調査報告書』52

後藤秀一 (1979a) : 「第5章石器 XII 敷石・凹石・磨石」『聖山遺跡—考古学資料集別冊2』東北大学文学部考古学研究会 pp. 167-171

後藤秀一 (1979b) : 「第5章石器 XV 剥片生産技術」『聖山遺跡—考古学資料集別冊2』東北大学文学部考

- 小林行雄（1930a）：「弥生式土器に施ける櫛目式文様の研究」『考古學』15・6 pp.223-238
- 小林行雄（1930b）：「直弧文私考」『考古學』12 pp.80-89
- 小林行雄（1933a）：「先史考古學に於ける様式問題」『考古學』48 pp.223-238
- 小林行雄（1933b）：「弥生式土器様式研究の前に」『考古學』48 pp.239-244
- 今野 隆 他（1986）：「觀音堂遺跡・新宮前遺跡一愛子バイパス関係」『宮城県文化財調査報告書』118 pp.1-48
- 斎藤尚己（1977）：「北上市福浦町柳山遺跡調査概報」『北上市教育委員会文化財調査報告』19
- 斎藤吉弘・佐々木和博（1983）：「御堂平遺跡」『宮城県文化財調査報告書』97
- 斎藤吉弘・相馬淳一（1987）：「中ノ内C遺跡・東北横断自動車道遺跡調査報告書II」『宮城県文化財調査報告書』121 pp.467-521
- 斎藤良治（1968）：『七夕遺跡調査報告書』丸森町教育委員会
- 斎野裕彦 他（1982）：「北前遺跡発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』36
- 酒井正直編（1984）：「資料『大熊町史』1
- 酒井宗孝（1987）：「岩手県北部における繩文中期後葉・後期前葉の住居跡」『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』VII pp.45-70
- 寒河江高校社会部（1969）：「石田・向原・長岡山出土品篇」『研究集録』6
- 佐々木 勝 他（1984）：「長者屋敷遺跡発掘調査報告書（遺物編）」『岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書』66
- 佐々木洋治 他（1979）：「熊ノ前遺跡発掘調査報告書」『山形県埋蔵文化財調査報告書』16
- 佐藤・主浜（1983）：「茂庭梨野A遺跡」『仙台市文化財調査報告書』45 pp.25-234
- 佐藤庄一 他（1979）：「山形西高敷地内遺跡発掘調査報告書」『山形県埋蔵文化財調査報告書』17
- 佐藤庄吉・片倉信光（1958）：「白石市荒井縄文住居遺跡」『仙台郷土研究』184 pp.15-21 [『赤い本』（1985）に再録]
- 佐藤鎮夫・佐藤正俊（1976a）：「二位田遺跡発掘調査報告」『山形県埋蔵文化財調査報告書』6
- 佐藤鎮夫・佐藤正俊（1976b）：「小林遺跡発掘調査報告書」『山形県埋蔵文化財調査報告書』8
- 佐藤鎮夫 他（1977）：「中山遺跡発掘調査報告書」『山形県埋蔵文化財調査報告書』9
- 佐藤正四郎（1984）：「原始時代の長井」『長井市史』1 pp.1-318
- 佐藤広史（1986）：「型式の空間分布から観た土器型式－東北地方大洞C2期を中心として－」『赤い本』pp.4-22
- 佐藤 洋 他（1987）：「六反田遺跡III」『仙台市文化財調査報告書』102
- 佐藤正俊 他（1980）：「水上遺跡発掘調査報告書」『山形県埋蔵文化財調査報告書』27
- 佐藤正俊・渋谷孝雄（1981）：「うぐいす遺跡（第1次発掘調査）」『山形県埋蔵文化財調査報告書』41
- 佐藤正俊・名和道朗（1982）：「墓塚遺跡発掘調査報告書」『山形県埋蔵文化財調査報告書』58
- 佐藤正俊・蒲生琢磨（1987）：「中沢浜貝塚発掘調査概報III」『陸前高田市文化財報告』11

佐原 真 (1977) : 「石斧論一横斧から縱斧へーー」『考古論集慶祝 松崎寿和先生六十三歳論文集』 pp. 45-86
篠原信彦 (1982) : 「下ノ内遺跡—仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ」『仙台市文化財調査報告書』40 pp. 5
-25

篠原信彦 他 (1983) : 「下ノ内遺跡—仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ」『仙台市文化財調査報告書』56 pp.
5-32

渋谷孝雄・名和達朗 (1983) : 「中村A遺跡発掘調査報告書」『山形県埋蔵文化財調査報告書』

柴田俊彰 (1977) : 「月崎遺跡発掘調査概報・第2次」『福島市文化財調査報告書』2

嶋 千秋 他 (1980a) : 「野林遺跡」『岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書』11 pp. 5-25

嶋 千秋 他 (1980b) : 「高畠遺跡」『岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書』49 pp. 163-252

嶋 千秋 他 (1984a) : 「江利家遺跡発掘調査報告書」『岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書』70

嶋 千秋 他 (1984b) : 「猿II遺跡発掘調査報告書」『岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書』78

菅原俊行 他 (1976) : 「坂ノ上遺跡・下堤遺跡小阿地」秋田市教育委員会

菅原俊行 他 (1984) : 「秋田市秋田蔭空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」秋田市教育委員会

菅原俊行 他 (1985) : 「秋田市秋田蔭空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」秋田市教育委員会

菅原俊行 他 (1986) : 「秋田市秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書」秋田市教育委員会

杉原在介・大塚初重 (1955) : 「常総台地における関東ローム層中の石器文化市川丸山遺跡について」

鈴木 啓 他 (1985) : 「84 塩沢上原A遺跡発掘調査概報」『福島県立博物館調査報告』10

鈴木真一郎 他 (1987) : 「本屋敷遺跡東北横断自動車道遺跡調査報告書Ⅱ」『宮城県文化財調査報告書』121 pp.
701-796

鈴木俊夫 (1964) : 「庚申森遺跡」『福島県史』6

鈴木優子 他 (1983) : 「荒屋A遺跡発掘調査報告書—二戸バイパス開通遺跡発掘調査—」『岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書』57

鈴鹿八重子 (1981) : 「縄文土器・その他高福場遺跡」『岩代町文化財調査報告書』5

鈴鹿八重子 (1983) : 「縄文土器について庚申森遺跡」『川俣町文化財調査報告』6

鈴鹿良一 他 (1982) : 「馬見塚遺跡—縄文時代中期集落跡の発掘調査報告—」『福島県相馬市文化財調査報告書』

鈴鹿良一 他 (1984) : 「上ノ台遺跡A(第1次) -真野ダム開通遺跡発掘調査報告V」『福島県文化財調査報告書』128 pp. 7-282

鈴鹿良一 他 (1986) : 「日向南遺跡(第1次・第2次) -真野ダム開通遺跡発掘調査報告VII」『福島県文化財調査報告書』165

須藤 隆 (1985) : 「東北地方における縄文集落の研究」『東北大学考古学研究報告』1 pp. 1-36

芹沢長介 (1954) : 「関東及び中部地方に於ける無土器文化の終末と縄文文化の発生とに関する予察」

芹沢長介 (1956) : 「縄文文化」『日本考古学講座』3 pp. 44-77

芹沢長介 他 (1974) : 「碁石遺跡」『大船渡市教委社教シリーズ』17

- 高田和德 (1981) :「田中4遺跡」『一戸ハイバス関係埋蔵文化財調査報告』1
- 高橋義太郎 (1982) :「縄文時代の遺物について」『柿ノ木平遺跡』盛岡市教育委員会 pp. 78-85
- 高橋 潤 (1976) :「井沢遺跡」平賀町教育委員会
- 高橋忠彦 (1985) :「七曲台遺跡群発掘調査報告書」『秋田県文化財調査報告書』125
- 高橋・佐藤 他 (1981) :「松尾村長者屋敷遺跡II(遺構編II)」『岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書』20
- 高橋富雄 他 (1975) :「生活はじまる」『大和町史 上巻』pp. 56-57
- 高橋正勝 (1981) :「北海道南部の土器」『縄文文化の研究』4 pp. 10-20
- 高橋正之・高橋与右エ門 (1980) :「繁Ⅲ遺跡」『岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書』13 pp. 239-539
- 高橋正之 他 (1980) :「堂ヶ沢I・II遺跡」『岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書』13
- 田鎖・光井 (1982) :「野駄遺跡第2次発掘調査報告書」『岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書』42
- 竹島国基 (1977) :「萱刈庭B遺跡考古資料」『飯館村史』2
- 田沢湖町教育委員会 (1986) :「黒倉B遺跡」
- 田中耕作 (1985) :「北平B遺跡・岡塚遺跡」『新発田市埋蔵文化財調査報告書』7
- 田中正能・福島大学考古学研究会編 他 (1978) :「三斗蔵遺跡」『平田村埋蔵文化財調査報告書』1
- 田中則利 他 (1981) :「六反田遺跡発掘報告書」『仙台市文化財調査報告書』34
- 玉川一郎 (1978) :「三貴地」新地町埋蔵文化財調査報告書
- 田村 栄 他 (1986) :「本道端遺跡」『比内町埋蔵文化財調査報告書』比内町教育委員会
- 千葉宗久 (1980) :「玉造遺跡」『宮城県文化財調査報告書』68
- 手塚 孝 他 (1986) :「米沢市万世町桑山庄地造成地内埋蔵文化財調査報告書第III集」『米沢市埋蔵文化財調査報告書』17
- 手塚 均編 (1986) :「田柄貝塚I-遺構・土器編」『宮城県文化財調査報告書』111
- 手塚 均・相原厚一 他 (1987) :「西林山遺跡-東北横断自動車道遺跡調査報告書II」『宮城県文化財調査報告書』121 pp. 595-700
- 手塚 均・相原厚一 他 (1987) :「前田遺跡-東北横断自動車道遺跡調査報告書II」『宮城県文化財調査報告書』121 pp. 523-593
- 富樫雅彦・佐藤雅一 (1985) :「信濃川流域を中心とした縄文中期土器群の様相について(上)」『三条考古学研究会機関誌』3 pp. 11-90
- 富樫泰時 (1981) :「東北地方」『縄文土器大成』2 pp. 141-143
- 富樫・柴田 他 (1982) :「駒坂袋I遺跡」『秋田県文化財調査報告書』92 pp. 21-52
- 土岐山武 (1975) :「FトレーニングV-VIII」『宮城県登米郡南方町青島貝塚発掘調査報告』南方町教育委員会
- 戸沢充則 (1986) :「総論考古学における地域性」『岩波講座 日本考古学』5 pp. 1-26
- 仲田茂司・山口 晋 他 (1985) :「西方前遺跡第一次調査」『三春町文化財調査報告書』5
- 中橋彰吾 (1987) :「藏王町考古資料」『藏王町史 資料編』pp. 1-318
- 中村光一編 (1976) :『沼津貝塚保存管理計画策定事業報告書』石巻市教育委員会

- 中村五郎・先崎忠衛 (1984) : 「觀音山遺跡」『高根町文化財調査報告書』1
- 中村良幸 (1982) : 「複式竪」について一岩手県を中心としてー『考古風土記』7 pp. 77-89
- 中村良幸 (1986) : 「觀音堂遺跡第1次～6次発掘調査報告書」『大迫町埋蔵文化財調査報告書』11
- 永山倉造・木本元治 (1972) : 「上原B・C遺跡」『福島県文化財調査報告書』36 pp. 142-148
- 中谷治宇二郎 (1929) : 「弥生式注口土器なる文をみて形式分類の立場を論ず」『史前學雑誌』13 pp. 26-29
- 中谷治宇二郎 (1936) : 「日本新石器文化の一考究」『考古學』7 1・2 pp. 52-71
- 成田滋彦 (1981) : 「青森県の土器」『縄文文化の研究』4 pp. 123-131
- 成田滋彦 (1984) : 「東北地方北部の大木10式土器の周辺—青森県の事例を中心にー」『奥南』3 pp. 19-32
- 名和達朗・野尻 侃 (1977) : 「古道遺跡発掘調査報告」『山形県文化財調査報告書』9
- 新潟県編 (1983) : 「資料編I」『新潟県史』
- 西村正衛 (1958) : 「蛸ノ貝塚」『大船渡市教委社教シリーズ』7
- 西村正衛 (1969) : 「縄文中期文化東北・関東」『新版日本考古学講座』3 pp. 121-140
- 丹羽 茂 (1971) : 「東北地方南部における中期縄文時代中葉・後葉土器群研究の現段階」『福島考古』12 pp. 1-12
- 丹羽 茂 (1972) : 「縄文時代における中期社会の崩壊と後期社会の成立に関する試論」『福島大学考古学研究会研究記要』1
- 丹羽 茂 (1974) : 「福島県における縄文時代中期の住居集落跡研究の現状と問題点」『福島考古』15 pp. 24-36
- 丹羽・三浦 他 (1973) : 「菅生田遺跡調査概報」『宮城県文化財調査報告書』29
- 丹羽 茂 (1981) : 「大木式土器」『縄文文化の研究』4 pp. 43-60
- 丹羽・阿部・小野寺 (1982a) : 「勝負沢遺跡—東北自動車道発掘調査報告書VI」『宮城県文化財調査報告書』83 pp. 43-306
- 丹羽・阿部・小野寺 (1982b) : 「菅生田遺跡—東北自動車道発掘調査報告書VII」『宮城県文化財調査報告書』92 pp. 23-300
- 芳賀・高橋 他 (1982) : 「日向遺跡—真野ダム関連遺跡発掘調査報告書III」『飯館村文化財調査報告書』3
- 芳賀英一 他 (1985) : 「上林遺跡」『福島県山都町文化財調査報告書』2
- 芳賀英一 (1985) : 「道上遺跡—国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告書III」『福島県文化財調査報告書』149
- 芳賀寿幸 (1974) : 「向畠遺跡調査概報」『柴田町郷土研究会報』7
- 芳賀寿幸 (1983) : 「向畠遺跡考古資料」『柴田町誌』資料篇I
- 芳賀良光 (1968) : 「宮城県宮戸島貝塚梨木間遺跡の研究」『仙台湾周辺の考古学的研究』pp. 45-53
- 長谷部言人 (1927) : 「円筒土器文化」『人類学雑誌』42-1
- 畠山憲司 他 (1979) : 「梨ノ木塚遺跡」『秋田県文化財調査報告書』63
- 畠山憲司 (1981) : 「内村遺跡発掘調査報告書」『秋田県文化財調査報告書』82
- 八戸市教育委員会 (1986) : 「丹後谷地発掘調査報告書」『八戸市埋蔵文化財調査報告書』15
- 林 謙作 (1965) : 「縄文文化の発展と地域性—東北—」『日本の考古学』II pp. 64-96

- 林謙作 (1984) : 「宮城県下の貝塚群」『宮城の研究』1 pp. 109-172
- 林謙作 (1986) : 「亀ヶ岡と遠賀川」『日本考古学』5 pp. 93-124
- 原・馬目 (1968) : 「宮城県大木田貝塚発見の遺物について」『古代』51
- 福島大学考古学研究会 (1971) : 「浦尻貝塚」『福島大学考古学研究会発掘調査報告書』1
- 福島大学考古学研究会 (1976) : 「岩瀬遺跡」『福島大学考古学研究会発掘調査報告書』2
- 福島雅議 他 (1985) : 「小田口D遺跡」『福島県文化財調査報告書』147
- 福島雅議 (1987) : 「阿武隈川上流域における縄文時代中期後半の土器」『同志社大学考古学シリーズ』III pp. 75
- 福田友之 他 (1982) : 「御庭遺跡」『青森県埋蔵文化財調査報告書』76
- 藤沼邦彦 他 (1986) : 「里浜貝塚」『宮城県文化財調査報告書』119 pp. 4-15
- 藤沼邦彦 (1987) : 「宮城県出土土偶の概略」『土偶とその情報研究会資料』
- 古川一明 他 (1987) : 「中ノ内A遺跡東北横断自動車道遭跡調査報告書II」『宮城県文化財調査報告書』121 pp. 5-400
- 古川利意 (1985) : 「博毛遺跡」福島県耶麻郡高野村教育委員会
- 邊見柄高 (1973~4) : 「女川町出島山下貝塚第2次~4次調査報告」
- 邊見柄高 (1976) : 「天雄寺貝塚」南三陸先史文化研究会
- 本堂寿一 他 (1978) : 「八天遺跡 本文編」『北上市文化財調査報告』24
- 本堂寿一 他 (1979) : 「八天遺跡 図版編」『北上市文化財調査報告』27
- 松島町教育委員会 (1976) : 「西ノ浜貝塚史跡保存管理計画策定事業報告書」
- 松野恒夫 (1980) : 「広瀬II遺跡」『岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書』13
- 松本茂 他 (1985) : 「堂平B遺跡」『玉川村文化財調査報告書』2
- 松本彦七郎 (1919a) : 「陸前國實ヶ峰遺跡の分層的小发掘成績」『人類學雑誌』345 pp. 161-166
- 松本彦七郎 (1919b) : 「宮戸島里濱介塚の分層的發掘成績」『人類學雑誌』349 pp. 285-315
- 馬目順一 (1968) : 「台の上貝塚における土器意匠の研究」『小名浜』pp. 25-52
- 馬目順一編 (1975) : 「大畑貝塚調査報告」
- 真山悟 他 (1985) : 「小梁川東遺跡一七ヶ宿ダム関係遺跡調査報告書I」『宮城県文化財調査報告書』107 pp. 100-194
- 真山悟 他 (1987) : 「小梁川遺跡一七ヶ宿ダム関係遺跡調査報告書III」『宮城県文化財調査報告書』122
- 三浦圭介 (1986) : 「弥栄平山遺跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財センター
- 宮城県教育委員会 (1976) : 「山前遺跡」
- 宮城県教育委員会 (1984) : 「大梁川遺跡」現地説明会資料
- 宮城県教育委員会 (1986) : 「摺萩遺跡」現地説明会資料
- 村越潔 (1974) : 「円筒土器文化」『雄山閣考古学叢書』10
- 日黒吉明 他 (1969) : 「上原遺跡概報」『二本松市文化財調査報告』
- 日黒・丹羽 (1970) : 「本宮町上原遺跡概報」本宮町教育委員会

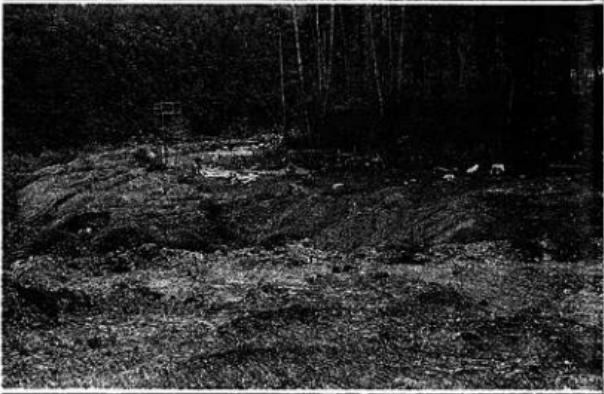
- 目黒吉明 他 (1975) :「塙沢上原A遺跡—東北縄文自動車道開拓遺跡発掘調査報告書Ⅰ」『福島県文化財調査報告書』47 pp. 79-116
- 目黒吉明 (1982) :「住居の炉」『縄文文化の研究』8 pp. 147-166
- 茂木好光 (1984) :「大谷地遺跡—宮城県宮城郡大谷地遺跡詳細分布調査報告書(昭和58年度)」『宮城県文化財調査報告書』100 pp. 153-250
- 盛岡市教育委員会 (1984) :『繁V遺跡』
- 盛岡市教育委員会 (1985) :『柿ノ木平遺跡』
- 森 貢喜 (1975) :「出土土器の考察—塙沢上原A遺跡ー」『福島県文化財調査報告書』47
- 安藤政信・東海林次男 (1972) :「寒河江市向原遺跡」『寒河江考古』3 寒河江考古友の会
- 柳沼賢治 他 (1984) :「谷地遺跡」『岩山東部IV』pp. 55-158 郡山市教育委員会
- 柳沢清一 (1980) :「大木10式土器論」『古代探査』pp. 55-77
- 八巻一夫 (1973) :「東北地方南部における縄文時代末葉の集落構成」『福島考古』14 pp. 19-35
- 八巻一夫 (1974) :「縄文中期文化の一試論」『遮光器』8 pp. 72-79
- 八巻・橋本・鈴木 (1977) :「南和台遺跡-和台遺跡-稲神古墳発掘調査報告書」『南和台文化財調査報告書』2 pp. 1-19
- 山田晃弘 (1984) :「ムカイヘラソ遺跡 第2節石器」『富来町福浦港ムカイヘラソ遺跡・アワガタニ遺跡発掘調査報告書』能登ダイヤモンド・ゴルフ場(予定地)内埋蔵文化財調査委員会 pp. 28-73
- 山内清男 (1927) :「斜行縄紋に関する二、三の観察」『史前学雑誌』2-3
- 山内清男 (1937) :「縄文土器型式の細別と大別」『先史考古学』1-1
- 山内清男 (1954) :「縄文土器 総論」『日本原始美術』1-1
- 吉田義昭 (1960) :「陸前高田市門前貝塚発掘調査報告」
- 四井謙吉 (1981) :「荒屋II遺跡」『岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書』21 pp. 91-220
- 渡辺・荒木 (1984) :「台田遺跡発掘調査報告」『福島考古』25 pp. 9-44
- 渡辺誠編 (1984) :「八反田遺跡発掘調査報告書」津村町教育委員会
- 渡辺幸子 (1973) :「縄文時代における土製円盤に関する研究」『福島大学考古学研究会研究紀要』3 pp. 65-91
- 渡部・主浜 他 (1981) :「山田上ノ台遺跡発掘調査概報」『仙台市文化財調査報告書』30
- Bamforth (1986) :「Technological Efficiency and Tool Curation」『American Antiquity』51(1) pp. 38-50
- Binford, L. R. (1979) :「Organization and Formation Process: Looking at Curated Technologies」『Journal of Anthropological Research』35(1) pp. 225-273
- Taira and Kato (1959) :「ON THE EARTHEN WARES OF THE THIRD JOMON CULTURE FROM NASINOKI-GAKO IN MIYATO ISLAND」『Saito Hōon Kai Museum Research Bulletin』No.28 pp. 49-57

写 真 図 版

道路遠景（西南より）



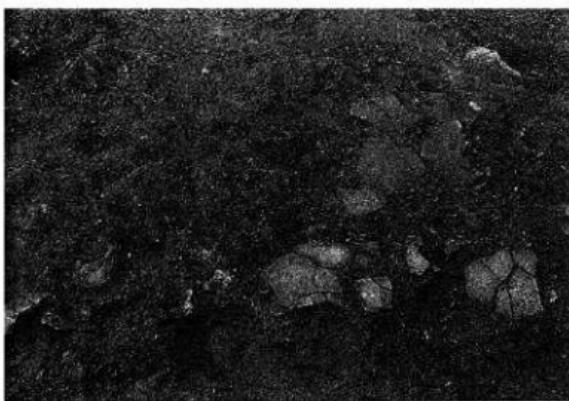
道路近景（東より）



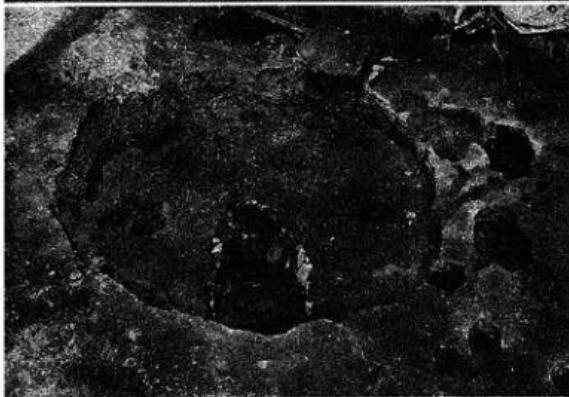
南側遺物包含層日Aライン
(東より)



写真同版！



南側遺物包含層
土器出土狀況

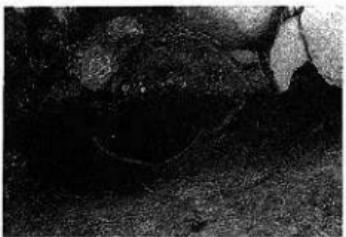


第1号住居跡

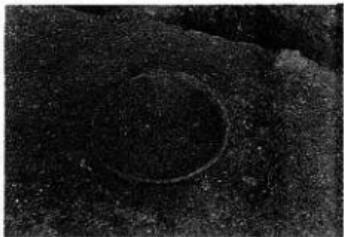


第1号住居跡炉

写真図版2



第1号住居跡 炉断面



第1号住居跡 床面埋鉢土器



第1・2・9号住居跡



第2号住居跡炉

第3号住居跡



第4号住居跡

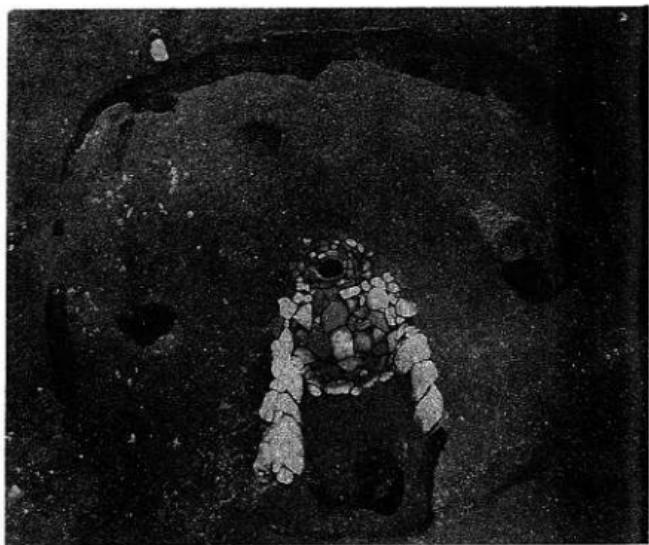


第4号住居跡



写真図版4

第5号住居跡



第5号住居跡炉



写真図版 5



第6号住居跡



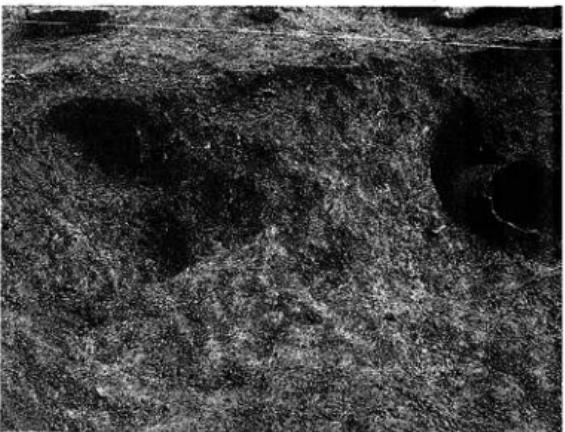
第6号住居跡炉



第6号住居跡炉断面

李真回版 6

第6号住居跡
炉邊口方内埋設土器



第6号住居跡
床面出土土器



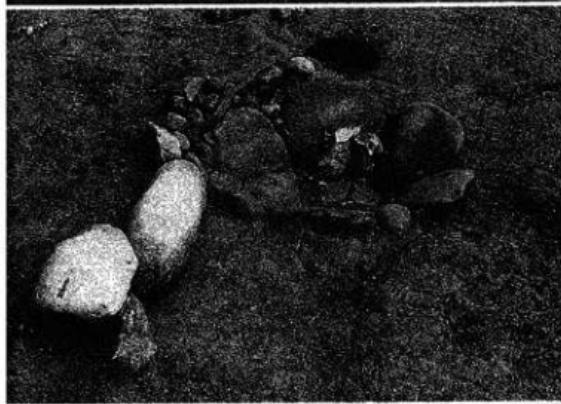
第9号住居跡



第10A・10B号住居跡



第10B号住居跡炉



第7号住居跡

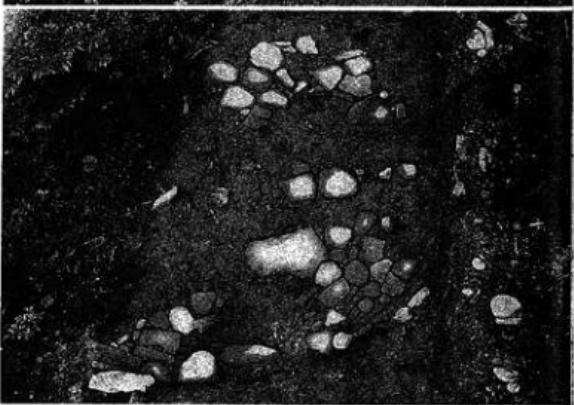


写真団版8

第8号住居跡



第11号住居跡



第1号炉跡





第 2 号炉跡



左, 第 3 号炉跡
右, 同上断面



第 4 号炉跡

写真図版10



第1号埋設土器



第2号埋設土器



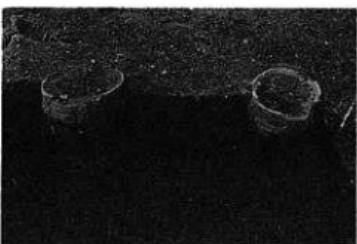
第3号埋設土器



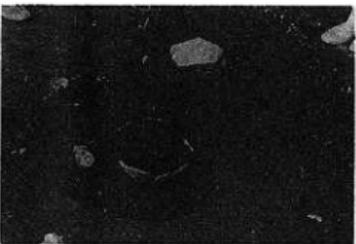
第4号埋設土器



第5号埋設土器



第6・7号埋設土器



第8号埋設土器



第10号埋設土器

写真図版II



第1号土壤



第2号土壤



第3号土壤



写真図版13 第1号住居跡出土土器(1)……埋設土器

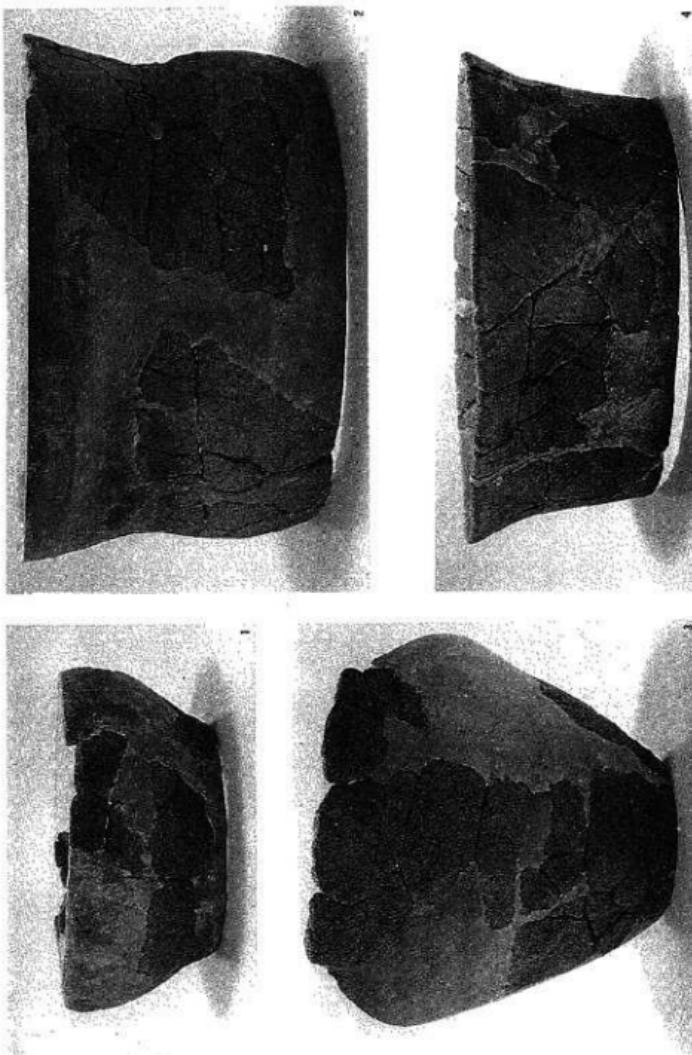


写真図版14 第1号住居跡出土土器(2)……切・粗段土器



写真図版15 第1号住居跡出土土器(3)……B・粗設土器

写真四版16 第2号住居跡出土土器・第3号住居跡出土土器[1] 1. 第2号住居跡出土土器 2. 同2片 3. 同4片 4. 第3号住居跡出土土器





1



2



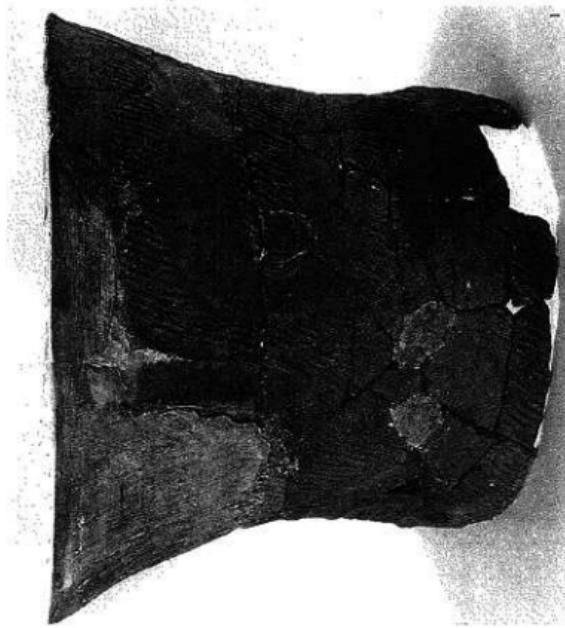
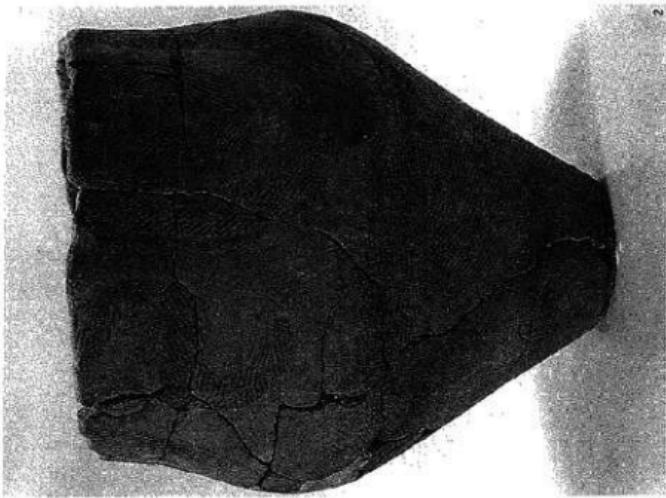
3

写真図版17 第3号住居跡出土土器(2)

写真図版18 第3号住居跡出土土器(3)・第4号住居跡出土土器(1)

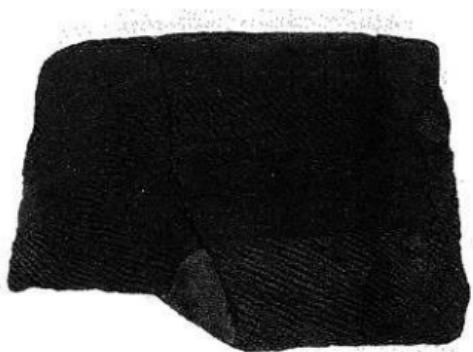
1. 第3号住居跡出土土器(3)・第4号住居跡出土土器(1)

2. 第4号住居跡出土土器(1)





写真図版19 第4号住居跡出土土器 (2)



1



2a



2b



3



4

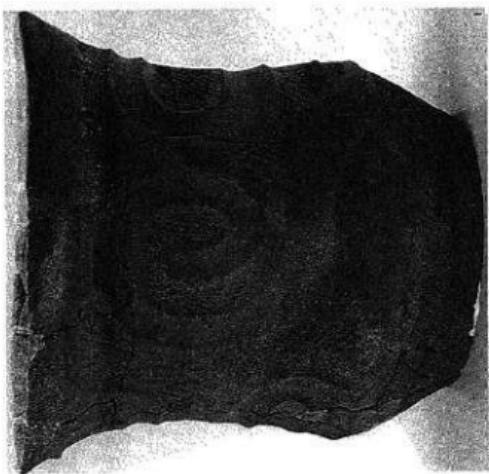
写真図版20 第5号住居跡出土土器(1)

3

写真図版21 第5号住居跡出土土器(2) 1. 灰·褐绘土器1片 2. 同2片 3. 出土土器

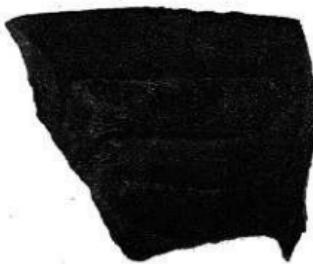


2

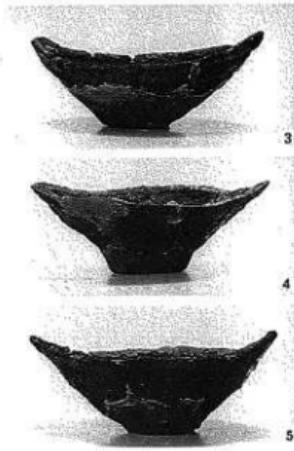
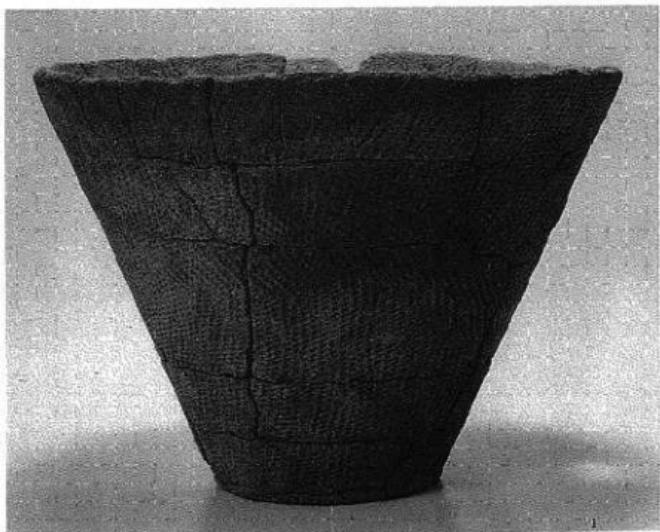




写真図版22 第5号住居跡出土土器(3)



写真図版23 第6号住居跡出土土器(1)



写真図版24 第5住居跡出土土器(2) 1. 壺・埋設土器

3

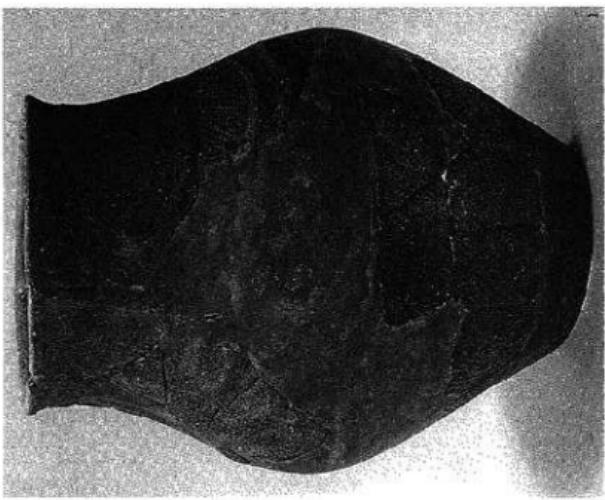
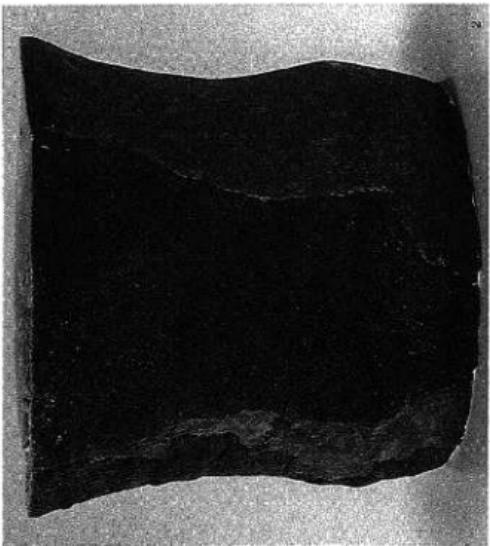
4

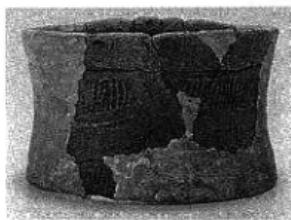
5



写真図版25 第6号住居跡出土土器(3)

写真図版26 第6号住居跡出土土器(4)





2

写真図版27 第6号住居跡出土土器(5)



写真図版28 第6号住居跡出土土器(6)



1



2

写真図版29 第6号住居跡出土土器(7) 1・2 护-掘り方内埋設土器1、2号



1



2



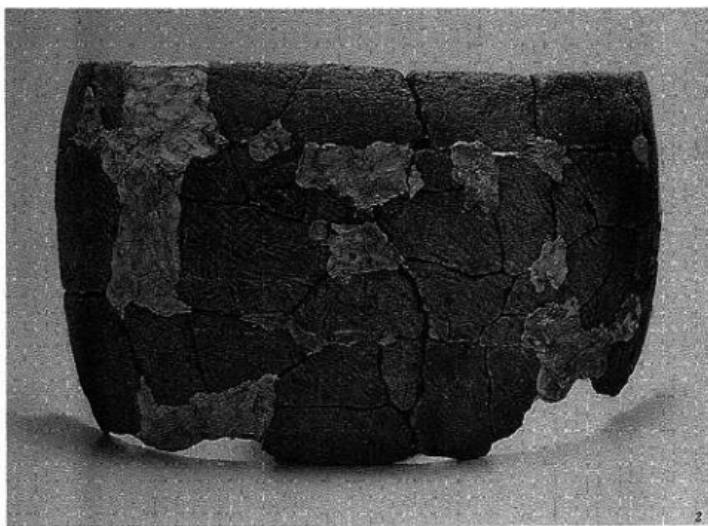
3

写真図版30 第9号住居跡・第10号住居跡出土土器

1. 第10号A住居跡出土土器 2・3. 第9号住居跡出土土器



1



2

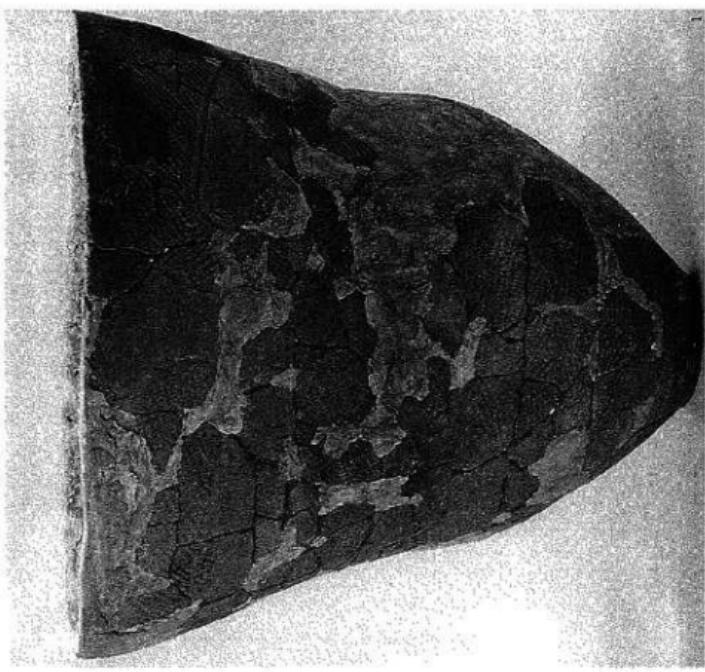
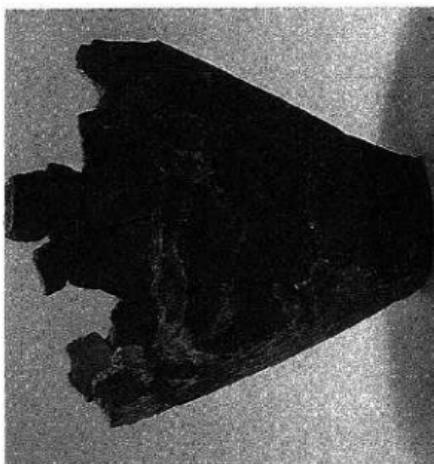
写真図版31 第10号住居跡出土土器・第3号炉・埋設土器

1. 第10号B住居跡炉・埋設土器 2. 第3号炉・埋設土器

2. 第3号陶范上器

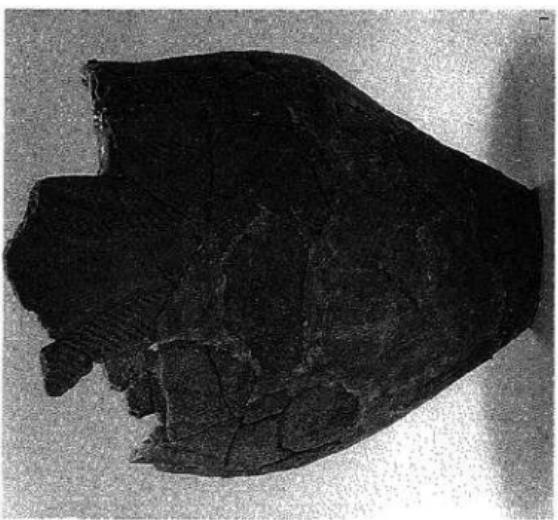
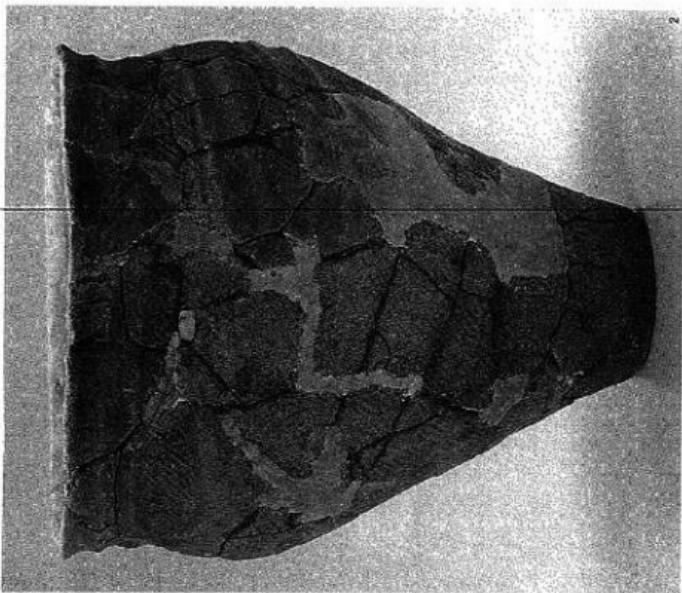
3. 第1号陶范上器

4. 第1号陶范下器



写真图版33 第4号·第7号黑陶土器

1. 第4号黑陶土器 2. 第7号黑陶土器





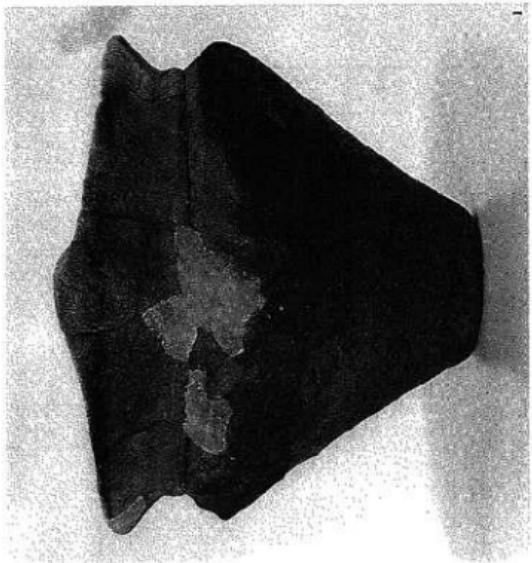
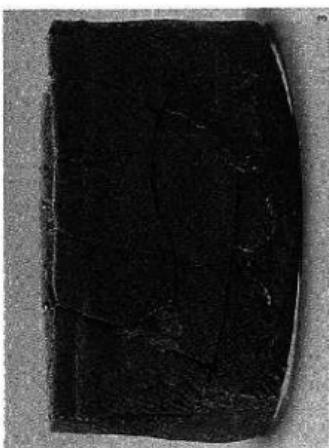
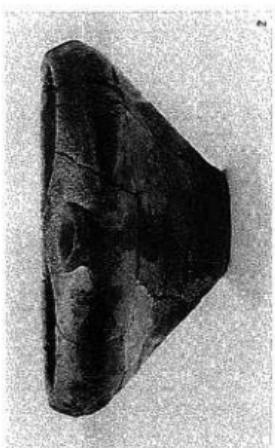
1

写真図版34 第6号埋設土器

1. 第1号土壤出土土器

2. 第3号土壤出土土器

3. 第4号土壤出土土器





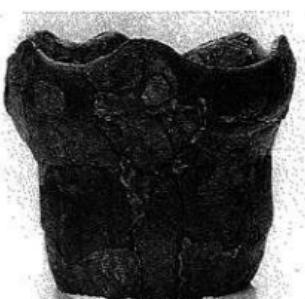
写真図版36 第2号土壤出土土器



1



2

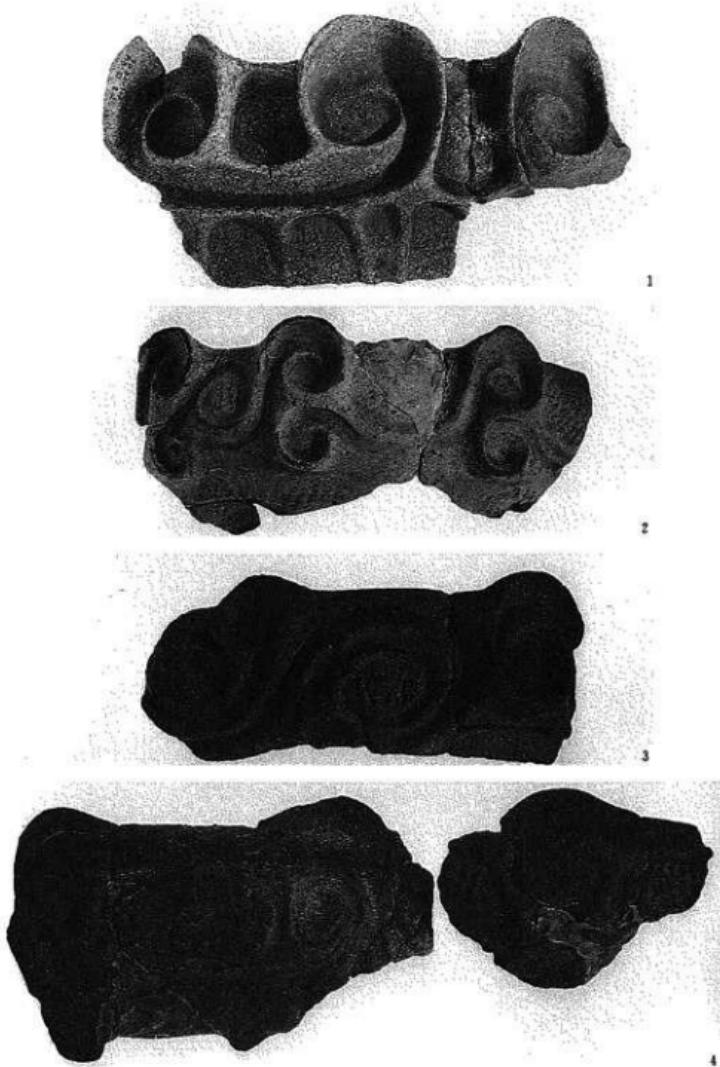


3

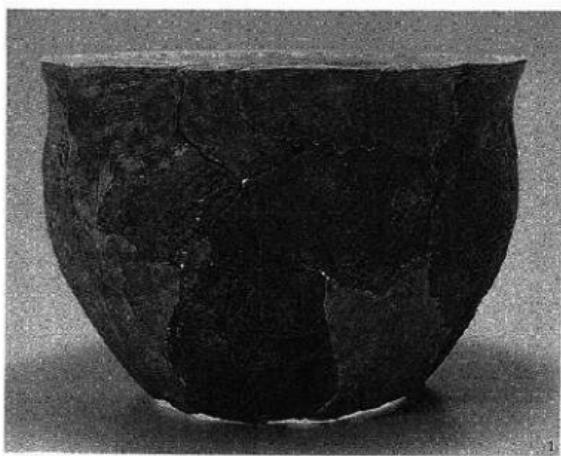


4

写真図版37 南側遺物包含層第IV層出土土器(1) 1~4. 深井



写真図版38 南側遺物包含層第Ⅴ層出土土器(2) 1~4. 漆鉢



1

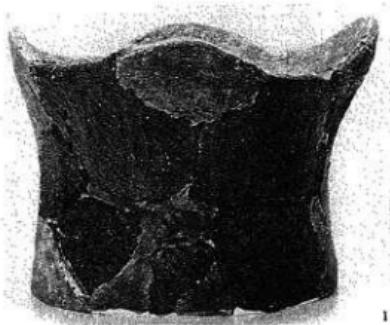


2a

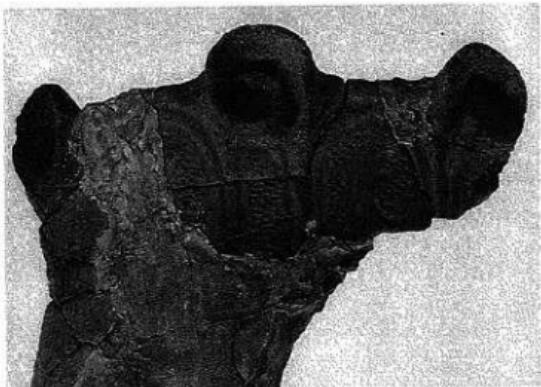


2b

写真図版39 南側遺物包含層第Ⅳ層出土土器(3) 1・2. 泥鉢



1



2



3

写真図版40 南朝遺物包含層第Ⅳ層出土土器(4) 1~3. 深3~



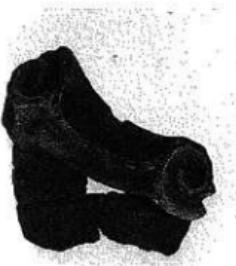
1



2



3



4

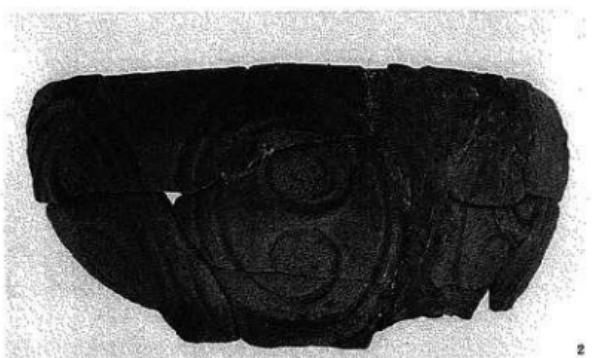
写真図版41 南側遺物包含層第IV層出土土器(5) 1～3. 漢鉢 4. 鉢



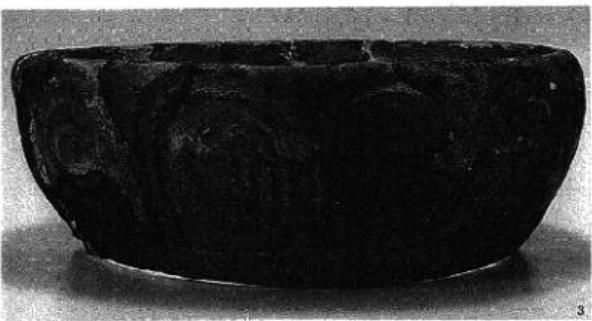
写真図版42 南側遺物包含層第Ⅳ層出土土器(6) 1. 深井



1

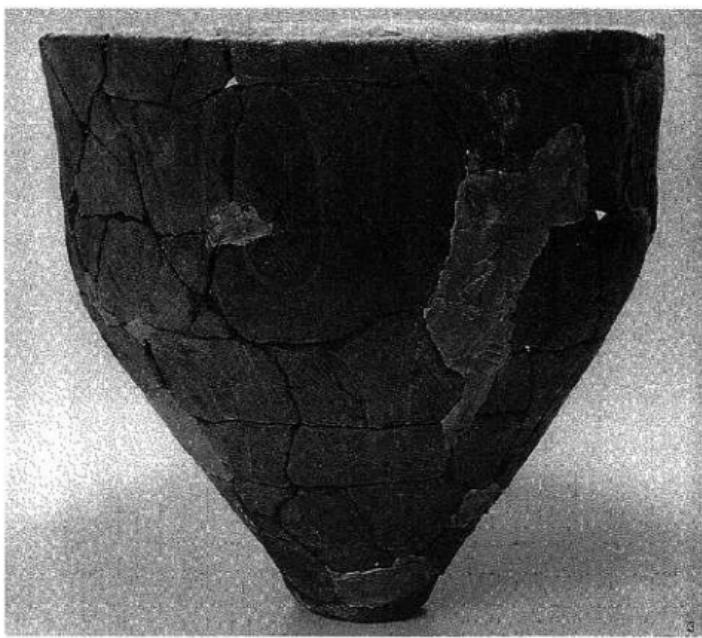
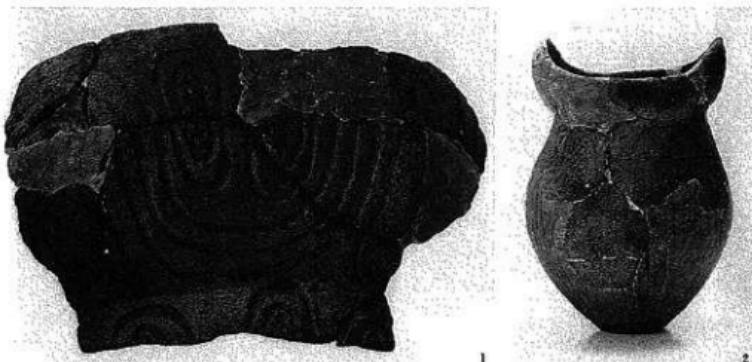


2

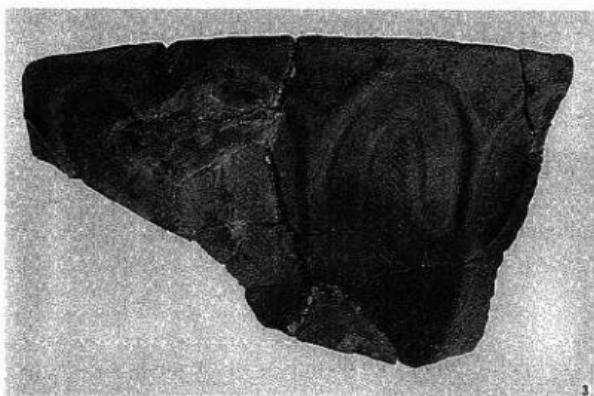
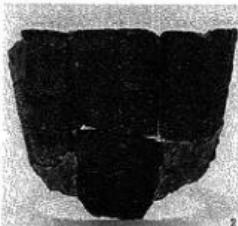


3

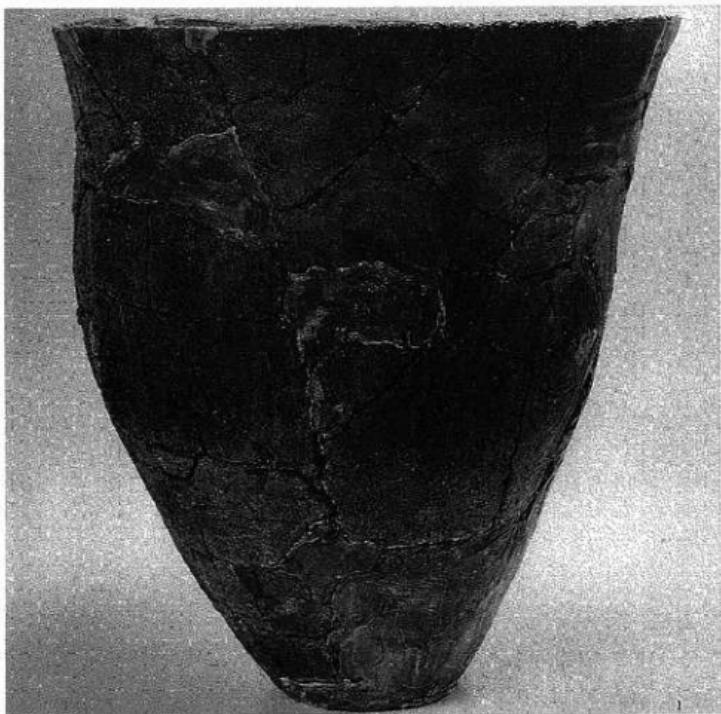
写真図版43 南側遺物包含層第Ⅱ層出土土器(1) 1~3. 漆杯



写真図版44 南側遺物包含層第Ⅲ層出土土器(2) 1~3. 深杯



写真図版45 南側遺物包含層第Ⅱ層出土土器(3) 1~3. 深井



2

写真図版46 南側遺物包含層第Ⅲ層出土土器(4) 1~3. 漆鉢



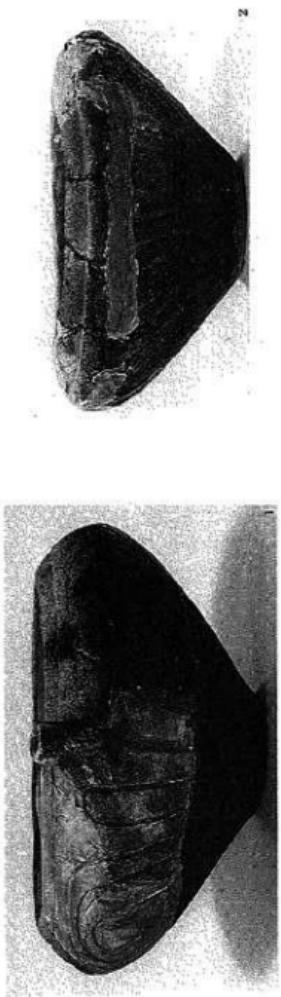
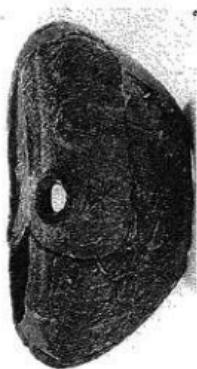
2a



2b

写真図版47 南側遺物包含層第Ⅲ層出土土器(5) 1・2. 深井

南朝墓物包含南朝墓出土器(6) 1~4·浅鉢

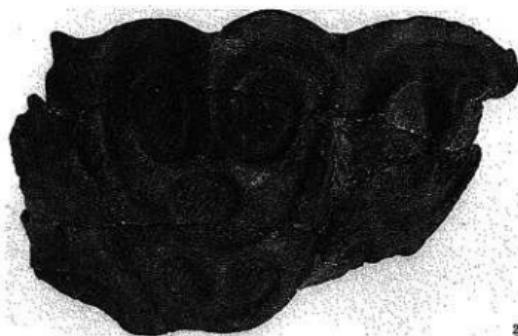


2

4



1



2

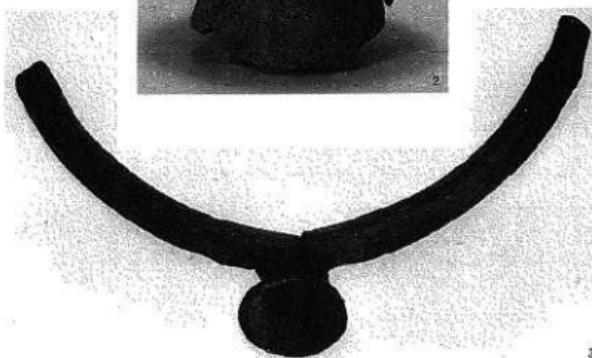
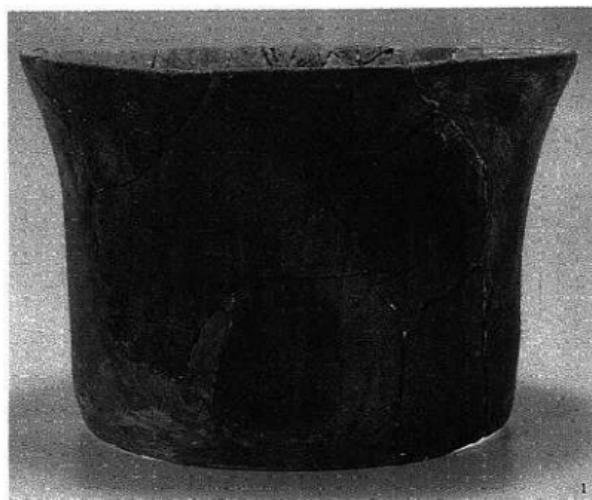


3



4

写真図版49 南側遺物包含層第Ⅲ層出土器(7) 1・2. 浅井 3. 瓶 4. 台付鉢

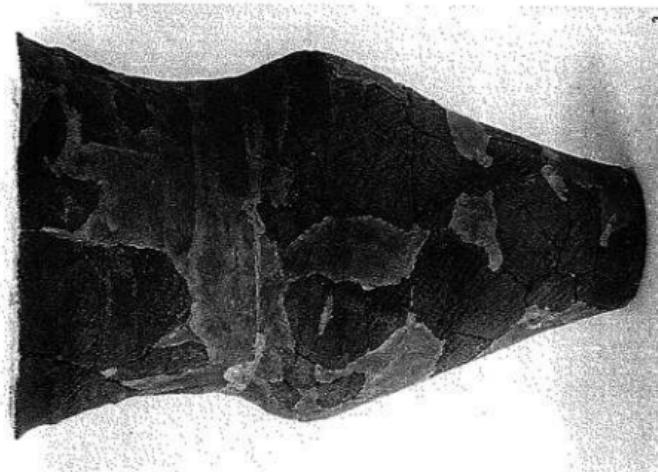
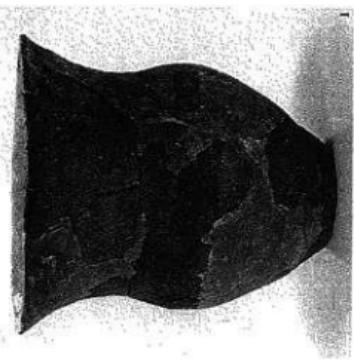
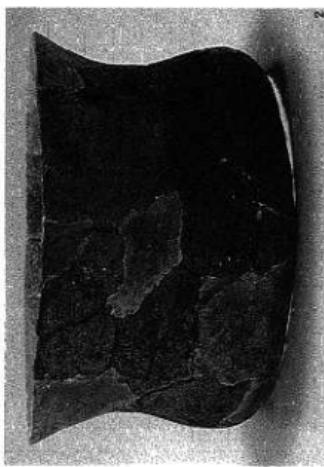


写真図版50 南側遺物包含層第Ⅲ層出土土器(8)
1. 深盆(Ⅲ層) 2. 台(Ⅲ層) 3. 浅盆(Ⅲ層)



写真図版51 南側遺物包含層第Ⅱ層出土土器(2) 1. 浅杯 2. 深杯

万县团堡子 南朝墓物包含层第 II 层出土器物(3) 1~3. 酒杯

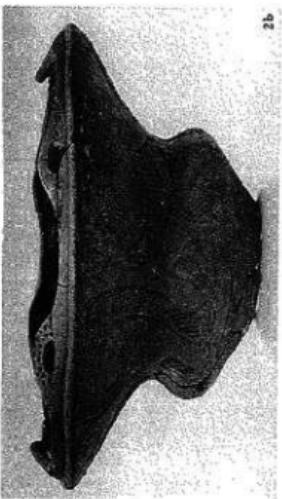




写真図版53 南側遺物包含層第Ⅱ層出土土器(4) 1・2. 浅鉢 3. 深鉢

平真圆版54 南朝漆物包含层第II层出土土器(5) 1·2 漆杯

2a

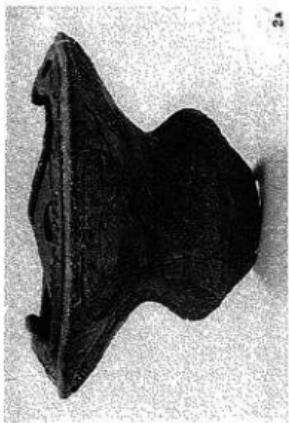


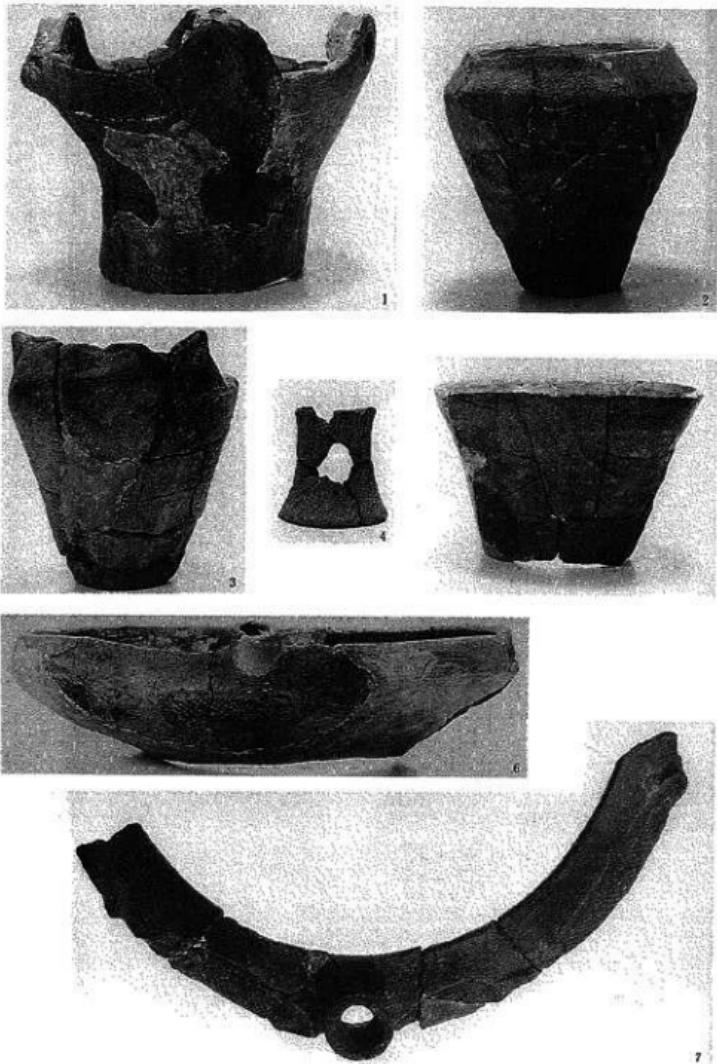
2b



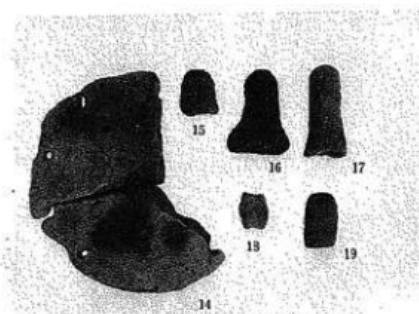
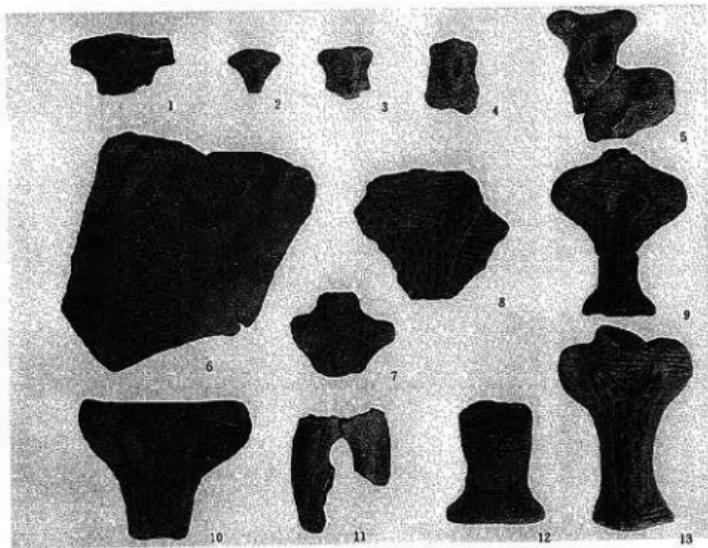
2a

2b





写真図版55 南側造物包含層第Ⅰ層出土土器(1) 1~3・5, 深体 4, 落台 6・7, 浅体



写真図版36 土 製 品 1~13. 土器 14~19. その他土製品



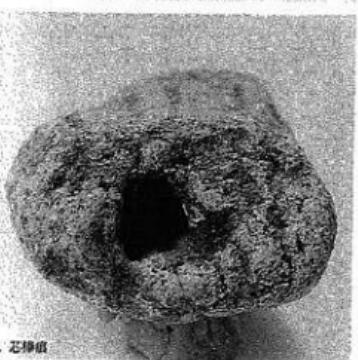
1. 内面観察



2. シケット状差し込み痕



3. 粘土紐巻き上げ痕



4. 芯棒痕



5. 中空土偶輪部内面

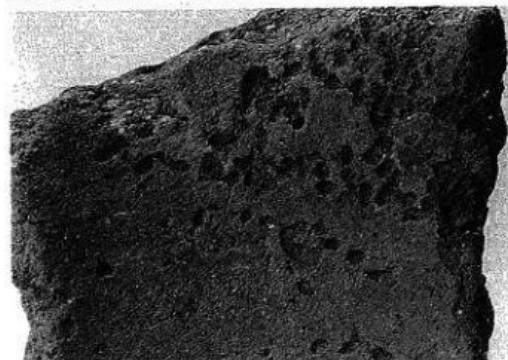
写真区版57 土 偶 相 部



1. 亂線剥落下の下書き沈鉛文



2. 亂線剥落下の下書き沈鉛文



3. 植子痕跡

写真図版58

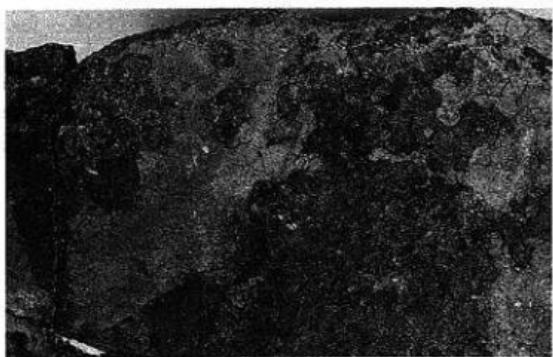
1. 漆化物付着状况



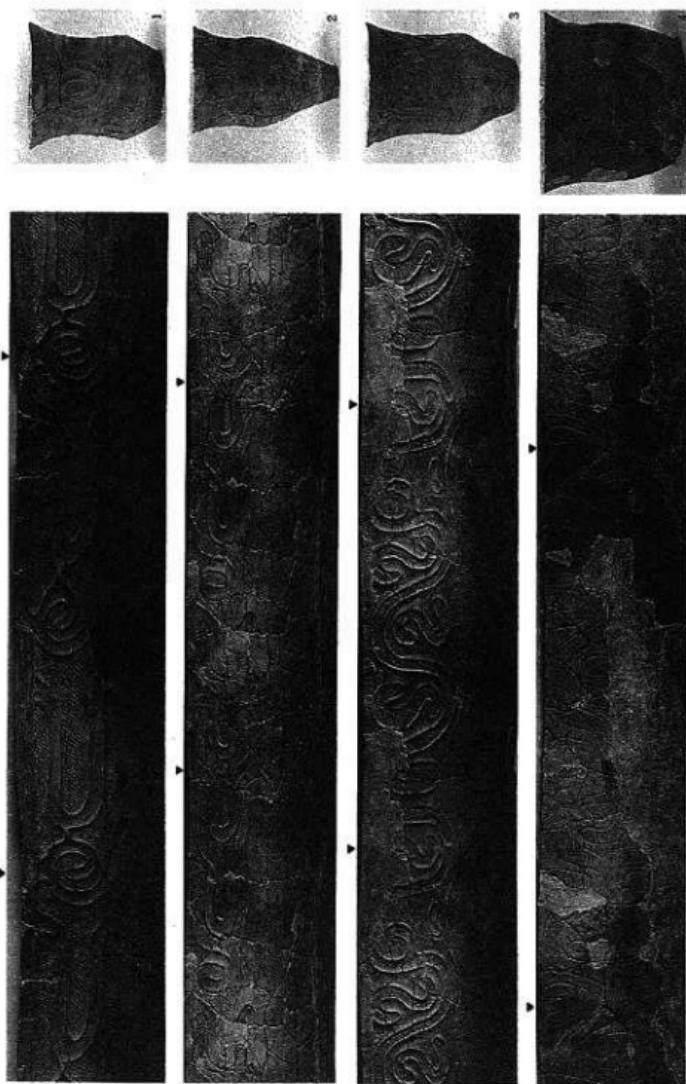
2. 漆化物付着状况



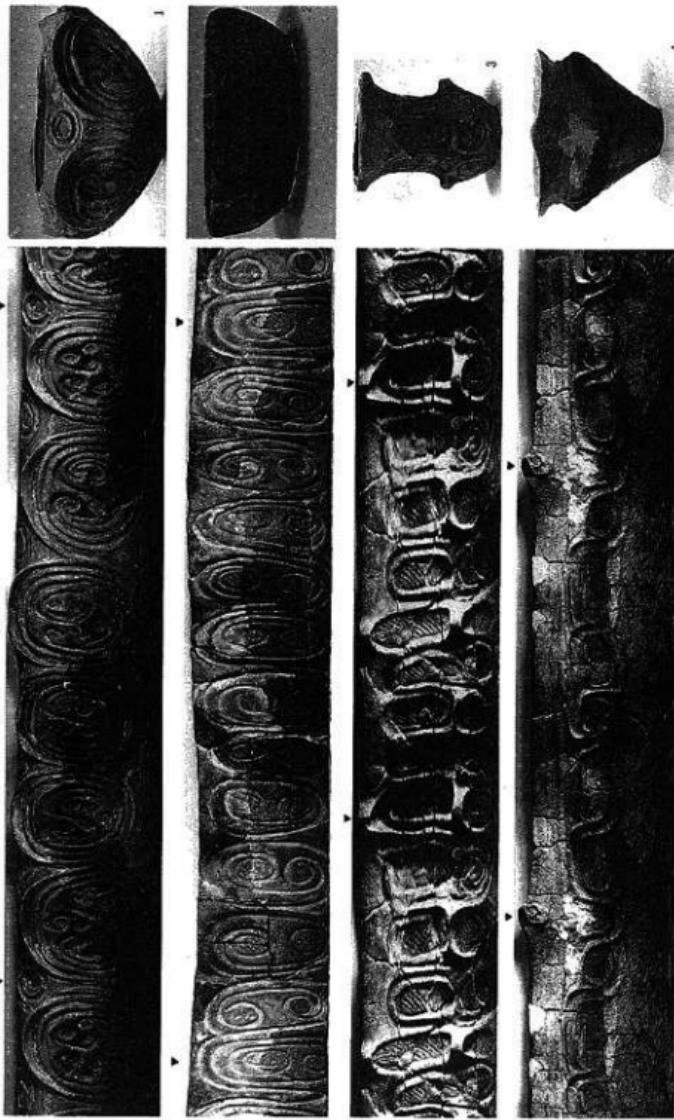
3. 漆化物付着状况

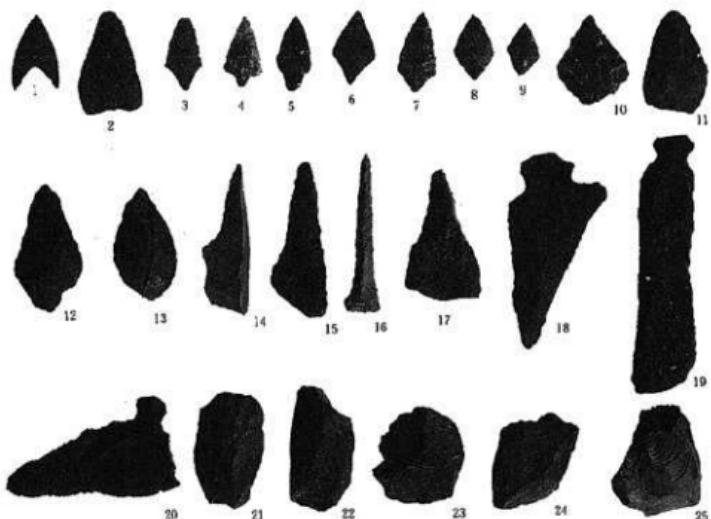


写真図版60 黑拂写真(1)
1. (第214回) 2. (第209回) 3. (第179回) 4. (第65回)

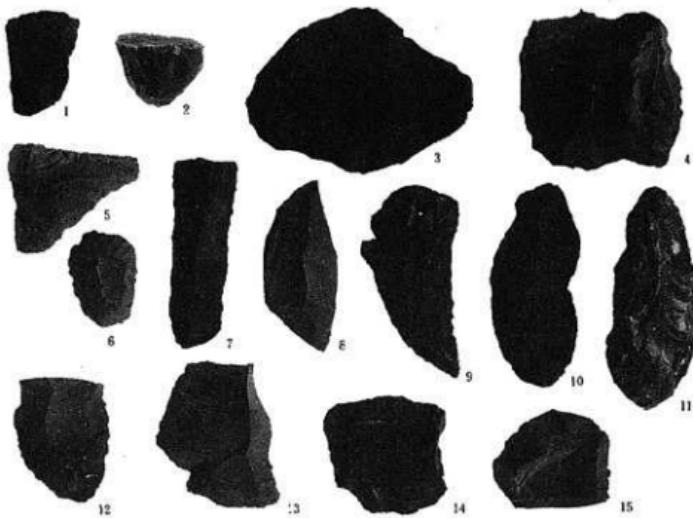


写真図版61 展開写真(2) 1. (H4520 1) 2. (H4264 5) 3. (H4229 6) 4. (2358 1)

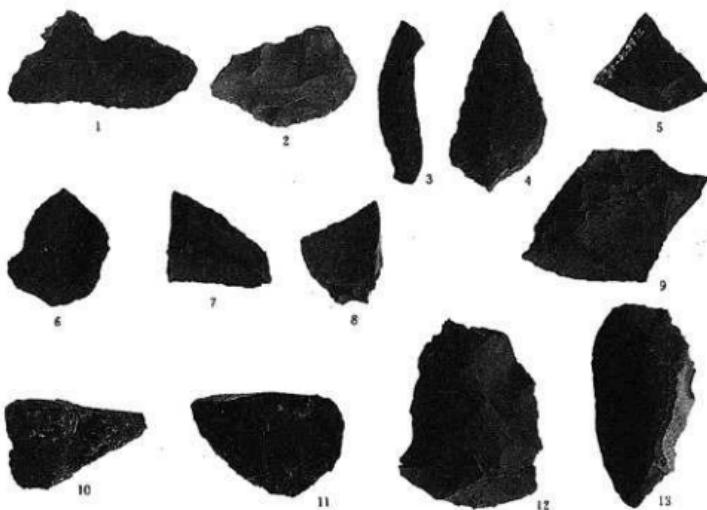




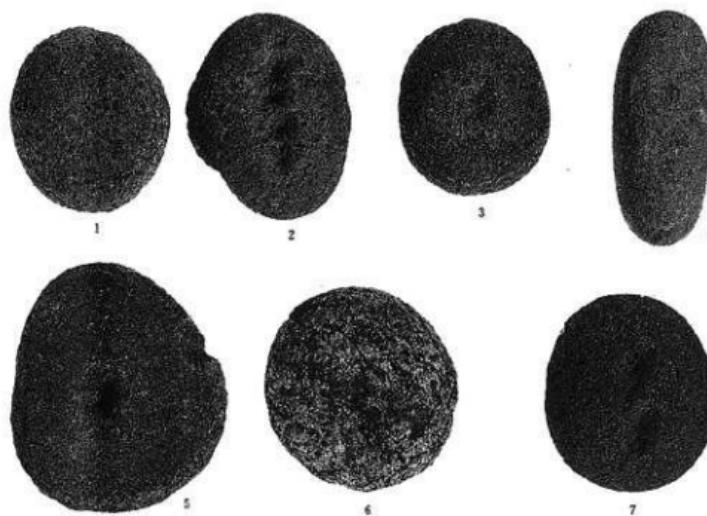
写真図版62A 南側遺物包含層第4層出土石器(1)



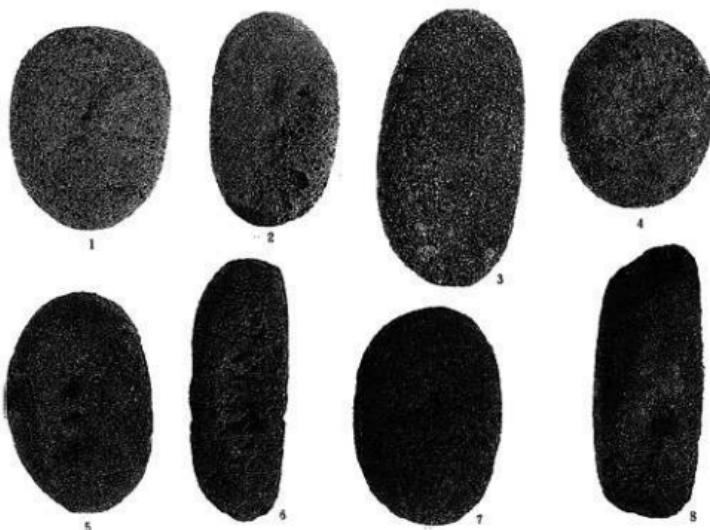
写真図版62B 南側遺物包含層第4層出土石器(2)



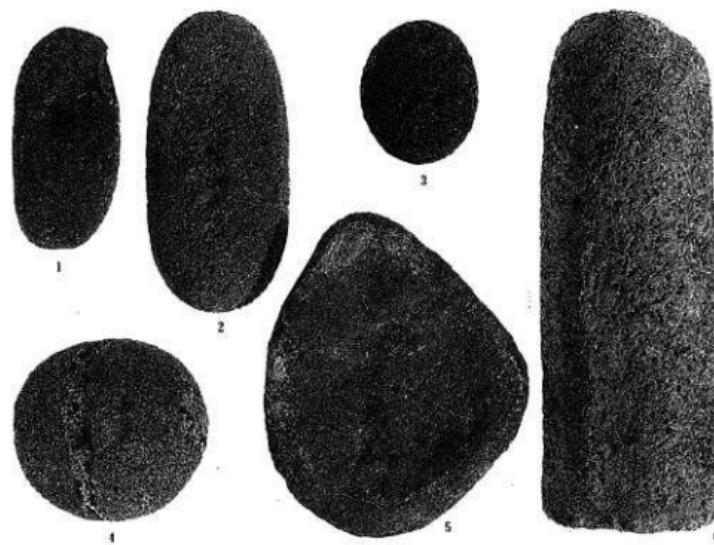
写真図版63A 南側遺物包含層第IV層出土石器(3)



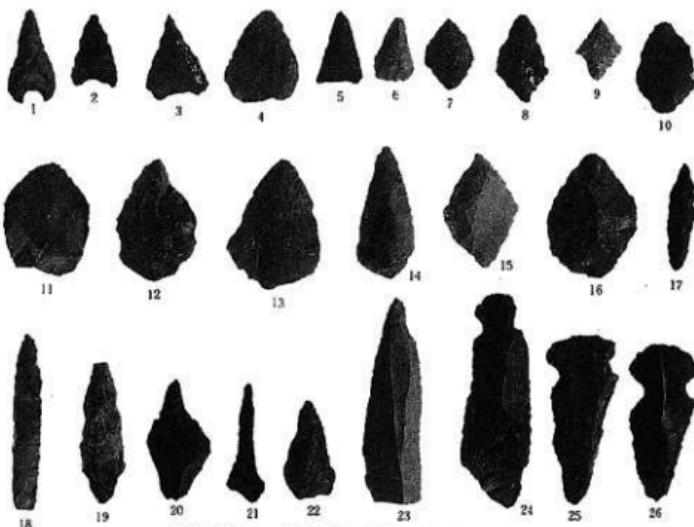
写真図版63B 南側遺物包含層第IV層出土石器(4)



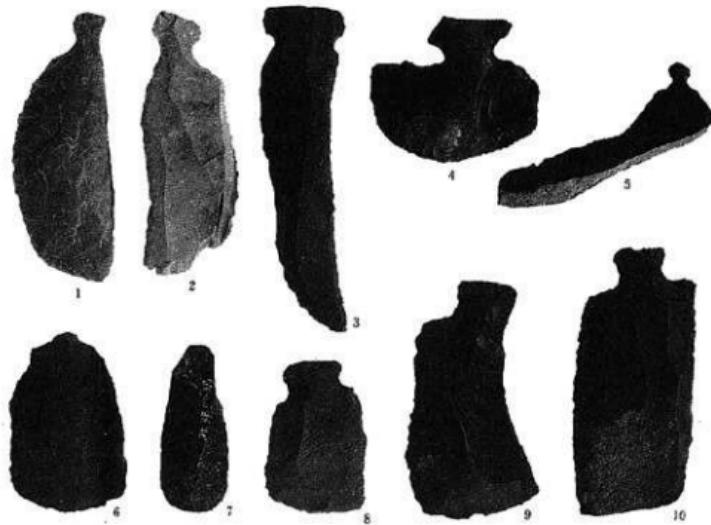
写真図版64A 南側遺物包含層第IV層出土石器(5)



写真図版64B 南側遺物包含層第IV層出土石器(6)



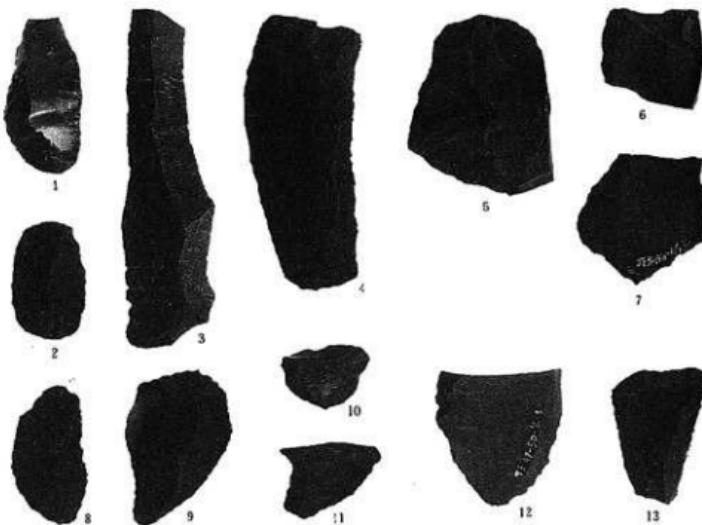
写真図版65A 南側遺物包含層第Ⅲ層出土石器(1)



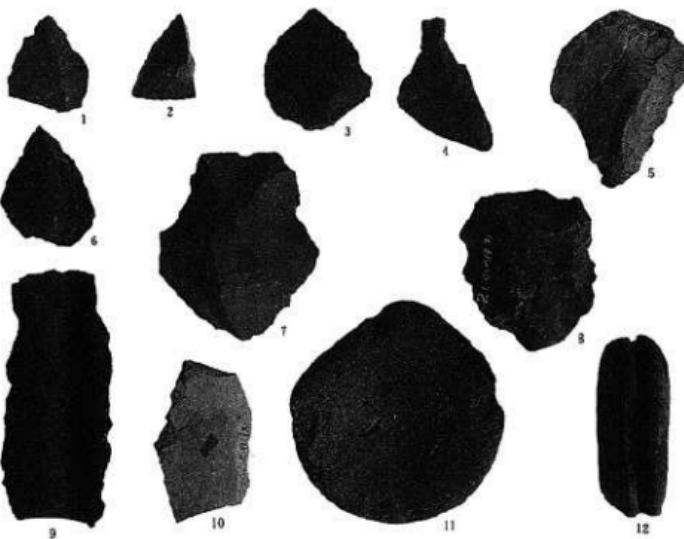
写真図版65B 南側遺物包含層第Ⅲ層出土石器(2)



写真図版66A 南側遺物包含層第Ⅲ層出土石器(3)



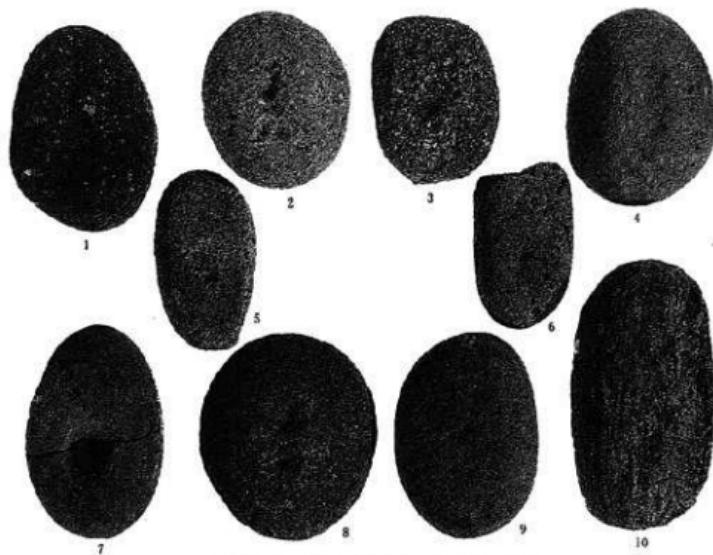
写真図版66B 南側遺物包含層第Ⅳ層出土石器(4)



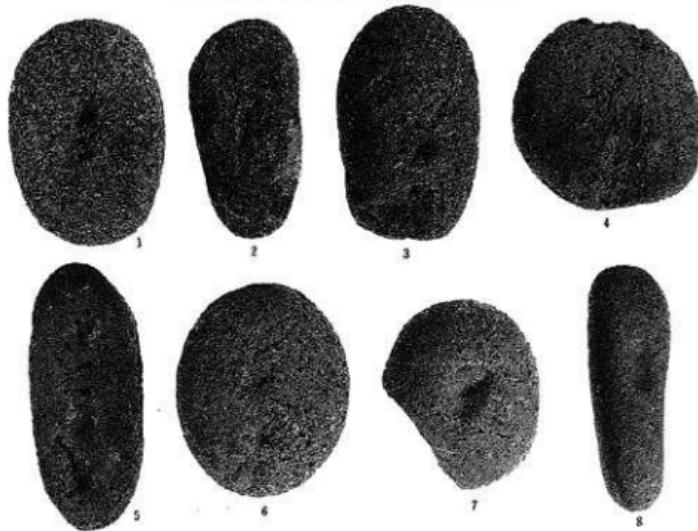
写真図版67A 南側遺物包含層第Ⅲ層出土石器(5)



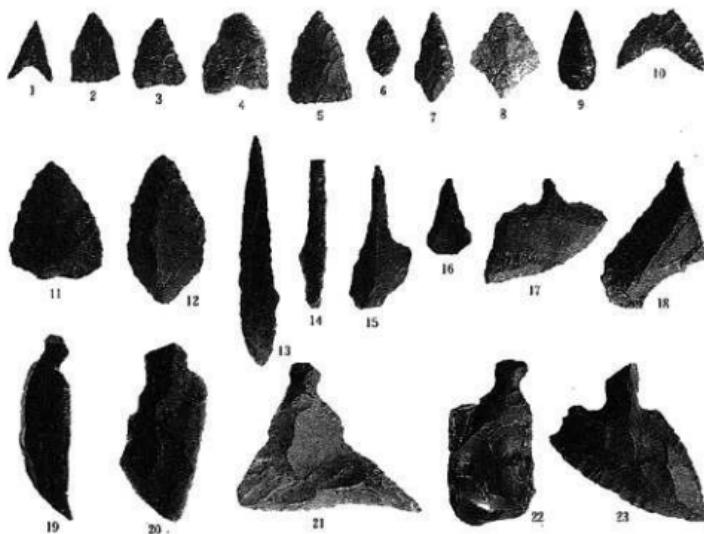
写真図版67B 南側遺物包含層第Ⅲ層出土石器(6)



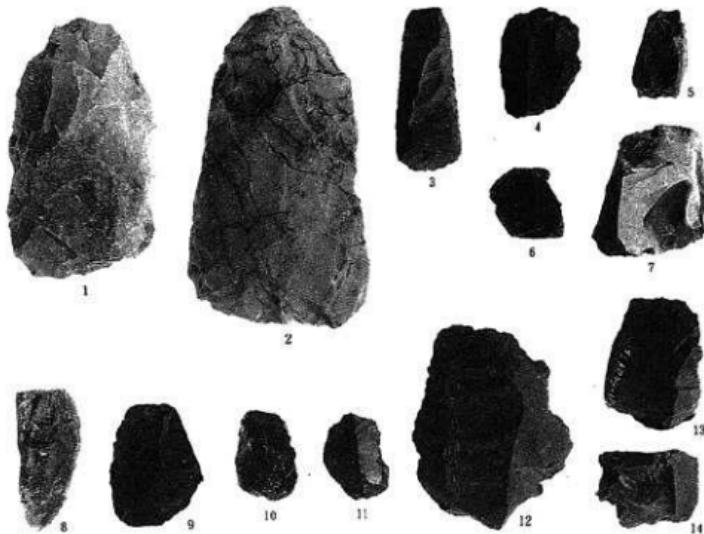
写真図版68A 南側遺物包含層第Ⅲ層出土石器(7)



写真図版68B 南側遺物包含層第Ⅲ層出土石器(8)



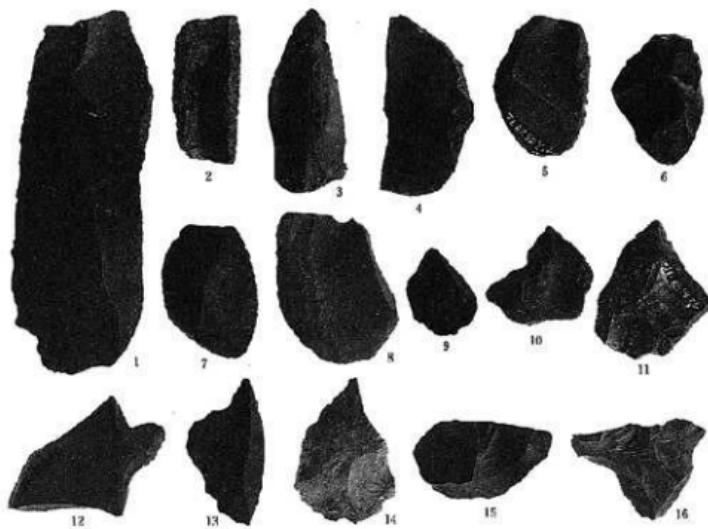
写真図版69A 南側遺物包含層第II層出土石器(1)



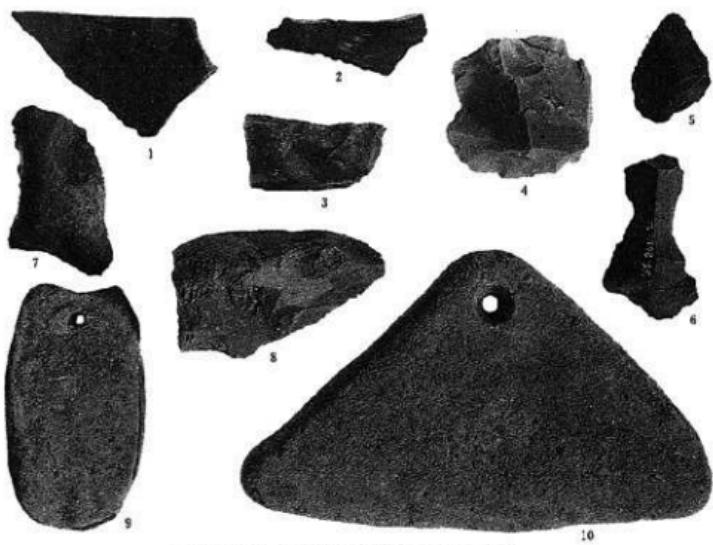
写真図版69B 南側遺物包含層第II層出土石器(2)



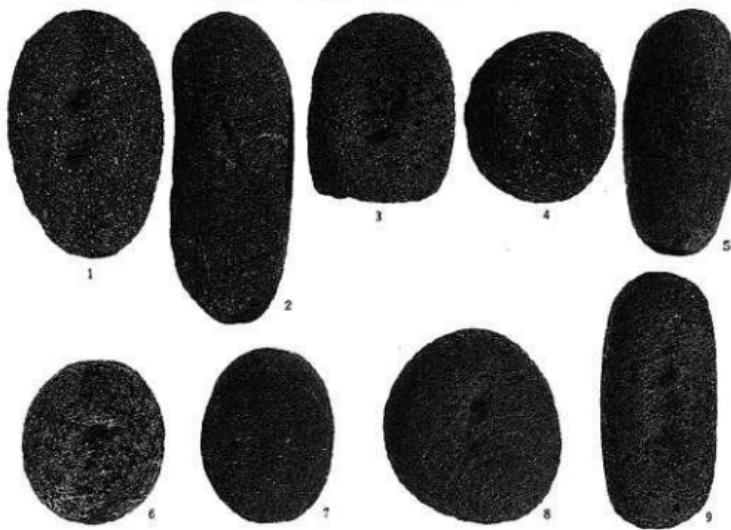
写真図版70A 南側遺物包含層第Ⅱ層出土石器(3)



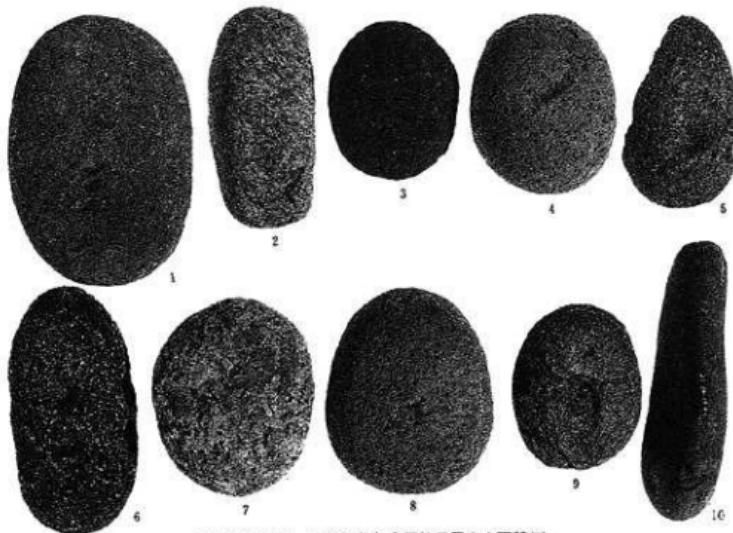
写真図版70B 南側遺物包含層第Ⅱ層出土石器(4)



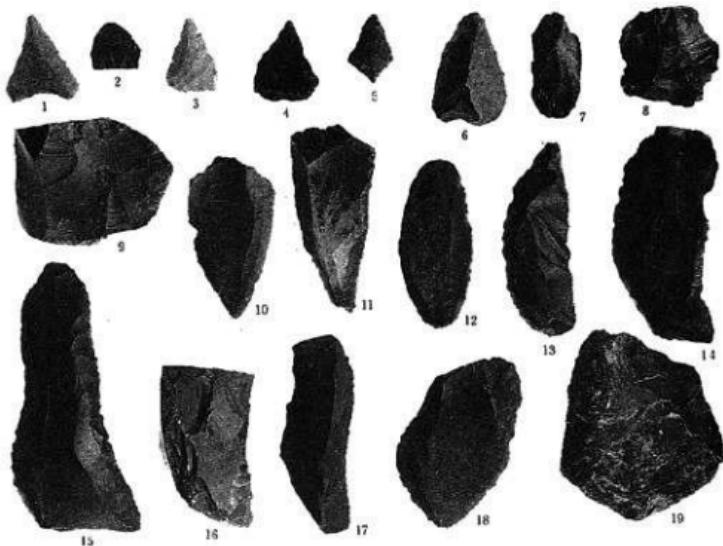
写真図版71A 南側遺物包含層第Ⅱ層出土石器(5)



写真図版71B 南側遺物包含層第Ⅱ層出土石器(6)



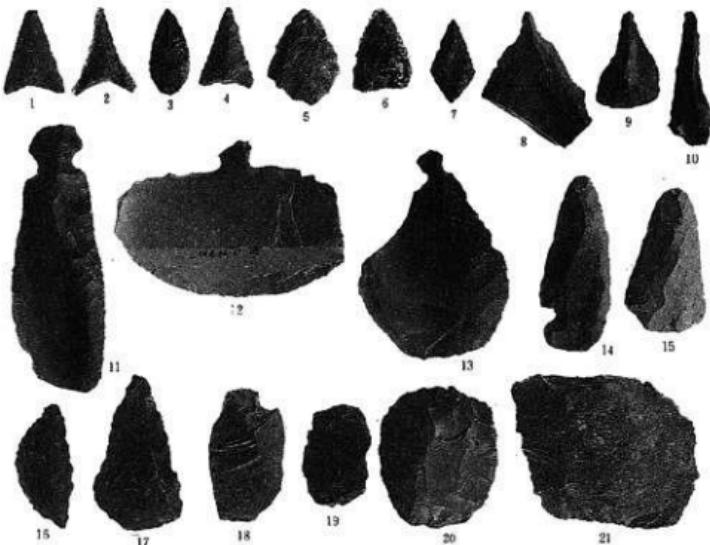
写真図版72A 南側遺物包含層第Ⅱ層出土石器(7)



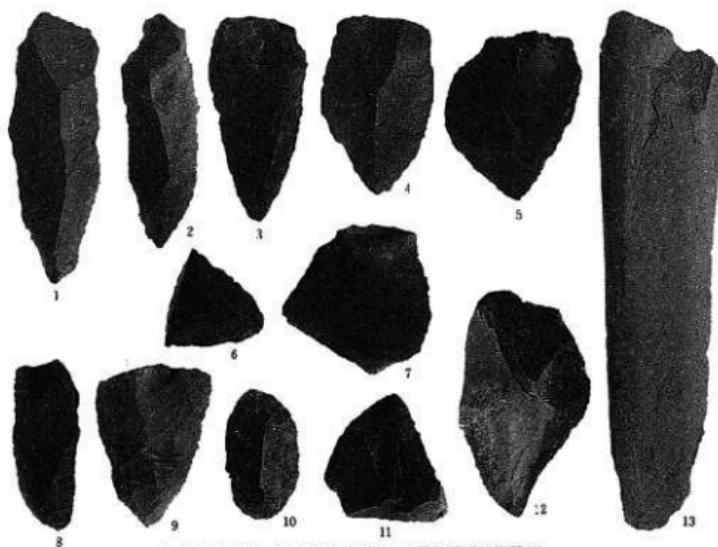
写真図版72B 南側遺物包含層第Ⅰ層出土石器(1)



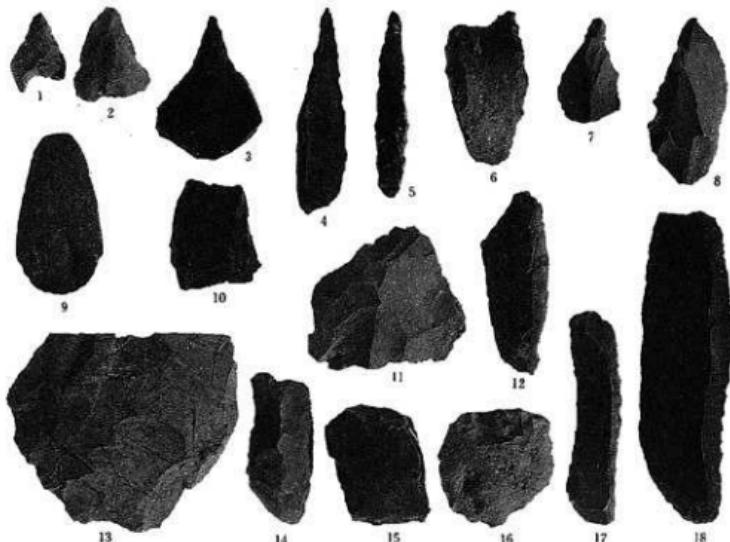
写真図版73A 南側遺物包含層第I層出土石器(2)



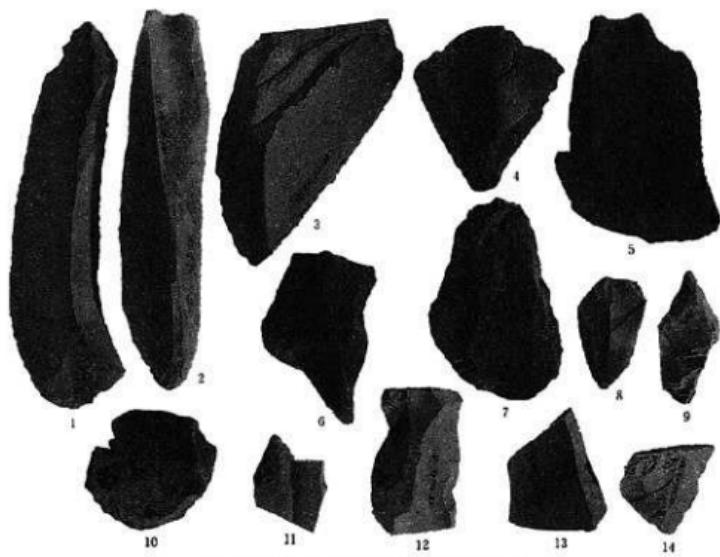
写真図版73B 南側遺物包含層出土層位不明の石器(1)



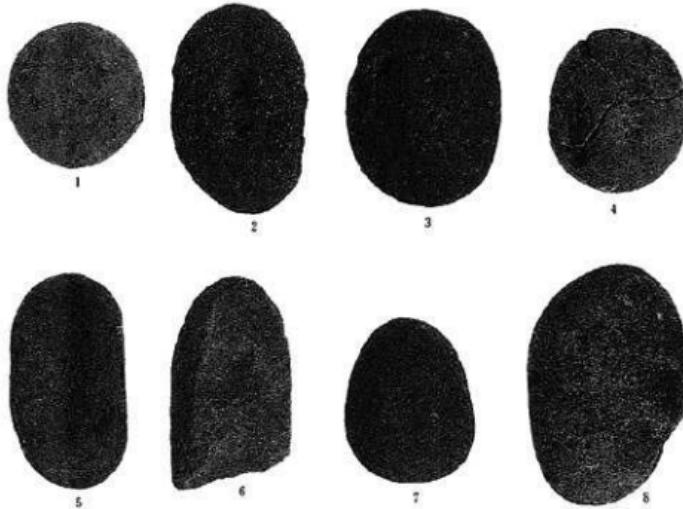
写真図版74A 南側遺物包含層出土層位不明の石器(2)



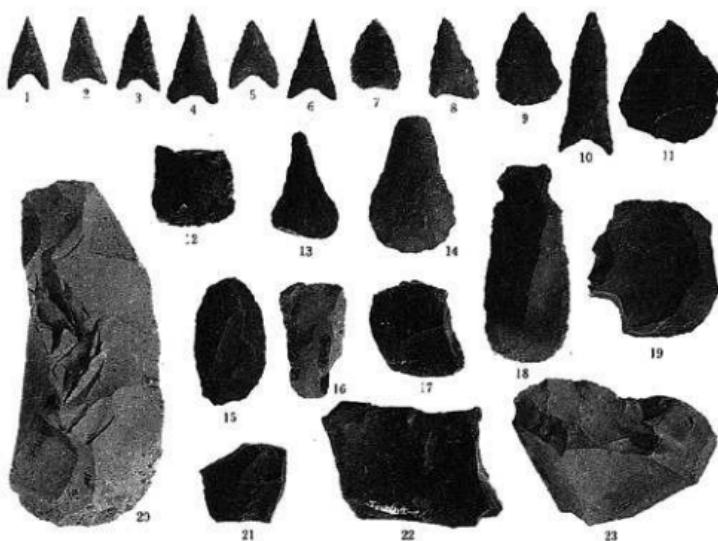
写真図版74B 西側基本層位第II層出土石器(1)



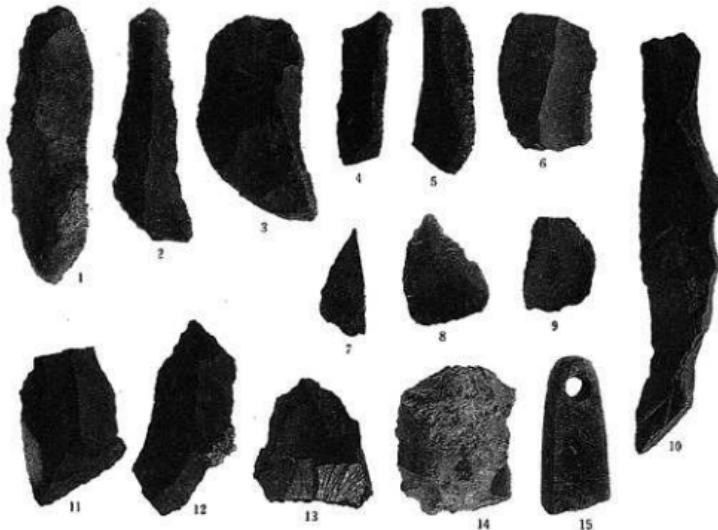
写真図版75A 西側基本層位第II層出土石器(2)



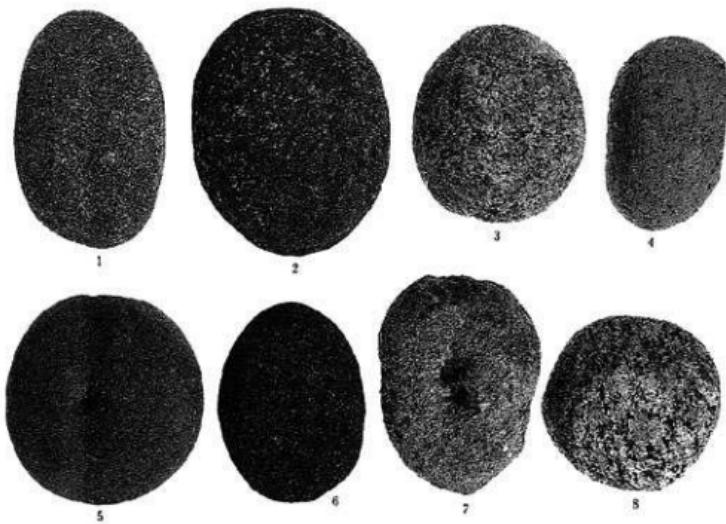
写真図版75B 西側基本層位第II層出土石器(3)



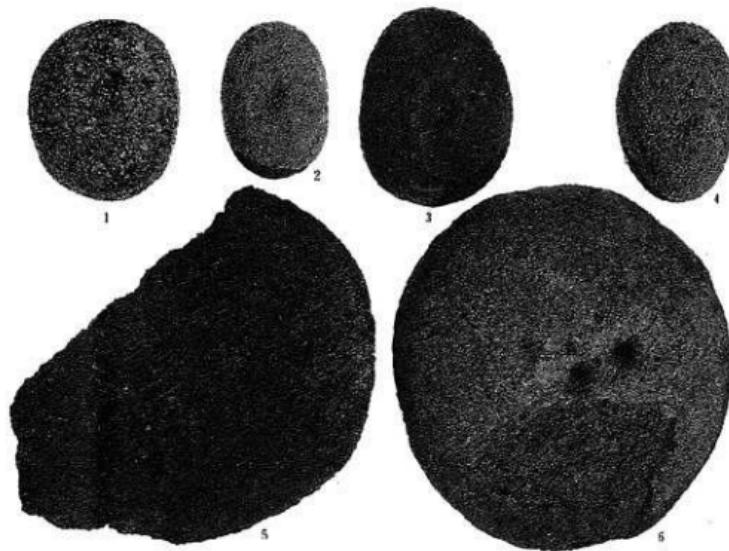
写真図版76A 第1号住居跡出土石器(1)



写真図版76B 第1号住居跡出土石器(2)



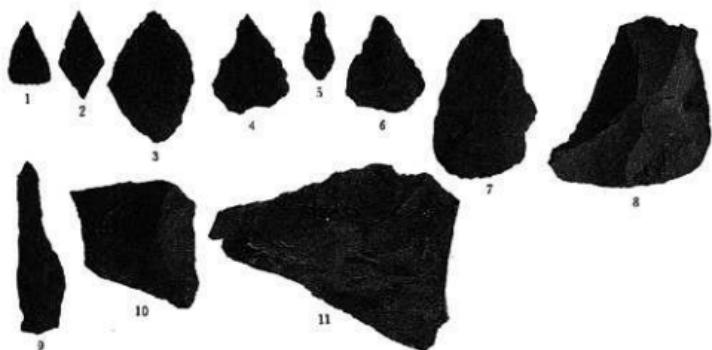
写真図版77A 第1号住居跡出土石器(3)



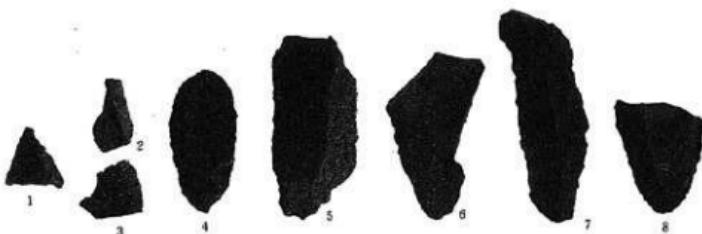
写真図版77B 第1号住居跡出土石器(4)



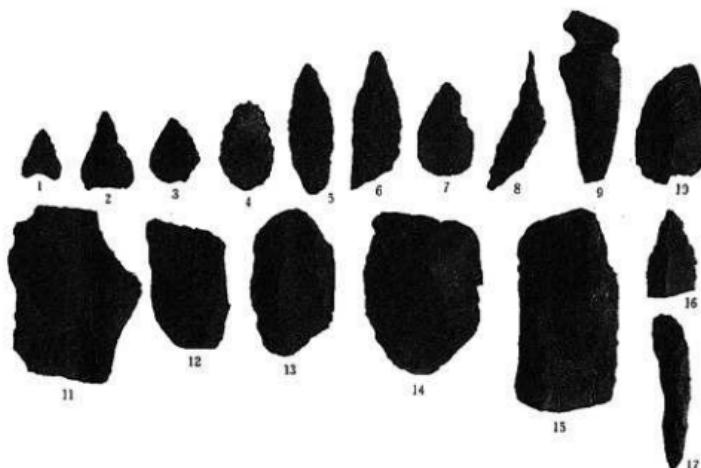
写真図版78A 第1号住居跡出土石器(5)



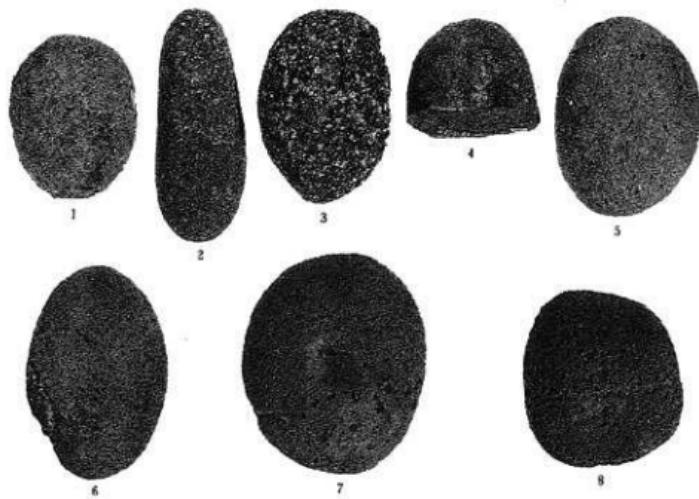
写真図版78B 第2号住居跡出土石器



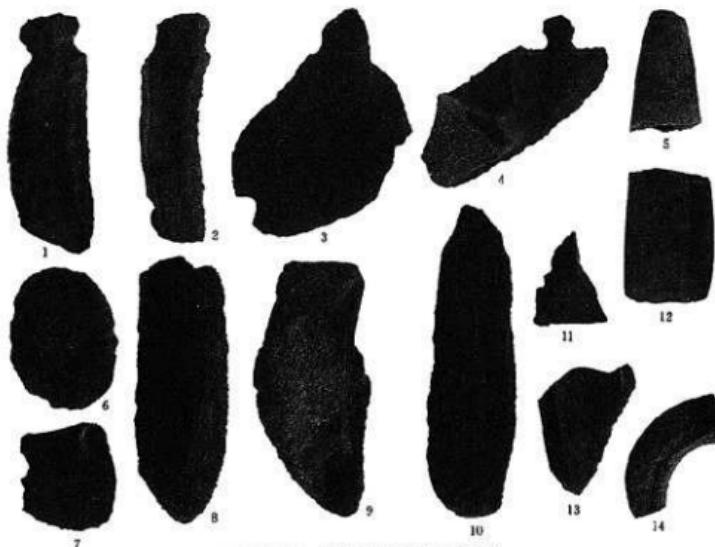
写真図版78C 第4号住居跡出土石器



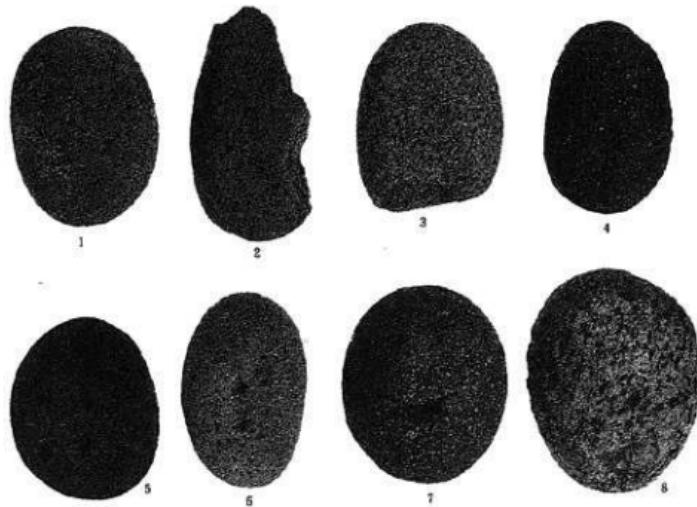
写真図版79A 第3号住居跡出土石器



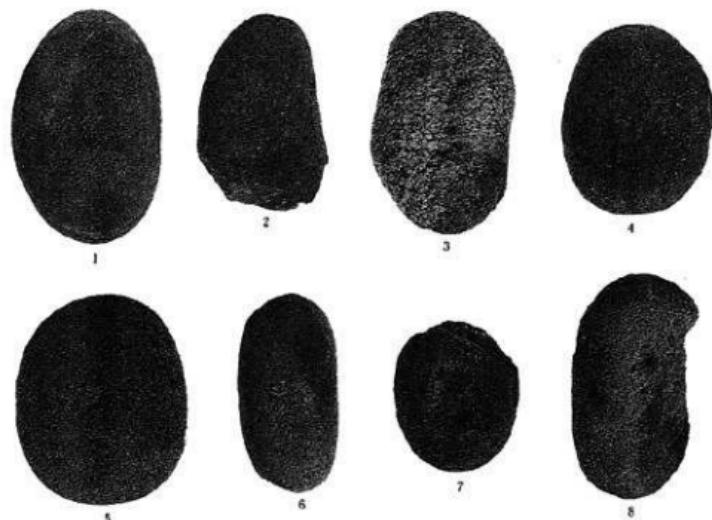
写真図版79B 第2号・第3号・第4号住居跡出土石器



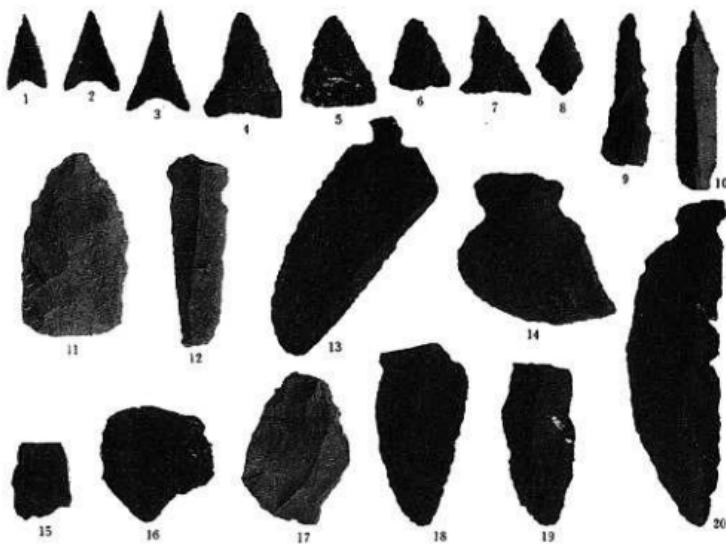
写真図版80A 第5号住居跡出土石器(1)



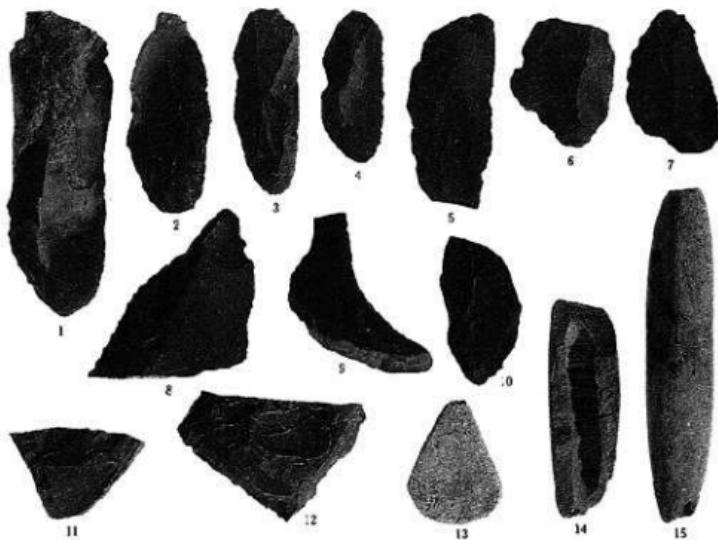
写真図版80B 第5号住居跡出土石器(2)



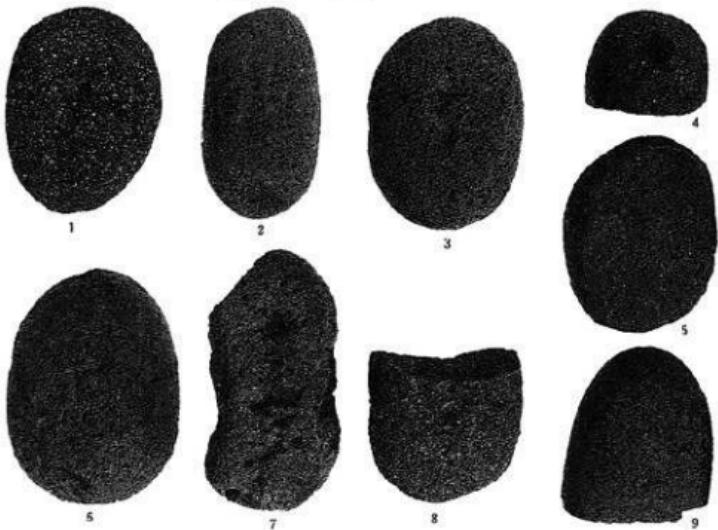
写真図版81A 第5号住居跡出土石器(3)



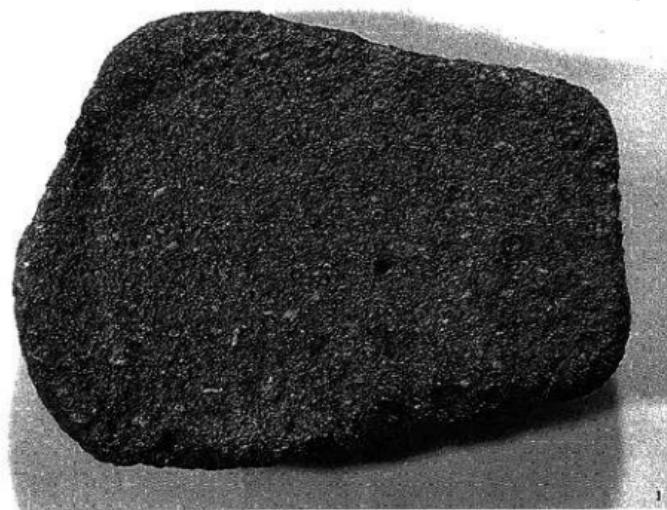
写真図版81B 第6号住居跡出土石器(1)



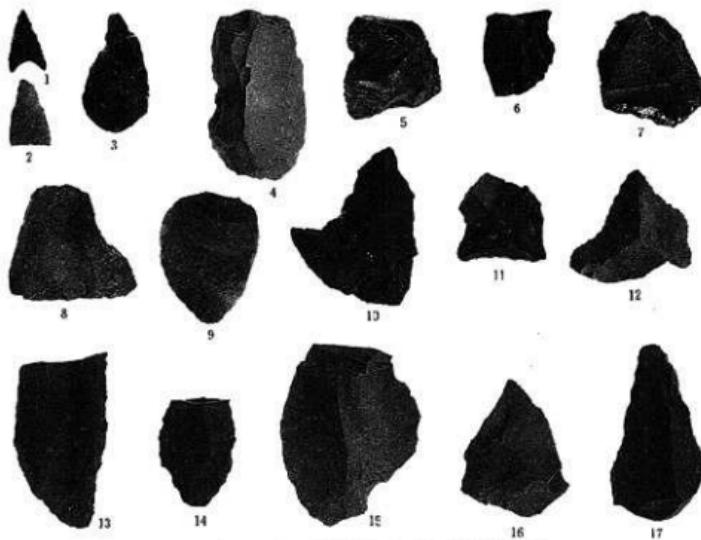
写真図版82A 第6号住居跡出土石器(2)



写真図版82B 第6号住居跡出土石器(3)



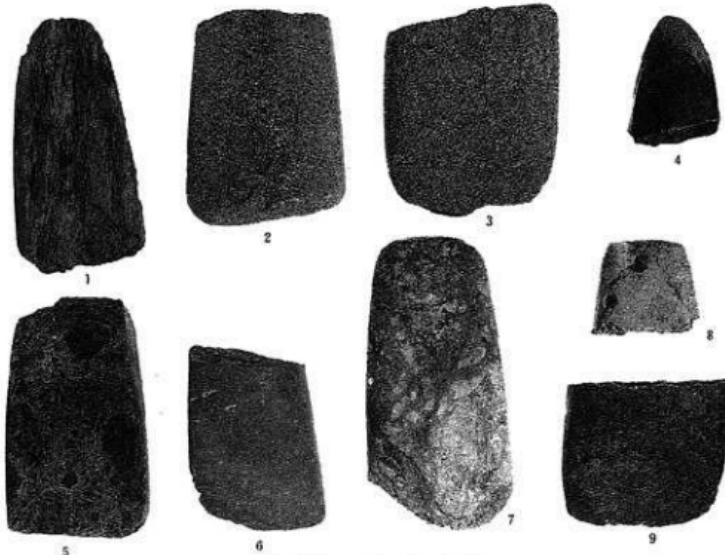
写真図版83A 第6号住居跡出土石器(4)



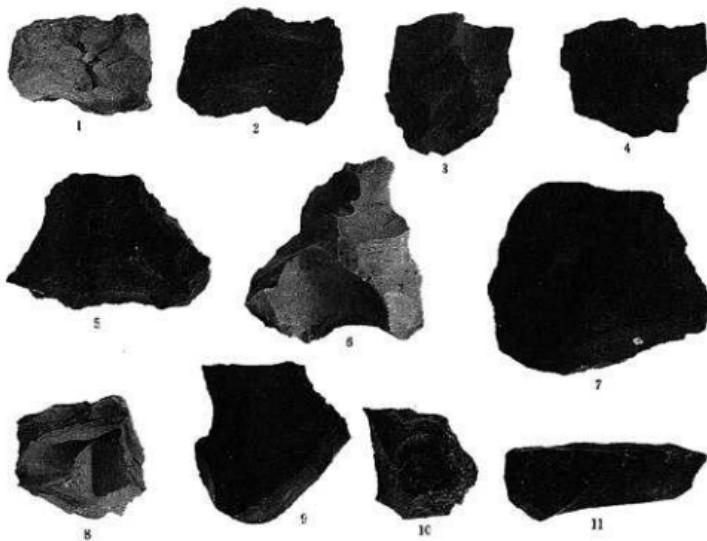
写真図版83B 第10号住居跡・その他の遺構出土石器



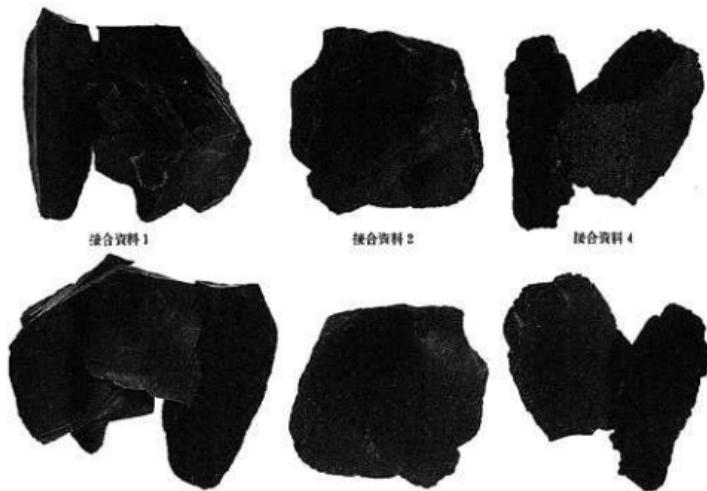
写真図版84A 第9号・第10号住居跡・その他の遺構出土石器



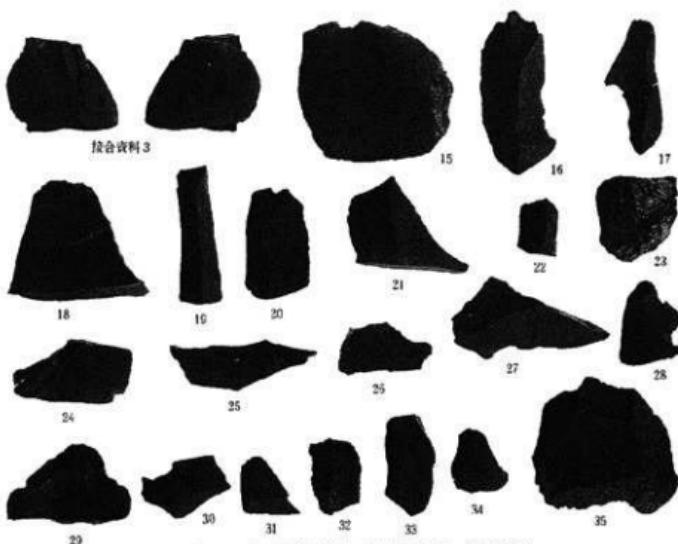
写真図版84B 磨製石斧



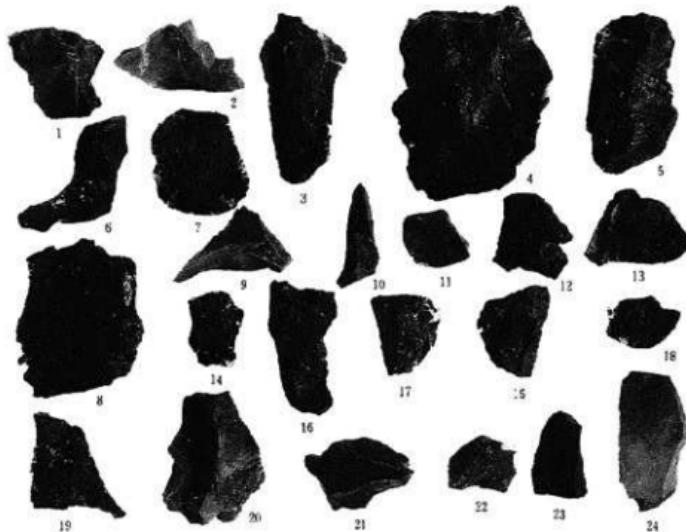
写真図版85A 石 核



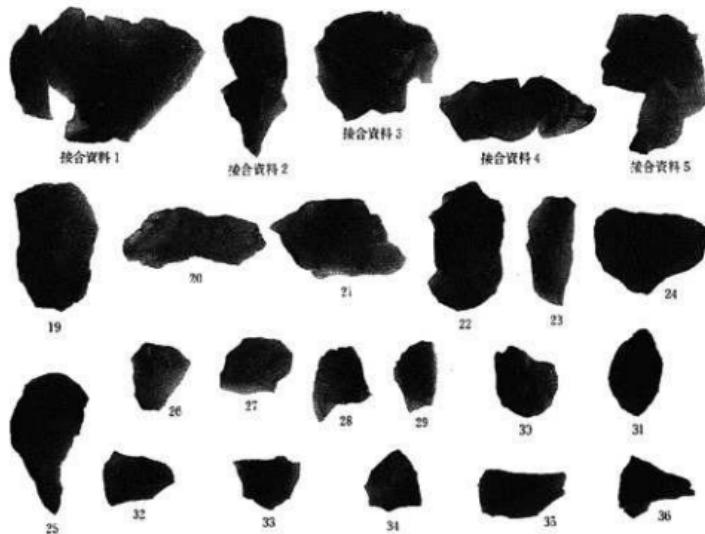
写真図版85B 第6号住居跡ピット5出土剥片一括資料(1)



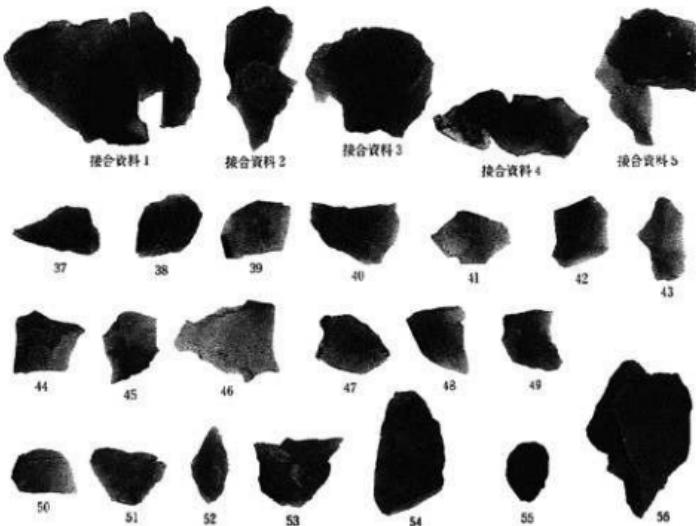
写真図版86A 第6号住居跡ピット5出土剣片一括資料(2)



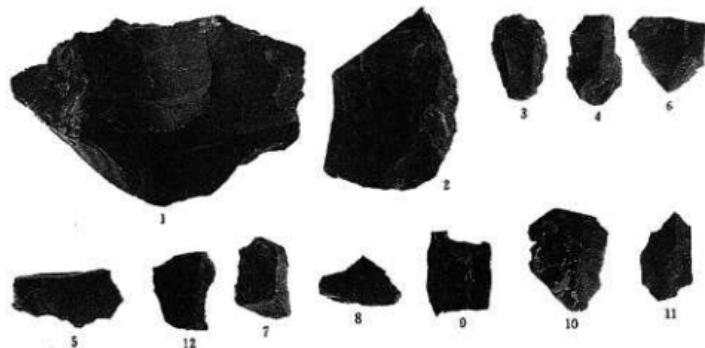
写真図版86B 第6号住居跡ピット1出土剣片一括資料(1)



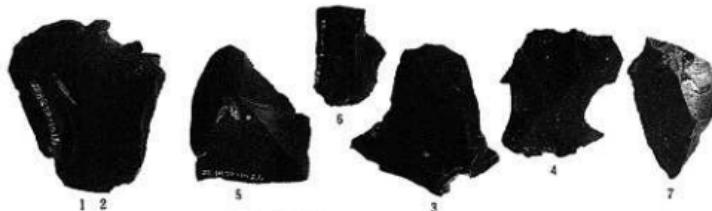
写真図版87A 第5号住居跡C区床面出土削片一括資料1(1)



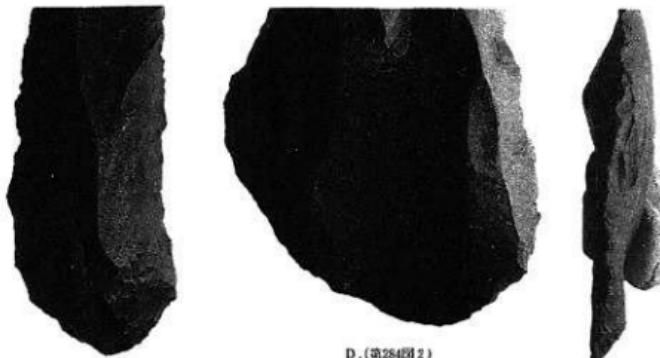
写真図版87B 第6号住居跡C区床面出土削片一括資料1(2)



A. 第6号住居跡C区灰面出土剥片一括資料2



B. 同側遺物包含層出土剥片一括資料



C. (第13図11)

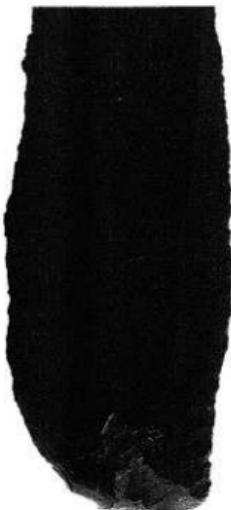
D. (第284図2)

E. (第167図4)

C: 片面構成の側面面の後が著しく摩滅している(不定形石器ⅡA類)

D: 片面構成の側面面の後が著しく摩滅している(不定形石器ⅡB類)

E: 刃邊が著しく摩滅している(流狀石器Ⅱ類)



A. 石製品の穿孔状態。
(第236図7)



B. 地状石器の刃部の二重バティナ。
(第144図1)

C. 背面構成の削進面の縁が鋭しく摩耗している。
(不整形石器Ⅱ A類) (第216図6)



D. 二重バティナ石器。中央の古いバティナの部分は痕滅している。(第283図3)



E. 二重バティナ石器。
つまみ部と刃部の加工は
新しい。
(第166図13)

写真図版89

小梁川遺跡縄文時代遺構編Ⅱ

—石 器 編—

目 次

| | |
|--------------------------|-----|
| I. 例 言 | 629 |
| II. 遺構出土の石器 | 631 |
| 1. フラスコ状土壙出土の石器 | 631 |
| ① I群期 | 633 |
| ② II・III群期 | 639 |
| ③ IV～V群期 | 648 |
| ④ VI群期 | 659 |
| ⑤ VII群期 | 659 |
| ⑥ 群期不明 | 660 |
| 2. その他の土壙出土の石器 | 673 |
| ① I群期 | 675 |
| ② II・III群期 | 680 |
| ③ IV～V群期 | 683 |
| ④ VI群期 | 685 |
| ⑤ 群期不明 | 687 |
| 3. 表土および位置不明の土壙出土石器 | 717 |
| III. 遺構出土の石器の考察 | 721 |
| 1. はじめ | 721 |
| 2. 遺構出土の石器の分類 | 721 |
| 3. 縄文時代早期の石器群 | 732 |
| 4. 縄文時代前期前葉の石器群 | 732 |
| 5. 縄文時代前期後葉から中期中葉の石器群 | 734 |
| A. 器種組成 | 734 |
| B. 各器種の考察 | 735 |
| C. 縄文時代前期後葉から中期中葉の石器群の特徴 | 750 |

I. 例 言

今回報告するのは小梁川遺跡の遺構出土の石器のうちフラスコ状土壙、その他の土壙、表土および位置不明の土壙出土の石器である。堅穴住居跡、焼け面を囲むピット群、埋設土器遺構、墓壙、配石遺構、溝状土壙出土の石器については1987年発行の七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅲで既に報告している(宮城県教育委員会 1987b)。この二冊で縄文時代の遺構出土の石器の報告は完了する。遺構および土器の図版と石器の図版が二冊に分割されて掲載されることになり、不統一な構成となっている。遺構、土器、石器の図版の対応表を付け検索の便とする。石器の個々の説明は省略されているので、石器の特徴は属性表の備考欄に記述する。属性表の器種の型式の分類は考察の最初に記載している。

今回の考察は遺構出土の石器全体を包括するものであり、前年度の報告も含むので、繁雑となるが御了承願いたい。これらの報告済みの石器について引用する場合には、87年第125図399のように記述する。

なお報告書で使用されている「群期」と土器型式との対応については以下のような対応関係が成り立つ。

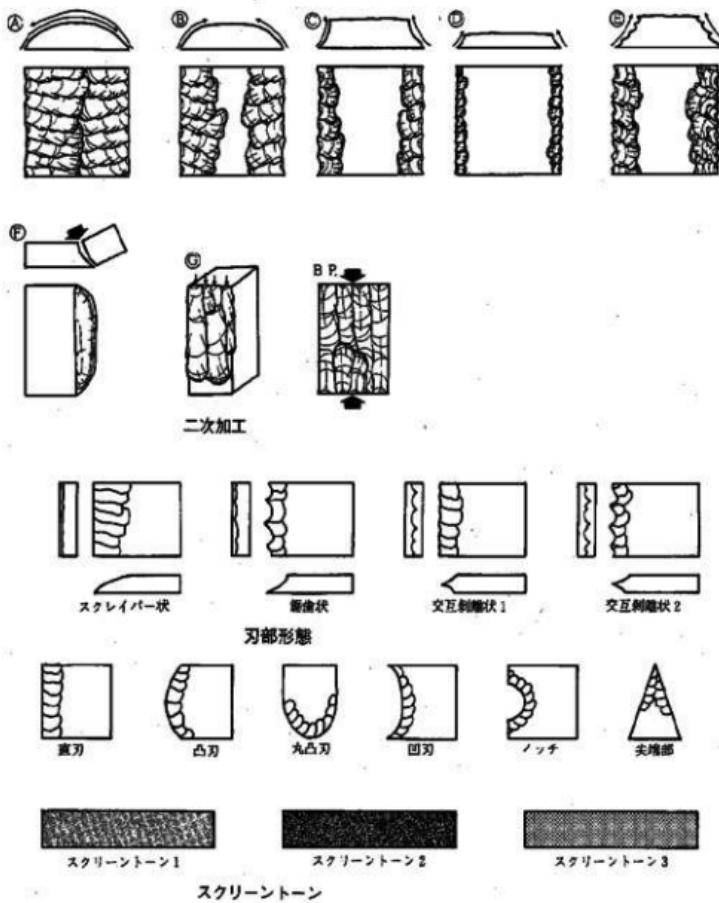
| | | |
|------------|-------|---------|
| I群期 | | 大木6型式期 |
| II・III群期 | | 大木7a型式期 |
| IV・V群期 | | 大木7b型式期 |
| VI群期 | | 大木8a型式期 |
| VII・VIII群期 | | 大木8b型式期 |

石器の実測図および記述の凡例について (第1表)

- 1. 登録番号** 石器は図、写真、文章において、統一的な登録番号で表示している。
- 2. 縮 尺** 剥片石器は2/3、磨石類は1/3で原則的に図化している。しかし、石核、磨製石斧、石皿などではそれよりも小さい縮尺で図化しているものもある。登録番号の末尾の分数はそのページのスケールの分数倍の縮尺なっていることを示している。
- 3. 二次加工** 石器については二次加工の形状と刃部の形態を重要と考え、二次加工の形状を以下のように分類し、記号を使用して説明する。
 - バルブの部分が薄く、器体に沿って奥まで入る剥離。素材のほぼ全面を覆う。
 - バルブの部分が薄く、器体に沿ってやや奥まで入る剥離。
 - 急角度でバルブが発達する剥離。
 - 縁辺に沿った小剥離。

- ⑤ 階段状（ステップ状）の剥離。
- ⑥ 折断面（折れ面）。両極の打痕を有する例がある。
- ⑦ 棒状剥離（ファシット状剥離）
- BP. 両極剥離。

第1表 石器の実測図および記述の凡例について



4. 刃部形態 二次加工によって作出される刃部の形態については、スクレイバー状、鋸歯状、交互剥離状を設定する。

- ① **スクレイバー状** ネガティブバルブの目立たない剥離が連続する。刃部は正面観、立面観共に直線となる。
- ② **鋸歯状** ネガティブバルブの発達する剥離により正面観が鋸歯状であるが、立面観は直線に近い刃部形状を呈する。いわゆるデンティキュレイトである。
- ③ **交互剥離状1** 正面観は直線であるが、立面観は鋸歯状の刃部形状を呈する。いわゆるジグザグの刃部である。
- ④ **交互剥離状2** 正面観、立面観共に鋸歯状の刃部形状を呈する。いわゆる鋸歯状で、ジグザグの刃部である。

5. 刃部形状 刃部の形状については直刃、凸刃、丸凸刃、凹刃、ノッチ、尖端部を設定する。

6. スクリーントーン 使用痕、付着物、二重バティナはスクリーントーンで位置を示し、観察表または本文中で説明を加えることにする。スクリーントーンは三種類を使用している。

- ① **スクリーントーン1** 部位を示すもの。
 - ・ 剥片石器の刃部の摩滅、ボリッシュなど。
 - ・ 磨凹敲石類の磨面の範囲。
 - ・ 二重バティナ石器のバティナの新旧関係。
 - ・ 剥片接合資料で、その直前に剥離された剥片が接合していたネガティブな面。
- ② **スクリーントーン2** 部位を示すもの。
 - ・ 剥片石器の焼けはじけ。
 - ・ 剥片石器の付着物。
- ③ **スクリーントーン3** 位置を示すもの。
 - ・ 磨凹敲石類のザラ面（敲打面）の範囲。

II. 遺構出土の石器

1. フラスコ状土壙出土の石器

フラスコ状土壙は87年の報告書にすべて拡大図が掲載されているので対応表（第2表）で遺構と遺物とを検索して頂きたい。

第2表 フラスコ状土壤対応表

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------|-----|---------|-------|---------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 土 壤 No. | 300 | 411 | 417 | 613 | 147 | 117 | 311 | 182 | 277 | 320 | ? | 18 | 301 | 440 | 146 |
| 透 滲 国 領 | 304 | 184 | 194 | 161 | 188 | 185 | 184 | 165 | 165 | 165 | 350 | 346 | 165 | 166 | 166 |
| 土 壤 No. | 373 | 170~175 | 172 | 169~188 | 173 | 173 | 173 | 173 | 174 | 175 | 275 | 274 | 179 | 179 | 177 |
| 石 滅 國 領 | — | 1 | 1 | 1~2 | 2~3 | 2 | 2 | 2 | — | 0 | — | 4 | 4 | 4 | — |
| 土 壤 No. | 363 | 200 | 403 | 490 | 451 | 520 | 201 | 497 | 536 | 237 | 255 | 334 | — | — | — |
| 透 滲 国 領 | 367 | 167 | 187 | 167 | 147 | 152 | 147 | 147 | 147 | 147 | 167 | 167 | 167 | 167 | 167 |
| 土 壤 No. | 369 | 176 | 366 | 184~192 | 189 | 190 | 189 | 194 | 194 | 194 | 194 | 194 | 194 | 194 | 194 |
| 透 滲 国 領 | 5 | — | 0~4~6 | — | 4 | — | 6 | 6 | 7 | — | 7 | — | — | — | — |

I・II期のフラスコ状土壤

| | | | | | | | | |
|---------|-----|---------|-----|-----|-----|-------------|-----|-----|
| 土 壤 No. | 307 | 169 | 220 | 2 | 87 | 847 | 180 | 374 |
| 透 滲 国 領 | 189 | 185 | 185 | 185 | 185 | 186 | 186 | 186 |
| 土 壤 No. | 199 | 187~188 | 189 | 189 | 190 | 191~192 | 194 | 193 |
| 透 滲 国 領 | 0 | 0~10~12 | — | — | 14 | 64~65~65~67 | 13 | 13 |

II・III期のフラスコ状土壤

| | | | | | | | | | |
|---------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 土 壤 No. | 172 | 190 | 301 | 184 | 488 | ? | 364 | 305 | 360 |
| 透 滲 国 領 | 195 | 195 | 195 | 195 | 195 | 195 | 195 | 195 | 195 |
| 土 壤 No. | 197 | 196 | 309 | 189 | 299 | — | 301 | 301 | 301 |
| 透 滲 国 領 | 0 | 0 | 18 | — | 18 | — | — | — | — |

III・IV期のフラスコ状土壤

II・III期のフラスコ状土壤

| | | | | | | | | | | |
|---------|-----|---------|-------|-------|-----|-----|-------|-------|---------|---------|
| 土 壤 No. | 199 | 196 | 195 | 341 | 210 | 269 | 112 | 494 | 171 | 352 |
| 透 滲 国 領 | 202 | 205 | 202 | 203 | 203 | 203 | 204 | 203 | 204 | 204 |
| 土 壤 No. | 213 | 211~212 | 214 | 216 | 215 | 217 | 211 | 211 | 215~220 | 222~224 |
| 透 滲 国 領 | 17 | 17 | 17 | — | 19 | 18 | 19 | 19 | 19 | 19 |
| 土 壤 No. | 363 | 181 | 380 | 282 | 307 | 183 | 385 | 386 | 346 | 336 |
| 透 滲 国 領 | 305 | 306 | 306 | 306 | 306 | 306 | 307 | 307 | 307 | 307 |
| 土 壤 No. | 229 | 229 | 227 | 229 | 220 | 230 | 229 | 229 | 221 | 223 |
| 透 滲 国 領 | 19 | 19~20 | 20 | — | 21 | 20 | 20 | 21 | 21 | 21 |
| 土 壤 No. | 176 | 196 | 302 | 414 | 246 | 13 | 149 | 307 | 324 | 109 |
| 透 滲 国 領 | 208 | 205 | 207 | 208 | 208 | 208 | 209 | 209 | 209 | 209 |
| 土 壤 No. | 224 | 230 | 226 | 226 | 226 | 227 | 229 | 241 | 240 | 242 |
| 透 滲 国 領 | 22 | 25 | 25~25 | 25~24 | 24 | 24 | 24~25 | 25~26 | 25 | 27 |
| 土 壤 No. | 175 | 236 | 588 | 196 | 133 | 448 | 181 | 572 | 569 | — |
| 透 滲 国 領 | 212 | 206 | 210 | 210 | 210 | 210 | 210 | 210 | 210 | — |
| 土 壤 No. | 242 | 242 | 244 | 245 | 245 | 245 | 247 | 248 | 248 | — |
| 透 滲 国 領 | 27 | — | 27 | — | 27 | — | — | — | — | — |

IV~V期のフラスコ状土壤

| | | | |
|---------|-----|---------|-----|
| 土 壤 No. | 124 | 158 | 539 |
| 透 滲 国 領 | 249 | 249 | 249 |
| 土 壤 No. | 249 | 249~252 | 252 |
| 透 滲 国 領 | 29 | — | — |

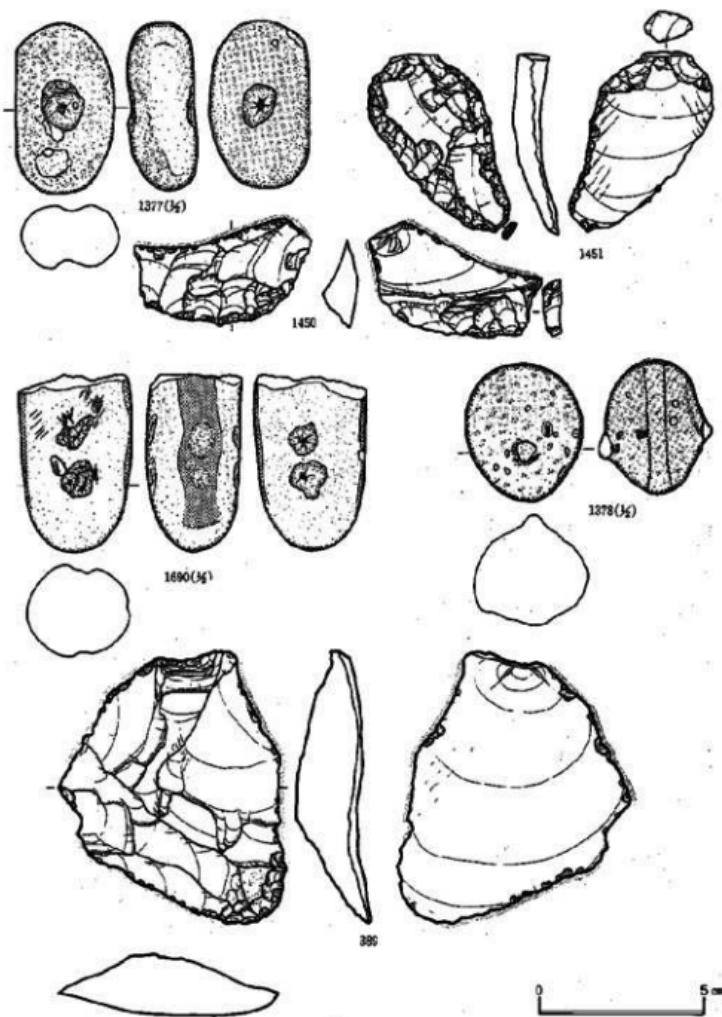
| | | | |
|---------|-----|---------|-----|
| 土 壤 No. | 194 | 220 | 63 |
| 透 滲 国 領 | 254 | 254 | 254 |
| 土 壤 No. | 254 | 254~255 | 255 |
| 透 滲 国 領 | 29 | 30 | 30 |

VI期のフラスコ状土壤

VI期のフラスコ状土壤

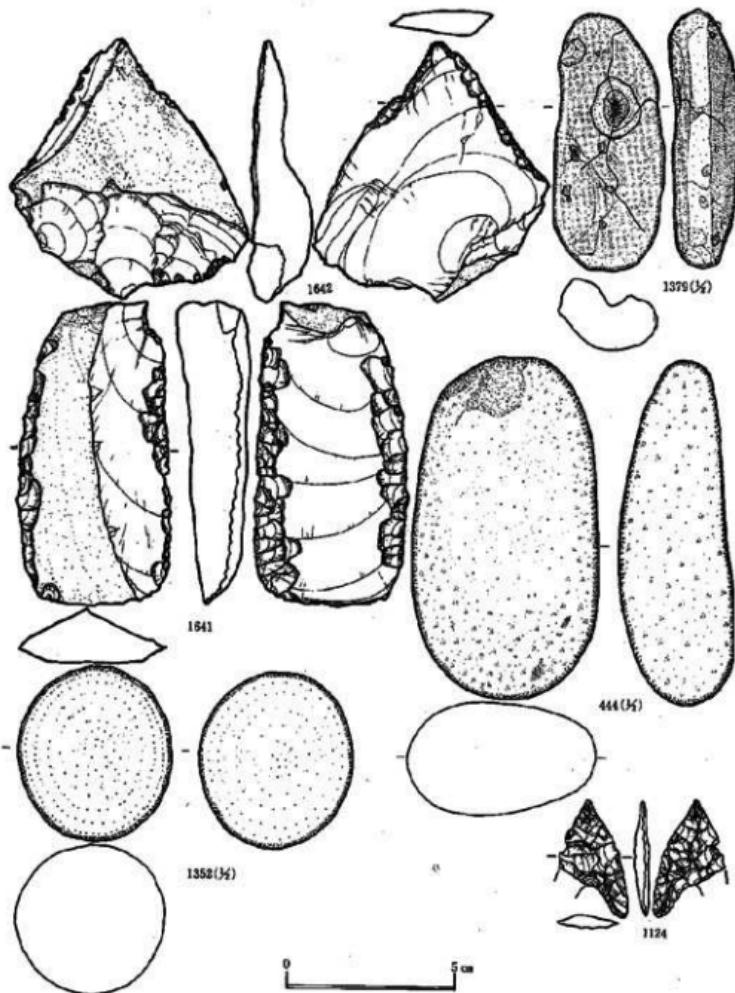
| | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------|-------|-------|---------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|---------|-------|-----|-----|-------|-------|
| 土 壤 No. | 815 | 194 | 821 | 183 | 842 | 865 | 581 | 145 | 704 | 821 | 206 | 123 | 150 | 581 | 830 |
| 透 滲 国 領 | 254 | 254 | 254 | 255 | 255 | 260 | 260 | 260 | 261 | 261 | 261 | 261 | 261 | 261 | 261 |
| 土 壤 No. | — | — | — | 277 | — | — | 279 | — | 280 | 281~288 | 283 | 284 | 284 | 285 | 285 |
| 透 滲 国 領 | 30 | 35 | 35~36 | 36 | 36 | 35 | 35 | 35 | 35 | 31~32 | 31~32 | 35 | 35 | 32~33 | 32~33 |
| 土 壤 No. | 638 | 807 | 813 | 176 | 1 | 482 | 826 | 96 | 191 | 826 | 832 | 834 | 831 | 836 | 837 |
| 透 滲 国 領 | 284 | 284 | 284~285 | 285 | 285 | 286 | 286 | 286 | 287 | 287~288 | 288 | 288 | 288 | 288 | 288 |
| 土 壤 No. | 298 | — | — | 965 | — | — | 965 | — | 965 | 965 | — | — | — | — | — |
| 透 滲 国 領 | 33~34 | 34 | 34 | 34 | 34 | 34 | 35 | 35 | 35 | 35~36 | 36 | 36 | 36 | 36 | 36 |
| 土 壤 No. | 316 | 437 | 538 | 27 | 195 | 296 | 506 | 145 | 149 | 14 | 44 | 817 | 456 | 615 | — |
| 透 滲 国 領 | 930 | 276 | 479 | 871 | 871 | 172 | 271 | 271 | 272 | 272 | 273 | 273 | 273 | 273 | 273 |
| 土 壤 No. | — | 297 | 297 | — | — | — | — | — | 206 | 206 | — | — | — | — | 200 |
| 透 滲 国 領 | 36 | 37 | 37 | 37 | 37 | 37 | 37 | 37 | 38 | 38 | 38 | 38 | 38 | 38 | 38~40 |
| 土 壤 No. | 492 | 684 | 26 | 326 | 260 | 602 | 550 | 642 | 152 | 429 | — | — | 271 | — | — |
| 透 滲 国 領 | 273 | 273 | 273 | 274 | 274 | 274 | 274 | 274 | 274 | 274 | 274 | 274 | 274 | 274 | 274 |
| 土 壤 No. | — | — | 289 | 289 | — | — | — | — | 289 | — | — | — | — | — | — |
| 透 滲 国 領 | 40 | 49~49 | 41 | 41 | 42 | 42 | 42 | 42 | 42 | 42 | 42 | 42 | 42 | 42 | 42 |

解説不明のフラスコ状土壤



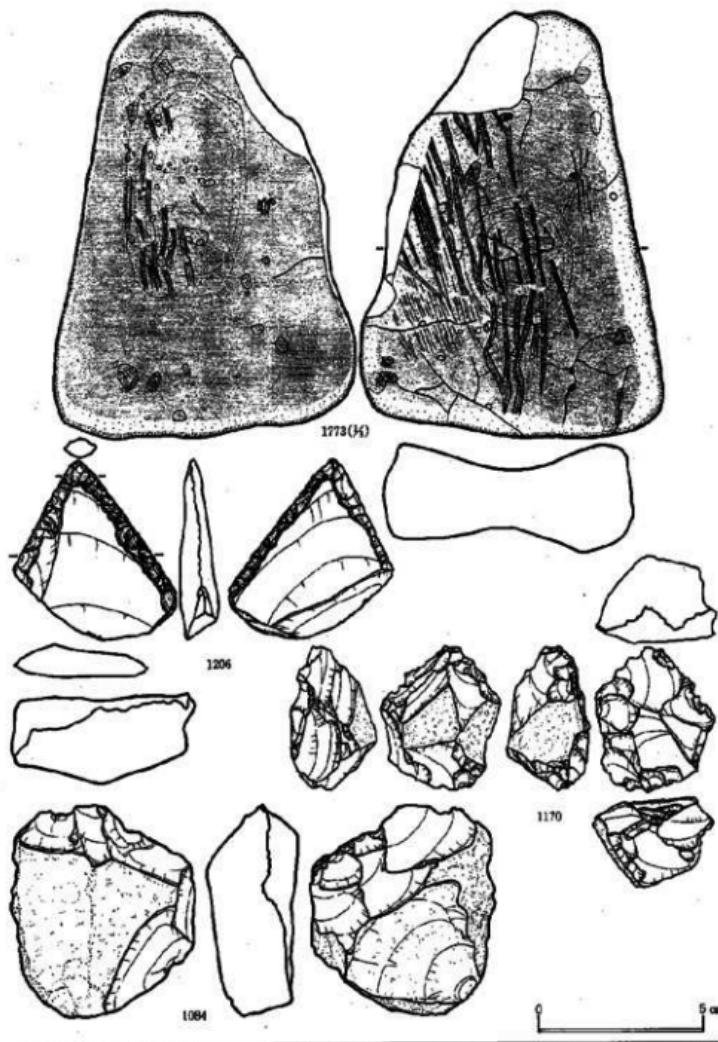
| 番号 | 通 呼 | 形 态 | 基 本 | 石 材 | 重 量(g) | 備 考 | 出 所 |
|------|--------|-----------|-----|------|-----------------|-------------------------|------|
| 1451 | 土器 461 | I 厚 石 鮫 | ? | 珪質頁岩 | 15.5 | 火照の外に周縁部あり。 | 6-1 |
| 1450 | 土器 461 | I 厚 二次加工鮫 | - | 珪質頁岩 | 12.6 | ポイントブレイク穿孔。-(Eあり(S.T.)) | |
| 1377 | 土器 612 | I 厚 破 石 | B | 珪質頁岩 | 542.0 | 2面削。2ダツ頭。 | |
| 1378 | 土器 612 | I 厚 破 石 | C | 珪質頁岩 | 220.0 | 2面削。 | |
| 380 | 土器 612 | I 厚 不定 形 | D/A | 珪質頁岩 | 78.9 | 全表面が磨削(剥離)。 | |
| | | | | | m.Eあり(S.T.)。凸N. | | 15-1 |

第1図 I群期のフ拉斯コ状土壙出土石器(I) (461・657・612号土壙)



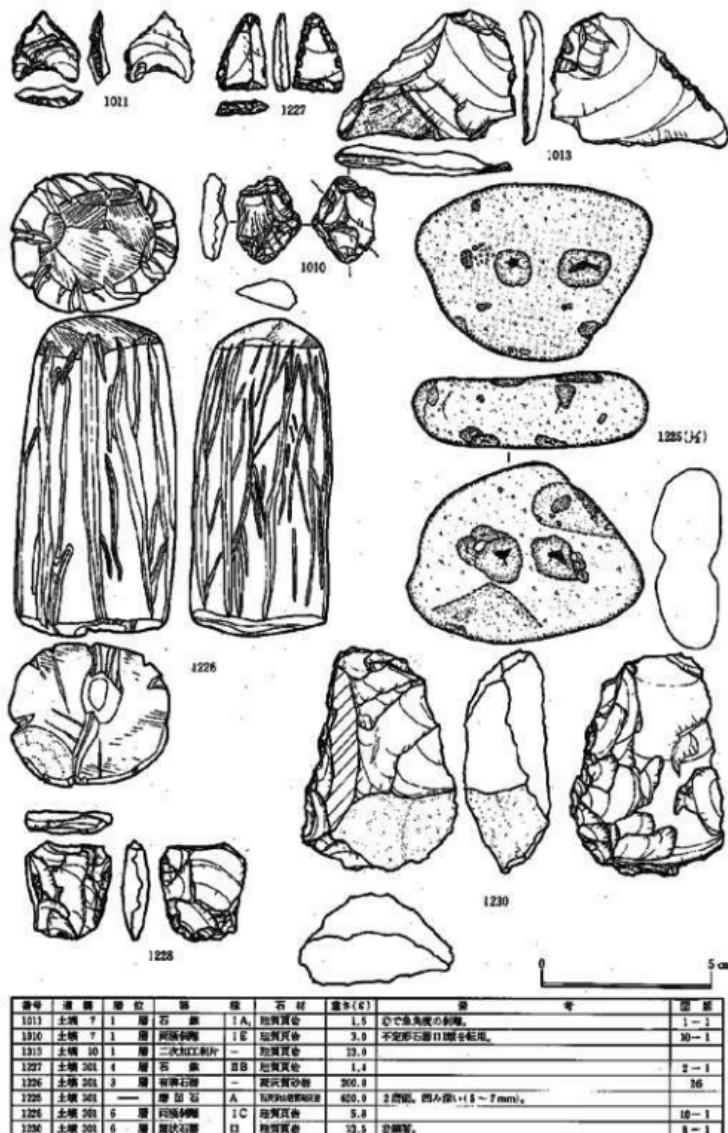
| 番号 | 遺 権 | 曾 に | 遺 権 | 石 物 | 直さ(ミ) | 圖 号 | 圖 類 |
|------|--------|-----------|-----|---------|-------|-------------|-------|
| 1642 | 土壤 612 | 瓦 不 定 形 | BII | 埴 質 瓦 | 53.5 | | 16- 2 |
| 1379 | 土壤 612 | 1 壁 面 石 | B | 石質壁面構成物 | 370.0 | 2面削。端が突出する。 | |
| 444 | 土壤 612 | 瓦 不 定 形 | C | 埴 質 瓦 | 2200 | 2面削。 | |
| 1541 | 土壤 612 | 1 壁 不 定 形 | BII | 埴 質 瓦 | 76.0 | | 24- 2 |
| 1358 | 土壤 147 | — 磐 石 | C | 磐 石 | 1140 | 全面削削。 | |
| 1124 | 土壤 147 | 1 磐 石 | 1B | 埴 質 瓦 | | | 1- 2 |

第2図 I群期のフラスコ状土壌出土石器(2) (612・147号土壤)

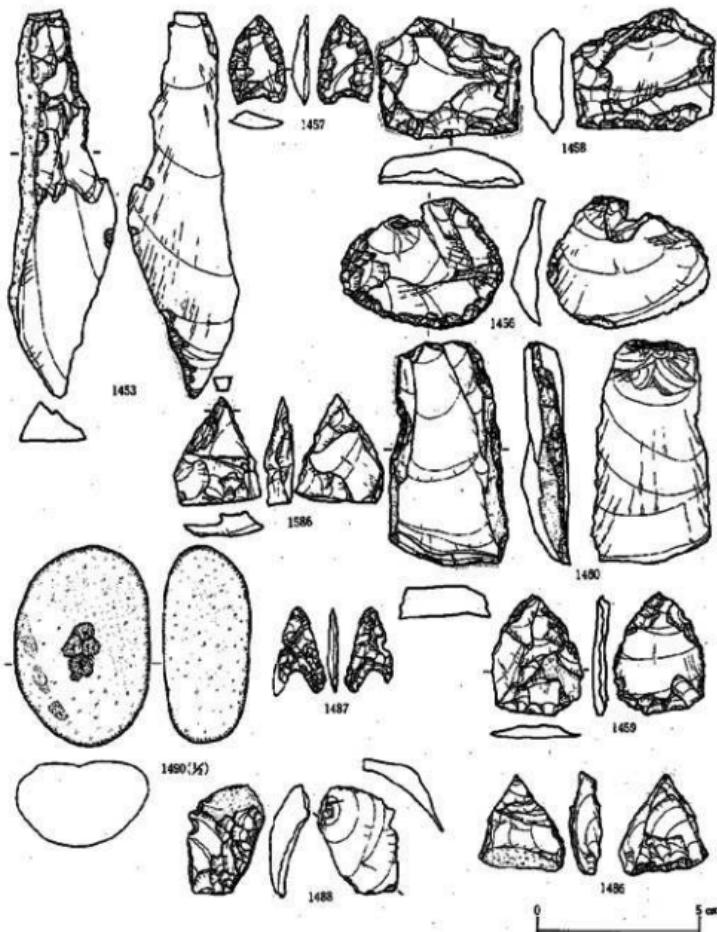


| 番号 | 通 | 標 | 尾 | 寸 | 標 | 寸 | 六 | 材 | 第 | 号 | 回 |
|------|---|---|-----|---|---|---|---|-------|-------|-------|--------------|
| 1773 | 土 | 標 | 145 | — | 石 | 庄 | 石 | 青山産瓦片 | 9540 | 鉢形器 | 25 |
| 1084 | 土 | 標 | 117 | 3 | 石 | 庄 | 1 | 燒質瓦片 | 380.0 | | 10-2 |
| 1206 | 土 | 標 | 211 | 1 | 石 | 不 | 形 | II | 燒質瓦片 | 20.5 | 瓦形器嘴張い(5.T.) |
| 1170 | 土 | 標 | 1/2 | 1 | 石 | 庄 | 机 | III | 燒質瓦片 | 330.0 | |

第3図 I群期のフラスコ状土壙出土石器(3) (147・117・211・177号土壙)

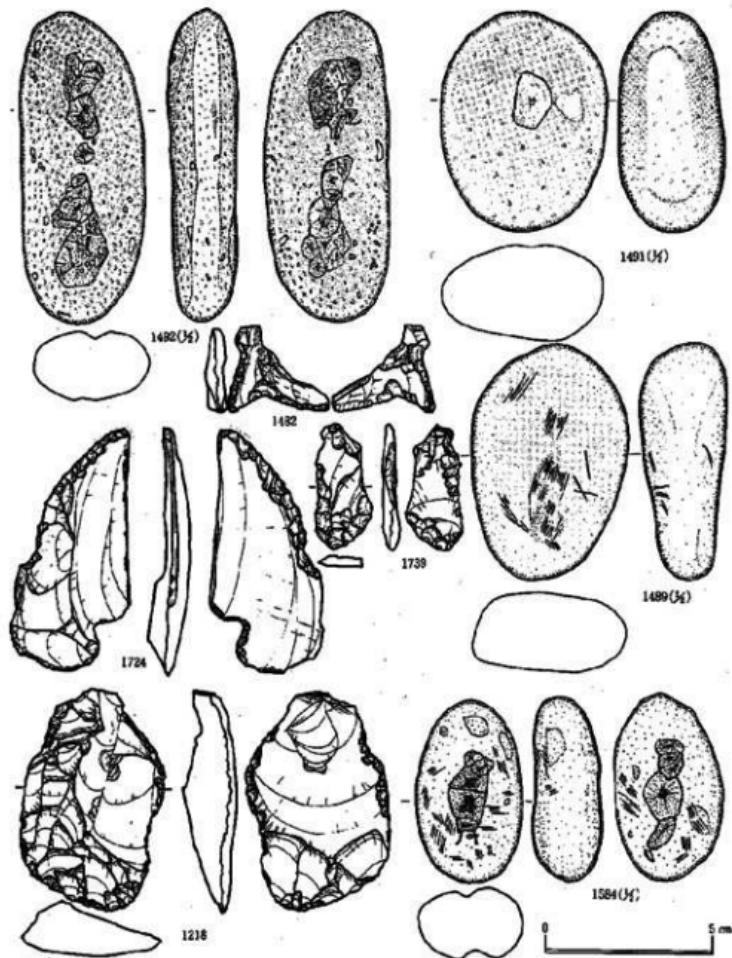


第4図 1群期のフラスコ状土壠出土石器(4) (7・10・301号土壠)



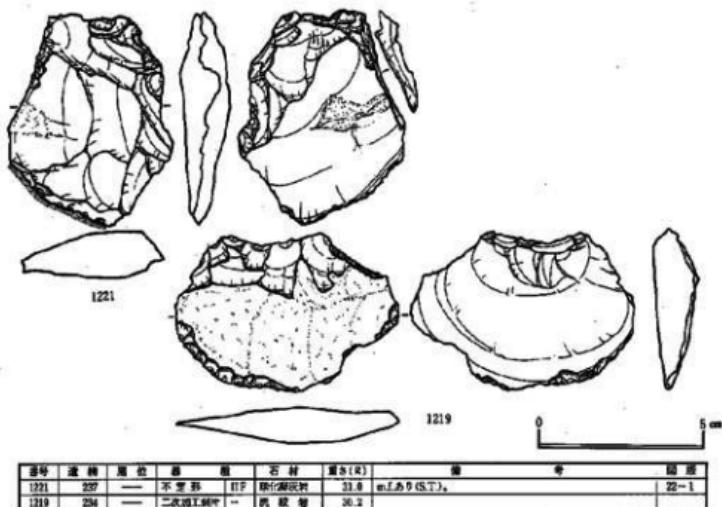
| 番号 | 遺構 | 層位 | 器種 | 石材 | 直徑(ミ) | 圖考 | 図版 | |
|------|----|-----|----|-------|-------|------|--------------------------------|------|
| 1453 | 土塊 | 402 | 層 | 不定形 | 1D | 地質実物 | 37.4 縦凹に丸溝をともなう磨滅あり(5.T.)。 | 22-2 |
| 1457 | 土塊 | 402 | 層 | 石 | 1A | 地質実物 | 1.6 | 1-1 |
| 1458 | 土塊 | 402 | 層 | 不定形 | 1B | 地質実物 | 26.8 ①好成形、尖端部磨损(5.T.)。 | 14-1 |
| 1456 | 土塊 | 402 | 層 | 不定形 | 1A | 地質実物 | 14.0 ②の表面にによる鋸歯刃を呈するバーエッジ。 | 14-2 |
| 1586 | 土塊 | 303 | 層 | 不定形 | 1D | 地質実物 | 6.5 ③の面により向拠形、m.f.あり(5.T.)。 | 20-1 |
| 1480 | 土塊 | 402 | 層 | 二次加工跡 | - | 地質実物 | 26.4 m.f.あり(5.T.)。 | |
| 1459 | 土塊 | 402 | 層 | 小形工具 | - | 地質実物 | 4.2 尖頭部磨损か?、尖頭部と基部の分化。 | 2-2 |
| 1460 | 土塊 | 402 | 層 | 磨 | C | 安山岩 | 56.6 3面削。四角1面のみ。 | |
| 1487 | 土塊 | 402 | 層 | 石 | 1B | 地質実物 | 基部は横に刃状磨がされたもの、石面に再加工か?。 | 1-2 |
| 1488 | 土塊 | 402 | 層 | 二次加工跡 | - | 地質実物 | 5.5 ポイントフレーク裏面。 | |
| 1458 | 土塊 | 402 | 層 | 不定形 | 1D | 地質実物 | 5.4 尖頭部にm.f.あり(5.T.)。 | 13-1 |

第5図 1群期のフ拉斯コ状土壙出土石器(5) (462・563・463・498号土塊)

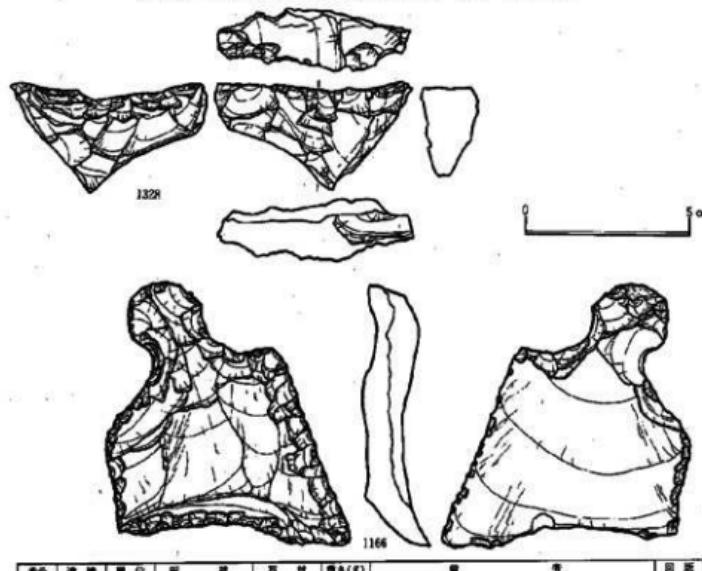


| 番号 | 通 號 | 層 位 | 形 態 | 石 材 | 重さ(㌘) | 解 説 | 考 査 |
|------|--------|--------|----------|--------------|-------|--------------------------|--------|
| 1492 | 495 | — | 塊状ね | B 石英閃長岩 | 270.0 | 2面削。四みは分離する傾向あり。 | |
| 1491 | 495 | I | 層 状 | C 石英長石岩 | 3850 | 2面削。四みの幅<1.5mm。 | |
| 1480 | 495 | I | 層 状 | A 石英閃長岩 | 820.0 | 2面削(底面崩れ)。 | |
| 1482 | 497 | I | 層 状 | D 玉藻山地(?) | 2.0 | 尖端部あり。 | 6-1 |
| 1724 | 558 | 2 | 層 状 | E 地質試験用 | 15.0 | 側面の打削部を折削。断続尖端的磨滅(S.T.)。 | 6-2 |
| 1739 | 558 | 1 | 不規 則形 | F 理質試験 | 2.2 | 刃部新しい。破損か?。 | 24-2 |
| 1584 | 558 | 1 | 層 状 | G 安山岩 | 330.0 | 2面削(底面崩れ)。四みの幅<1.5mm。 | |
| 1238 | 236 | — | 不規 則形 | H 地質試験 | 32.6 | 断続尖端的加工あり。 | 15-1 |

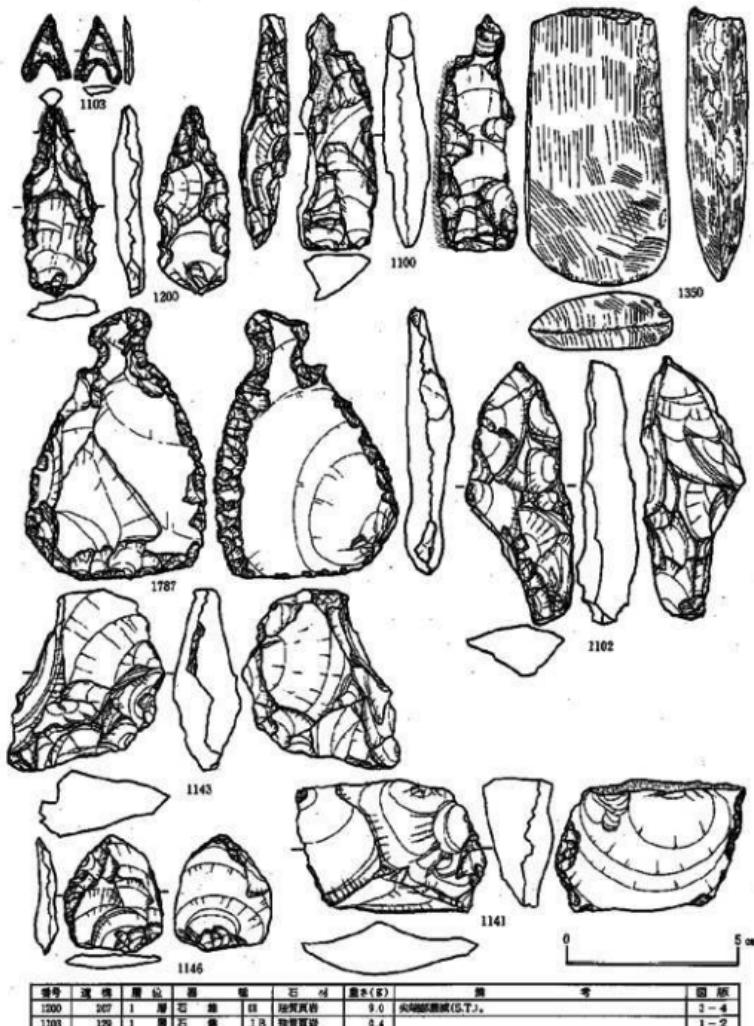
第6図 I群期のフラスコ状土壌出土石器(6) (498・497・559・558・234号土壤)



第7図 I群期のフラスコ状土壙出土石器(7) (237・234号土壙)

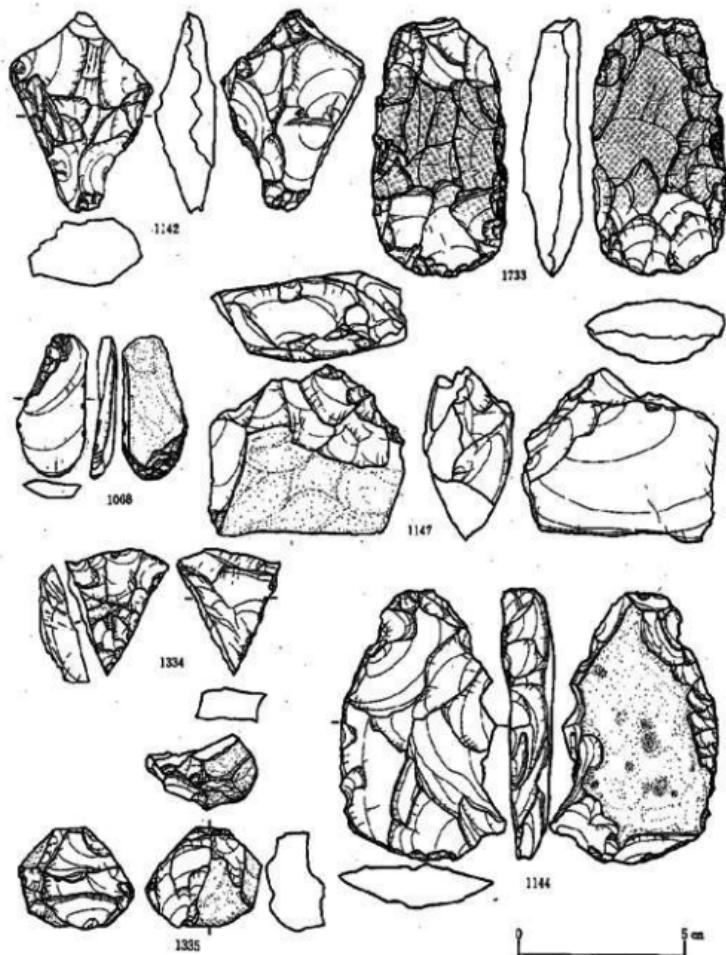


第8図 II・III群期のフラスコ状土壙出土石器(1) (172号土壙)



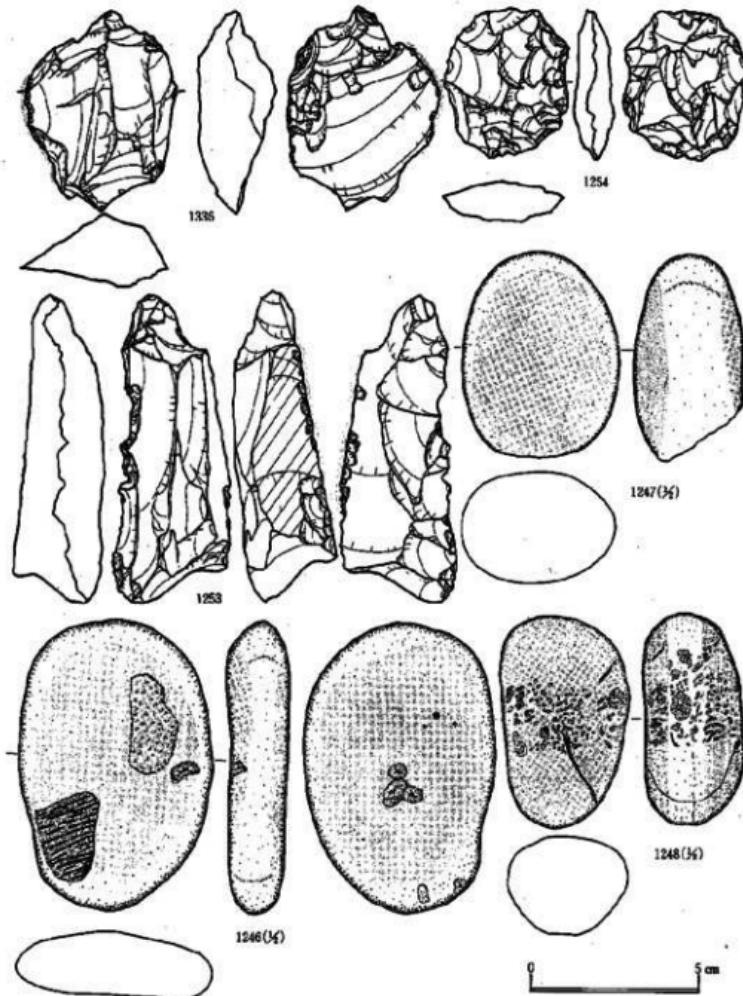
| 番号 | 遺 墓 | 層 号 | 器 物 | 石 の | 重 量 (g) | 備 考 | 圖 版 |
|------|-----|-----|---------|------|---------|-------------------------|------|
| 1100 | 207 | 1 | 磨 石 鋸 | II | 8.0 | 尖頭部磨滅 (S.T.)。 | 2-4 |
| 1103 | 129 | 1 | 磨 石 鋸 | II B | 0.4 | | 1-2 |
| 1100 | 129 | 1 | 磨 石 鋸 | II A | 9.1 | 五郎印+切刃有。 | 4-2 |
| 1150 | 129 | 1 | 磨 石 鋸 | II B | 38.4 | 五郎印+火炎と鉛垂底あり。折れ更に剥離で整刃。 | 5-3 |
| 1102 | 129 | 1 | 磨 石 鋸 | II | 22.5 | 半鏡面の下端から剥離もあり。 | 12-1 |
| 1187 | 162 | 2 | 磨 石 鋸 | II | 87.0 | | 6-1 |
| 1143 | 162 | 1 | 磨 不 定 形 | II | 39.8 | ジグザグの刃部を折する。 | 25-1 |
| 1146 | 162 | 2 | 小形尖頭鋸 | - | 4.7 | | 3-3 |
| 1141 | 162 | 1 | 二次加工削片 | II | 34.4 | 実際にはいがれ頭あり。 | |

第9図 II・III群期のフラコス状土器出土石器(2) (207・129・162号土壤)



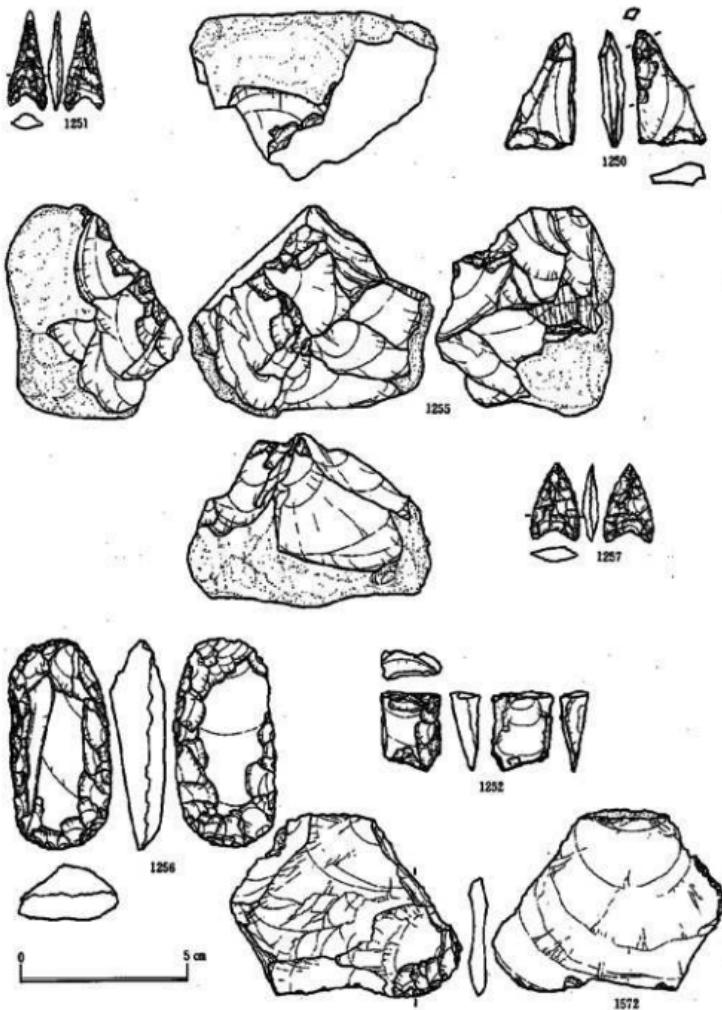
| 番号 | 遺構 | 層位 | 種類 | 石 特 | 重さ(㌘) | 備 考 | 図 版 |
|------|-----|--------|-------|----------|-------|----------------------------|------|
| 1142 | 162 | 2 | 層 不定 | ⅠB, 球状質地 | 29.4 | ゾグザグの刃形を有する。 | 13-2 |
| 1147 | 162 | 1 | 層 石 既 | Ⅱ, 球化質地 | 75.3 | 厚手の剥片質地。肩部と背面部に直交する2作削面あり。 | 11-1 |
| 1233 | 162 | 1 | 層 不定 | ⅢE, 球化質地 | 9.3 | ③+4心形削先。②や三角形に整形。 | 21-2 |
| 1334 | 162 | 1 | 層 石 既 | Ⅲ, 球化質地 | 17.4 | 両側に細かく? | 19-1 |
| 1144 | 162 | 1 | 層 不定 | ⅣA, 球質質地 | 57.7 | 対辺は角尖の錐錐状となる。 | 17-2 |
| 1723 | 87 | 層 土状石器 | 1 | 質 素 | 48.3 | 麻糬色球化質地(S.T.)。 | 7-1 |
| 1068 | 87 | 1 | 層 不定 | ⅣA, 球質質地 | 5.9 | 刃部磨滅(5.7)。 | 15-1 |

第10図 II・III群期のフ拉斯コ状土壤出土石器(3) (162・87号土壤)



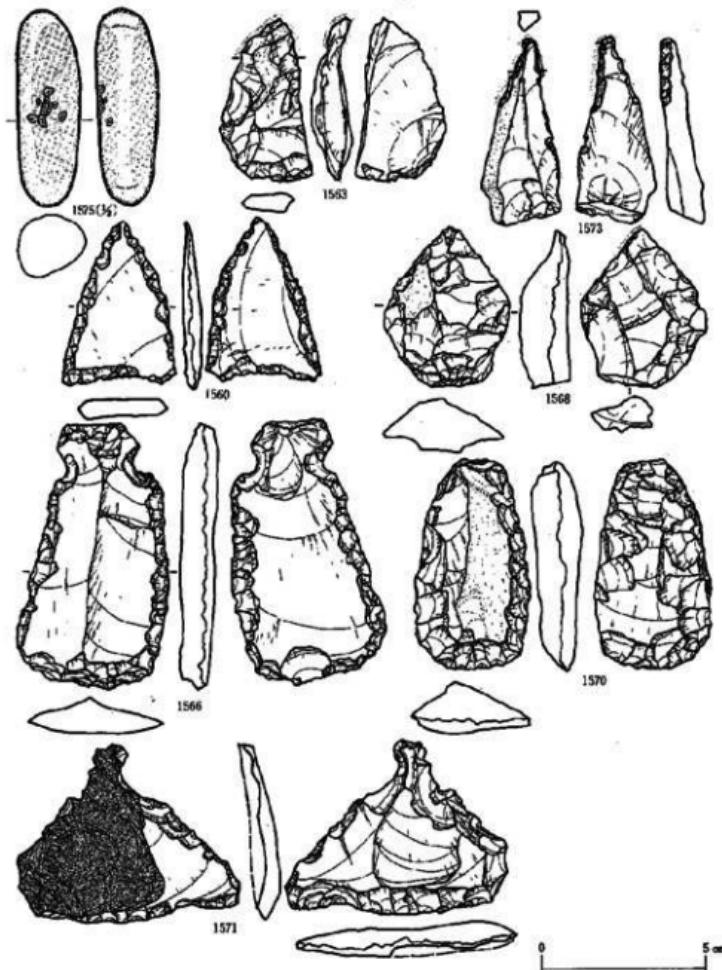
| 番号 | 通 緒 | 第 位 | 性 質 | 種 | 石 材 | 重さ(g) | 備 考 | 番 号 | 通 緒 |
|------|--------|--------|------------------|------|--------|-------|--------------------------|--------|--------|
| 1335 | 162 | 1 | 磨 不 定 形 | UF | 地質頁岩 | 30.0 | 磨上L.1(S.T.)。 | 122-1 | |
| 1254 | 304 | 4 | 磨 不 定 形 | I.C. | 共青頁岩 | 16.2 | 丸形、立彫刻面有り。 | 13-2 | |
| 1253 | 304 | 2 | 磨 不 定 形 | UJ | 地質頁岩 | 76.2 | 斜面加工でゾンザイ。後縁上つぶれる(S.T.)。 | 25-1 | |
| 1247 | 304 | 1 | 磨 石 | C | 砂質頁岩 | 250.0 | 2面削。 | | |
| 1246 | 304 | 1 | 磨 石 | A | 變質頁岩 | 380.0 | 2面削(無い場合はあり)。 | | |
| 1248 | 304 | 1 | 磨 石 | C | 石灰岩 | 780.0 | 2面削。底打(底に中央部の全周にあり)。 | | |

第II図 II・Ⅲ群期のフラスコ状土壤出土石器(4) (162・304号土器)



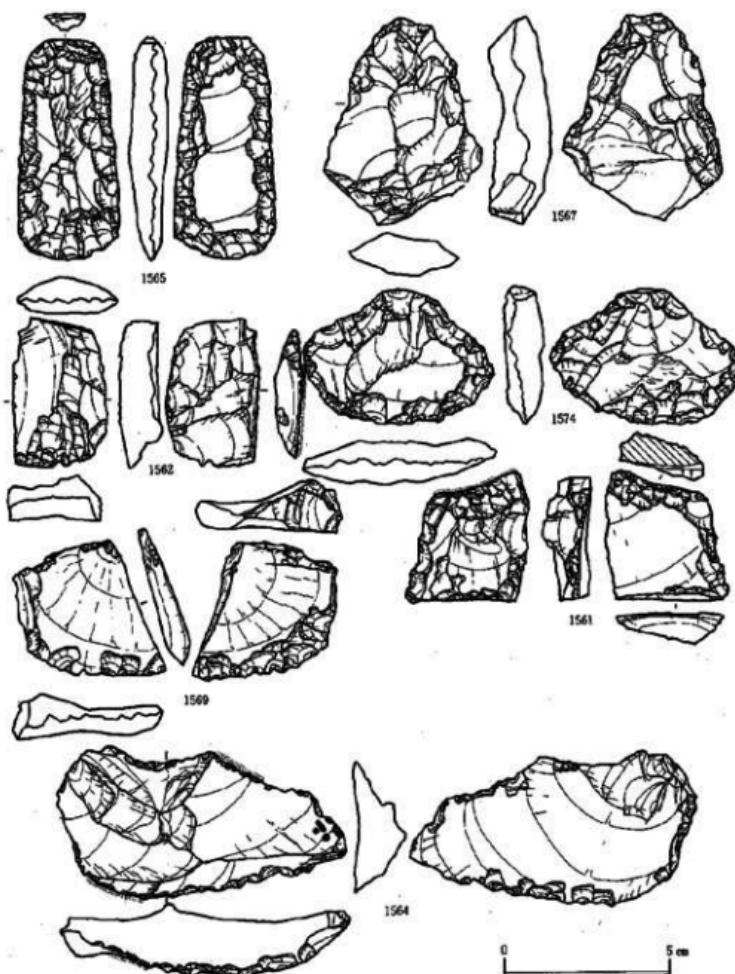
| 番号 | 種類 | 層位 | 性質 | 地 | 石材 | 重さ(g) | 備考 | 回数 |
|------|-----|----|------|------|-------|-------|-----------------------|------|
| 1251 | 364 | 1 | 鐵石 | 地 | 地質頁岩 | 150 | 尖端部破損。 | 1-2 |
| 1255 | 364 | - | 石核 | 地 | 地質頁岩 | 262.6 | I作成面。 | 12-1 |
| 1256 | 364 | 4 | 斷不規形 | IIIa | 地質頁岩 | 3.4 | 少擦痕、Sで尖端部作成。 | 21-1 |
| 1257 | 364 | 2 | 鐵石 | 地 | 砂質頁岩 | 6.5 | | 1-1 |
| 1258 | 364 | 6 | 鉋狀石核 | IIb | 地質頁岩 | 26.7 | | 7-1 |
| 1572 | 364 | 3 | 鉋狀石核 | IIb | 地質頁岩 | 3.3 | ①の裏刃あり。BPに切られる。芯は鈍形か? | 9-2 |
| 1572 | 347 | 2 | 斷不規形 | IIa | 地化泥灰岩 | 25.5 | m.Iあり(S.T.)。 | 18-2 |

第12回 II・Ⅲ群期のフラスコ状土壙出土石器(5) (304・547号土壙)



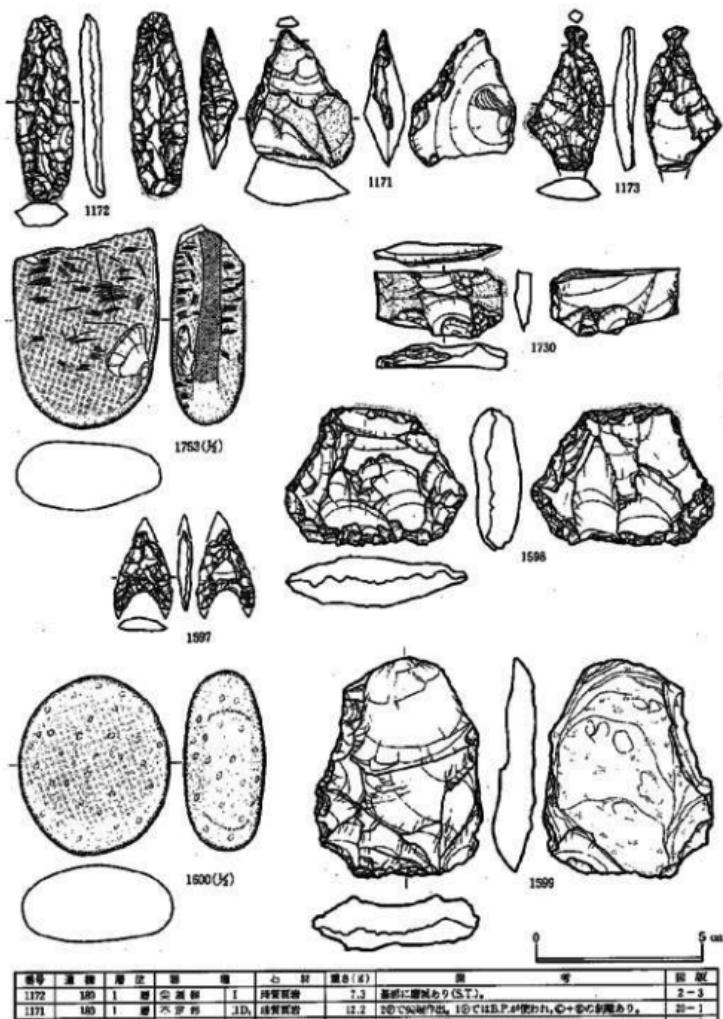
| 番号 | 遺 墓 | 層 位 | 形 | 石 材 | 厚さ(ミ) | 圖 | 年 | 出 所 |
|------|-----|-----|--------|-----|-------|----------------------------|-------|-----|
| 1565 | 547 | — | 自然石 | B | 239.9 | 3面削、凹み有る。 | | |
| 1566 | 547 | — | 不規形 | B,D | 34.5 | ④+⑤と空洞より剥離の尖頭部削成。最近んぶれ玉T.。 | 29-1. | |
| 1567 | 547 | 1 | 用 不規形 | D | 8.7 | 尖頭部つぶれ玉T.。斜削出し(T.T.)。 | 19-1. | |
| 1568 | 547 | 2 | 原 不規形 | D | 19.1 | ④+⑤並列的で三角形を呈する。 | 2-3 | |
| 1569 | 547 | 1 | 原 不規形 | F | 21.8 | 空は苦い。等脚全周的に尖頭部削出。 | 14-2 | |
| 1569 | 547 | 2 | 原 二面 | F | 36.8 | 刃削り | 5-1 | |
| 1570 | 547 | 1 | 原 圆火石器 | E,D | 29.9 | 先端に色差している。 | 7-2 | |
| 1571 | 547 | — | 正 圆火石器 | E,D | 16.4 | 腹面剥けはけあり(S.T.)。 | 5-1 | |

第13図 II・III群期のフラスコ状土塚出土石器(6)(547号土塚)



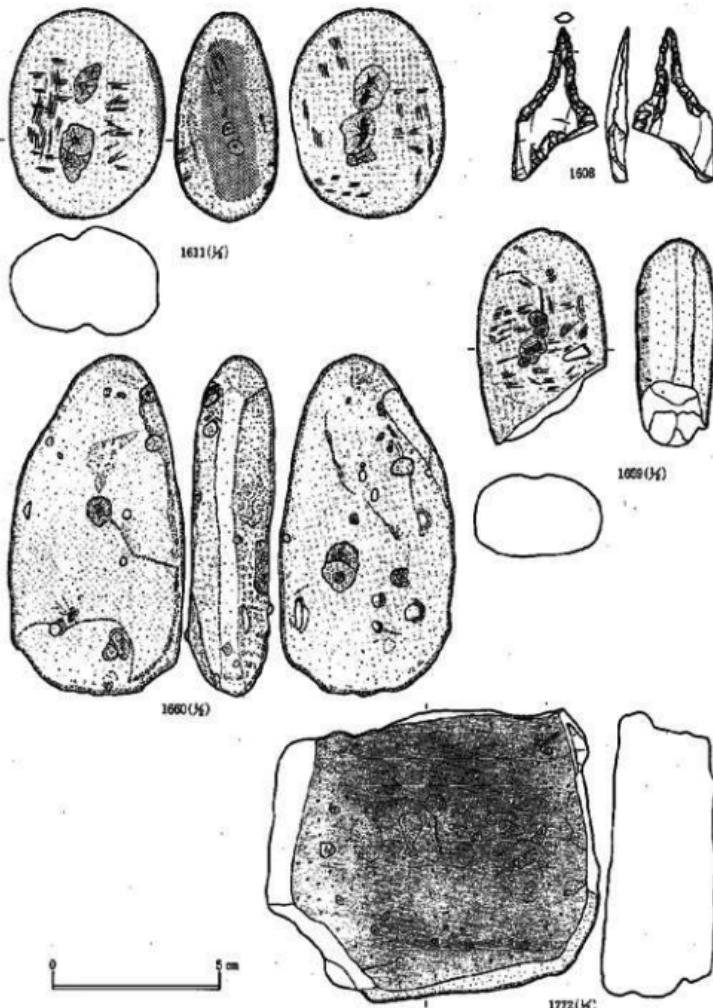
| 番号 | 遺構 | 形態 | 基盤 | 層 | 石種 | 重さ(㌘) | 目次 | |
|------|-----|----------|--------|-------|------|------------------------------|--------------------|------|
| | | | | | | | 名 | 図版 |
| 1565 | 547 | 1 周 | 穿孔石核 | ID | 砂質頁岩 | 28.1 | 穿孔核のバティナが複数に有る。 | 7-2 |
| 1567 | 547 | — | 天然核 | ID | 砂質頁岩 | 43.8 | 厚手端材、粗粒工で削成の丸頭端材等。 | 14-2 |
| 1565 | 547 | 2 周 不定形 | ID | 砂質頁岩 | 16.4 | ②は古い。④にmLあり(3寸)。 | 14-1 | |
| 1574 | 547 | 2 周 不定形 | ID | 培化礫灰岩 | 23.1 | ③-④全周刃付。色刀を削成。 | 14-2 | |
| 1569 | 547 | 2 周 不定形 | ID | 砂質頁岩 | 27.6 | ④-⑤二次加工により削成した。 | 23-2 | |
| 1561 | 547 | 2 周 同板側削 | ID | 砂質頁岩 | 26.9 | 下刃の一部が+削→上へE.F.の削成。 | 10-2 | |
| 1566 | 547 | 2 周 同板側削 | ID | 砂質頁岩 | 32.1 | mLあり(3寸T)。先端部崩れはじけりあり(S.T.)。 | | |
| 1564 | 547 | 1 周 | 二次加工側削 | - | 砂質頁岩 | | | |

第14図 II・III群期のフラスコ状土壤出土石器(7) (547号土壤)



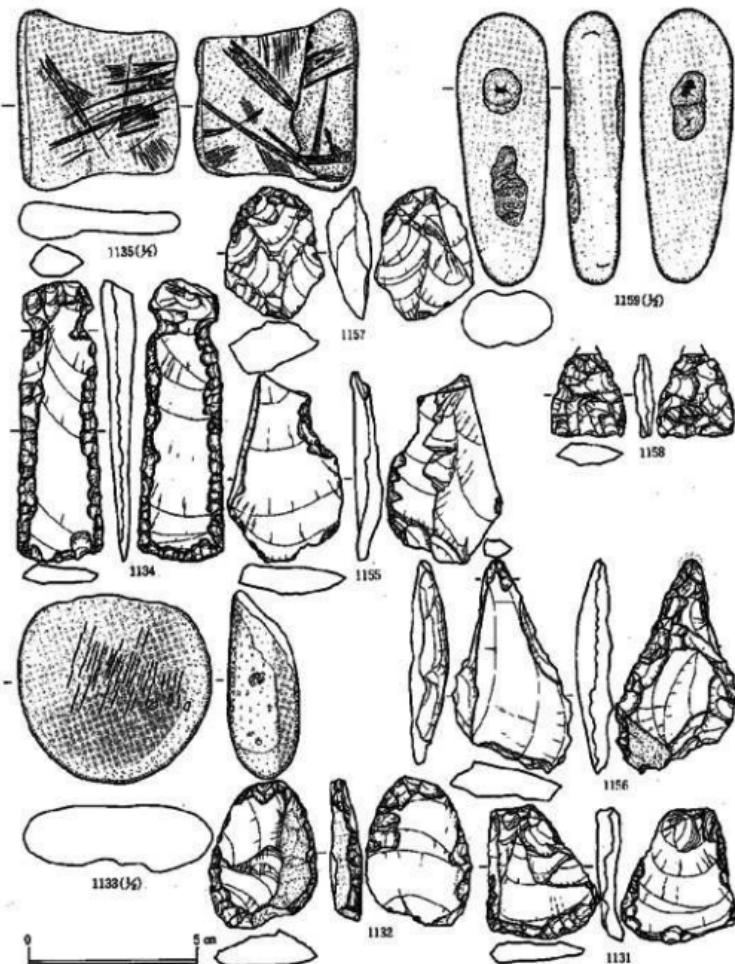
第15図 II・Ⅲ群期のフラスコ状土壙出土石器 (B) (180・429・547号土壙)

| 番号 | 道 | 駅 | 所 | 地 | 心 | 計 | 重き(kg) | 名 | 回数 |
|------|-----|---|---|-------|----|-------|--------|---------------------------------|------|
| 1172 | 180 | 1 | 鹿 | 尖端部 | I | 持荷部 | 7.3 | 基部に感震あり(ST.)。 | 2~3 |
| 1171 | 180 | 1 | 鹿 | 六方部 | II | 強度部 | 13.2 | 2DのS波吸収部。I②ではB.P.が使用され、+卷の制御あり。 | 20~1 |
| 1173 | 180 | 1 | 鹿 | 右 | II | 強度部 | 5.2 | 尖端部(ST.)。 | 4~5 |
| 1174 | 428 | — | 鹿 | 石 | A | 底盤室山筋 | 98.6 | 2周目。1テラertz。 | 1~2 |
| 1175 | 428 | — | 不 | 走 | II | 底盤室岩 | 5.4 | 尖端部にS波あり(ST.)。 | 21~2 |
| 1567 | 576 | 1 | 鹿 | 石 | B | 底盤実 | 12.3 | 底盤部(ST.)。 | 1~3 |
| 1568 | 576 | 1 | 鹿 | 同前 | B | 底盤実 | 30.5 | 大小の万相が1対をとり、2対の滑移がある。 | 18~1 |
| 1620 | 576 | 1 | 鹿 | 石 | A | GRM底盤 | 92.6 | 2周目。 | 1~2 |
| 569 | 576 | 1 | 鹿 | 底盤取付部 | B | 持荷部底盤 | 32.5 | 底盤の取付部2箇所が新しい。薄部を厚くするためか? | 8~1 |



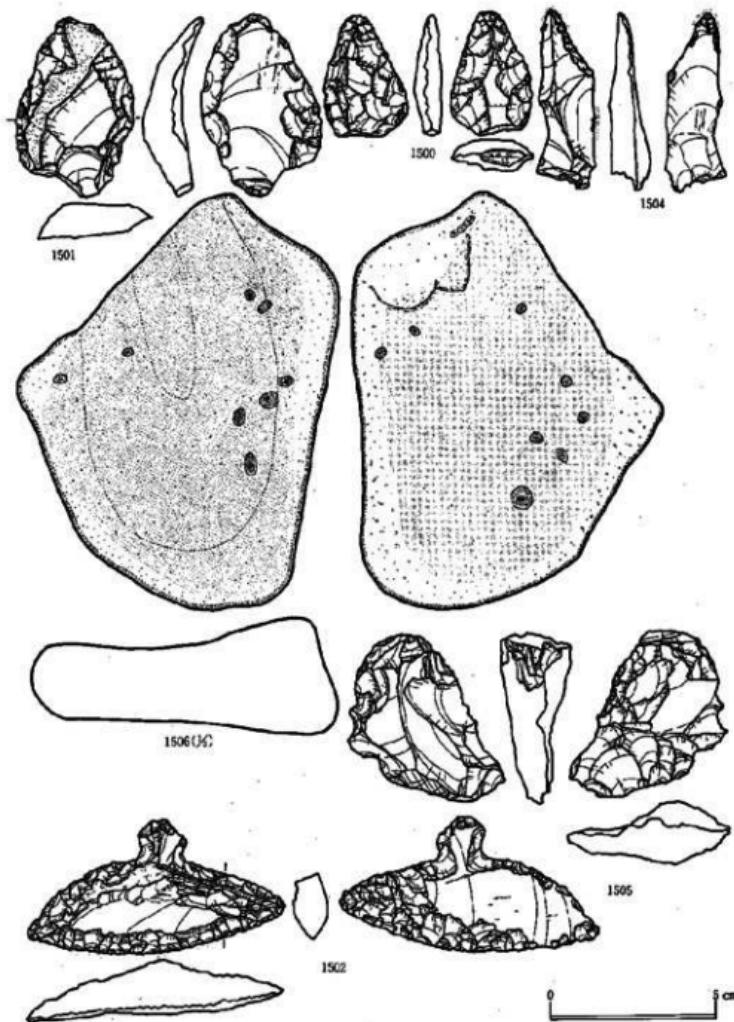
| 番号 | 遺構 | 層位 | 面 | 種 | 石 材 | 重さ(g) | 備 考 | 目 次 |
|------|-----|----|----------|---|--------|-------|--------------------|--------|
| 1611 | 581 | 1 | 帶 縫合石 | C | 石英安山岩 | 730.0 | 2面打。1ザク面。高褐色物質付着。 | |
| 1659 | 581 | 1 | 帶 縫合石 | B | 地質質地 | 4.9 | ①はめこじ切られ。 | 3-4 |
| 1659 | 581 | 1 | 帶 縫合石 | A | 石英安山岩 | 279.3 | 1面打(縫合あり)。凹み1箇所のか。 | |
| 1660 | 528 | 1 | 帶 縫合石 | C | 石英安山岩 | 960.0 | 2面打(縫合あり)。 | |
| 1772 | 628 | 1 | 帶 縫合石 | 曲 | 石英安山岩 | (930) | 側面削り出し。破損あり。 | |

第16図 II・III群期のフラスコ状土壌出土石器(9) (581・528号土器)



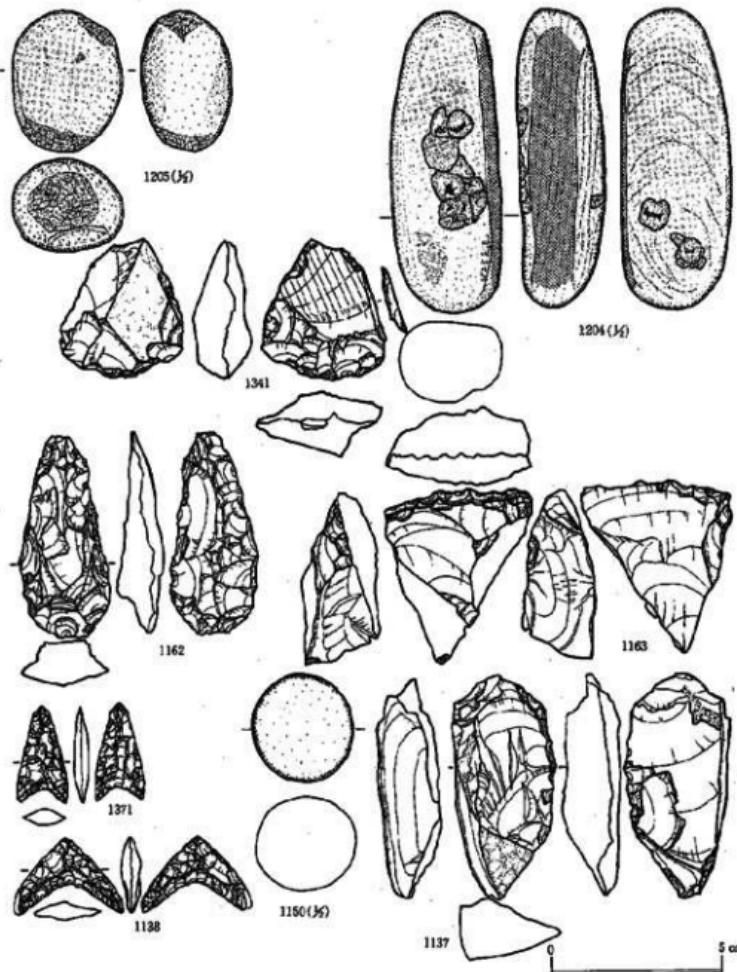
| 番号 | 通 | 地 | 地 | 種 | 村 | 集落 (E) | 地 | 名 | 区 |
|------|-----|---|---|-------|-----|--------|-------|------------------------------|------|
| 1135 | 156 | 2 | 屋 | 石? | 一 | 砂利成灰地 | (190) | 2 砂利地。 rimたはにはV字形の跡多く有。耕作あり。 | |
| 1134 | 156 | 2 | 屋 | 石 | 18. | 粗粒地 | 17.2 | 粗粒地。中間に耕作跡有。 | 5-1 |
| 1139 | 166 | 1 | 屋 | 砂利成灰地 | B | 石灰成灰地 | 360.0 | 2 砂利地。1箇所中に耕作跡有。 | |
| 1147 | 166 | 1 | 屋 | 河川堆積 | A | 砂利成灰地 | 16.3 | | 9-2 |
| 1153 | 166 | 1 | 屋 | 不 | B | 砂利成灰地 | 12.3 | 2 砂利地。砂利成灰地。 | 23-3 |
| 1158 | 166 | 1 | 屋 | 石 | B | 砂利成灰地 | 12.8 | 2 砂利地。砂利成灰地。 | 2-3 |
| 1156 | 166 | 1 | 屋 | 不 | B | 砂利成灰地 | 12.2 | 砂利成灰地。 | 26-1 |
| 1133 | 155 | 1 | 屋 | 石 | A | 石灰成灰地 | 870 | 2 石灰成灰地。砂利成灰地。 | |
| 1132 | 155 | 1 | 屋 | 不 | B | 砂利成灰地 | 14.0 | 石灰成灰地又反耕作跡となる。 | 16-1 |
| 1131 | 155 | 1 | 屋 | 不 | B | 砂利成灰地 | 5.2 | | 16-1 |

第17図 IV～V群期のフラスコ状土壌出土石器（I）（156・166・155号土器）



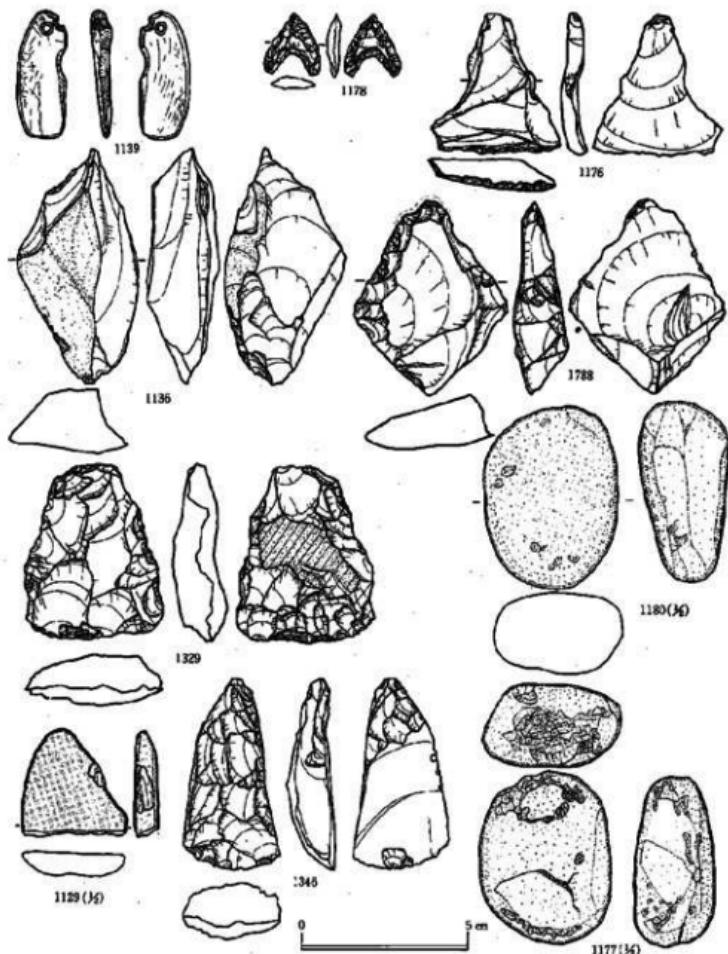
| 番号 | 通 俗 | 居 位 | 種 | 形 | 葉 | 花 | 果 | 被 | 名 | 固 定 |
|------|-----|-----|-------|-----------------|------|-------|--------------------|---------------|--------------------|------|
| 1501 | NH | 3 | 藤 不定形 | 日A ₁ | 直葉圓葉 | 15.6 | 円錐花序 | 15.6 | 万葉の御御御と名づる。 | 19-2 |
| 1500 | 509 | | 小型不定形 | - | 披葉圓葉 | 6.5 | ②は全くこの形でS.T.に切られる。 | 3 | -3 | |
| 1504 | 509 | | 不定形 | 日B ₁ | 直葉圓葉 | 6.6 | 丸錐花序(近S.T.) | 6.6 | 丸錐花序(近S.T.)。 | 19-1 |
| 1506 | 509 | 2 | 藤 不定形 | - | S型圓葉 | 11.00 | 圓錐花序 | 4~7mmの花被を有する。 | | 26 |
| 1505 | 509 | 3 | 藤 不定形 | 日L ₁ | 直葉圓葉 | 32.8 | 圓錐花序 | 32.8 | 同上 | 19-2 |
| 1502 | 509 | 1 | 藤 不定形 | 日A ₁ | 直葉圓葉 | 26.6 | 同上 | 同上 | 万葉御御御。万葉御御御(S.T.)。 | 5-1 |

第18図 IV～V群期のフラスコ状土壙出土石器(2) (509号土壙)



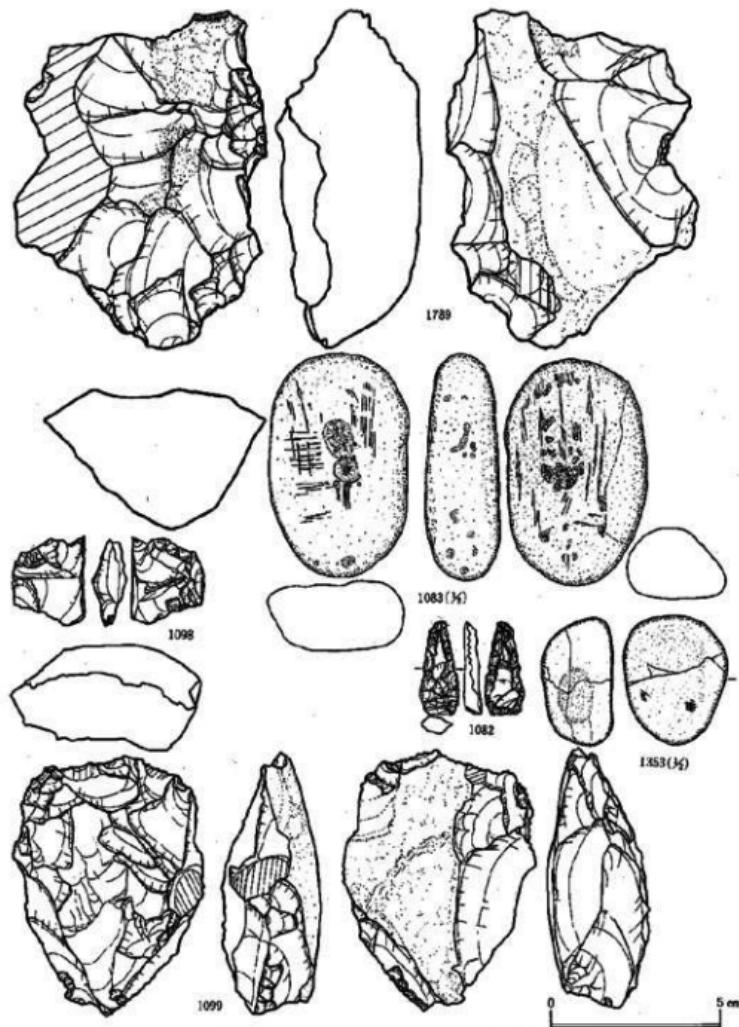
| 番号 | 遺 墓 | 遺 墓 | 遺 墓 | 石 材 | 重さ(㌘) | 備 考 | 古 紀 |
|------|-----|-----|----------|------|-------|-------|-----------------------------|
| 1205 | 210 | 1 | 磨 鋸 石 | B | 花崗岩 | 360.0 | 2面更に背面斜め打抜。 |
| 1204 | 210 | 1 | 磨 鋸 石 | B | 雲母片岩板 | 960.0 | 2面更にIテクニ。 |
| 1341 | 112 | 1 | 磨 不 定 形 | I.P. | 地質莫切 | 38.3 | |
| 1162 | 171 | 1 | 磨 残 石器 | I | 地質莫切 | 36.2 | |
| 1163 | 171 | 2 | 磨 不 定 形 | I.P. | 残 扇 形 | 35.2 | 2面あり、I面はI.P.による、○による縦溝状の刃部。 |
| 1271 | 352 | 1 | 磨 行 線 | I.B. | 正 細 | 1.4 | |
| 1150 | 361 | 1 | 磨 石 | B | 右美安山岩 | 260.0 | 全面を磨選。 |
| 1138 | 361 | 2 | 磨 不 定 形 | I. | 碧 玉 | 2.0 | 赤色を呈する。 |
| 1137 | 361 | 2 | 磨 二次加工剥片 | - | 珪質頁岩 | 32.3 | 老玉当。 |

第190図 IV～V群期のフラスコ状土壤出土石器(3) (210・112・171・352・163・161号土壙)



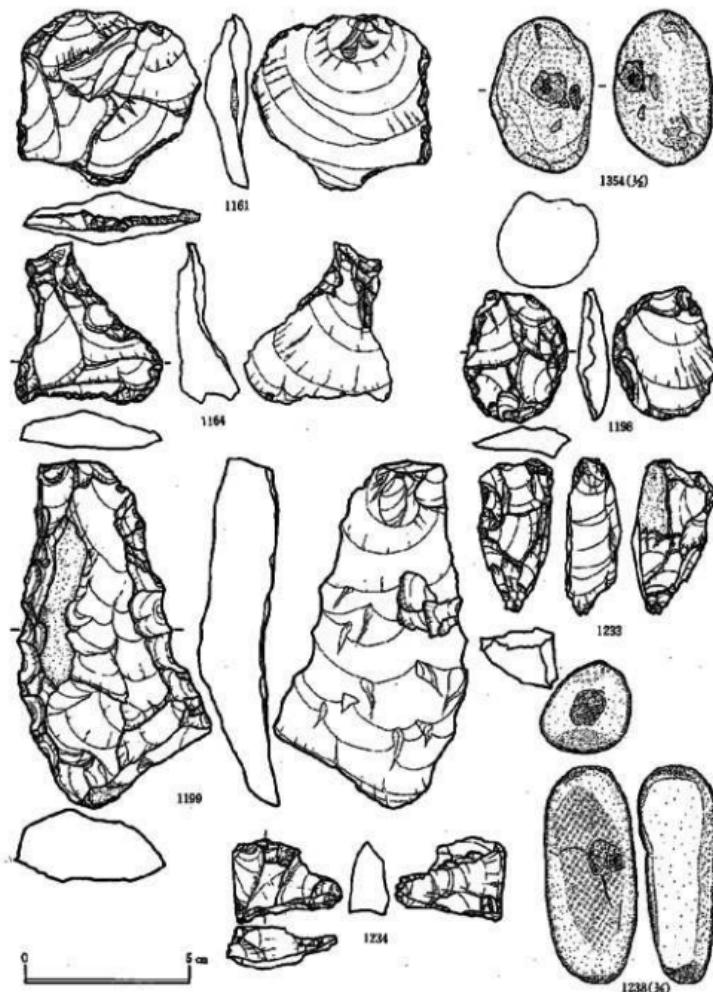
| 番号 | 道 | 類 | 管 | 目 | 種 | 石 | 材 | 重さ(g) | 備 | 考 | 圖版 |
|------|-----|------|---|------|-----|------|----|-------|--------------------|------------------|------|
| 1139 | 161 | 1 | 縫 | 块状石器 | - | 燧 | 石器 | 3.3 | 破面を研磨、穿孔し、飾品としている。 | 3-1 | |
| 1136 | 161 | 2 | 縫 | 块状石器 | 組 | 燧 | 石器 | 29.8 | | | |
| 1178 | 161 | 24 | 縫 | 石 | 曲 | 燧 | 石器 | 0.9 | | 1-1 | |
| 1176 | 161 | 1~2層 | 不 | 定 | 形 | IIa. | 燧 | 石器 | 8.9 | ①の邊縁による留めタヌクを作成。 | 17-9 |
| 1788 | 182 | 1~2層 | 不 | 定 | 形 | IIa. | 燧 | 石器 | 32.4 | 先端部削減(5.T.)。 | |
| 1329 | 162 | 1 | 縫 | 块状石器 | I | 燧 | 石器 | 27.5 | | 8-2 | |
| 1129 | 162 | 25 | 縫 | 块状石 | C | 瓦 | 石 | 600.0 | 2種類(既存不規則)。 | | |
| 1180 | 162 | 25 | 縫 | 块状石 | C | 花 | 石 | 580.0 | 2種類。長軸深削り形。 | | |
| 1177 | 162 | 25 | 縫 | 块状石 | C | 花 | 石 | 58.1 | 橢円形1個。細削り形。 | | |
| 1129 | 162 | 1 | 縫 | 块状石器 | - | 山 | 石器 | 72.1 | 橢円形1個。細削り形。 | | |
| 1346 | 205 | 1 | 縫 | 块状石器 | III | 燧 | 石器 | 22.0 | 純正打削面と二次加工。断面丸もあり。 | 8-1 | |

第20図 IV~V期群のフラスコ状土器出土石器(4) (161・182・151・205号土器)



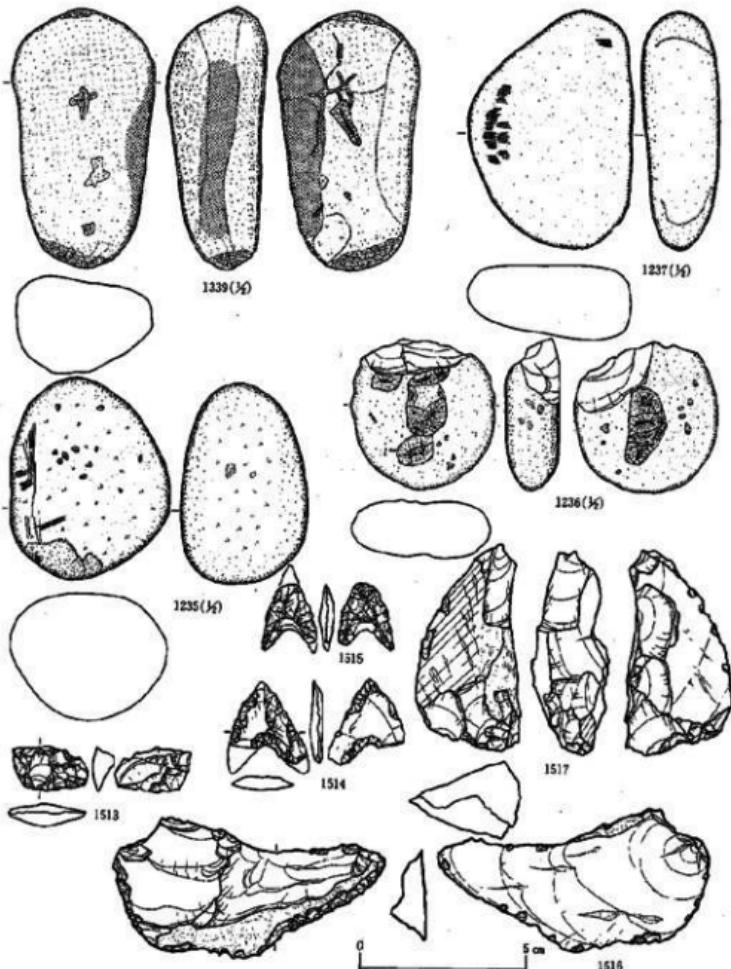
| 番号 | 遺 縫 | 層 位 | 器 物 | 種 | 石 特 | 量さ (K) | 備 | 年 | 固 地 |
|------|-----|-----|---------|------|--------|--------|-----------------|---|-------|
| 1789 | 357 | 一 | 角 石 嵌 | 三 | 真 石 | 255.0 | 円錐状の芯痕。 | | 13- 1 |
| 1353 | 106 | 無 | 角 石 | B | 取扱山形複合 | 192.0 | 1所底。 | | |
| 1083 | 118 | 27 | 角 石 開 石 | A | 石英安息石 | 650.0 | 2箇所。凹みは開い。 | | |
| 1082 | 116 | 6 | 角 石 開 | I | 透質閃石 | 1.7 | 大略同形状 (S.T.)。 | | 3 - 0 |
| 1098 | 128 | 1 | 層 不 定 形 | II,D | 玄武岩質 | 5.2 | 尖端部分による剥離。 | | 20- 2 |
| 1099 | 128 | 1 | 層 石 破 | I | 透質閃石 | 123.0 | 一部自然面を残すと打抜とする。 | | 18- 2 |

第21図 IV～V群期のフラスコ状土壤出土石器 (5) (357・106・116・128号土壤)



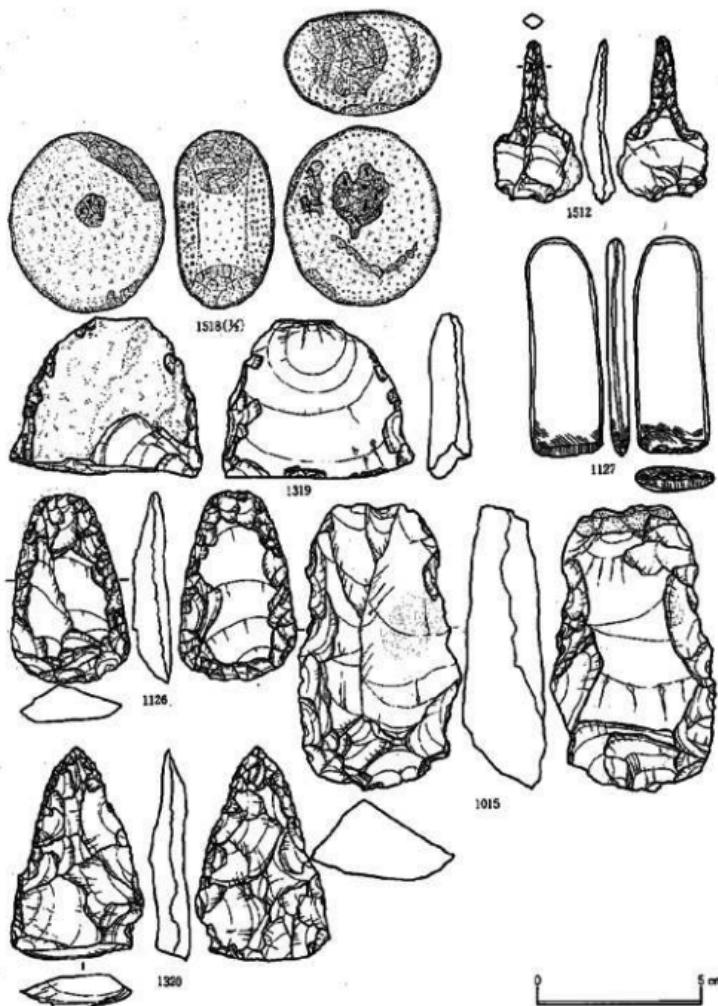
| 番号 | 遺構 | 層 | 層 | 層 | 石 | 材 | 重さ(g) | 備 | 考 | 図版 |
|------|-----|----|----|-------|-----|------|-------|------------------------|------|----|
| 1161 | 176 | 1 | ■ | 不 定 形 | BAn | 海賊貝殻 | 25.4 | エッジ加工(S.T.)。 | | |
| 1164 | 176 | 1 | ■ | 不 定 形 | BAa | 海賊貝殻 | 10.8 | | 16-1 | |
| 1190 | 198 | 1 | ■ | 圓 圓 石 | R | 安山岩 | 455.0 | 2面削。凹凸1面(不字面)。 | | |
| 1191 | 198 | 2 | 3 | 小 手 刃 | IC | 海賊貝殻 | 5.4 | | 13-2 | |
| 1196 | 198 | 1 | ■ | 不 定 形 | BAa | 海賊貝殻 | 162.0 | 右側面は断面次となる。 | 17-2 | |
| 1223 | 262 | 3 | 3' | 圓 圓 石 | IC | 海賊貝殻 | 10.1 | | 19-1 | |
| 1224 | 262 | 3' | 3' | 圓 圓 石 | B | 海賊貝殻 | 7.2 | 直交する2方角のB.P.。直交端方に衝突痕。 | 10-1 | |
| 1228 | 262 | 6 | ■ | 圓 圓 石 | B | 花崗岩 | 460.0 | 2面削。長軸両端に飛打痕。 | | |

第22図 IV～V群期のフラスコ状土壌出土石器(6)(170・198・302号土壌)



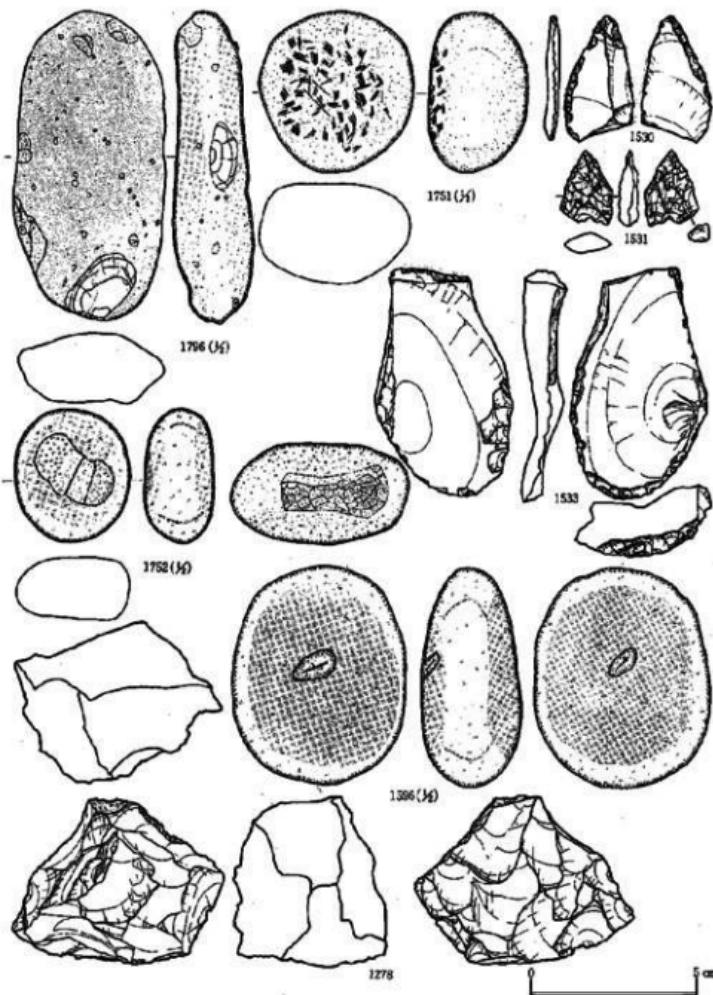
| 番号 | 通 號 | 層 位 | 名 称 | 石 材 | 度合(%) | 備 考 | 圖 版 |
|------|--------|--------|-------------|-----------|--------|------------------------|--------|
| 1239 | 93 | 3 層 | 海苔狀岩 | C 花崗岩 | 94.0 | 2層斑。1-チラ斑。凹み不規則。 | |
| 1237 | 332 | 8 層 | 海苔 石 | A E焼付陶器陶片 | 90.0 | 2層斑。 | |
| 1236 | 332 | 9 層 | 海苔 石 | C 実山岩 | 31.0 | 2層斑。底い様な状況あり。 | |
| 1236 | 332 | 3 層 | 海苔 石 | A 実山岩 | (20.0) | 2層斑。底面あり。 | |
| 1515 | 514 | — | 石 頭 | I.B 地質頁岩 | 100 | 擦け合ひあり(次第に薄形)。 | 1-2 |
| 1515 | 514 | — | 石 頭 | II. 地質頁岩 | 1.5 | 東側斜面刃付地質頁岩に見4個の可塑性ILL。 | 14-2 |
| 1514 | 514 | 2 層 | 石 頭 | I.B 地質頁岩 | (1.3) | 東北斜面で角利頭を多く残す。底部破損。 | 1-2 |
| 1517 | 514 | — | 不 定 形 | II.J 地質頁岩 | 35.0 | II.J. 由鉄錆加工史火耕開拓の灰。 | 25-2 |
| 1516 | 514 | 3 層 | 二次加工削片 | — 地化泥炭物 | 29.0 | 万葉集録(S.T.)。 | |

第23図 IV～V群期のフラスコ状土壌出土石器(?) (302・514号土壌)



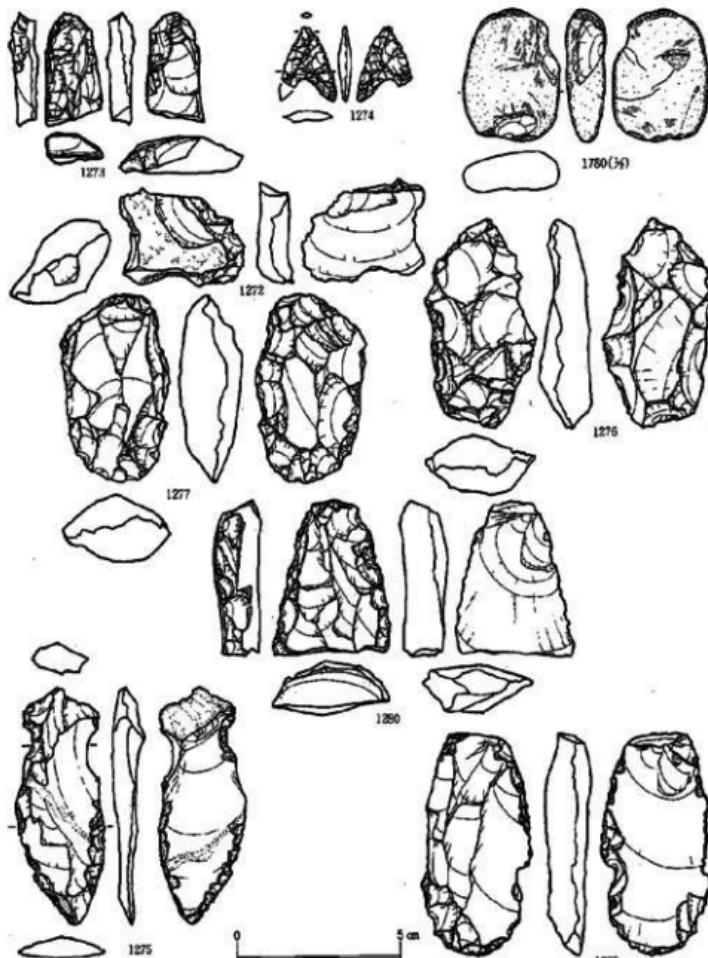
| 番号 | 遺 墓 | 地 位 | 種 類 | 石 材 | 量さ(㌘) | 度 | 考 | 図 版 |
|------|-----|-----|--------|-----|-------|----------------|---------------------|-----|
| 1512 | — | 層3地 | C | 花崗岩 | 783.0 | 2階屋 | | |
| 514 | 3 | 層 石 | B | 燧石 | 5.5 | 黑色打削物あり(S.T.)。 | 3-4 | |
| 1016 | 346 | 1 層 | 二次加工剝離 | — | 石英岩 | 32.4 | ①は原形の小剝離の打削となる。 | |
| 150C | 345 | 1 層 | 火 鍋 | — | 石英岩 | 25.6 | ②を切る二次剝離あり。 | 2-3 |
| 1625 | 13 | 1 層 | 凹次石器 | III | 灰 灰岩 | 108.7 | 高橋色ターナー状剥離を有(S.T.)。 | 7-2 |
| 1127 | 149 | 1 层 | 磨擦研摩 | B | 灰質灰岩 | 14.0 | 刃部以外は自然面の面をなす。 | 9-1 |
| 1320 | 149 | 1 层 | 凹次石器 | BB | 花崗岩 | 21.5 | 基部西端(S.T.)。 | 7-1 |

第24図 IV～V期期のフラスコ状土壌出土石器(8) (514・345・13・149号土壤)



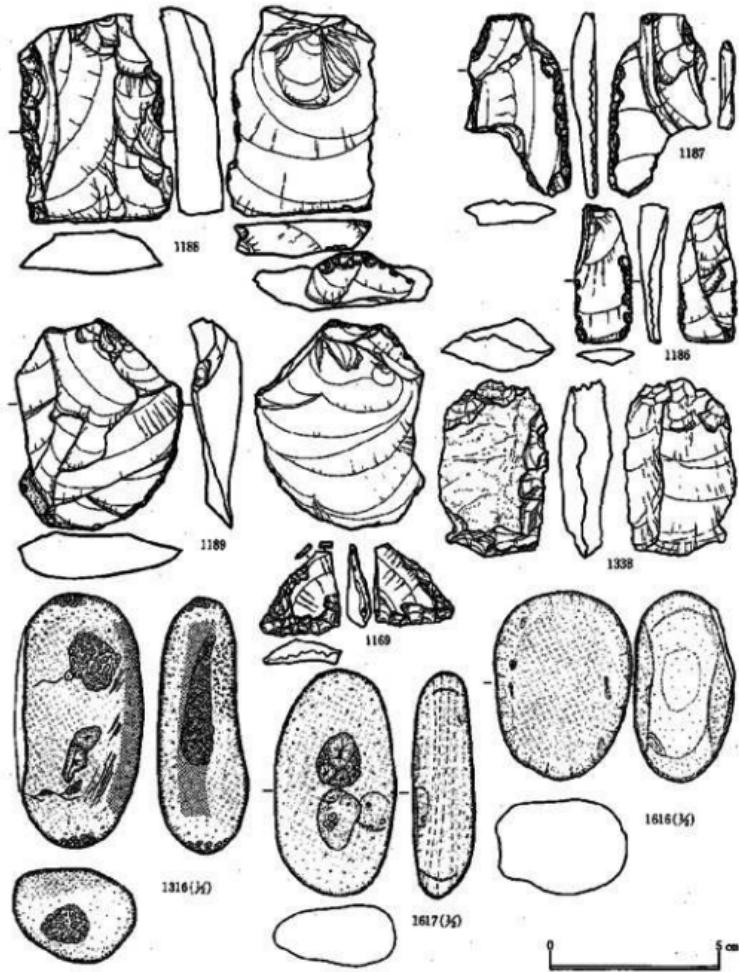
| 番号 | 遺構 | 層位 | 種 | 種 | 石 | 材 | 重さ(㌘) | 備 | 考 | 出 |
|------|-----|----|----|---|---|--------|--------|---------------------------|---|-------|
| 1796 | 二49 | 底 | 磨 | 石 | A | 玉子形石器 | 780.0 | 2面削(通穴)。斜面あり。 | | |
| 1796 | 267 | 11 | 磨 | 石 | B | 玉子形石器 | 130.0 | | | 17- 1 |
| 1791 | 524 | 1 | 磨 | 石 | C | 石斧(山形) | 733.0 | 2面削(通穴)あり。 | | |
| 1530 | 524 | — | 不定 | 形 | D | 石斧(直刃) | 2.5 | m.f.あり(S.T.) | | 18- 2 |
| 1591 | 524 | 1 | 磨 | 石 | E | 石鋸(直刃) | 1.7 | 背面中央に縦条状をもたらすくぼしい溝(S.T.)。 | | 2- 2 |
| 1792 | 524 | 2 | 磨 | 石 | F | 石斧(直刃) | 320.0 | 2面削。1面の中央に斜面あり。 | | |
| 1593 | 524 | 1 | 磨 | 石 | G | 石斧(直刃) | 39.1 | 表面の側面に内凹有り。m.f.あり(S.T.)。 | | 19- 2 |
| 1596 | 524 | 2 | 磨 | 石 | H | 石斧(直刃) | 1150.0 | 2面削。先端一帯に斜面有り。 | | |

第25図 IV～V期のフラスコ状土壙出土石器(9) (149・307・524号土壙)



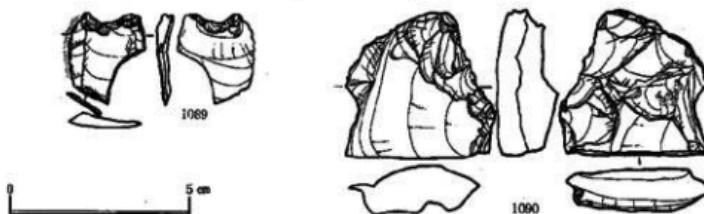
| 番号 | 遺物 | 層位 | 種類 | 石 | 材質 | 直徑(φ) | 備考 | 層 | 回数 |
|------|-----|----|--------|-----|-------|-------|-------------------------|---|------|
| 1273 | 307 | 8 | 圓形石器? | IB | 珪質頁岩 | 4.9 | | | 9-2 |
| 1274 | 307 | 5 | 圓石 | IB | 珪質頁岩 | | 基底研磨。 | | 1-2 |
| 1280 | 307 | 7 | 圓 石 | 石英岩 | 珪質頁岩質 | 126.6 | 円周に加工痕と剝離あり。斜面底。 | | |
| 1272 | 307 | 5 | 不定 形 | IIA | 珪質頁岩 | 11.9 | ◎ノッチ状加工で断面式刃形。◎は◎に切られる。 | | 23-3 |
| 1277 | 307 | 7 | 圓狀石器 | I | 珪質頁岩 | 22.5 | | | 6-2 |
| 1276 | 307 | 6 | 圓 不定 形 | IA | 珪質頁岩 | 29.7 | | | 13-2 |
| 1280 | 307 | 12 | 圓狀石器? | - | 珪質頁岩 | 22.8 | ◎は研磨面?。 | | 8-1 |
| 1275 | 307 | 3 | 圓 石 | IA | 珪質頁岩 | 11.5 | | | 4-1 |
| 1279 | 307 | 12 | 圓 不定 形 | IIA | 珪質頁岩 | 50.2 | 二次加工のノティナ新しい。 | | 15-1 |

第26図 N~V群期のフラスコ状土塚出土石器 (307号土塚)



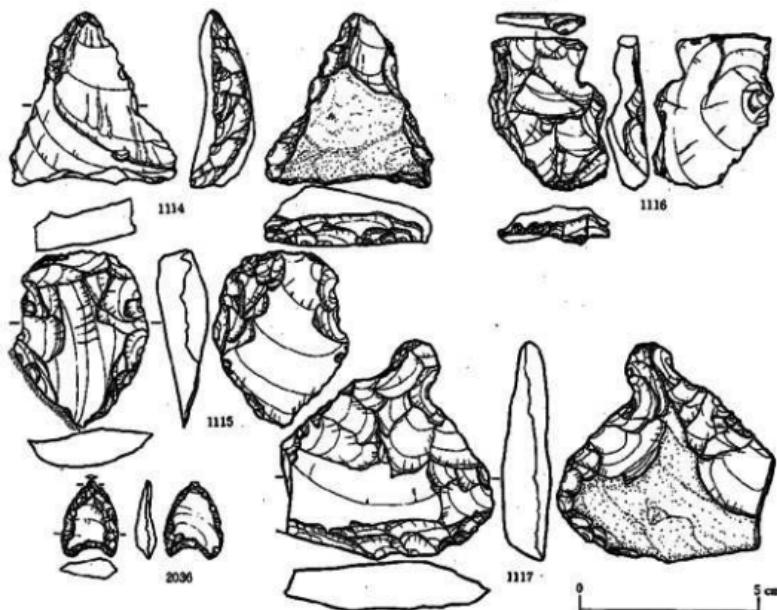
| 番号 | 波 | 標 | 場 | 位 | 石 | 材 | 重さ(g) | 備 | 考 | 経 |
|------|-----|---|---|------|-----|----|-------|------------------------------|---|------|
| 1186 | 260 | 1 | 第 | 二大加工 | — | 地質 | 46.4 | | | |
| 1187 | 293 | 1 | 第 | 不足 | BII | 地質 | 7.6 | 性状不規 | | 24-1 |
| 1189 | 293 | 1 | 第 | 不足 | DAI | 地質 | 36.6 | 打痕面に△形のエッジ存在 | | 17-2 |
| 1186 | 293 | 1 | 第 | 不足 | DI | 地質 | 2.7 | | | 24-1 |
| 1169 | 275 | 1 | 第 | 不足 | DE | 地質 | 2.6 | ①と②+⑤により合剖に異形 | | 21-2 |
| 1336 | 589 | — | 第 | 四 | C | 地質 | 710.6 | 2面削、共軸両端、1面削、1上面に斜刃底。 | | |
| 1617 | 589 | 1 | 第 | 四 | 石 | B | 506.9 | 2面と表面に磨面。 | | |
| 1616 | 589 | 1 | 第 | 四 | 石 | C | 749 | 2面と鏡面あり。 | | |
| 1338 | 733 | 1 | 第 | 四 | 石 | 鉱 | 25.2 | ④はB.P.より新しい。B.P.廻転利用のスクノバーカ? | | 9-2 |

第27図 IV~V群期のフラスコ状土壌出土石器 (II) (193・175・589・133号土壌)



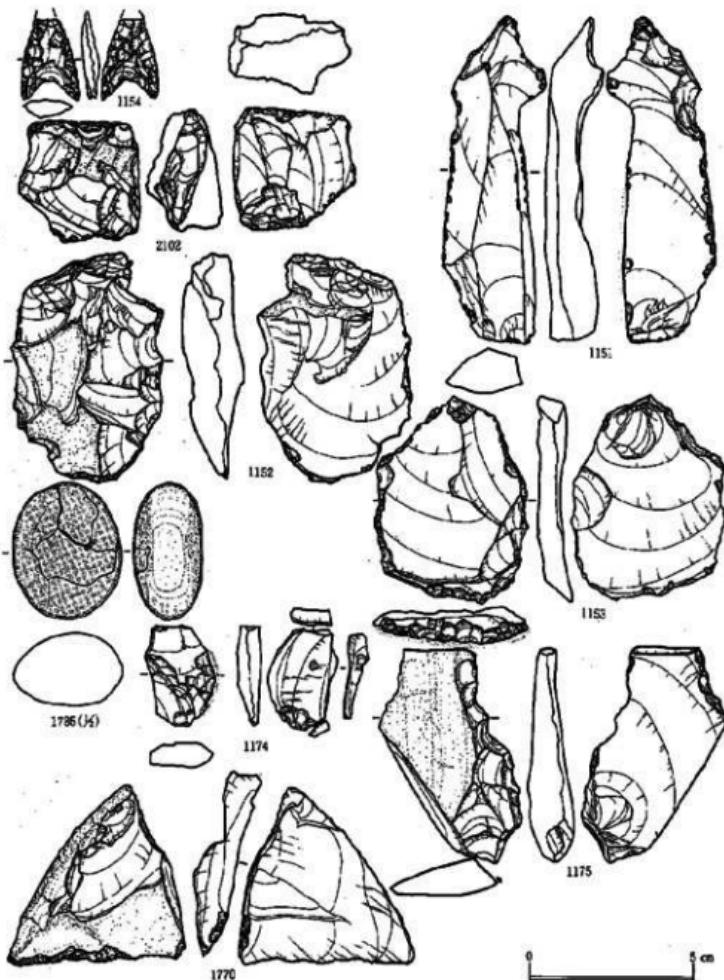
| 番号 | 遺 墓 | 層 位 | 形 種 | 石 材 | 重 量(g) | 備 考 | 圖 版 |
|------|-----|---------|-----|------|--------|---------------------------|------|
| 1089 | 124 | 1 層 不定形 | BG | 珪質頁岩 | 1.4 | m.Lあり(3.7)。石器の未脱凸の可能性もあり。 | 23-1 |
| 1090 | 124 | 1 層 不定形 | BJ | 玉 鑿 | 29.8 | ④は古い。 | 25-1 |

第28図 VI群期のフ拉斯コ状土壤出土石器 (124号土壤)



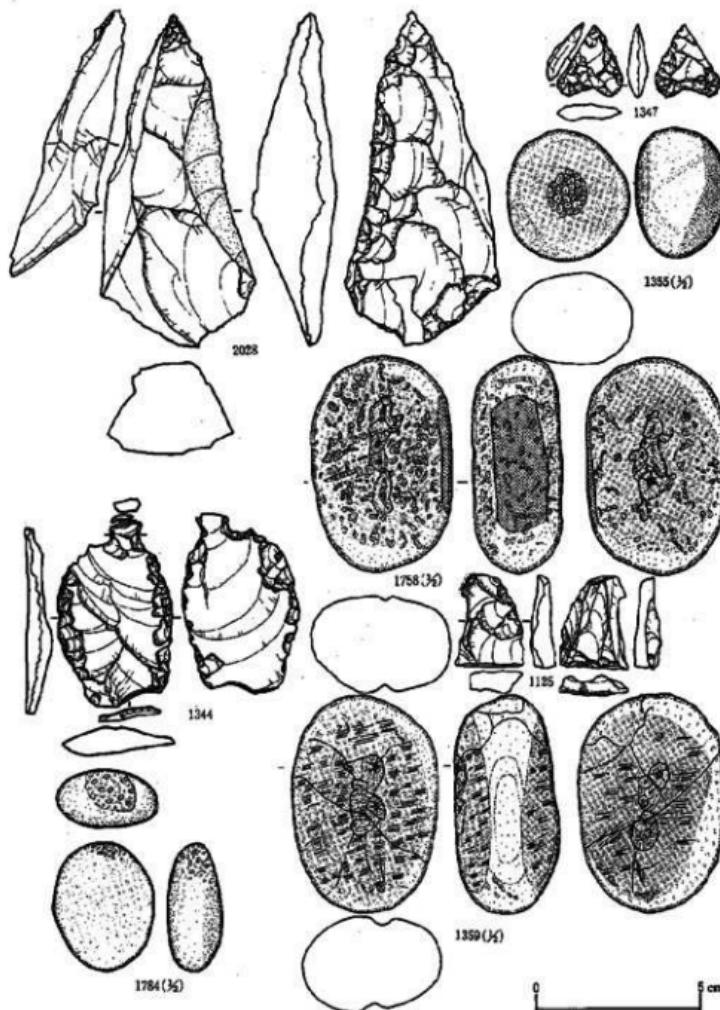
| 番号 | 遺 墓 | 層 位 | 形 種 | 石 材 | 重 量(g) | 備 考 | 圖 版 |
|------|-----|---------|-----------------|-------|--------|-----------------------|------|
| 1114 | 134 | 1 層 不定形 | 1G | 熱灰質頁岩 | 27.2 | ④+⑤の各内面の二次加工あり。残っている。 | 14-2 |
| 1116 | 134 | 1 层 不定形 | BA ₃ | 地質頁岩 | 15.1 | ノッチ形の加工あり。 | 17-1 |
| 1115 | 134 | 1 层 小定形 | BF | 珪質頁岩 | 22.6 | 万能削成(S.T.)。 | 22-1 |
| 1117 | 134 | 1 层 石 鑿 | BB ₂ | 珪質頁岩 | 48.8 | 研磨あり。 | 5-2 |
| 2036 | 820 | 1 层 石 鑿 | IA ₁ | 珪質頁岩 | 1.4 | | 1-1 |

第29図 VII群期のフ拉斯コ状土壤出土石器 (134・820号土壤)



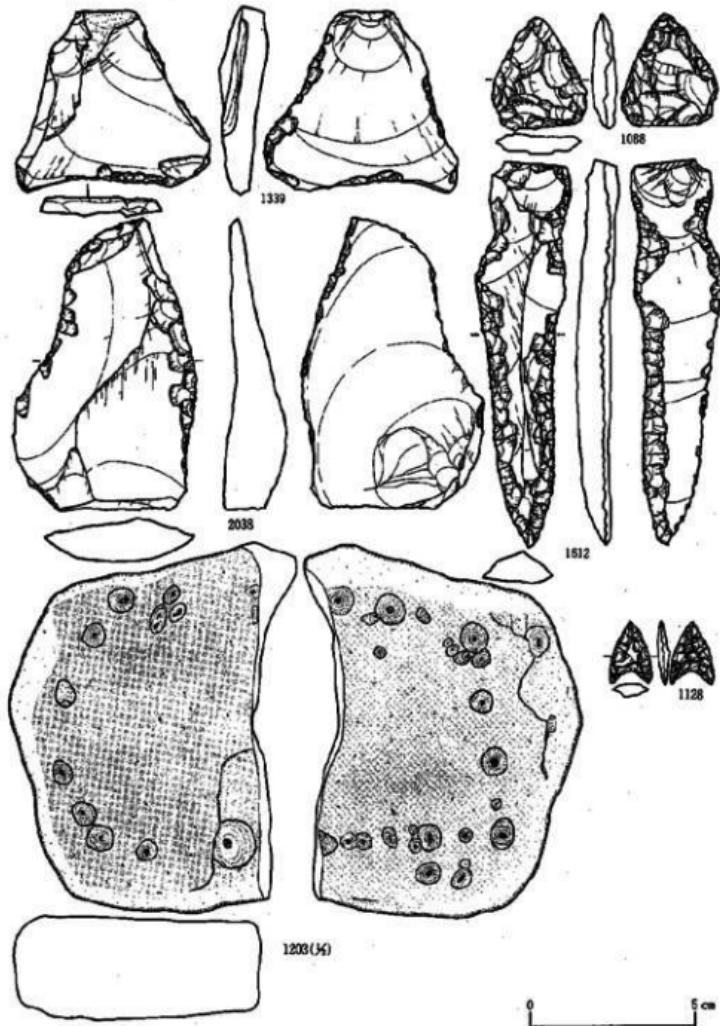
| 番号 | 遺 墓 | 層 位 | 種 類 | 石 材 | 重 量 (g) | 備 考 | 圖 版 |
|------|-----|-----|-----------|--------|---------|-------------------------|------|
| 2102 | 815 | 1 | 扁 刀形 | 日 田 | 22.3 | 2 寸の刃部あり、刃の断面角が鋭い。 | 10-1 |
| 1154 | 164 | 1 | 磨 砕 | 無 | 1.7 | 表面粗粒。 | 1-2 |
| 1155 | 164 | 1 | 磨 不 定 形 | 日 田 | 36.0 | 「あり(下)」。 | 10-1 |
| 1156 | 164 | 1 | 磨 不 定 形 | H.C. | 46.6 | 「C」に上部断面に②で小尖端作成。 | 10-2 |
| 1153 | 164 | 1 | 磨 不 定 形 | 日 田 | 25.4 | 刃端鋒利(下)。 | 15-1 |
| 1785 | 163 | — | 磨 石 | 石英岩質砂岩 | 240.0 | 2 倍の刃部あり、黒褐色で滑らか。 | 10-1 |
| 1174 | 183 | 1 | 磨 不 定 形 | 日 田 | 5.0 | 2 倍の刃部は鋭い。左+右の逆接した方部作山。 | 21-2 |
| 1175 | 183 | 1 | 磨 不 定 形 | 日 田 | 36.2 | — | 25-1 |
| 1170 | 802 | 1 | 磨 面 二次加工片 | — | 32.2 | 刃を切るのあり。 | — |

第30図 群期不明のフラスコ状土壙出土石器 (I) (815・164・821・181・802号土壙)



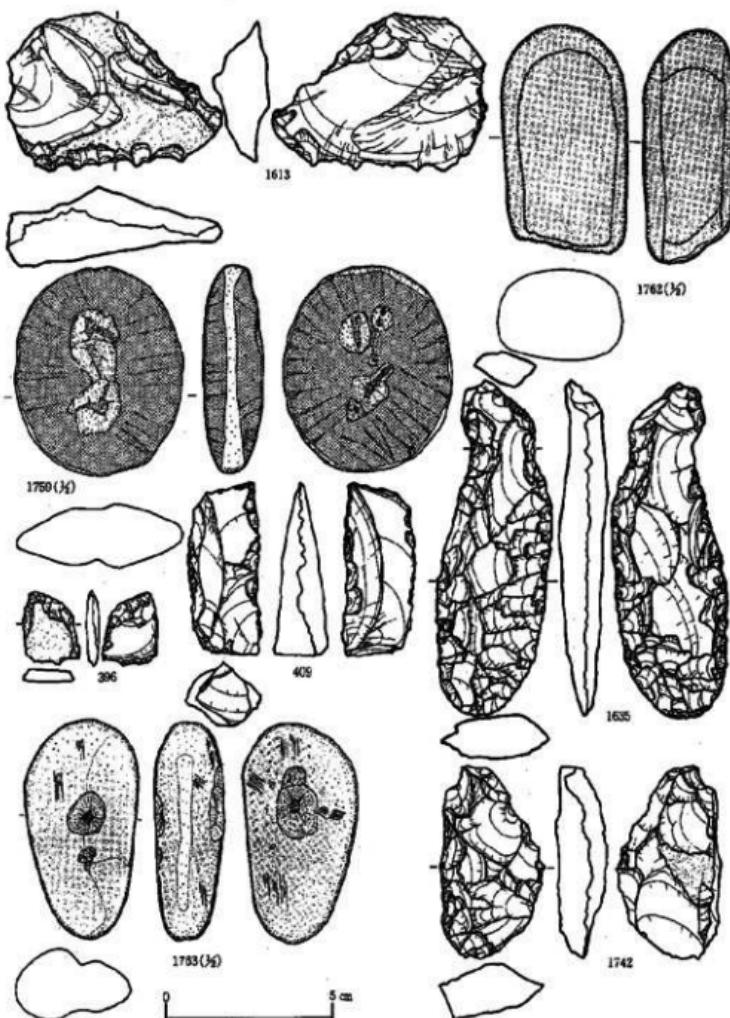
| 番号 | 遺 墓 | 厚 度 | 基 础 | 標 準 | 石 材 | 重 量 (g) | 圖 号 | 図 版 |
|------|-----|------|-------|-----|-------|---------|------------------------------------|--------------------|
| 2028 | 803 | 3 | 不 定 形 | BD. | 造質灰岩 | 79.0 | | 20-1 |
| 1758 | 591 | 1 | 層 | 燧出物 | C | 造質灰岩 | 789.0 | 2層部、1サク内。敲打面3箇に分佈。 |
| 1135 | 146 | — | 不 定 形 | HR. | 造質灰岩 | 4.0 | 同上にあり。④を打面として剖面を行なう。m.l.あり (S.T.). | 23-2 |
| 1347 | 204 | 2・3層 | 石 銛 | IB | 造質灰岩 | 2.0 | ④は吉い。破壊ではない。 | 1-2 |
| 1355 | 204 | 2 | 磨 滑 石 | C | 造質灰岩 | 410.0 | 2層部、1箇中央に敲打面あり。 | |
| 1344 | 204 | 2 | 磨 石 | II | 造質灰岩 | 12.3 | 側面の表面は削面。 | 5-1 |
| 1349 | 204 | 2 | 磨 滑 石 | C | 安 山 岩 | 846.0 | 2層部、形态褐色と灰褐色に多く付帯。 | |
| 1784 | 825 | 1 | 磨 滑 石 | R | 造質灰岩 | 768.0 | 2層部、8箇面にあり。 | |

第31図 群期不明のフラスコ状土壙出土石器(2) (803・591・146・204・825号土壙)



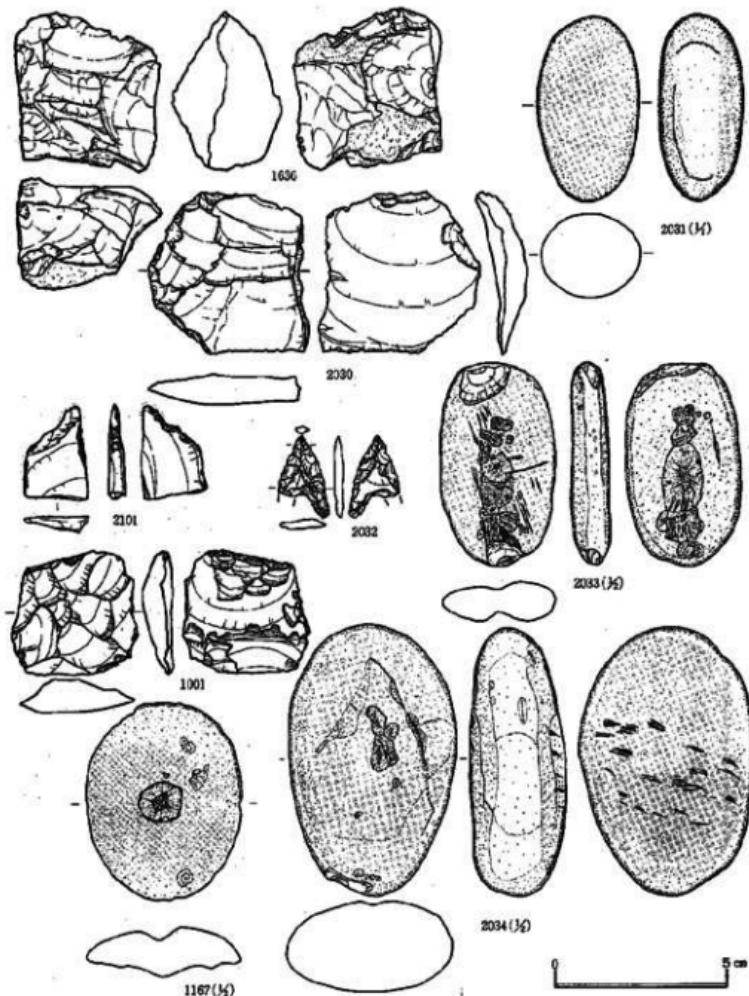
| 番号 | 連 標 | 原 位 | 基 本 | 石 片 | 重 量 (g) | 種 類 | 年 代 | 圖 番 |
|------|-----|------|-------|------------------------|-----------------|---------------|------|-----|
| 1339 | 204 | 2~3層 | 不 定 | 1G 砂質頁岩 | 32.5 | 2層を折断。三内形に變形。 | 14~2 | |
| 2038 | 825 | 1 | 層 | 二次加工片 — | 33.5 | | | |
| 1203 | 209 | 2 | 層 石 級 | — 石灰岩の複数個体 (3030.0) | 2層を削除。凹み周辺部にあり。 | | 26 | |
| 1068 | 123 | 1 | 層 | 小形尖頭器 — | 6.1 | | 3~1 | |
| 1128 | 150 | 1 | 層 石 級 | 1D 砂質頁岩 | 0.4 | | 1~2 | |
| 1612 | 585 | 複 | 層 石 級 | 1A 砂質頁岩 | 39.8 | | 4~1 | |

第32図 群期不明のフラスコ状土壙出土石器(3) (204・825・209・123・150・585号土壙)



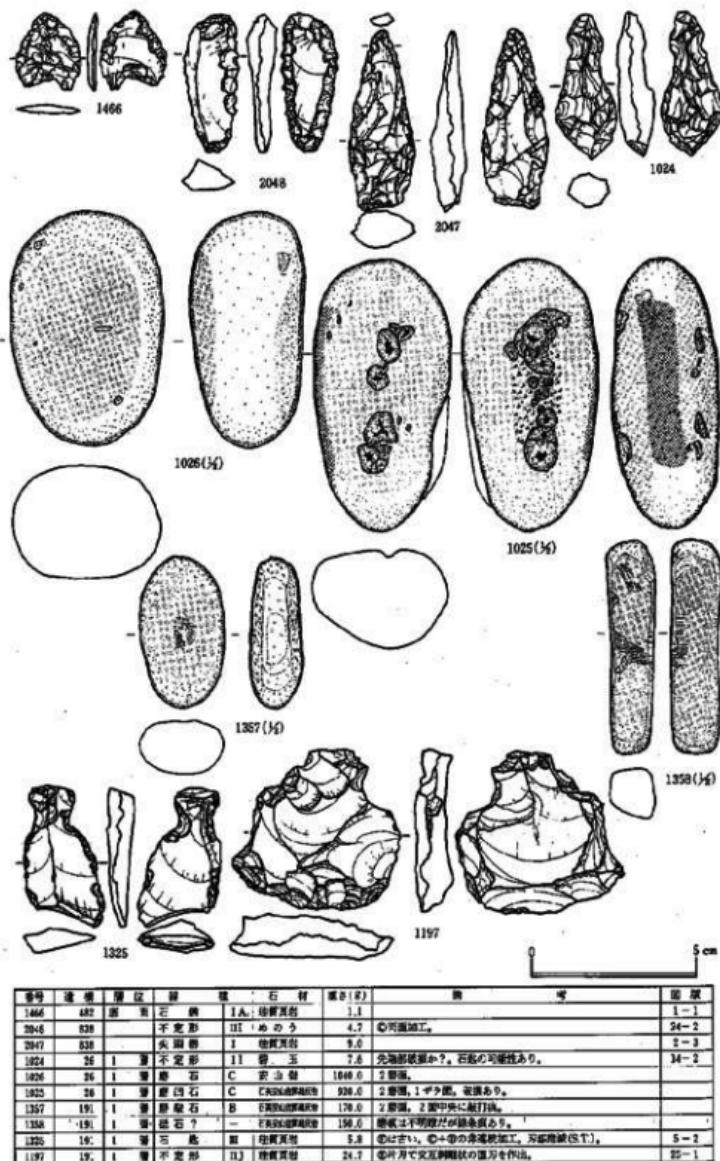
| 番号 | 遺 墓 | 層 位 | 形 番 | 石 材 | 重 さ (g) | 圖 号 | 図 底 |
|------|-----|-----|---------|-------------|---------|------------------------|-------|
| 1613 | 580 | 1 | 圓 不定 形 | 日光 理賀瓦器 | 46.1 | | 23- 9 |
| 1759 | 630 | — | 圓 出 石 | A 日光丸岡瓦器 | 449.0 | 2 四五、 3 四五、 4 四五 | |
| 1742 | 635 | — | 石 棒 | I 理賀瓦器 | 2.5 | 2 四五、 3 四五 | 10- 2 |
| 1762 | 636 | 1 | 圓 壁 石 | C 安山岩 | 380.0 | 全形解説 | |
| 409 | 6.6 | 4 | 圓 不定 形 | 日 理賀瓦器 | 14.1 | | 24- 1 |
| 1635 | 6.6 | 3 | 圓 破 瓦 | A 理賀瓦器 | 41.0 | ④+⑤の連続剖面あり。 | 4- 2 |
| 396 | 6.6 | 4 | 圓 不 定 形 | 日出 理賀瓦器 | 1.7 | ⑥の底方と丸方との実験組合式 | 18- 1 |
| 1783 | 6.6 | 1 | 圓 鋸 瓦 石 | B 安賀山砂岩 | 396 | 2 錐形(底各底あり)。芯孔直い(6mm) | |

第33図 群馬不明のフラスコ状土壤出土石器 (4) (585・639・610号土壤)

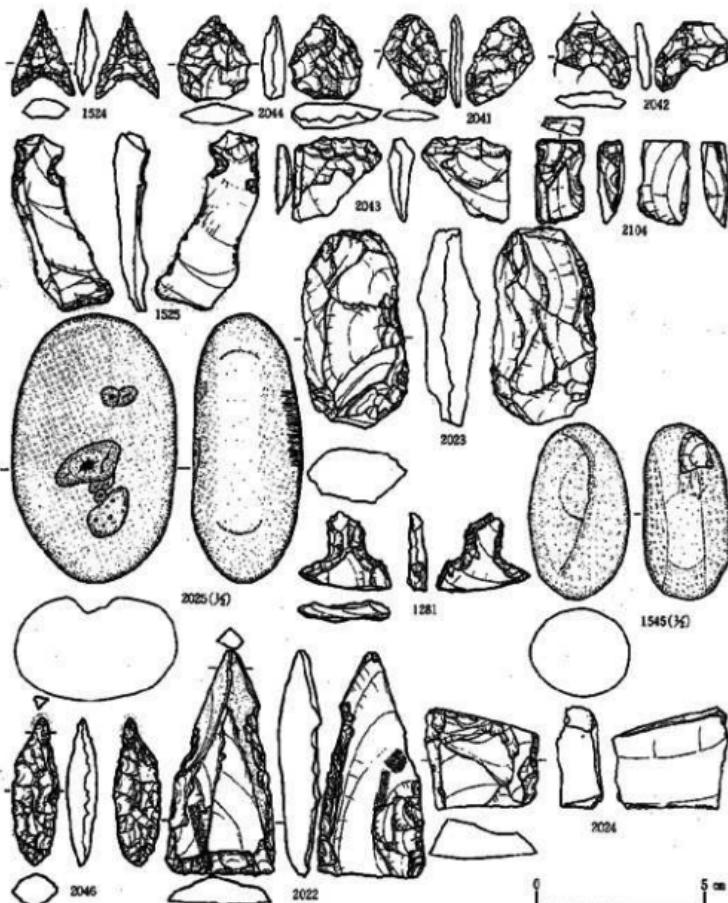


| 番号 | 遺構 | 層位 | 種類 | 場所 | 石種 | 直さ(目) | 備考 | 図版 |
|------|-----|-----|--------|-----------------|-------|--------|--------------------------------|------|
| 1636 | S10 | 3 層 | 瓦 | 塙 | 地質火成岩 | 67.0 | 3 仔供能あり。 | 12-2 |
| 2031 | S07 | 1 層 | 磨 砕 | B | 安山岩 | 369.0 | 1 帯底。 | |
| 2330 | S07 | 1 層 | 不 芝 歩 | DA ₃ | 玉 錫 | 26.3 | | 17-2 |
| 2101 | S15 | — | 不 定 形 | DD ₃ | 珪質火成岩 | 1.7 | 2 のあり。尖端部m/fと先端あり(S.T.)。 | 21-2 |
| 2032 | S13 | — | 石 砕 | 1B | 珪質火成岩 | | | 1-2 |
| 2033 | S13 | — | 圓錐形石 | B | 石英安山岩 | 210.0 | 2 帯底(擦条痕 2 箇所あり)。剥離底は長物の瓦面にあり。 | |
| 2034 | S13 | — | 磨 砕 | C | 安山岩 | 1040.0 | 2 帯底。 | |
| 1167 | I74 | 3 層 | 骨 砕 石? | — | 珪質火成岩 | | 破損あり。 | |
| 1001 | I | 1 層 | 圓錐形石 | 1A | 珪質火成岩 | 11.0 | | 9-2 |

第34図 説明不明のフラスコ状土壌出土石器(5)(S10・S07・S13・I74・1号土壌)

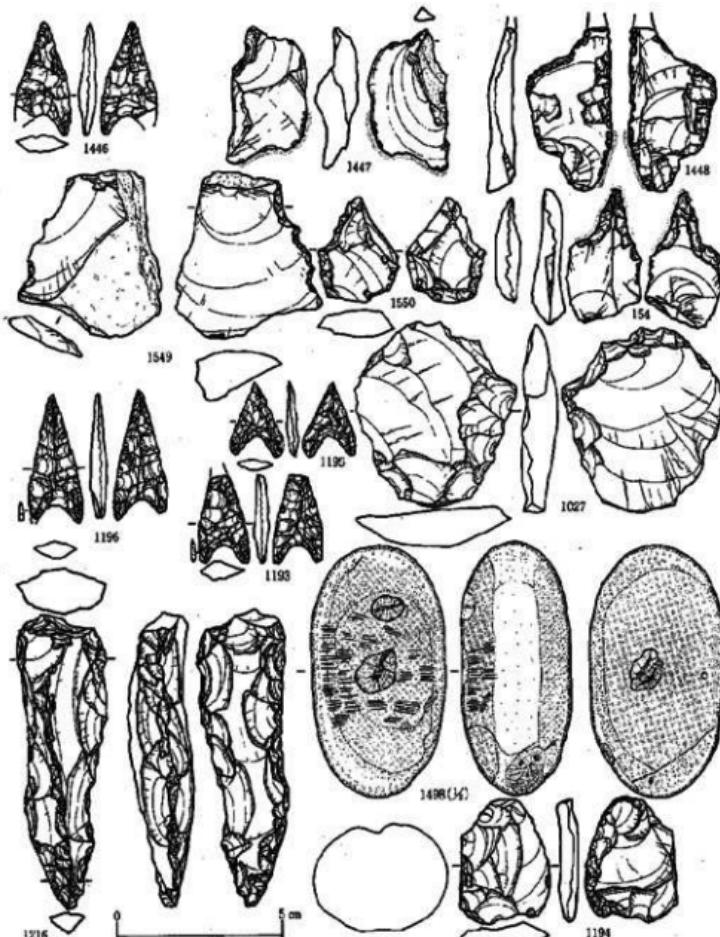


第354図 新期不明のフラスコ状土器出土石器 (6) (482・828・25・191号土器)



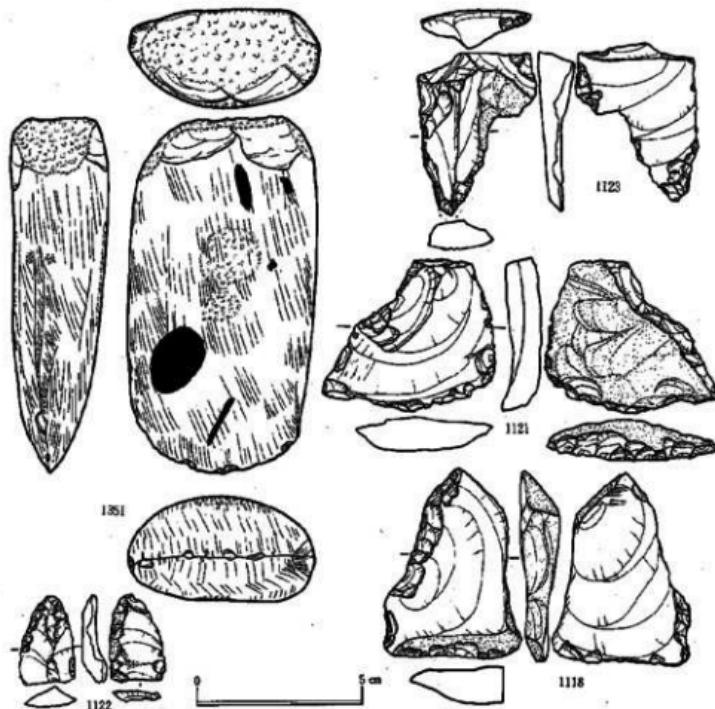
| 番号 | 表 | 種 | 固 | 空 | 種 | 種 | 正 | 材 | 重さ(g) | 圖 | 号 | 通 |
|------|-----|---|---|---|------|-------|------|-------|------------------------------|----------|------|------|
| 1524 | 520 | 1 | 磨 | 石 | 鉋 | IC | 丸頭實刃 | 1.5 | 手平。基部が工が深めより古い。 | | 2-2 | |
| 1525 | 520 | 1 | 磨 | 石 | 鉋 | N | 丸頭實刃 | 5.4 | 基部に二次加工なし。m(あり)(S.T.) | | 6-1 | |
| 2041 | 832 | — | 石 | 鉋 | 鉋頭實刃 | | | | | 基部研磨。 | | 1-1 |
| 2042 | 832 | — | 石 | 鉋 | 鉋頭實刃 | I A | 丸頭實刃 | | | 尖端。斜面研磨。 | | 1-3 |
| 2043 | 834 | — | 石 | 鉋 | 鉋頭實刃 | II A | 丸頭實刃 | 2.9 | 基部の形は古い。「盛り」がない。 | | 2-3 | |
| 2044 | 834 | — | 石 | 鉋 | 鉋頭實刃 | II B | 丸頭實刃 | 3.2 | 手+O縫合で切り出し形に整形。 | | 21-2 | |
| 2104 | 834 | — | 不 | 定 | 形 | III E | 丸頭實刃 | 2.9 | 2寸とノッチ(4cm)の位置で削ぎ、斜削痕を刀部とする。 | | 21-2 | |
| 2023 | 801 | 1 | 磨 | 不 | 定 | 形 | IV A | 丸頭實刃 | 26.2 | | | 13-2 |
| 2025 | 801 | 1 | 磨 | 石 | 鉋 | C | 丸頭實刃 | 120.0 | 2周削(溝状の跡がある)。凹み深い(5.5mm)。 | | | |
| 2022 | 801 | 1 | 磨 | 不 | 定 | C A | 丸頭實刃 | 20.4 | 片側物(S.T.)は刃面付近に砂状にこわるが、生地不明。 | | 13-2 | |
| 2024 | 801 | 1 | 磨 | 不 | 定 | C B | 丸頭實刃 | 11.9 | 鋸片の形跡を折形。折断面を打痕とする判別あり。 | | 17-1 | |
| 2046 | 836 | — | 石 | 鉋 | 鉋頭實刃 | D | 丸頭實刃 | 4.8 | 丸頭實刃(S.T.)。 | | 3-4 | |
| 1545 | 533 | 1 | 磨 | 石 | B | 丸頭實刃 | | 140.9 | 2周削。 | | | |
| 2084 | 318 | 1 | 磨 | 石 | ? | — | 骨 | 3.5 | 骨にm(あり)。複数個の再利用か。 | | 6-1 | |

第36図 群馬不明のフラスコ状土壤出土石器(7) (520・832・834・801・836・533・310号土壤)



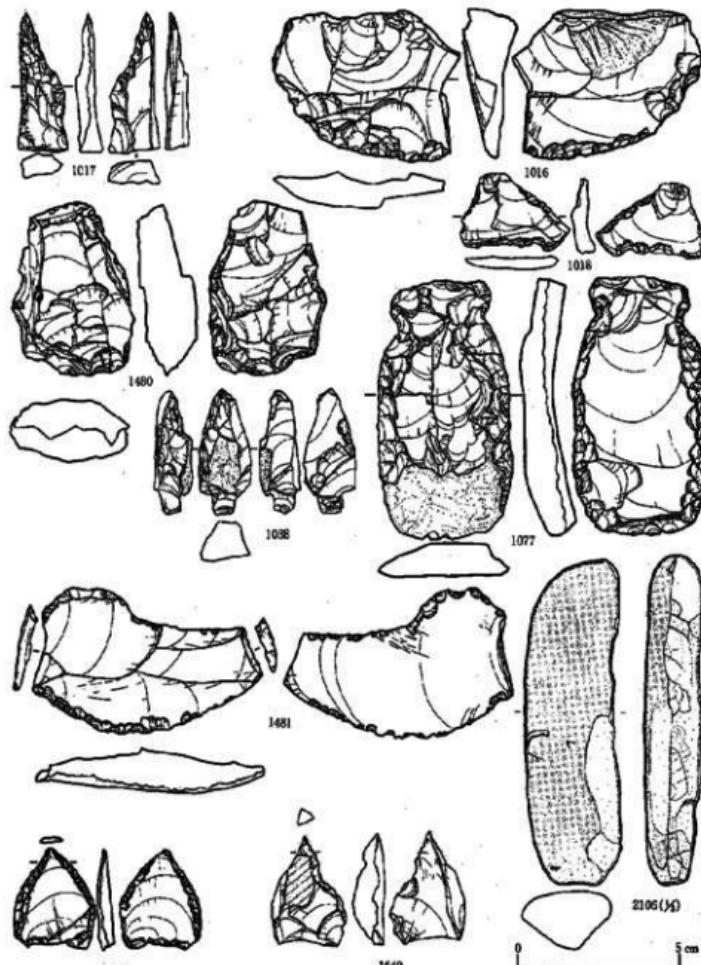
| 器号 | 遺 墓 | 層 位 | 器 形 | 石 材 | 重さ(g) | 備 | 器 号 | 圖 版 |
|------|-----|-----|---------|--------------------------|-------|--|------|-----|
| 1446 | 437 | 6 | 磨 石 鋸 | IB 理質灰岩 | 1.5 | | | 1-2 |
| 1447 | 437 | 1 | 磨 不 定 形 | IB ₂ 地質灰岩 | 6.6 | m.L.あつG.T.; ○ノックにより尖頭部作出。 | 10-1 | |
| 1448 | 437 | 1 | 磨 石 鋸 | IB 理質灰岩 | (7.5) | m.L.あつG.T.; 尖頭部削除。 | 3-4 | |
| 1549 | 538 | 1 | 磨 不 定 形 | IB 理質灰岩 | 24.6 | 端邊に選択するノッテと; ○, ◎の形形成する尖頭部あり。 | 20-1 | |
| 1550 | 538 | 1 | 磨 不 定 形 | IB ₂ 地質灰岩 | 4.5 | | 21-1 | |
| 1551 | 538 | 1 | 磨 石 鋸 | IB 理質灰岩 | 4.7 | 尖頭部の發達度(S.T.) _a | 3-4 | |
| 1552 | 27 | 1 | 磨 不 定 形 | IB 理質灰岩 | 24.5 | | 25-1 | |
| 1553 | 195 | 1 | 磨 石 鋸 | IB 地質灰岩 | (1.9) | 基底破損あり。 | 1-2 | |
| 1195 | 195 | — | 石 鋸 | IA ₂ 理質灰岩 | 0.8 | | 1-1 | |
| 1196 | 195 | 1 | 磨 石 鋸 | IB 理質灰岩 | (1.6) | 基底破損あり。 | 1-2 | |
| 1197 | 195 | 1 | 磨 不 定 形 | IIA ₂ 地質灰岩 | 6.5 | ○+△の凸凹。 | 16-1 | |
| 1216 | 226 | — | 不 定 形 | ID 砂質灰岩 | 29.5 | 尖頭部の發達度(S.T.) _a 。二次加工のバチナ新しい。 | 14-1 | |
| 1498 | 504 | 1 | 磨 石 鋸 | C 砂質灰岩 | 100.0 | 2枚組。 | | |

第37図 群期不明のフラスコ状土壙出土石器(8) (437・538・27・195・226・506号土壙)



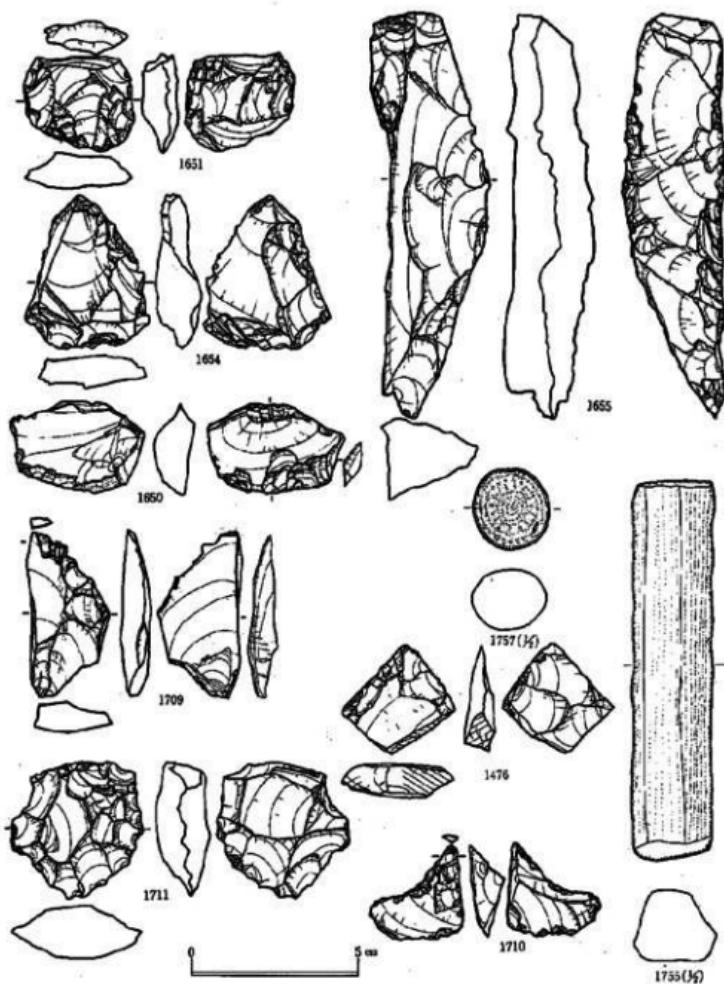
| 番号 | 遺 墓 | 層 位 | 器 物 | 種 | 石 灰 | 重 量(g) | 圖 号 |
|------|-----|-----|-----|------|-------------------|------------------|-----------------------------|
| 1351 | 146 | 1 | 壺 | 磨製石作 | I A | 新石器時代 (200.0) | 新石器時代、磨石として使用。縄文台状土器(S.T.)。 |
| 1123 | 146 | 1 | 壺 | 不定 形 | II B ₁ | 磨製貝壳 | 13-2 |
| 1121 | 146 | 1 | 壺 | 不定 形 | II A ₁ | 磨製貝壳 | 13-1 |
| 1122 | 146 | 1 | 壺 | 石 壺 | II A | 磨製貝壳 | 17-2 |
| 1118 | 146 | 1 | 壺 | 石 壺 | II A ₂ | 磨製貝壳 | 2-1 |
| 1118 | 146 | 1 | 壺 | 不定 形 | II A ₂ | 磨製貝壳 | 17-1 |

第38図 群馬不明のフラスコ状土壤出土石器(9) (146・140号土壙)



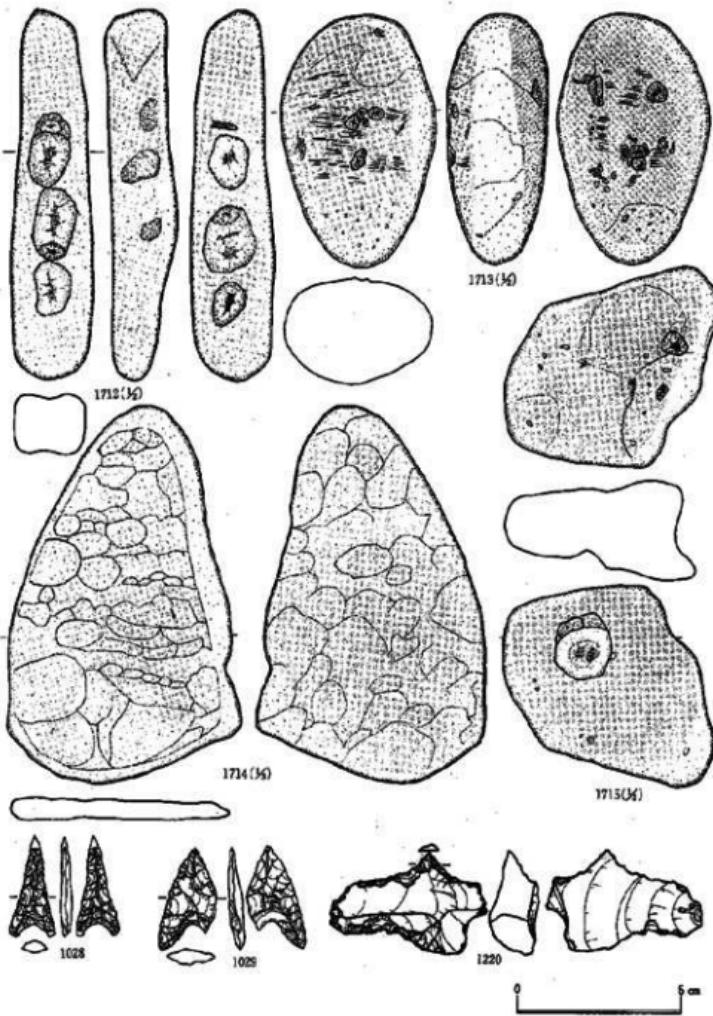
| 番号 | 遺跡 | 層位 | 性質 | 幅 | 石材 | 厚さ(ミリ) | 備考 | 層位 |
|------|----|-----|----------|------------------|------|--------|--------------------------------|------|
| 1017 | — | 14 | 層 不定 形 | 15D ₃ | 地質頁岩 | 4.6 | 2芯のフサ、尖頭部削減(S.T.)。 | 29-2 |
| 1018 | — | 14 | 層 二次加工削片 | — | 地質頁岩 | 27.2 | | |
| 1019 | — | 14 | 層 二次加工削片 | — | 地質頁岩 | 2.5 | | |
| 1038 | — | 44 | 層 片状剥離形 | 1E | 地質頁岩 | 6.5 | 不規形刃部を微細化。 | 19-1 |
| 1039 | — | 817 | 層 破片? | — | 石英岩 | — | 1断面。 | |
| 1077 | — | 108 | 層 石器 | 1B ₃ | 地質頁岩 | 43.5 | | 5-1 |
| 1091 | — | 496 | 層 葵状石器 | 田 | 地質頁岩 | 39.5 | 基部と1断面にのみあり。 | 8-1 |
| 1092 | — | 496 | 層 二次加工削片 | — | 地質頁岩 | 26.6 | 芯にめりあり(S.T.)。 | |
| 1093 | — | 619 | 層 石 剣丸 | 地質頁岩 | — | 2.7 | | 2-1 |
| 1089 | — | 619 | 層 不定 形 | 1D ₃ | 地質頁岩 | 4.7 | ①ヒラ、②ヒラと先端部削出。前面削面上にm.L(S.T.)。 | 29-1 |

第39図 新期不明のフラスコ状土壤出土石器 (14・44・817・108・496・619号土壤)



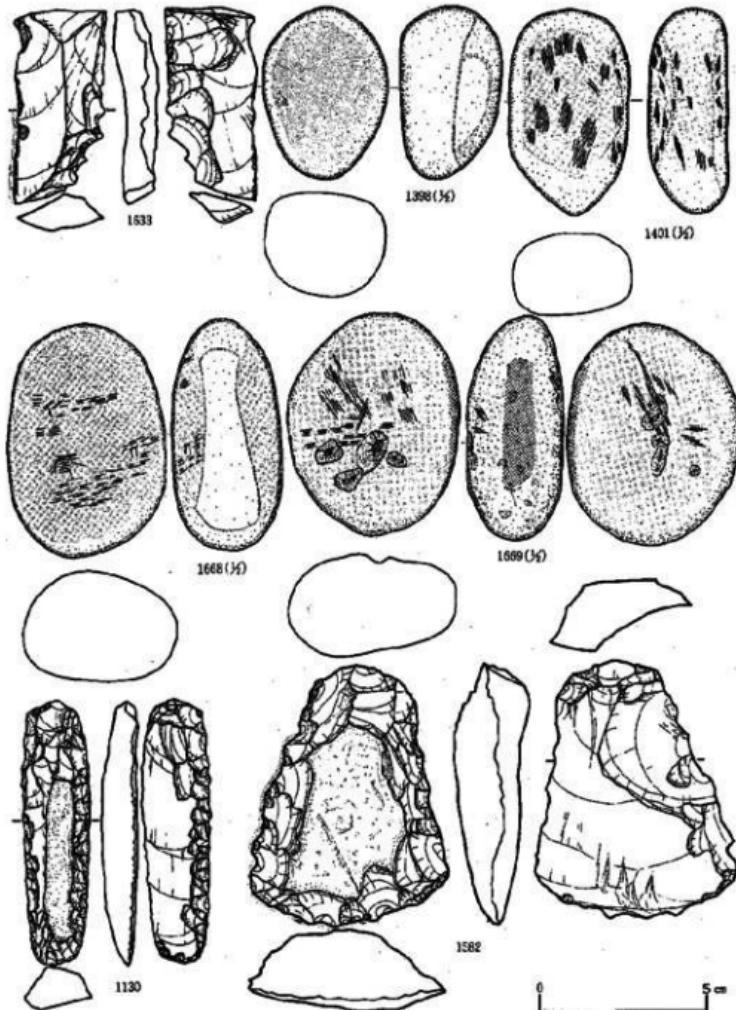
| 番号 | 通 標 | 層 位 | 部 位 | 種 類 | 石 器 | 直 径 (mm) | 備 考 | 範 例 | |
|------|--------|--------|-------------|--------|------------|----------------|-----------------------------------|-------------------------|------|
| 1651 | 619 | 1 | 層 底 | 刮削器 | II 地質頁岩 | 16.0 | 前面の1刃が破損したのも後方向で使用。 | 16-1 | |
| 1655 | 619 | 1 | 層 底 | 砍 | II 地質頁岩 | 84.0 | 底面を茎する。 | 11-2 | |
| 1654 | 619 | 1 | 層 不 定 | 形 | II 地質頁岩 | 16.0 | ④+⑤で交叉斜面の刃細字。刃は古い。 | 25-3 | |
| 1659 | 619 | 1 | 層 | 二次加工剝片 | - | 地質頁岩 | 16.5 | ④あり。古い。 | |
| 1757 | 619 | 1 | 層 底 | 正 | B 地質頁岩 | 35.0 | 全斜面削。 | | |
| 1766 | 620 | 1 | 層 自然 | 形 | - | 玄武岩 | 680.0 | 加工の跡跡不明。いわゆる特大型。 | |
| 1476 | 492 | 1 | 層 不 定 | 形 | I F 地質頁岩 | 8.1 | 定形右側の破損か? のぞける剥離あり。黑色付帶物(S.T.J.)。 | 14-2 | |
| 1709 | 694 | 1 | 層 | 不 定 | 形 | III D 地質頁岩 | 8.7 | ②と重なり。古い。灰色付帶物(S.T.J.)。 | 26-1 |
| 1711 | 694 | 1 | 層 不 定 | 形 | II B 地質頁岩 | 22.9 | ③側面の部分削(S.T.J.)。 | 13-2 | |
| 1710 | 694 | 1 | 層 不 定 | 形 | III D 地質頁岩 | 4.1 | 黒色付帶物あり。 | 21-1 | |

第40図 群落不明のフラスコ状土壌出土石器(II) (619・492・694号土壌)



| 番号 | 遺構 | 層位 | 器 | 種 | 石 片 | 量(±%) | 圖 | 圖解 | |
|-------------|-----|-------|-----------|-----------|--------------|------------------|-----------------------|------|--|
| 1712 694 | 1 墓 | 厚 古 石 | B | 694-235号標 | 379.0 | 4塊類。四つ2個あり。 | | | |
| 1713 694 | 1 墓 | 厚 古 石 | C | 694-235号標 | 890.0 | 2塊類。2個あり。 | | | |
| 1714 694 | — | 石 瓶? | — | 694-235号標 | 3999.0 | 2個類。瓶状に削離した器を利用。 | | | |
| 1715 694 | 1 墓 | 厚 古 石 | 694-235号標 | 379.0 | 2塊類。1個に凹みあり。 | | | | |
| 1028 | — | 石 瓶 | IC | 694-235号標 | 1.0 | 尖端部破損。 | 1-2 | | |
| 1029 | 28 | — | 石器未製品 | — | 三 鏡 | 1.7 | 新規の実験が受けたもの。割れではない。 | 1-2 | |
| 1220 | 235 | — | 不 定 | IIa | 694-235号標 | 7.7 | 尖端部の剥離部破損(S.T...の付近)。 | 20-2 | |

第41図 群期不明のフラスコ状土壙出土石器 (2) (694・28・235号土壙)



| 品号 | 種類 | 原形 | 標 | 圖 | 五 材 | 重さ(g) | 備 | 備 | 備 |
|------|-----|----|--------|----|--------|-------|--------|---------------------------|------|
| 1388 | 380 | — | 無 | 4 | C | 安山岩 | 540 | 1面削。 | |
| 1401 | 423 | 1 | 磨 不定形 | 55 | 日付 | 地質資料 | 13.2 | 先端にVあり、古い。m/あり(S.T.)。 | 23-2 |
| 1668 | 356 | 1 | 磨 | 56 | III | 地質資料 | 77.7 | 周辺の瓦部につぶれあり(S.T.)。 | 8-2 |
| 1401 | 642 | — | 磨 石 | 6 | C | 安山岩 | 580.0 | 3面削(側面底あり)。 | |
| 1668 | 642 | 1 | 磨 磨 | 7 | C | 安山岩 | 3050.0 | 2面削(側面底あり)。 | |
| 1669 | 642 | 1 | 磨 磨 四石 | 8 | C | 安山岩 | 350.0 | 2面削。V字割。 | |
| 1130 | 152 | 1 | 磨 砕石器 | 9 | BA | 地化凝灰岩 | 29.7 | +Cの削削した刃机。先端の腹面に先削(S.T.)。 | 7-1 |

第42図 群期不明のフラスコ状土壌出土石器(3) (380・603・556・642・152号土壌)

2. その他の土壌出土の石器

その他の土壌については遺構の拡大図は記載されていないので、1987年度発行の報告書の土壤観察表(1)～(12)(pp. 400～411)を参考にして付図・地区別遺構配置図(pp. 2～12)で遺構の位置を特定しなければならない。群期が判明する土壌については土器図版との対応表を付けた(第3・4表)。また、特定はできないが、その群期に属する可能性が高い土壌については時期不明の土壌に含めて土壌番号の小さい順に並べているので、対応表(第3・4表)で検査して頂きたい。

第3表 その他の土壌の対応表(1)

| 土 壤 % | 14 | 36 | 36 | 36 | 136 | 127 | 194 | 222 | 305 | 306 | 326 | 324 | 374 | 386 |
|---------|---------|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 土 壤 番 号 | 309 | 240 | 241 | 244 | 245 | 246 | 248 | 249 | 249 | 249 | 246 | 246 | 247 | 245 |
| 石 墓 % | — | 44 | — | 44 | — | 44 | 44・62 | — | 40 | 45 | 45 | — | — | — |
| 土 壤 % | 400 | 402 | 424 | 404 | 493 | 500 | 522 | 562 | 576 | 590 | 596 | 599 | — | — |
| 土 壤 番 号 | 249・350 | 351 | 362 | 353 | 354 | 356 | 356 | 358 | 357 | 359 | 360 | 361 | — | — |
| 石 墓 % | — | — | 45 | 45 | 47 | 47 | — | 47・48 | 48 | — | — | 48 | — | — |

早期末葉の土壌

| 土 壤 % | 14 | 36 | 36 | 36 | 136 | 127 | 194 | 222 | 305 | 306 | 326 | 324 | 374 | 386 |
|---------|---------|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 土 壤 番 号 | 309 | 240 | 241 | 244 | 245 | 246 | 248 | 249 | 249 | 249 | 246 | 246 | 247 | 245 |
| 石 墓 % | — | 44 | — | 44 | — | 44 | 44・62 | — | 40 | 45 | 45 | — | — | — |
| 土 壤 % | 400 | 402 | 424 | 404 | 493 | 500 | 522 | 562 | 576 | 590 | 596 | 599 | — | — |
| 土 壤 番 号 | 249・350 | 351 | 362 | 353 | 354 | 356 | 356 | 358 | 357 | 359 | 360 | 361 | — | — |
| 石 墓 % | — | — | 45 | 45 | 47 | 47 | — | 47・48 | 48 | — | — | 48 | — | — |

I群期の土壌

| 土 壤 % | 45 | 72 | 235 | 222 | 228 | 224 | 423 | 547 | 653 | 646 | 646 | 915 | 922 | 932 | 942 | 948 |
|---------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 土 壤 番 号 | 391 | 391 | 295 | 291 | 291 | 291 | 391 | 391 | 391 | 391 | 391 | 391 | 391 | 391 | 391 | 391 |
| 石 墓 % | — | 60 | 64 | — | — | 60 | — | 72 | 80 | — | — | — | — | — | — | — |

I群期に属する可能性が高い土壌

| 土 壤 % | 197 | 206 | 320 | 349 | 255 | 397 | 411 | 491 | 530 | 510 | 515 | 516 | 518 | 520 | 521 |
|---------|-----|-----|-----|-------|-----|-----|-----|-------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 土 壤 番 号 | 363 | 363 | 362 | 366 | 367 | 343 | 364 | 369 | 379 | 364 | 364 | 364 | 364 | 364 | 368 |
| 石 墓 % | — | — | 49 | 49・53 | — | 51 | 50 | 51・52 | — | 50 | — | — | — | — | 51 |

II・III群期の土壌

| 土 壹 % | 32 | 48 | 131 | 313 | 227 | 294 | 425 | 436 | 514 | 515 | 516 | 645 | 912 | 929 | 938 | 947 | 952 |
|---------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 土 売 番 号 | 392 | 392 | 392 | 393 | 393 | 393 | 393 | 393 | 393 | 393 | 393 | 393 | 393 | 393 | 393 | 393 | |
| 石 墓 % | — | — | 53 | 65 | 66 | 67 | 69・70 | 73 | — | — | 70 | — | — | — | — | — | — |

II・III群期に属する可能性が高い土壌

| 土 壱 % | 356 | 420 | 544 | 520 | 616 | 646 | 659 | 903 | 917 | 945 | 956 |
|---------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|-----|-----|-----|
| 土 売 番 号 | 378 | 383 | — | 374 | — | 374 | 377 | 378 | 378 | 379 | 380 |
| 石 墓 % | — | — | — | 54 | — | 53 | 53・54 | — | — | — | — |

IV～V群期の土壌

| 土 壱 % | 36 | 269 | 139 | 314 | 325 | 366 | 546 | 902 | 904 | 913 | 955 |
|---------|-------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 土 売 番 号 | 394 | 394 | 394 | 394 | 394 | 394 | 394 | 394 | 394 | 394 | 394 |
| 石 墓 % | 57・58 | 62 | — | 66 | — | — | 73 | — | — | — | — |

IV～V群期に属する可能性が高い土壌

| 土 壱 % | 9 | 268 | 412 | 310 | 812 | 903 |
|---------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 土 売 番 号 | 395 | 395 | 395 | — | — | 395 |
| 石 墓 % | — | — | 73 | — | — | — |

II～V群期に属する可能性が高い土壌

第4表 その他の土壤の対応表(2)

| | | | | | | | | | | | | |
|---------|-----|-----|---------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 土 壤 No. | 128 | 149 | 229 | 375 | 451 | 522 | 524 | 561 | 672 | 843 | 902 | 939 |
| 土 壤 因 索 | 352 | 263 | 384・385 | 387 | 361 | 368 | 588 | 368 | 388 | 385 | 389 | 389 |
| 石 器 因 索 | 55 | 55 | - | 55 | - | - | - | - | - | 55 | 55 | - |

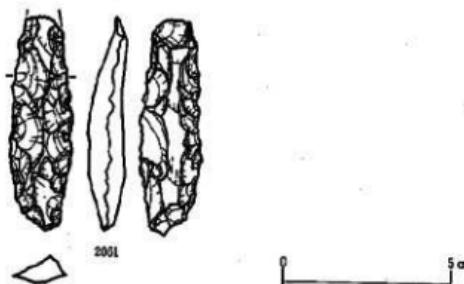
VI群期の土壤

| | | | | | | | | | | | | |
|---------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 土 壤 % | 242 | 243 | 299 | 272 | 282 | 299 | 298 | 432 | 439 | 437 | 426 | 436 |
| 土 壤 因 索 | 234 | 262 | 295 | 294 | 286 | 294 | 297 | 267 | 267 | 267 | 267 | 267 |
| 石 器 因 紴 | - | 67 | - | 55 | - | - | - | 71 | - | - | - | - |
| 土 壤 % | 352 | 359 | 638 | 672 | 565 | 568 | 937 | 936 | 927 | 943 | 949 | 952 |
| 土 壤 因 紴 | 387 | 391 | 395 | 398 | 398 | 398 | 398 | 398 | 398 | 398 | 398 | 398 |
| 石 器 因 紴 | - | - | 80 | 80 | - | - | - | - | - | - | - | - |

VI群期に属する可能性が高い土壤

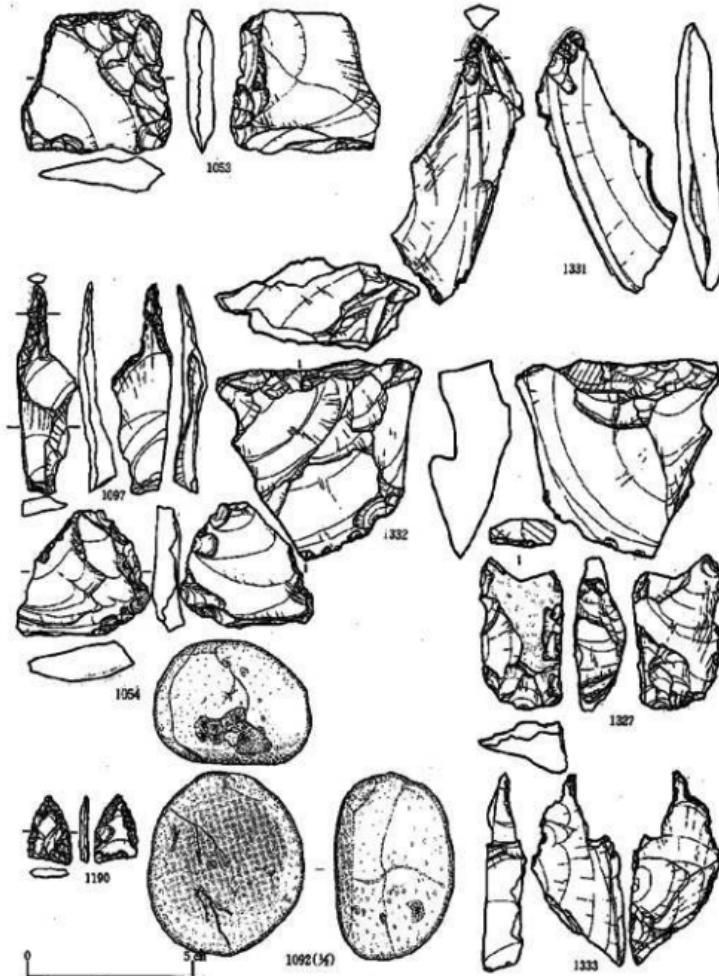
| | | | | | |
|---------|-----|----|-----|-----|-----|
| 土 壤 No. | 224 | 22 | 146 | 472 | 123 |
| 土 壤 因 紴 | 460 | - | - | - | - |
| 石 器 因 紴 | - | - | - | - | - |

VII群期の土壤 VII群期に属する可能性が高い土壤



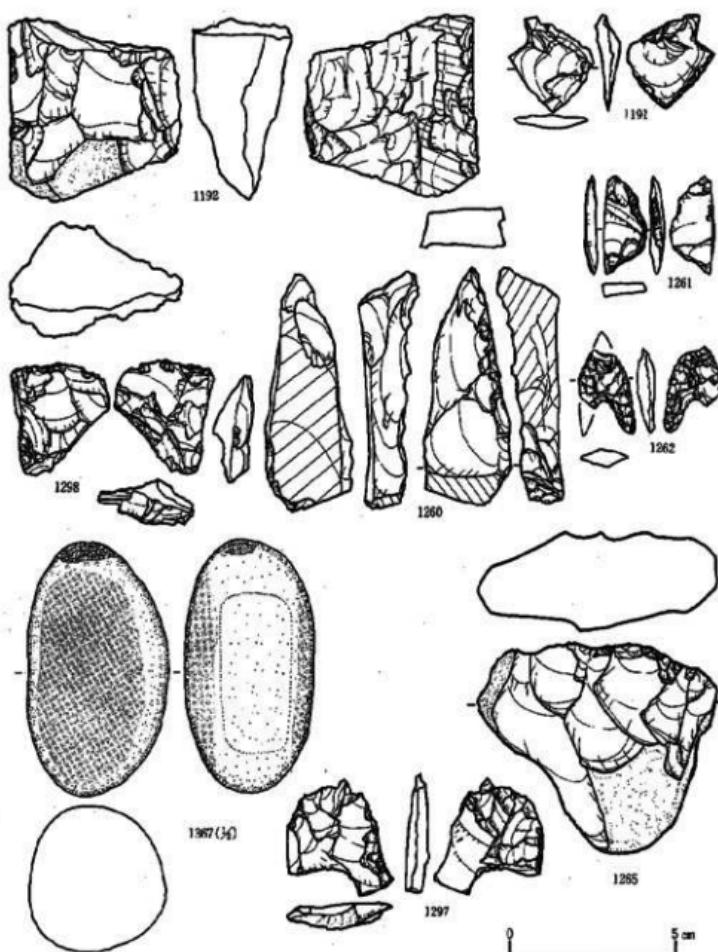
| 番号 | 遺 墓 | 層 位 | 器 物 | 石 器 | 重 量 (K) | 特 性 | 考 号 | 回 施 |
|------|-----|-------------|-----|-----|---------|-------|-----|-----|
| 2051 | 847 | 底面以上 尖頭様 | ? | 石 器 | (10.1) | 尖頭部鋸齒 | - | 2-3 |

第43図 早期末葉の土壤出土石器 (847号土壤)



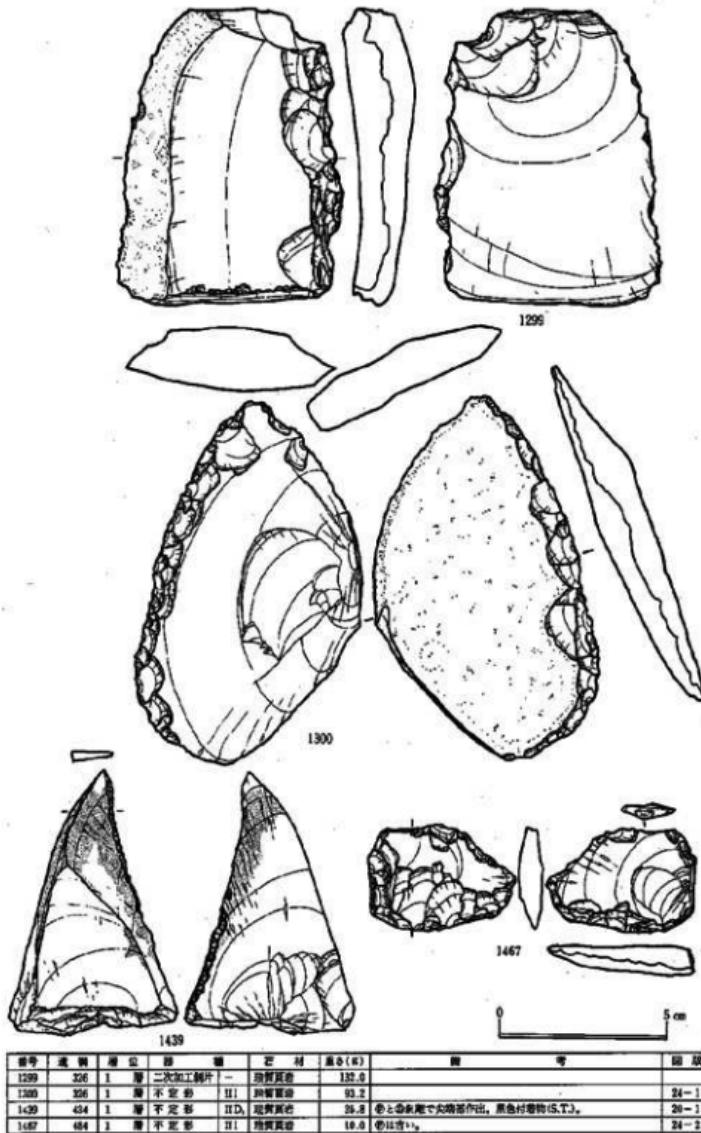
| 番号 | 直 縦 | 横 縦 | 地 点 | 石 片 | 重さ(g) | 直 縦 | 横 縦 | 地 点 | 図 番 |
|------|-----|-----|-------|--------|-------|------|-------------------------------------|------|------|
| 1327 | 20 | | 同上 | I(B) | 地質頁岩 | 15.4 | 上部剖面-B2-A-骨器むC。 | | 2-2 |
| 1053 | 50 | 1 | 層 不定形 | II(F) | 地質頁岩 | 17.0 | ①白山あり。 | | 22-1 |
| 1054 | 55 | 1 | 層 不定形 | II(J) | 地質頁岩 | 12.3 | | | 22-1 |
| 1331 | 126 | 1 | 層 不定形 | III(L) | 地質頁岩 | 19.2 | ヒンジフラクチャーの剥片を含む。水槽に尖削作用。mIあり(S.T.)。 | 23-1 | |
| 1332 | 126 | 1 | 層 不定形 | II | 地質頁岩 | 91.8 | 尖削剥片の剥片を含む。2回作成面とする。②は同動作剥片のもの。 | 21-1 | |
| 1333 | 126 | 1 | 層 不定形 | II(D) | 地質頁岩 | 10.3 | 尖削の行為を示す。③で尖削部がD。 | | 18-1 |
| 1097 | 127 | — | 層 不定形 | II(D) | 地質頁岩 | 4.8 | 尖削の行為。 | | 26-2 |
| 1092 | 127 | 1 | 層 磨 石 | C | 地質頁岩 | 9.0 | J磨面。墨色付着物あり。 | | |
| 1190 | 104 | 1 | 層 磨 石 | II(A) | 地質頁岩 | 9.0 | | | 2-1 |

第44図 I群期の土壤出土石器 (I) (30・59・126・127・1327・1092号土壤)

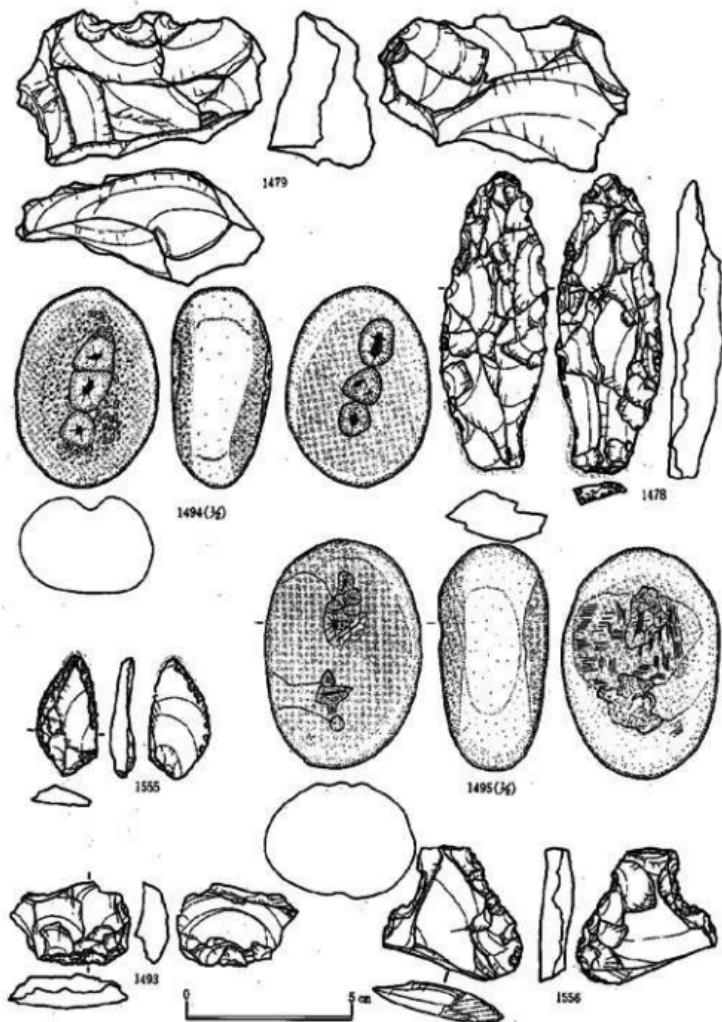


| 番号 | 遺 儀 | 用 途 | 名 | 圖 | 石 材 | 大きさ(寸) | 圖 | 名 | 用 途 |
|------|-----|-----|---------|-----------------|------|--------|-----------------|---|------|
| 1192 | 194 | 1. | 磨 刀石 | IA | 砂、玉 | 23.0 | | | 9-2 |
| 1191 | 194 | 1 | 磨 不 定 形 | IB | 海螺貝殻 | 2.8 | ◎で小尖端部削除。 | | 18-2 |
| 1250 | 305 | 2 | 磨 石 核 | I | 珪化木炭 | 25.7 | 断面面を四角とする。素材不明。 | | 18-2 |
| 1251 | 305 | 2 | 磨 不 定 形 | ID | 珪化貝殻 | 1.3 | ◎は一部の辺に切られる。 | | 21-1 |
| 1252 | 305 | 2 | 磨 石 核 | II | 海螺貝殻 | | 尖端部と基部が挫滅。 | | 1-2 |
| 1255 | 306 | 3 | 磨 石 核 | I | 珪化貝殻 | 12.0 | 自然面を打削する。 | | 18-2 |
| 1256 | 306 | 1 | 磨 不 定 形 | II | 玉 | 7.5 | ◎と圓と丸、◎で三内形に挫削。 | | 21-2 |
| 1367 | 326 | — | 磨 石 | C | 花崗岩 | 35.0 | 2面削、尖端一端に敲打痕あり。 | | |
| 1397 | 326 | 1 | 磨 不 定 形 | BA ₂ | 津貝貝殻 | 5.1 | ◎は◎斜縁に切られる。 | | |

第45図 I群期の土壤出土石器(2) (194・305・306・326号土壤)

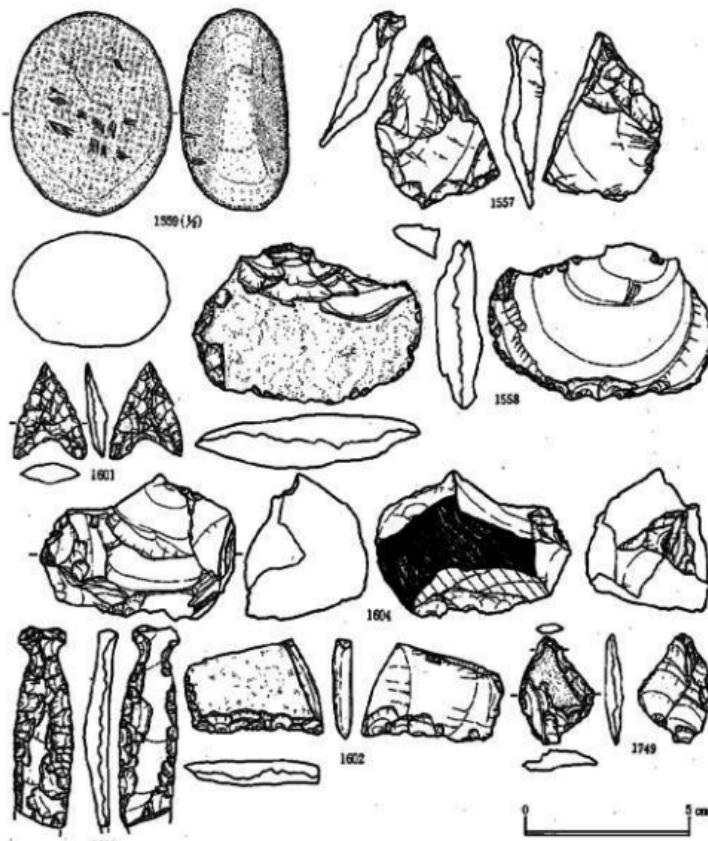


第46図 T群期の土壤出土石器(3) (326・434・484号土壤)



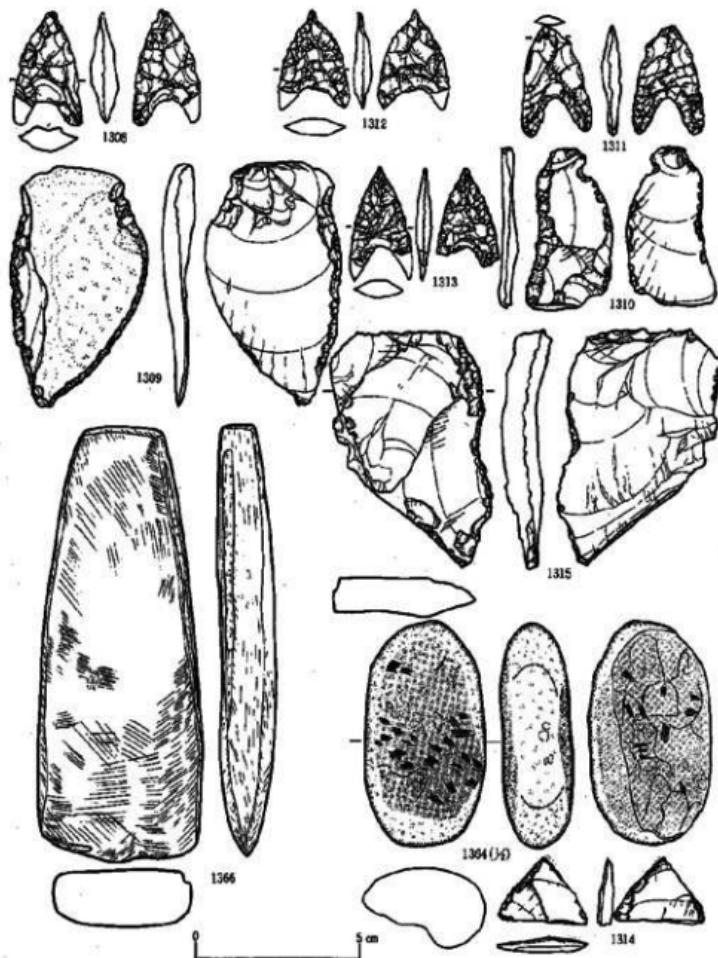
| 番号 | 遺 稣 | 形 性 | 質 | 量 | 石 片 | 重さ(㌘) | 備 | 年 | 出 墓 |
|------|-----|------------|------------|------|--------------------------|-------|---|------|-----|
| 1479 | 490 | 1. 圓 石 鋸 | H. 硬化凝灰岩 | 68.3 | | | | 11-2 | |
| 1478 | 495 | 1. 圓 尖頭鋸 | I. 硬質頁岩 | 33.9 | m.あり(S.T.)。 | | | 2-3 | |
| 1494 | 500 | — | C. 砂質凝灰岩 | 680 | 2面削(芯み部の用途ザク形状となる。)抜けあり。 | | | | |
| 1495 | 500 | — | B. 磨光石 | 990 | 2面削(底面丸み)。 | | | | |
| 1495 | 500 | — | D. 不定形 | 8.7 | あり。C. の側面加工による反対斜面状の刀頭。 | | | 25-2 | |
| 1555 | 542 | 1. 圓 不 定 形 | II.B. 硬質頁岩 | 3.9 | ②で尖端部削出。尖端部磨耗(S.T.)。 | | | 16-6 | |
| 1556 | 542 | 1. 圓 石 底? | — 硬質頁岩 | 14.5 | ②で切り余根削りあり。m.あり(S.T.)。 | | | 6-1 | |

第47図 I群期の土壤出土石器(4)(493・500・542号土塚)



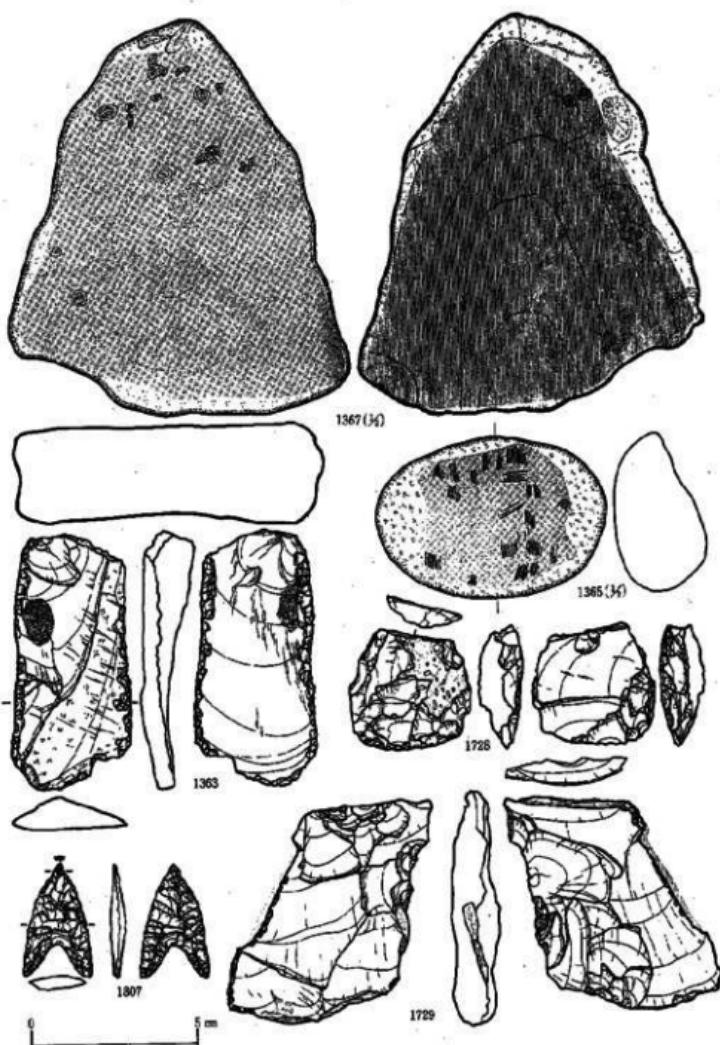
| 番号 | 遺 墓 | 層 定 | 器 物 | 材 料 | 度 合 (mm) | 備 考 | 図 版 |
|------|-----|-----|---------|-----------------------|----------|----------------------------|------|
| 1559 | 542 | 2 | 磨 磨 石 | C 变山石 | 989.4 | 2面磨。 | |
| 1557 | 542 | 1 | 不 定 形 | ED ₁ 变化凝灰岩 | 14.1 | ①と②、むごよる規則少規則性。 | 20-1 |
| 1558 | 542 | 1 | 不 定 形 | HF 变质页岩 | 36.5 | ③+④で打面除去。⑤で縫合欠け。mあり(S.T.)。 | 22-2 |
| 1601 | 576 | 3 | 磨 磨 石 板 | IB 变质页岩 | 2.1 | | 1-2 |
| 1604 | 576 | 3 | 磨 磨 石 板 | IB 变质页岩 | 30.0 | 擦けはじけあり(S.T.)。 | 13-2 |
| 1603 | 576 | 3 | 磨 磨 石 板 | I 变化凝灰岩 | 5.0 | 擦耗あり。つまり板以外の二次加工のバティナ新しい。 | 6-1 |
| 1602 | 576 | 3 | 不 定 形 | IIa 变质页岩 | 8.7 | ⑥は破損。 | |
| 1749 | 909 | 1 | 磨 磨 石 板 | IIb 变质页岩 | 2.5 | | 18-2 |

第48図 I群期の土壤出土石器(5) (542・576・909号土壌)



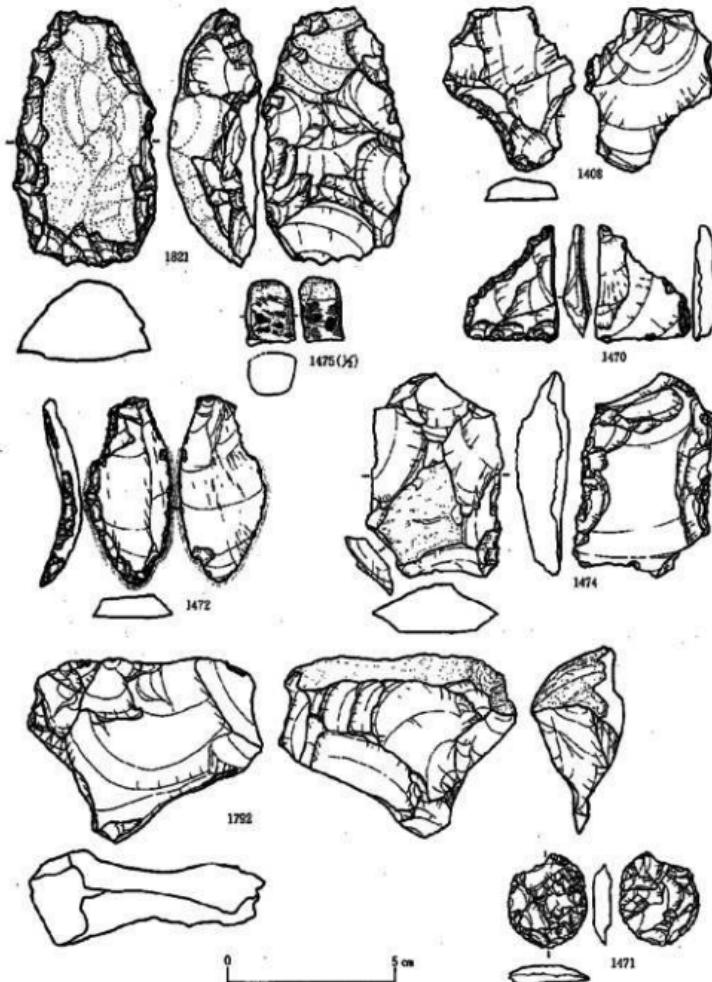
| 番号 | 通 號 | 名 称 | 形 態 | 石 材 | 重さ(g) | 圖 号 | 目 次 |
|------|--------|-----------|----------------------|--------|--------------------------|--------|--------|
| 1308 | 330 | 1 周 石 矛 | 1B 硬質頁岩 | (3.1) | 基部研磨。 | 1-2 | |
| 1312 | 330 | 1 周 石 矛 | 1A. 硬質頁岩 | (2.2) | 基部研磨。 | 1-1 | |
| 1311 | 330 | 1 周 石 矛 | 1B. 玉 鋸 | 1.2 | 尖頭部は後進面の兩加工か? | 1-2 | |
| 1309 | 330 | 2 周 石 矛 | 1A. 硬質頁岩 | 22.4 | ◎一部の周辺加工のみによる。 | 4-1 | |
| 1313 | 330 | 1 周 石 矛 | 1B. 硬質頁岩 | | 基部研磨直進。 | 1-2 | |
| 1310 | 330 | 1 周 石 矛 | 1B ₂ 硬質頁岩 | 4.8 | | 4-2 | |
| 1315 | 330 | 1 周 不定 形 | 2B. 硬質頁岩 | 41.1 | ◎で両面した刃部と刃地的削出。 | 18-1 | |
| 1314 | 330 | 1 周 小 武 形 | 2B. 硬質頁岩 | 1.4 | 基部の刃は被削か? 被削直線は剝離後二次加工か? | 18-1 | |
| 1366 | 349 | 1 周 墓碑形石斧 | 1B. 硬質頁岩 | 195.7 | 刃削出。磨耗有り。 | 9-1 | |
| 1364 | 349 | 1 周 石 | B. 硬質頁岩 | 450 | 磨滅? 破損も使用されている。 | | |

第49図 II・III期の土壤出土石器(II) (330・349号土壤)



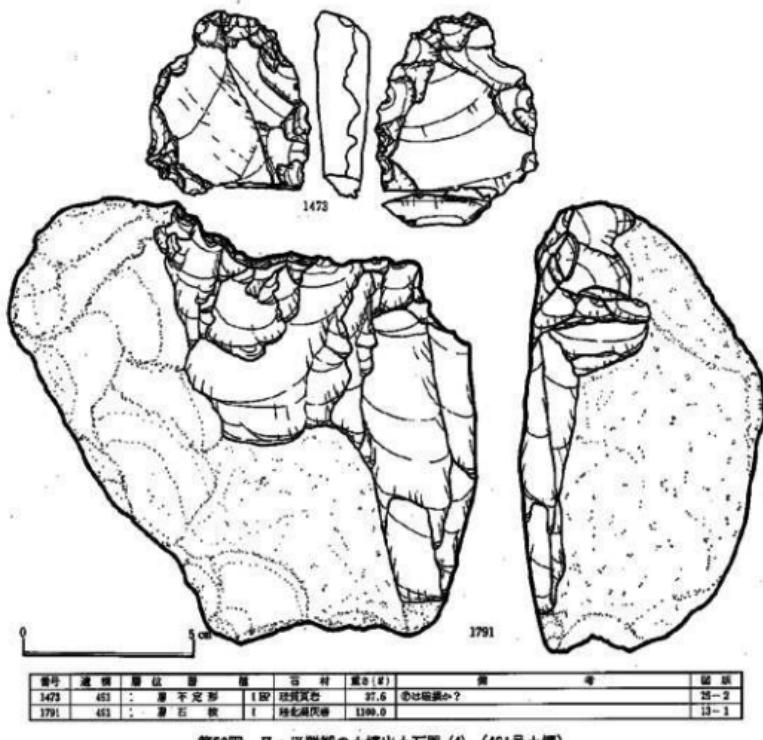
| 番号 | 通 呼 | 施 工 | 第一 地 | 石 村 | 重さ(g) | 備 考 | 圖 原 |
|------|-----|-----|---------|-----|----------------|----------------------------------|------|
| 1367 | 349 | 1 | 磨 石 | 無 | 石質無規則形 [13606] | 2面被削、破損後も使用されている。 | |
| 1365 | 349 | 1 | 磨 石 | C | 石質無規則形 [064] | 棘けはじけによる破損あり。頭尾合物質付着。 | |
| 1363 | 349 | 1 | 磨 不 定 形 | H1 | 石質無規則形 | 27.3 ○+△で削成形。頭尾合質 [347]付着(S.T.)。 | 24-2 |
| 1728 | 401 | 1 | 磨 不 定 形 | H1E | 石質無規則形 | 16.0 ①の面のうち、2面は凹形、△に切られ。 | 14-1 |
| 1729 | 401 | 1 | 磨 不 定 形 | H1F | 石質無規則形 | 39.1 ①はない。m.eのある刃部あり [S.T.]。 | 22-2 |
| 1807 | 910 | — | 石 無 | I B | 石質無規則形 | 1.8 ④+⑤の残った連続した剝離あり。 | 1-2 |

第50図 II・III群期の土壤出土石器(2) (349・401・910号土壤)

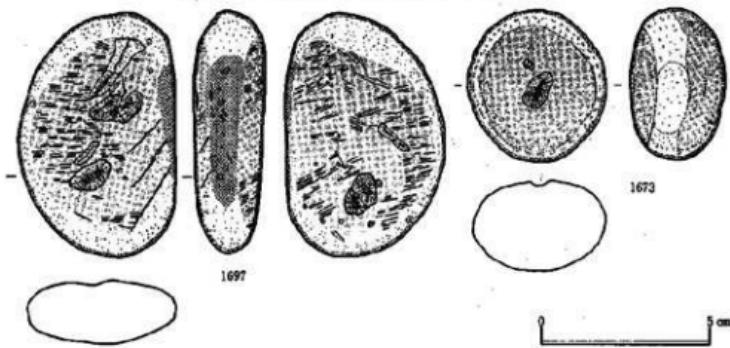


| 番号 | 遺 剣 | 層 柱 | 器 | 種 | 石 材 | 重さ(g) | 備 考 | 圖 号 |
|------|-----|-----|-------|---------|------------|-------|----------------------------------|------|
| 1821 | 916 | I | 層 | 素面石器 | H 珪質頁岩 | 79.8 | 刃部、側壁とも圓錐状。 刃部に凹溝あり。 | 2-1 |
| 1408 | 397 | — | 不 定 形 | — | IG 珪質頁岩 | 35.8 | 刃部にV字溝あり。 | 23-1 |
| 1475 | 491 | 1 | 層 | 石製品? | — 石英閃長岩 | 51.1 | 敲打痕と擦痕あり。赤色骨質付骨(S.T.)。 | — |
| 1479 | 491 | 1 | 層 | 平 不 定 形 | ED 珪質頁岩 | 5.2 | ①と②との切り合いでV字形。 刃部に凹溝あり(S.T.)。 | 21-1 |
| 1472 | 491 | 1 | 層 | 不 定 形 | BA 珪質頁岩 | 8.8 | 刃部V字形。 | 15-1 |
| 1474 | 491 | 1 | 層 | 小 不 定 形 | EB 珪質頁岩 | 35.9 | 二面削により刃部による鋸刃。 長軸両端にV字溝あり。 | 14-1 |
| 1471 | 491 | 1 | 層 | 平 不 定 形 | IC 珪質頁岩 | 2.6 | 両面S.T.で刃部に凹溝。 黑色付着物が点状(S.T.)。 | 14-1 |
| 1792 | 491 | 1 | 層 | 石 板 | H 珪質頁岩 | 76.0 | — | 11-2 |

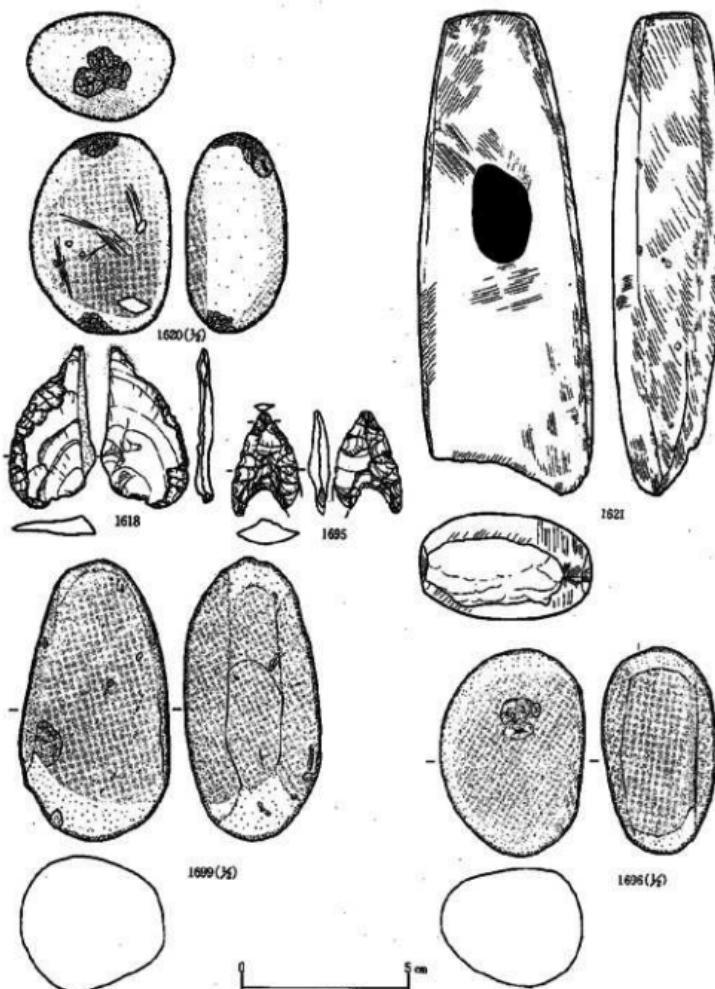
第51図 II・直轄期の土壌出土石器(3) (916・397・491号土壤)



第52図 II・III群期の土壤出土石器(4) (491号土壤)

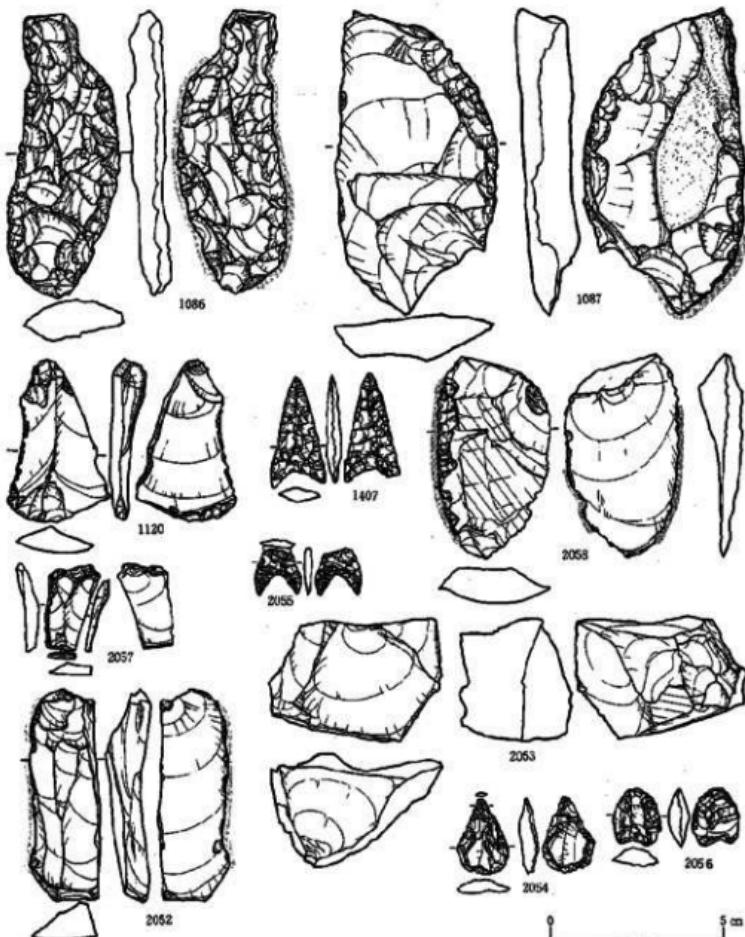


第53図 IV～V群期の土壤出土石器(1) (659・646号土壤)



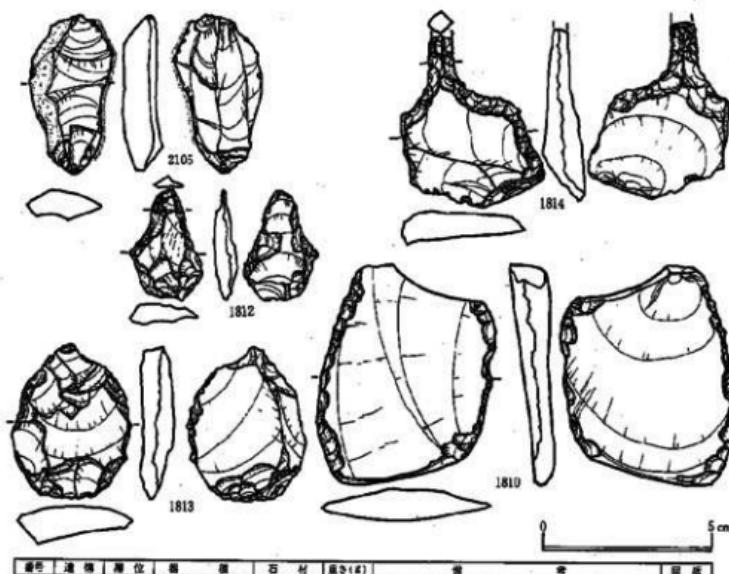
| 番号 | 遺物 | 層位 | 基 | 材 | 直さ(ミ) | 備考 | 図版 |
|------|-----|----|---|------|-------|--|------|
| 1620 | 559 | I | 薄 | 板 | C | 断面黄色有光石 770.0 2層面、長轴方向に斜打痕。 | |
| 1621 | 559 | I | 薄 | 地質石岸 | IB | 断面黄灰色 380.0 万葉経系底あり。褐色色付着物あり(S.T.)。 | 2-2 |
| 1618 | 559 | I | 厚 | 石 | II | 地質石岸 3.6 斧状磨擦面(S.T.)。 | 19-1 |
| 1695 | 659 | — | 石 | 基 | II | 地質石岸 (1.3) 基部磨耗。 | 2-2 |
| 1699 | 659 | — | 基 | 石 | C | 史山岩 1330.0 4層面(すべて同程度に磨滅)。 | |
| 1696 | 659 | — | 基 | 石 | C | 利根川河原産 890.0 3層面、図4-1面にあり。 | |

第54図 IV～V層期の土壤出土石器(2) (590・659号土器)



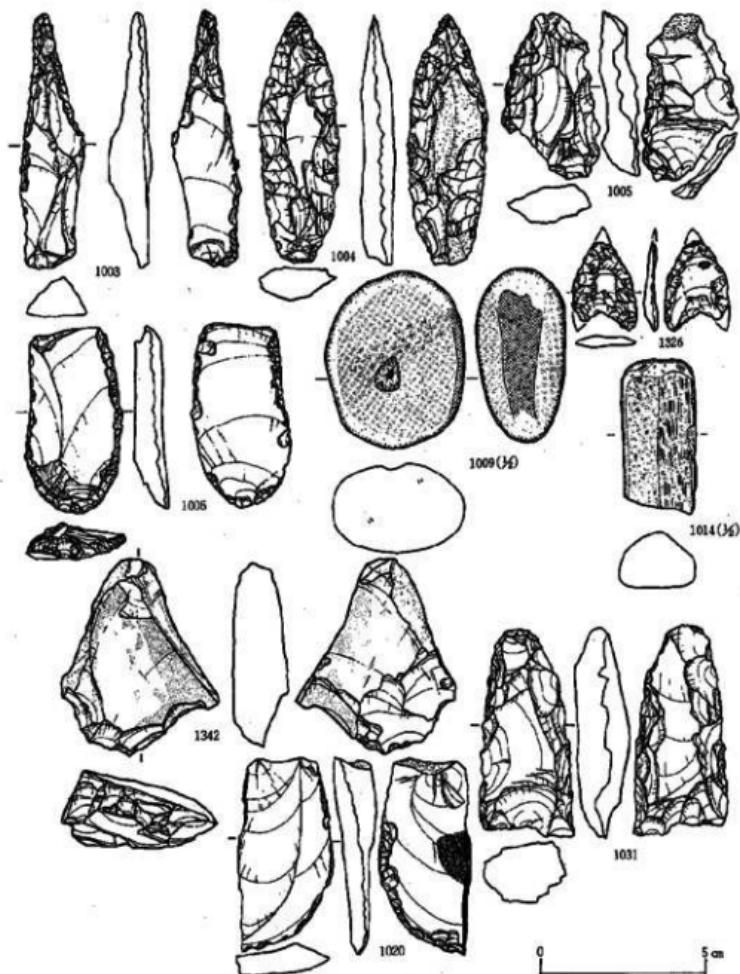
| 番号 | 遺 優 | 遺 墓 | 遺 墓 | 種 | 石 | 打 | 縦さ(ミ) | 圖 | 年 | 目 次 |
|------|-------|-----|--------|-----------------|-----------------|-------|---------------------|---------------------------|--------|-----|
| 1086 | 122 2 | 石 | 石 | 芯 | JA ₃ | 挫磨貫通 | 28.6 | 万葉の全周につぶれあり(S.T.)。 | 4 - 2 | |
| 1087 | 122 3 | 石 | 不 定 形 | 芯 | JA ₃ | 挫磨貫通 | 60.0 | 裏方と立方の万葉あり。下部にm.あり(S.T.)。 | 18 - 1 | |
| 1130 | 142 1 | 石 | 二次加工剥片 | 芯 | - | 挫磨貫通 | 8.2 | | | |
| 1407 | 378 1 | 石 | 無 | 芯 | 挫磨貫通 | 1.5 | 無部破損。 | | 1 - 2 | |
| 2056 | 841 | — | 小 斧 形 | 芯 | JA ₃ | 貫 通 | 16.9 | 万葉痕(S.T.)。 | 17 - 1 | |
| 2057 | 841 | — | 不 定 形 | 芯 | JA ₃ | 挫磨貫通 | 1.5 | 心と二次加工と新旧開削不明。 | 17 - 3 | |
| 2065 | 841 | — | 石 焼 | 芯 | 挫磨貫通 | (0.1) | 尖端部破損。Sから心部破損。 | | 2 - 3 | |
| 2062 | 841 | — | 二次加工剥片 | 芯 | 挫磨貫通 | 15.1 | ②は斜面のもの。刃部破滅(S.T.)。 | | | |
| 2063 | 841 | — | 石 焼 | 芯 | 挫磨貫通 | 54.0 | | | 12 - 2 | |
| 2064 | 841 | — | 石 焼 | 芯 | 挫磨貫通 | 0.9 | 「返り」がない。 | | 2 - 1 | |
| 2066 | 841 | — | 石 焼 | JA ₃ | 心 の う | 0.9 | | | 1 - 1 | |

第55図 VI群期の土壙出土石器(I) (122・142・378・841号土壙)



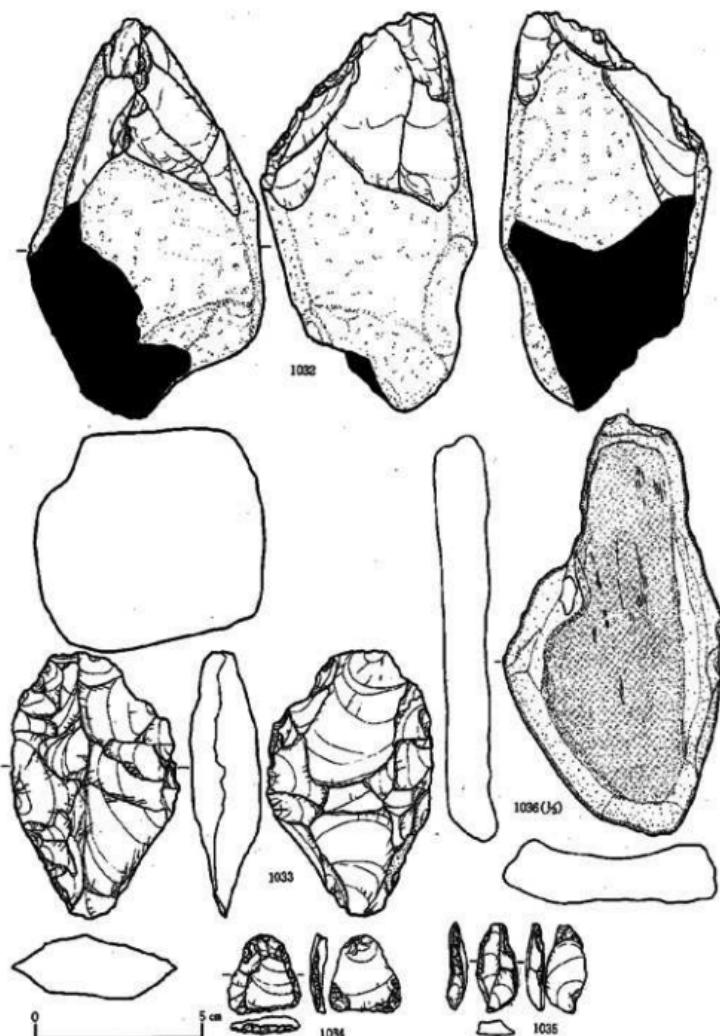
| 番号 | 遺物 | 層位 | 幅 | 根 | 石 材 | 厚さ(ミ) | 性 | 考 | 図版 |
|------|-----|----|-------|-----|------|-------|--------------|---|------|
| 2105 | 841 | — | 同施用層 | IC | 細密頁岩 | 8.6 | m.Lあり(S.T.)。 | | 9-2 |
| 1814 | 902 | I | 堅 石 | 無 | 細密頁岩 | 13.0 | 尖端部破損。 | | 3-4 |
| 1812 | 902 | I | 堅 不定形 | EF | 細密頁岩 | 9.1 | | | 14-2 |
| 1813 | 902 | I | 堅 不定形 | EC | 細密頁岩 | 12.2 | | | 14-1 |
| 1810 | 902 | I | 堅 不定形 | III | 細密頁岩 | 29.2 | | | 24-2 |

第56図 VI群期の土壌出土石器(2) (841・902号土壌)



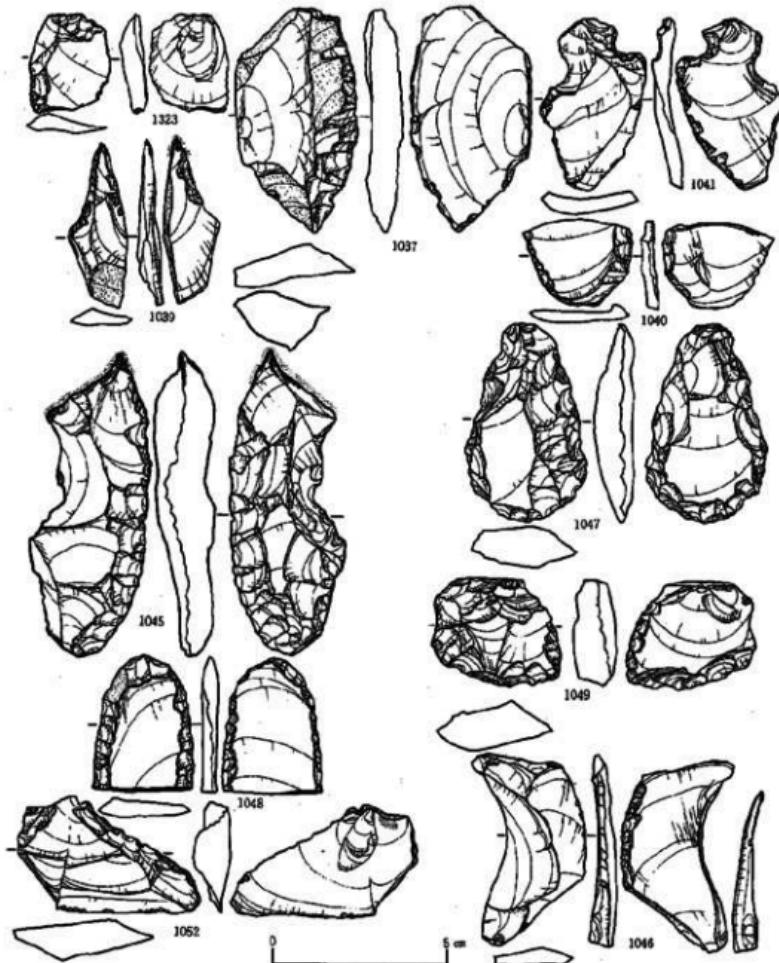
| 番号 | 遺 墓 | 層 位 | 解 釋 | 種 種 | 石 特 | 重 量 (g) | 備 考 | 回 次 |
|------|-----|-----|---------|-------------------|---------|---------|--------------------------------|------|
| 1003 | 4 | 1 | 層 不 定 形 | II B ₁ | 退化端灭者 | 10.8 | 一部頂上から剥離あり。 | 18-2 |
| 1004 | 5 | 1 | 層 不 定 形 | I | 端質具鋒 | 18.0 | | 2-3 |
| 1005 | 6 | 1 | 層 不 定 形 | I A | 端質具鋒 | 13.8 | 刃を切る二次加工あり。 | 15-2 |
| 1006 | 6 | 1 | 層 不 定 形 | II A ₁ | 端質具鋒 | 15.6 | | 15-1 |
| 1009 | 6 | — | 層 四 角 | C | 端質具鋒兼鋸齒 | 55.0 | 2脚削、1サザ削。 | |
| 1326 | 8 | 1 | 層 石 鋸 | I A ₁ | 端質具鋒 | 21.5 | 先端、新鮮剥離。使用ははじけあり[S.T.]。 | 1-1 |
| 1014 | 11 | 1 | 層 鋸 石 | B | 端質具鋒 | 16.0 | 3脚削(1脚にのみ剥離痕あり)。 | |
| 1342 | 19 | 1 | 層 不 定 形 | B ₁ | 端質具鋒 | 46.8 | 両面加工でやや磨擦化。しかし急角度。黑色有機物(S.T.)。 | 25-2 |
| 1029 | 22 | 1 | 層 二次加工片 | — | 端質具鋒 | 15.7 | 剥片剥離の石核から剥離か? 黑褐色有機物(S.T.)。 | |
| 1031 | 36 | 1 | 層 寶石形 | I | 端質具鋒 | 30.6 | | 6-2 |

第57図 拜期不明の土壤出土石器 (1) (4・5・6・8・11・19・22・35号土壤)



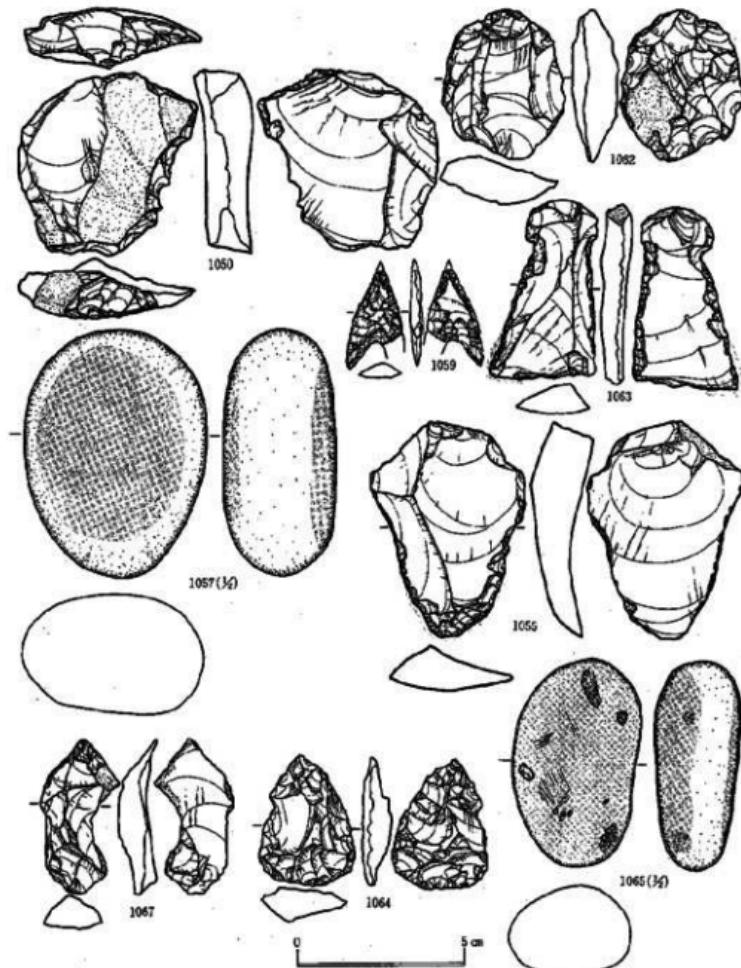
| 番号 | 遺物 | 層位 | 器種 | 石 特 | 重さ(g) | 備 考 | 区 分 |
|------|----|----|---------|------------------|-------------|--------------------------|------|
| 1032 | 36 | I | 磨 石 楔 | I | 細密工具 | 566.0 面けはびけあり(S.T.)。 | 15-1 |
| 1033 | 37 | I | 磨 石 楔 | II | 細密工具 | 51.8 不整な円盤状を呈する。 | 11-1 |
| 1034 | 38 | I | 磨 不 定 形 | IIA ₁ | 細密工具 | 2.0 ◎薄側の1刃部より台形状を呈する。 | 15-1 |
| 1035 | 39 | I | 磨 石 楔 | - | 6382000000g | 3550.0 1枚成型。 | |
| 1035 | 39 | I | 磨 不 定 形 | IIA ₂ | 細密工具 | 1.7 心端部鋸歯? | 16-1 |

第58図 群跡不明の土壌出土石器(2) (35・37・38・39号土壌)



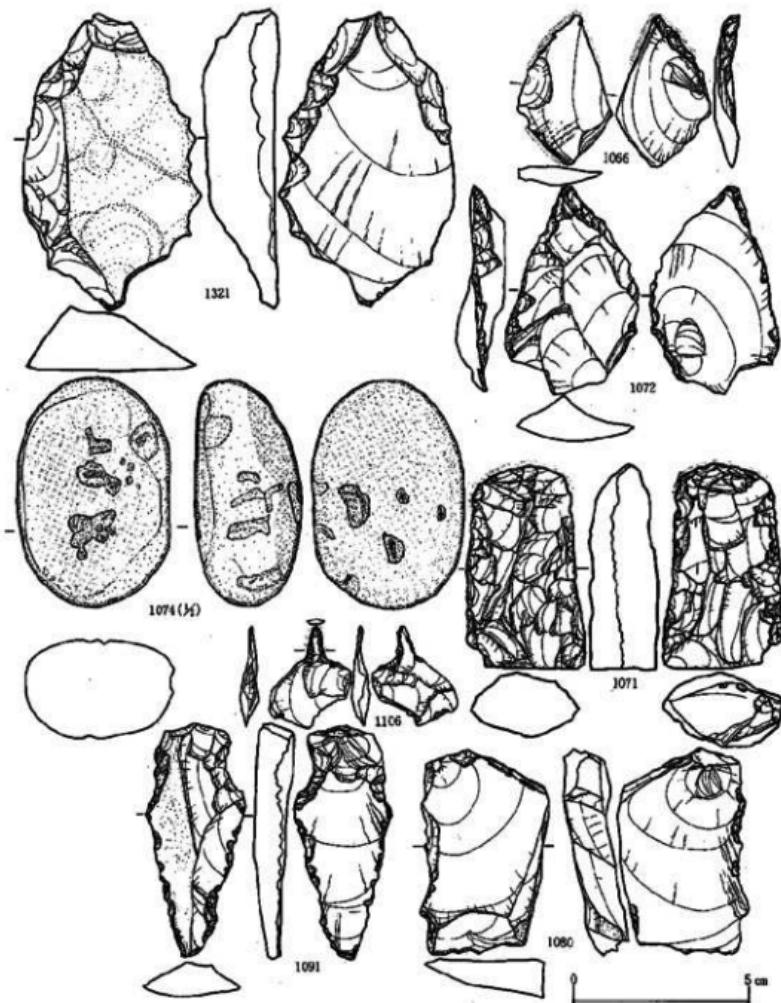
| 番号 | 遺 標 | 層 位 | 形 索 | 石 材 | 重 量 (g) | 特 記 | 図 版 |
|------|-----|-----|----------|-------------------|---------|--------------------|------|
| 1023 | 41 | 1 | 扇 一次加工片 | — | 3.2 | | |
| 1037 | 42 | 1 | 扇 不 定 形 | II A ₂ | 21.3 | (④+⑤)で凸刃を作出。尖端部あり。 | 16-1 |
| 1041 | 45 | — | 石 扇 | III | 5.3 | ④+⑤の細胞を加工。 | 5-2 |
| 1039 | 46 | — | 不 定 形 | II D ₃ | 3.7 | 尖端部削減(5.T.)。 | 30-3 |
| 1040 | 45 | — | 二次加工剥片 | — | 2.7 | ④あり。新旧混在。 | |
| 1045 | 47 | 1 | 扇 不 定 形 | III | 40.9 | ④側面の尖端部(削減あり)あり。 | 24-1 |
| 1047 | 47 | 1 | 扇 独立石核 | I | 22.7 | | 6-2 |
| 1048 | 47 | 1 | 扇 不 定 形 | III | 6.2 | | 24-3 |
| 1049 | 47 | 1 | 扇 新鋸切? | II D | 14.3 | 下端にのみあり。B.P.に切られる。 | 10-1 |
| 1046 | 47 | 1 | 扇 不 定 形 | II A ₂ | 9.0 | ②面は剝離時のもの。 | 16-1 |
| 1052 | 56 | 1 | 扇 二次加工剥片 | — | 31.2 | 付属物有り(5.T.)。 | |

第59図 駒形不明の土壤出土石器(3) (41・42・45・47・56号土壤)



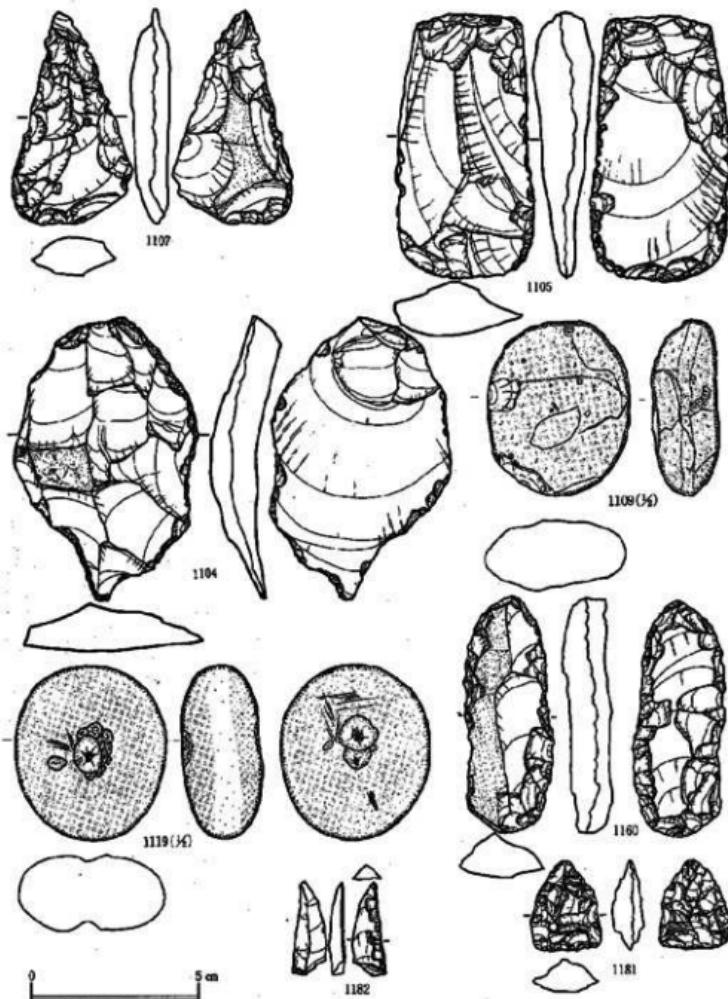
| 番号 | 遺物名 | 層位 | 器 | 種 | 西村 | 底さ(ε) | 備考 | 図版 |
|------|-----|----|---------|-----------------|--------|-------|---------------------|------|
| 1050 | 45 | 1 | 石 不定形 | 日A ₁ | 地質実習 | 41.2 | 鉄刃の内側に岩角型の跡跡、鋸歯に近い。 | |
| 1055 | 61 | 1 | 石 不定形 | 日A ₁ | 地質実習 | 28.5 | 先端の刃部を削る。 | 15-1 |
| 1057 | 67 | — | 磨 石 | C | 史前文化出土 | 149.0 | 2種類。 | |
| 1059 | 69 | — | 石 砥 | TR | 地質実習 | (1.2) | 丸錐、基盤破損。 | 1-2 |
| 1062 | 71 | 1 | 石 両面削鉈 | IA | 地質実習 | 10.6 | | 9-7 |
| 1063 | 71 | 1 | 石 砧 | 日A ₁ | 地質実習 | 14.1 | 先端研磨。 | 5-2 |
| 1064 | 72 | 1 | 石 小型火焔器 | — | 地質実習 | 7.5 | | 3-3 |
| 1065 | 75 | 1 | 石 砧 石 | C | 史山岩 | 359.0 | 2種類。 | |
| 1067 | 81 | — | 不定形 | 日B ₁ | 地質実習 | 7.5 | ◎+◎で尖端部削出。 | 16-1 |

第60図 新期不明の土壤出土石器(4) (49・61・67・71・72・75・81号土壤)



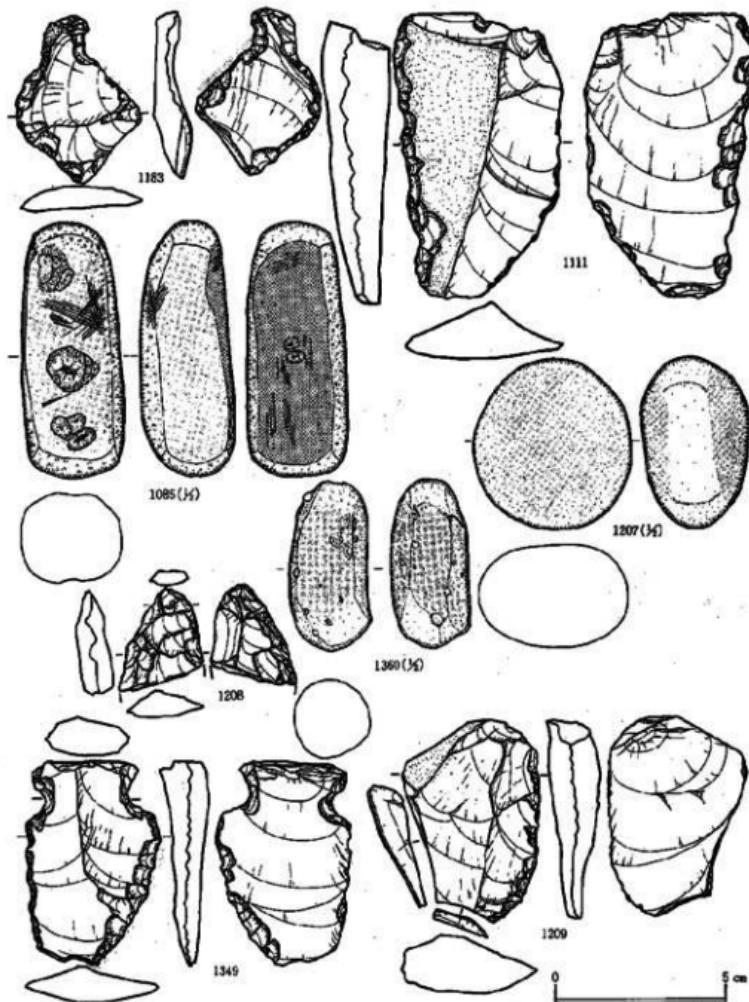
| 番号 | 遺構 | 層位 | 種類 | 石 片 | 重さ(g) | 圖 号 | 図 版 |
|------|-----|-----|-----|-----------------------|-------|-----------------------------------|------|
| 1321 | 81 | — | 不定形 | IIH 地化斜灰岩 | 14.2 | ◎で断面尖刀面作成。 | 23-2 |
| 1066 | 81 | 1 層 | 不定形 | IIH ₂ 斜葉頁岩 | 4.3 | ◎の状で火照焼。尖端斜面削(S.T.)。m.f.あり(S.T.)。 | 16-2 |
| 1072 | 97 | 1 层 | 不定形 | IIA ₂ 斜葉頁岩 | 36.0 | ◎+C端面でステイバーエッジと尖端面とを作出。 | 16-1 |
| 1074 | 97 | 1 层 | 磨光石 | C 石炭安山岩 | 940.0 | 2断面。 | — |
| 1071 | 97 | 1 层 | 泥状石 | IIA 斜葉頁岩 | 50.0 | 先端の方感せし断面(S.T.)。 | 7-1 |
| 1080 | 114 | — | 不定形 | IIC 斜葉頁岩 | 25.0 | ◎+Dのノック状凹口で実験面作成。 | 19-2 |
| 1091 | 125 | 1 层 | 石 鋸 | IA ₁ 斜葉頁岩 | 16.5 | 尖端斜面削(S.T.)。 | 4-1 |
| 1106 | 131 | 1 层 | 不定形 | IIH ₂ 斜葉頁岩 | 1.6 | のあり、尖い、尖頭的削減(S.T.)。 | 20-2 |

第61図 群期不明の土壌出土石器(5) (81・97・114・125・131号土壌)



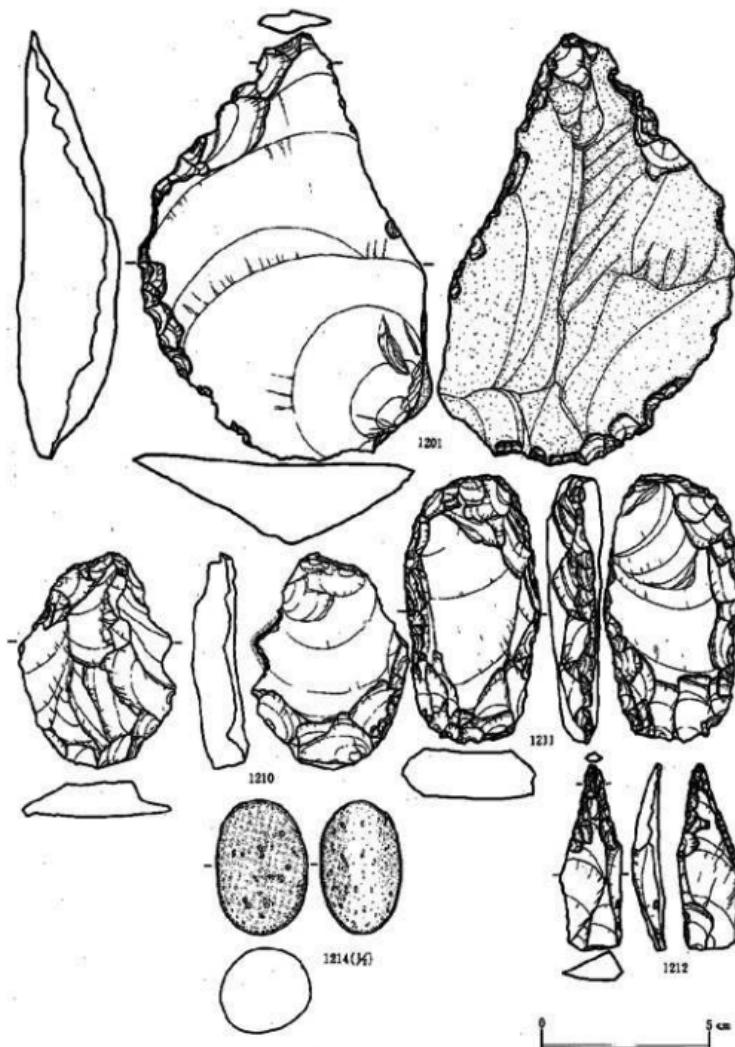
| 番号 | 造 剣 | 原 位 | 器 形 | 石 特 | 重 量 (g) | 備 | 号 | 図 番 |
|------|-----|-----|---------|------|-----------|-------------------------|---|------|
| 1107 | 131 | 1 | 扇状石器 | 理化試験 | 13.9 | 複数個の双面の側面は削出か? | | 6-3 |
| 1108 | 132 | 1 | 扇状石器 | 理化試験 | 13.4 | 二次加工のバティは全て削い(二重バティ石器)。 | | 7-2 |
| 1109 | 132 | 1 | 二次加工剝片 | 一 | 地質背景 | | | |
| 1110 | 132 | 1 | 扇 石 | A | 66mm×30mm | 全面磨削。 | | |
| 1111 | 142 | 1 | 扇 石 | A | 510.0 | 2面削。刃み厚(4mm)。 | | |
| 1112 | 149 | 1 | 扇 不 定 形 | IA | 22.6 | | | 13-2 |
| 1113 | 149 | 1 | 扇 不 定 形 | IB | 0.8 | 理化試験 | | 19-1 |
| 1114 | 149 | 1 | 扇 石 | IIA | 4.5 | 扇による②あらせ1。 | | 2-1 |

第52図 磁器不明の土壌出土石器 (6) (131・141・169・183土壌)



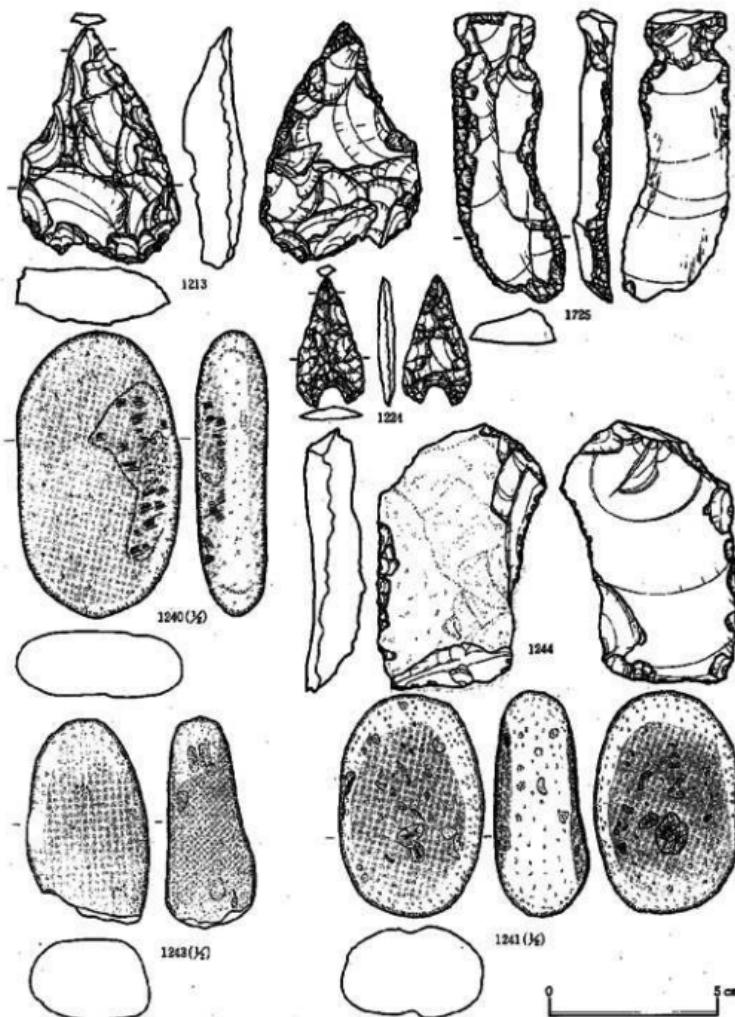
| 番号 | 通 | 種 | 原 | 名 | 厚 | 幅 | 石材 | 重さ(g) | 備 | 考 | 出 |
|------|-----|---|---|---|-----------------|---|---------|-------|---------------------------------|---|------|
| 1183 | 183 | 1 | 石 | 器 | Ⅰ | Ⅲ | 珪質頁岩 | 9.1 | ②は古1。刃状先端あり(S.T.)。 | | 5-2 |
| 1184 | 183 | 1 | 石 | 器 | — | — | 燧化灰岩 | 47.2 | | | |
| 1185 | 201 | 1 | 石 | 器 | Ⅱ | Ⅲ | 砂岩(火成岩) | 540.0 | 2面削、1サク面。暗合付器物あり。 | | |
| 1186 | 212 | 1 | 石 | 器 | Ⅱ | Ⅲ | 火山岩 | 200.0 | 2面削(擦出)。 | | |
| 1187 | 212 | 1 | 石 | 器 | Ⅰ | Ⅲ | 石炭(火成岩) | 390.0 | 2面削。 | | |
| 1188 | 213 | 1 | 石 | 器 | Ⅰ | Ⅲ | 玉 | (6) | 破壊あり。 | | 2-3 |
| 1189 | 214 | 1 | 石 | 器 | ⅡA ₂ | Ⅲ | 珪質頁岩 | 30.1 | ①の2面あり、二次加工との明白不 ^可 。 | | 17-2 |
| 1190 | 206 | 1 | 石 | 器 | Ⅰ | Ⅲ | 珪質頁岩 | 23.6 | ③-④両刃の部分に次々削痕。 | | 6-1 |

第63図 群馬不明の土壤出土石器(7) (183・201・212・213・214・208号土壤)



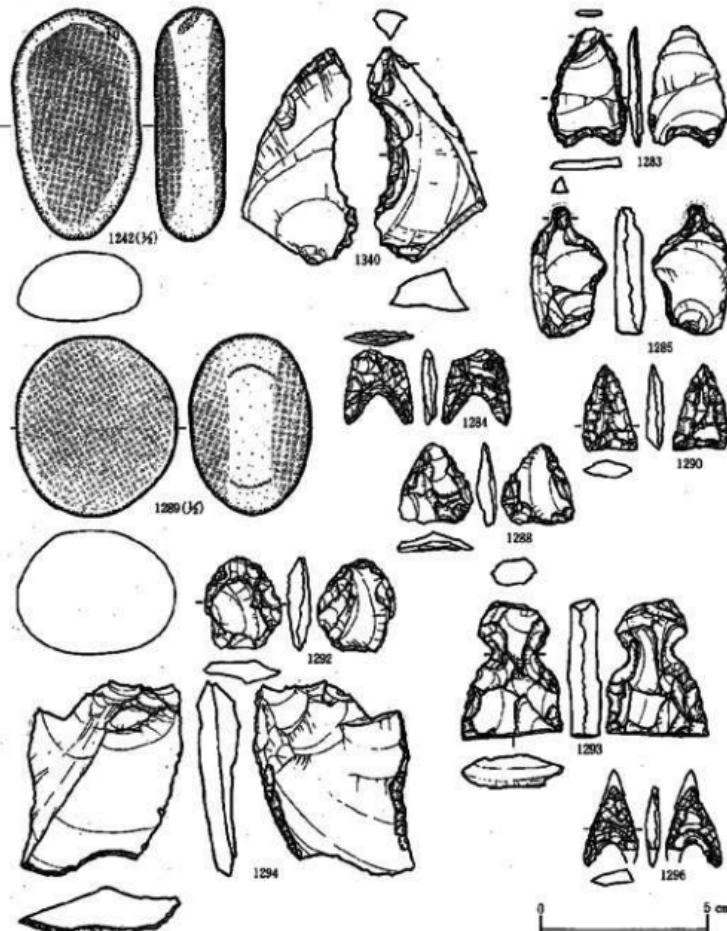
| 番号 | 通 番 | 層 位 | 器 物 | 石 材 | 重 量 (g) | 圖 号 | 圖 版 | |
|------|-----|-----|---------|-----------------|---------|-------|------------------------|-------|
| 1201 | 208 | 1 | 二面加工剥片 | — | 瓦 倍 | 229.0 | 審+印の剥離状の刃部あり。 | |
| 1210 | 215 | 1 | 不 定 形 | HC | 片側葉理 | 27.4 | 尖端部削痕(S.T.)。 | 19- 3 |
| 1211 | 215 | 1 | 圓狀石器 | 田 | 地質頁岩 | 34.3 | 周辺部のみの両面加工。背面石側近はDが多い。 | 7- 2 |
| 1214 | 216 | 1 | 圓 磨 石 | B | 花 岩 砂 | 280.0 | 2面磨(鏡面不可認)。 | |
| 1212 | 216 | 1 | 圓 不 定 形 | HD ₃ | 地質頁岩 | 5.7 | 印は古い。 | 20- 2 |

第64図 群期不明の土壤出土石器(3) (208・215・216号土壤)



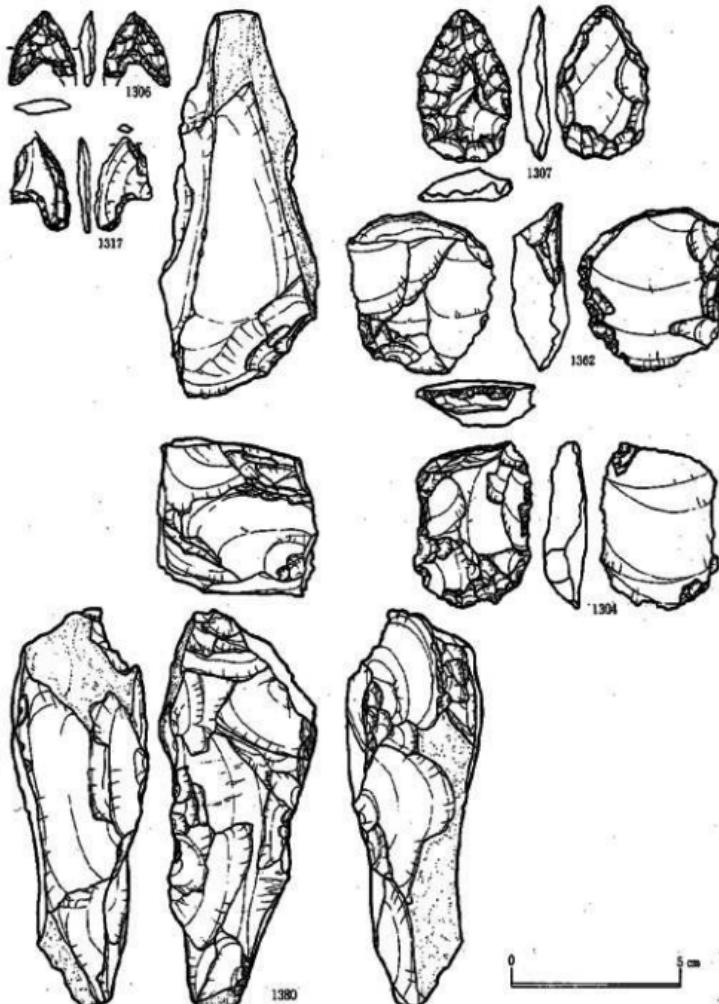
| 番号 | 遺構 | 層位 | 形 | 石 | 厚さ(ミ) | 名 | 面 |
|------|-----|------|-------|-----------------|-------|----------------------------|------|
| 1213 | 216 | 1 | 不 定 形 | 1 穴 | 36.5 | 小頭部と側面の刃部あり。 | 14-2 |
| 1725 | 225 | 4 | 石 砕 | 1A ₁ | 24.3 | 青田石の剥離面上のよびえぎに磨耗著しい(S.T.)。 | 4-2 |
| 1224 | 235 | 1 | 石 砕 | 1A ₂ | 2.7 | | 1-1 |
| 1240 | 303 | 2層上部 | 磨 石 | A 花 海 砂 | 52.0 | 2層面(斑条模ある部分はかなり磨滅)。 | |
| 1244 | 363 | 3層上部 | — | 地質頁岩 | 59.1 | みたあ2(5.7)。 | |
| 1243 | 303 | 4 | 磨 石 | B 開 闢 岩 | 662.0 | 3層面(かなり磨滅)。 | |
| 1241 | 303 | 2 | 磨 砕 | C 安 山 磁 | 763.0 | 3層面。 | |

第654図 畜期不明の土壌出土石器(9) (216・225・253・303号土壌)



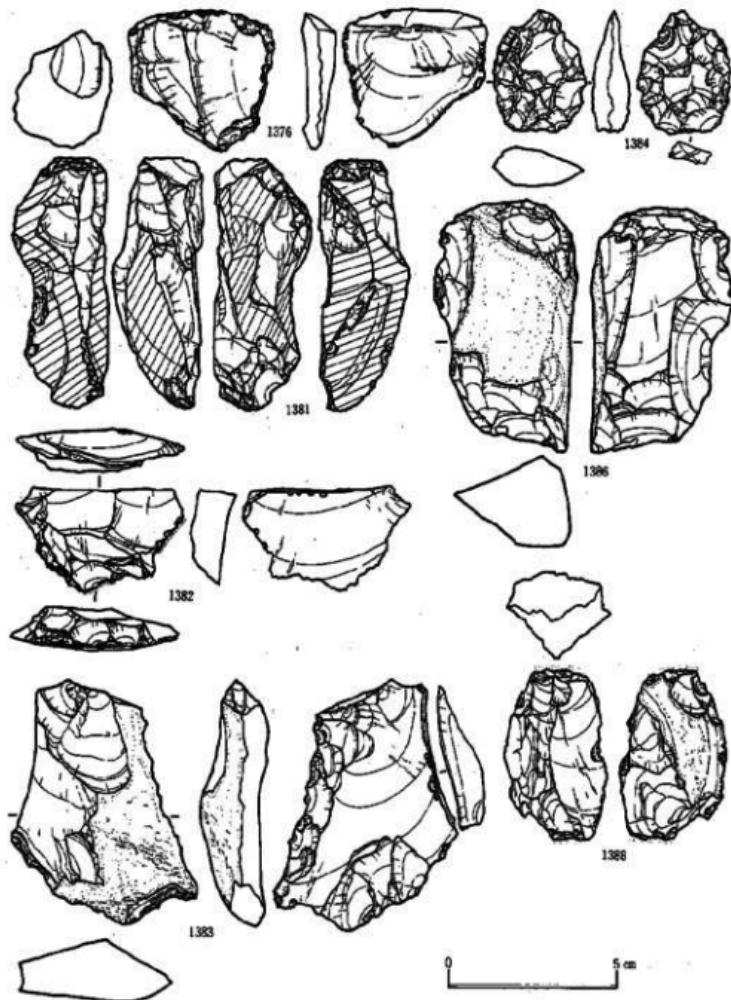
| 番号 | 遺 紹 | 質 化 | 器 形 | 石 片 | 直 周(ミ) | 解 釋 | 番 号 | 質 細 |
|------|-----|-----|---------|------|--------|-------|------------------------|----------------|
| 1242 | 303 | 4 | 磨 | 石 | 8 | 安山岩 | 580.0 | 2種既。 |
| 1240 | 309 | 1 | 磨 不 定 形 | 石 | 8 | 堆積物灰岩 | 21.0 | ④+⑤で尖頭形ノマチ出。 |
| 1283 | 313 | 4 | 磨 石 砕 | — | 18 | 堆積物灰岩 | 2.9 | ④軽磨に加え端面加工で圓形。 |
| 1285 | 313 | 4 | 磨 石 砕 | II | 玉葉地化灰岩 | 6.8 | 尖頭形ノマチ(5丁)。 | |
| 1284 | 313 | 1 | 磨 石 砕 | I PP | 堆積物灰岩 | — | 研磨はむきあり玉丁。 | |
| 1285 | 314 | — | 磨 石 砕 | II A | 堆積物灰岩 | 1.8 | 圓形ヒレット状剥離にあり。 | |
| 1289 | 315 | 1 | 磨 石 砕 | C | 安 山 岩 | 630.0 | 7種既(翻側アマリ)。 | |
| 1290 | 315 | 1 | 磨 石 砕 | 石 | 3 | 安 山 岩 | — | — |
| 1292 | 321 | — | 不 定 形 | II C | 堆積物灰岩 | 3.2 | ④で丸角出。 | |
| 1293 | 321 | — | 磨 砕 | — | 堆積物灰岩 | — | — | |
| 1294 | 321 | 2 | 磨 不 定 形 | II C | 堆積物灰岩 | 22.3 | 尖頭形 2ヶ所削離(5丁)。 | |
| 1296 | 324 | 1 | 磨 石 砕 | II B | 玉 砕 | — | 尖頭、斜面削離。尖頭は被削離。再加工ありか? | |

第56図 群期不明の土壤出土石器 (続) (303・309・313・314・315・321・324号土塁)



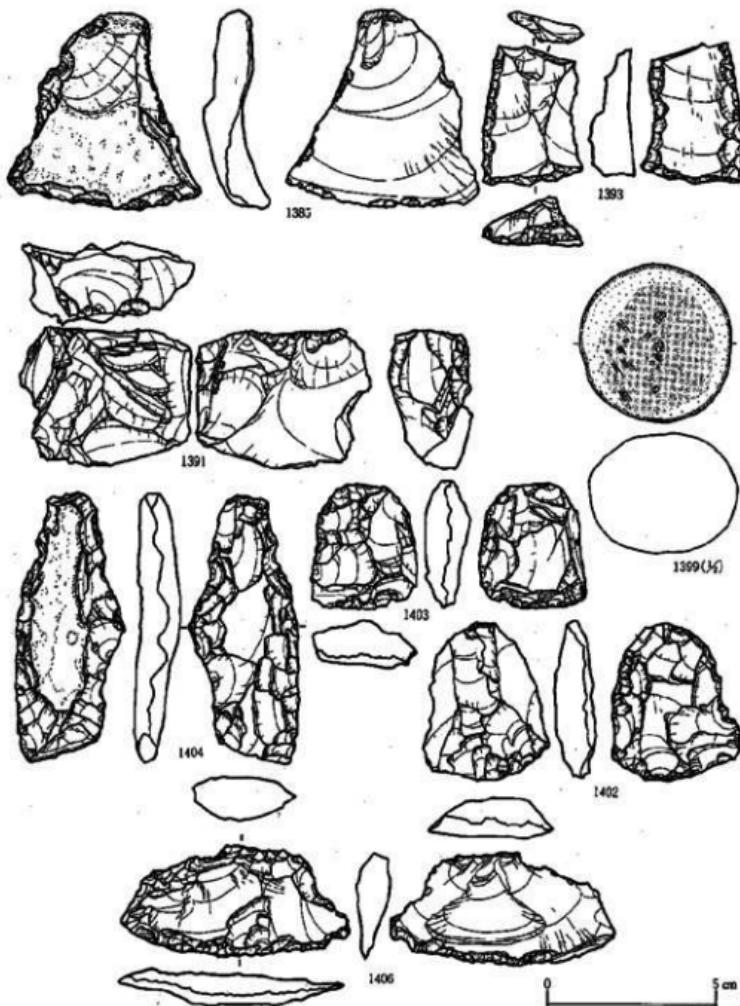
| 番号 | 遺 墓 | 層 位 | 形 種 | 石 材 | 重さ(g) | 備 考 | 圖 版 |
|------|-----|-----|-------|-----|----------|--------------------------------|------|
| 1304 | 327 | — | 不定形 | I E | 瑪雅灰岩 | 26.2 @327-④に切られる。直線状の刃削りあり。 | 14-1 |
| 1305 | 329 | I | 小尖状器 | — | 瑪雅灰岩 | 9.0 | 9-3 |
| 1306 | 329 | 1 | 石 鋸 | 1A. | 砂質灰岩 | | 1-1 |
| 1317 | 337 | — | 石 鋸 | 1A. | めいそう(玉類) | 0.08 | 3-1 |
| 1362 | 346 | 1 | 不 定 形 | I E | 瑪雅灰岩 | 28.5 素材打面上に②通路。縦曲状の刃削り3刃あり。 | 14-1 |
| 1380 | 359 | 1 | 石 鋸 | II | 瑪雅灰岩 | 182.0 | 12-1 |

第67図 群跡不明の土壙出土石器 II (327・329・337・346・359号土壙)



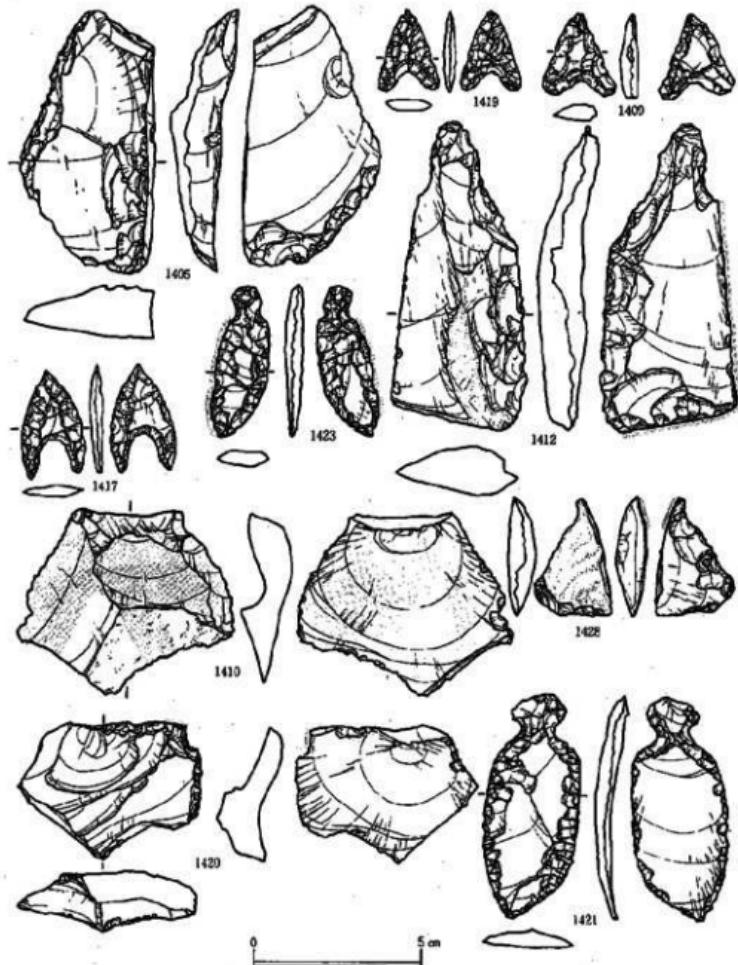
| 番号 | 直 横 | 層 深 | 形 動 | 石 材 | 重さ(㌘) | 備 考 | 圖 版 |
|------|-----|-----|----------|------|-------|------|---------------------------|
| 1376 | 260 | 1 | 削 二次加工削片 | — | 地質頁岩 | 32.7 | |
| 1381 | 350 | 1 | 削 同側面削 | IIB | 地質頁岩 | 50.0 | 2時の同側面削をもつ。石核の可塑性大。 |
| 1382 | 360 | — | 不 定 形 | IIH | 地質頁岩 | 35.7 | 片側面削の外側端部状況あり。刃Jあり(S.T.)。 |
| 1384 | 360 | 1 | 削 小型尖頭器 | — | 地質頁岩 | 10.2 | 同直削。尖頭部、基部あり。 |
| 1383 | 360 | 1 | 削 不定形 | IIH | 地質頁岩 | 52.7 | |
| 1386 | 370 | 2 | 削 石 核 | II | 地質頁岩 | 81.2 | 両手の剥片剥離石核。 |
| 1388 | 372 | 1 | 削 同側面削 | I&II | 地質頁岩 | 25.6 | E2時の剥片剥離石核。鋸・縫跡に加工あり。 |

第63図 群期不明の土壤出土石器(1) (356・361・362・371・372号土壤)



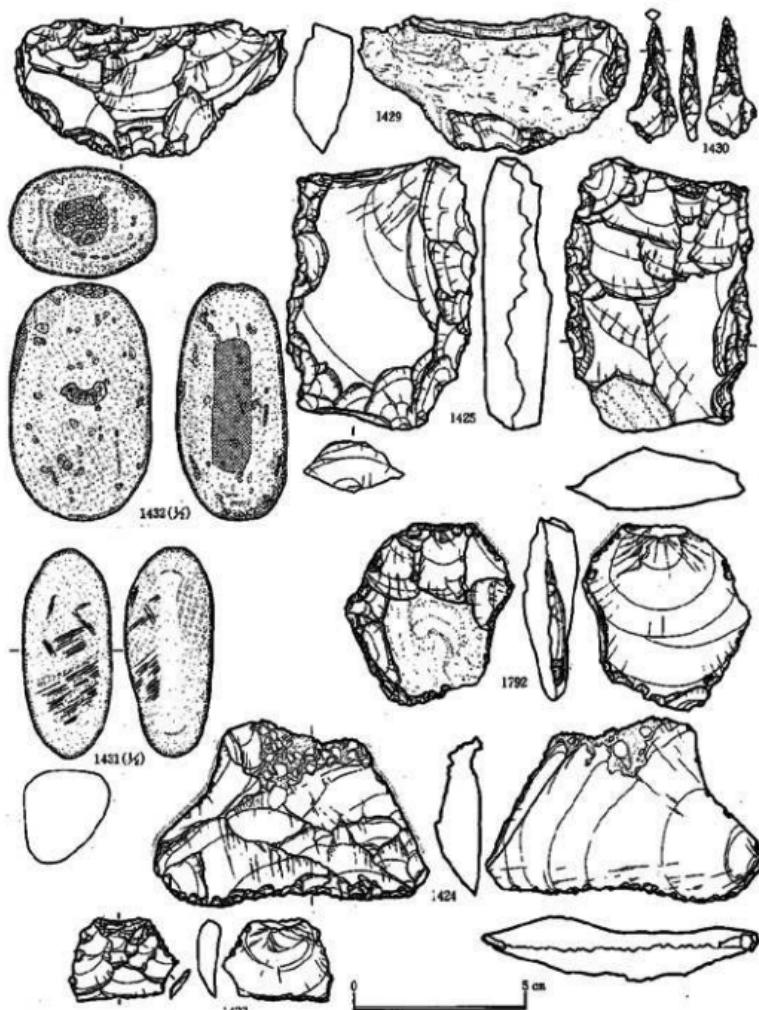
| 番号 | 遺 墓 | 層 次 | 形 細 | 石 材 | 重さ(g) | 同 号 | 定 級 | |
|------|-----|-----|--------|-----|-------|------|--------------------------|------|
| 1385 | 371 | 2 | 層 不定形 | 日人 | 珪質頁岩 | 31.1 | 色界の瓦面あら。m.f.あり(S.T.)。 | 16-2 |
| 1391 | 372 | : | 層 石核 | 日 | 珪質頁岩 | 67.0 | 5作繕ある。 | 12-2 |
| 1395 | 373 | : | 層 不定形 | 日人 | 真 石 | 14.7 | 素+◎の急角度の石核。芯は新しい。 | 15-1 |
| 1399 | 384 | : | 層 磨 石 | C | 安山岩 | 69.0 | 1磨面。 | |
| 1402 | 396 | : | 層 圆錐形塊 | 日人 | 珪質頁岩 | 16.6 | 2列の瓦面あら。 | 10-1 |
| 1404 | 397 | : | 層 石核 | N | 珪質頁岩 | 27.7 | ノット不可視。周縁刃部座状を呈する。芯は新しい。 | 5-1 |
| 1405 | 391 | : | 層 圆錐形塊 | 日 | 珪質頁岩 | 10.0 | 束付の尖端を削除し、2列の瓦面作出。 | 10-1 |
| 1406 | 394 | : | 層 不定形 | 日II | 珪質頁岩 | 18.0 | 素+◎で周縁加工の外側する扇形状の瓦面作出。 | 24-2 |

第69図 群跡不明の土壤出土石器 ① (371・372・373・384・390・391・394号土壤)



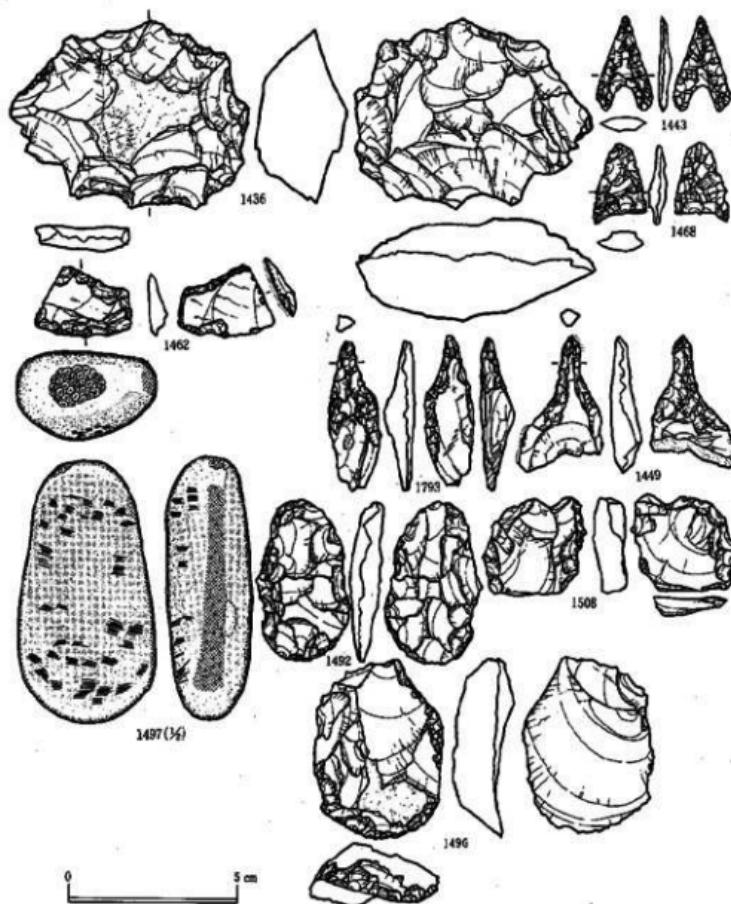
| 番号 | 遺 墓 | 層位 | 形 | 石 片 | 大きさ(ミ) | 圖 | 号 | 圖 版 |
|------|-----|----|-----------|------------------------|--------|-------------------------|--------------------------------|------|
| 1405 | 394 | 1 | 層 不定 形 | IIa ₂ 球圓片状 | 44.7 | 1 | 2 図あり。常にこれら。 | 21-2 |
| 1409 | 399 | 1 | 層 石器 ? | I B 地質片状 | 1.7 | 1.7 | 地質の右側の「造り」をつみとする石器の可能性あり。 | 1-2 |
| 1410 | 399 | 1 | 層 二次加工物 一 | 質 破片 | 37.3 | 黒色骨質物(S.T.)。構の位置に問題あるか? | | |
| 1412 | 402 | 1 | 層 不定 形 | IIF 地質片状 | 42.7 | 同前 | 工具は基盤加工で、m.lのある側面(S.T.)を剥離とする。 | 5-1 |
| 1417 | 404 | 1 | 層 石 黑 | I A ₂ 地質片状 | 1.4 | 1.4 | 打面を尖端部側に用いる。 | 1-1 |
| 1419 | 411 | 1 | 層 石 極 | I B 地質片状 | 3.9 | | | 1-2 |
| 1420 | 412 | 1 | 層 不定 形 | II D 地質片状 | 23.4 | 1 | とそのおよび1と2で2次削離作成。m.lあり(S.T.)。 | 29-1 |
| 1421 | 412 | 1 | 層 石 黑 | I A ₁ 地質片状 | 9.7 | | | 4-1 |
| 1423 | 414 | 1 | 層 石 黑 | I A ₁ 地質片状 | 3.1 | 尖端つぶれあり(S.T.)。 | 4-1 | |
| 1428 | 417 | 1 | 層 不定 形 | II D ₂ 地質片状 | 4.7 | 1 | と1で2次削離作成。m.lあり(S.T.)。 | 21-1 |

第70図 群期不明の土壤出土石器 (14 (394・399・402・404・411・412・414・417号土壤)



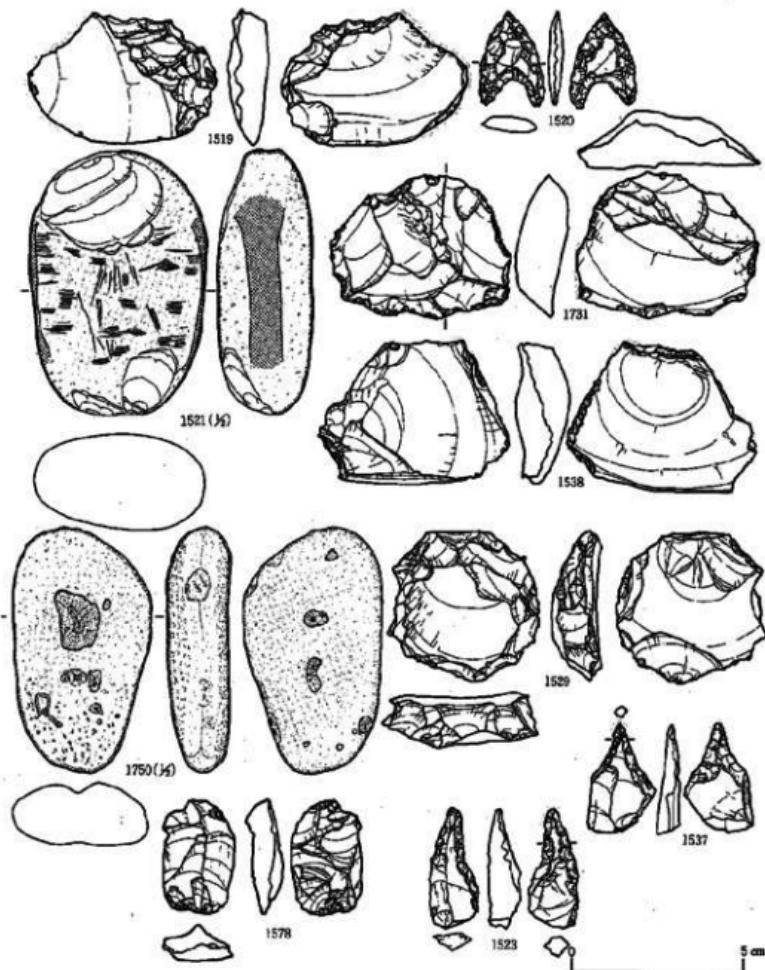
| 番号 | 遺 墓 | 層 位 | 経 地 | 石 材 | 重 量(g) | 圖 号 | 図 底 | |
|------|-----|-----|---------|-------|--------|-------|-----------------------------------|------|
| 1429 | 414 | 3 | 層 不 定 形 | B.I | 質 砂岩 | 84.8 | ◎で交互剥離状の2刀面作出。 | 25-2 |
| 1430 | 414 | 1 | 層 不 定 形 | B.I | 地質頁岩 | 59.3 | ◎で交互剥離加工。交互剥離時の刃端作出。m.f.あり(S.T.)。 | 24-2 |
| 1429 | 417 | 1 | 層 石 破? | I | 地質頁岩 | 47.6 | 剥片断片。黒色で磨耗あり(S.T.)。 | 10-2 |
| 1430 | 417 | 1 | 層 石 破 | I | 地質頁岩 | 2.0 | | 3-4 |
| 1431 | 417 | 1 | 層 石 破 | B | 安 山 灰 | 439.0 | 2刀面(鉋形不規則)。 | |
| 1432 | 419 | 1 | 層 圖形砾石 | C | 安 山 灰 | 950.0 | 2刀面。1マテラ。其他の両端に斜行底。 | |
| 1792 | 419 | 1 | 層 二次加工片 | - | 地質頁岩 | 39.7 | ◎は凸。 | |
| 1433 | 421 | 1 | 層 不 定 形 | II.D. | 地質頁岩 | 8.2 | ◎とヒビで2尖端部作出。ボイントブレイク断片。 | 30-1 |

第71図 群期不明の土壤出土石器 09 (414・417・419・421号土壤)



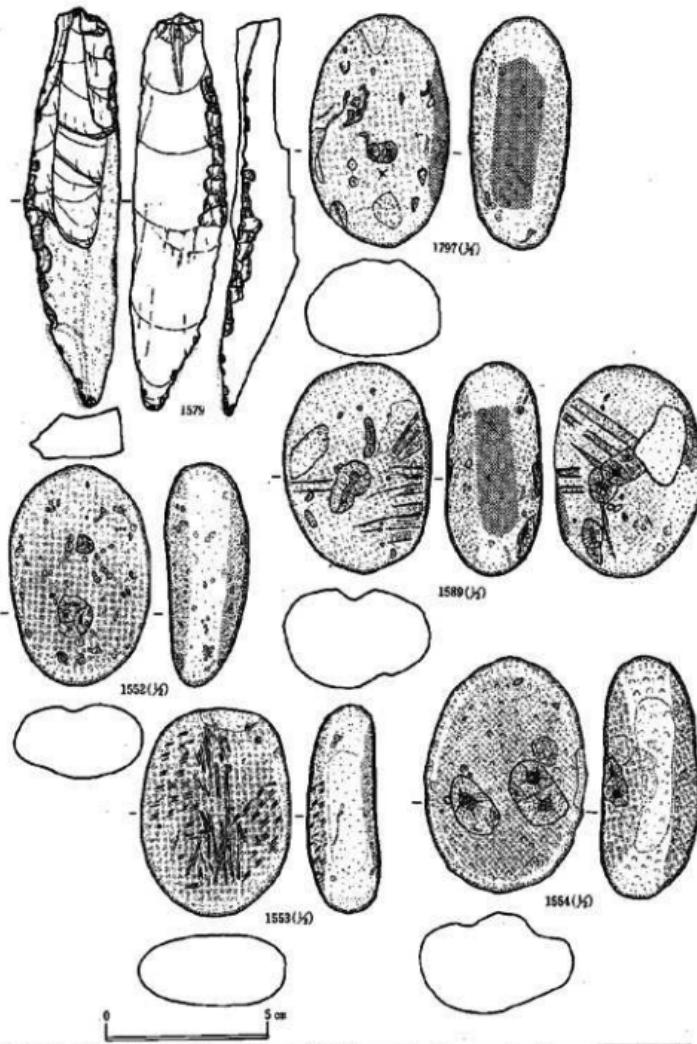
| 番号 | 遺物 | 層位 | 種類 | 石 材 | 重さ (g) | 備 考 | 圖 影 |
|------|-----|----|----------|----------------------|--------|-------------------------------|------|
| 1436 | 425 | 1 | 磨 石 扇 | 日 地質岩名 | 87.9 | 新しい剥離は背面に残り、另一なので不定形石器1発か?。 | 11-1 |
| 1443 | 426 | 1 | 磨 石 扇 | JA ₁ 地質岩名 | 1.0 | | 1-1 |
| 1449 | 446 | — | 石 鋸 | 日 地質岩名 | 5.0 | 尖端部に細かいつぶれ(S.T.)。m.Lあり(S.T.)。 | 3-4 |
| 1462 | 457 | 1 | 磨 不 定 形 | 日 地質岩名 | 3.0 | ①は破滅か?。m.Lあり(S.T.)。 | 24-2 |
| 1795 | 469 | — | 手 及 磨 | JD ₂ 地質岩名 | 4.7 | ②+③を切り落とす。 | 21-1 |
| 1488 | 490 | — | 磨 石磨き砾石? | — 地質岩名 | 1.2 | 尖端部と基部とが崩壊からの剥離で抜けている。 | 2-3 |
| 1492 | 499 | 1 | 磨 成状石器 | 日 地質岩名 | 18.0 | 先端に④で万字型凹出。 | 8-1 |
| 1496 | 501 | — | 不 定 形 | JA ₁ 地質岩名 | 27.3 | | 15-1 |
| 1497 | 501 | — | 磨 石 | C 安 L 岩 | 859.0 | 1面削、1ザザ削。長軸一部に斜打削。 | |
| 1508 | 510 | — | 不 定 形 | IE 地質岩名 | 7.6 | ④+古い。⑤+⑥で文瓦剥離状の万字形凹出。 | 14-1 |

第72図 耕期不明の土壤出土石器 06 (425・436・446・467・469・490・499・501・510号土壤)



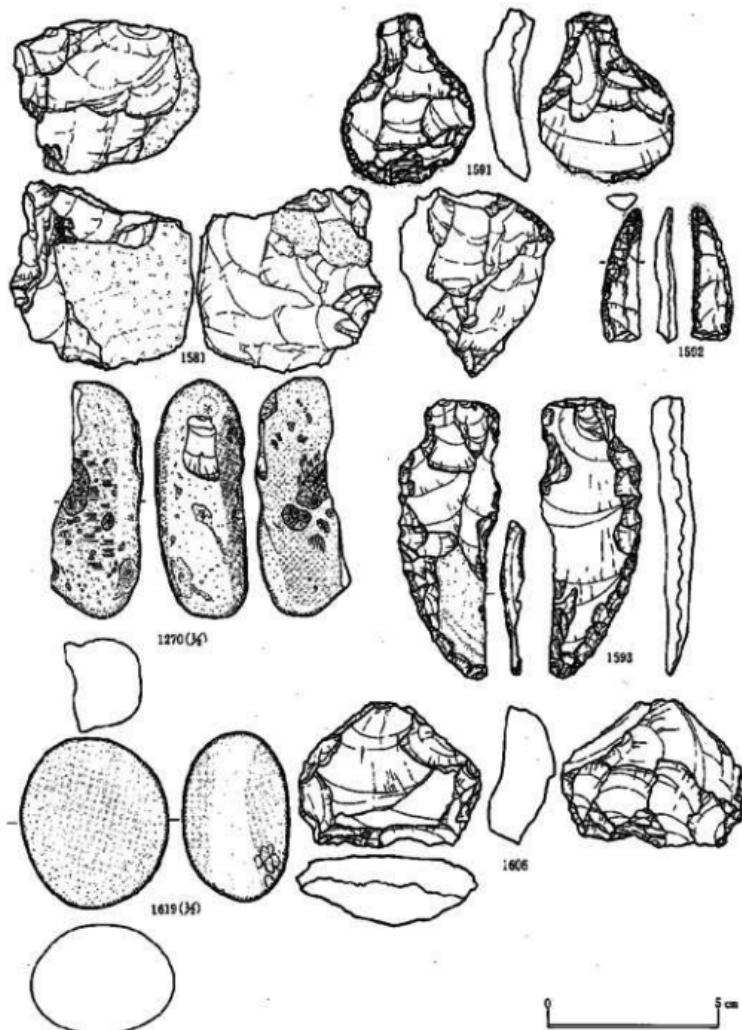
| 番号 | 土 帯 | 層 位 | 器 物 | 石 片 | 直さ(6) | 圖 号 | 圖 版 |
|-----|-----|---------|------|------|--------|--------------------------|------|
| 515 | I | 層 不 定 層 | II F | 神奈貝器 | 27.8 | ④+⑤で面削出。末端にm.f.あり(S.T.)。 | 22-2 |
| 515 | I | 層 不 定 層 | II F | 珠貫貝器 | 29.5 | ④+⑤で面削出。m.f.あり(S.T.)。 | 22-2 |
| 516 | — | 石 層 | IA | 貝 器 | 1.8 | | 1-1 |
| 521 | 517 | 層 石 肩 | C | 砂質泥岩 | 1400.0 | 2面凹、2ザラ面。最初凹面に削離底。 | 3-4 |
| 523 | 519 | 層 石 肩 | II | 砂質泥岩 | 2.5 | 腹面に凹あり。古い。尖頭部削離(S.T.)。 | 14-1 |
| 529 | 521 | 層 不 定 層 | IC | 透質貝器 | 32.5 | 透光度の弱い、他の剥離で空洞を円形に整形。 | 19-2 |
| 538 | I | 層 不 定 層 | II C | 珠貫貝器 | 27.8 | ④で尖頭部削出。 | 21-1 |
| 537 | I | 層 不 定 層 | IID | 珠化泥岩 | 3.0 | 両側面に凹あり。尖頭部削離(S.T.)。 | 21-1 |
| 539 | I | 層 粗 石 | A | 砂質泥岩 | 350.0 | 2面凹、先端による変色あり。 | 9-2 |
| 548 | — | 層 粗 石 | IA | 珠貫貝器 | 4.0 | | |

第73図 群馬不明の土壤出土石器(7) (515・516・517・519・521・525・529・548号土壤)



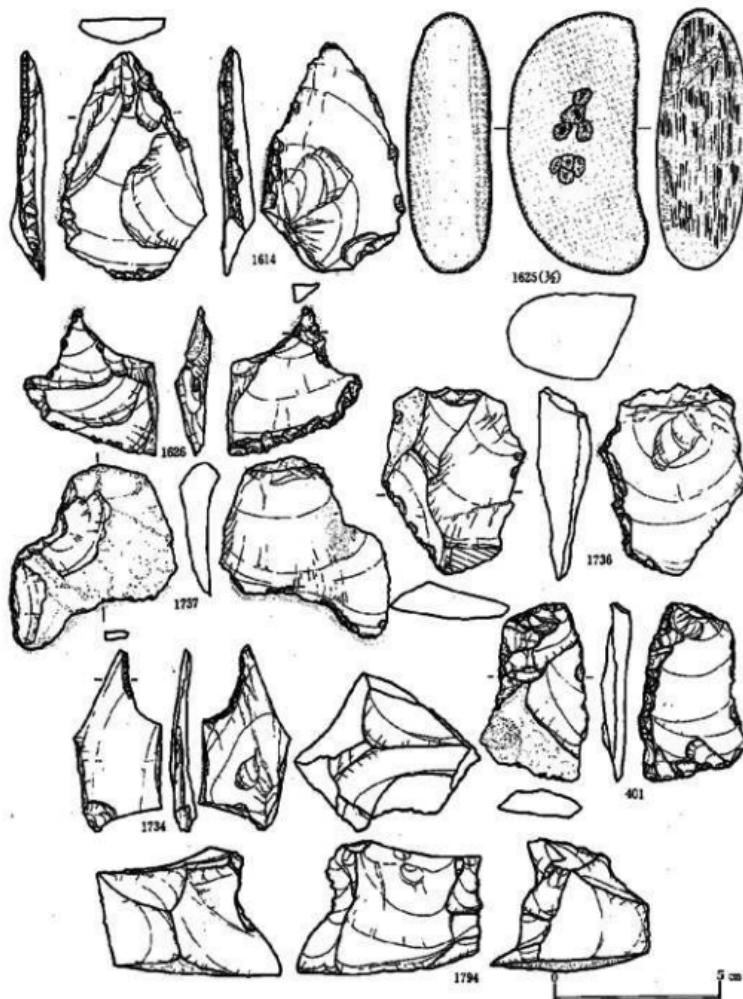
| 番号 | 重 量 | 直 径 | 厚 度 | 石 片 | 重 量 (g) | 圖 号 | 解 釋 |
|------|-----|-----|-------|------|---------|------------|-----------------------|
| 1579 | 548 | — | 二次加工片 | 塊状貝殻 | 48.6 | 先端に孔があり底下。 | |
| 1597 | 549 | 7 | 骨 骸 骸 | C | 安山 灰 | 990.0 | 2面削、1ダラ形。 |
| 1592 | 549 | 7 | 骨 骸 骸 | A | 石灰岩 | 870.0 | 2面削、底に凹みで底下。 |
| 1553 | 549 | 3 | 骨 骸 骸 | A | 安山 灰 | 630.0 | 2面削(1面に斜面削と底面削とあり)。 |
| 1564 | 549 | 3 | 骨 骸 骸 | C | GRES | 770.0 | 2面削、底に1面のみで底下(5~9mm)。 |
| 1560 | 566 | — | 骨 骸 骸 | C | GRES | 830.0 | 2面削、1ダラ形。剥げている。 |
| 1561 | — | — | — | — | — | — | — |
| 1562 | — | — | — | — | — | — | — |

第74図 群体不明の土壤出土石器 06 (548・549・550号土壤)



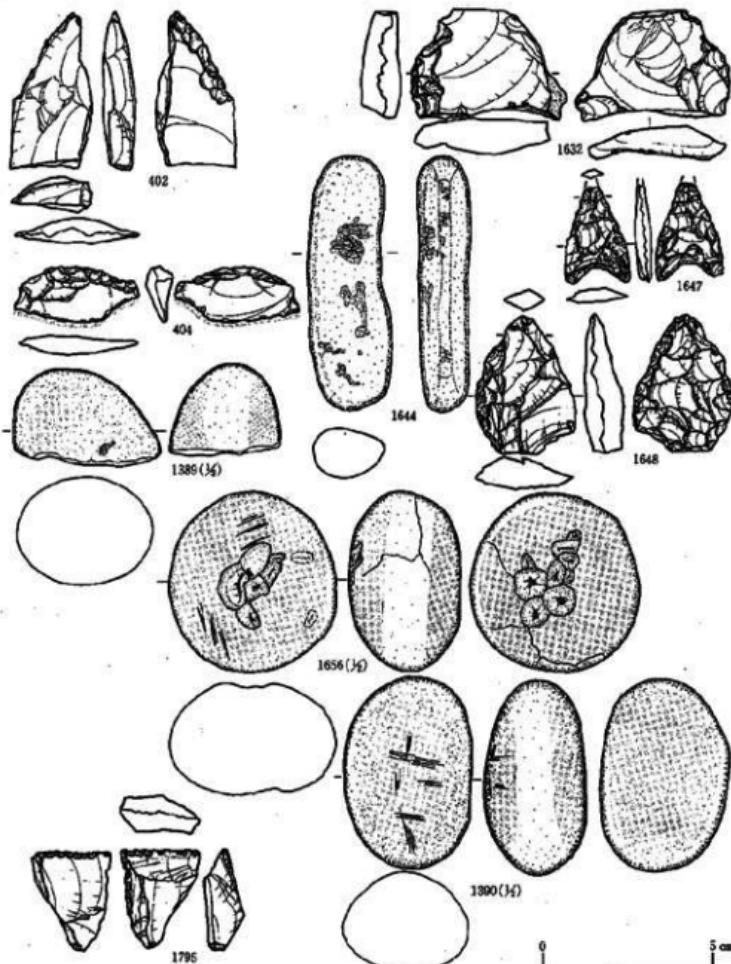
| 番号 | 地図 | 層位 | 基 | 種 | 石 | 材 | 重合(E) | 基 | 号 | 地 |
|------|-----|----|---|----|----|----------------|----------------|------------------------|------|---|
| 1551 | — | 石 | 灰 | II | 破質 | 夷地 | 116.3 | 2作成。 | 31—2 | |
| 1560 | 8 | 層 | 野 | 石 | 石 | 夷山器 | (433) | 2層面?。鉋頭あり。 | | |
| 1561 | 5 | 層 | 石 | 北 | II | B ₂ | 15.3 | 刃部磨滅(5.T.)。 | 5—2 | |
| 1562 | 570 | 1 | 層 | 野 | C | 安 | 山器 | 66.3 | 2層。 | |
| 1563 | 573 | 1 | 層 | 不 | 沙 | II | 1.7 | 火燒面磨滅(5.T.)。 | 19—1 | |
| 1563 | 573 | 1 | 層 | 石 | 北 | I | A ₁ | 破質夷地 | 4—1 | |
| 1606 | 380 | 1 | 層 | 不 | 沙 | II | 41.7 | 膠半剖片を有し、B、Cで空豆形磨滅の刀柄付。 | 25—2 | |

第75図 群馬不明の土壤出土石器 (1) (551・560・569・570・580号土壤)



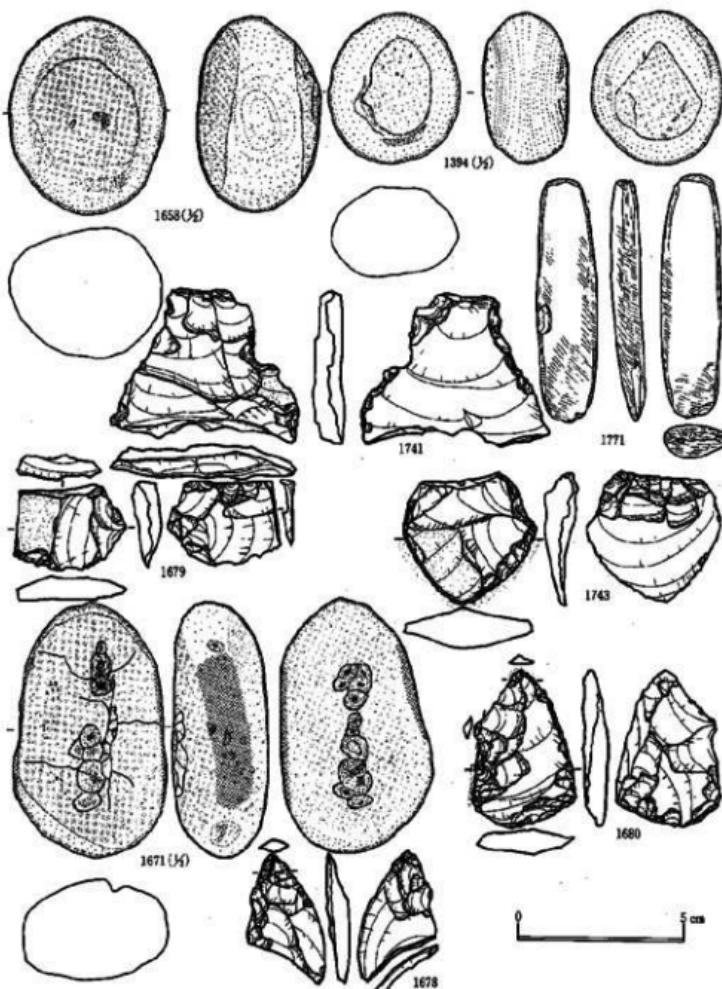
| 番号 | 通 番 | 層 位 | 形 性 | 石 材 | 厚さ(ミ) | 直 命 | 記 号 | 頁 版 |
|------|-----|-----|---------|-----------------|-------|------|---|------|
| 1614 | 587 | — | 尖頭器 | 日 | 珪質頁岩 | 25.8 | 先端のひだで尖頭部作成。重い磨滅あり(S.T.)。 | 2-3 |
| 1625 | 596 | 1 | 磨 毛 四 角 | — | 玄 山 磐 | 78.0 | 絞削器を磨滅として使用してい。 | |
| 1626 | 597 | 1 | 層 不 定 形 | BD ₁ | 珪質頁岩 | 9.8 | ④付近。凸出部磨滅(S.T.)。 | 21-1 |
| 1737 | 598 | 1 | 層 不 定 形 | BG | 珪質頁岩 | 16.8 | ④ ₂ 付近。外側刃作成。m.f.あり(S.T.)。黑色打削面(S.T.)。 | 23-1 |
| 1738 | 599 | 1 | 層 不 定 形 | BC | 珪質頁岩 | 25.2 | 底部のノックで尖頭部作成。凸出部磨滅(S.T.)。 | 19-2 |
| 1739 | 600 | 1 | 層 不 定 形 | BD ₁ | 頁 石 | 6.2 | ④ ₃ 付近により尖頭部作成。 | 21-1 |
| 1740 | 600 | 1 | 層 石 旗 | I | 頁 石 | 79.0 | 筆を充削で分離した可能性あり。 | |
| 401 | 606 | 2 | 層 不 定 形 | BA ₁ | 珪質頁岩 | 12.9 | | 16-1 |

第76図 群期不明の土壤出土石器 29 (587・596・598・606号土壤)



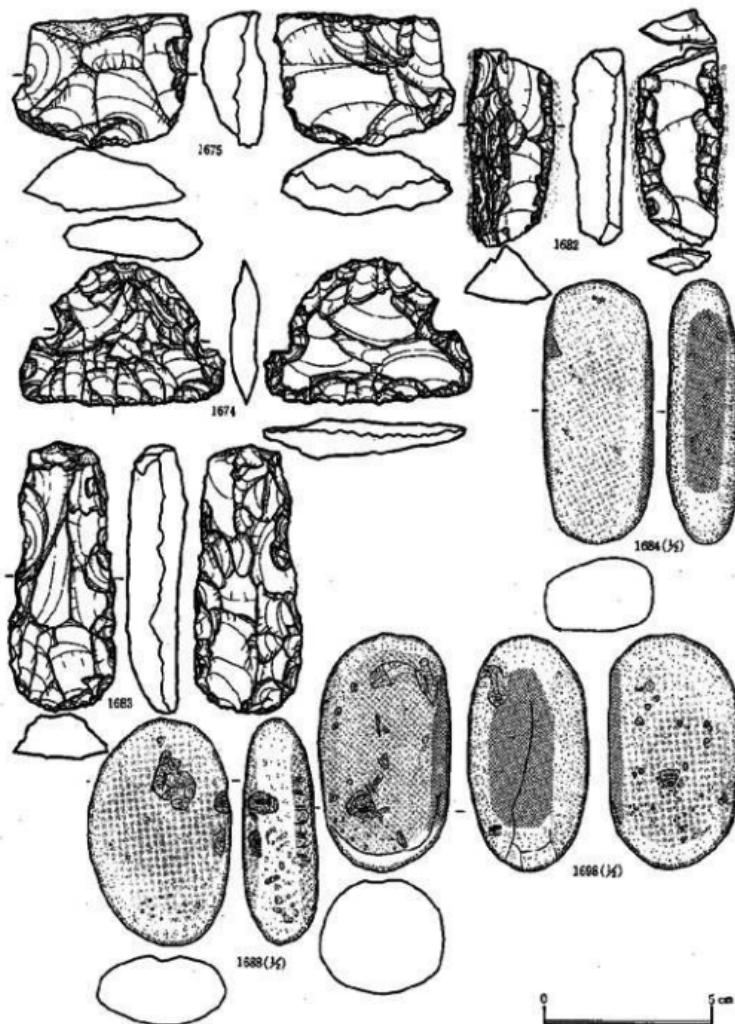
| 番号 | 基盤 | 層位 | 種類 | 石 片 | 量(%) | 特徴 | 考 | 面積 |
|------|-----|----|---------|-----------------------|-------|----------------------------------|---|------|
| 402 | 605 | 2 | 層 不定 | UD ₃ 他化成灰岩 | 8.6 | ④カニ巻と⑤角形剥離面。 | | 26-2 |
| 1652 | 600 | 1 | 層 二次加工片 | 重複頁理 | 37.7 | | | |
| 404 | 611 | 2 | 層 不定 前 | UF 重複頁理 | 3.6 | ④+△で打痕部多く、m ² あり(生工)。 | | 23-1 |
| 1644 | 614 | 1 | 層 破砕 石 | B 变 安山 石 | 350.0 | 横長・薄片・薄く削れるなど部位によって無強化あり。 | | |
| 1645 | 615 | 1 | 層 小型剥離片 | - めのう(玉形) | 30.5 | | | |
| 1647 | 615 | 1 | 層 破砕 石 | IB 重複頁理 | 1.7 | 火成岩風貌。 | | 1-2 |
| 1656 | 621 | 1 | 層 第四 石 | C 变 安山 石 | 760.0 | 2 斜面(かなり傾斜)。凹みの内部まで剥離。 | | |
| 1658 | 623 | 1 | 層 前 石 | C 石膏高嶺岩層 | (270) | 破壊あり。 | | |
| 1690 | 623 | 1 | 層 前 石 | C 石灰岩風貌層 | 580.0 | 2 斜面。 | | |
| 1795 | 626 | 1 | 層 不 定 | E ₁ 重複頁理 | 5.4 | ④+⑤と△と○三角形に剥離。 | | 23-2 |

図77 国 郡期不明の土壤出土石器 (7) (606・600・611・614・618・621・623・625・626号土壤)



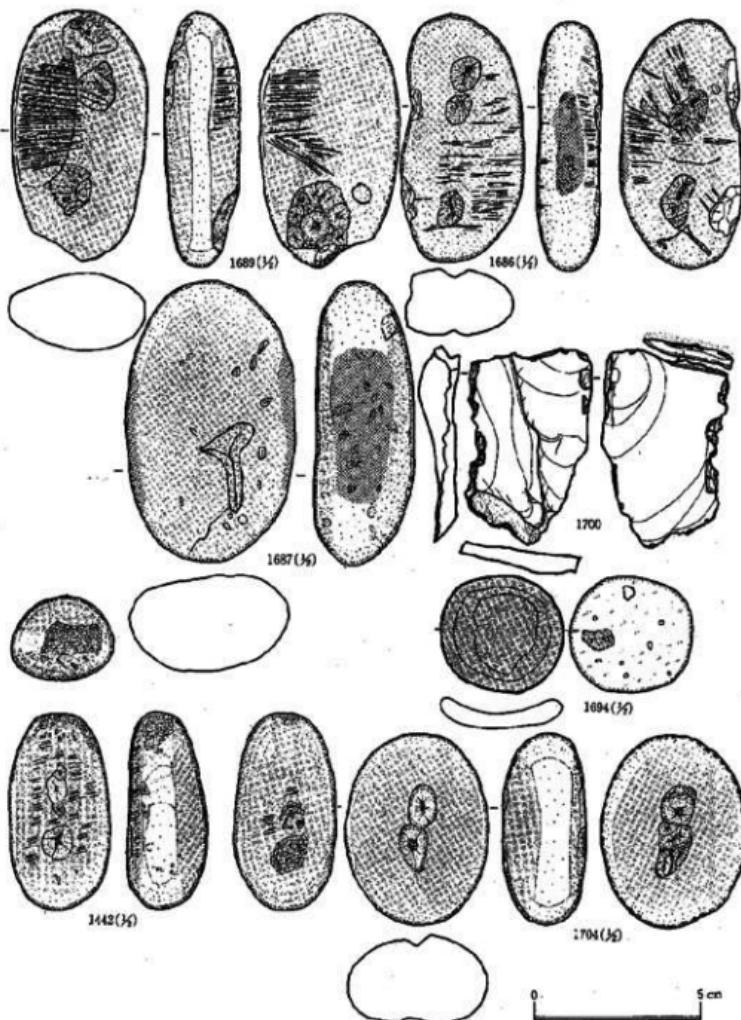
| 番号 | 遺物 | 部 位 | 形 異 | 石 片 | 重 量 (g) | 備 考 | 層 |
|------|-----|-----|-------|------------|---------|--------------------------|------|
| 1658 | 626 | 1 層 | 磨 石 | C 花崗岩 | 1000.0 | 2面研 (両面不均)。 | |
| 1394 | 636 | 1 層 | 磨 石 | C 磁器片研磨 | 472.0 | 2面研 (両面不均)。 | |
| 1771 | 656 | 1 層 | 不 定 形 | I.G. 地質変貌 | 37.6 | 斜片の剥離が折れ、○の状態な斜面あり。 | 14—2 |
| 1671 | 636 | 1 層 | 磨 磨石 | II 泥炭灰岩 | 15.7 | | 9—1 |
| 1743 | 636 | 1 層 | 不 定 形 | II Aa 地質変貌 | 36.9 | 方柱磨成(S.T.)。 | 14—2 |
| 1671 | 643 | — | 磨 砂 岩 | C 女山岩 | 79.0 | 2面研。2次ツマミ。擦りていぐ。 | |
| 1679 | 647 | 1 層 | 不 定 形 | II Bc 地質変貌 | 6.2 | ◎を打削とする斜面あり。下縁は◎で斜面状の刃部。 | 21—2 |
| 1678 | 647 | 1 層 | 不 定 形 | II Bc 地質変貌 | 4.9 | ◎の断面が明。 | 18—2 |
| 1699 | 641 | 1 層 | 不 定 形 | II C 地質変貌 | 8.7 | ◎+○で2尖端部作成。尖端部磨滅(S.T.)。 | 19—2 |

第78図 明期不明の土壤出土石器 ② (626・636・643・647号土壤)



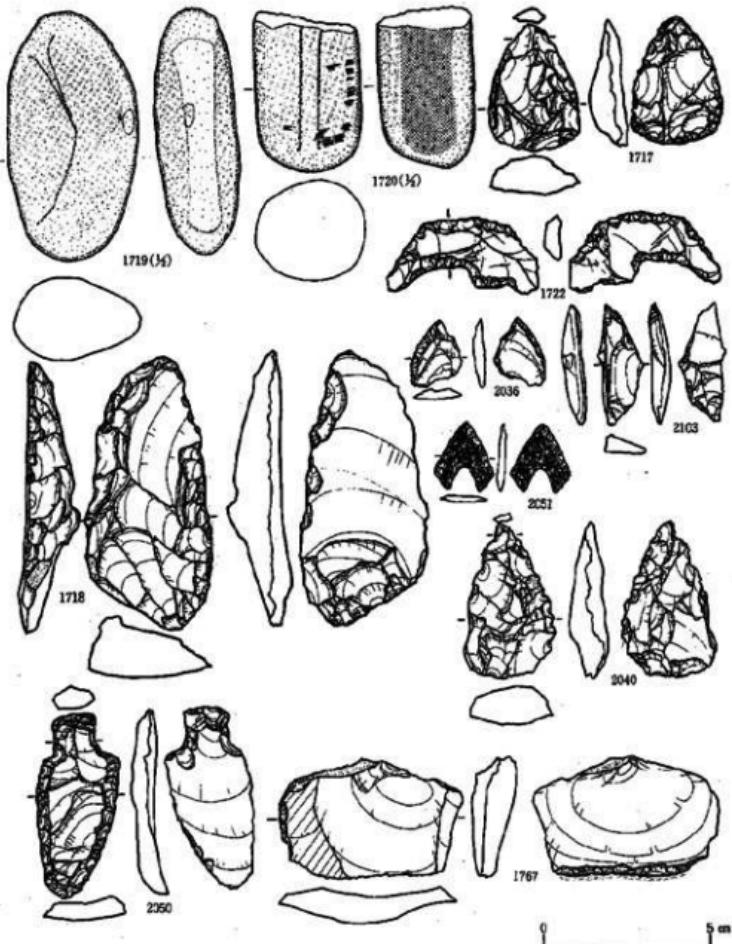
| 番号 | 通 番 | 層 号 | 形 異 | 石 物 | 底 0 (cm) | 面 | 寸 | 圖 畜 |
|------|-----|-----|---------|------------|----------|-----------------------|---|------|
| 1675 | 647 | I | 層 不 定 形 | IIJ 建賞質岩 | 36.3 | 素材本体のみを打立としての斜面あり。 | | 25-2 |
| 1674 | 647 | I | 層 石 斧 | IIA 建賞質灰岩 | 19.6 | Wノックと◎の造成した両面加工の刀形あり。 | | 3-2 |
| 1682 | 648 | I | 層 不 定 形 | 1D 建賞質岩 | 23.6 | 背面左側部に著しい。万削光沢(底下)。 | | 14-1 |
| 1683 | 648 | I | 層 青状石 | I 建賞質岩 | 45.7 | | | 6-2 |
| 1684 | 648 | — | 層 石 | B 石英岩(酸性岩) | 530.0 | 2面削、2ダラ形。 | | |
| 1685 | 650 | — | 層 硅石 | C 石英岩(酸性岩) | 1640.0 | 3面削、1ダラ形。 | | |
| 1686 | 652 | I | 層 藍 石 | A 石英岩(酸性岩) | 880.0 | 2面削。 | | |

第79図 群期不明の土壌出土石器 (2) (647・648・650・652号土壌)



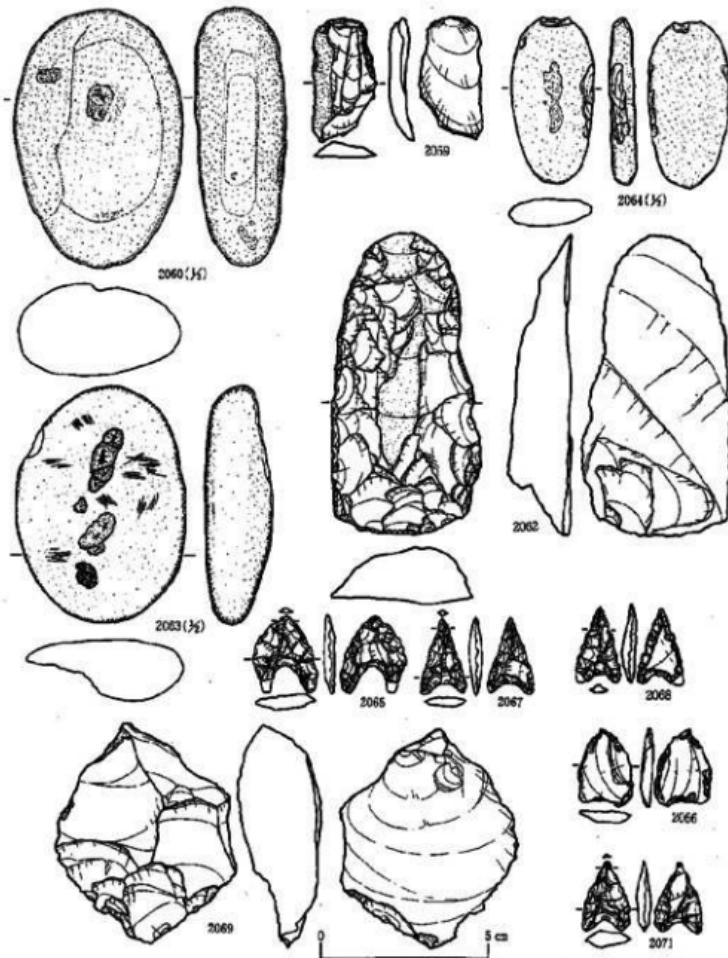
| 番号 | 地 | 名 | 層 | 付 | 形 | 状 | 石 | 材 | 量 | (g) | 備 | 考 | 記 |
|------|-----|---|---|-------|---|-------|--------|--------------------------|---|-----|----|---|---|
| 1686 | 652 | 1 | 層 | 鳥居石 | A | 円錐形石器 | 620.3 | 2面削(光沢ある部分と無い部分ある部分あり)。 | | | | | |
| 1686 | 652 | 1 | 層 | 鳥居石 | B | 円錐形石器 | 490.0 | 2面削、1ダツ凹。斜削痕あり。 | | | | | |
| 1687 | 652 | — | 層 | 石 | C | 穿孔石器 | 1680.3 | 2面削、1ダツ凹。 | | | | | |
| 1694 | 653 | — | 層 | 島状石器 | — | 円錐形石器 | 82.8 | 四面削に暗褐色色調が厚く付着。 | | | 26 | | |
| 1442 | 652 | 1 | 層 | 圓錐形石 | B | 穿孔石器 | 420.3 | 3面削、表面一端と1面に敲打痕。 | | | | | |
| 1700 | 653 | — | 層 | 二次加工片 | — | 地質頁岩 | 36.1 | | | | | | |
| 1704 | 673 | — | 層 | 鳥居石 | C | 穿孔石器 | 610.3 | 2面削(かなり磨耗)、刃部鋸い(3~5 mm)。 | | | | | |

第80図 群馬不明の土壌出土石器 06 (652・658・665・668・673号土壌)



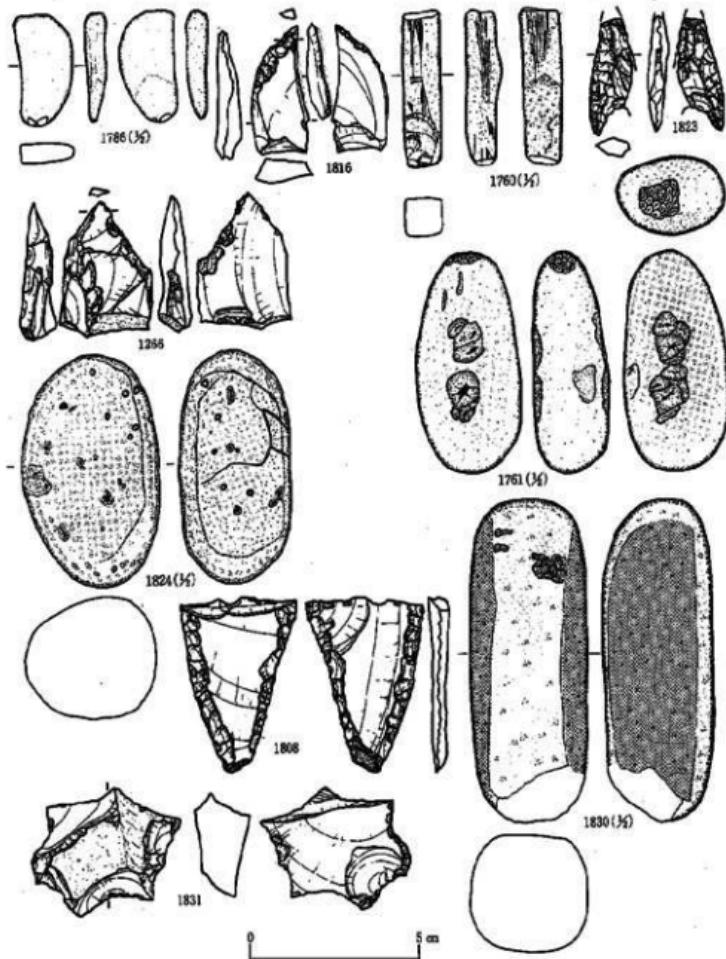
| 番号 | 遺構 | 層位 | 形 | 器 | 石材 | 重さ(g) | 圖 | 圖版 |
|------|-----|----|-------|-----------|----------|-------------|------------------------|------|
| 1719 | 696 | 2層 | 磨 | 石 | A 安山岩 | 650.0 | 2層面(側面・底面あり)。 | |
| | 696 | — | 磨 | 石 | B 雪花安山岩 | (448) | 1層面。1マクラ。 | |
| 1721 | 696 | 2層 | 小型尖状器 | | 地質頁岩 | 5.5 | | 3-2 |
| 1718 | 696 | 2層 | 不定形 | HAg | 地質頁岩 | 41.3 | 万葉集歌題(5.7)。 | 14-2 |
| 1722 | 697 | 3層 | 不定形 | HG | 地質頁岩 | 5.4 | | 23-1 |
| 2036 | 814 | 1層 | 不定形 | IIH | 地質頁岩 | 0.8 | 石器火候品か?。 | 1-1 |
| 2103 | 824 | — | 不定形 | IID | 地質頁岩 | 1.8 | 2層(?)とにより火候辨別。 | 20-1 |
| 2040 | 826 | 1層 | 小型尖状器 | — | 地質頁岩 | 11.1 | | 3-3 |
| 2051 | 846 | — | 石 | 器 | 地質頁岩 | 4.0 | 周張磨耗石器。 | 2-1 |
| 2052 | 846 | — | 石 | 器 | IAg 地質頁岩 | 9.4 | (B,C)刃部のスクレーパー・エッジをもつ。 | 4-2 |
| 1767 | 845 | — | 不定形 | IIAg 地質頁岩 | 15.7 | 刃部磨耗(T.T.)。 | | 14-2 |

第81図 群馬不明の土壤出土石器 (696・697・814・824・828・840・843号土壤)



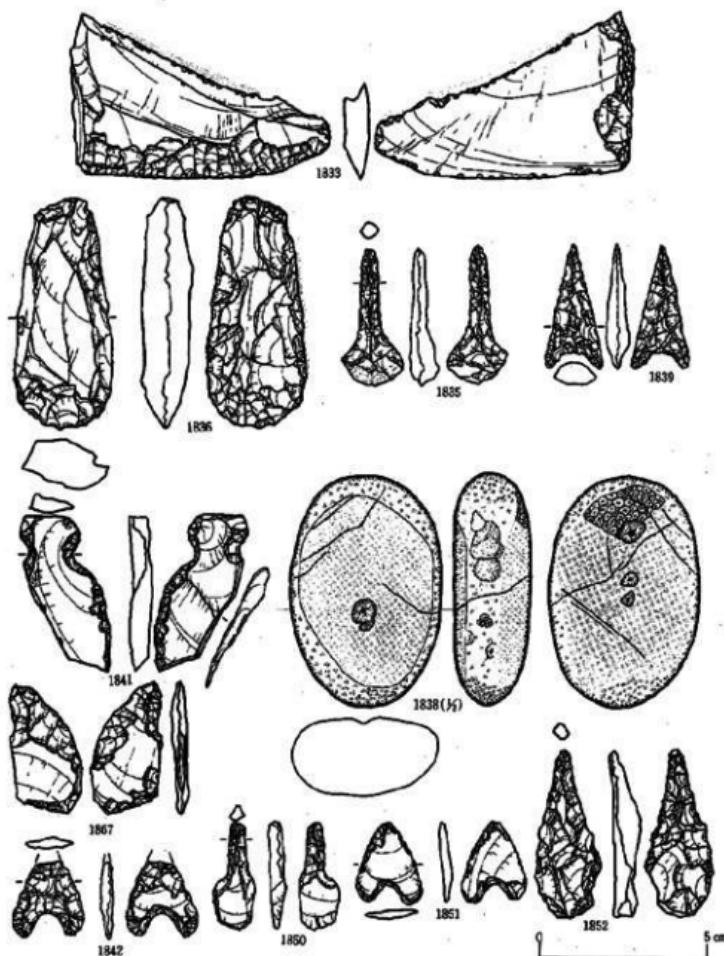
| 番号 | 地 名 | 層 位 | 種 類 | 石 材 | 重 量 | 圖 号 | 図 版 |
|------|--------|--------|-------------|--------------|--------|----------------------|--------|
| 2059 | B45 | — | 磨 刃 石 | C 石炭の付着有 | 950.0 | 2 滑面、磨けている。 | |
| 2059 | B45 | — | 二次加工片 | — | 3.9 | | |
| 2064 | B52 | — | 磨 刃 石 | B 石灰岩山脈 | 90.0 | 鉋状底あり。 | |
| 2063 | B52 | — | 磨 刃 石 | B 石灰岩の付着有 | 510.0 | 2 厚刃、鋸歯あり。 | |
| 2063 | B52 | — | 厚刃石器 | 3 頁 石 | 64.8 | | 7-3 |
| 2065 | B52 | — | 石 器 | 1ル 石 | | 赤褐色付着物あり(S.T.)。基部破損。 | 7-1 |
| 2061 | B69 | 1 層 | 石 器 | 3ル 桂圓真珠 | 6.7 | | 1-2 |
| 2058 | B69 | 1 層 | 石 器 | 1ル 珪化灰岩 | (0.6) | 基部破損。 | 1-2 |
| 2056 | B69 | — | 石 器 | 1ル 頁 石 | 1.3 | ◎の周辺にカミドリ形。 | 1-1 |
| 2059 | B66 | 1 層 | 二次加工片 | — | 47.6 | ◎+◎で葉歯状の刃部作成。 | |
| 2071 | B63 | 1 層 | 石 器 | 1ル 頁 石 | 6.7 | | 1-2 |

第82図 磨期不明の土壤出土石器 25 (845・852・853・859・860・863号土壤)



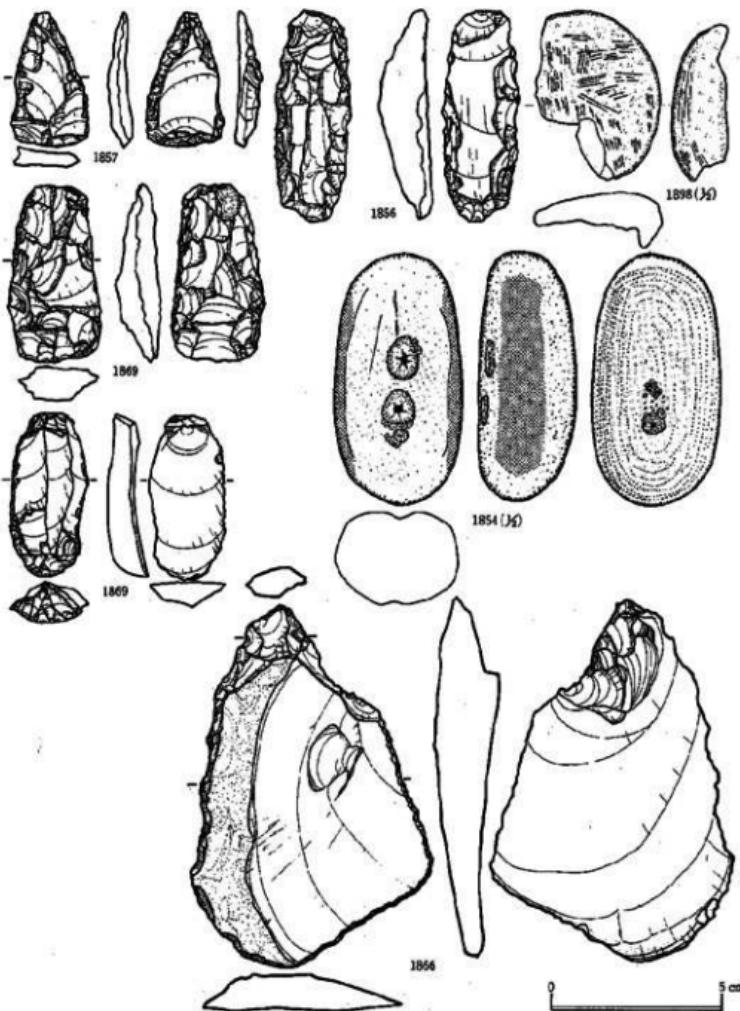
| 番号 | 產地 | 形態 | 石種 | 重さ(g) | 備考 | 回収 |
|------|-----|-----------|------|--------|----------------------------|------|
| 1786 | 903 | 1. 扇 石器? | — | 30.0 | 刮削器あり。表面に赤色鉄質付着(S.T.)。 | |
| 1787 | 903 | 1. 扇 石? | — | 55.0 | 光沢無彩色(赤み無)。 | |
| 1788 | 903 | 1. 扇 磨研磨石 | B | 420.0 | 2面研。表面に敲打痕あり。 | |
| 1806 | 904 | 1. 扇 不定形 | H.I. | 5.0 | 空心cmあり(S.T.)。 | 21-1 |
| 1808 | 911 | 1. 扇 不定形 | H.I. | 7.7 | 縫合はりあり(S.T.)。芯は①剥離より新しい。 | 24-2 |
| 1809 | 919 | 1. 扇 不定形 | H.D. | 7.5 | 側面の打面と刃部を折損。尖端にcmあり(S.T.)。 | 20-1 |
| 1823 | 921 | — | 石 鏷 | (1.7) | 表面敲打。 | 1-2 |
| 1824 | 922 | 1. 扇 磨 石 | C | 770.0 | 3面研。 | |
| 1831 | 924 | 1. 扇 不定形 | H.H. | 5.5 | 芯は他の剥離より新しい。 | 23-2 |
| 1830 | 925 | 1. 扇 磨 石 | C | 1215.0 | 2面研。2ダク頭。1面に半円錐形打痕あり。 | |

第83図 群馬県不明の土壤出土石器 (903・904・911・919・921・924・925号土壌)



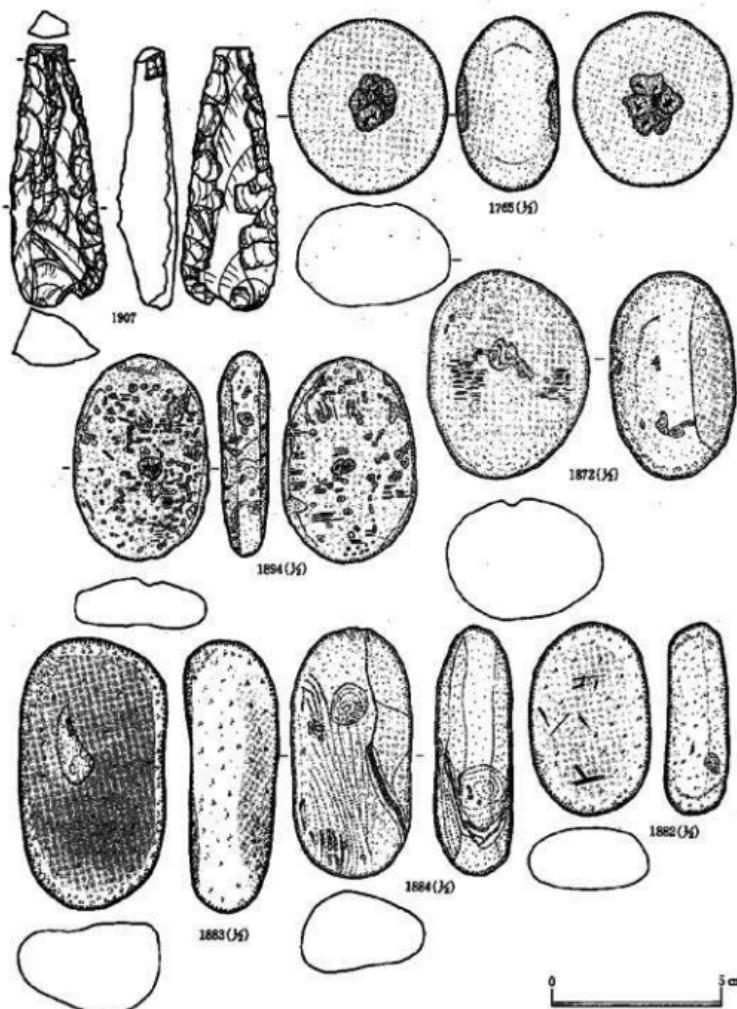
| 番号 | 遺物 | 層 | 位 | 形 | 種 | 石 | 材 | 底さ(寸) | 備 | 番 | 号 | 区 | 級 |
|-------------|----|---|---|-----|------|-------|---|-------|--------------------------|------|-----|-----|---|
| 1833 927 | — | 層 | 不 | 形 | II A | 理賀賣岩 | | 21.3 | ◎を切る△の剥離あり。m.f.あり(S.T.)。 | 16-2 | | | |
| 1832 927 | — | 層 | 不 | 形 | II D | 理賀賣岩 | | 3.0 | ○とノッチ状の剥離で孔隙部作成。 | 21-1 | | | |
| 1835 930 | — | 層 | 石 | 塊 | II | 理賀賣岩 | | 2.0 | | | | 3-4 | |
| 1836 931 | — | 層 | 理 | 球狀石 | I | 理賀賣岩 | | 29.5 | | | | 7-1 | |
| 1838 934 | — | 層 | 理 | 球狀石 | A | 石美安山岩 | | 760.0 | △剥離(削減著し)。1面端に敲打痕。 | | | | |
| 1839 935 | — | 層 | 石 | 塊 | I B | 理賀賣岩 | | 2.5 | | | | 7-2 | |
| 1841 940 | — | 層 | 石 | 塊 | II | 理賀賣岩 | | 6.2 | ◎は古い。◎にm.f.あり。 | 6-1 | | | |
| 1842 942 | — | 層 | 石 | 塊 | II A | 理賀賣岩 | | 11.0 | 尖頭破壊。しかし芯を切ら剥離あり。 | 1-1 | | | |
| 1850 943 | — | 層 | 不 | 形 | II D | 理賀賣岩 | | 1.5 | ○と◎、○により尖端作成。 | 21-1 | | | |
| 1852 944 | — | 層 | 石 | 塊 | II C | 理賀賣岩 | | 5.0 | | | 3-4 | | |
| 1851 944 | — | 層 | 石 | 塊 | II A | 理賀賣岩 | | 1.1 | | | 1-1 | | |

第84図 繁期不明の土壤出土石器 四 (927・930・931・934・935・940・942・943・944号土壤)



| 番号 | 種類 | 現地名 | 形 | 石種 | 直徑(ミリ) | 備考 | 測定者 |
|-------------|----|-------|-----|--------|--------|------------------------------|------|
| 1854 948 | — | 鹿田石 | C | 珪藻土質砂岩 | 280.0 | 3野面、2ザク面。 | |
| 1855 949 | 1層 | 穿孔石錐 | B/A | 珪藻質頁岩 | 37.4 | 先端の刃形微細。 | 7-1 |
| 1856 950 | — | 圓 | B | 珪藻土質砂岩 | 150.0 | 2面削?。鏡面あり。焼けている。 | |
| 1857 951 | 1層 | 小形尖頭錐 | — | 珪藻質頁岩 | 4.9 | | 3-3 |
| 1857 955 | 1層 | 不定形 | 日A | 珪藻質頁岩 | 10.5 | 先端の刃形微細あり(S.T.)。 | 15-2 |
| 1865 958 | 1層 | 不定形 | 日F | 珪藻質頁岩 | 75.6 | 凹の刃形微細あり(S.T.)。打点微細は保持または著明。 | 22-2 |
| 1869 958 | 1層 | 穿孔石錐 | I | 珪藻質頁岩 | 15.5 | 先端の刃形の一部に光沢(S.T.)。 | 7-1 |

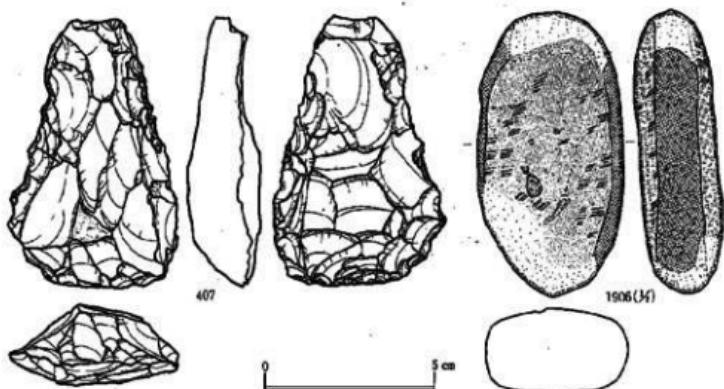
第85図 春期不明の土壤出土石器 (948・949・950・955・958号土壤)



0 5 cm

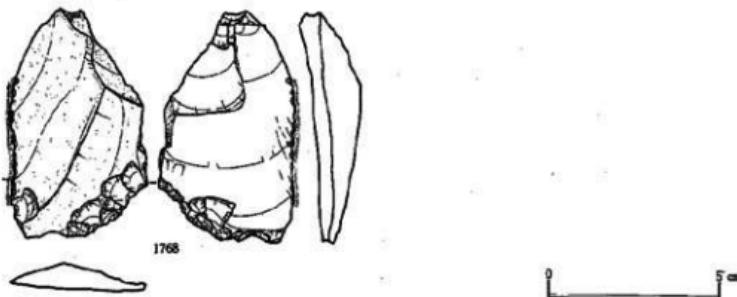
| 番号 | 遺 墓 | 層 次 | 名 種 | 石 材 | 重 量 (g) | 備 考 | 出 所 |
|------|-----|-----|---------|---------|---------|------------------------|-----|
| 1872 | 955 | I | 層 面 凹 石 | C 史 山 石 | 1945.0 | 2層面(横方向の縫合痕あり)。三み1個のみ。 | |
| 1883 | 959 | I | 層 面 石 | C 石英安山岩 | 1680.0 | 2層面。 | |
| 1887 | 959 | - | 層 面 石 | B 石英安山岩 | 400.0 | 2層面。 | |
| 1884 | 960 | I | 層 面 石 | B 石英安山岩 | 779.0 | 2層面。暗褐色付着物あり。 | |
| 1894 | 962 | I | 層 面 凹 石 | A 石英安山岩 | 350.0 | 2層面(かきつ層面)。凹み部に黒褐色付着物。 | |
| 1765 | 963 | I | 層 面 凹 石 | C 史 山 石 | 670.0 | 2層面。 | |
| 1907 | 969 | I | 層 不 定 形 | 1D 地質頁岩 | 30.1 | 手を打撲とする跡があるが、破損と考る。 | H-1 |

第86図 群馬不明の土壤出土石器 (958・959・960・962・963・965号土壤)



| 番号 | 遺構 | 層位 | 種類 | 石 材 | 重さ(g) | 備考 | 図版 |
|------|-----|----|----|------|-------|------------------------------|-----|
| 407 | 964 | 1 | 標 | 麻績石器 | I | 地質測定 73.2 | 5-2 |
| 1906 | 968 | 1 | 標 | 磨出石 | C | 安山岩 360 2面削、2ダツ削。刃みぬく不明瞭。 | |

第87図 群期不明の土壌出土石器 ⑩ (964・968号土壌)



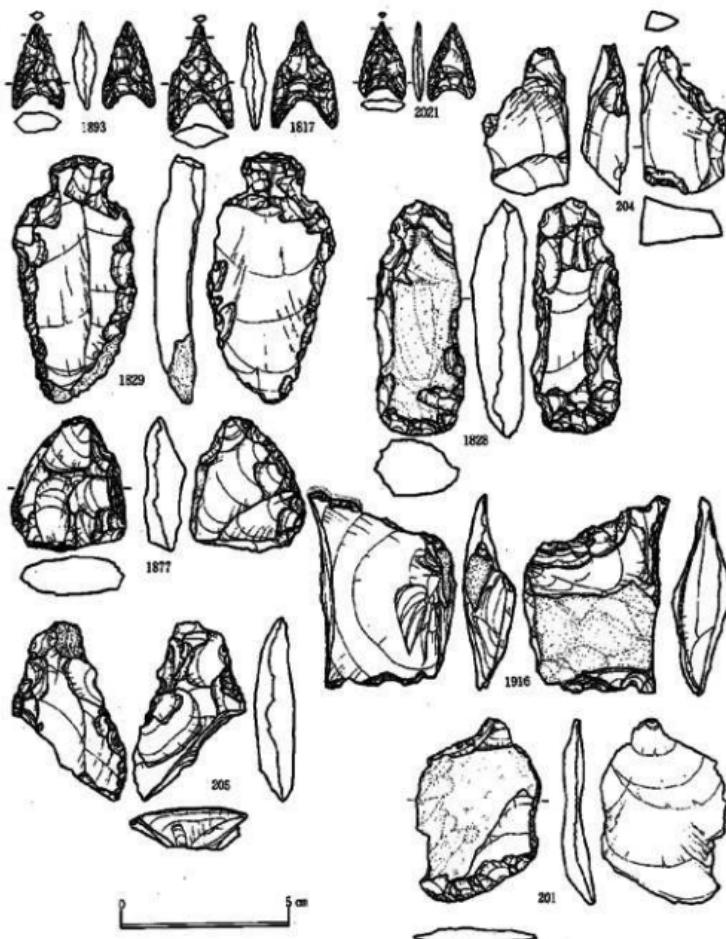
| 番号 | 遺構 | 層位 | 種類 | 石 材 | 重さ(g) | 備考 | 図版 |
|------|-----|----|----|--------|-------|--------------------------|----|
| 1768 | 963 | 1 | 標 | 二次加工削片 | — | 地質測定 31.3 m.fあり(5.7.) | |

第88図 群期不明の土壌出土石器 ⑪ (960号土壌)

3. 表土および位置不明の土壌出土石器

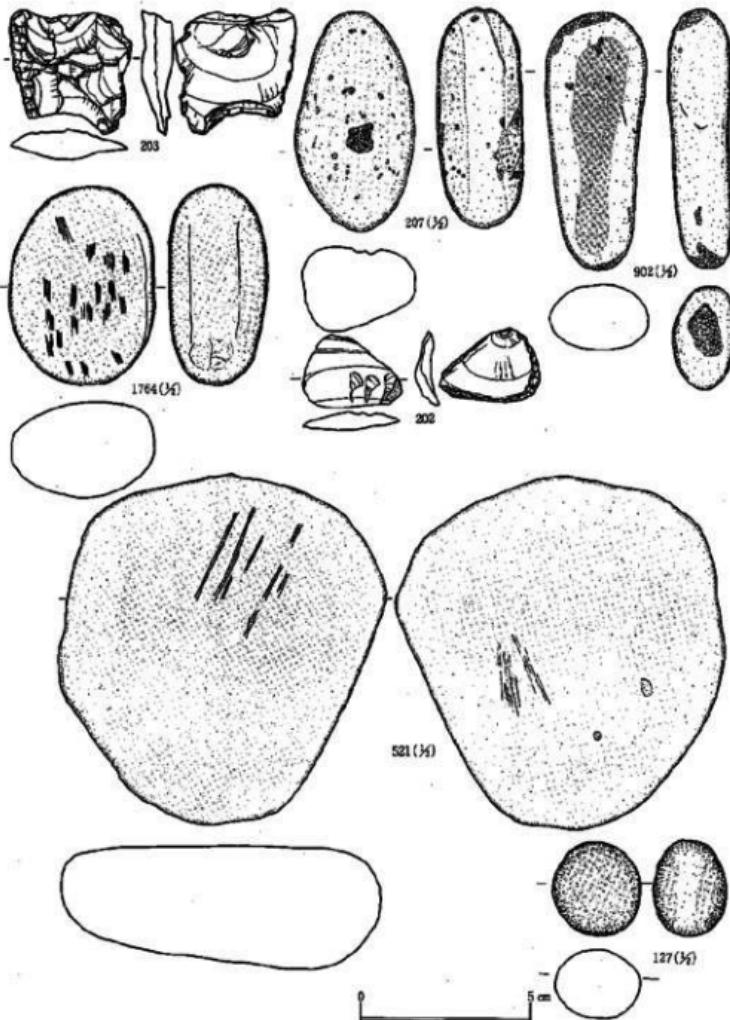
表土出土の石器は遺構出土の石器に匹敵する量があったが、図化、分析ともに行っていない。したがって今回図化されたものはかなり特殊なものか、偶然混入したものに限られる。

また、第90図521は平安時代の第50号住居跡（宮城県教育委員会 1985a 第50図）の壇付近の床面に遺棄されていた石皿状の石器であり、縄文時代の石器ではない。



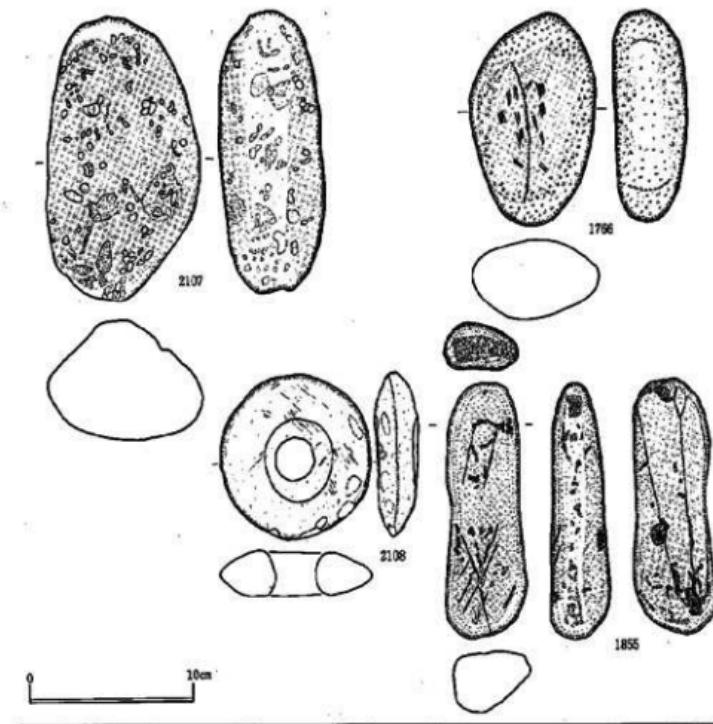
| 番号 | 遺 墓 | 層 位 | 器 物 | 石 材 | 重さ(g) | 圖 号 | 圖 版 |
|------|-----|-----|------|------------------------|-------|--------------------------|-------|
| 1893 | 不 明 | — | 石 砕 | IB 地質頁岩 | 3.9 | 厚い。 | 1- 2 |
| 1817 | 不 明 | — | 石 砾 | II 黒 磷 酸 石 | 1.8 | | 1- 1. |
| 2021 | 不 明 | — | 石 砾 | IB 地質頁岩 | 9.7 | | 1- 2 |
| 204 | 表 土 | — | 不定 形 | II D ₃ 地質頁岩 | 11.7 | ◎磨擦状と⑦が尖削部形成。 | 20- 2 |
| 1829 | 不 明 | — | 石 扇 | IA 地質頁岩 | 26.9 | | 4- 2 |
| 1828 | 不 明 | — | 圓状打撲 | I 地質頁岩 | 26.1 | | 7- 1 |
| 1827 | 不 明 | — | 圓形打撲 | II A 黑 磷 酸 石 | 13.6 | 3刀の刃面あり、対向する刃部は全て大小剥離有り。 | 10- 1 |
| 1916 | 不 明 | — | 不定 形 | II D ₃ 地質頁岩 | 33.5 | ◎と⑦+◎磨擦状とにより複数尖削部作成。 | 21- 1 |
| 205 | 表 土 | — | 不定 形 | II J 地質頁岩 | 13.9 | ⑦は状態か? | 25- 1 |
| 201 | 表 土 | — | 不定 形 | II A ₁ 地質頁岩 | 9.9 | 參照による色河をもつ。 | 15- 1 |

第39図 表土および位置不明土壌出土石器 (I)



| 番号 | 遺 墓 | 質 地 | 形 異 | 石 材 | 重 量 (g) | 備 考 | 圖 版 |
|------|----------|-------|-------|-------|----------------------|-----------------------------|------|
| 203 | 表 土 | — | 不定 形 | H.A. | 地質頁岩 | 9.5 m.Lあり (S.T.)。 | 15-2 |
| 202 | 表 土 | — | — | — | 地質頁岩 | 3.0 青銅もガラスライノな面。 | |
| 207 | 表 土 | — | 歩 駆 石 | B | 石英安山岩 | 530.0 2面研。凹み1面のみ。 | |
| 902 | 表 土 | — | 磨 敷 石 | D | 安山岩 | 420.0 2面研(不明瞭)。先端円錐に麻刃状。 | |
| 1764 | 不 明 | — | 磨 石 | C | 石英安山岩 | 760.0 3面加工。 | |
| 127 | 不 明 | — | 磨 石 | B | 石英安山岩 | 100.0 2面研。 | |
| 521 | 50 位 表 土 | 石 砂 ? | — | 石英安山岩 | 15000 2側底面。鋭い削痕あ? | | |

第90図 表土および位置不明土壤出土石器 (2)



| 番号 | 性別 | 年齢 | 部位 | 種類 | 石 材 | 重さ(g) | 記 | 写 | 図版 |
|------|----|----|----|------|-----|-------|--------|---------------------|----|
| 2107 | 不 | 男 | — | 磨 石 | C | 石英安山岩 | 1099.0 | 3磨石(すべて同側方に磨試)。 | |
| 1796 | 不 | 男 | — | 磨 石 | B | 元 烏 鎧 | 593.0 | 2磨石(頭内底あり)。 | |
| 1855 | 不 | 男 | — | 磨鉗石 | B | 安 士 石 | 240.0 | 2磨石。其物一例と別個とに掲打風。 | |
| 2108 | 表 | 土 | — | 磨状石斧 | — | 石英安山岩 | 223.0 | 刃部は鋸くないが光沢あり(S.T.)。 | 26 |

第91図 表土および位置不明土塊出土石器(3)

III. 遺構出土の石器の考察

1. はじめに

小梁川遺跡は早期から中期中葉までの複合遺跡であり、遺構の埋土に古い時期の遺物が混入することが比較的多かったことが土器の分析から判明している。特徴的な器種・型式については混入をチェックできる例もあるが、大半の石器ではほとんど困難である。したがって土器の分析で行われるような時期的細分は行わず、早期、前期前葉、前期後葉から中期中葉の三時期に大別する。前期後葉から中期中葉はこの遺跡がもっとも利用された時期で、遺構の大半はこの時期に属すると推定される。したがって、土器で表示される「群期」が特定できない時期不明の遺構も前期後葉から中期中葉の時期に構築されたと仮定し、これらから出土した石器も前期後葉から中期中葉の時期に含めて記述および分析をおこなう。

2. 遺構出土の石器の分類

分類は以下のような順序で行った。①剥片を除いた石器群の中から石鏃、尖頭器、小型尖頭器、石錐、石匙、箇状石器、磨製石斧、磨凹敲石、石皿、砥石、環状耳飾りなどを抽出した。②石核、両極剥離痕のある石器、その他の礫石器を抽出した。③残った石器群から一定形態を志向していると考えられる石器を抽出し、不定形石器 I類とし、II類までを設定した。④さらに残った石器群から特定刃部の形状を志向していると考えられる石器を抽出し、不定形石器 II類とし、II A類から II J類までを設定した。⑤以上の抽出から残った顕著な二次加工を有しない剥片石器を二次加工のある剥片として一括した。

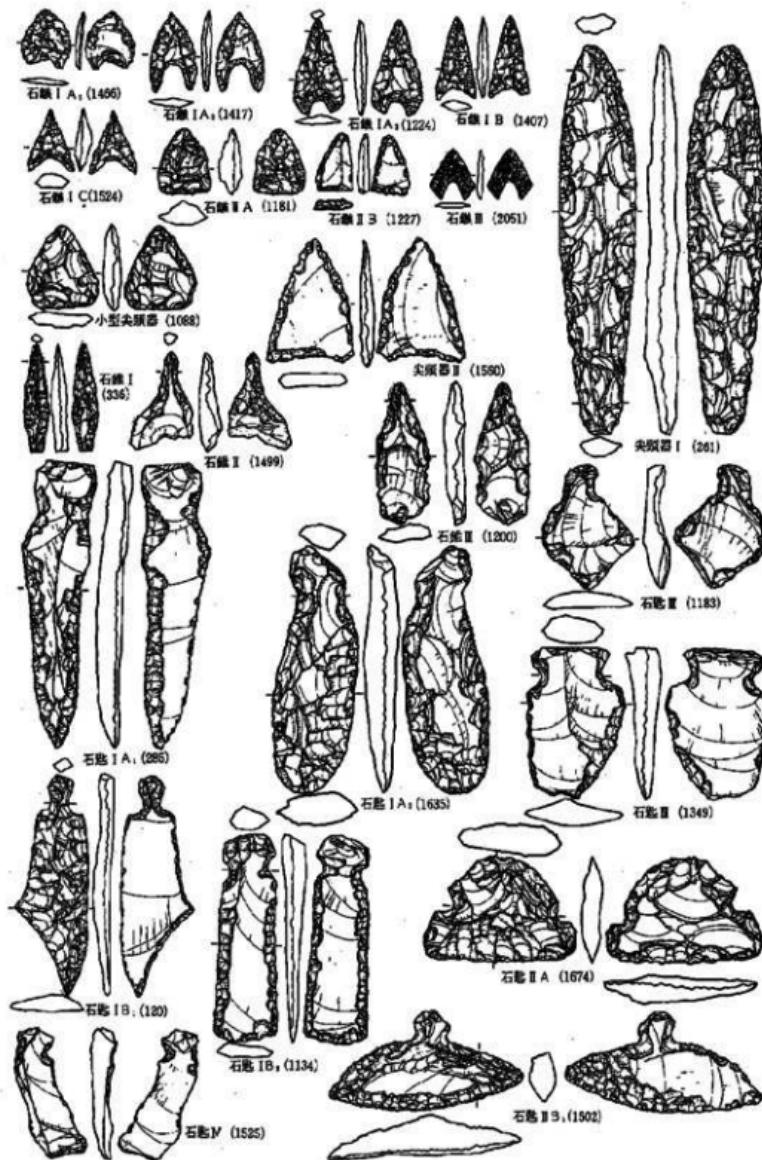
(1) 定形的な剥片石器、磨製石斧、石核、両極剥離痕のある石器 (第92図～第94図)

石：偏平、左右対称で原則として基部に「返り」を有する小形の尖頭部作出石器を石鏃とする。基部形態と側辺の形態とによって主として分類した。基部形態については四基(I類)と平基(II類)とがあり、側辺形状には外弯(A類)、直線(B類)、内弯(C類)とがある。このうち、IA類は「えぐり」が深く、IA類は「返り」が最大幅よりもかなり内側にある種類である。III類はいわゆる局部磨製石鏃、IV類は以上の分類に適合しないものとする。

尖頭器：原則として偏平、左右対称の尖頭部作出石器を尖頭器とする。二次加工がほぼ全面に及ぶI類と周辺部のみのII類とがある。

小型尖頭器：尖頭部作出石器で、石鏃と尖頭器との中间形態を呈し、石鏃よりも大きく「返り」が無い器種を小型尖頭器とする。

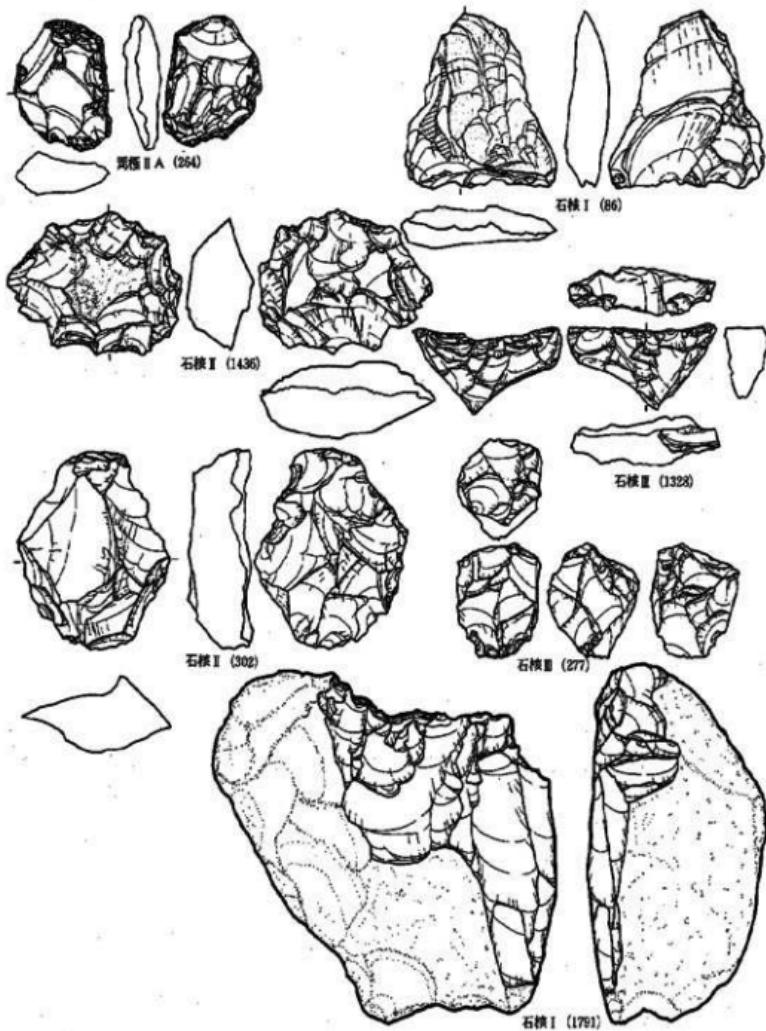
石錐：棒状の尖端部を有する石器で、石鏃、尖頭器に含まれない器種を石錐とする。つまみ



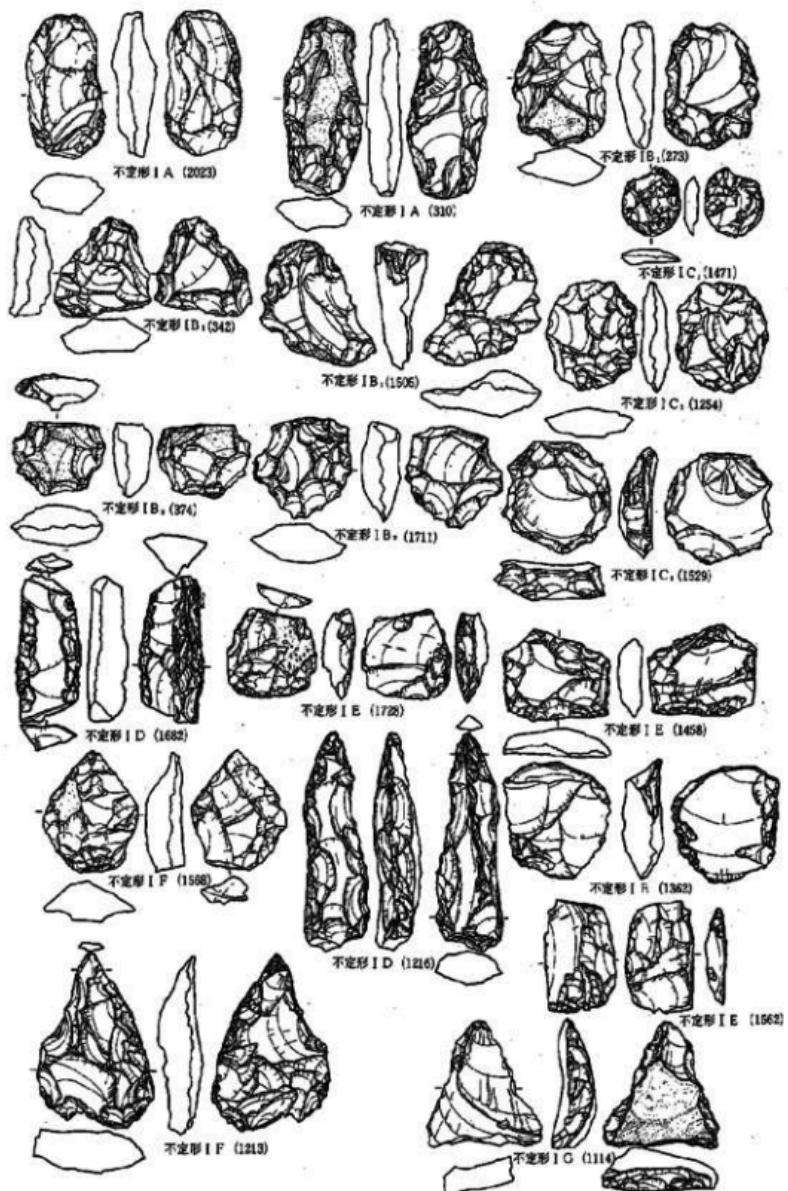
第92図 石器種分類図(1)



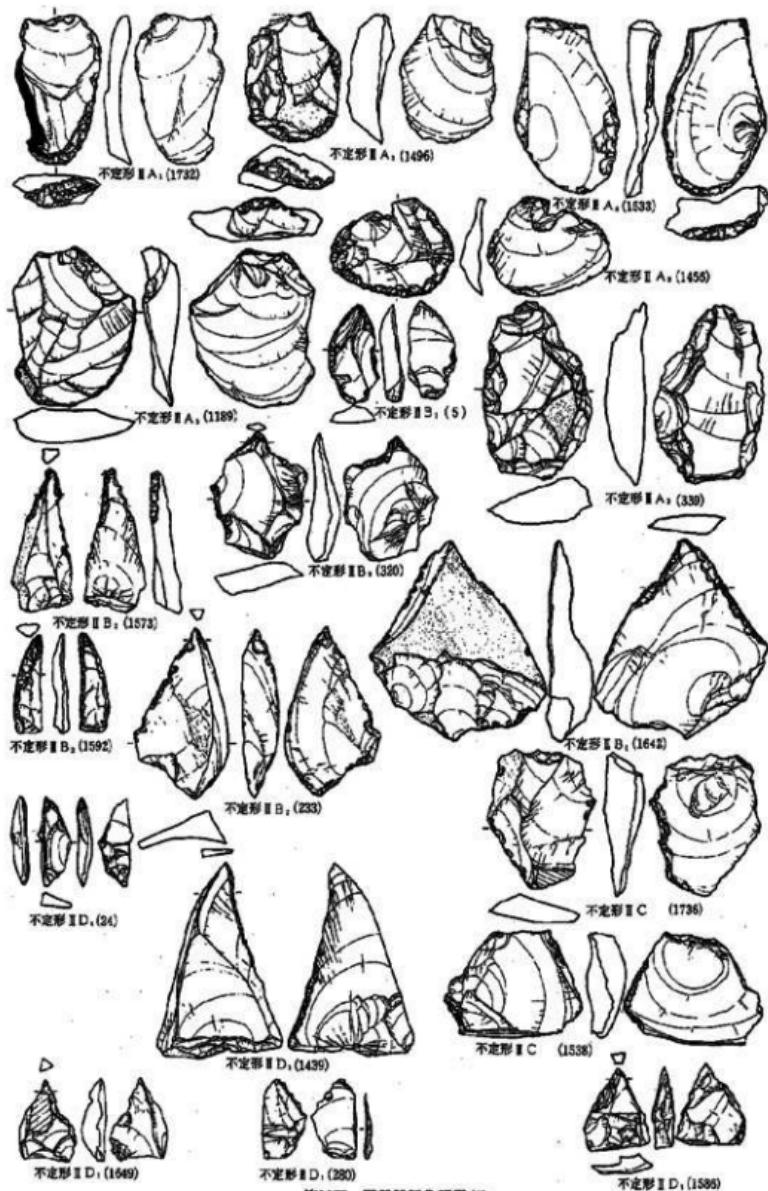
第93図 石器器種分類図(2)



第94图 石器器種分類図(3)



第95图 石器器種分類圖(4)



第96図 石器種分類図(5)

部が無く、棒状の種類(I類)、つまみ部と錐部とかなる種類(II類)、つまみ部と錐部との区分が不明瞭で全体形が尖頭器状の種類(III類)とがある。

石匙：原則として両側刃からノッチを入れることによって作出されたつまみを有する石器で、かつ刃部と判断できる形状の縁辺部(身部)を有する器種を石匙とする。つまみ部を上にした場合、身部が縦長になる種類(I類)、横長になる種類(II類)、I・II類の中間形態の種類(III類)に大別する。身部の形状は2縁辺構成(A類)と3縁辺構成(B類)とがあり、縁辺部の交差により尖端部が形成される種類(1類)、尖端部が形成されない種類(2類)とに細分できる。IV類は不定形の身部を有するものを一括する。

箆状石器：平面形が撥形あるいは短冊形で一端に刃部を作出する器種を箆状石基とする。側辺の二次加工がステップ状の不整な種類をI類、連続する種類をII類とする。II類は幅狭なA類と幅広なB類とに細分できる。III類は加工が粗雑で不整な種類を一括する。

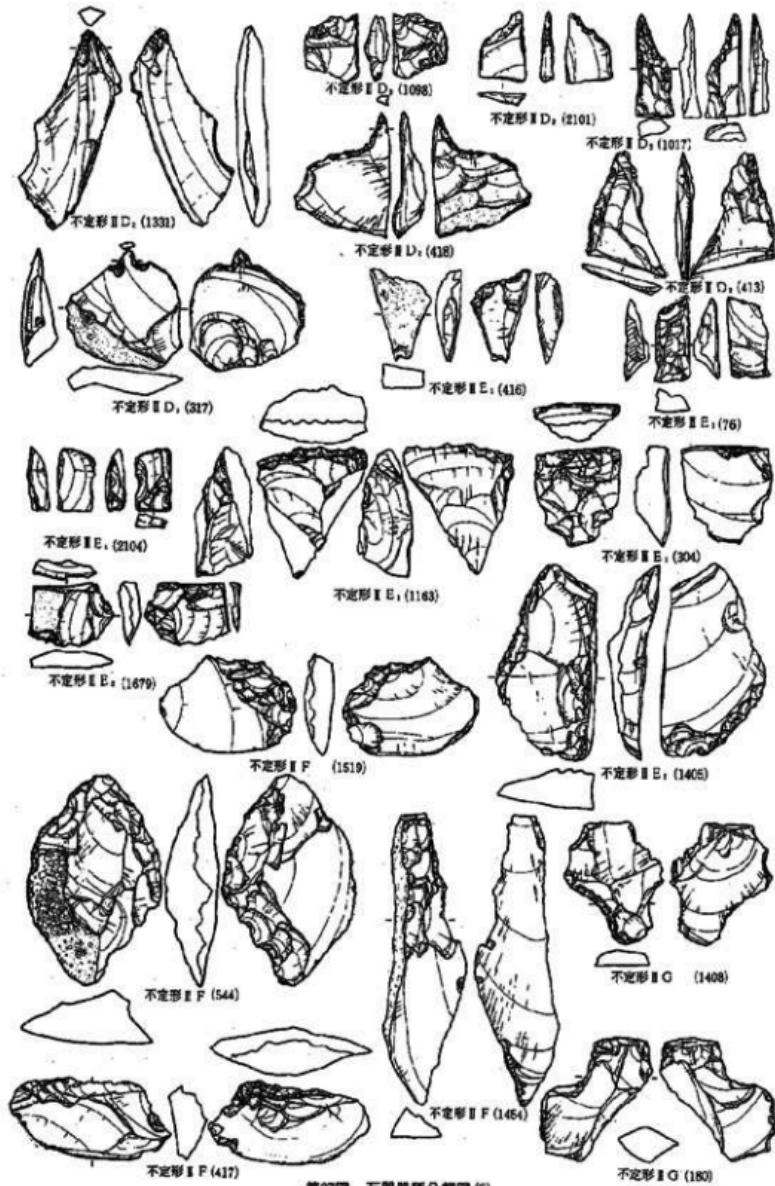
磨製石斧：長さ10cm以上のI類と6cm以下で小形のII類とがある。I類は厚手(A類)と薄手(B類)とに細分する。

両極剥離痕のある石器：両極剥離痕の対数と対となる刃部などの形状とによって以下のように分類する。両端に1対の両極剥離痕を有する種類をI類、明確な複数対の両極剥離痕を有する種類をII類、不明確な両極剥離痕を有する種類をIII類とする。刃部の形状としては、対となる線状の刃部を有する種類(A類)、線状の刃部を1箇所に有するが、反対側は両極剥離以前の平坦面となる種類(B類)、線状の刃部を1ヶ所に有するが、反対側は点状もしくは潰れた状態(両極剥離以後の折れ面を含む)となる種類(C類)、両端に両極剥離以前の平坦面を有する種類(D類)、既製の石器を両極剥離痕を有する石器に転用している種類(E類)がある。実際には以上の分類の組み合わせとなる。

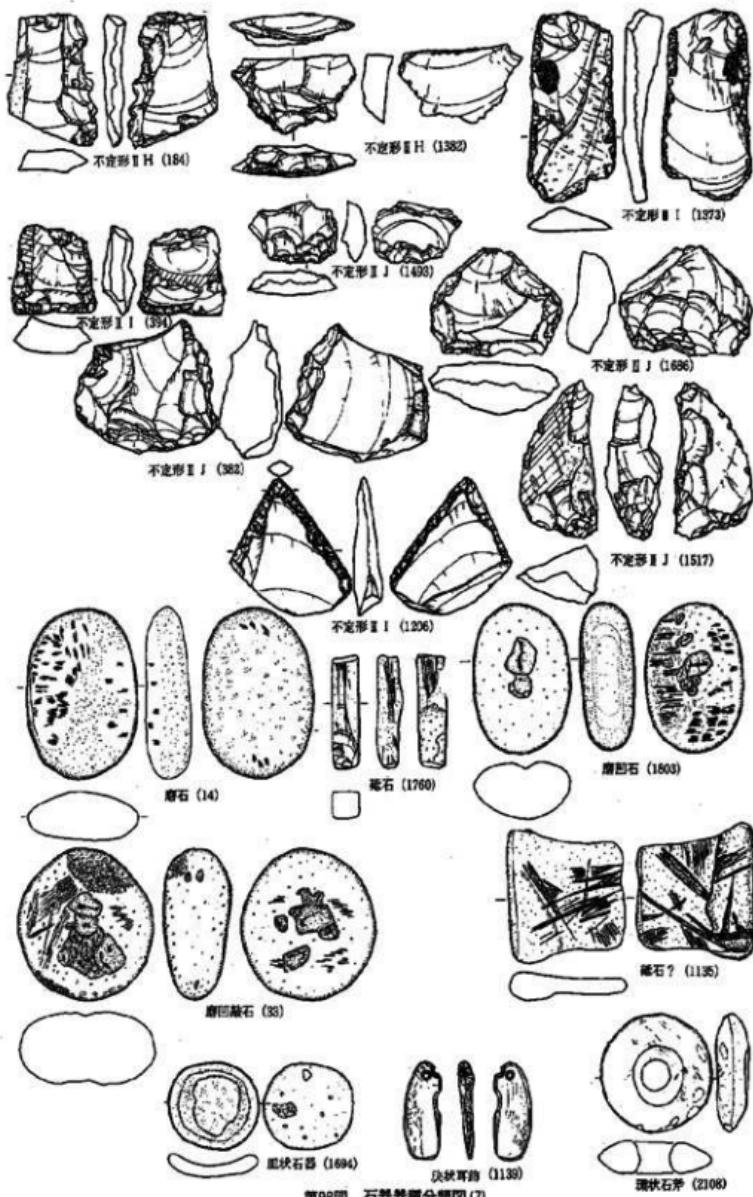
石核：剥離作業面の数とそれによる形態とによって以下の様に分類する(後藤 1969b)。
I類：剥離作業面が1面で、それに対し複数の打面が任意に作出される。長方体を呈する。
II類：剥離作業面が表裏両面だけに設定され、その剥離作業面に対して求心的に石核の周辺から任意に剥片生産を進める。円盤状またはショッピングトール状を呈する。
III類：剥離作業面が2面以上設定され、その剥離作業面に対し、任意に複数の打面を作出し、剥片生産を進める。立方体または多面体を呈する。

(2) 不定形石器(第95図～第98図)

不定形石器は2種類に大別される。不定形石器I類は二次加工が全周に及び、素材の形態を大きく変化させ刃部以外にも一定の形態約まりを志向する不定形石器である。不定形石器II類は素材の形態を余り変化させず、部分的な二次加工によって必要とする特定の刃部を作出する不定形石器である。細分類について説明する。



第97圖 石器種類分類圖(6)



第98圖 石器器種分類圖(7)

(a) 不定形石器 I類 (第96図)

不定形石器IA類：平行する2辺にステップが目立つ不整な剥離が連続し、刃部の立面觀は鋸歯状となる。形態は長方形ないし長椭円形となる。鎧状石器と異なり、一端に明確な刃部は作出されない。

不定形石器IB類：背腹両面から粗くやや奥まで入る二次加工を連続的に施し、ジグザグの鋸歯状刃部を作出する。三角形または台形に整形される種類(IB_1 類)と円形に整形される種類(IB_2 類)とに形態的に分類される。

不定形石器IC類：両面または半両面加工によって円形の形態を志向する。刃部は IB_2 類より鋸歯状を呈さない。薄手素材でやや奥まで入る加工を有する IC_1 類と厚手素材で急角度の加工を有する IC_2 類とがある。

不定形石器ID類：素材剥片の3つの棱から加工が行われ断面が三角形を呈する。完形品は1点のみだが、尖頭部が作出され「三稜尖頭器」に類似する。

不定形石器IE類：折断面と3縁辺とによって長方形に近い形態を呈する。(a)スクレイバーエッジを有する種類(1728、1458、1562)と、(b)、2側辺に不整な二次加工が連続するのみの種類(1362)とがある。

不定形石器IF類：尖頭部が作出され、全体の形態も尖頭器に類似するが、左右非対称および不整形である。

不定形石器IG類：折断または急角度の剥離によって三角形に整形される。いわゆる「三角形石製品」を含む。

不定形石器II類：以上の分類に属さない不定形石器I類をII類とする。

(b) 不定形石器 II類 (第96図～第98図)

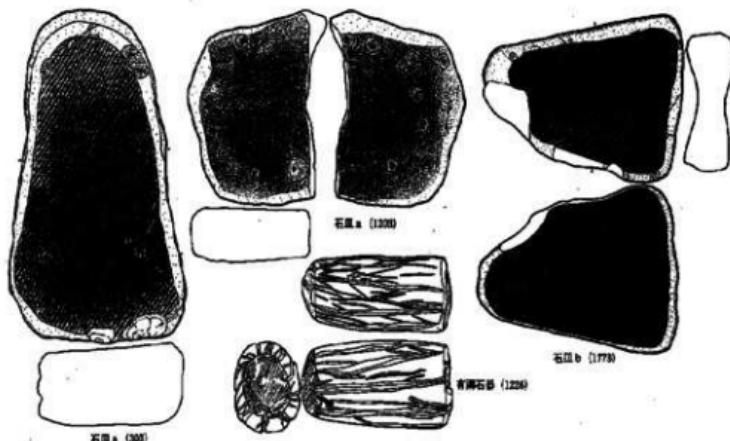
不定形石器IIA類：いわゆるスクレイバーエッジを有する石器で、奥まで入る連続した二次加工の刃部を有する。刃部の位置および精粗によって3種類に細分される。 IIA_1 類はエンドスクレイバーで縦長素材の末端に整った刃部を有する。 IIA_2 類は IIA_1 類以外で整った刃部を有する。 IIA_3 類は不整または粗雑な刃部を有する種類を括する。

不定形石器IIB類：明確な単独の尖端部が作出される。錐状尖端部を有する種類を IIB_1 類とし、それ以外の尖端部を有する種類を IIB_2 類とする。

不定形石器IIC類：連続した小剥離で、小尖端部が単独または複数作出される種類である。

不定形石器IID類：折断面が直接的に関与して尖端部が作出される。錐状尖端部を有する種類を IID_1 類、それ以外の尖端部を有する種類を IID_2 類とする。

不定形石器IIE類：不定形石器II D類以外で折断面が整形に使用される器種としてII E類を設定する。II E類は2種類に細分されるが、折断面以外に両者に類縁関係はない。 $II E_1$ 類は素材剥



第99図 石器委種分類図(3)

片の1縁辺または複数縁辺を折断し、素材の鋭い縁辺を刃部とし、「切り出し」形を呈する。 II E_2 類は折断面を打面としてステップ状の二次加工が施される。小形であり石核ではない。この加工部位が刃部とは考え難く、刃部形状を中心とした分類とは矛盾する点がある。

不定形石器II F類：素材の打面部付近を背腹両面からやや奥まで入る不整な二次加工で除去し、素材の鋭い縁辺に小剥離や微細剥離痕などの使用痕がある。二次加工部位は鋸歯状を呈するが、着柄のための加工と考えられる、機能部位は使用痕のある鋭い縁辺で、「ナイフ状石器」または「バックドブレード」の一種に相当する。

不定形石器II G類：ノッチ状の二次加工を有し、尖端部が作出されない。いわゆる「ノッチ」である。

不定形石器II H類：正面観が特に鋸歯状の刃部を有する。いわゆる「デンティキュレイト」である。(a) 1または2側辺に鋸歯状の刃部を作出する種類(184)と(b) やや大きな剥離で粗い鋸歯状の刃部を作出し、全体形が星形を呈する種類(1382)とに分類できる(第98図)。

不定形石器II I類：形状が同じで連続した両面加工による立面観が規則正しい鋸歯状となる刃部を有する。素材の形態から(a) 正方形を呈する種類(392)、(b) 長方形を呈する種類(1373)、(c) 全て破損しているが、尖端部が作出される種類(1206)に細分される(第98図)。

不定形石器II J類：厚手の素材にやや急角度で奥まで入る加工を間隔をおいて連続的に施し、立面観が鋸歯状となる刃部を有する。いわゆる「交互剥離状石器」の一種である。

(3) 磨凹敲石類(第98図)

磨石、凹石、敲石類に見られる使用痕は、磨面（線状痕が伴う例が多い）、ザラ面、凹み部、敲打痕（剥離痕を含む）などに分類される。これらの石器は使用痕によって分類される石器で、ほとんど加工されることではなく、素材の選択の段階で形態が規定され、使用によってその属性が変移する。したがって、使用痕の種類の組み合わせによって、磨石、磨凹石、磨凹敲石、敲石に分類し、属性による分類は考察で行う。

(4) 石皿 (第99図)

機能面が平坦の種類 (a類) と著しく凹面を呈する種類 (b類) とに細分される。

以上に説明した器種以外に块状耳飾り、環状石斧、砥石、有溝石器、皿状石器などがある。いざれも少數なので説明は省略する。

3. 縄文時代早期の石器群

早期前葉の遺構は検出されていないが、表土から日計式の押型文土器が出土している。遺構の埋土から出土した石鏃 III類の1531 (第25図)、2051 (第81図) は黒曜石製のいわゆる局部磨製石鏃で日計式の押型文土器と共に伴する石器と考えられる。東北地方では福島県いわき市竹之内遺跡 (いわき市教育委員会 1982 pp. 64~65)



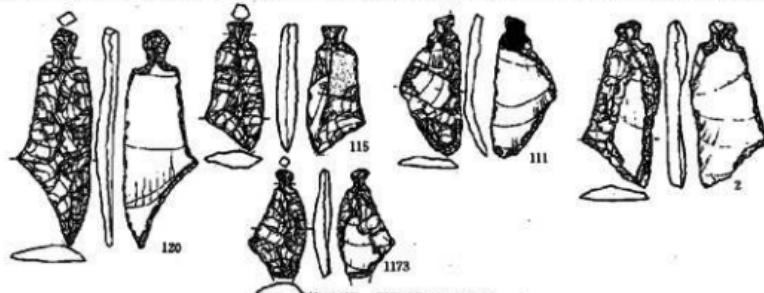
第100図 石鏃 III類 (局部磨製石鏃)

に出土例がある。竹之内遺跡では極めて偏平な鍔形鏃と厚手、回基の石鏃との2つの形態の局部磨製石鏃があるが、2051は前者に1531は後者に対応する。

早期中葉および後葉の遺構から出土した石器は少なく分析の対象とならない。

4. 縄文時代前期前葉の石器群

前期前葉の遺構としては、11棟の住居跡と1基の土壙とがあるが、石器の出土量が多い遺構は、第29号住居跡と第32号住居跡のみである。第32号住居跡のチップ633点を除外すれば、総点



第101図 石斧 IB₁類の縄例

数は78点、そのうち抽出石器は35点となる。この時期の特徴的な器種および型式について概説する。

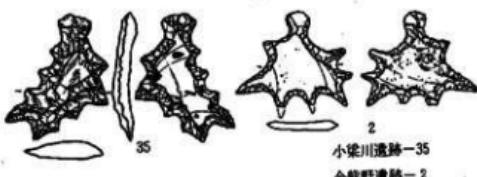
石 鋏 側辺が直線で凹基となるIB類が多い。

石 匙 第29号住居跡出土の石匙 IB類は以下の二つの特徴を有している。①三縁刃構成で、末端と側方に尖端部を持つ。②腹面に打面調整剥離を施してから背面に薄く奥まで入る剥離を行う特徴的な加工技術（宮城県教育委員会 1987a pp. 574）を有している（第101図）。このような特徴を持つ石匙 IB類は前期後葉・中期中葉の遺構からも出土しているが、混入であろう。今熊野遺跡（宮城県教育委員会 1986b）の大木1～2型式期の石匙では①の形態の石匙は出土しているが、②の特徴を有してはいない。第29号住居跡は大木1型式期よりは古いので、②の二次加工技術は大木1型式期以降に消滅し、形態のみが残存すると考えられる。第2号住居跡（V群期）の床面から出土している石匙 IV類の尖端部を多数作出す型式（87年第18図35）は今熊野遺跡に類似（pp. 110）があり、付着物（塗布された可能性がある）がある点まで類似する。床面遺物ではあるが、現段階では前期前葉の石器と考える。

不定形石器IID類 第29号住居跡からは不定形石器 IID類（87年第40図122, 116）、IID₂類（121）

が出土している。折断による尖端部作出石器は今熊野遺跡でも比較的多く出土しているので、小梁川遺跡でも同様の傾向を示していると考える（第103図）。

その他の特徴的な器種、型式は数も少なく指摘できない。



第102図 石匙 IV類の類例



第103図 前期前葉の不定形石器 IID類の類例

5. 縄文時代前期後葉から中期中葉の石器群

A. 器種組成

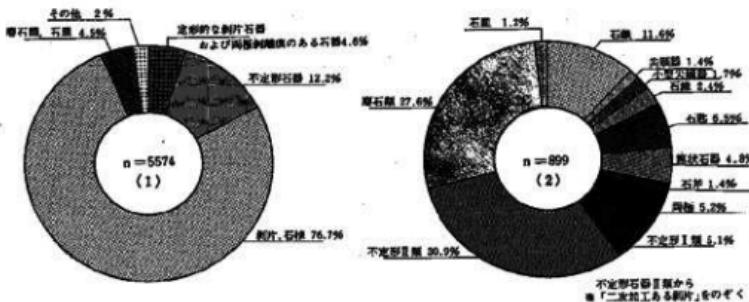
小梁川遺跡の前期後葉から中期中葉の時期と推定される石器群は5574点ある。これらの器種組成の特徴として以下の2点を指摘できる。

(1) 不定形石器の増加

第104図1に示す様に、総点数5574点のなかで、定形的な剥片石器は4.6%、磨凹敲石類および石皿は4.5%であるのに対し、不定形石器は12.2%を占める。また、剥片、石核および二次加工ある剥片を除外した899点では不定形石器は36%を占める(第104図2)。このように不定形石器は縄文時代の石器群のなかで膨大な数を占めることは一般的な傾向(岡村 1979)であるが、小梁川遺跡では特定刃部を志向する不定形石器II類が特に多い(31%)ことが特徴となる。

(2) 高比率を占める定形的剥片石器の器種および型式の減少

定形的な剥片石器の種類は他の時期と同様である。しかし前期前葉の石器群における石匙や箇状石器のように、卓越して高比率を占める器種はない(第104図2)。さらにこれらの器種内で、特徴的な型式は顕著ではなく、主要な型式を指摘できても、それらは必ずしも安定した比率を占めてはいない。また器種内での型式の分化も多様である。このように小梁川遺跡の石器の組成は定形的な剥片石器の型式の規制力が弱まり、様々な型式が少しづつ出現する傾向を示している。この点は今熊野遺跡などの前期前葉の石器群とは大きく異なっている。これらの現象は特定の作業に対し特定の器種が使用されるという固定的な関係が弱まり、定形石器が從来使用されていた作業内容に同様の刃部形状を持つ不定形石器が用いられるようになったためと考えられる。したがって、不定形石器の増加と軌を一にする現象であろう。



第104図 前期後葉から中期中葉の石器組成

B. 各器種の考察

(1) 石 鐵

石鐵は108点認定した。このうちIII類は早期前葉に属する。組成では、IB類が54点(50%) IA類が28点(26%)、IA類が10点(9%)で、他はない。石鐵の長幅比を第105図に示す。大形の石鐵はIB類が多くなるが、2側刃が直線的に收斂する形態的な特徴に原因があると考える。その他の形態的属性と大きさの相関はない。

石鐵の多くは剥片素材で、ある程度素材の用い方がわかる例が31点ある。石鐵の形態に対する素材剥片の打面方向を見ると、2側刃が外弯する種類(I A₁, I A₂, II A類)では剥片の打面を基部側に置く例(A)が多いに対し、2側刃が直線的な種類(I A₃, I B, II B類)では剥片の打面を尖頭部に置く例(B)が多い(第106図)。このような素材利用法の成因としては、2側刃が直線

的に收斂する尖頭部はある程度厚みがないと二次加工時に破損しやすいという理由が考えられる。

石鐵の加工状態を第107図に示す。I類は全面加工で製作される比率が高いのに対し、II類は周辺加工で製作される比率が高い。この事はII A、II B類が左右非対称形が多いことと関連している。

I A₃類はVIII群期以降に一般的になるようで、柴田郡川崎町中ノ内B遺跡(宮城県教育委員会1987a)でも同様の傾向が見られる。しかし他の種類については明確に断定できない。

第5表 石器器種組成

| 石 鐵 | | I A ₁ | I A ₂ | II A | I D | I C | II A | II B | III B | IV B | V B | VI B | 不 種 | 計 |
|-----|------|------------------|------------------|------|-----|-----|------|------|-------|------|-----|------|-----|---|
| 数 | 22 | 4 | 30 | 49 | 2 | 7 | 6 | 1 | 2 | 4 | 1 | 106 | | |
| % | 31.3 | 2.7 | 9.2 | 45.3 | 1.8 | 6.4 | 5.5 | 1.0 | 1.9 | 3.7 | 0.9 | 100 | | |

| 石 鐵 | | I | II | III | IV | V | VI | 不 種 | 計 |
|-----|------|-----|------|------|----|---|----|-----|-----|
| 数 | 31 | 2 | 35 | 39 | | | | | 131 |
| % | 23.1 | 1.5 | 33.5 | 30.5 | | | | | 100 |

| 石 鐵 | | I A ₁ | I A ₂ | II A | I D | II B | III B | IV B | V B | VI B | 不 種 | 計 |
|-----|------|------------------|------------------|------|------|------|-------|------|-----|------|-----|---|
| 数 | 18 | 8 | 2 | 8 | 5 | 4 | 1 | 4 | 1 | 8 | 50 | |
| % | 36.0 | 16.0 | 4.0 | 16.0 | 10.0 | 8.0 | 2.0 | 8.0 | 2.0 | 16.0 | 100 | |

| 直状石刀 | | I | II A | II B | III | IV | 不 種 | 計 |
|------|------|-----|------|------|-----|----|-----|-----|
| 数 | 16 | 4 | 6 | 17 | 1 | 46 | | 100 |
| % | 32.0 | 9.1 | 12.6 | 36.0 | 2.5 | | | 100 |

| 直状石刀 | | I A | I B | II | III | IV | V | 不 種 | 計 |
|------|------|------|------|-----|-----|------|-----|-----|-----|
| 数 | 16 | 6 | 5 | 3 | 2 | 6 | 4 | 1 | 50 |
| % | 32.0 | 12.0 | 10.0 | 6.0 | 4.0 | 12.0 | 8.0 | 2.0 | 100 |

| 直状石刀 | | I | II | III | IV | V | 不 種 | 計 |
|------|------|------|------|------|----|---|-----|-----|
| 数 | 11 | 22 | 18 | 11 | 53 | | | 100 |
| % | 21.0 | 44.0 | 36.0 | 21.0 | | | | 100 |

| 直状石刀 | | — | II | II | III | IV | V | 不 種 | 計 |
|------|---|---|----|-----|-----|----|---|-----|-----|
| 数 | — | — | — | 9 | — | — | — | — | 9 |
| % | — | — | — | 100 | — | — | — | — | 100 |

| 直状石刀 | | I A ₁ | I B ₁ | I B ₂ | I C ₁ | I C ₂ | I D | I E | I F | I G | I H | I I | II | III | IV | 不 種 | 計 |
|------|------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------|-----|------|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|---|
| 数 | 7 | 2 | 6 | 1 | 4 | 7 | 7 | 3 | 7 | 4 | 1 | 1 | 4 | 6 | 1 | 106 | |
| % | 16.3 | 4.1 | 12.3 | 2.1 | 9.2 | 14.3 | 14.3 | 6.1 | 14.3 | 7.4 | 2.0 | 1.9 | 7.5 | 11.3 | 2.8 | 100 | |

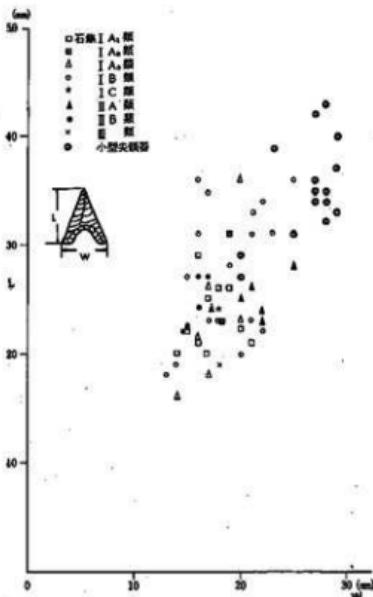
| 直状石刀 | | I A ₂ | I B ₂ | I B ₃ | I C ₂ | I C ₃ | I D ₂ | I D ₃ | I E ₂ | I E ₃ | I F ₂ | I F ₃ | I G ₂ | I G ₃ | I H ₂ | I H ₃ | I I ₂ | I I ₃ | II | III | IV | 不 種 | 計 |
|------|------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------|------|------|------|-----|
| 数 | 28 | 14 | 22 | 24 | 11 | 20 | 20 | 12 | 4 | 29 | 8 | 12 | 27 | 21 | 26 | 26 | 27 | 21 | 26 | 26 | 27 | 21 | 106 |
| % | 25.5 | 13.0 | 20.5 | 22.0 | 10.0 | 18.5 | 18.5 | 11.0 | 4.0 | 26.5 | 8.0 | 11.0 | 24.0 | 22.0 | 24.0 | 24.0 | 27.0 | 21.0 | 26.0 | 26.0 | 27.0 | 21.0 | 100 |

(2) 石錐

石錐は 23 点認定した。I 類は 2 点 (8.7%)、II 類は 16 点 (69.5%)、III 類は 4 点 (14.4%) である。錐部の加工状態は全て両面加工である。素材剥片の形状が判明するものでは、錐部は末端に作出された例が多いが、素材の打面部に作出する例が 1 点 (87 年第 91 図 240)、側辺に錐部を作出する例が 3 点 (87 年第 141 図 543、87 年第 315 図 1438、第 16 図 1608) ある。II 類では尖端部の摩滅以外につまみ部の薄い縁辺に微細剥離痕を有するものが多い。これは不定形石器 II B₂ 類、II D₂ 類など錐状尖端部を有する種類にも確認でき、手持ち保持の際の使用痕と考えられる。II 類の尖端部の摩滅は線条痕が見られるほど顕著なものはほとんどなく、手持ちであることが関係しているようと思われる。第 108 図の長幅分布は不定形石器 II B₂ 類、II D₂ 類をも示しているがほぼ同じ集中部を中心にやや拡散して分布しているので、これらは石錐の範疇でとらえられると考えられる。

(3) 石匙

58 点認定した。定形的剝片石器 (316 点) の 18% を占める。形態が付かる 50 点の組成比は I 類が 15 点 (30%)、II 類が 11 点 (22%)、

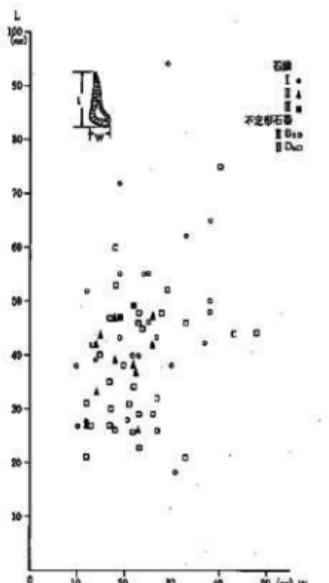


第 105 図 石錐、小型尖頭器の長幅分布

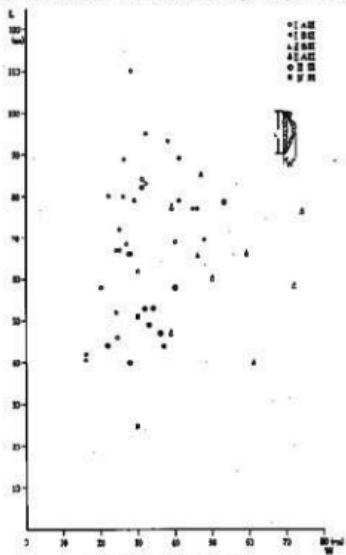
| | A | B | C | T |
|------|----|----|---|----|
| I A1 | 6 | 1 | 2 | 9 |
| I A2 | 0 | 1 | 0 | 1 |
| I A3 | 0 | 3 | 0 | 3 |
| I B | 4 | 6 | 2 | 12 |
| IC | 0 | 0 | 0 | 0 |
| II A | 3 | 1 | 1 | 5 |
| II B | 0 | 4 | 0 | 4 |
| T | 13 | 16 | 5 | 34 |



第 107 図 石錐の素材の用い方



第108図 石器の長幅分布（不定形石器 II B₁, II D₁類を含む）



第109図 石匙の長幅分布

III類は8点(16%)、IV類は4点(8%)となる。

つまみ部の作出位置は素材剥邊の打点側にある例が多いが、末端に作出する例(87年第27図62)や横位に作出する例も少数ある。I類は縦長剥片を使用した例がある(87年第27図62、第32図1612、第65図1725、第17図1134)。他の種類については特定の素材利用法は見い出せない。

この時期の遺構から出土している石匙は二次加工の精粗の差が極めて大きい。精製の石匙(87年第27図62、87年第18図31、87年第18図35、第32図1612、第65図1725、第17図1134、第18図1502)は縦長剥片を素材とした例が多く、良質の珪質頁岩が使用されている。これらは縄文時代前期前葉の石匙に類似するが、遺構覆土への混入にしては数が多く、また第29号住居跡から出土した石匙はIB₁類(87年第40図)のみなので、精製品と粗製品とが、同時期に併存したと考えるのが妥当であろう。二次加工には側辺の交差による尖端部形成以外にあまり共通性はないが、I類には身部がエンドスクリューバー状を呈する種類(87年第18図31、87年第27図62、87年第123図361、第81図2050、第65図1725)が認められる。また折断が二次加工として用いられる例が比較的多く存在する(第128図参照)。

前述のようにIB₁類とIV類の複数の尖端部を作出する型式とは前期前葉に属する。

訂正 1987 年度の小梁川遺跡縄文時代遺構編(1)の報告書の属性表には石匙 II A 類と石匙 II B 類とが逆に表記されているので訂正する。

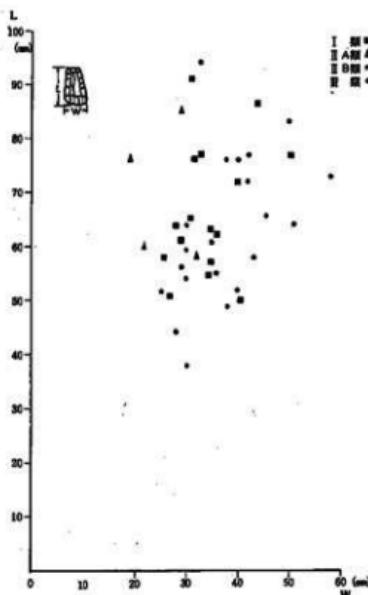
| 誤 | | 正 | |
|-------|-----|----------------------|------------------------|
| 第18図 | 31 | 石匙 II A ₂ | → 石匙 II B ₂ |
| 第115図 | 362 | 石匙 II A ₂ | → 石匙 II B ₂ |

(4) 篦状石器

44 点出土している。定形的な剥片石器 (316 点) の中で 14% を占める。形態が判明する 43 点の組成は I 類が 16 点 (37%)、II A 類が 4 点 (9%)、II B 類が 6 点 (13%)、III 類が 17 点 (40%) となる。素材の使い方がわかる 26 点の中で、刃部が素材剥片の末端部に作出される例が多いが、打面側に作出される例が 4 点、側面に作出される例が 4 点存在する。箒状石器の長幅分布を第 110 図に示す。I 類は分布が集中するのに対して、III 類は分散する。

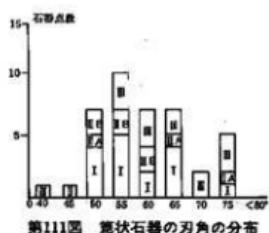
41 点の完形品の二次加工状態を見ると、両面加工が 11 点 (27%)、腹面側に素材面が残る半両面加工が 28 点 (68%)、片面加工が 2 点 (5%)

で両面加工および半両面加工が多い。刃部も片面加工は 5 点 (12%) だけで、他は同形な剥離が連続する小鋸歯状の両面加工となる。このため刃角も小さくなり、50° ~ 65° に分布の中心がある (第 111 図)。以上から、両面加工・小鋸歯状の刃角の小さい刃部というこの時期の箒状石器の特徴が指摘できる。これは、着柄して使用される定形的なスクレイバーである前期前葉の箒状石器 (宮城県教育委員会 1986b) と比較して機能刃部の性格が大きく異なっていると考えられる。小鋸歯状の刃部はスクレイビングには不適であり、これらの作業にはスクレイバーエッジを有する不定形石器 II A 類が代わって使用された可能性がある。また小鋸歯状の両面加工の刃部を有する不定形石器 II I 類は、この時期の箒状石器の刃部と類似している。不定形石器 II I 類が不定形石器 II 類の中で 9.2% とやや高い比率を占めることは、箒状石器の刃部の変化と関係があると考えられる。



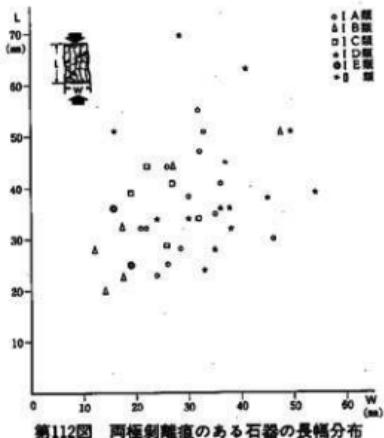
第110図 箕状石器の長幅分布

(5) 磨製石斧



12点認定した。3点は破片である。IB類の1366(第49図)は擦り切りの痕跡があり、薄手のIB類は全てこの技術が使用された可能性がある。また82(87年第32図)、1350(第9図)には研磨および敲打以前の剥離痕がある。刃部に線条痕またはボリッシュが認められる例が多い。I類は破損率が高く完形なのは1366(第49図)だけである。

II類は2点ある。断面は不整形で、擦り切りによって作られたものではない。特に、1127(第21図)は刃部以外に研磨痕ではなく素材は扁平な礫であろう。



(6) 両極剥離痕のある石器

両極剥離痕のある石器は43点抽出され、定形的な剥片石器(316点)の14%を占める。このなかには、1171(不定形石器III_D類、第15図、折断に縦の両極剥離が行われている)、1163(不定形石器II_E類、第19図、折断に横の両極剥離が行われている)、1023(二次加工のある剥片、87年第324図、素材が両極剥離で取られている)、1335(石核III類、第10図、両極打法が用いられている)は含まれていない。小梁川遺跡では石核に両極打法が用いられている例は極めて少ない。したがって

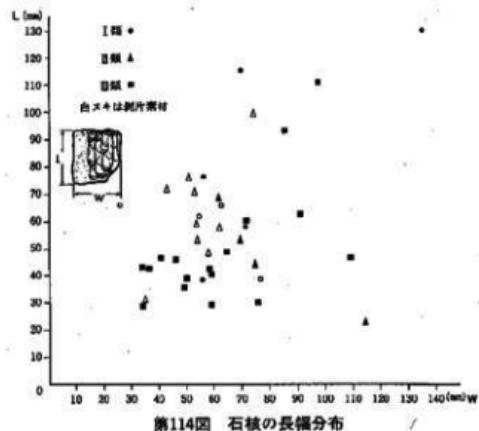


両極剥離痕を有する石器の大半はビエスエスキューとして楔的な用途に用いられたものであったと考えられるが、平坦面を有する種類が比較的多く存在する。IC類は1対の線状の刃部を有する楔型石器の破損品と考えられるが、IB類、ID類のように両極剥離以前の平坦面を有するものが9点(21%)存在する。特にID類(87年第113図415、第14図156)は両端に平坦面を有し、楔としての機能を有したかについては疑問が残る。対となる刃部が2対以上作出されるII類は、重幅グラフ(第112図)で幅広い部分に集中する。刃部にはある程度の幅が必要であったことがわかる。3対の刃部を有するII類(第15図1598、87年第101図264、第89図1877)は対応する刃部は全て大小関係でまとまり、形に規格性がある。これらが意図的に形成された形であるか、使用の結果によるものかは明確ではないが、整形のための剥離は顕著ではない。3対の刃部は同時に機能し、破損による刃部の転移ではない。類例については不明である。

(1) 石核

53点認定した。今回の分析では剥片との接合を行っていないので、剥片生産技術については不明な点が多い。第114図に石核の長幅分布を示す。長幅それぞれ80mm以上で大形の群(A類)とそれ以下の小形の群(B類)とに分類される。またII類はI、III類に比して大きさにまとまりがあることがわかる。III類のB群(III B類)は消費され尽くした残核が大半であるが、III類のA群(III A類)には剥離作業が継続して行えると推定される例が多い。A群のそのような石核は石質にも問題が無いようでありなぜ剥離作業が中断されたかは不明だが、消費されるに従ってIII類の石核はIII A類からIII B類に移行したと考える。これに対しIB類の7点のうち4点、II B類の11点のうち8点は剥片素材である。消費され尽くした残核は極めて少なく、これらは剥離作業当初からかなり小形だったと考える。したがってIA類、II A類は消費されるのにしたがって、各々IB類、II B類に移行したのではなく、III B類に移行したと考えられる。ただし、II類は大きさにまとまりがあり、剥離作業当初から小形の石核だった可能性がある。

小梁川遺跡の石核の分析から以下のような剥片生産技術の特徴を指摘できる。大形の石核を



第114図 石核の長幅分布

用いた剥片生産では1面または2面の剥離作業面を固定的に一貫して使用する例は少ない。大形の石核では当初は固定的であっても、剥離が進行するにつれて、剥離作業面が多数設定され、その剥離作業面に対し任意に複数の打面を作出し剥片生産が進められる規則性の無い方法に移行する。それに対し、剥片素材の小形の石核では1面または2面の作業面を固定的に使用する方法が比較的多く用いられる。

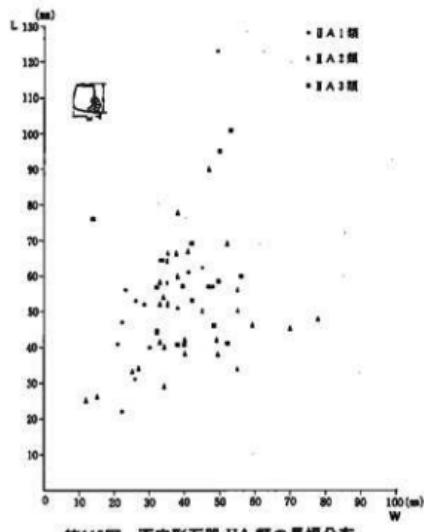
(3) 不定形石器 II A類

不定形石器 II A類はいわゆるスクレイバーエッジを有する石器で69点認定した。これらは不定形石器 II 類(292点)の中で24%と比較的高い比率を占める。IIA₁類はいわゆるエンドスクレイバーで17点ある。これらは縦長の剥片素材であることは一致するが、形態には変化が大きい。刃部は強い丸凸刃を呈する。IIA₂類はいわゆるスクレイバーで38点ある。これらの刃部も弱い凸刃を呈するものが大半である。また横長の剥片素材の斜め末端に強い丸凸刃を作出した例(第12図1572、第22図1164)があり、これらは柄着以外ではIIA₃類と同様の機能を果たすと考える。IIA₃類は粗雑なスクレイバーエッジを持つもので、14点認定した。IIA₃類と同様に弱い丸凸刃を作出したものが多い。IIA₃類では刃部の一定の角度が確保されれば、小剥離のみで省略される傾向がある。1189(第27図)では打面と背面との角度を利用し、丸凸刃を作出している。1176(第20図)では腹面と背面との角度を利用して、小剥離で刃部を作出している。

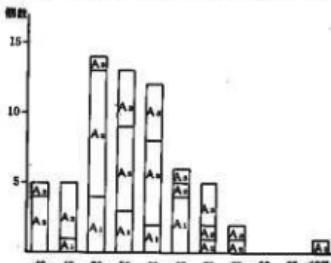
IIA類の刃部の角度は45°から65°に集中する(第116図)。刃部にはポリッシュ等の使用痕が顕著に見られる資料が多い。

(4) 不定形石器 II B類

錐状の尖端部を有する不定形石器で、46点認定した。形態的には(a) 縦長の剥片の末端に尖端部を作出する種類(1573、1592)、(b) 横長の剥片の斜め末端に尖端



第115図 不定形石器 II A類の長幅分布



部を作出する種類(233)、(c) 1対のノッチにより短い尖端部を作出する種類(320)に細分できる(第96図)。I B₂類は定形石器の「石錐」に極めて類似し、尖端部の摩滅や、周辺部の微細剥離痕などの使用痕も共通する。

(10) 不定形石器 II C類

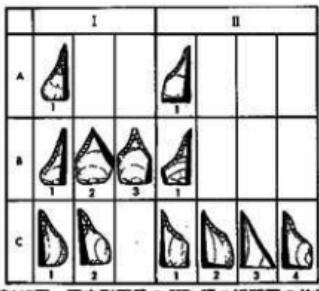
連続した小剥離で小尖端部を単独または複数作岡する不定形石器を II C類とし 11 点認定した。不定形石器 II 類の中で 3.7%を占める。大形と小形(87年第120図379、第45図1191、第78図1680など)とがあるが、大形はかなり厚手の剥片を用いる例が多い。また、不定形石器 II B 類が素材剥片の末端の収斂部に尖端部を作岡している例が多いのに対し、II 類は素材の側辺の小突起部を尖端部としてそのまま利用している例が多く、素材の大きさに対して尖端部作岡のための加工が極めて小さい(87年第124図384、第61図1080、第30図1152、第64図1210、第73図1538)。尖端部は偏平で短く錐状ではないが、主要な尖端部に微細剥離痕やボリッシュ等の使用痕を有する例が 6 点(55%)有り、これら的小尖端部を中心として使用されたと考える。

(11) 不定形石器 II D類

尖端部作岡に折断面が直接的に関与している不定形石器を II D類とし、II D₁類は 20 点、II D₂類は 39 点、合計 59 点認定した。これらは不定形石器 II 類(292 点)の 20.1%とかなり高い比率を占める。

不定形石器 II D₁類: 錐状尖端部以外の尖端部を有する種類で尖端部の形状、および大きさの変化が大きい。このうち 2 種類は類型化可能である。(a) 不定形石器 II C類の尖端部作岡に折断面が関与する種類(第37図1549、第71図1433)、(b) 素材の形態を利用し、全体が正三角形を呈する小形の種類(第5図1486、第15図1171、第83図1266、第5図1586、第39図1649)。II D₁類には第31図2028や第46図1439のように極めて大形の種類がある。

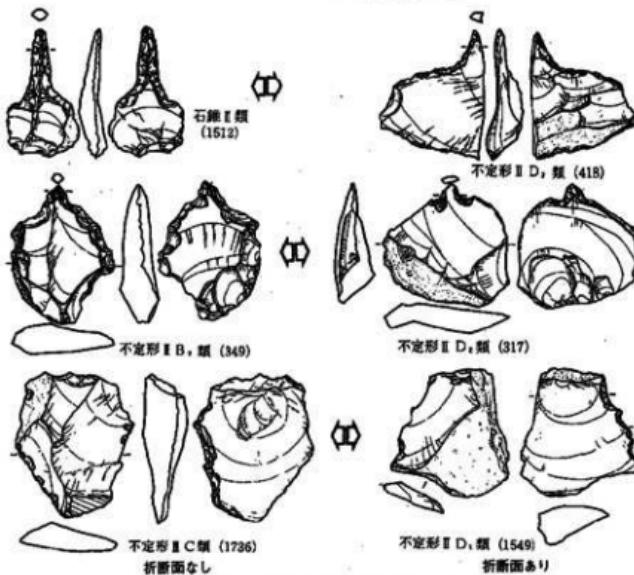
不定形石器 II D₂類: 錐状尖端部を有する種類で、形態的に「石錐」に類似する。長幅比でも II D₂類は「石錐」と同様の分布域にやや散漫に分布する(第108図)。第117図に尖端部の作岡に関与する折断の位置を示す。A類は打面側に、B類は末端側に、C類は側辺に尖端部を作岡する種類で、I 類は折断面が 1 面、II 類は折断面が 2 面の種類である。詳細な説明は行わないが、折断箇所は極めて多様なことがわかる。このような尖端部作岡に関与する多様な折断面はどのような点で有効なのか。第118図に錐状尖端部を有する石錐、不定形石器 II B₂類、II D₂類の尖端部作岡の位置を示す。折断が行なわれない石錐および II B₂類では素材の末端側に尖端部が作岡される例が多いのに対し、折断のある II D₂類は側辺に尖端部が作岡される例が多い。通常の二次加工では細長い錐状尖端部は縦長などの幅の狭い素材でしか作岡できないのに対し、作岡が困難な素材でも縦辺に鋭角に交差する折断面を作岡すれば、尖端部が容易に作岡されることを意味している。したがって折断技術を使用することによって尖端部作岡石器の素材となる剥片の対



第117図 不定形石器のIID類の折断面の位置

| | 不定形IID類 | 石錐 | 不定形IID類 |
|---|-----------|-----------|-----------|
| A | 9 28% | 3 10% | 3 14% |
| B | 7 22% | 11 65% | 12 53% |
| C | 15 50% | 3 18% | 6 27% |
| T | 32 | 17 | 22 |

第118図 尖端部作出の位置
(石錐、不定形石器 IID類、IIID類)



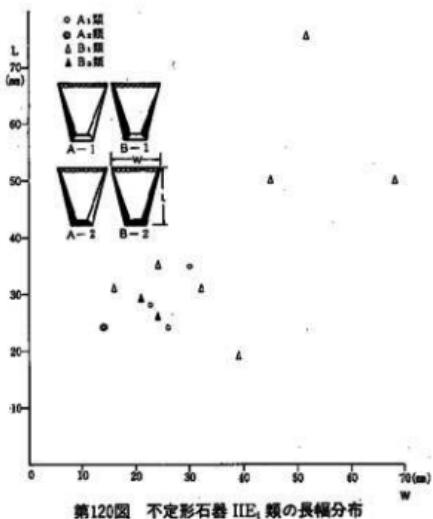
第119図 不定形石器 IID類と類似器種

象範囲を拡張することができるという点で有効なのだ。

これらの不定形石器 II D類には、他に分類した定形および不定形石器に折断面の有無以外では類似する例が多い(第119図)。このような点から、尖端部作出石器に関する折断面の存否は技術的には重要な差であるが、当時の製作者はかなり自由に折断技術を使用、または既存の折れ面を利用していたと考えられ、当時の製作者の志向していた石器はおそらく石錐および不定形石器 II B類、II C類だったと考えられる。

(12) 不定形石器 II E類

素材剥片の1縁辺または複数縁辺を折断し、鋭い縁辺に二次加工を施し刃部とする切り出し形の石器で、13点認定した。不定形石器 II類(292点)の4.4%を占める。

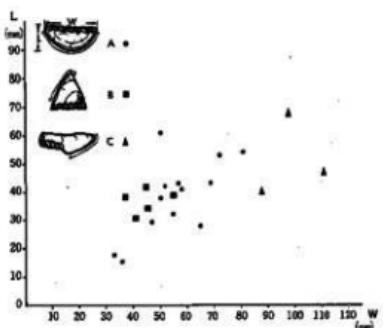


第120図 不定期石器 IIIE類の長幅分布

工が無く素材の縁辺を利用する例もある。基部に加工がある例(87年第123図353、87年第112図416、第45図1298)があり、IIIE類は着柄されて使用された可能性が大きい。

このように折断面を有する二次加工ある剥片石器は聖山遺跡で阿子島(1979)によって注目され「折断調整石器」と仮称されている。不定形石器IIIE類はこの範疇に属する器種であるが、聖山遺跡出土の「折断調整石器」と比較して折断以外の顕著を二次加工が多く、定形的な様相が強い。

(13) 不定期石器 IIIE類



第121図 不定期石器 IIF類の長幅分布

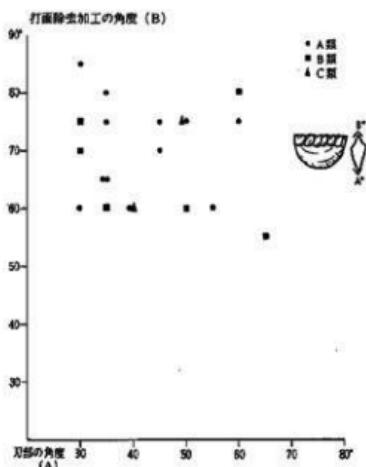
長幅分布では(a) 大形品(87年第122図464、87年第123図353、第19図1163)と(b) 小形品(87年第112図416など)とに区分される。大形品には直刃が多い。折断面の位置と数とによって細分する。折断面を1側辺に有する例をA類、2側辺に有する例をB類とし、基部に折断面を有しない例を1類、有する例を2類とする(第120図)。A類は小形のみだが、B類は大形と小形がある。1163(第19図)では1側辺の折断に両極打法が用いられている。

刃部には連続した二次加工が施され、小鋸歯状を呈するものが多いが、2104(第36図)のように明確な二次加

折断面を打面としてステップ状の二次加工が施される不定形石器で、4点認定した(1.3%)。剥片素材の石核より小さく、石核ではないが、折断面を打面とする二次加工が機能刃部とは考え難い。片面加工の鋸歯状の二次加工を有する例がある(87年第102図304)。数が少なく不明な点が多い。

(14) 不定期石器 IIF類

素材剥片の打面部を背腹両面からやや奥まで入る不整な二次加工で除去し、素材の



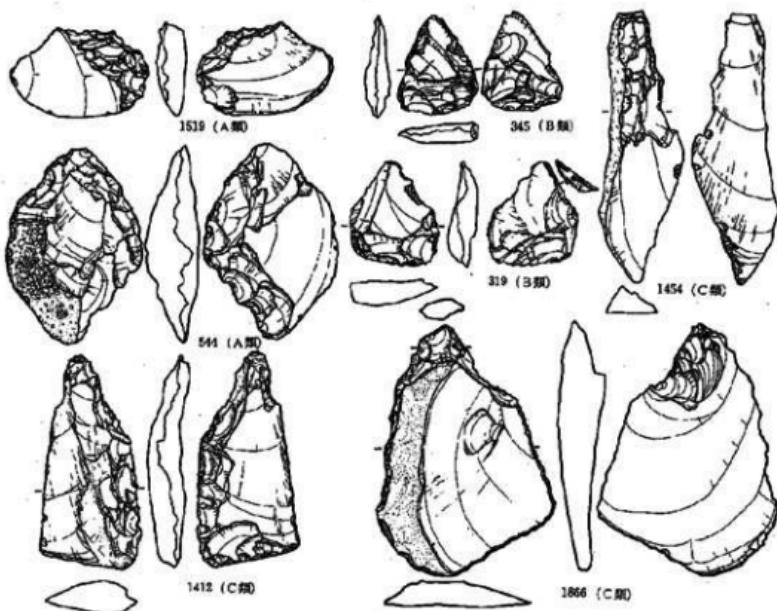
第122図 不定形石器 II F類の打面除去加工と刃部の角度

鋭い縁辺に剥離や微細剥離痕などの使用痕がある不定形石器を II F類とし、20点認定した。これは不定形石器 II類(292点)の6.8%を占める。

II F類の共通する主要な二次加工は打面部付近のやや奥まで入る不整な鋸歯状・交互剥離状の二次加工と鋭い縁辺を利用した刃部作出のための小剥離(微細剥離痕のみの場合がある)である。この2つの二次加工部位の関係から3類型に分類される。

A類；打面部の二次加工と刃部とがほぼ平行し、半月形を呈する。

B類；打面部の二次加工と刃部とがほぼ直交し、三角形を呈する。



第123図 不定形石器 II F類の類別

C類；打面部の二次加工の延長上に刃部が作出され、小刀状を呈する。

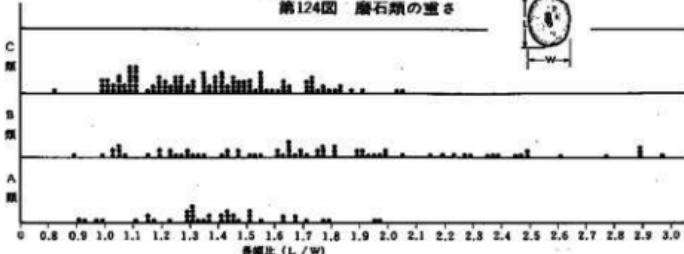
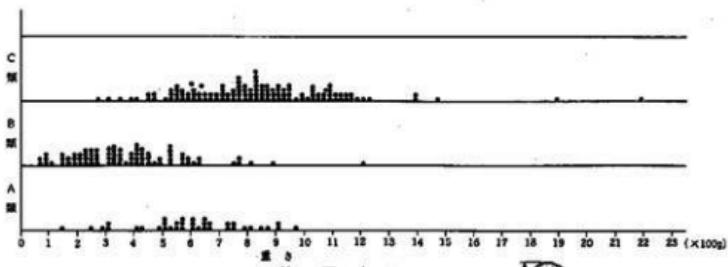
長幅比では、A類が散漫に分布するのに対し、B類は集中する傾向がある(第121図)。また、打面部付近の二次加工は 60° ～ 80° に分布し(第122図)、やや奥まで入る鋸歯状を呈し、刃潰し(プランティング)のためだけの加工とは考えられない。むしろ打面部を除去し着柄を容易にするための一種の基部加工とするのが妥当であろう。特にA類とC類とは、着柄され文字どおり「ナイフ」のような使用がなされたと考える。刃部にはポリッシュや微細剥離痕が一般的に見られるが、C類では特に著しい。

これらのII F類は素材の鋭い縁を刃部とし、刃潰しのための二次加工があるという特徴から「ナイフ状石器」(岡村、柳沢 1986) または「バックドブレード」の一種に相当する。縄文時代の石器は一般的に、二次加工部位がそのまま機能刃部と認定される場合が多いが、II F類はこのような解釈が必ずしも正しくないことを示唆している。

(15) 不定形石器III類

同形で連続した剥離の両面加工によって、立面観が規則正しい小鋸歯状を呈する不定形石器をIII類として27点認定した。これは不定形石器II類のうち9.2%を占める。

素材剥片は小形だが、厚手のものが多い。素材の形態から(a) 正方形に近いもの(87年第124図394、87年第113図315など)、(b) 長方形に近いもの(87年第56図171、第50図1363など)、(c) す



べて破損しているが、尖端部が作出された可能性があるもの(87年第328図2018、第3図1206、87年第100図275)などが指摘できる。

二次加工はネガティブバルブの目立たないやや奥まで入る剥離が連続する点で、スクレイバーエッジに類似するが両面加工である点が異なる。(a)、(b)類の使用痕は顕著ではない。(c)類はすべて破損しているので全体形は不明だが、刃部に共通して著しい摩滅が見られる点が注目される。

(16) 磨凹敲石類

磨凹敲石類は248点認定した。定形石器と不定形石器との合計899点の28%を占める。分類の項で述べたように、これらの礫石器類は加工されることはほとんど無く、素材が選択された段階ですでにそれらの形態および属性は決定され(後藤 1979a)、その後は使用による変化が属性に影響を与える。したがって考察ではこれらの礫石器の有する属性に注目して分析を行う。第126図に磨凹敲石類の幅厚比のグラフを示す。明確ではないが3群に分類できる。

A群；幅80～120mm、厚さ30～50mm、幅厚比2付近に分布するもの。

B群；幅50～80mm、厚さ30～60mm、幅厚比1.5付近に分布するもの。

C群；幅70～110mm、厚さ50～80mm、幅厚比1.5付近に分布するもの。

次に分類された3群の長幅比を見る(第125図)。A、C類は長幅比1～1.5の円ないし梢円形となる。B類は長幅比1～2に散漫に分布する丸みのあるものと長幅比2以上に分布する細長い形態のものに分類できる。A類は300～900g、B類は100～700g、C類は400～1200gに分布する(第124図)。

各石器類に観察される使用痕には、磨面、凹部、敲打痕が主要で、他にザラ面、線状痕がある。第126図に示すように特定の使用痕が特定の類型と結び付く傾向は見られない。

小梁川遺跡の礫石器の特徴として多様な石材が使用されている点が指摘される。肉眼による分類であるが以下の5種類に区分できる。

- ① 安山岩質凝灰岩、変質安山岩、砂質凝灰岩等の淡緑色を呈する緻密で軟質のもの。
- ② 石英安山岩、安山岩等の灰白色を呈する多孔質で硬質のもの。
- ③ 花崗岩等の緻密で硬質のもの。
- ④ 片麻岩等の緻密で硬質のもの。
- ⑤ 石英安山岩質凝灰岩等の大粒の礫を含み、多孔質で軟質のもの。

①は最も一般的で緻密・軟質なので使用痕が最も顕著の残る石質である。⑤は多孔質・軟質で、部分的に硬質の礫を含むので、磨面の礫が突出する状況が見られる。これに対し、②、③、④の硬質のものは使用痕が明確でないものが多い。これらの分布を見ると(第127図)、軟質の①、⑤は各類に分布するが、硬質の②、③、④はB類の比較的厚みのある部分およびC類を中

心に分布することがわかる。この理由として硬質の②、③、④は使用（とくに磨面を形成する使用）によって摩耗する程度が少ないのに対し、軟質の①、⑤は使用により著しく摩耗することが指摘できる。特に断面形が梢円形で扁平のものは2磨面を有するものが多く、軟質のC類は厚みが減少しA類に遷移する。B類でもこの傾向が認められるが断面が多角形で厚みのあるB類は4磨面を有するものが多く、厚みと共に幅が減少し、C群→A群の遷移ほど明確ではないと考えられる。

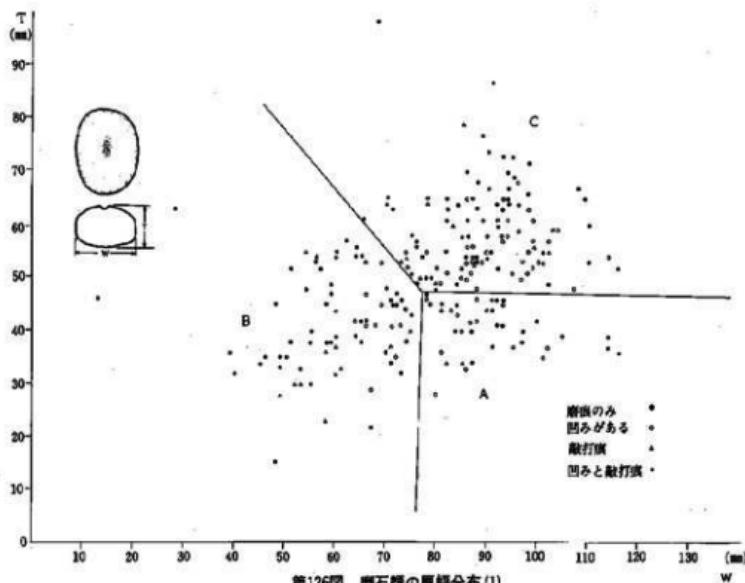
小梁川遺跡の磨凹敲石類の幅厚分布によるA、B、C群の差は長さ・重量などの属性とは余り相関関係は見い出せない。また使用痕による分類とも明確な相関関係は見い出せない。したがって小梁川遺跡の磨凹敲石類の現在有する属性は選択の段階に決定された属性そのものではなく、むしろ磨面を形成する使用の要因が大きく関与していると考えられる。これは今熊野遺跡の磨石類の分析結果（宮城県教育委員会 1986b）と一致する。

磨石類は1個体が多目的に利用される多くの機能を有した石器であったと考えられる。住居内で磨石類が石皿とセットで出土する例はかなりあり、一部は石皿とセットで使用されたと考えられる。磨石類の有する凹み部と共通する凹み部を周辺に有する石皿（第32図1203、第18図1506）があり両者の関係を示している。また、「ザラ面」と仮称した側面付近に粗く狭い平坦面を形成する磨面と敲打痕との中間的な使用痕（粗いドットのスクリーントーンで示す）は硬く平坦な面での被加工物の粉碎により形成されたと考えられ、セットとなる道具は石皿a類であった可能性が高い。しかし、磨石類に対して石皿は極めて少数であり、磨石類単独の使用法も多かったと考えられる。また形態的な点だけではなく、石質（軟・硬、緻密・粗粒）の差も用途によって分化していた可能性がある。

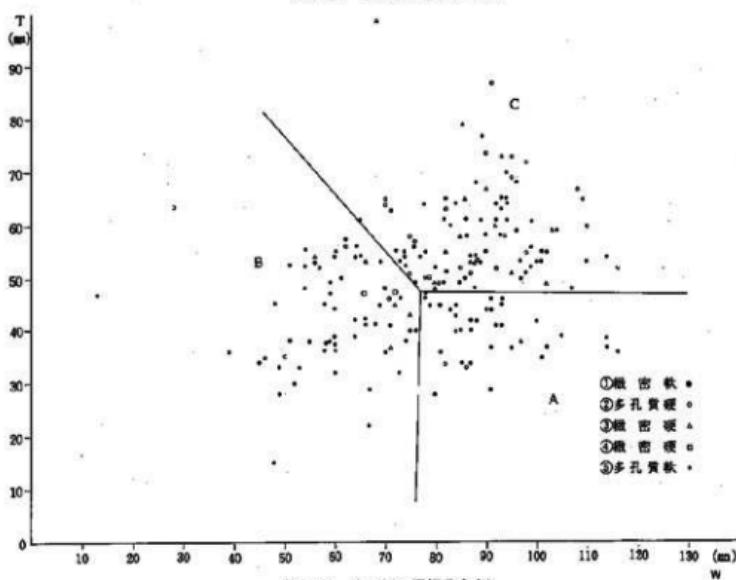
（1）石皿

石皿は9点を認定した。機能面が平面を呈するa類と機能面が著しく凹面を呈するb類とに区分できる。a類は大形が、b類は小形が多く、素材選択の段階では両者には既に差がある。また機能面の使用痕ではa類は光沢のある磨面が一般的であるが、b類は線条痕がある磨面が多い。したがって使用頻度のより機能面が形状がa類からb類に変化したのではなく、両者は異なる機能を当初から有していたと考えられる。a類は当初から広い平坦面を必要とし、その面を維持することが必要なような作業が行われたと考えられる。それに対し b類は当初からある範囲の凹面を必要と、凹面を作出するための成形加工があった可能性もある。

a類には石皿の周辺に凹み部が連続して作出される例がある（第32図1203、第18図1506）。これらは凹石の凹み部に類似する。想像を逞しくすれば、周辺部で堅果類の破碎が、中央部でそれらの粉碎が行われたように、複合した機能を有していた可能性がある。



第126図 磨石類の厚幅分布(1)



第127図 磨石類の厚幅分布(2)

(18) 瓢状耳飾

蛇紋岩製の块状耳飾の破損品が1点出土している(第20図1139)。器面には研磨とは異なる、方向が一定しない擦痕がある。破損面が研磨されている。穿孔が2箇所にあり、恐らく破損後に垂飾品に再加工されていると考えられる。しかし、1箇所の穿孔は再加工の研磨面に切られていって、この穿孔の性格は不明である。岩手県滝ノ沢遺跡(北上市教育委員会 1983)でも破損品19点のうち6点(32%)に穿孔があるが、4点は破損面と切り合い(新旧不明)を有している。完形品に当初から穿孔があった可能性もあるが現段階では不明である。

C. 縄文時代前期後葉から中期中葉の石器群の特徴

(1) 不定形石器

縄文時代前期後葉から中期中葉の石器群の特徴として、① 不定形石器II類の増加、② 高比率を占める定形石器の器種および型式の減少、を指摘し、2つの特徴は表裏の関係にあることを指摘した。さらに各器種の分析から、③ 複数の作業面と打面とが作出される石核から剥片が生産されることによる剥片の無規格化、④ 尖端部作出における折断技術の関与に見られる不定形石器II類の器種の固定化、⑤ 篠状石器と不定形石器IIA類とに推定されるように、同様の刃部を有する石器間での定形石器から不定形石器への移行、を指摘した。以上の5つの特徴は相互に影響しながら進展してきた現象であると考えられる。このような諸現象から、特定作業と定形的な石器との固定的な対応関係が弱まり、定形的な石器が從来使用されていた作業内容に定形石器と同様の刃部を有する不定形石器が使用されるような状況を想定できる。皮革の加工に篠状石器に代わって同様のスクレイバーエッジを有する不定形石器IIA類が使用されるようである。このような状況のなかで、不定形石器の量が増大し、器種の固定化が起こったと考える。

全体の形態を余り変化させない不定形石器II類は製作に要する時間も短く、また使用される期間も同様に短かったと考える。不定形石器IIA₁、IIE₁、IIF類は着柄されたらしいが他は手持ちで使用され、使用痕もIIA、IIF、III類以外では顕著ではなく、刃部再生を繰り返して長期間使用する石器は少ないようである。二次加工の形狀は厚手の素材にバレブの発達する交互剥離状の加工や鋸歯状の加工が多く平坦剥離の比率は多くはない。特定作業に対し、雑多な不定形石器を多く用いるこの時期の特徴は定形的で着柄して使用された石器を刃部再生を繰り返し長い長期間固定的に使用する前期前葉の石器群の特徴と比較して大きく変容している。これらは前期前葉から中期中葉の石器群の特徴であって、前期前葉の石器群とも中期後葉の石器群とも明確に異なる点であろう。

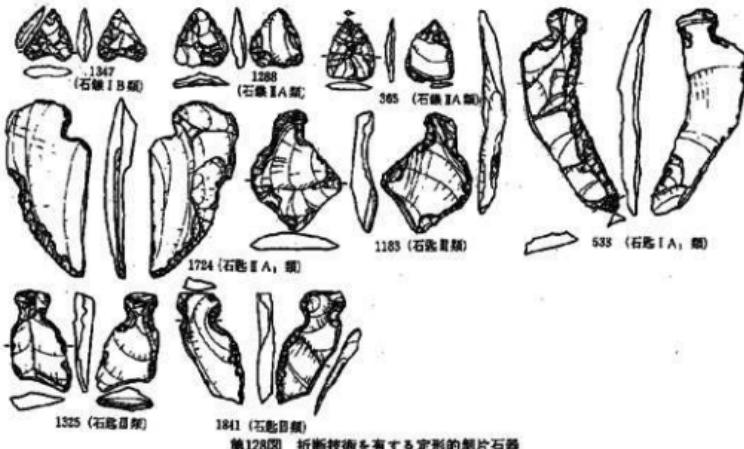
また、剥離が可能な石核が多く残され、珪質頁岩以外の石材が比較的多く使用されているこ

とから、剥片石器の石材の原地調達が比較的強かった時期であると考えられる。石材が豊富か乏しいかによって、複数の用途に使用され、何度も再生される Curated な石器とその場かぎりの目的に合わせて作られ、捨てられる Expedient な石器との比率が決定されるという Bamforth (1986) の仮説から、梶原は宮城県の旧石器の検討を行っている（梶原 1986）。このような観点から小梁川遺跡の前期後葉から中期中葉の時期は石材の原地調達の比率が高まり、粗悪ではあるが豊富な石材を利用して、短期間で製作されるが刃部再生を余り行わずには廃棄される不定形石器 (Expedient な石器) を中心にした石器群を作り上げた時期と言えよう。

(2) 折断技術について

縄文時代の「折断調整石器」は阿子島 (1979)、岡村 (1979) らによって注目され、石器時代全般に認められる (岡村 1979) ことが指摘されている。小梁川遺跡では定形的な剥片石器および不定形石器に折断技術が使用されている。

以下器種ごとに折断面を有する石器について概説する (第128図)。石鏸では二次加工が全周に及び残存するのは少数だが、初期の整形に多用された可能性があり、II類の基部に折断面がある例がある。石匙では I、II、III類に類例があり、533 (IA₁類) は縦長剥片を志向している。1724 (IIA₂類) は尖端作出に関与している。III類の折断の性格は不明だ。両極剥離痕を有する石器では IB類 (1327) ID類 (1561) に破損ではない折断面があるが性格は不明である (第113図)。不定形石器では折断が用いられる類型として IE類、IID類、IIE類、IIE類があり、これらは各器種の考察で説明したので省略する。



第128図 折断技術を有する定形的剥片石器

小梁川遺跡での最大の特徴は折断技術が尖端部作出に関与した石器が39点有り、これらは不定形石器I、II類の合計（341点）の17%を占める点であろう。縄文時代の石器で折断技術が尖端部作出に関与する例は前期前葉に今熊野遺跡において注目されている（宮城県教育委員会1986b）。小梁川遺跡の前期前葉の第29号住居跡でも3点出土している（第103図）。したがって、折断技術が尖端部作出に関与する石器は縄文時代全般を通じて普遍的な存在だったと考えられる。しかし折断技術が石錐（尖端部作出石器）と強く結合して、高い出現率を占める例は小梁川遺跡以外に類例が無い。

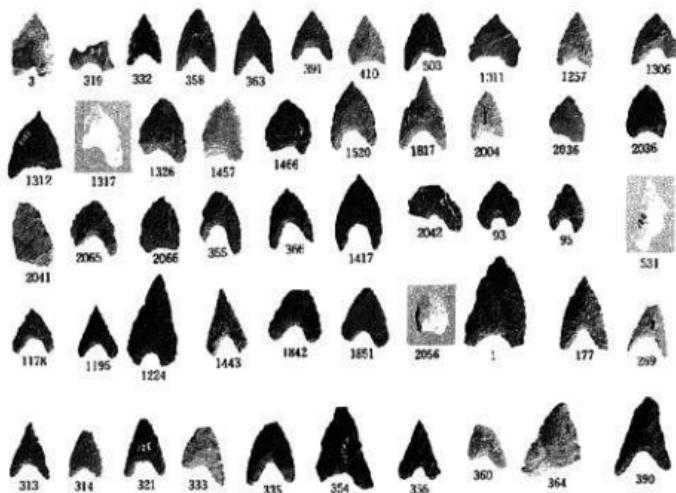
折断技術が関与する尖端部作出石器が縄文時代全般を通じて普遍的である理由は、この技術が尖端部作出にかなり有効であるからだ。尖端部の形成にはそれに見合った幅の狭い素材が必要でそれに適合しない素材では通常の剥離のみで尖端部を作出するのは難しい。しかし折断技術を用い、折断面と素材縁辺との角度を調節すれば、容易に尖端部の粗形が作出できる。このような石器製作法は系譜的に追及できる伝統的な技術よりも、石器製作の経験から不斷に抽出される性格を有していたと考えられる。

また折断技術を有するものと有しないものとに共通の形態が認められることは不定形石器IID類の項で説明した（第119図）。このように、特定器種及び型式の製作に際し、折断技術の採否がかなり自由に行われる点は重要である。小梁川遺跡では複数作業面を設定する石核III類が一般的であることを石核の項で指摘した。このような形態の石核では一定の形状の剥片を連続的に剥離するのは困難で（後藤 1979b）、むしろ雑多な剥片の中から適合する剥片を選択することが一般的だったと考える。必ずしも最適ではない剥片から必要とする形態及び刃部を作出するために、素材形状を大きく変化させる必要があるとき、最も適した方法が折断技術であったと考える。小梁川遺跡の前期後葉から中期中葉の時期に折断技術を有する石器が増加することは剥片生産における剥片の無規格化と関連し、特定の刃部のみを志向する不定形石器の増大の傾向の中で尖端部作出の石器と結合して顕在化したと考えられる。

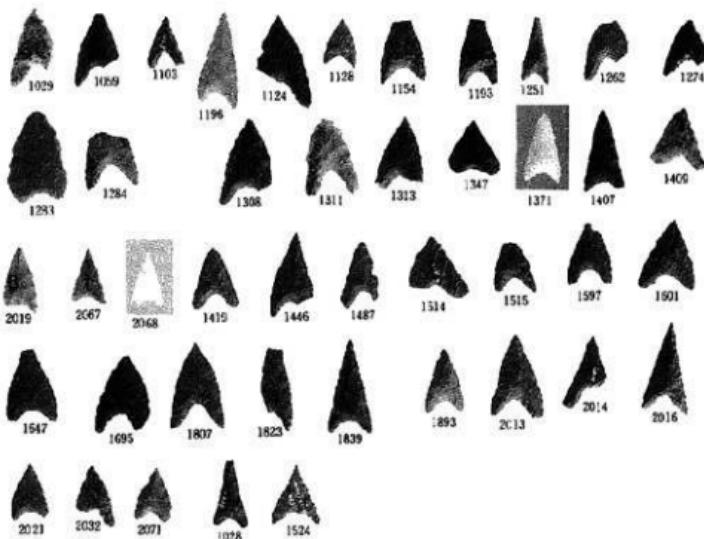
参考・引用文献目録

- 青森県教育委員会（1986）：水木沢遺跡発掘調査報告書 青森県埋蔵文化財調査報告第34集
- 阿子島 香（1979）：折断調整石器 「聖山」 pp. 149～153 東北大学考古学研究会
- いわき市教育委員会（1982）：竹之内遺跡 いわき市埋蔵文化財調査報告書第8集 pp. 61～82
- 岡村 道雄（1979）：縄文時代石器の基礎的研究法とその具体例—その1—東北歴史資料館研究紀要 vol. 5
pp. 1～19
- 岡村・柳沢（1986）：「前期旧石器」の器種分類 馬場塙A遺跡 I pp. 26～35 東北歴史資料館・石器文化談話
- 梶原 洋（1986）：石器群分析の可能性 東北大学埋蔵文化財調査年報2 pp. 62～64 東北大学埋蔵文化財
調査委員会
- 北上市教育委員会（1983）：滝ノ沢遺跡 北上市文化財調査報告第33集 pp. 45
- 後藤 秀一（1979a）：敲石・凹石・磨石 「聖山」 pp. 167～171 東北大学考古学研究会
(1979b)：剥片生産技術 「聖山」 pp. 172～183 東北大学考古学研究会
- 藤本 強（1972）：柴油第二遺跡4号竪穴 東京大学文学部刊「常呂」所収 pp. 273～285
- 宮城県教育委員会（1986a）：小梁川遺跡（古代編） 七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書I 宮城県文化財調査
報告書第107集
- 宮城県教育委員会（1986b）：今熊野遺跡II 縄文・弥生編 宮城県文化財調査報告書第114号
- 宮城県教育委員会（1987a）：中ノ内A遺跡・本星敷遺跡他 東北横断自動車道遺跡調査報告書II 宮城県文化
財調査報告書第121集
- 宮城県教育委員会（1987b）：小梁川遺跡 七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書III 宮城県文化財調査報告書第
122集
- Bamforth, B. (1986) : Technological Efficiency and Tool Curation. American Antiquity 51 (1)
pp. 38-50

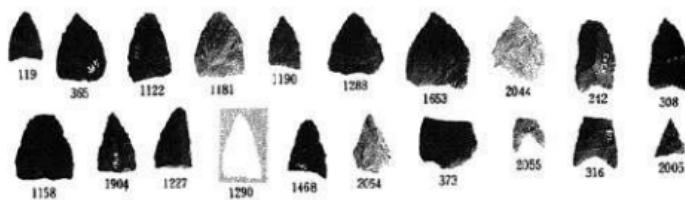
写 真 図 版



写真図版1-1 石器 (3~3066±1 A類、355~2042±1 A₂類、
55~1851±1 A₃類、1~366±1 B類)



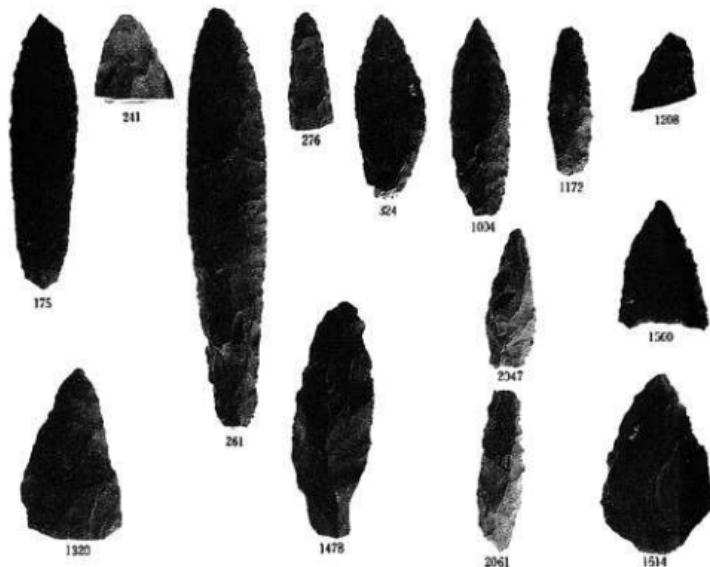
写真図版1-2 石器 (1029~2071±1 B類、1628, 1524±1 C類)



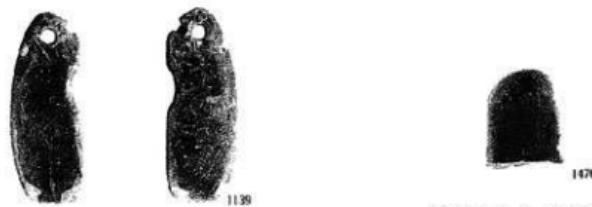
写真図版2-1 石 鋸 (119~2044はA類、212~1227はB類)



写真図版2-2 石 鋸 II類 (局部磨製石鋸) (A)

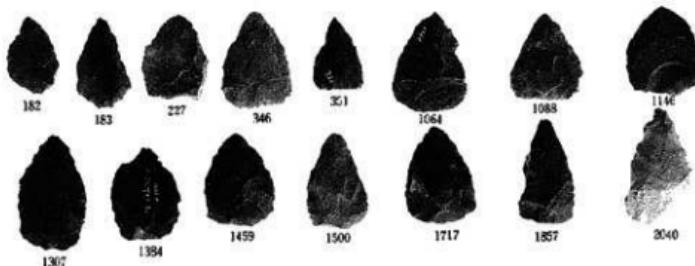


写真図版2-3 尖 頂 器



写真図版 3-1 桟状耳飾

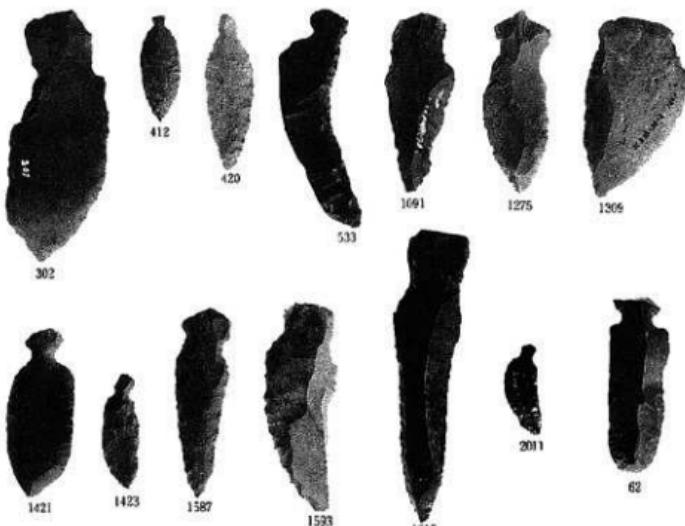
写真図版 3-2 不明石製品



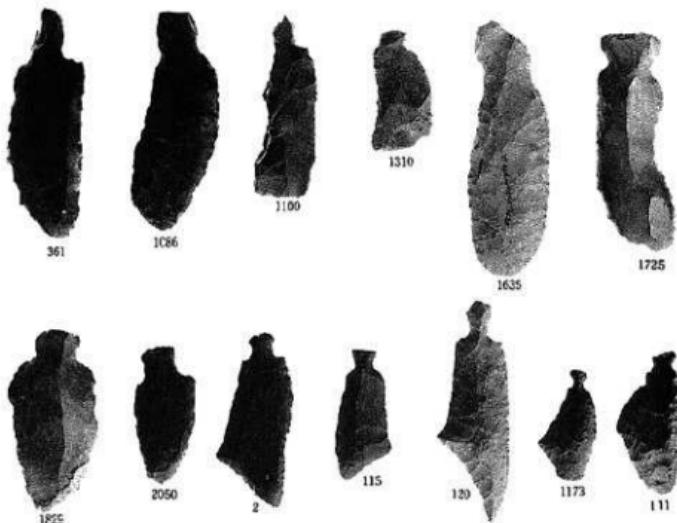
写真図版 3-3 小型尖頭器



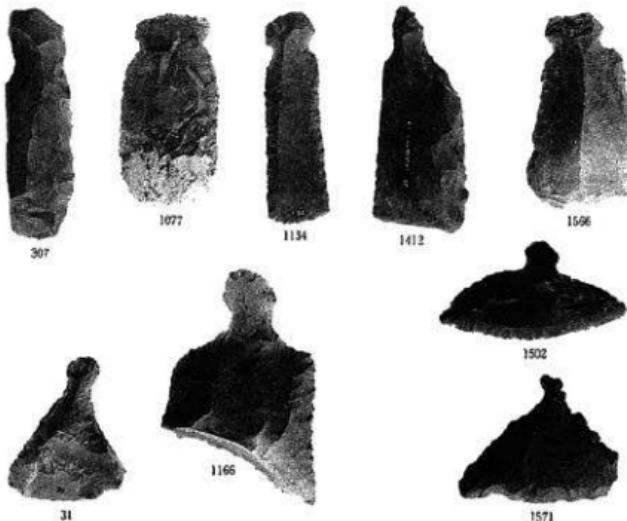
写真図版 3-4 石 鋸



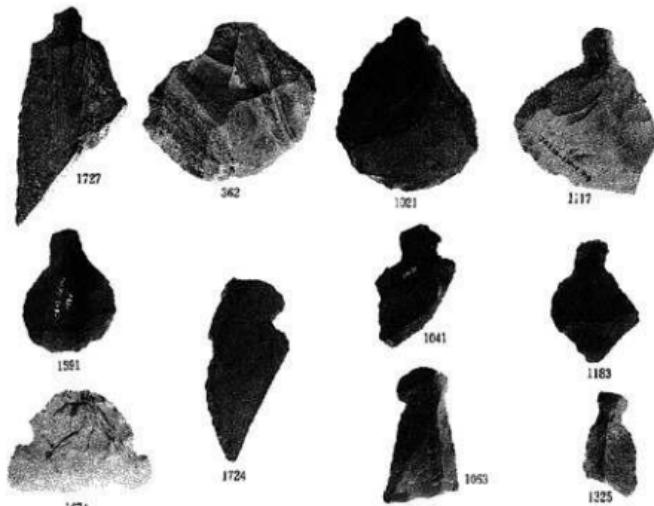
写真図版 4-1 石匙 (302~2011は A類、62は 1A-40)



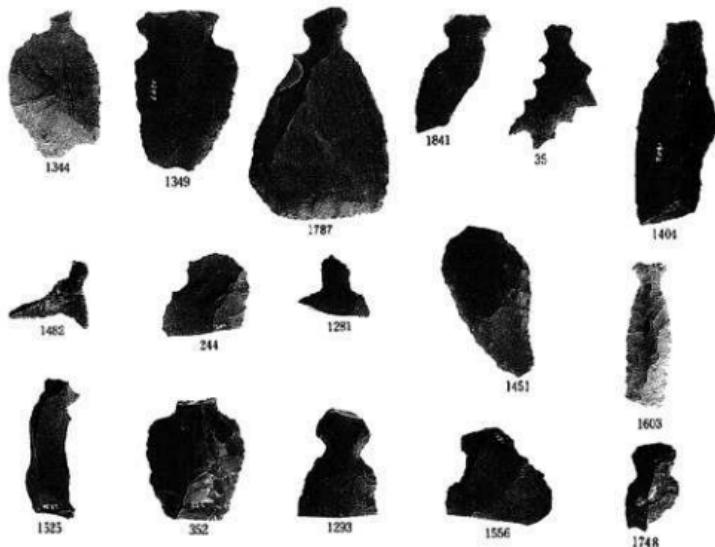
写真図版 4-2 石匙 (361~2050は A類、2~111は B類)



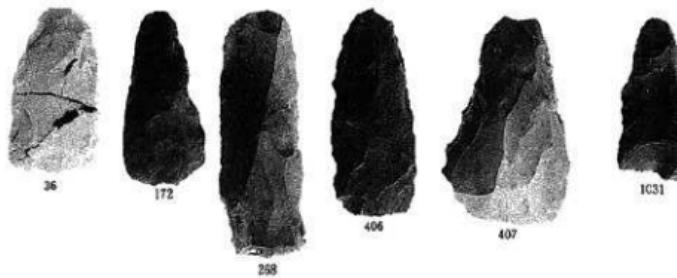
写真図版 5-1 石 起 (307~1566はⅡB, 31~1571はⅢB, 拙)



写真図版 5-2 石 起 (1727はⅡB, 362~1591はⅡB, 拙,
1671~1724はⅢA, 1041~1325はⅢB)

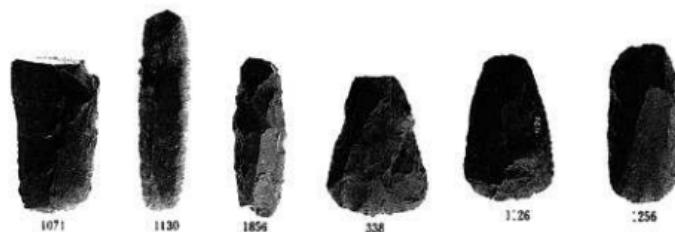
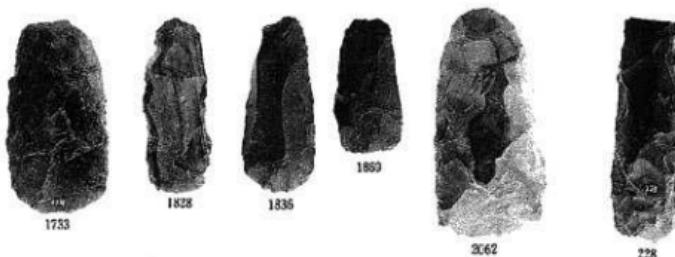


写真図版 6-1 石匙 (1344~1841は貝類、35、1404、1482、1525は骨類)

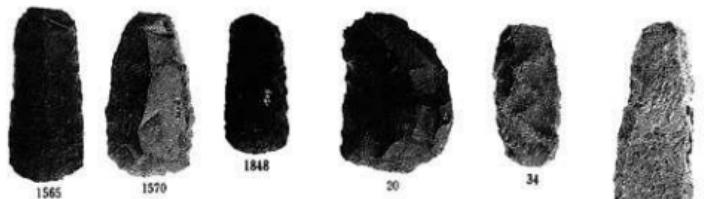


写真図版 6-2 葫芦状石器 (1組)

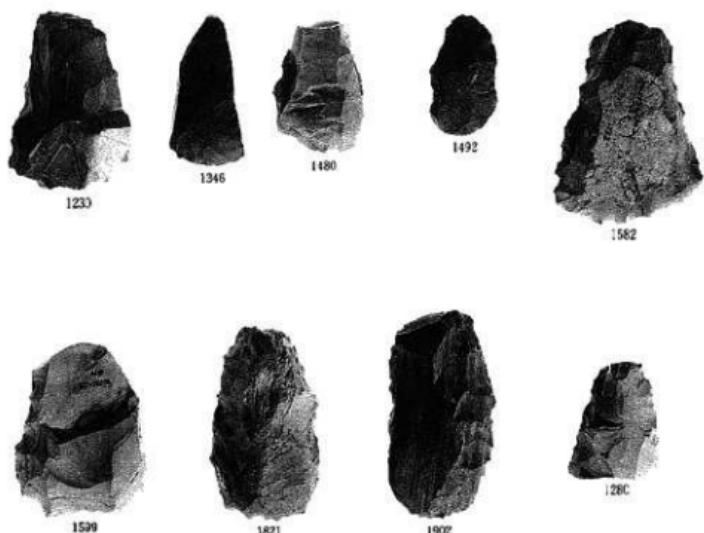




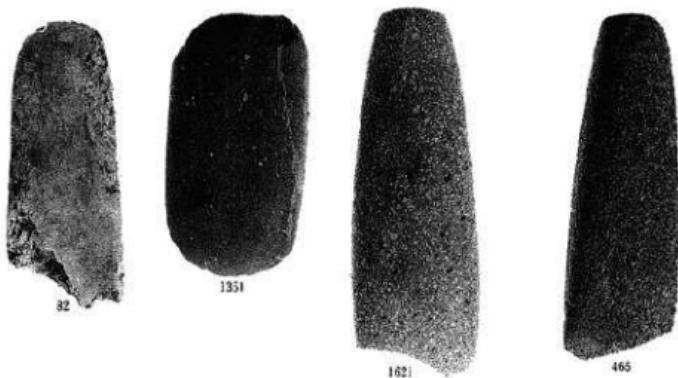
写真図版 7-1 鏊状石器
(1733~2062(+)組, 228~1856(+)組,
338~1256(+)組)



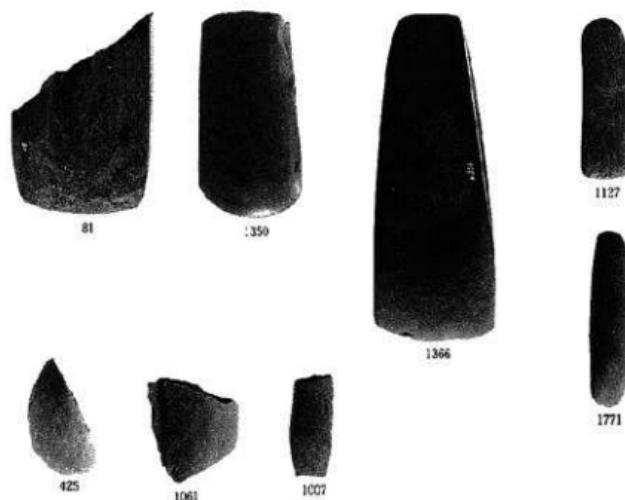
写真図版 7-2 鏊状石器
(1565~1848はII B組, 20~1211はII A組)



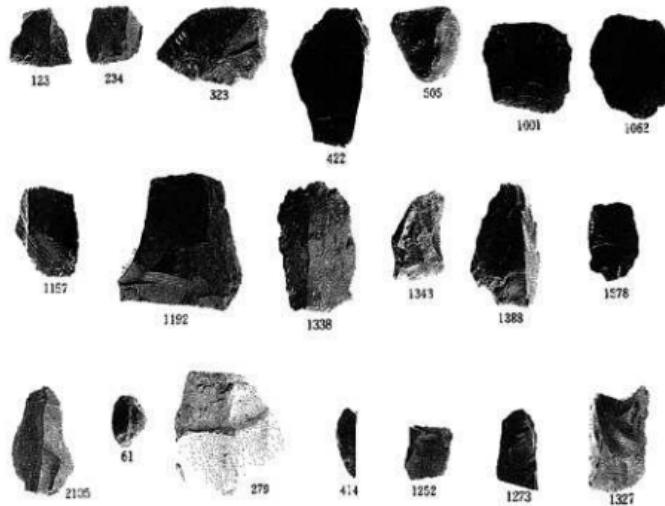
写真図版 8-1 石片状石器 (1230~1902は目録)



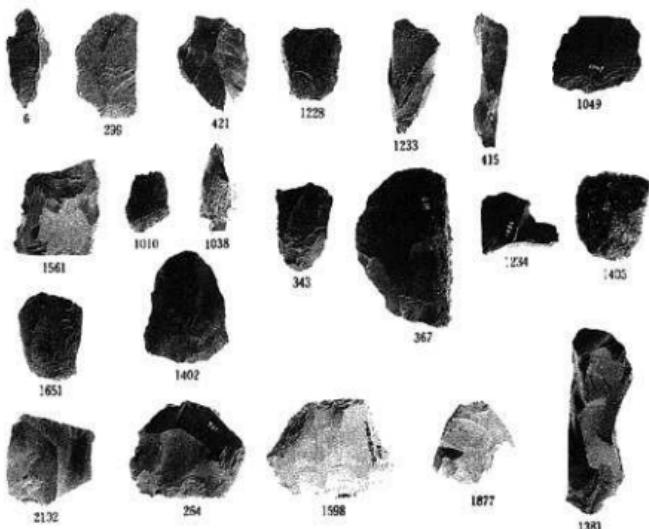
写真図版 8-2 磨製石斧 (1人種)



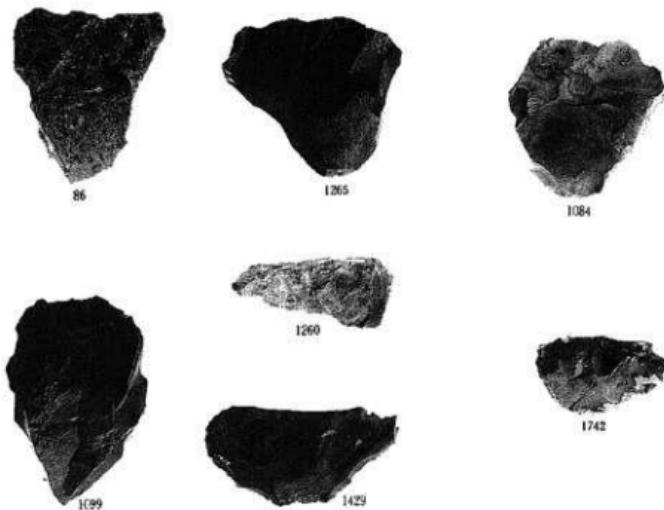
写真図版 9-1 磨製石斧 (81~1366はⅠB型、1127、1771はⅡ型)



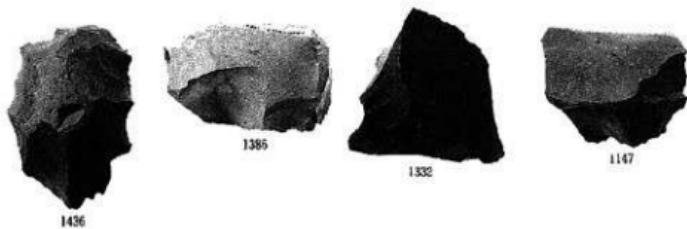
写真図版 9-2 両極削離痕を有する石器 (123~2105はⅠA型、61~1327はⅡB型)



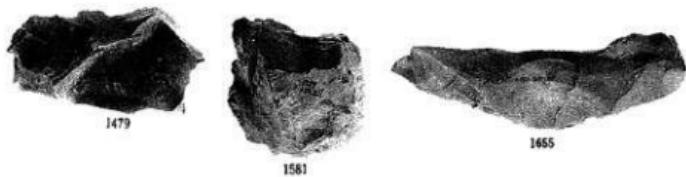
写真図版10-1 両極制離痕を有する石器 (6～1233はⅠC類, 415～1561はⅠD類,
1010, 1038はⅠE類, 343～1381はⅡ類)



写真図版10-2 石核(130)



写真図版11-1 石 核 (II類)



写真図版11-2 石 核 (1479~1792はII類, 277~387はIII類)



1102



1170



1255



1328



1278



1335



1380

写真図版12-1 石 核(直面)



1391



1634



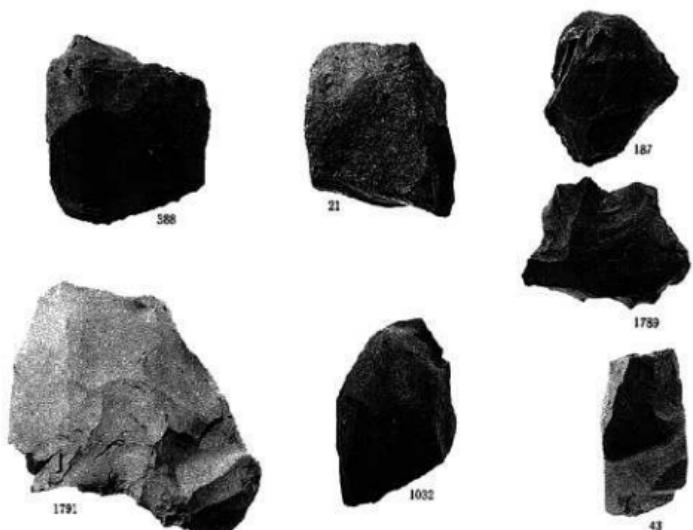
1636



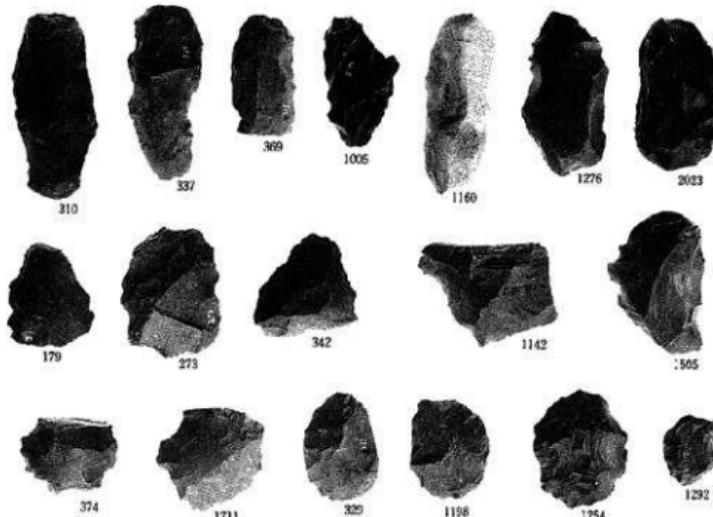
2053



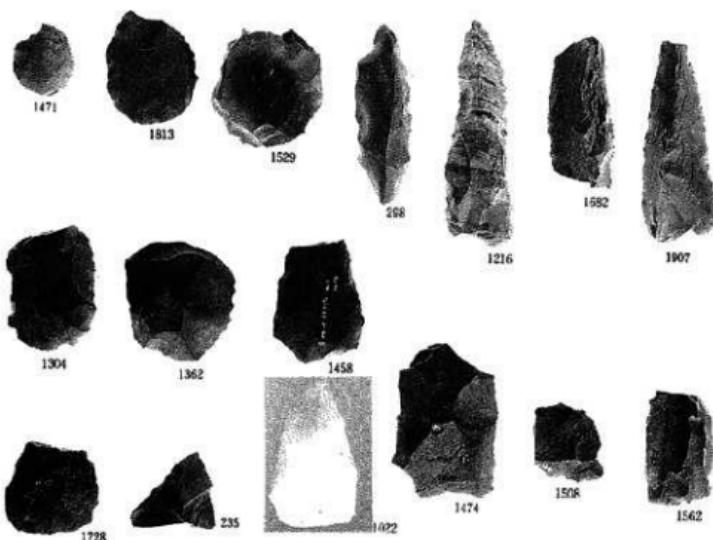
写真図版12-2 石 核(直面)



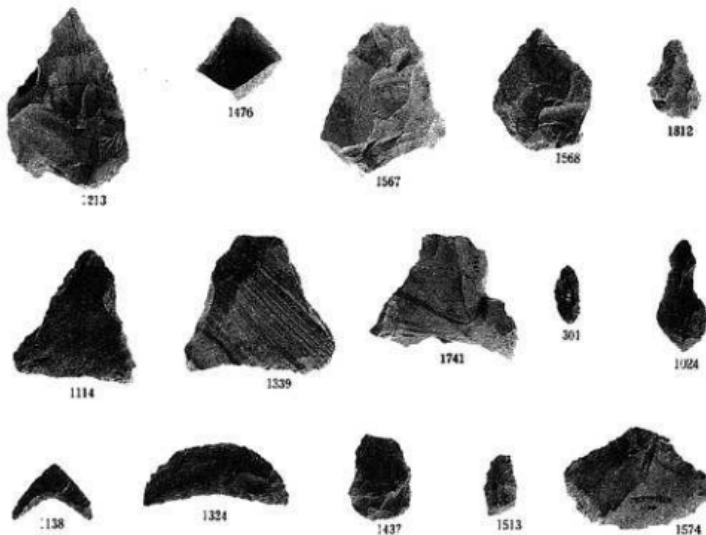
写真図版13-1 石核(分) (43, 1032, 1791はI類, 1789はII類,
21, 187, 588はIII類)



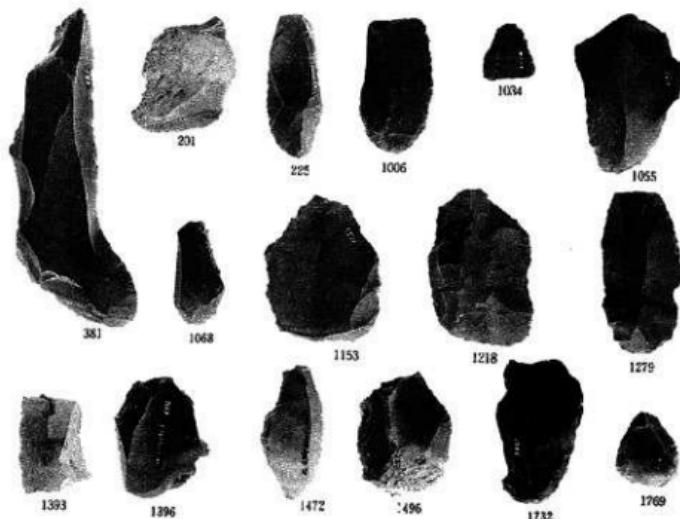
写真図版13-2 不定形I類 (310~2023はIA類, 179~1505はIB類,
374~1711はIC類, 329~1292はIC類)



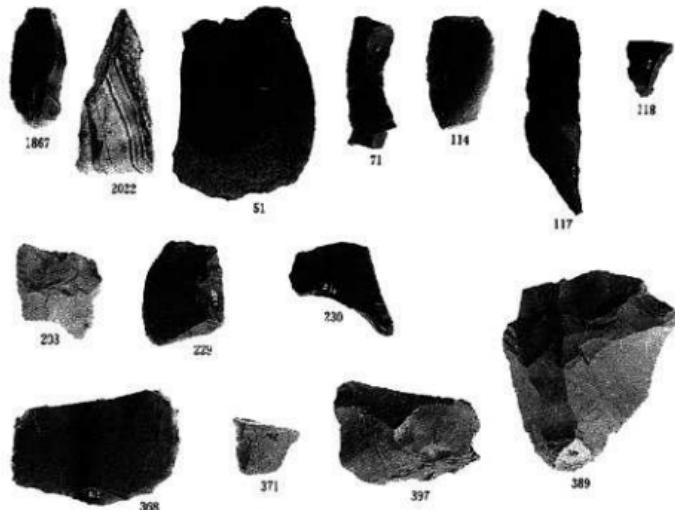
写真図版14-1 不定形Ⅰ類
(1471、1813はⅠC₁類、1529はⅠC₂類、298~1907はⅠD類、
1304~1728はⅠE類、235はⅠF₂類)



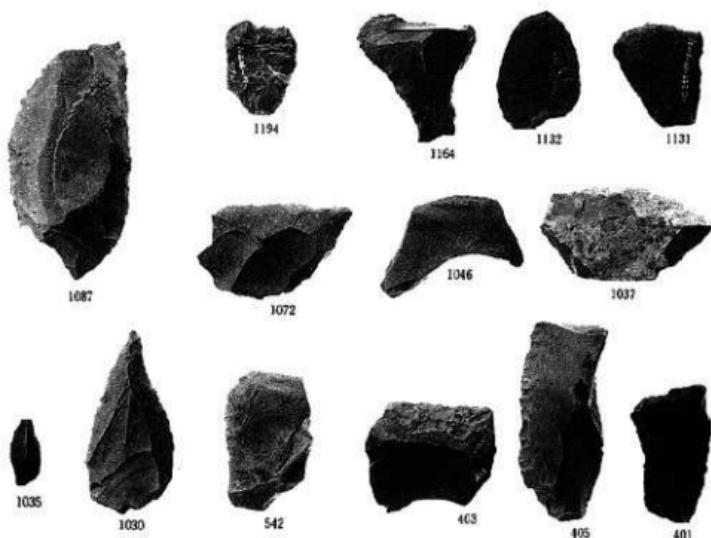
写真図版14-2 不定形Ⅱ類
(1213~1812はⅡF類、1114~1741はⅡG類、301~1574はⅡ類)



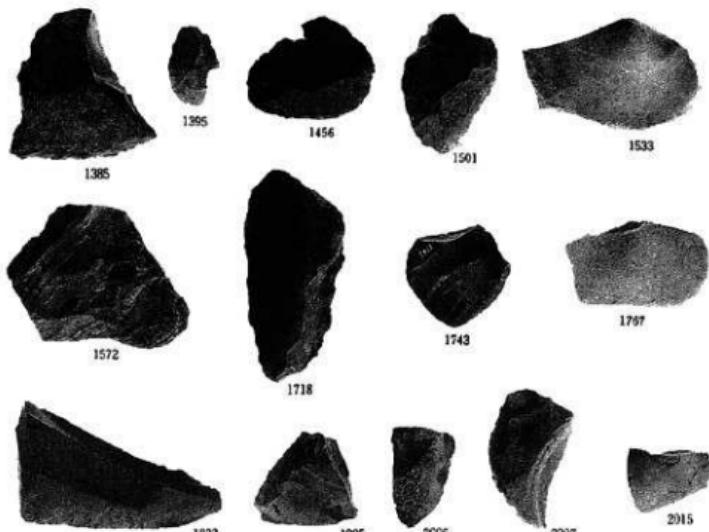
写真図版15-1 不定形IIA類 (II A₁組)



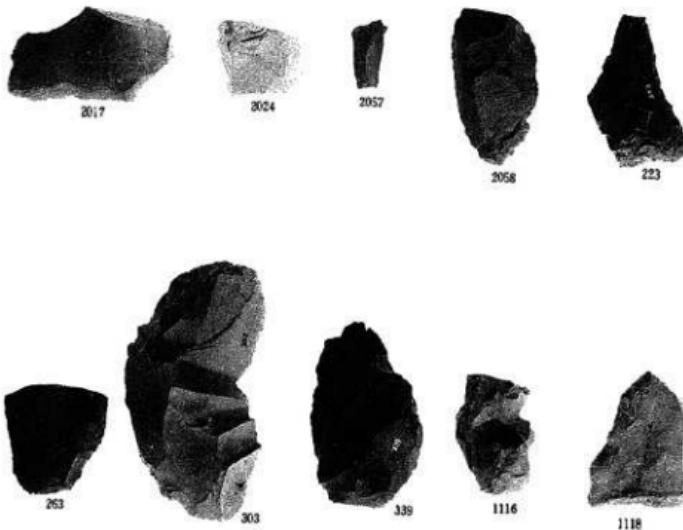
写真図版15-2 不定形IIA類 (1867, 2022はII A₁組, 51-390はII A₂組)



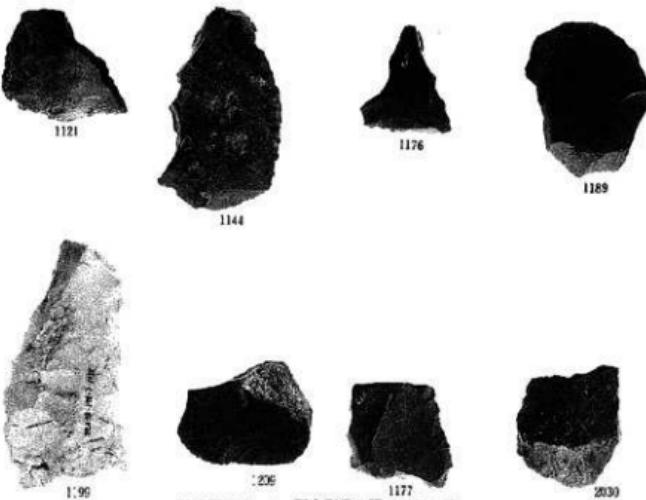
写真図版16-1 不定形II A類 (II Aa組)



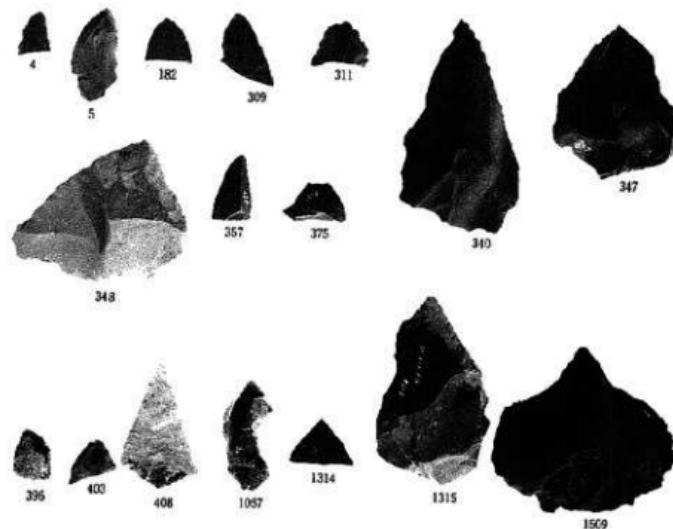
写真図版16-2 不定形II A類 (II Ab組)



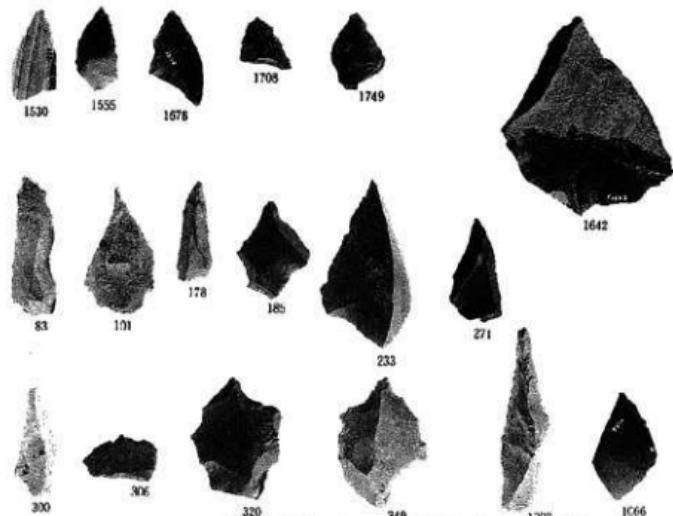
写真図版17-1 不定形II A類 (2617~2058: II A₂組, 223~1118: II A₃組)



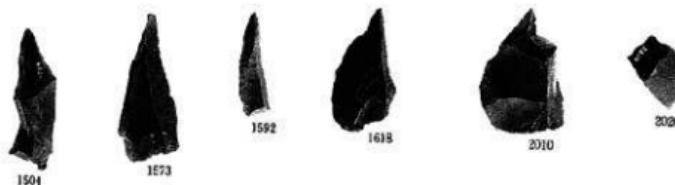
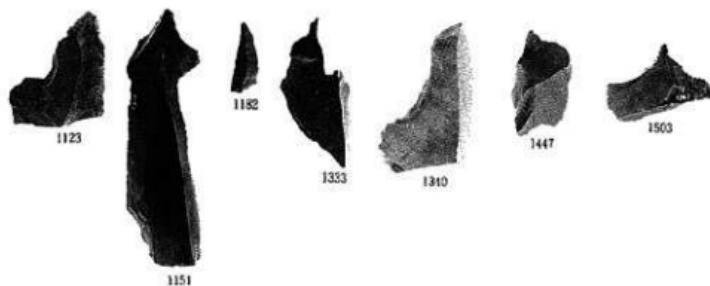
写真図版17-2 不定形II A類 (II A₃組)



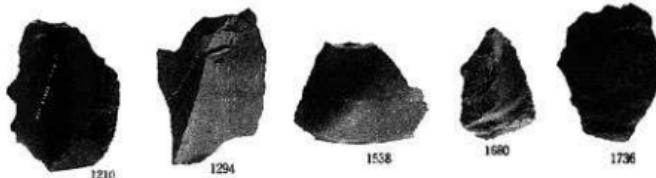
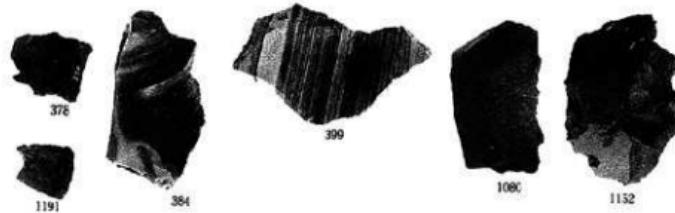
写真図版18-1 不定形II B類 (II B, 加)



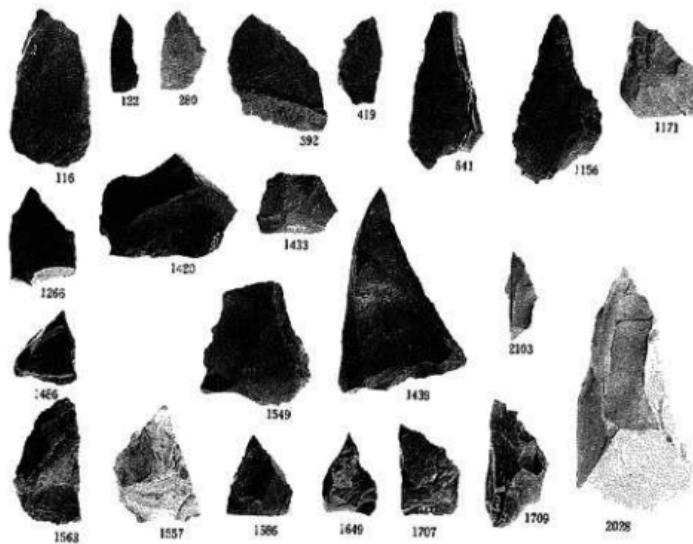
写真図版18-2 不定形II B類 (1530-1749はII B, 加、83-1066はII B, 加)



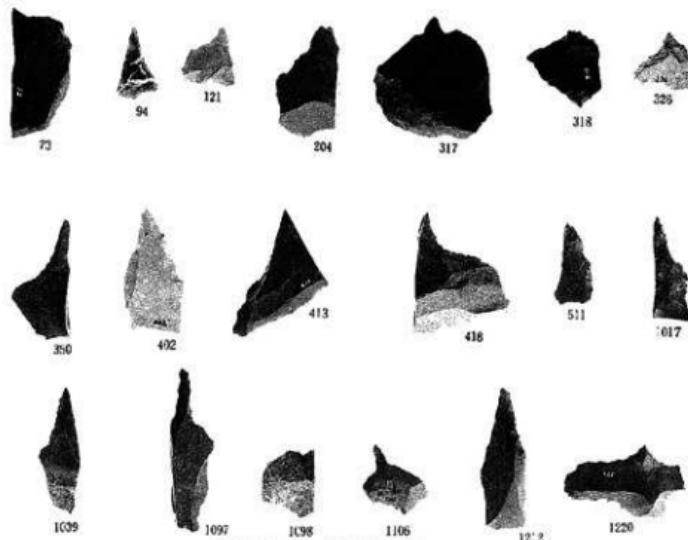
写真図版19-1 不定形ⅡB類 (II B, 1b)



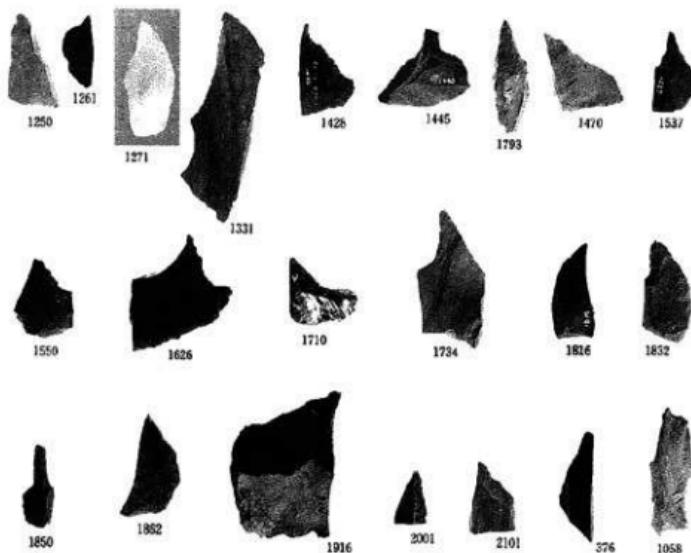
写真図版19-2 不定形ⅡC類



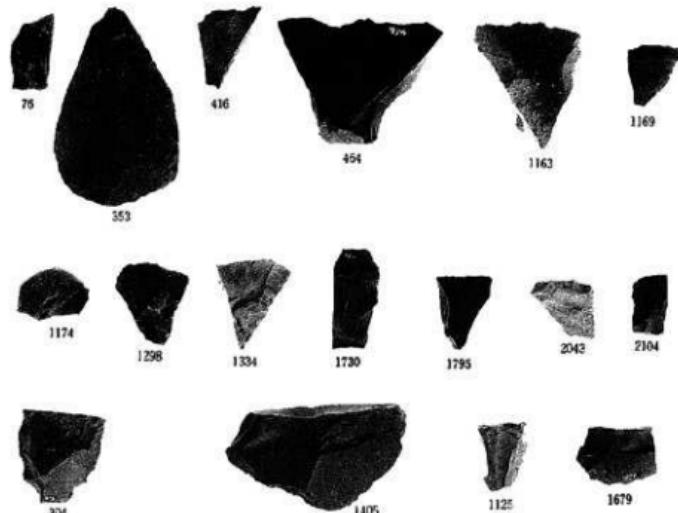
写真図版20-1 不定形Ⅱ D類 (II D₂類)



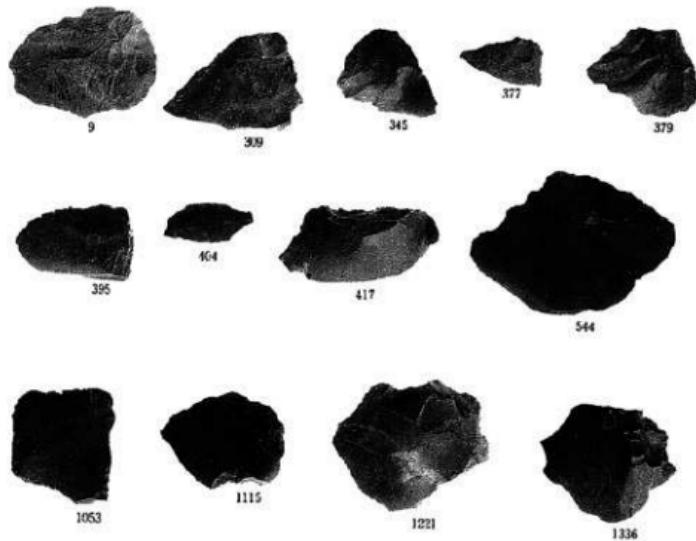
写真図版20-2 不定形Ⅱ D類 (II D₂類)



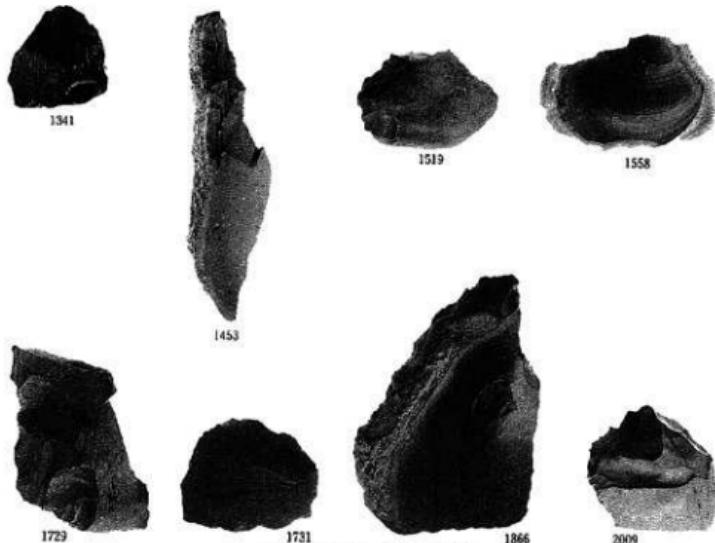
写真図版21-1 不定形II D類 (II D₁組)



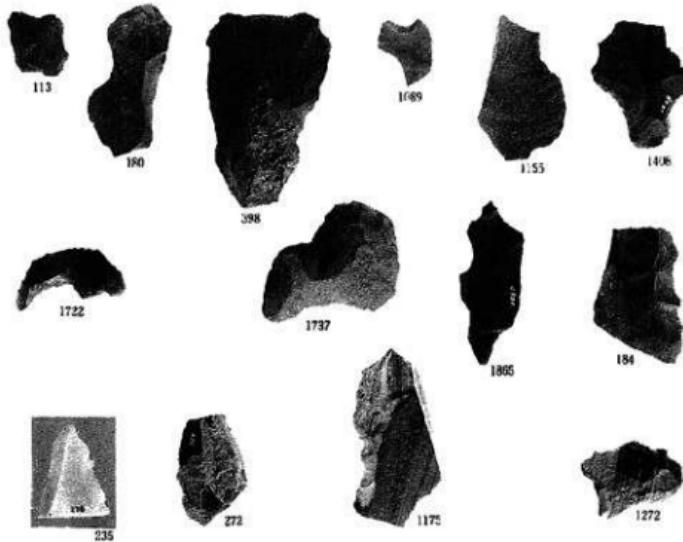
写真図版21-2 不定形II E類 (76-210111 II E類、304-167912 II E₂組)



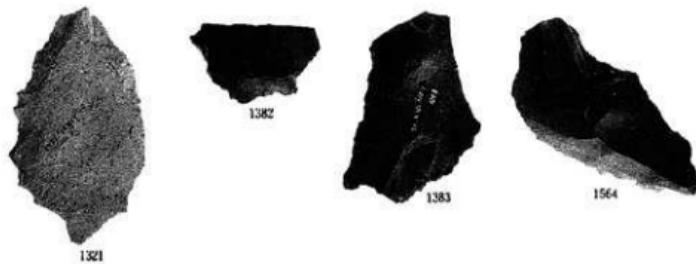
写真図版22-1 不定形ⅡF類



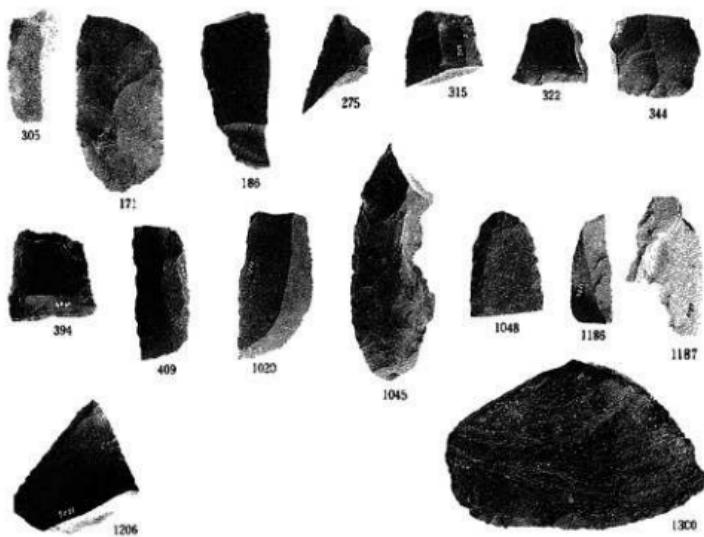
写真図版22-2 不定形ⅡF類



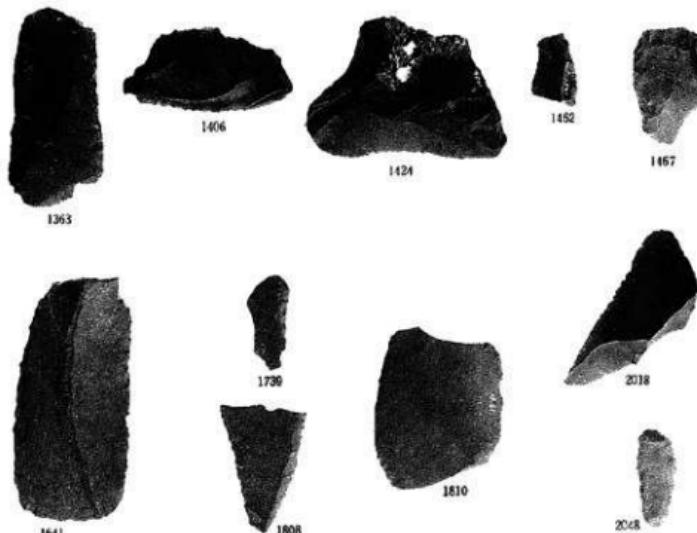
写真図版23-1 不定形ⅡG、ⅡH類：113～1805はⅡG類、184～1272はⅡH類



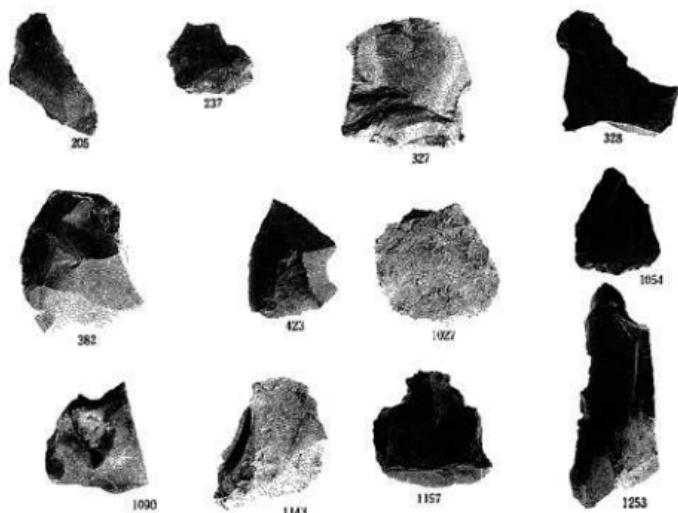
写真図版23-2 不定形ⅡH類



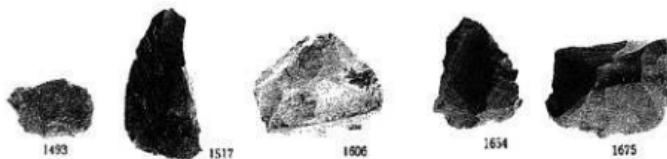
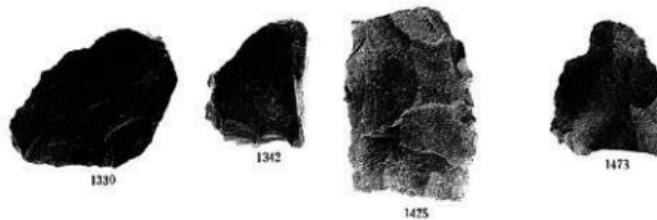
写真図版24-1 不定形Ⅱ類



写真図版24-2 不定形Ⅱ類



写真図版25-1 不定形II J類



写真図版25-2 不定形II J類



1226 有溝石器



1694 盤狀石器



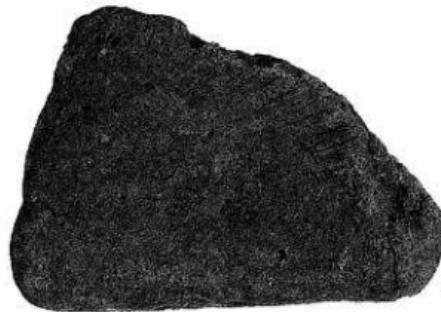
2108 圈狀石斧



1203 石 盡



1506 石 圓



1773 石 盡

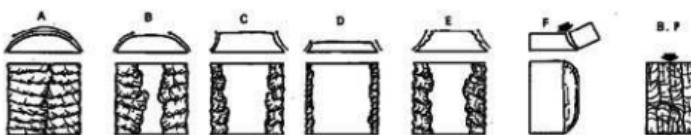
小 梁 川 遺 跡

—遺物包含層石器編—

目 次

| | |
|------------------|-----|
| I. 層位について | 786 |
| II. 東側遺物包含層出土の石器 | 789 |
| 1. 石 錐 | 789 |
| 2. 小型尖頭器、尖頭器 | 794 |
| 3. 石 錐 | 795 |
| 4. 石 匙 | 800 |
| 5. 篦状石器 | 801 |
| 6. 両極剥離痕ある石器 | 814 |
| 7. 不定形石器 | 817 |
| 8. 石 核 | 847 |
| 9. 磨製石斧、石製品 | 860 |
| 10. 碓石器 | 860 |
| III. 考 察 | 885 |
| IV. まとめ・参考文献 | 899 |
| V. 写真図版 | 901 |

*本編で使用した実測図の縮尺は、剥片石器・磨製石斧・石製品が2/3(写真図版は1/2)、礫石器が1/4(写真図版は2/3)である。また、本文・観察表中で使用している二次加工形状の記号とスクリーントーン(S.Tと略記)の用例は、原則として下図に示す通りだが、剥片石器でスクリーントーンを貼付した図および用例からはずれるものについては観察表中にその都度内容を示している。観察表に示した計測値は全て最大値である。また()内の数値は現存値を示している。なお遺物の実測・トレースには庄子裕子、桜井美枝、長谷川範明の各氏から協力を得た。



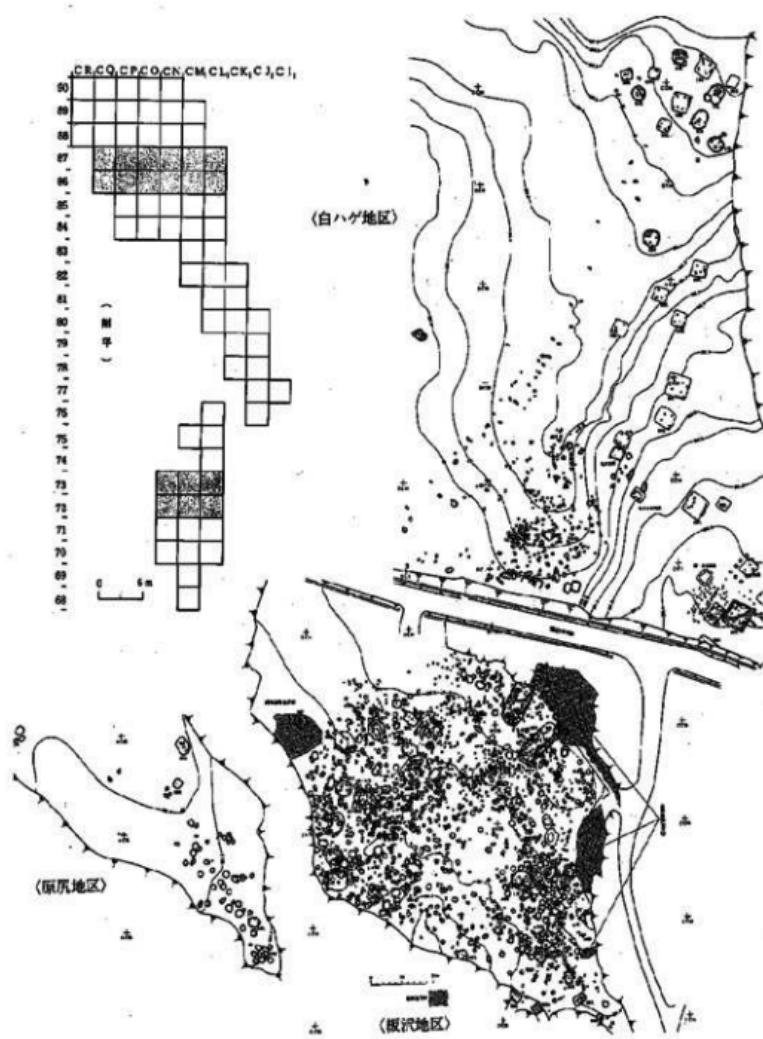
A: パルブが平面で、器体に沿って奥まで入る
 刻離。常にのはば全削を要す。
 B: パルブが平面で、器体に沿ってやや奥まで
 入る刻離。
 C: パルブが前述する急角度の刻離。

D: 剥離に沿う小刻離。
 E: スタップ状の剥離。
 F: 折れ裏(折断面)。
 G: B.P: 同延刻離。

斧縫
光沢
滑けはじけ
付着物

純粹均整型
つぶれ
磨石器の端面

(二次加工形状の種類とスクリーントーンの使用例)



第1図 造橋配置図・グリッド配置図

I. 層位について

小梁川遺跡の基本層位は「板沢」地区で確認された表土～地山に至るⅠ～Ⅲ層である。各層についての詳細は「小梁川遺跡—遺物包含層土器編」(相原ほか: 1986)に述べられているため、以下に特徴を簡略にまとめることとする。

基本層位第Ⅰ層：表土・耕作土。黒褐色を基調とするシルトで構成され、擾乱が著しい。

基本層位第Ⅱ層：旧表土。黒色～黒褐色を基調とするシルトで構成される。遺物は含まない。

基本層位第Ⅲ層：地山。黄褐色シルト～粘土層を主体とする。

なお、基本層位第Ⅲ層の下には段丘疊層が分布している。

遺物包含層は基本層位第Ⅱ層上にあり、遺跡東縁の段丘面～段丘崖(東側遺物包含層—約657m²)と西側の段丘面(西側遺物包含層—約81m²)に分布している(第1図)。遺存状況は東側遺物包含層のCM67～CR90区で比較的良好であり、そのうちCL～CM72・73区、CL～CQ86・87区ではV～I層が識別された(第2図)。前掲書ではこの部分での土器の層位的出土状況に基づき第Ⅰ群～第Ⅴ群土器が設定されているが、その編年位置づけと遺物包含層位との対応関係は以下のようにまとめられる。

第Ⅰ群土器 — 遺物包含層第V層 — 大木6式

第Ⅱ群土器 — 遺物包含層第IV層 — 大木7a式(前半)

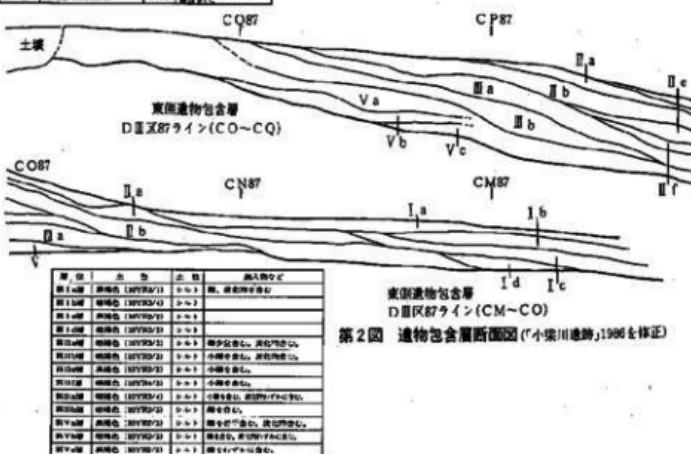
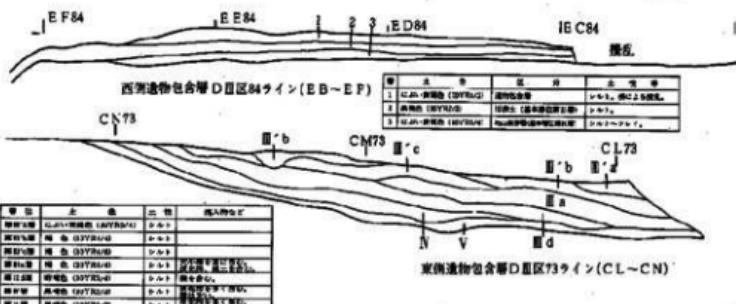
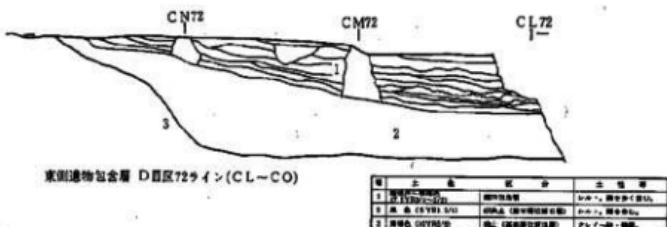
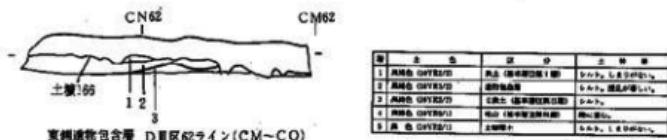
第Ⅲ群土器 — 遺物包含層第III層 — 大木7a式(後半)

第Ⅳ群土器 — 遺物包含層第II層 — 大木7b式(前半)

第Ⅴ群土器 — 遺物包含層第I層 — 大木7b式(後半)

遺物包含層出土石器の整理にあたってはこのような成果をふまえ、遺物包含層出土の土器によって石器の所属時期を決定してゆく方法をとった。表1には、遺物包含層層位と各グリッドの遺物とりあげ層位(地区層位)、および土器群で示される時期との対応関係を示している。

この結果、東側遺物包含層においては縄文時代前期末～中期前葉の石器を、細分された土器型式ごとにある程度の量的なまとまりをもって把握することが可能となったのである。但し東側遺物包含層で、Ⅲ'層・Ⅱ'層など土器の出土状況に混入がある層や出土点数が少なく時期決定が困難な層からの出土石器は「その他の層」出土として一括して扱った。また、西側遺物包含層は表土からの擾乱が激しく層の細分が不可能で、土器も各時期のものが混在して出土しており石器の所属時期は全く決定できないため、表土(基本層位第Ⅰ層)出土の石器とともに割愛した。



第2図 遺物包含層断面図('小堀川地跡'1986 &修正)

表-1 產物包含層位と遺物と/or層位の対応

II. 東側遺物包含層出土の石器

東側遺物包含層では総計1469点の石器が出土している。これには石鏃、尖頭器、小型尖頭器、石錐、石匙、範状石器、両極剥離痕ある石器、不定形石器、石核、磨製石斧、二次加工ある剥片、磨製の石製品、礫石器が含まれるが、以下ではこれらの石器を器種別にまとめ遺物包含層の層位（V～I層）毎に提示してゆく。

1. 石 鏃 (第3図～第7図)

【V層】 8点出土しており、うち6点が破損している（8点図示、第3図）。1を除き大型のものが多い。形態には側辺が外湾するもの（1～5）、脚部付近で屈曲するもの（6、7）、直線的なもの（8）とがあり、側辺が外湾するものには、基部の抉りが浅い逆U字状のもの（2）と深い逆U字状のもの（1、3～5）とがある。

素材の変形度と二次加工の関係をみると、素材面がやや広く残されるもの（1、2、5）とほとんど残されないもの（3、4、6～8）とがあり、前者は二次加工B、Dのいずれか（P.784「二次加工形状の種類とスクリーントーンの使用例」参照。以下同じ）、後者には二次加工BとDが用いられている。

【IV層】 1点出土している（第4図9）。比較的大型で側辺が脚部付近で屈折しており、脚部末端には折断面がある。表裏両面に素材面を広く残した二次加工Dが用いられている。

【III層】 12点出土しており、うち4点が破損している（11点図示、第4図10～20）。小型のもの（10～12、17、18）とやや大型のもの（13～16、19）および大型のもの（20）がある。側辺形状には、外湾するもの（10～18）と直線的なもの（19、20）とがあり、前者には側辺がやや直線的に外湾するもの（11、15）や尖頭部で先細りとなって内湾気味となるもの（10、17）、不規則な形状のもの（12）などが含まれる。側辺が外湾するもの、直線的なものの両者とも、基部の抉りには浅い逆U字状のもの（10～13）と深い逆U字状のもの（14～18、19）がある。

素材の変形度と二次加工の関係はV層出土のものと大差はないが、小型の12には縁辺に沿う小剥離Dのみが認められる。

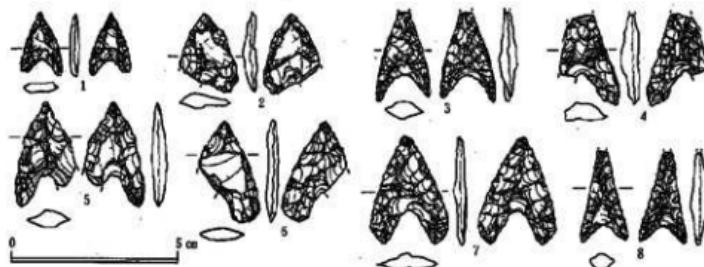
【II層】 20点出土しており、うち6点が破損している（第5図）。V層、III層と同様小型のものと比較的大型のものがあるが、小型品がやや多い。側辺形状には外湾するもの（21～38）と直線的なもの（39、40）がある。前者には脚部末端付近で屈曲するもの（31）を除き単純な外湾のものが多く、III層出土のものにみられたような形態のバラエティはない。基部の抉りには浅い逆U字状のもの（21～23、27～30）と深い逆U字状のもの（24、26、32～38）がある。抉りが浅いものにはV層、III層出土の同種のものに比べて抉りがさらに浅いものがあり（22、28）、

また深い抉りのものには逆V字状に近いものが含まれる(32、37)。

使用される二次加工と素材の変形度との関係はV層、III層出土のものと同様である。

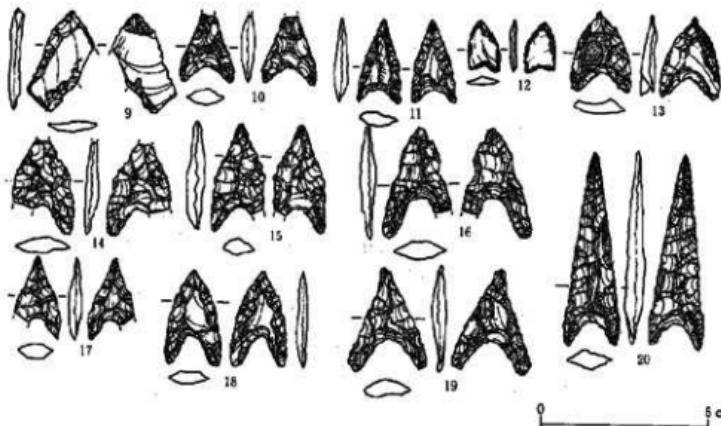
【I層】 6点出土しており、うち1点が破損している(第6図)。小形のもの⁽⁴⁾とやや大型のもの(41~46)があり、側辺形状には外湾するもの(41~45)、内湾するもの⁽⁵⁾とがあり、前者には単純に外湾するものほかに尖頭部が先細り気味に内湾するもの⁽⁶⁾や、不整なもの⁽⁷⁾が含まれている。後者は側辺が屈曲して脚部が張り出し、全体形が三脚状を呈するものである。基部の抉りには浅い逆U字状のもの(41、44、45)と深い逆U字状のもの(42、43、46)とがある。二次加工と素材の変形度の関係はV~III層と同様だが、素材面が殆ど残らないものは43の1点のみである。

【その他の層】 42点出土しており、うち25点が破損している(22点図示、第7図、第8図)。大きさ、形態、二次加工と素材の変形度の関係はV~I層出土のものとはほぼ同様だが、側辺形状が直線的で脚部付近で屈曲をもつもののなかに、素材面を多く残した加工で基部の抉りが深いもの(62、63)と、素材面をほとんど残さない加工で基部の抉りが深いもの(64~66)が含まれている。また全体形が三角形状の平基に近いもの⁽⁸⁾や、IV層出土のものと類似する、素材面を広く残した部分的な二次加工で作られたもの⁽⁹⁾などもみられる。



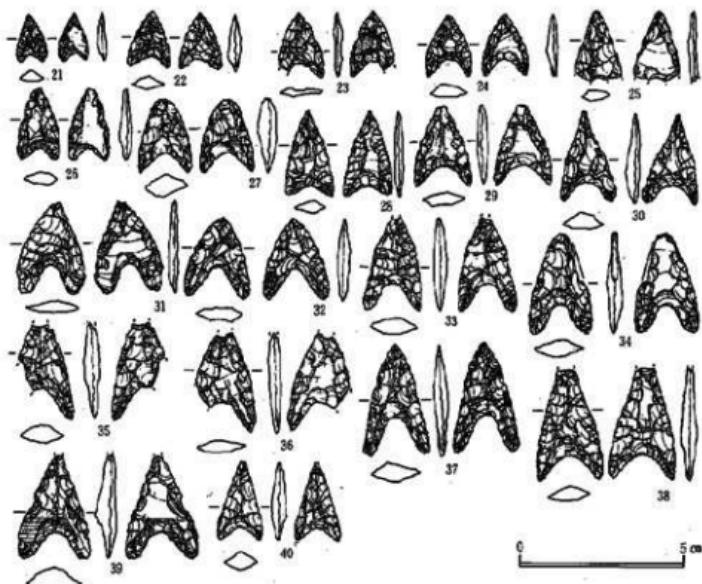
| 番号 | 区 | 層 | 分類 | 名 | 年 | 厚さ(m) | 幅(m) | 高さ(m) | 重さ(t) | 備考 | 層 | 層 | 層 |
|----|-----|---|-----|-----|-----|-------|------|-------|-------|----|-----|-----|---|
| 1 | CMB | 下 | IA2 | 海賊歯 | 17 | 12 | 3 | 0.8 | | | 116 | 3-1 | |
| 2 | CMB | 下 | IA2 | 三葉歯 | 25 | 120 | 4 | 0.15 | 表面鋸歯。 | | 10 | 2-2 | |
| 3 | CMB | 下 | IA2 | 海賊歯 | 130 | 100 | 5 | 0.15 | 表面鋸歯。 | | 10 | 1-3 | |
| 4 | CMB | 下 | IA2 | 三葉歯 | 130 | 100 | 6 | 0.15 | 表面鋸歯。 | | 10 | 3-4 | |
| 5 | CMB | 下 | IA2 | 地化歯 | 25 | 120 | 6 | 0.15 | 表面鋸歯。 | | 10 | 2-5 | |
| 6 | CMB | 下 | IA2 | 海賊歯 | 18 | 100 | 4 | 0.15 | 表面鋸歯。 | | 10 | 2-6 | |
| 7 | CMB | 下 | IA2 | 地化歯 | 130 | 100 | 9 | 0.15 | 表面鋸歯。 | | 10 | 1-7 | |
| 8 | CLD | 下 | IA2 | 海賊歯 | 130 | 100 | 9 | 0.15 | 表面鋸歯。 | | 117 | 1-8 | |

第3図 石鐵(1)-V層



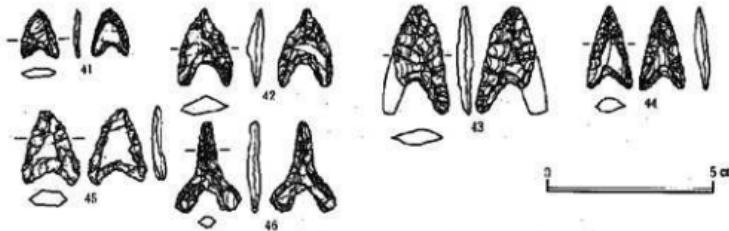
| 番号 | 区 | 層 | 分類 | 名 | 年 | 厚さ(m) | 幅(m) | 高さ(m) | 重さ(t) | 備考 | 層 | 層 | 層 |
|----|-----|---|-----|-----|-----|-------|------|-------|----------------|----|-----|------|---|
| 9 | CMB | 上 | IA2 | 三葉歯 | 28 | 130 | 4 | 0.15 | 表面鋸歯。 | | 100 | 1-9 | |
| 10 | CMB | 上 | IA2 | 三葉歯 | 130 | 100 | 4 | 0.15 | 表面鋸歯。以下同様。 | | 100 | 1-10 | |
| 11 | CLD | 上 | IA2 | 海賊歯 | 25 | 12 | 4 | 0.15 | | | 90 | 2-11 | |
| 12 | CMB | 上 | IA2 | 海賊歯 | 14 | 9 | 2 | 0.15 | | | 40 | 2-12 | |
| 13 | CMB | 上 | IA2 | 海賊歯 | 23 | 18 | 8 | 0.15 | 鋸けはり点9(後刀)。 | | 50 | 1-13 | |
| 14 | CMB | 上 | IA2 | 地化歯 | 130 | 100 | 4 | 0.15 | 表面鋸歯。 | | 110 | 1-14 | |
| 15 | CMB | 上 | IA2 | 海賊歯 | 33 | 110 | 6 | 0.15 | 表面鋸歯。 | | 60 | 1-15 | |
| 16 | CMB | 上 | IA2 | 地化歯 | 36 | 120 | 6 | 0.15 | 表面鋸歯。鋸刃ハサギアラシ。 | | 100 | 1-16 | |
| 17 | CMB | 上 | IA2 | 地化歯 | 23 | 120 | 4 | 0.15 | 表面鋸歯。 | | 60 | 1-17 | |
| 18 | CMB | 上 | IA2 | 海賊歯 | 27 | 17 | 3 | 0.15 | | | 50 | 1-18 | |
| 19 | CMB | 上 | IA2 | 地化歯 | 29 | 23 | 5 | 0.15 | | | 40 | 1-19 | |
| 20 | CLD | 上 | IA2 | 海賊歯 | 34 | 17 | 6 | 0.15 | | | 90 | 1-20 | |

第4図 石鐵(2)-IV層・III層



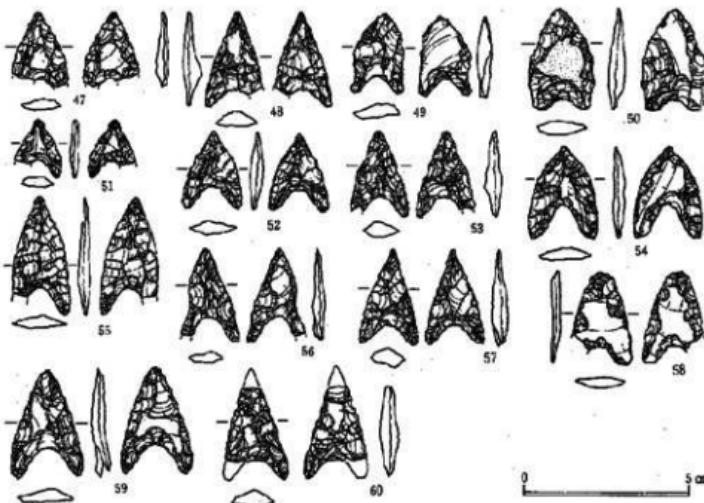
| 番号 | 種 | 層 | 分類 | 面 | 斜 | Arclen | Obclen | Wtlen | Blad | 備 | 号 | 出 | 地 |
|----|-----|------|-----|---|---|--------|--------|-------|------|----------------|----|------|---|
| 21 | CMB | 3層 | 1A1 | 圓 | 五 | 12 | 8 | 3 | 0.1 | | 21 | 1-21 | |
| 22 | CMB | 3層 | 1A1 | 圓 | 五 | 18 | 13 | 4 | 0.4 | | 22 | 1-22 | |
| 23 | CMB | 2-3層 | 1A1 | 圓 | 五 | 18 | 13 | 4 | 0.4 | | 23 | 1-23 | |
| 24 | CMB | 2-3層 | 1A1 | 圓 | 五 | 18 | 13 | 4 | 0.4 | 基盤堅強。鋸刃は凸形(?)。 | 24 | 1-24 | |
| 25 | CMB | 2-3層 | 1A1 | 圓 | 五 | 18 | 13 | 4 | 0.4 | | 25 | 1-25 | |
| 26 | CMB | 2-3層 | 1A1 | 圓 | 五 | 18 | 13 | 4 | 0.4 | | 26 | 1-26 | |
| 27 | CMB | 2-3層 | 1A1 | 圓 | 五 | 18 | 13 | 4 | 0.4 | | 27 | 1-27 | |
| 28 | CMB | 2-3層 | 1A1 | 圓 | 五 | 18 | 13 | 4 | 0.4 | | 28 | 1-28 | |
| 29 | CMB | 2-3層 | 1A1 | 圓 | 五 | 18 | 13 | 4 | 0.4 | | 29 | 1-29 | |
| 30 | CMB | 2-3層 | 1A1 | 圓 | 五 | 18 | 13 | 4 | 0.4 | | 30 | 1-30 | |
| 31 | CMB | 2-3層 | 1A1 | 圓 | 五 | 18 | 13 | 4 | 0.4 | | 31 | 1-31 | |
| 32 | CMB | 2-3層 | 1A1 | 圓 | 五 | 18 | 13 | 4 | 0.4 | | 32 | 1-32 | |
| 33 | CMB | 2-3層 | 1A1 | 圓 | 五 | 18 | 13 | 4 | 0.4 | | 33 | 1-33 | |
| 34 | CMB | 2-3層 | 1A1 | 圓 | 五 | 18 | 13 | 4 | 0.4 | | 34 | 1-34 | |
| 35 | CMB | 2-3層 | 1A1 | 圓 | 五 | 18 | 13 | 4 | 0.4 | | 35 | 1-35 | |
| 36 | CMB | 2-3層 | 1A1 | 圓 | 五 | 18 | 13 | 4 | 0.4 | | 36 | 1-36 | |
| 37 | CMB | 2-3層 | 1A1 | 圓 | 五 | 18 | 13 | 4 | 0.4 | | 37 | 1-37 | |
| 38 | CMB | 2-3層 | 1A1 | 圓 | 五 | 18 | 13 | 4 | 0.4 | | 38 | 1-38 | |
| 39 | CMB | 2-3層 | 1A1 | 圓 | 五 | 18 | 13 | 4 | 0.4 | | 39 | 1-39 | |
| 40 | CMB | 2-3層 | 1A1 | 圓 | 五 | 18 | 13 | 4 | 0.4 | | 40 | 1-40 | |

第5図 石器(3)-II層



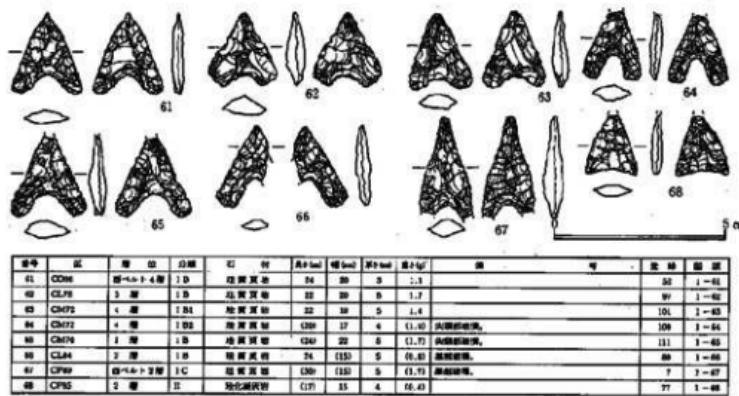
| 番号 | 区 | 層位 | 分類 | 石 | 形 | W3 (mm) | W4 (mm) | W5 (mm) | 厚さ (mm) | 備 | 号 | 層 | 地 | 地 |
|----|------|-------|-----|------|----|---------|---------|---------|---------|---|----|------|---|---|
| 41 | CORE | 2 層 | IA1 | 地質頁岩 | 14 | 12 | 3 | 9.2 | | | 8 | 1-43 | | |
| 42 | CMBF | 2-3 層 | IA2 | 地質頁岩 | 22 | 19 | 5 | 1.0 | | | 28 | 1-43 | | |
| 43 | CMBF | 1 層 | IA2 | 地質頁岩 | 22 | 230 | 5 | 0.40 | 高頻度。 | | 1 | 1-43 | | |
| 44 | CORE | 4 層 | IB1 | 地質頁岩 | 24 | 12 | 4 | 9.6 | | | 25 | 1-43 | | |
| 45 | CORE | 2 層 | IA1 | 地質頁岩 | 22 | 17 | 4 | 9.6 | | | 20 | 1-43 | | |
| 46 | CMBF | 2 層 | IC2 | 地質頁岩 | 26 | 20 | 4 | 9.6 | | | 2 | 1-43 | | |

第6図 石鱗 (4)- I層



| 番号 | 区 | 層位 | 分類 | 石 | 形 | W3 (mm) | W4 (mm) | W5 (mm) | 厚さ (mm) | 備 | 号 | 層 | 地 | 地 |
|----|------|-----|-----|------|-----|---------|---------|---------|-----------------|---|-----|------|---|---|
| 47 | CMBF | 3 層 | IA1 | 地質頁岩 | 120 | 113 | 4 | 12.39 | 高頻度。 | | 69 | 1-47 | | |
| 48 | CMBF | 1 層 | IA1 | 地質頁岩 | 27 | 120 | 5 | 13.33 | | | 115 | 1-48 | | |
| 49 | CMBF | 1 層 | IA1 | 地質頁岩 | 22 | 18 | 5 | 1.0 | 地質頁岩に2を割れ。 | | 12 | 1-48 | | |
| 50 | CL70 | 3 層 | IA1 | 地質頁岩 | 29 | 29 | 5 | 3.6 | 他のの複数を含む。 | | 60 | 1-28 | | |
| 51 | CMBF | 5 層 | IA1 | 地質頁岩 | 24 | 140 | 3 | 12.63 | 高頻度。白色牙形帶(5.7)。 | | 104 | 1-51 | | |
| 52 | CMBF | 4 層 | IA1 | 地質頁岩 | 22 | 18 | 4 | 2.8 | | | 112 | 1-52 | | |
| 53 | CMBF | 1 層 | IA1 | 地質頁岩 | 25 | 140 | 5 | 13.49 | 高頻度。 | | 76 | 1-53 | | |
| 54 | CMBF | 4 層 | IA2 | 地質頁岩 | 26 | 39 | 4 | 3.4 | | | 129 | 1-54 | | |
| 55 | CMBF | 1 層 | IA2 | 地質頁岩 | 24 | 127 | 3 | 12.52 | 高頻度。側面のバティエは鋒利。 | | 25 | 1-55 | | |
| 56 | CMBF | 2 層 | IA2 | 地質頁岩 | 27 | 17 | 4 | 2.9 | 地質頁岩。 | | 91 | 1-56 | | |
| 57 | CL72 | 3 層 | IA2 | 地質頁岩 | 22 | 18 | 5 | 2.5 | | | 94 | 1-27 | | |
| 58 | CL72 | 1 层 | IA2 | 地質頁岩 | 26 | 140 | 3 | 12.10 | 高頻度。 | | 30 | 1-28 | | |
| 59 | CL72 | 3 層 | IA2 | 地質頁岩 | 21 | 21 | 6 | 2.0 | | | 95 | 1-29 | | |
| 60 | CMBF | 4 層 | IA2 | 地質頁岩 | 260 | 137 | 6 | 12.87 | AM鉱。 | | 11 | 1-60 | | |

第7図 石鱗 (5)- その他の層

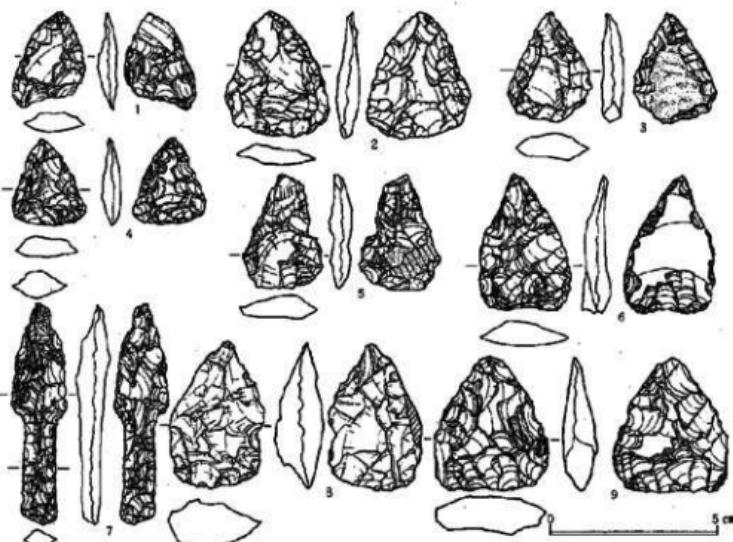


第8図 石器(5)-その他の層

2. 小型尖頭器、尖頭器(第9図)

9点出土しているが、V～I層に對比できた資料がないため「その他の層」出土として一括する。1、4、5が小型尖頭器、2、3、6～9が尖頭器である。小型尖頭器の形態には比較的整った三角形状のものと不整な三角形状のものとがあり、尖頭器には小型尖頭器と同様な形態の他に基部が丸みを帯びているもの(3)と、槍形を呈し尖頭部下端に逆刺をもつ有茎のもの(7)がある。

両者とも多くは、素材面が残るものに二次加工B、D、素材面がほとんど残らないものに二次加工A、B、Dが用いられるが、片面加工に近いもの(6)もある。また、1は素材の縁辺部がそのまま尖頭部として利用されている。



| 番号 | 石 | 器種 | 地質 | 石 | 器種 | 地質 | 石 | 器種 | 地質 | 石 | 器種 | 地質 |
|----|------|--------|-------|-------|----|----|----|------|------------|-----|------|----|
| 1 | GM12 | 3 種 | 小岩山層群 | 細長尖頭器 | 20 | 22 | 5 | 2.0 | 複合尖頭器(複合部) | 127 | 1-49 | |
| 2 | CL13 | 1 種 | 大岩層 | 細長尖頭器 | 20 | 21 | 7 | 4.0 | | 30 | 1-76 | |
| 3 | CNA7 | 北ベントン層 | 鶴見山層 | 細長尖頭器 | 20 | 20 | 7 | 5.1 | | 30 | 1-72 | |
| 4 | CPB8 | 3-5 種 | 小岩山層群 | 細長尖頭器 | 25 | 21 | 9 | 3.0 | | 30 | 1-73 | |
| 5 | CPB9 | 3 種 | 大岩層 | 細長尖頭器 | 20 | 24 | 7 | 4.7 | PCより尖頭部のみ | 5 | 2-74 | |
| 6 | CM17 | 4 種 | 大岩層 | 細長尖頭器 | 41 | 36 | 9 | 7.5 | | 110 | 3-75 | |
| 7 | CO6 | 3 種 | 大岩層 | 細長尖頭器 | 46 | 36 | 10 | 7.0 | 複合部 | 120 | 1-76 | |
| 8 | CL14 | 5 種 | 大岩層 | 細長尖頭器 | 40 | 34 | 10 | 13.5 | 複合部 | 47 | 1-77 | |
| 9 | CM17 | 2 種 | 大岩層 | 細長尖頭器 | | | | | | 50 | 1-78 | |

第9図 尖頭器・小型尖頭器

3. 石錐 (第10~15図)

【V層】 2点出土しているが、1点は錐部の破片である(第10図)。完形の1点は薄手の素材を用いた偏平なもので、錐部が二次加工Bにより丁寧に仕上げられているのに対しつまみ部は二次加工Dによる部分的な加工がなされるのみで、素材面が広く残る。また、つまみ部下端(素材の末端部)は折断されている。

【IV層】 IV層出土と認定できた資料はない。

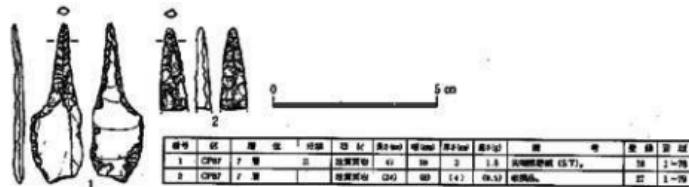
【III層】 8点出土しており、うち1点が破損している(7点図示。第11図)。棒状のものが1点ある(3)他は錐部とつまみ部からなるもので、小型のもの(4)とやや大型のもの(5~9)

がある。またV層出土のものにくらべて素材が厚手になっている。二次加工は、主にBとDが用いられるが、厚手で大型なものにはCも使用されている(7)。つまみ部の二次加工と素材の変形度との関係をみると、ほとんど施工が加えられていないもの(4、5、7、9)、片面に部分的な二次加工の加えられるもの(6)、両面に若干の二次加工の加えられるもの(8)とがあり、5と7には折断面がみられる。錐部の作出される位置は、素材末端側(3、5、6、9)と素材縁辺部(4、7、9)である。

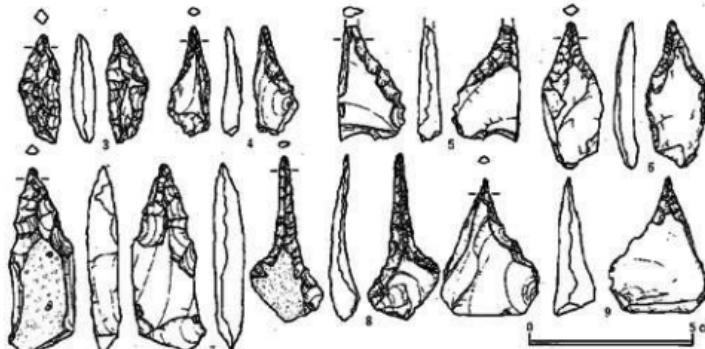
【II層】 11点出土しており、うち1点が破損している(10点図示、第12図、第13図)。棒状のもの(10、11)と、錐部とつまみ部からなるもの(12~19)がある。棒状のものは小型で、錐部とつまみ部からなるものには小型のもの(12~16)と大型のもの(17~19)があるが、III層出土品のようなやや大型のものはみられない。二次加工はB、Dが用いられるが、つまみ部の加工は部分的に素材の形態をそのまま利用しているものが多い。また棒状のものには基部に折断面がみられる。錐部の作出位置は素材末端側のものがほとんどである。

【I層】 10点出土しており、うち1点が破損している(第14図)。棒状のもの(20)、錐部とつまみ部からなるもの(21~28)、錐部とつまみ部の区分が不明瞭な尖頭器状の形態をもつもの(29)がある。棒状のものはIII層、II層出土品と同様小型で、錐部とつまみ部からなるものには小型のもの(21、22、25)とやや大型のもの(23、24、26~29)がある。尖頭器状のものはやや大型である。二次加工はB~Dがおもに用いられている。つまみ部の加工には素材の形態をほとんど変えない部分的なもの(21、24、25)と、やや広い範囲に加工が及ぶもの(22、23、25、27、28)があり、後者にはスクリペーエッジをもつもの(22)も含まれている。

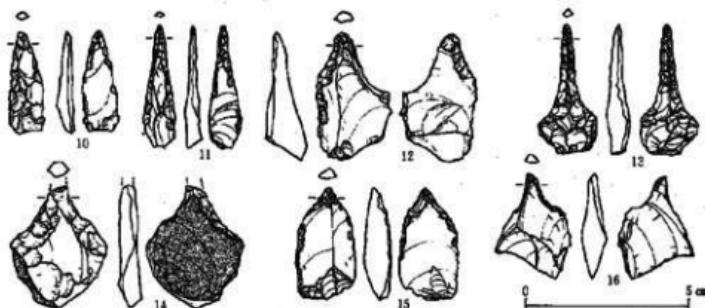
【その他の層】 14点ある(第15図)。棒状のもの(30)、錐部とつまみ部からなるもの(31~39、42)、錐部とつまみ部の区分が不明瞭な尖頭器のもの(41)があり、このうち錐部とつまみ部からなるものには、つまみ部の広い範囲に二次加工が及ぶもの(31、32)や、錐部とその周辺の一部以外には二次加工がなされない大型のもの(37、39)が含まれている。



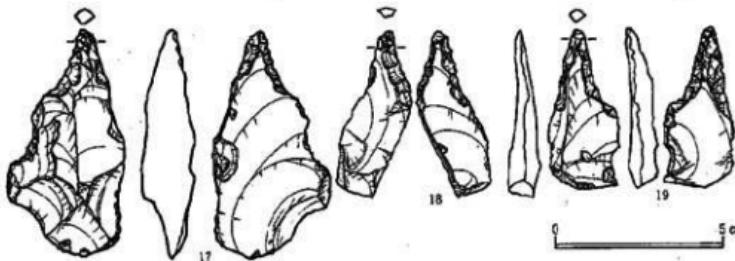
第10図 石錐 (1)-V層



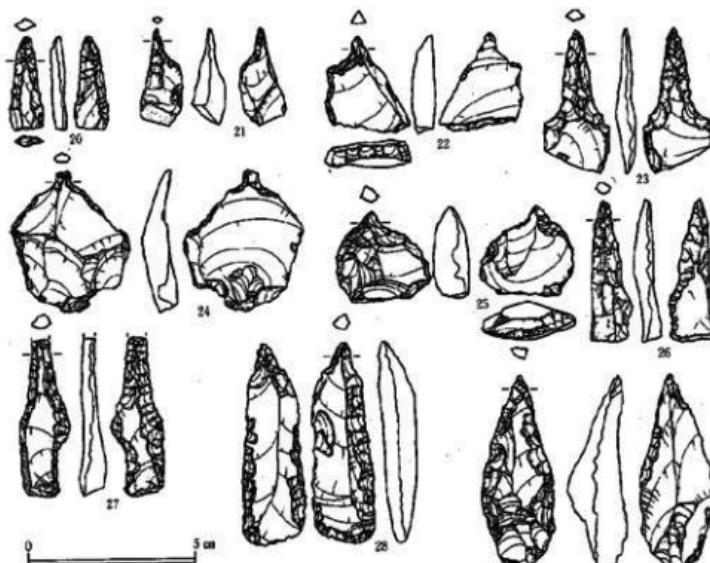
第11図 石錐 (2)-III層



第12図 石錐 (3)-II層

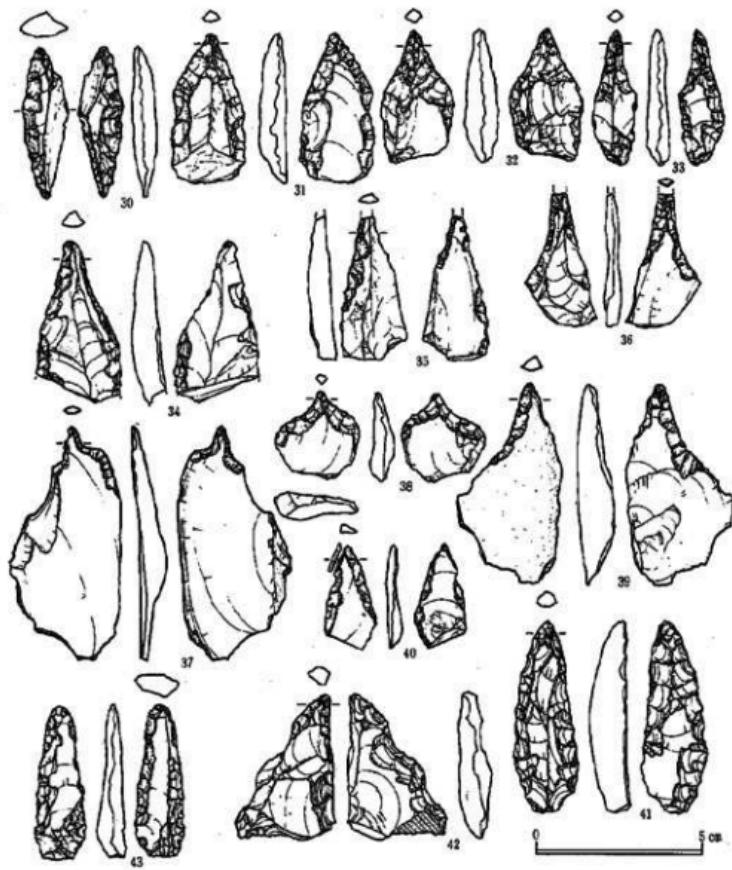


第13図 石錐(4-II層)



第14図 石錐(5-I層)

| 番号 | 名 | 原住 | 分類 | 石 | 材 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 備 | 番 | 原 | 地 |
|----|------|----|----|----|------|--------|-------|--------|----------------------------|----|-------|---|
| 29 | CDBB | 1 | 縦 | I | 玉 | 26 | 10 | 4 | 1.1 尖端部剥離 (SLT)。 | 18 | 1-97 | |
| 30 | CDAB | 5 | 縦 | II | 透質頁岩 | 27 | 14 | 10 | 2.4 Pを有した尖端部のDZ。 | 19 | 1-98 | |
| 31 | CDAA | 3 | 縦 | II | 透質頁岩 | 27 | 16 | 7 | 4.1 | 20 | 1-99 | |
| 32 | CDAB | 1 | 縦 | II | 透質頁岩 | 40 | 20 | 6 | 10.2 | 21 | 1-100 | |
| 33 | CDAB | 1 | 縦 | II | 透質頁岩 | 40 | 20 | 11 | 1.7 尖端部剥離 (SLT)。 | 22 | 1-101 | |
| 34 | CDAB | 1 | 縦 | II | 透質頁岩 | 40 | 20 | 11 | 2.2 側面にDZ。 | 23 | 1-102 | |
| 35 | CDAB | 1 | 縦 | II | 透質頁岩 | 40 | 13 | 6 | 2.8 側面にDZ。 | 24 | 1-103 | |
| 36 | CDAB | 1 | 縦 | II | 透質頁岩 | 40 | 15 | 8 | 27.0 尖端部剥離。 | 25 | 1-104 | |
| 37 | CDAB | 2 | 縦 | II | 透質頁岩 | 27 | 13 | 12 | 17.5 ツヨル部剥離にスケレーパー式で削出。 | 26 | 2-1 | |
| 38 | CDAB | 3 | 縦 | II | 透質頁岩 | 30 | 20 | 18 | 12.0 | 27 | 2-2 | |



| 番号 | 名 | 性 | 分類 | 石 | 厚 | 幅 | 長 | 形 | 基 | 目 |
|----|------|--------|----|----|----|----|------|----------------------------|----|------|
| 30 | CMS | 1 | 石器 | 43 | 11 | 7 | 39.6 | 山根形+刃あり。一方の尖端が削離。(5.7). | 5 | 2-3 |
| 31 | CMS | 1 | 石器 | 43 | 23 | 8 | 38.0 | 尖端部+中段削離。(5.7). | 30 | 2-4 |
| 32 | CMS | 4 | 石器 | 37 | 22 | 11 | 4.6 | 尖端部削離(5.7). | 30 | 2-5 |
| 33 | CMS | 北ベルト2層 | 石器 | 38 | 14 | 7 | 32.4 | 両側の刃形が直角に現れる。 | 30 | 2-6 |
| 34 | CMS | 南ベルト2層 | 石器 | 45 | 26 | 10 | 34.1 | 尖端部削離(5.7). 基部に刃あり。 | 40 | 2-7 |
| 35 | CMS | 南ベルト4層 | 石器 | 43 | 20 | 7 | 34.4 | 尖端部削離。 | 40 | 2-8 |
| 36 | CMT1 | 4 | 石器 | 37 | 22 | 5 | 31.5 | 尖端部削離。 | 30 | 2-9 |
| 37 | CMS | 4 | 石器 | 35 | 34 | 9 | 32.9 | 側面の刃形を認める。尖端部+中段削離(5.7). | 30 | 2-10 |
| 38 | CMS | 6 | 石器 | 34 | 28 | 7 | 38.0 | 尖端部+中段削離(5.7). | 30 | 2-11 |
| 39 | CMS | 南ベルト4層 | 石器 | 34 | 33 | 13 | 11.0 | 側面に側面削離がある。尖端部削離(5.7). | 30 | 2-12 |
| 40 | CMS | 4 | 石器 | 29 | 15 | 5 | 1.8 | 尖端部+中段削離(5.7). 尖端部削離(5.7). | 10 | 2-13 |
| 41 | CMS | 2 | 石器 | 34 | 20 | 13 | 34.1 | 尖端部+中段削離(5.7). | 40 | 2-14 |
| 42 | CMS | 1 | 石器 | 41 | 30 | 18 | 10.0 | 尖端部削離(5.7). | 20 | 2-15 |
| 43 | CMS | 南ベルト4層 | 石器 | 42 | 15 | 8 | 4.1 | 尖端部削離(5.7). | 20 | |

第15図 石錐 (6)-その他の層

4. 石匙 (第16図～第23図)

【V層】 6点出土している(第16図)。身部はすべて縦長で、細身のものが1点ある(3)ほかはいずれもやや幅広となっている。身部の縁辺構成には二縁辺構成のものと三縁辺構成のものとがあるが、尖端部は作出されていない。つまみ部、身部とともに二次加工B、Cによって作出されており、つまみ部の位置は素材の打面側(1～3、5)、素材の末端側(4)、素材の縁辺(4)である。刃部は身部の二側辺にあって両面加工により作出されるものが多いが、一方の刃部が片面加工のもの(1)、バルブの平坦な小剥離が部分的に加えられるだけのもの(2)、一側辺と身部末端に刃部をもつもの(6)などもみられる。刃部の立面觀は小鋸歯状を呈する。身部の二次加工は縁辺が主体で、表裏両面に素材面が広く残されている。

【IV層】 IV層出土と認定できた資料はない。

【III層】 10点のうち1点が破損している(9点図示、第17図、第18図15)。身部の形態には縦長(7～11)、横長(12～13)、横長・縦長の中間(14、15)がある。縦長のものには細身でやや大型のものと幅広でやや小型のものがあって、前者は二縁辺構成、後者は三縁辺構成をとり、いずれも尖端部が作出される。また縦長で細身のものは、V層出土の同種のものよりやや大型化している。横長のものは二縁辺構成のものと三縁辺構成のものがあり、明確な尖端部を作出するものはない。つまみ部は二次加工B～Dにより作出されているが、Cのみをもちいた大雜把な加工のもの(15)もある。つまみ部の位置は、身部が縦長のものは素材の打面側、他のものは素材の縁辺か末端側である。刃部は二次加工B～Dが使用され、身部が縦長のものでは尖端部を挟む二側辺に両面加工によって作出するものが多い。身部が横長のものは身部下端に両面加工の刃部をもち、他の一側辺に片面あるいは半両面加工の刃部をもっている。両者とも刃部の立面觀は小鋸歯状を呈する。また身部が縦長・横長の中間形態のものには、交互剥離状の粗雑な刃部をもつもの(15)がある。V層出土品同様身部の二次加工は縁辺を主体としているが、表面側のほぼ全面に加工部なされ素材面がほとんど残れないもの(8、9)も含まれている。

【II層】 12点出土のうち、1点が破損している(11点図示、第18図16～21、第19図)。身部の形態には縦長(16～24)、横長・縦長の中間形態(25、26)がある。前者には細身のもの(17、18)と幅広のもの(16～24)があり、細身のものは二縁辺構成、幅広のものは二ないし三縁辺構成をとるが、明確な尖端部が作出されているのは二縁辺構成をとるもの一部(16、17)のみである。つまみ部は二次加工B、C(16～18、20～23)、A、C(19)、D(24)で作出されるが、B、Cを用いるものにはV層、III層出土のものに比べノッチの加工が不整なもの(19、21)が含まれている。つまみ部の位置は素材の打面側か末端側である。刃部はほとんどつまみ部に用いたのと同じ二次加工で作出されるが、Dを用いた粗雑なもの(24～26)もみられる。作出される位

置は、相対する二側辺、三側辺あるいは一側辺で、前二者には各側辺が両面加工されるもの(16、18、21、23)と、一方が片面加工になるもの(19、20、22、24)とがある。刃部の立面觀は小鋸歯状の他に交互剥離状のもの(19)がある。身部の二次加工は縁辺部を主として行われるが、片面に奥まで入る二次加工をもつものもみられる(19、21)。

【I層】 12点出土のうち、3点が破損している(9点図示。第20図、第21図)。身部の形態には縦長(27~33)、横長(30)、横長・縦長の中間形態(30)の三種がある。縦長のものには細身のもの(27、29、30)とやや幅広のもの(28、32、33)、長さ・幅ともに大きなもの(29)があり、細身のものにはV~II層出土の同種のもののなかで最大のもの(29、30)が含まれている。他の形態のものも全体的に大型である。身部は縦長のものに二縁辺構成・三縁辺構成があり、他は三縁辺構成となっている。このうち明確な尖端部を持つのは縦長のもので、他の層の出土品にくらべその数は6点と増加している。つまみ部、刃部とも二次加工C(27~33)、B、C(34~35)で作出されており、II層出土品にあるような粗雑な加工のつまみ部はほとんどみられない。つまみ部の位置はいずれも素材の打面側である。刃部の位置は相対する二側辺あるいは三側辺で、前者はほとんど両面加工であるが、後者は両面加工の他に身部下端を中心としてやや不整な加工を加えるもの(34、35)がある。刃部の立面觀は交互剥離状を呈する35を除き小鋸歯状である。なお27は身部の断面形態や、尖端部が磨滅していることから石錐の可能性がある。

【その他の層】 31点のうち6点が破損している(12点図示。第22図、第23図)。身部の形態には縦長(36~43)、横長(30)、横長・縦長の中間形態(45)、不定形(46、47)がある。縦長のものには二側辺が外湾して尖端部をもち、身部が二次加工A、Bで両面加工されるもの(38)や、一側辺にある折断面にノッチを加えた小型品(38)、加工が粗雑なもの(39、40)がある。横長のものは小型で、三側辺に両面加工の刃部を持つ丁寧なつくりのものである。横長・縦長の中間形態のものはつまみ部付近にだけ二次加工がなされ、素材の鋭い縁辺を刃部としている。身部が不定形のものには、小型の剥片にノッチだけを入れ身部に折断面を利用した尖端部をもつものや、身部が二股になりそれに刃部をもつものがある。

5. 篠状石器(第24図~第27図)

【V層】 2点出土している(第24図1、2)。2はバチ形の整った形態をもつが、1の形態はやや不整である。側辺の二次加工はB、C(2)、A、B、Dを主体とする粗雑なもの(1)である。刃部は素材の打面側もしくは末端側にあって不規則な鋸歯状の立面觀を持つ。二次加工は縁辺を主体になされており、片面もしくは表裏両面に素材面が残されている。

【IV層】 IV層出土と認定できた資料はない。

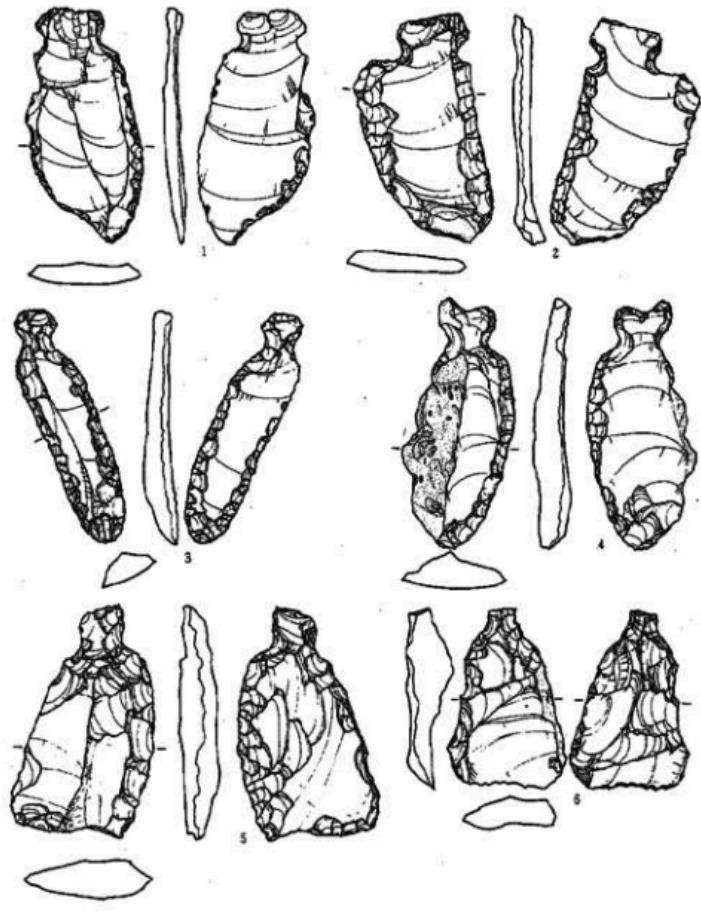
【III層】 2点出土している(第24図3、4)。形態には短冊形(3)とバチ形(4)があり、大きさは

V層出土品とほぼ同様だが、バチ形のものはやや薄手となっている。側辺の二次加工はB、Dで、3にはステップが目立つ。刃部は素材の打面側もしくは末端側にあって不規則な鋸歯状の立面觀を持つ。二次加工と素材の変形度の関係はV層出土品と同様である。

【II層】 7点出土している(6点図示。第24図5、6、第25図7~10)。形態には短冊形(5~7、9)、バチ形に近いもの(8)、不定形なもの(10)があり、短冊形のものには小型ですべりのもの(5)とやや細身で小型なもの(9)がある。また不定形なものも、V層~III層出土品と比べ小型である。側辺の二次加工にはB、Cの他に、ステップが目立つD(7)、A(5)がある。刃部は素材の末端側もしくは打面側にあって、10を除き鋸歯状の立面觀を持つ。二次加工と素材の変形度の関係はV層~III層出土品と同様だが、小型のものは加工が奥まで入り素材面は他のものほど広く残されない。また側辺の立面觀が規則正しい鋸歯状を呈する整った二次加工をもつもの(9)もある。

【I層】 3点出土のうち2点が破損している(1点図示。第25図11)。形態には不定形なもの(11)のほかに短冊形のものと、バチ形と推定されるもの(図示せず)があり、礫素材の厚手のもの(11)以外は小型である。側辺の二次加工はA、B、Dで、刃部の立面觀は大まかに鋸歯状を呈する。V層~II層出土品と同様縁辺を主体とした加工がなされ、11は表面に原礫面が残されている。

【その他の層】 13点のうち2点が破損している(9点図示。第26図、第27図)。形態には短冊形(12、14~18)、バチ形(13)、不定形なもの(19、20)があり、短冊形のものに大型品(16)と細身で整った形態のもの(18)が、不定形なものに尖頭器状の形態をもつもの(19)が含まれている。大きさはいずれもV層~I層出土品と同様である。側辺の二次加工はA~D(12~17、19、20)、B(18)で、刃部は素材の打面側、末端側の他、縁辺部に作出されるもの(12、13、16)がある。刃部の立面觀は小鋸歯状、不整な鋸歯状を呈するものほか、スクレイパー状(19)を呈するものがある。二次加工は縁辺を主体としてなされるが他に表面側に奥まで入る加工のなされるものがあり(12、14~17)、これには半両面加工に近いもの(18)が含まれている。



第16図 石匙 (I) - V層

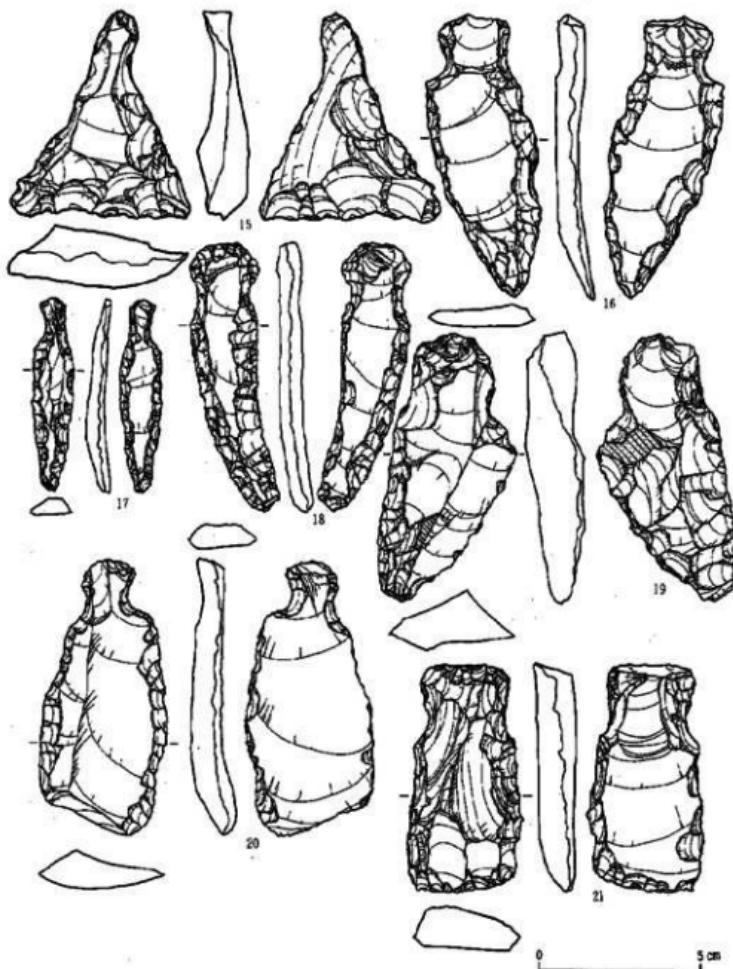
| 番号 | 正 面 | 側 面 | 分類 | 芯 | 片 | 厚さ(m) | 幅(m) | 厚さ(cm) | 幅(cm) | 重さ(g) | 測 | 年 | 正 面 | 側 面 |
|----|--------|--------|-----|-----|------|-------|------|--------|-------|-------------------------|---|---|--------|--------|
| 1 | CPIF | 7 | 直 | TA2 | 複質石器 | 55 | 36 | 6 | 18.0 | | | | 47 | 2-16 |
| 2 | CME19 | 6 | 直 | TA2 | 複質石器 | 52 | 36 | 7 | 14.0 | 表面に光沢あらず(ST), | | | 104 | 2-17 |
| 3 | CL22 | 6 | 直 | TA2 | 複質石器 | 58 | 18 | 10 | 10.0 | | | | 98 | 2-15 |
| 4 | CPIF | 7 | 直 | TA2 | 複質石器 | 58 | 33 | 9 | 15.0 | 表面に光沢あらず(ST), | | | 46 | 2-13 |
| 5 | COSB | 5 | 側刃形 | LB2 | 複質石器 | 64 | 43 | 12 | 27.0 | | | | 87 | 2-23 |
| 6 | CPIF | 7 | 直 | LB2 | 複質石器 | 67 | 36 | 12 | 15.0 | つまみ状凹部, 表面光沢に光沢あらず(ST), | | | 61 | 2-21 |



0 5 CM

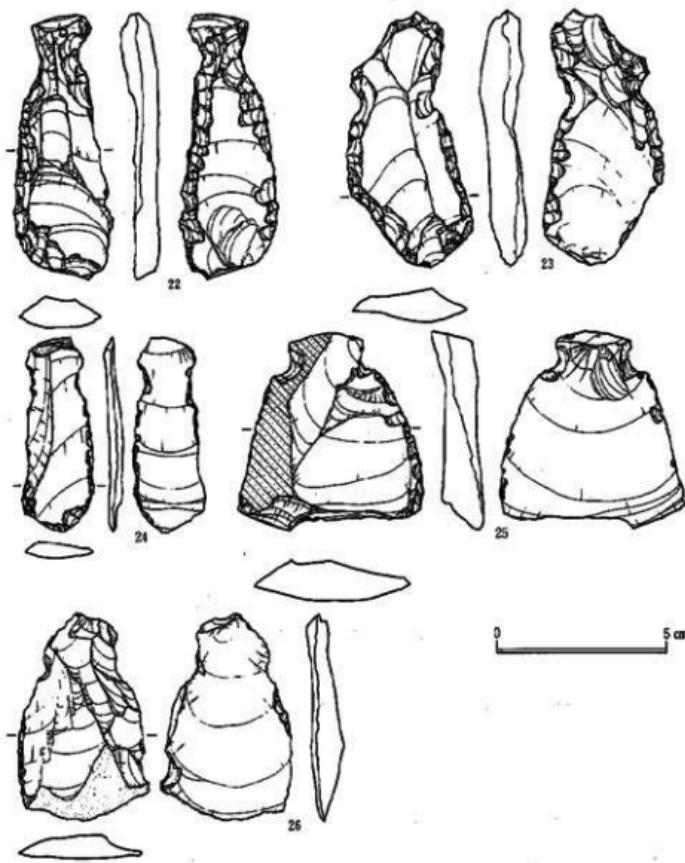
| 番号 | 区 | 種 | 枚類 | 長 | 幅 | 高さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 備 | 号 | 年 | 地 |
|---------|--------|-----|------|----|----|--------|-------|--------------------------|-------|------|---|---|---|
| 7 CL21 | 3 領 | EAI | 椎葉穿孔 | 46 | 33 | 5 | 8.0 | つまみ部に穿孔の打痕あり。 | 94 | 3-22 | | | |
| 8 CP98 | 西ベルト4層 | EAI | 椎葉穿孔 | 39 | 18 | 8 | 13.0 | | 32 | 3-23 | | | |
| 9 CP97 | 5 領 | EAI | 椎葉穿孔 | 36 | 25 | 1 | 20.0 | | 43 | 3-24 | | | |
| 10 CM79 | 5 領 | EAI | 椎葉穿孔 | 36 | 22 | 10 | 8.0 | きぬにやや穴孔(?)。つまみ部に穿孔の打痕あり。 | 99 | 3-23 | | | |
| 11 CM77 | 5 領 | EAI | 椎葉穿孔 | 46 | 27 | 3 | 2.0 | | 99 | 3-26 | | | |
| 12 CL73 | 4 領 | EAI | 椎葉穿孔 | 46 | 60 | 12 | 25.0 | 尖端部に穿孔の打痕あり。 | 98 | 3-27 | | | |
| 13 CL72 | 5 領 | EAI | 椎葉穿孔 | 46 | 56 | 1 | 17.0 | 頭部に穿孔の打痕あり。 | 98 | 3-28 | | | |
| 14 CM98 | 2 領 | 日向 | 椎葉穿孔 | 36 | 19 | 8 | 5.0 | 頭部に打痕あり。 | 98 | 3-29 | | | |

第17図 石器 (2)-III層



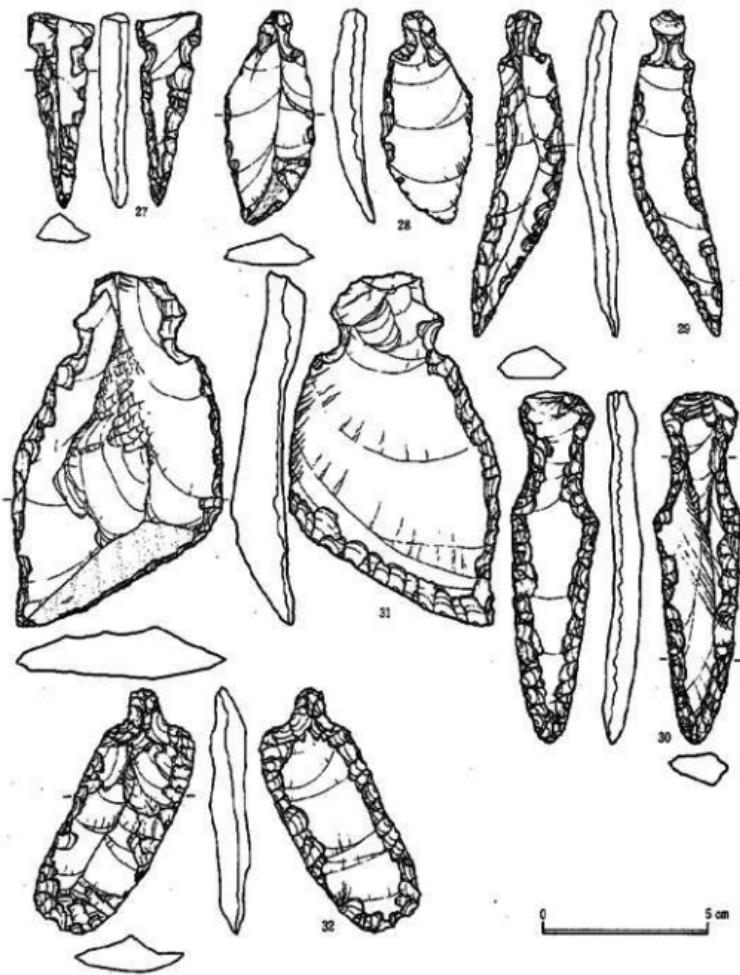
| 番号 | 区 | 基 材 | 分類 | 目 別 | 角4(m) | 幅2(m) | 厚2(m) | 重2(kg) | 名 称 | 基 層 | 回 数 |
|----|--------|--------|----|--------|-------|-------|-------|--------|---------------------|--------|--------|
| 15 | CII-7 | 6 磐 | 石器 | 直 | 37 | 95 | 18 | 79.8 | ノッチ打削器(片刃)。刃端付。 | 57 | 2-1 |
| 16 | CII-9 | 1 磐 | 石器 | 直 | 36 | 9 | 13.9 | 2.5 | つまみ根に素材の凹面あり。以下刀頭付。 | 58 | 2-2 |
| 17 | CII-9 | 2 磐 | 石器 | 直 | 33 | 13 | 8 | 5.9 | 尖頭部や中面削(5.7)。 | 59 | 2-3 |
| 18 | CII-9 | 2 磐 | 石器 | 直 | 31 | 7 | 14.6 | 2.5 | つまみ根に素材の凹面あり。 | 60 | 2-4 |
| 19 | CII-9 | 6 磐 | 石器 | 直 | 34 | 43 | 18 | 29.8 | つまみ根に素材の凹面あり。 | 61 | 3-5 |
| 20 | CIII-1 | 1 磐 | 石器 | 直 | 75 | 43 | 18 | 29.8 | つまみ根に素材の凹面あり。 | 62 | 3-6 |
| 21 | CIII-1 | 1 磐 | 石器 | 直 | 77 | 46 | 18 | 27.8 | つまみ根に素材の凹面あり。 | 63 | 3-7 |
| 22 | CIII-5 | 1 磐上端 | 石器 | 直 | 62 | 36 | 13 | 23.6 | つまみ根に素材の凹面あり。 | 64 | 2-7 |

第18図 石匙(3)-III層・II層



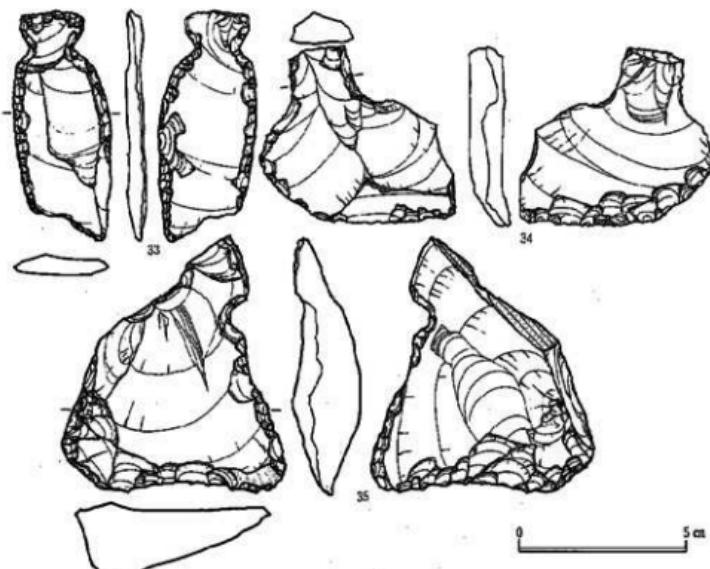
| 番号 | 区 | 層 | 成 | 分類 | 石 | 材 | 高さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 備 | 考 | 参考 |
|----|------|-----|---|----|------|----|--------|-------|--------|------------------|----|------|----|
| 22 | CHIM | 2 層 | 1 | II | 地質質地 | 72 | 39 | 11 | 16.2 | 地質の表面につぶれ目を有す。 | 32 | 3-8 | |
| 23 | CGO | 1 层 | 1 | II | 地質質地 | 69 | 36 | 12 | 25.6 | | 35 | 3-9 | |
| 24 | CHIM | 7 层 | 1 | II | 地質質地 | 63 | 21 | 8 | 6.6 | 地質下端に凹みを有す。 | 35 | 3-10 | |
| 25 | CPH | 3 层 | 1 | II | 地質質地 | 64 | 55 | 14 | 33.4 | つまみ形に地質の打開があり。 | 38 | 3-11 | |
| 26 | CDM | 3 层 | 1 | II | 地質質地 | 46 | 29 | 10 | 16.9 | 地質に自然断続点。きかれて複数。 | 35 | 3-12 | |

第19図 石匙(4)-II層

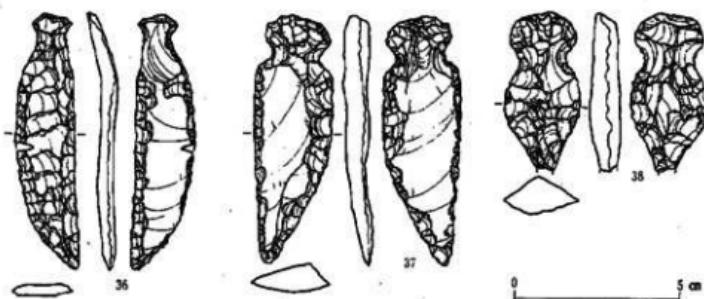


| 番号 | 名 | 石器種 | 分類 | 刃 長 | 刃幅 (mm) | 厚さ (mm) | 刃幅/厚さ | 重 量 | 地 球 | 形 式 |
|----|------|-----|-----|------|---------|---------|-------|------|--------------------------|------------|
| 27 | CN07 | 2 ■ | LAI | 複質手斧 | 54 | 10 | 5 | 7.0 | 複合の打削を残り取り。尖頭形複合 (S.T.)。 | 16 3-14 |
| 28 | CPO7 | 1 ■ | LAI | 複質手斧 | 48 | 27 | 5 | 22.0 | 複合にやや複合あり (S.T.)。 | 46 3-15 |
| 29 | COF7 | 1 ■ | LAI | 複質手斧 | 55 | 28 | 8 | 34.0 | 複合二段打削の複質手斧 (S.T.)。 | 30 3-16 |
| 30 | CLAS | 4 ■ | LAI | 複質手斧 | 55 | 26 | 10 | 25.0 | つまみ筋に複合の打削あり。 | 34 3-18 |
| 31 | COM8 | 1 ■ | LAI | 複質手斧 | 59 | 64 | 13 | 48.0 | | 35 3-17 |
| 32 | CPY7 | 1 ■ | LAI | 複質手斧 | 60 | 60 | 12 | 25.0 | | 39 3-19 |

第20図 石器 (5)-I層

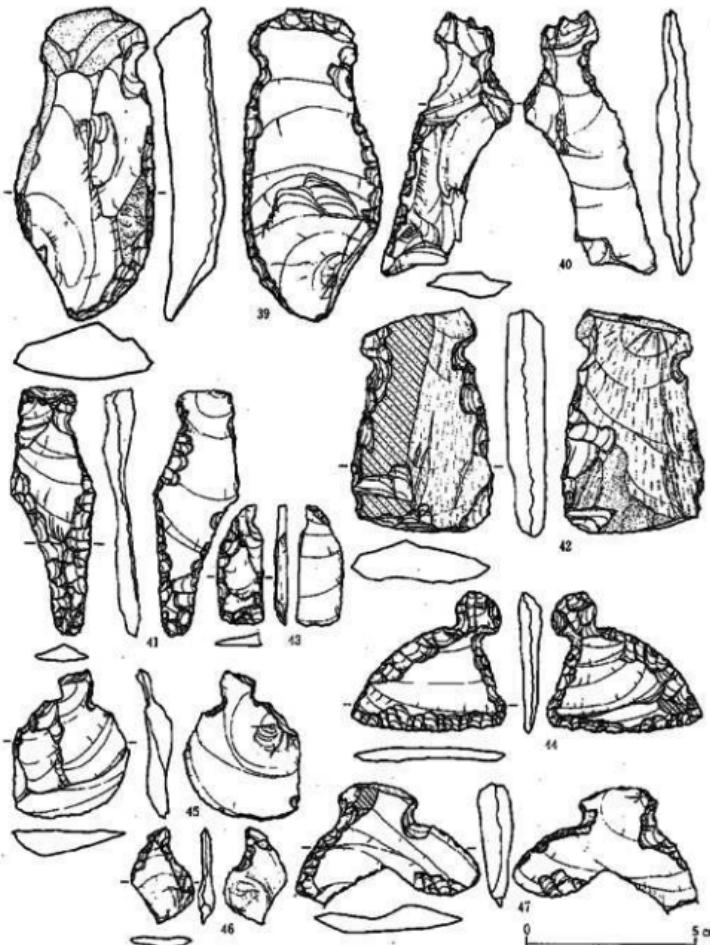


第21図 石匙(6)-I層



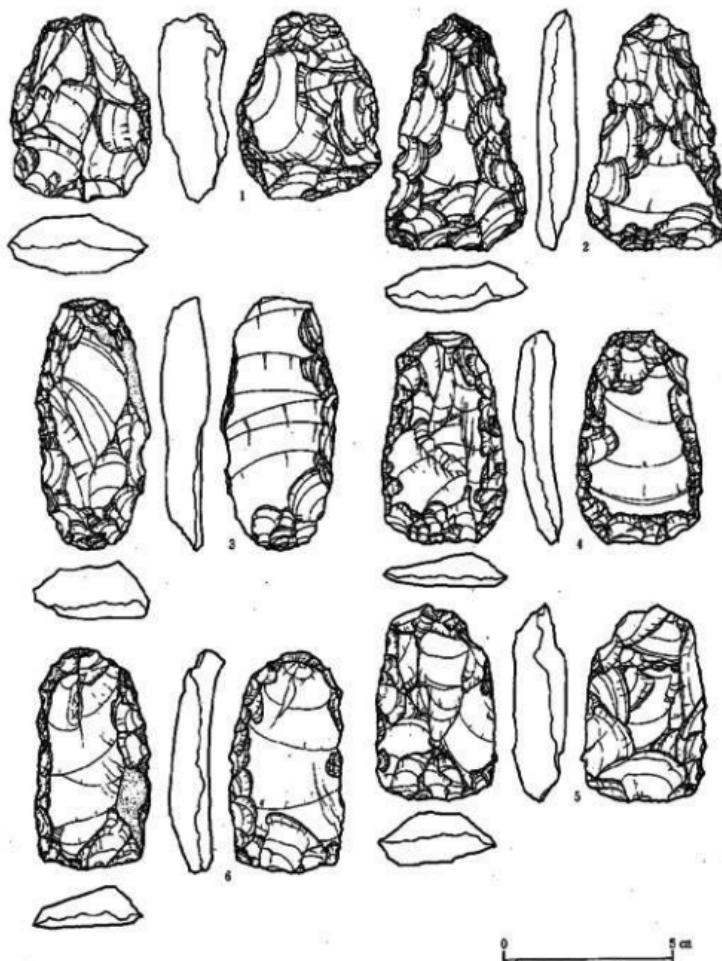
第22図 石匙(7)-その他の層

| 番号 | 形 | 厚 | 分類 | 直 | 幅 | 厚 | 幅 | 厚 | 直 | 幅 | 厚 | 直 | 幅 |
|----|------|-----|-----|------|-----|----|---|-----|---------------|---|----|------|---|
| 36 | CN16 | 4 毫 | 1A1 | 細長石核 | 29 | 13 | 2 | 1.1 | 細長石核あり 15.77g | | 21 | 3-22 | |
| 37 | CN16 | 1 毫 | 1A1 | 細長石核 | 49 | 23 | 3 | 1.2 | | | 15 | 3-22 | |
| 38 | CN17 | 1 毫 | 1A1 | 細長石核 | 143 | 23 | 3 | 1.0 | 尖頭細長石 | | 24 | 3-22 | |



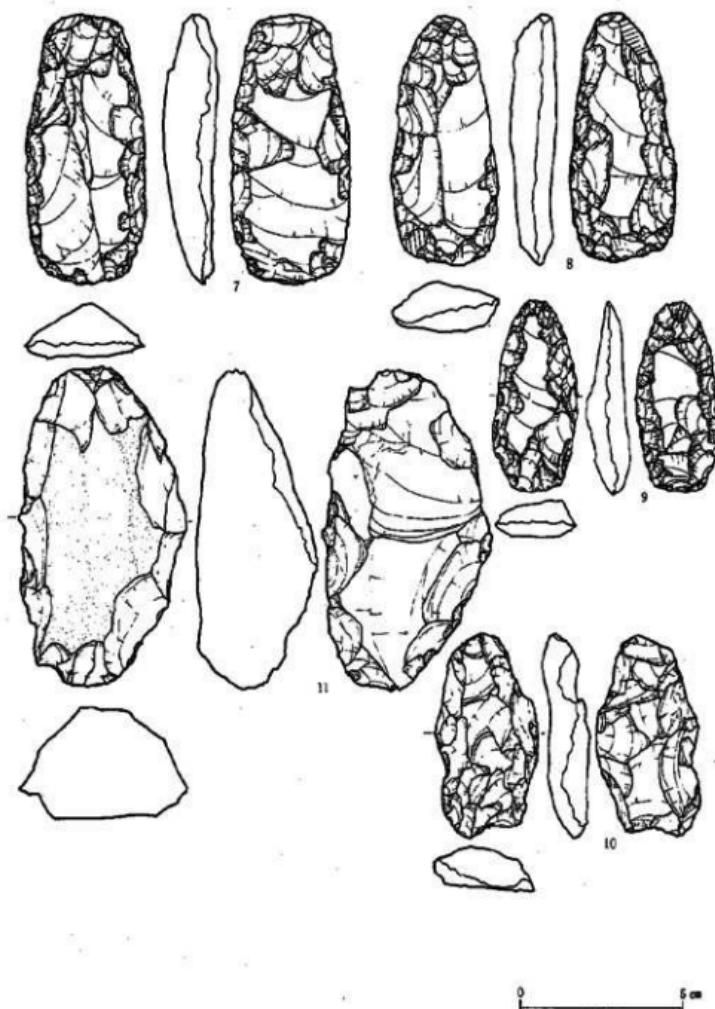
| 番号 | 区 | 層 | 位相 | 石 特 | 長さ (mm) | 幅 (mm) | 厚さ (mm) | 重さ (g) | 番 号 | 層 | 位相 |
|----|------|---------|--------|-------|---------|--------|---------|--------|-----|---|---------|
| 39 | CDB | 1 層 | I-A1 | 地質風化皮 | 37 | 41 | 37 | 36.2 | | | 5 3-26 |
| 40 | CNB | 7 层 | I-A2 | 地質風化皮 | 49 | 25 | 9 | 6.2 | | | 71 3-27 |
| 41 | CNB | 6 层 | I-B0 | 地質風化皮 | 42 | 48 | 12 | 24.3 | | | 68 4-1 |
| 42 | CLB4 | 地ペルト 1層 | I-B1 | 地質風化皮 | 73 | 39 | 12 | 31.2 | | | 64 4-2 |
| 43 | CPB6 | 地ペルト 2層 | I-B2 | 地質風化皮 | 33 | 14 | 4 | 9.2 | | | 58 4-3 |
| 44 | CMB | 5 层 | II-B1 | 地質風化皮 | 39 | 46 | 7 | 13.2 | | | 78 4-5 |
| 45 | CDW | 地ペルト 4層 | III-B2 | 地質風化皮 | 45 | 24 | 8 | 6.2 | | | 34 4-4 |
| 46 | CDW | 地ペルト 2層 | II-A1 | 地質風化皮 | 27 | 26 | 5 | 4.4 | | | 37 4-6 |
| 47 | CPB | 1 层 | N | 地質風化皮 | 34 | 35 | 10 | 31.2 | | | 15 4-7 |

第23図 石器 (8)- その他の層



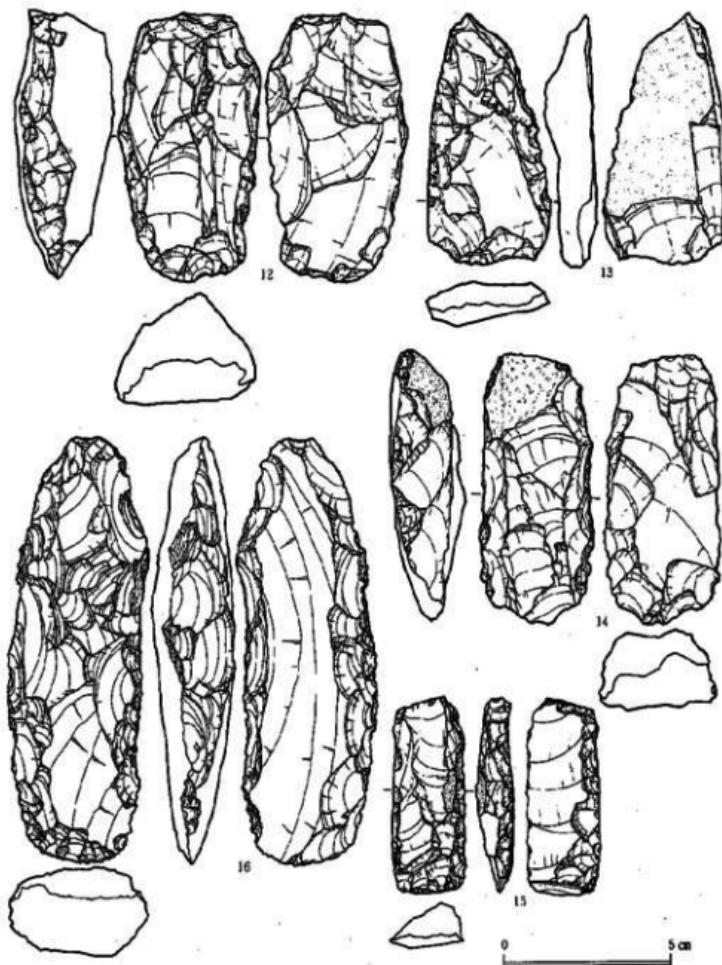
| 番号 | 区 | 層 | 地 | 分類 | 石 | 材 | 大きさ | 幅 | 長 | 厚 | 形 | 名 | 地 | 区 | 年 |
|----|------|---------|---|----|------|----|-----|----|------|------|-------------------|----|------|---|---|
| 1 | C148 | 北へ6.7-2 | 3 | 岩 | 猿古瓦石 | 52 | 63 | 20 | 45.0 | 7.7 | 下端出土。 | 45 | 4-9 | | |
| 2 | C097 | 6 | 3 | 岩 | 猿古瓦石 | 66 | 41 | 12 | 29.2 | 7.2 | 下端出土。 | 32 | 4-9 | | |
| 3 | C197 | 3 | 3 | 岩 | 猿古瓦石 | 69 | 34 | 11 | 33.0 | 7.0 | 底端出土。刀根中央部(5.T.)。 | 30 | 4-10 | | |
| 4 | C178 | 1 | 1 | 岩 | 猿古瓦石 | 59 | 37 | 11 | 26.0 | 7.0 | 底端出土。 | 31 | 4-13 | | |
| 5 | C191 | 北へ6.7-2 | 1 | 岩 | 猿古瓦石 | 54 | 36 | 15 | 33.0 | 10.0 | 上端出土。 | 7 | 4-12 | | |
| 6 | C099 | 南へ6.7-1 | 3 | 岩 | 猿古瓦石 | 61 | 34 | 17 | 38.6 | 10.0 | 江幡山出土。被村の刀根側面。 | 5 | 4-12 | | |

第24図 篦状石器 (I)-V層・III層・II層



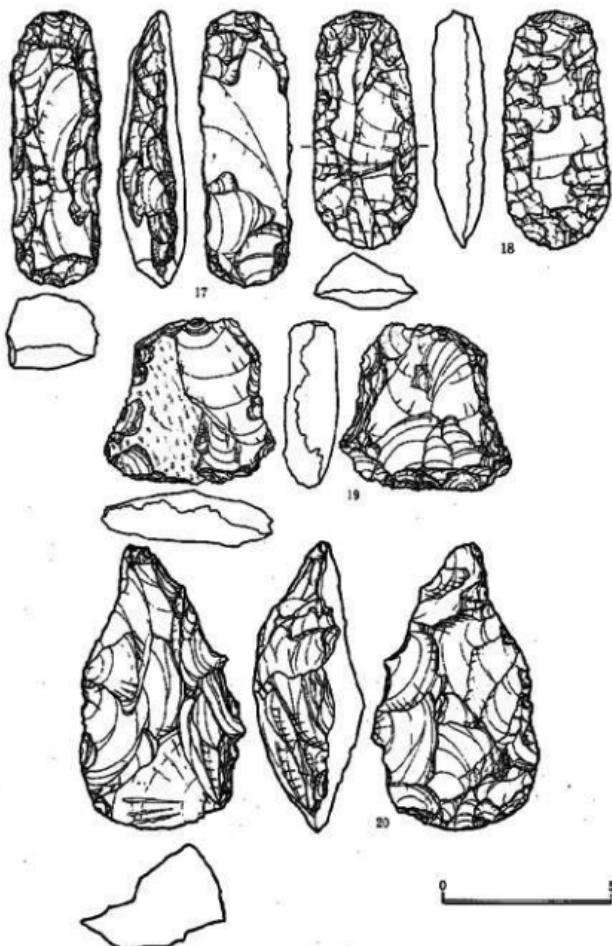
第25図 范状石器 (2) - II層・I層

| 番号 | 区 | 施設名 | 面積 | GJ | SH | 床面積(m ²) | 壁面積(m ²) | 天井面積(m ²) | 用途 | 備考 | 計 | 計 | 計 |
|----|------|--------|----|----|----|----------------------|----------------------|-----------------------|----------------|----|----|------|---|
| 7 | C008 | 3層 | 日活 | 75 | 27 | 17 | 50.0 | 日活棟A。 | 事務の行動範囲内。 | | 5 | 4~14 | |
| 8 | C129 | 1層 | 日活 | 66 | 35 | 14 | 35.0 | 日活棟B。 | 事務室、会議室等。(ST)。 | | 44 | 4~15 | |
| 9 | C130 | 4階+ト2層 | 日活 | 53 | 26 | 12 | 16.0 | 日活棟A。 | | | 43 | 4~17 | |
| 10 | C130 | 4階 | 日活 | 57 | 32 | 12 | 20.0 | 日活棟B。 | | | 21 | 4~18 | |
| 11 | C135 | 階上+ト1層 | 日活 | 66 | 35 | 17 | 35.0 | 日活棟A。 | 会員用部屋。 | | 20 | 4~16 | |



| 番号 | 区 | 場所 | 分類 | 石 | 対 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 備考 | 番 | 号 | 監視 | 測定 |
|----|------|----------|----|------|-----|--------|-------|--------|-----------------|----|----|-----|----|----|
| 12 | CP96 | 3 帯 | 1 | 椎葉尖端 | 74 | 42 | 30 | 104.0 | | | 1 | 3-1 | | |
| 13 | CM99 | 西ペルト 1 帯 | 1 | 椎葉尖端 | 76 | 27 | 10 | 37.0 | 右側に剥離面あり。 | | 20 | 3-2 | | |
| 14 | CM98 | 西ペルト 2 帯 | 2 | 玉 頭 | 75 | 34 | 20 | 88.0 | | | 39 | 3-3 | | |
| 15 | CP95 | 4 帯 | 1 | 椎葉尖端 | 55 | 32 | 11 | 17.0 | 右側に剥離面あり。 | | 8 | 3-4 | | |
| 16 | CM91 | 1 帯 | 2 | 椎葉尖端 | 110 | 43 | 2 | 318.0 | 左側がスクリューバー状を呈す。 | | 54 | 3-5 | | |

第26図 篦状石器(3)-その他の層



| 番号 | 区 | 層位 | 分類 | 石種 | 長さ(mm) | 幅(mm) | 厚さ(mm) | 重さ(g) | 備考 | 番号 | 層位 | 石種 |
|----|---------|--------|-----|-------|--------|-------|--------|-------|-------------|----|-----|----|
| 17 | CMB8 | 北ヘクト4層 | IIA | 燧石質岩 | 79 | 27 | 20 | 50.6 | 剥離二段の跡。 | 26 | 5-6 | |
| 18 | CMB8 | 2層 | IIA | 燧石質岩 | 60 | 25 | 16 | 37.4 | 剥離二段の跡。 | 27 | 4-7 | |
| 19 | CLTB+7R | 1層 | IIA | 燧石質岩 | 65 | 50 | 16 | 36.7 | 剥離の自然断面が複数。 | 28 | - | |
| 20 | CPB5 | 西ヘクト5層 | II | 矽化泥灰岩 | 79 | 46 | 22 | 76.5 | | 29 | - | |

第27図 蓋状石器(4)-その他の層

6. 両極剥離痕ある石器 (第28図、第29図)

【V層】 4点出土している(2点図示。第28図1、2)。いずれも立面觀が線状を呈する一对の両極剥離痕をもち、2は上下両端に両極剥離以前の平坦面をもっている。

【IV層】 IV層出土と認定できた資料はない。

【III層】 5点出土している(3点図示。第28図3～5)。いずれも一对の両極剥離痕をもち、両極剥離痕の立面觀が線状のもの(5)と、一方の両極剥離痕が点状に潰れたもの(3、4)がある。

【II層】 5点出土している(4点図示。第28図6～9)。両極剥離痕が一对のもの(6～8)と二対のもの(9)があり、その形状には立面觀が線状のもの(10、11、19)と一方に両極剥離以前の平坦面をもつもの(7、8)がある。なお、8にある平坦面は素材の打面である。

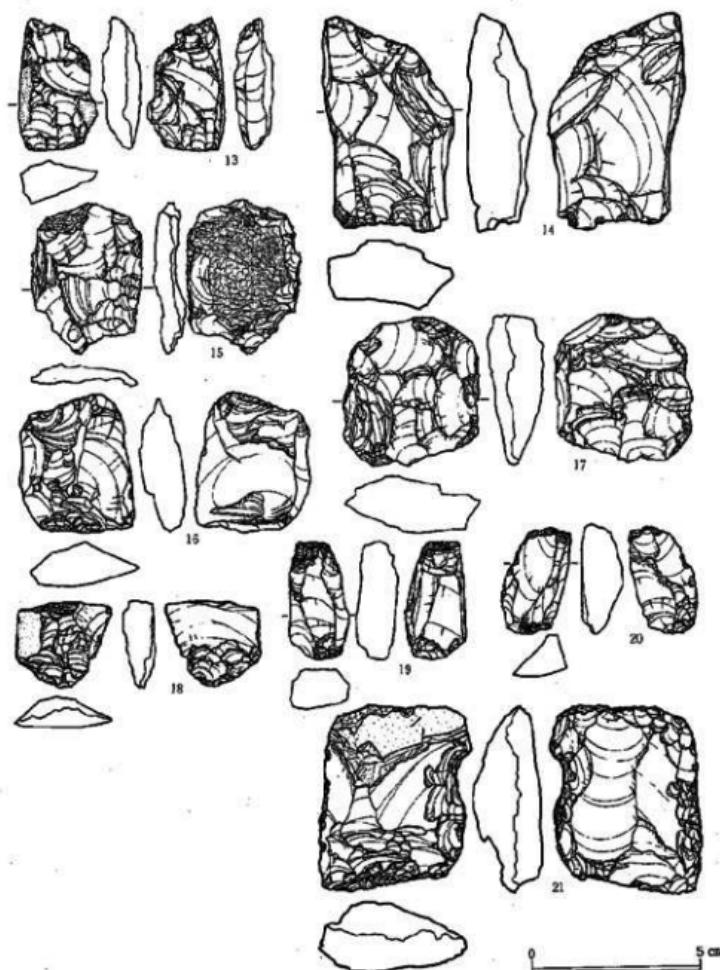
【I層】 4点出土している(第28図10～12、第29図19)。両極剥離痕が一对のもの(10、11、19)と二対のもの(12)があり、その形状には一方の立面觀が線状で他方に両極剥離以前の平坦面を持つもの(10、19)、または潰れた状態となるもの(11)、両端に両極剥離以前の平坦面を持つもの(12)がある。このうち12にある平坦面の一方は、素材の打面である。

【その他の層】 12点ある(8点図示。第29図13～18、20、21)。両極剥離痕が一对のもの(13～18、20)と二対のもの(21)があり、その形状には立面觀が線状のもの(13～15、21)、一方の立面觀が線状で他方に両極剥離以前の平坦面をもつもの(16～18)、一方の立面觀が線状で、他方は点状もしくは潰れた状態のもの(21)がある。このうち18にある平坦面は折断面である。また14、18は既成の石器を転用したもので、交互剥離状の刃部や微細剥離痕が残されている。



| 番号 | 江 | 層 | 石器 | 石質 | 厚さ mm | 長さ mm | 幅さ mm | 重さ g | 記 | 番号 | 江 | 層 |
|----|------|--------|----|----|-------|-------|-------|------|------|-------|---|------|
| 1 | CMB6 | 4 | 刀 | 1A | 粗粒頁岩 | 41 | 35 | 9 | 11.5 | V層の上。 | | 5-5 |
| 2 | CP66 | 4 | 刀 | 1B | 粗粒頁岩 | 39 | 37 | 7 | 12.0 | V層の上。 | | 5-6 |
| 3 | CL25 | 3 | 大刀 | 1C | 粗粒頁岩 | 38 | 34 | 8 | 4.6 | 3層の上。 | | 5-10 |
| 4 | CP65 | 2 | 刀 | 1C | 粗粒頁岩 | 38 | 31 | 9 | 5.3 | 3層の上。 | | 5-11 |
| 5 | CL74 | 2 | 刀 | 1A | 粗粒頁岩 | 48 | 47 | 15 | 25.1 | 3層の上。 | | 5-12 |
| 6 | CMB6 | 1(A)-4 | 刀 | 2A | 高 硅 酸 | 32 | 35 | 10 | 7.8 | 1層の上。 | | 5-13 |
| 7 | CMB6 | 3 | 大刀 | 2B | 高 硅 酸 | 33 | 24 | 18 | 4.7 | 3層の上。 | | 5-14 |
| 8 | CD65 | 1 | 刀 | 2B | 粗粒頁岩 | 36 | 18 | 10 | 4.4 | 1層の上。 | | 5-15 |
| 9 | CMB6 | 2 | 刀 | 2A | 粗粒頁岩 | 35 | 36 | 7 | 6.9 | 1層の上。 | | 5-16 |
| 10 | CMB6 | 3 | 刀 | 2B | 粗粒頁岩 | 34 | 37 | 17 | 20.9 | 1層の上。 | | 5-17 |
| 11 | CP66 | 1 | 刀 | 2C | 粗粒頁岩 | 37 | 29 | 19 | 15.1 | 1層の上。 | | 5-18 |
| 12 | CMB6 | 1 | 刀 | 2D | 粗粒頁岩 | 39 | 27 | 9 | 16.0 | 1層の上。 | | 5-19 |

第284図 河縁斜面ある石器 (1)-V層・山層・丘層・1層



| 番号 | 区 | 層位 | 分類 | 目 | 材 | 長さ(mm) | 幅さ(mm) | 厚さ(mm) | 重さ(g) | 備考 | 層 | 地 | 記号 |
|----|------|--------|----|------|----|--------|--------|--------|------------------|----|------|---|----|
| 13 | CL24 | 底ベント1層 | IA | 石 破 | 26 | 22 | 1 | 9.5 | | | 3-20 | | |
| 14 | CNM | 1 層 | IE | 燧石質砂 | 42 | 26 | 26 | 45.6 | | | 3-21 | | |
| 15 | CL25 | 2 层 | IA | 燧石質砂 | 40 | 22 | 2 | 9.9 | 擦りはじけあり。 | | 3-20 | | |
| 16 | CL27 | 1 层 | ID | 燧石質砂 | 40 | 34 | 13 | 26.1 | 自然剥離形。 | | 3-22 | | |
| 17 | CNM | 4 层 | IB | 燧石質砂 | 45 | 41 | 17 | 20.6 | | | 3-24 | | |
| 18 | CNM | 底ベント2層 | IE | 燧石質砂 | 24 | 24 | 9 | 8.4 | 実測に微小誤差有り(±0.7)。 | | 3-25 | | |
| 19 | CNM | 3 层 | ID | 燧石質砂 | 33 | 17 | 13 | 8.6 | 1層出土。 | | 3-26 | | |
| 20 | CNM | 1 层 | IC | 燧石質砂 | 20 | 16 | 13 | 8.7 | | | 3-27 | | |
| 21 | CL29 | 底ベント2層 | IA | 燧石質砂 | 32 | 40 | 23 | 46.2 | | | 3-18 | | |

第29図 両極刺離痕ある石器(2)-I層・その他の層

7. 不定形石器 (第30図～第59図)

【V層】 17点出土している(11点図示。第30図、第31図)。素材の形態を二次加工によって大きく変えたもの(1)と、素材の形態をあまり変えず部分的な二次加工を加えたもの(2～11)がある。前者は尖頭器に類似した平面形をもつ大型品で、尖端部は厚みがあり二次加工A、Bが使用されている。後者には二次加工Dによりスクレイバーエッジを作出するもの(2、4～6)、素材の縁辺に二次加工Dを加えて鋸歯状の立面觀をもつ刃部を作出するもの(3、10、11)、素材の打面付近を除去し、末端側の縁辺に微細剥離痕をもつもの(8)、ノッチ状の二次加工をもつもの(9)とがある。スクレイバーエッジをもつものには比較的整った刃部のもの(2、4)と粗雑なもの(5、6)があり、後者には片面加工の粗雑な刃部や鋸歯状の立面觀をもつ両面加工の刃部をあわせもっている。また鋸歯状の立面觀をもつ刃部のものは他に交互剥離状の刃部や、折断面に二次加工を加えた尖端部をあわせもっている。

【IV層】 4点出土している(3点図示。第32図)。いずれも素材の形態をあまり変えない部分的な二次加工がなされるもので、素材の打面を除去し縁辺部に二次加工Dによって刃部を作出するもの(12)と、二次加工Dによって立面觀が鋸歯状となる刃部を作出するもの(13～15)である。

【III層】 59点出土している(42点図示。第33図～第39図)。素材の形態を大きく変えたもの(16～25)と、素材の形態をあまり変えず部分的な二次加工を加えたもの(26～48)とがある。前者には笠状石器に類似する形態をもち、側辺に二次加工Bにより鋸歯状の立面觀をもつ刃部を作出するもの(16～19)、円形状に整形され二次加工A～Cの両面加工により鋸歯状の立面觀をもつ刃部を作出するもの(20、21)、二次加工B、Cの両面加工により円形を呈するもの(22、23)、二次加工A～Dが用いられ尖頭器に類似する形態をもつが、基部加工がなく全体的に粗雑なもの(24、25)がある。このうち笠状石器に類似するものには、表面側上端に粗雑な二次加工が加えられるもの(17)や折断面を利用して尖端部を作出するもの(20、21)が含まれている。

後者には二次加工B、Dによりスクレイバーエッジを作出するもの(26～35)、二次加工Dによって尖端部を作出するもの(36、39、42)、素材の打面を除去し縁辺部に二次加工Dによって刃部を作出するもの(44)、ノッチ状の二次加工をもつもの(46)、二次加工B、Dの両面加工によって規則正しい小鋸歯状の立面觀をもつ刃部を作出するもの(47～51)、二次加工Cによって交互剥離状の刃部を作出するもの(45、52～56)がある。スクレイバーエッジをもつものには、素材末端に整った刃部をもつエンドスクレイバー(26～28)、素材末端以外の部分にも整った刃部が作成され、スクレイバーエッジ以外の機能部をあわせもつもの(29～31)、粗雑なスクレイバーエッジを一ないし二側辺にもつもの(32～35、38)とがある。これらには三側辺にスクレイバー

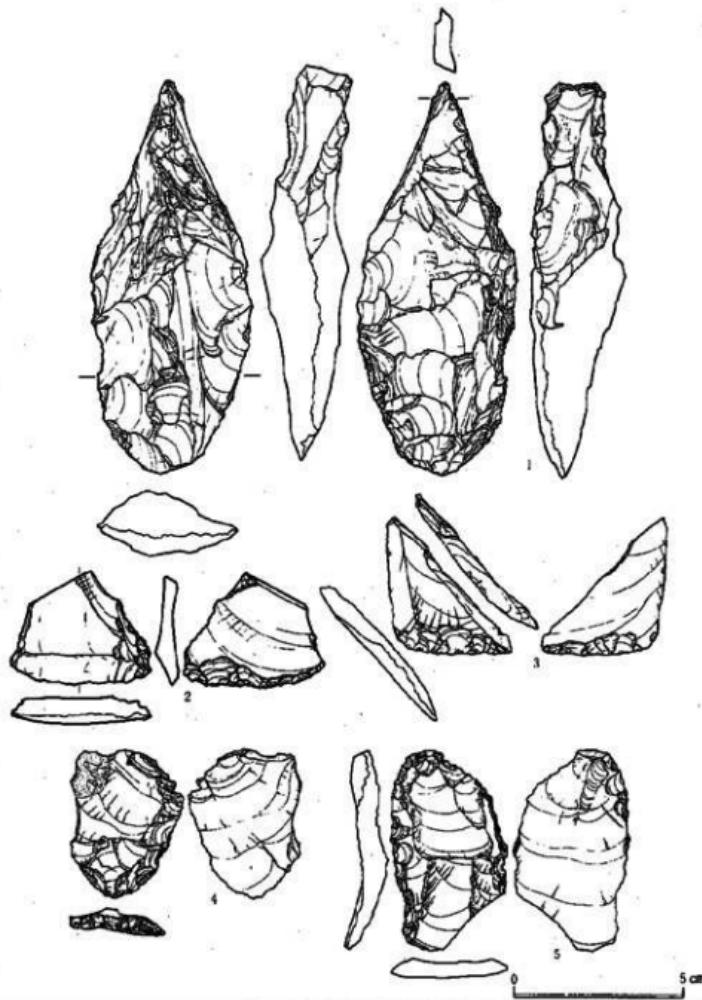
エッジをもつもの(3)や鋸歯状の立面觀をもつ刃部と交互剥離状の刃部を相対する二側邊にもつもの(4)が含まれている。また交互剥離状の刃部をもつものには、縁辺に二次加工をもつもの(45, 52, 54, 56)がある。

【II層】 52点出土している(36点図示。第40図~第44図)。素材の形態を大きく変えるものはIII層に比べ少なく(58, 60, 61)、素材の形態をあまり変えない部分的な二次加工のもの(62~90)が多い。前者には範状石器に類似する形態をもち、二側邊にステップの目立つ不整な二次加工A, Bを加えたもの(5), 台形状の形態を持ち二次加工B, Cによって鋸歯状の立面觀をもつ刃部を作出するもの(6), 円形状を呈し二次加工Aが用いられるもの(6)がある。

後者には二次加工B~Dによりスクレイバーエッジを作出するもの(62~70)、二次加工B, Dによって尖端部を作出するもの(71~76)、素材の打面を除去し縁辺部に刃部を作出するもの(77, 78)、ノッチ状の二次加工をもつもの(65)、二次加工C, Dにより鋸歯状の正面觀をもつ刃部を作出するもの(63)、縁辺に沿う二次加工B, Dの両面加工により小鋸歯状の立面觀をもつ刃部を作出するもの(79~82, 84, 86, 87)、二次加工A~Cにより交互剥離状の刃部を作出するもの(88~93)がある。スクレイバーエッジをもつものにはV層、III層同様、素材末端に整った刃部をもつエンドスクレイバー(62~64)、素材末端以外の部分にも整った刃部を作出するもの(66, 67)、粗雑なスクレイバーエッジをもつもの(68~70)がある。これらには両面加工の粗雑な刃部をあわせもつもの(6)などが含まれている。尖端部を作出するものには二次加工Dによるもの(7)や、折断面をそのまま利用したり二次加工を加えたもの(72~76)があり、粗雑なスクレイバーエッジをあわせもつもの(6)もみられる。素材の打面付近を除去するものの刃部には、不整なもの(7)と鋭い縁辺を利用したもの(6)の二種類がある。ノッチ状の二次加工をもつものは石鎚の転用品である。立面觀が小鋸歯状の刃部をもつものには三側邊に整った刃部をもつもの(8)や尖端部をもつもの(6)、形態が石匙に類似するがノッチのないもの(6)などが含まれている。また立面觀が鋸歯状の刃部をもつものは厚手の素材を用いており、両面または片面加工で作成された刃部の形状は概して不整である。

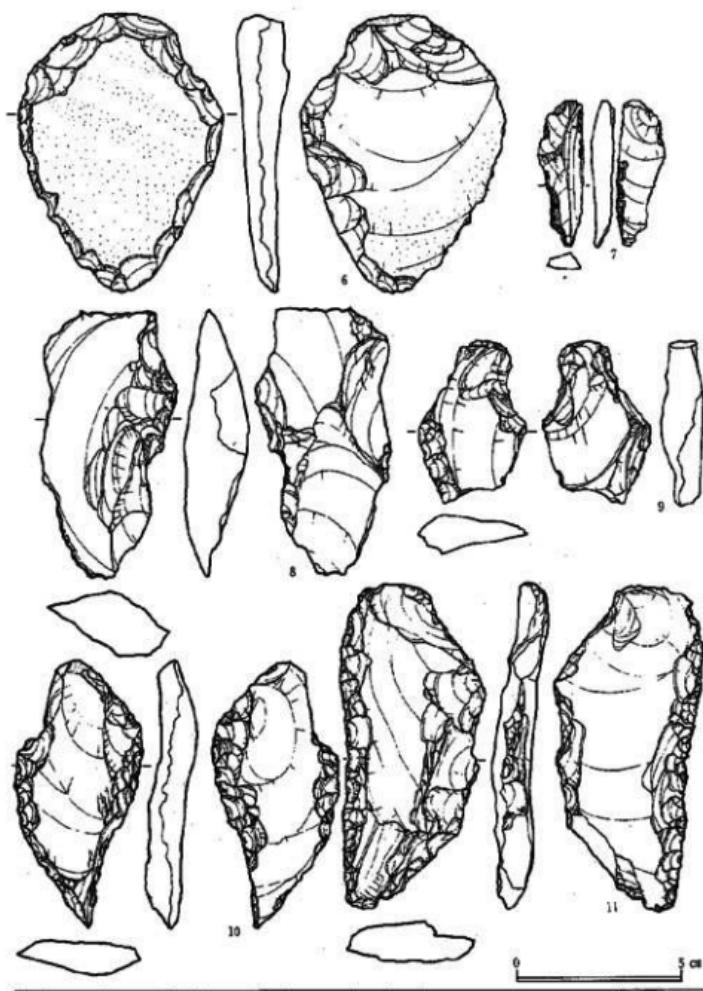
【I層】 45点出土している(34点図示。第45図~第49図)。素材の形態を大きく変えるものはV層~II層同様少なく(94~96)、素材の形態をあまり変えない部分的な二次加工のものが多い(97~127)。前者は範状石器に類似する形態で、二側邊にステップの目立つ二次加工C, Dが連続するもの(6)と、円形状を呈し二次加工A~Dにより刃部を作出するもの(95, 96)である。

後者は二次加工B~Dによりスクレイバーエッジを作出するもの(97~106)、尖端部を作出するもの(107, 109, 110, 111)、素材の打面部付近を除去し縁辺部に微細剥離痕や二次加工Dによる刃部がみられるもの(112, 114)、ノッチ状の二次加工をもつもの(113)、大まかな二次加工Bにより鋸歯状の正面觀をもつ刃部を作出するもの(115)、二次加工BないしDの両面加



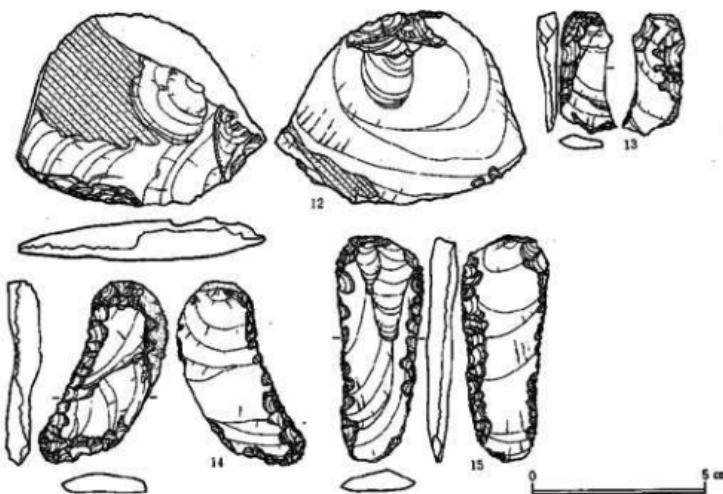
| 番号 | 区 | 層位 | 分類 | 古村 | 厚さ(m) | 幅(m) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 備考 | 年 | 出 | 図 | 年 |
|----|------|-----|------|------|-------|------|--------|-------|--------------------------|-----|-----|---|---|
| 1 | CMTT | 6 層 | IAP | 地質岩盤 | 1.0 | 47 | 38 | 36.5 | | 4 | 8-1 | | |
| 2 | CMBH | 5 層 | IAP | 地質岩盤 | 2.2 | 43 | 7 | 7.5 | 三面刃セザルあり。 | 590 | 8-2 | | |
| 3 | CDEH | 6 層 | II-I | 地質岩盤 | 2.0 | 36 | 7 | 6.1 | 鉄製品。 | 33 | 8-3 | | |
| 4 | CLTH | 4 層 | IIAB | 地質岩盤 | 4.1 | 33 | 6 | 6.5 | 骨材表面にカルシウムベーナー等級あり。三面刃形。 | 3 | 8-4 | | |
| 5 | CMTS | 4 層 | IIAS | 地質岩盤 | 5.6 | 35 | 12 | 12.0 | 骨端にカルシウムベーナー等級あり。 | 2 | 8-5 | | |

第30図 不定形石器 (I)- V層



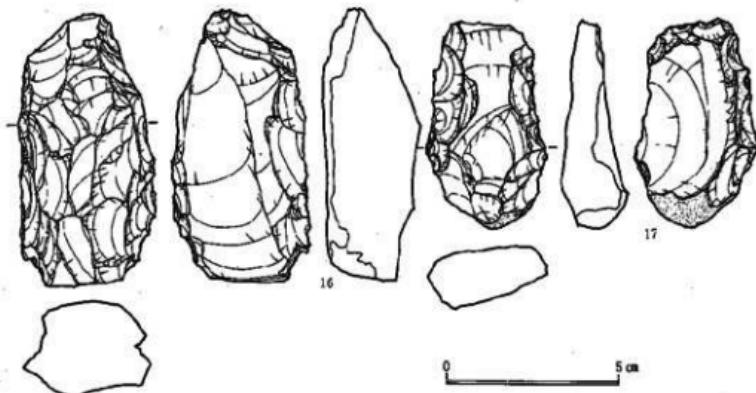
第31図 不定形石器(2)-V層

| 番号 | 種 | 層 | 地 | 分類 | 切 | 持 | 長さ(cm) | 幅さ(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 圖 | 名 | 地 | 種 |
|----|------|------|---|-------|-------|----|--------|--------|--------|---------------|----|------|---|---|
| 6 | CPRM | 7 | 雪 | IIA2? | 蛇形片状器 | 29 | 92 | 12 | 63.0 | | 7 | 8-6 | | |
| 7 | CMT9 | 9 | 雪 | IIA2? | 蛇形片状器 | 41 | 34 | 7 | 2.6 | | 1 | 8-11 | | |
| 8 | COR6 | 6 | 雪 | IIF | 蛇形片状器 | 29 | 45 | 20 | 39.3 | | 10 | 8-7 | | |
| 9 | GLJ7 | 6 | 雪 | IIG | 蛇形片状器 | 46 | 39 | 12 | 53.5 | | 8 | 8-8 | | |
| 10 | COR4 | 6 | 雪 | II | 蛇形片状器 | 29 | 39 | 11 | 21.4 | POの突出による蛇形片状器 | 12 | 8-9 | | |
| 11 | CMB4 | 北ベルト | 雪 | II | 蛇形片状器 | 31 | 46 | 17 | 43.0 | | 8 | 8-11 | | |



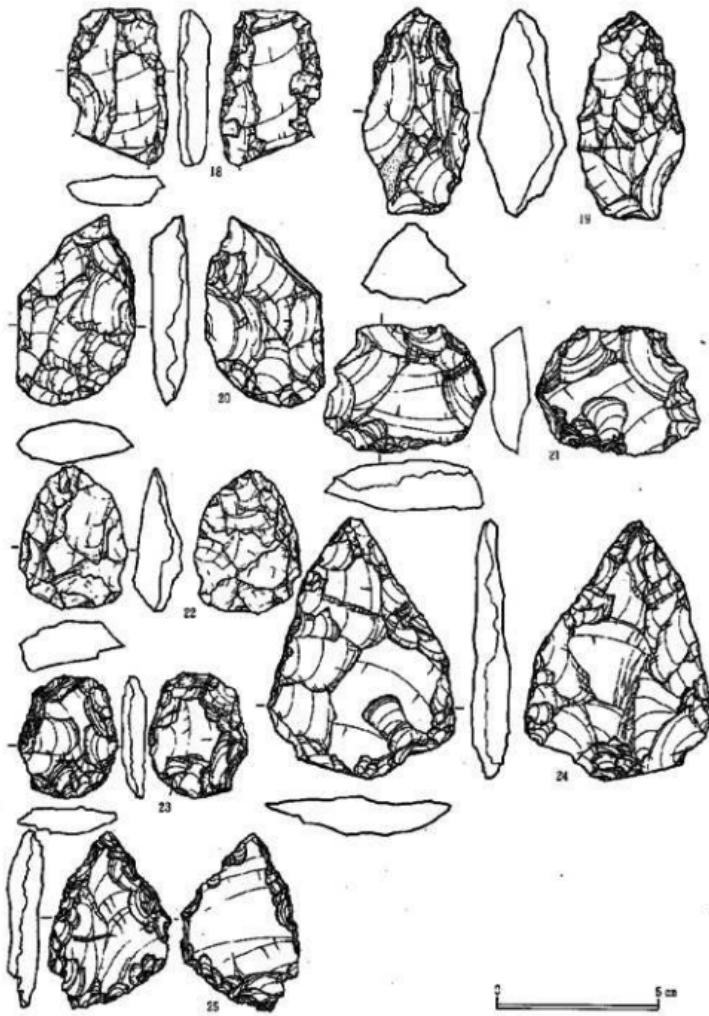
| 番号 | 形 | 層 | 分類 | 石 材 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 番 | 形 | 層 | 分類 |
|----|-------|---|----|------|--------|-------|--------|-------|----|---|---|----|
| 12 | CM472 | A | 器 | 鈍頭尖端 | 66 | 72 | 16 | 47.5 | 26 | | | |
| 13 | CL138 | B | 器 | 鈍頭尖端 | 34 | 11 | 6 | 2.6 | 27 | | | |
| 14 | CM473 | 2 | 器 | 鈍頭尖端 | 51 | 32 | 10 | 11.2 | 28 | | | |
| 15 | CM472 | 4 | 器 | 鈍頭尖端 | 62 | 29 | 6 | 10.7 | 29 | | | |

第32図 不定形石器(3)-IV層



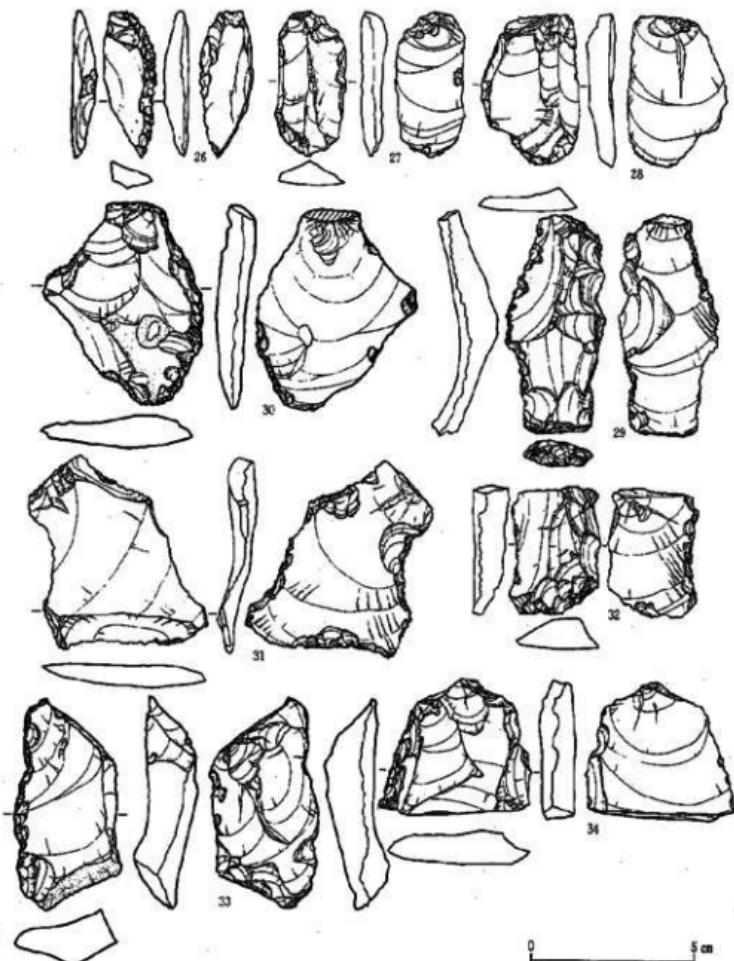
| 番号 | 形 | 層 | 分類 | 石 材 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 番 | 形 | 層 | 分類 |
|----|-------|---|----|------|--------|-------|--------|-------|----|---|---|----|
| 16 | CLJ21 | 4 | 器 | 钝头尖端 | 27 | 40 | 20 | 52.2 | 30 | | | |
| 17 | CLJ23 | 3 | 器 | 钝头尖端 | 18 | 38 | 10 | 35.5 | 31 | | | |

第33図 不定形石器(4)-III層



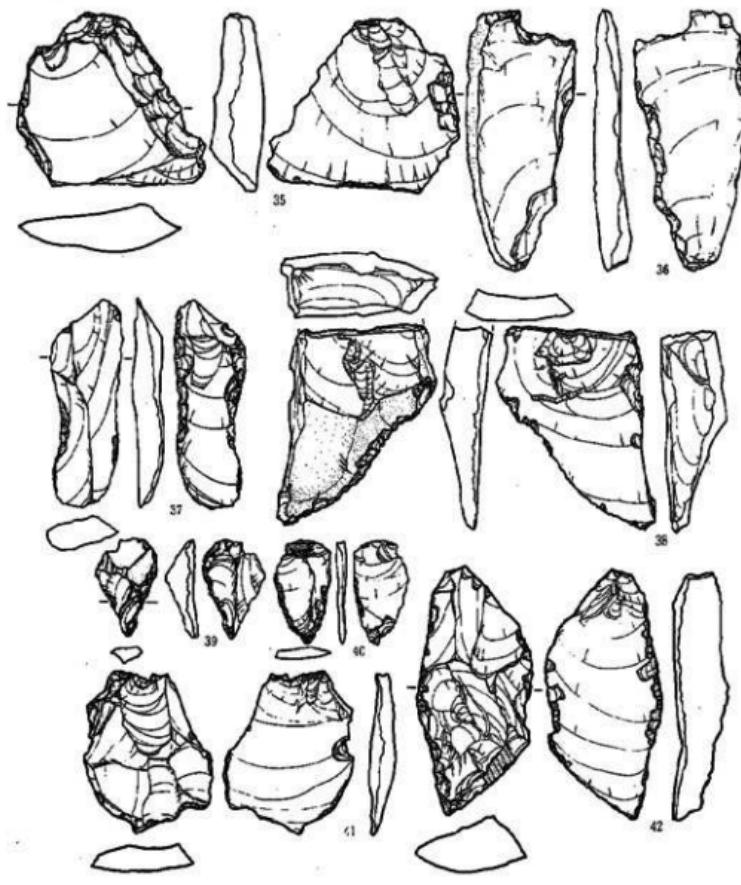
| 番号 | 石 | 層 | 位 | 分類 | 形 | 材 | 厚 | 幅 | 長 | 側面 | 側面 | 側面 | 側面 | 側面 | 側面 | 側面 | 側面 | 側面 |
|----|------|---|---|-----|------|---|----|----|----|------|--------------|----|----|----|----|----|----|----|
| 18 | CMT2 | 1 | 層 | IA? | 粗質打擊 | 石 | 45 | 30 | 10 | 15.0 | F丸。 | | | | | | | |
| 19 | CL42 | 1 | 層 | IA | 粗質打擊 | 石 | 35 | 25 | 27 | 35.0 | | | | | | | | |
| 20 | CM41 | 2 | 層 | IB | 粗質打擊 | 石 | 35 | 27 | 12 | 25.0 | 下を斜めに向いての斜面。 | | | | | | | |
| 21 | CM46 | 2 | 層 | IB? | 粗質打擊 | 石 | 37 | 29 | 21 | 27.0 | 下を斜めに向いての斜面。 | | | | | | | |
| 22 | CM79 | 1 | 層 | IC1 | 細質打擊 | 石 | 43 | 30 | 10 | 18.0 | 側面斜面の斜面。 | | | | | | | |
| 23 | CL54 | 2 | 層 | IC | 細質打擊 | 石 | 36 | 20 | 7 | 7.7 | 側面斜面の斜面。 | | | | | | | |
| 24 | CL70 | 3 | 層 | IT | 細質打擊 | 石 | 26 | 16 | 10 | 12.0 | 打撲面。 | | | | | | | |
| 25 | CL75 | 2 | 層 | IF | 細質打擊 | 石 | 31 | 26 | 11 | 13.5 | 打撲面。 | | | | | | | |

第34図 不定形石器(5)-III層



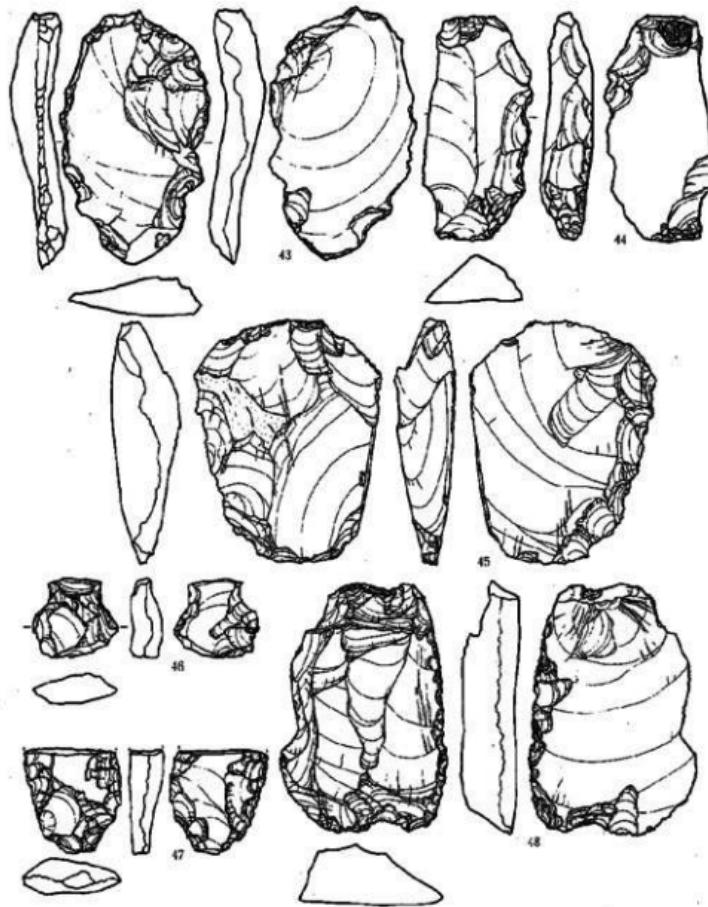
| 番号 | 石器種 | 厚さ | 分類 | 石器名 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 備考 | 番号 | 石器種 | 厚さ |
|----|----------|----|----|------|--------|-------|--------|-------|--------------------|----|------|----|
| 26 | CK-A1 | 1 | 薄 | 地質骨器 | 42 | 15 | 7 | 4.4 | アラカリ(砂岩)。 | 35 | 6-25 | |
| 27 | CKM-CKA1 | 0 | 薄 | 地質骨器 | 43 | 21 | 8 | 6.0 | | 36 | 6-27 | |
| 28 | CDA8 | 3 | 厚 | 地質骨器 | 43 | 20 | 9 | 9.0 | 打削跡有。 | 37 | 6-28 | |
| 29 | CK78 | 4 | 厚 | 地質骨器 | 49 | 11 | 10.8 | | | 38 | 6-29 | |
| 30 | CL74 | 5 | 厚 | 地質骨器 | 62 | 20 | 19 | 14.7 | 断面に側面剥離面あり(3-T.)。 | 39 | 6-30 | |
| 31 | CK74 | 1 | 薄 | 地質骨器 | 55 | 25 | 10 | 2.0 | 断面にエッジノバース有り。 | 40 | 6-31 | |
| 32 | CL79 | 4 | 厚 | 地質骨器 | 26 | 20 | 9 | 20.0 | 断面にエッジノバース有り。アラカリ。 | 41 | 6-32 | |
| 33 | CL84 | 2 | 厚 | 地質骨器 | 40 | 22 | 20 | 26.0 | 断面剥離。 | 42 | 6-33 | |
| 34 | CL83 | 3 | 厚 | 地質骨器 | 28 | 47 | 11 | 23.0 | 一部は火成岩剥離状を呈す。アラカリ。 | 43 | 6-34 | |

第35図 不定期石器(6)-III層



| 番号 | 形 | 標 | 分類 | 石 | 材 | 厚 | 幅 | 長 | 性 | 標 | 分 | 類 |
|---------|---------|---|------|------|----|----|----|------|---------------------|-----|------|---|
| 35 CM70 | 3 個 | | IIA2 | 地質頁岩 | 48 | 28 | 15 | 22.0 | Fを切る二次加工あり。 | 23 | 7-1 | |
| 36 CL70 | 2 個 | | IIC | 片 磨 | 71 | 34 | 10 | 29.0 | 火打跡の内あり (S.T.)。 | 22 | 7-2 | |
| 37 CL70 | 2 個 | | IIA2 | 地質頁岩 | 57 | 25 | 9 | 14.0 | 刃部や火打跡あり (S.T.)。 | 24 | 7-3 | |
| 38 CL73 | 4 個 | | IIA2 | 地質頁岩 | 88 | 47 | 15 | 30.2 | 刃部の打痕をもつてゐる。 | 39 | 7-4 | |
| 39 CM70 | 四六セント5個 | | IIC | 地質頁岩 | 27 | 18 | 10 | 2.2 | 火打跡あり (S.T.)。 | 204 | 7-5 | |
| 40 CM70 | 4 個 | | IIA2 | 地質頁岩 | 26 | 27 | 5 | 1.2 | 火打跡と磨耗あり (S.T.)。 | 43 | 7-6 | |
| 41 CM65 | 5 個 | | IIA2 | 地質頁岩 | 41 | 38 | 8 | 9.7 | 二面打-側面削離込み5 (S.T.)。 | 37 | 7-7 | |
| 42 CL70 | 2 個 | | IIC | 地質頁岩 | 69 | 38 | 17 | 26.0 | 刃部や火打跡 (S.T.)。 | 54 | 7-10 | |

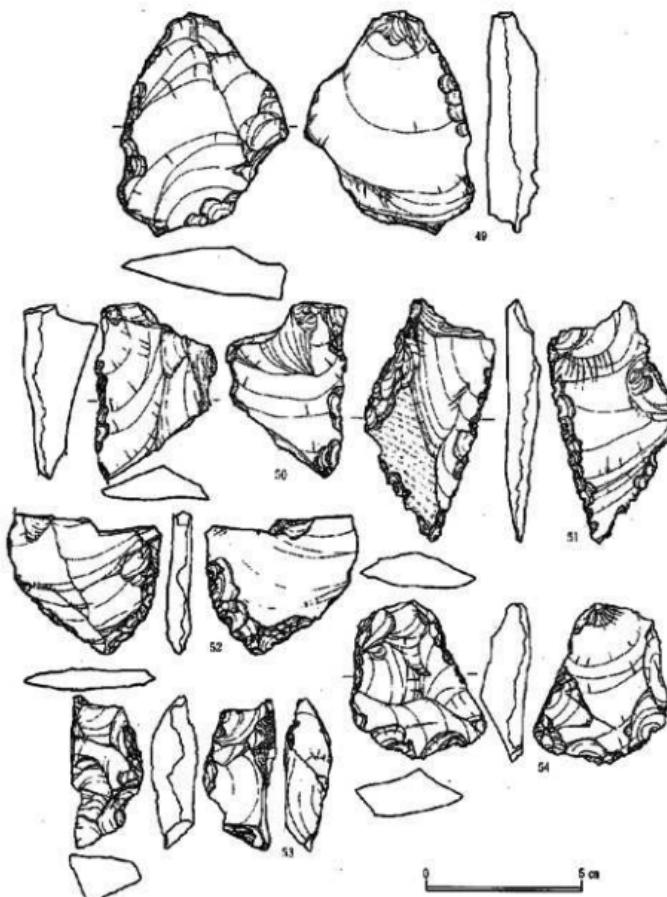
第36図 不定形石器(7)-Iwase層



0 5 cm

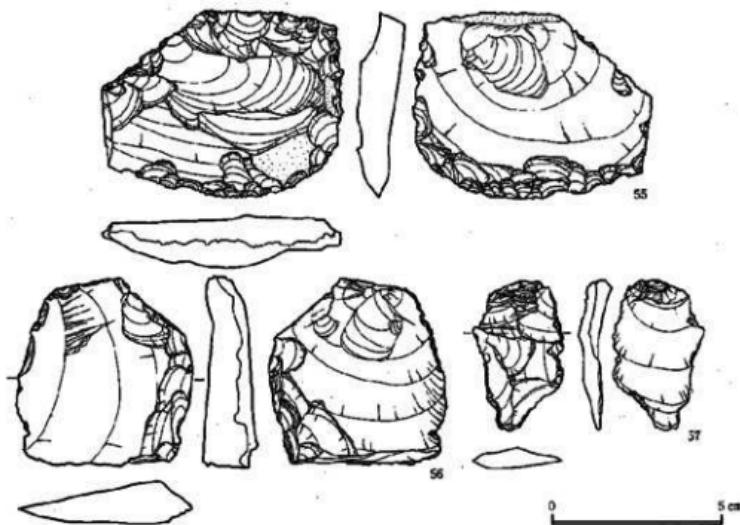
| 番号 | 区 | 層 | 口 | 分類 | 行 | 材 | 高(m) | 幅(m) | 厚(m) | 重(kg) | 番 | 層 | 口 | 分類 |
|----|------|---|---|-----|----|----|------|------|------|-------|----|------|---|----|
| 43 | C6B1 | 1 | 層 | XP | 地質 | 基岩 | 12 | 40 | 17 | 34.6 | 43 | 7-11 | | |
| 44 | CLM1 | 2 | 層 | 基岩 | 地質 | 基岩 | 64 | 33 | 18 | 38.7 | 45 | 7-12 | | |
| 45 | CLM4 | 4 | 層 | 基岩 | 地質 | 基岩 | 49 | 37 | 19 | 70.5 | 47 | 7-13 | | |
| 46 | GM1 | 4 | 層 | IG | 地質 | 基岩 | 22 | 34 | 10 | 8.0 | 48 | 7-8 | | |
| 47 | GM1 | 4 | 層 | IG? | 地質 | 基岩 | 30 | 39 | 10 | 8.7 | 49 | 7-9 | | |
| 48 | CL14 | 2 | 層 | SI | 地質 | 基岩 | 71 | 31 | 12 | 27.5 | 44 | 7-24 | | |

第37図 不定形石器(8)-Ⅲ層



第38图 不定形石器(9)-Ⅲ层

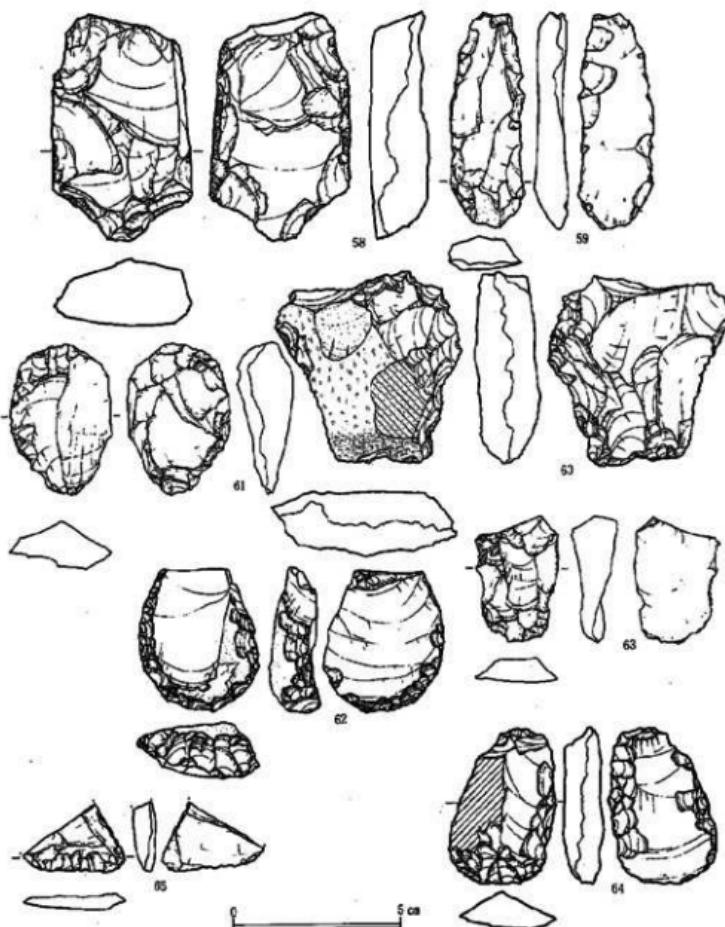
| 編號 | 形 | 長 | 寬 | 厚 | 形 | 長 | 寬 | 厚 | 形 | 長 | 寬 | 厚 | 形 | 長 | 寬 | 厚 |
|-----|-------|---|---|-----|------|---|----|-----|------|---|---|---|-----|------|---|---|
| 47 | CM74 | 4 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | | | | | 51 | 7-19 | | |
| 48 | CM75 | 3 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 16 | 2.2 | 7內T。 | | | | 52 | 7-19 | | |
| 49 | CM76 | 3 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 11 | 2.2 | | | | | 53 | 7-17 | | |
| 50 | CM77 | 3 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 16 | 2.2 | 7內T。 | | | | 54 | 7-18 | | |
| 51 | CM78 | 3 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 15 | 2.2 | 7內T。 | | | | 55 | 7-18 | | |
| 52 | CM79 | 3 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 18 | 2.2 | 7內T。 | | | | 56 | 7-19 | | |
| 53 | CM80 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 57 | 7-20 | | |
| 54 | CM81 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 58 | 7-20 | | |
| 55 | CM82 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 59 | 7-20 | | |
| 56 | CM83 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 60 | 7-20 | | |
| 57 | CM84 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 61 | 7-20 | | |
| 58 | CM85 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 62 | 7-20 | | |
| 59 | CM86 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 63 | 7-20 | | |
| 60 | CM87 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 64 | 7-20 | | |
| 61 | CM88 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 65 | 7-20 | | |
| 62 | CM89 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 66 | 7-20 | | |
| 63 | CM90 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 67 | 7-20 | | |
| 64 | CM91 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 68 | 7-20 | | |
| 65 | CM92 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 69 | 7-20 | | |
| 66 | CM93 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 70 | 7-20 | | |
| 67 | CM94 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 71 | 7-20 | | |
| 68 | CM95 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 72 | 7-20 | | |
| 69 | CM96 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 73 | 7-20 | | |
| 70 | CM97 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 74 | 7-20 | | |
| 71 | CM98 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 75 | 7-20 | | |
| 72 | CM99 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 76 | 7-20 | | |
| 73 | CM100 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 77 | 7-20 | | |
| 74 | CM101 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 78 | 7-20 | | |
| 75 | CM102 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 79 | 7-20 | | |
| 76 | CM103 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 80 | 7-20 | | |
| 77 | CM104 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 81 | 7-20 | | |
| 78 | CM105 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 82 | 7-20 | | |
| 79 | CM106 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 83 | 7-20 | | |
| 80 | CM107 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 84 | 7-20 | | |
| 81 | CM108 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 85 | 7-20 | | |
| 82 | CM109 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 86 | 7-20 | | |
| 83 | CM110 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 87 | 7-20 | | |
| 84 | CM111 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 88 | 7-20 | | |
| 85 | CM112 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 89 | 7-20 | | |
| 86 | CM113 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 90 | 7-20 | | |
| 87 | CM114 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 91 | 7-20 | | |
| 88 | CM115 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 92 | 7-20 | | |
| 89 | CM116 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 93 | 7-20 | | |
| 90 | CM117 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 94 | 7-20 | | |
| 91 | CM118 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 95 | 7-20 | | |
| 92 | CM119 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 96 | 7-20 | | |
| 93 | CM120 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 97 | 7-20 | | |
| 94 | CM121 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 98 | 7-20 | | |
| 95 | CM122 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 99 | 7-20 | | |
| 96 | CM123 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 100 | 7-20 | | |
| 97 | CM124 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 101 | 7-20 | | |
| 98 | CM125 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 102 | 7-20 | | |
| 99 | CM126 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 103 | 7-20 | | |
| 100 | CM127 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 104 | 7-20 | | |
| 101 | CM128 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 105 | 7-20 | | |
| 102 | CM129 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 106 | 7-20 | | |
| 103 | CM130 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 107 | 7-20 | | |
| 104 | CM131 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 108 | 7-20 | | |
| 105 | CM132 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 109 | 7-20 | | |
| 106 | CM133 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 110 | 7-20 | | |
| 107 | CM134 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 111 | 7-20 | | |
| 108 | CM135 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 112 | 7-20 | | |
| 109 | CM136 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 113 | 7-20 | | |
| 110 | CM137 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 114 | 7-20 | | |
| 111 | CM138 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 115 | 7-20 | | |
| 112 | CM139 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 116 | 7-20 | | |
| 113 | CM140 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 117 | 7-20 | | |
| 114 | CM141 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 118 | 7-20 | | |
| 115 | CM142 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 119 | 7-20 | | |
| 116 | CM143 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 120 | 7-20 | | |
| 117 | CM144 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 121 | 7-20 | | |
| 118 | CM145 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 122 | 7-20 | | |
| 119 | CM146 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 123 | 7-20 | | |
| 120 | CM147 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 124 | 7-20 | | |
| 121 | CM148 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 125 | 7-20 | | |
| 122 | CM149 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 126 | 7-20 | | |
| 123 | CM150 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 127 | 7-20 | | |
| 124 | CM151 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 128 | 7-20 | | |
| 125 | CM152 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 129 | 7-20 | | |
| 126 | CM153 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 130 | 7-20 | | |
| 127 | CM154 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 131 | 7-20 | | |
| 128 | CM155 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 132 | 7-20 | | |
| 129 | CM156 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 133 | 7-20 | | |
| 130 | CM157 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 134 | 7-20 | | |
| 131 | CM158 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 135 | 7-20 | | |
| 132 | CM159 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 136 | 7-20 | | |
| 133 | CM160 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 137 | 7-20 | | |
| 134 | CM161 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 138 | 7-20 | | |
| 135 | CM162 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 139 | 7-20 | | |
| 136 | CM163 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 140 | 7-20 | | |
| 137 | CM164 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 141 | 7-20 | | |
| 138 | CM165 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 142 | 7-20 | | |
| 139 | CM166 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 143 | 7-20 | | |
| 140 | CM167 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 144 | 7-20 | | |
| 141 | CM168 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 145 | 7-20 | | |
| 142 | CM169 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 146 | 7-20 | | |
| 143 | CM170 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 147 | 7-20 | | |
| 144 | CM171 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 148 | 7-20 | | |
| 145 | CM172 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 149 | 7-20 | | |
| 146 | CM173 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 150 | 7-20 | | |
| 147 | CM174 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 151 | 7-20 | | |
| 148 | CM175 | 2 | 6 | 0.2 | 細質石器 | 6 | 12 | 2.2 | 7內T. | | | | 152 | 7-20 | | |



第39図 不定形石器 II-III層

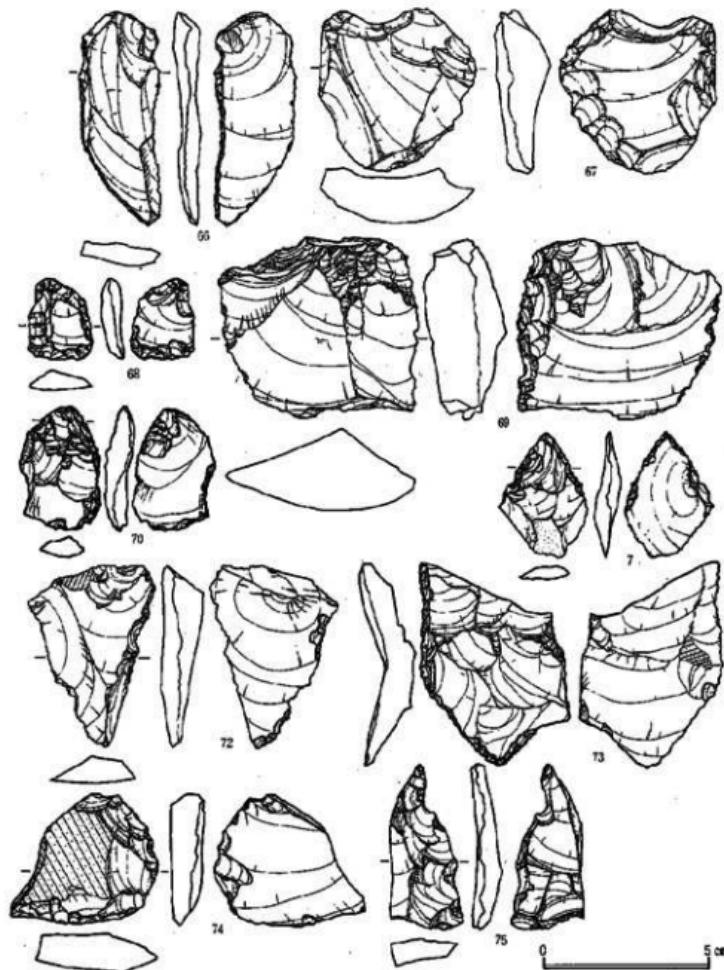
工により小鋸歯状の正面観をもつ刃部を作出するもの(109、116~120、122)、厚手の素材に二次加工B~Dを加えて交互剥離状の刃部を作出するもの(121、123~126)がある。スクレイバーエッジをもつものにはV層~Ⅲ層出土品にあるような整ったエンドスクレイバーではなく、主に側辺に整ったスクレイバーエッジを作出するもの(97~101、105)と粗雑なスクレイバーエッジを作出するもの(102~104、106)の二種類がみられる。スクレイバーエッジ以外に作出された機能部としては尖端部(98、99、101)、片面加工の不整な刃部(105)、不整な交互剥離状の刃部(104)、鋭い縁辺を利用した刃部(106)などがある。尖端部を作出するものには粗雑な二次加工C、Dによるもの(107)、連続する二次加工Dによるもの(108、110)、折断面に二次加工Dを加えて錐状の尖端部とするもの(111)がある。また110の側辺には、小鋸歯状の立面観をもつ刃部が作出されている。鋸歯状の正面観をもつ刃部を作出するものは、他に尖端部も作出されている(115—左図右上端)。小鋸歯状の立面観をもつ刃部を作出するものには、他の機能部として尖端部とスクレイバーエッジ(116—左図)、尖端部(117、120)をもつものがある。

【その他の層】 90点ある(74点図示。第50図~第58図)。素材の形態を大きく変えるもの



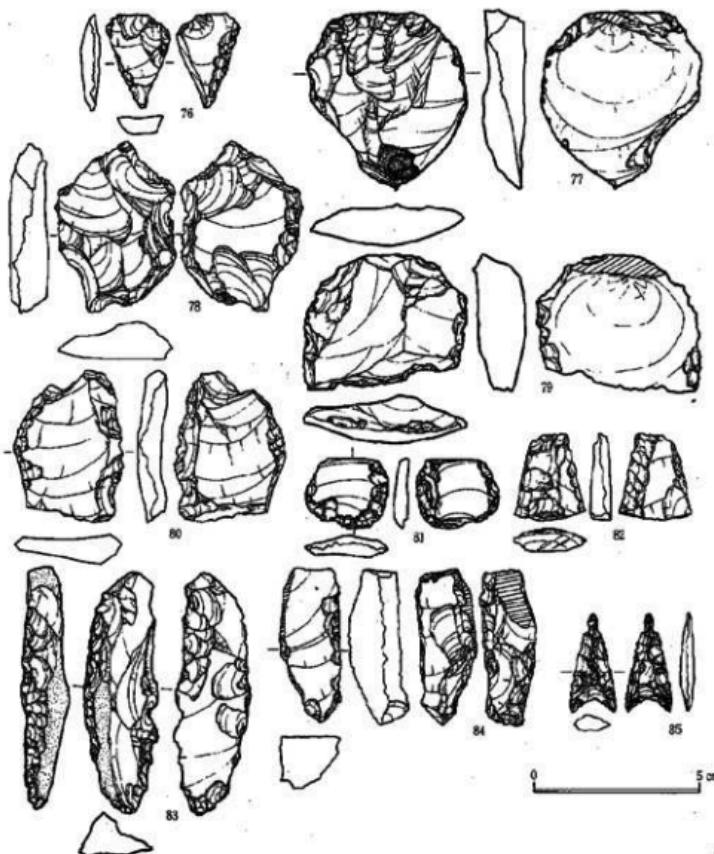
| 番号 | 形 | 厚 | 分類 | 石 | 長 | 幅 | 厚 | 重 | 備 | 名 | 分類 | 目次 |
|----|---|-----|------|----|----|----|------|---------------------|---|----|------|----|
| 58 | 4 | 1.4 | 他質尖状 | 64 | 42 | 16 | 61.0 | 刃部にうすくあらぎ (S.T.)。 | | 53 | T-24 | |
| 59 | 4 | 2.0 | 他質尖状 | 61 | 23 | 19 | 14.0 | | | 54 | T-25 | |
| 60 | 2 | 1.0 | 玉 | 58 | 54 | 20 | 52.1 | 切削下端にうすくあらぎ (S.T.)。 | | 77 | T-26 | |
| 61 | 3 | 1.0 | 他質尖状 | 48 | 30 | 17 | 16.0 | 刃辺に微細な凹溝あり (S.T.)。 | | 55 | T-27 | |
| 62 | 3 | 0.8 | 他質尖状 | 49 | 38 | 16 | 19.0 | | | 56 | T-28 | |
| 63 | 4 | 1.0 | 他質尖状 | 30 | 35 | 14 | 8.0 | 刃部に微細な凹溝あり (S.T.)。 | | 54 | T-29 | |
| 64 | 4 | 0.8 | 他質尖状 | 45 | 32 | 13 | 15.0 | | | 55 | T-30 | |
| 65 | 2 | 0.8 | 他質尖状 | 20 | 29 | 7 | 1.0 | F2頭あらぎ。 | | 56 | T-31 | |

第40図 不定形石器 II-1 層



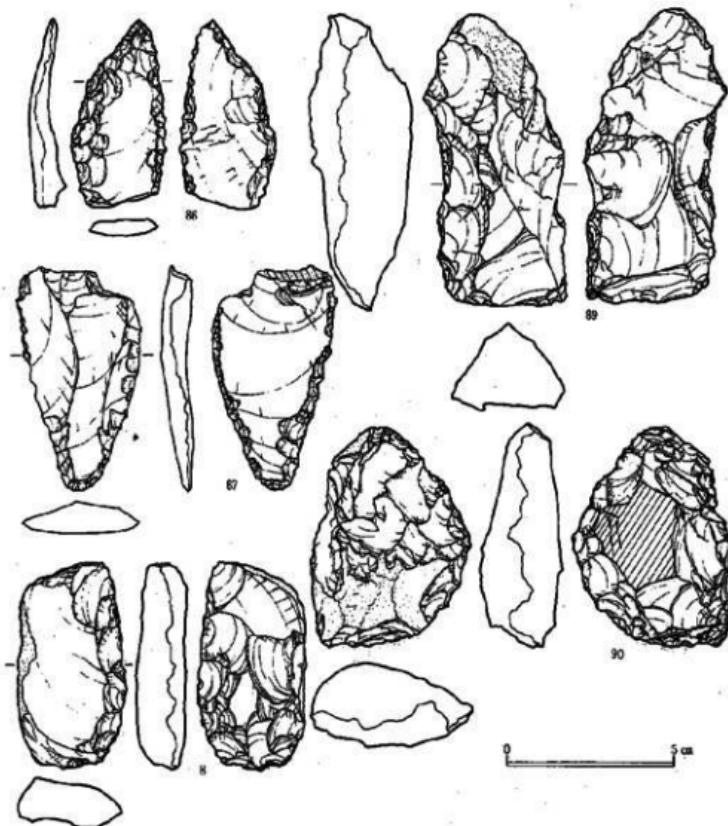
| 番号 | 式 | 基 | 立 | 形態 | 石 | 質 | 厚さ(m) | 幅(m) | 高さ(m) | 斜面 | 基 | 立 | 形態 |
|----|------|--------|----|-------|----|----|-------|------|-------|------|---------------------|---|----|
| 66 | CORE | 丁 | 層 | EAI2? | 地質 | 頁岩 | 4.5 | 24 | 9 | 5.0 | | | |
| 67 | CORE | 5~6層 | 層 | EAI2 | 地質 | 頁岩 | 4.5 | 48 | 36 | 30.0 | | | |
| 68 | CORE | 4 | 層 | EAI2 | 地質 | 頁岩 | 2.5 | 38 | 6 | 4.0 | | | |
| 69 | CORE | 2 | 層 | EAI2 | 地質 | 頁岩 | 3.2 | 60 | 25 | 30.0 | 打削-バーブを含む。 | | |
| 70 | CORE | 剥離 | 1層 | EAI2 | 地質 | 頁岩 | 3.5 | 34 | 9 | 5.5 | 打削にアホリ。 | | |
| 71 | CORE | 2 | 層 | EBC | 地質 | 頁岩 | 3.5 | 27 | 6 | 3.0 | | | |
| 72 | CORE | 3 | 層 | EBC | 地質 | 頁岩 | 3.5 | 38 | 13 | 25.0 | Fを用いた尖頭打削。 | | |
| 73 | CORE | 2 | 層 | EBC | 地質 | 頁岩 | 3.5 | 46 | 17 | 25.0 | Fを用いた尖頭打削。尖頭部2ヶ所あり。 | | |
| 74 | CORE | 2~2.5層 | 層 | EBC | 地質 | 頁岩 | 3.5 | 44 | 30 | 3.0 | 打削部やチッセ(5.0)。 | | |
| 75 | CORE | 剥離 | 2層 | EBC | 地質 | 頁岩 | 4.5 | 32 | 8 | 5.0 | | | |

第41図 不定形石器 01-11番



| 番号 | 三 層 位 | 分類 | 日 付 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 備 考 | 出 現 地 | 出 現 年 |
|----|-------------|-------|--------|--------|-------|--------|-------|----------------------|-------------|-------------|
| 76 | CN46 | 3 層 | SDS | 27 | 18 | 5.5 | 1.2 | | SD | 8-11 |
| 77 | CN46 | 2 地上部 | SP | 30 | 14 | 12 | 21.5 | 端部に剥離跡有り (3.7), | SD | 8-12 |
| 78 | CN46 | 4 层 | SP | 46 | 36 | 12 | 14.4 | 打削面(Pa.2). | SD | 8-13 |
| 79 | CN46 | 1 层 | SD | 29 | 16 | 10 | 21.6 | アヘニ, 3面に剥離跡有り (3.7), | SD | 8-14 |
| 80 | CN46 | 2 层 | SD | 42 | 23 | 7 | 22.0 | | SD | 8-15 |
| 81 | CN46 | 3 层 | SD | 29 | 15 | 5 | 1.9 | | SD | 8-16 |
| 82 | CN46 | 3 层 | SD | 26 | 12 | 6 | 1.0 | アヘニ. | SD | 8-17 |
| 83 | CN46 | 2 层 | SD | 36 | 22 | 10 | 13.7 | 表面剥離有り (3.7), | SD | 8-18 |
| 84 | CN46 | 2 层 | SD | 46 | 17 | 20 | 12.7 | | SD | 8-19 |
| 85 | CN46 | 2 层 | SDG | 36 | 14 | 4 | 4.5 | 剥離面 (3.7). | SD | 8-20 |

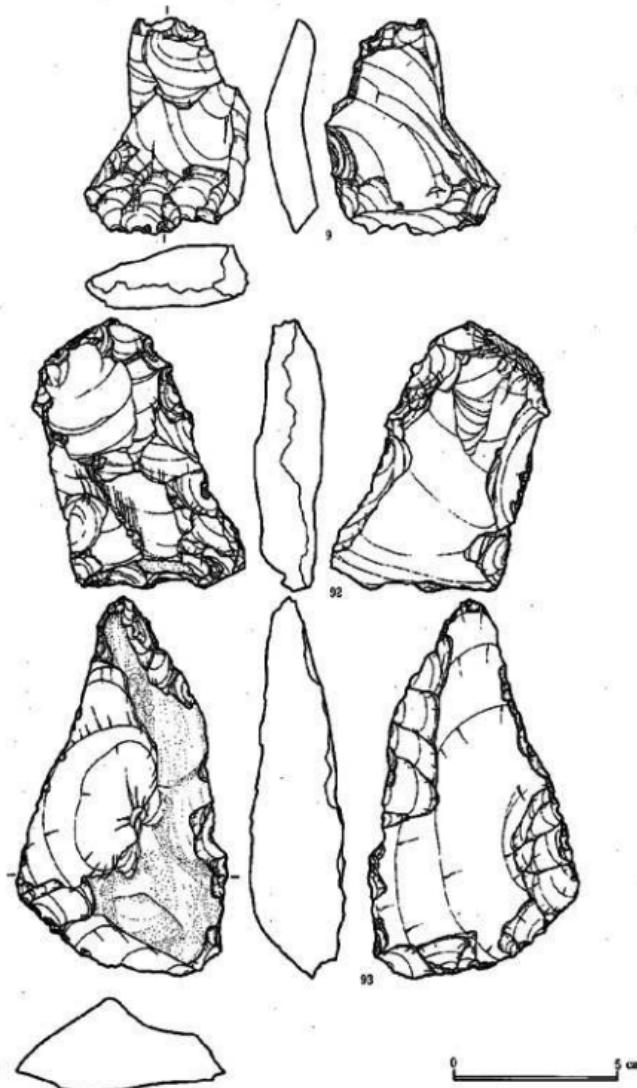
第42図 不定形石器 (3- II 層)



第43図 不定形石器 04-11層

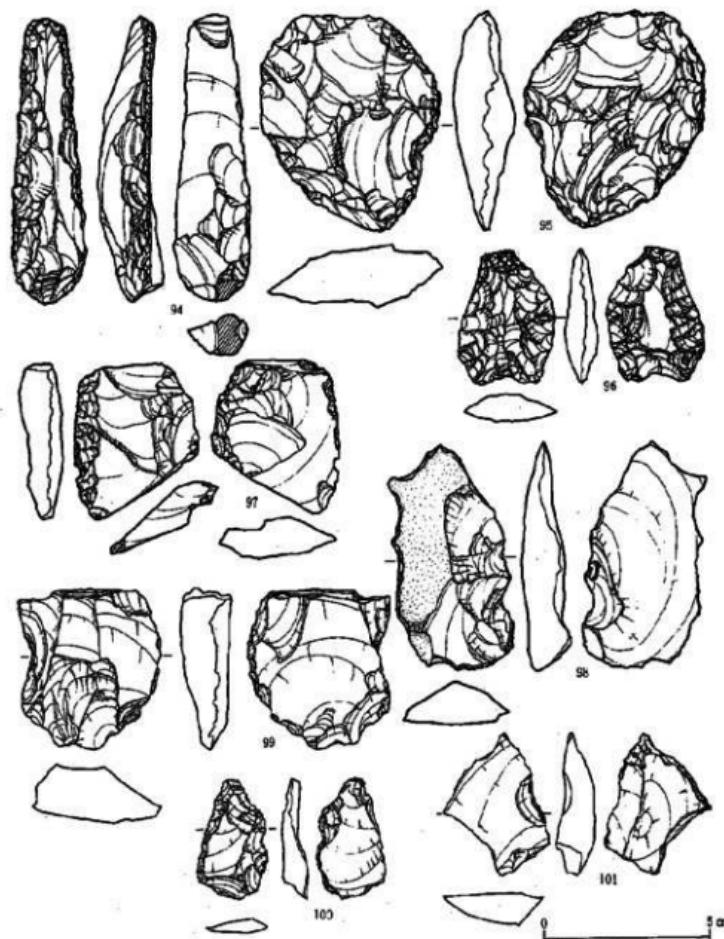
(128~136)と素材の形態をあまり変えない部分的な二次加工のもの(137~203)がある。前者には笠状石器に類似する形態をもち二側辺にステップの目立つ二次加工B~Dが連続するもの(128~130)、両面加工により円形状・台形状に整形され、二次加工A、Dによって鋸歯状の立面觀をもつ刃部を作出するもの(131~133)、二次加工A~Cの両面加工により円形状を呈するもの(134~136)がある。

| 番号 | 区 | 層位 | 分類 | 石種 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 備考 | 番号 | 重さ(g) | 備考 |
|----|------|----|----|------|--------|-------|--------|-------|---------------------|-----|-------|----|
| 86 | C10B | 1層 | 81 | 砂質頁岩 | 54 | 26 | 11 | 9.8 | Aを用いて尖端部を作成。 | 85 | 8~20 | |
| 87 | C10B | 1層 | 81 | 砂質頁岩 | 60 | 39 | 9 | 15.5 | 尖端部に凹凸あり(35%)。 | 86 | 8~21 | |
| 88 | C10B | 1層 | 81 | 砂質頁岩 | 49 | 33 | 15 | 14.2 | BがAより大きめ(35%)。底部削除。 | 323 | 8~22 | |
| 89 | C10B | 1層 | 81 | 砂質頁岩 | 61 | 42 | 10 | 18.5 | 刃部中央削除。 | 324 | 8~23 | |
| 90 | C10B | 1層 | 81 | 砂質頁岩 | 64 | 47 | 14 | 18.7 | 底部削除(35%)。 | 322 | 8~24 | |



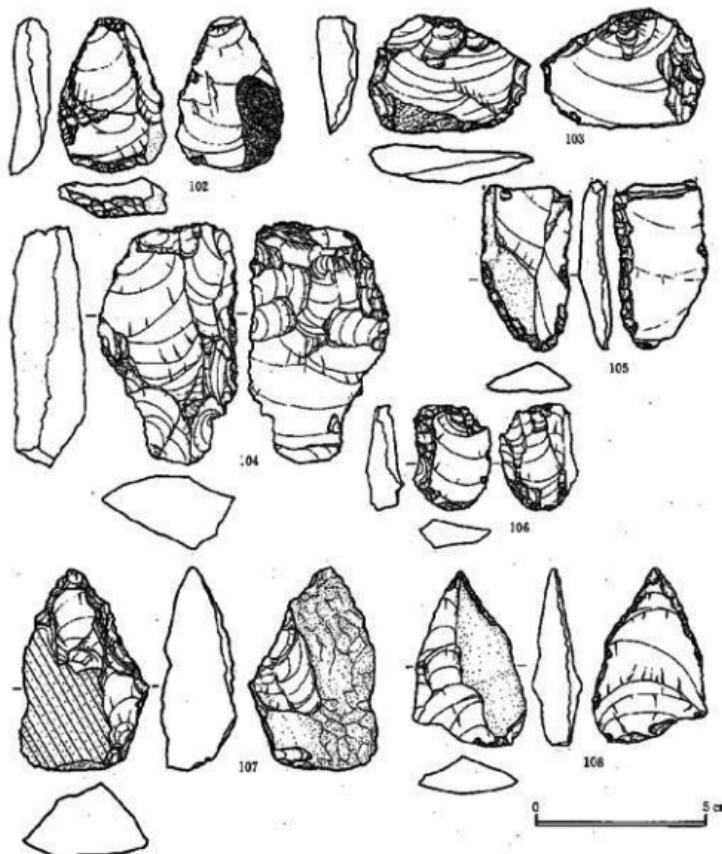
| 器号 | 层 | 形 | 分组 | 石 种 | 直(㎜) | 厚(㎜) | 宽(㎜) | 重(㎏) | 号 | 层 | 层 | 层 |
|----|------|------|----|------|------|------|------|-------|----|------|----|------|
| 92 | CH16 | 7 | 单刃 | 片状石器 | 62 | 53 | 18 | 40.0 | 92 | CH16 | 91 | 9-25 |
| 93 | CH22 | 1~2层 | 双刃 | 片状石器 | 76 | 63 | 21 | 90.7 | | | 72 | 9-24 |
| 94 | CH16 | 7 | 单刃 | 片状石器 | 109 | 61 | 18 | 138.6 | | | 92 | 9-27 |

第44图 不定形石器 (I- II 层)



| 番号 | 区 | 層 | 社 | 分類 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重さ(g) | 備考 | 番号 | 層 | 社 | 分類 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重さ(g) |
|-----|------|---|---|-----|------|----|----|-------|------|------------------|---|---|----|-----|------|----|-------|
| 94 | CNBB | 2 | Ⅲ | IA | 地質岩片 | 63 | 22 | 19 | 31.0 | | | | | 120 | 4-5 | | |
| 95 | CNBT | 1 | Ⅲ | IC1 | 伴生岩片 | 62 | 34 | 18 | 51.4 | 刃端にうぶれあり。 | | | | 121 | 4-10 | | |
| 96 | CNBH | 1 | Ⅲ | IC1 | 伴生岩片 | 36 | 25 | 18 | 6.0 | 刃端にヤマ居跡あり(5.T.)。 | | | | 122 | 4-1 | | |
| 97 | CNBE | 1 | Ⅲ | IA2 | 伴生岩片 | 41 | 37 | 13 | 19.3 | アホリ。 | | | | 123 | 4-2 | | |
| 98 | CLAH | 1 | Ⅲ | IA2 | 伴生岩片 | 64 | 38 | 15 | 39.8 | 刃端に山形断面形。 | | | | 124 | 4-3 | | |
| 99 | CNAH | 1 | Ⅲ | IA2 | 伴生岩片 | 48 | 44 | 15 | 36.0 | アホリ。 | | | | 125 | 4-4 | | |
| 100 | CNEH | 1 | Ⅲ | IA2 | 伴生岩片 | 25 | 21 | 8 | 4.0 | 刃端にヤマ居跡あり(5.T.)。 | | | | 126 | 4-5 | | |
| 101 | CNEB | 1 | Ⅲ | IA2 | 伴生岩片 | 43 | 20 | 11 | 9.0 | 刃端に山形断面形。 | | | | 127 | 4-6 | | |

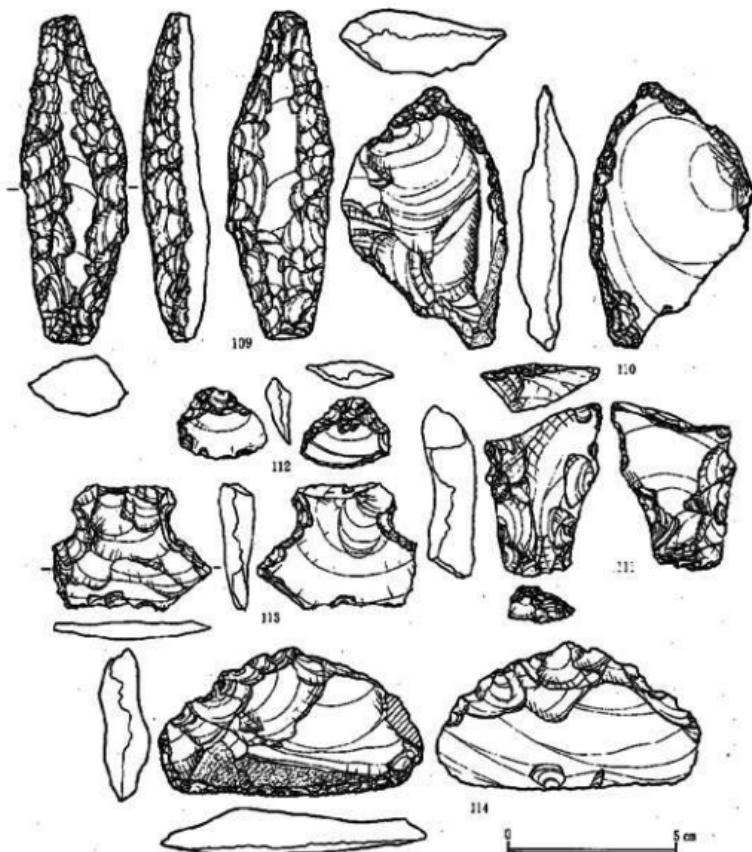
第45図 不定形石器 ⑩-I層



| 番号 | 形 | 基 | 地 | 片側 | 基 | 片 | 厚 | Ax (cm) | Bx (cm) | 厚さ (mm) | 重さ (kg) | 備考 | 番 | 形 | 基 | 地 | 片側 |
|-----|------|---|---|------|------|----|----|---------|---------|-----------------------------|---------|------|---|---|---|---|----|
| 102 | CMBP | 2 | 基 | IIA3 | 地質質地 | 46 | 32 | 12 | 25.5 | 地表に凹凸 (5.7), 側面に磨滅あり (5.7), | 365 | 9~7 | | | | | |
| 103 | CMBP | 4 | 基 | IIA3 | 地質質地 | 39 | 48 | 15 | 18.8 | 側面に凹凸。 | 394 | 9~7 | | | | | |
| 104 | CMBP | 1 | 基 | IIA3 | 地質質地 | 60 | 48 | 22 | 38.1 | 刃部にややつぶれあり (5.7). | 115 | 9~9 | | | | | |
| 105 | CMBP | 1 | 基 | IIA3 | 地質質地 | 68 | 27 | 9 | 9.9 | FCによる打削跡。 | 194 | 9~10 | | | | | |
| 106 | CMBP | 1 | 基 | IIA3 | 地質質地 | 39 | 32 | 11 | 2.5 | 側面に斜状剥離痕あり (5.7). | 114 | 9~11 | | | | | |
| 107 | CMBP | 1 | 基 | IIA3 | 地質質地 | 58 | 36 | 22 | 42.9 | | 115 | 9~12 | | | | | |
| 108 | CMBP | 2 | 基 | IIC | 地質質地 | 50 | 34 | 18 | 14.4 | | 116 | 9~12 | | | | | |

第46図 不定形石器 (II)-I層

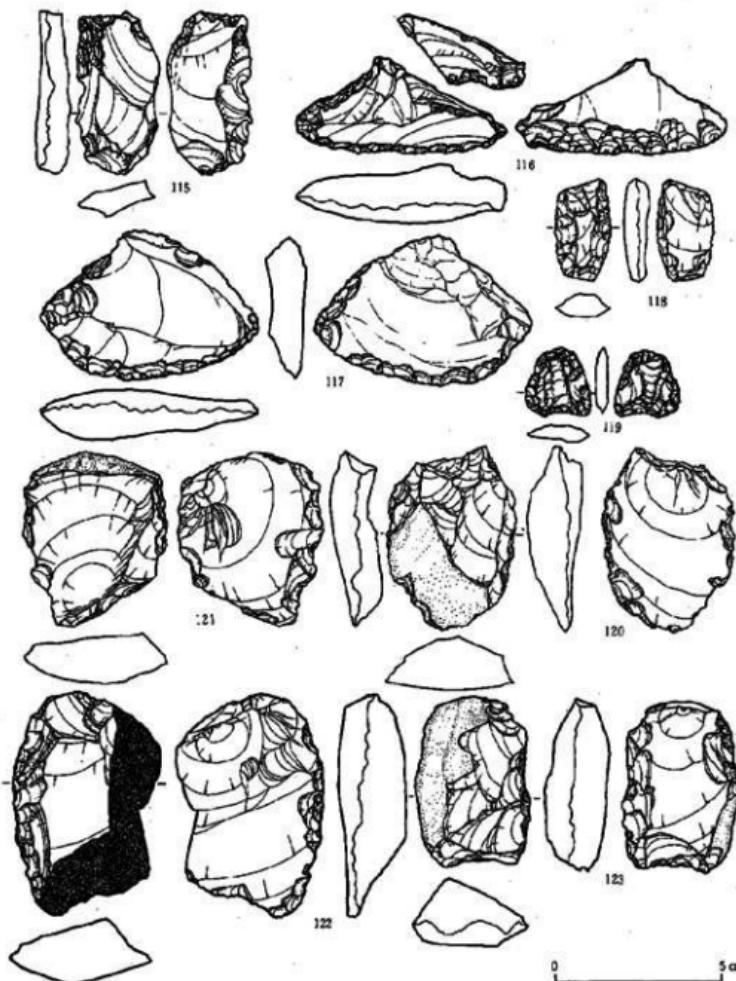
後者にはスクレイバーエッジをもつもの(139~150、155)、尖端部を作出するもの(151~154、156~160)、折断面に二次加工Bが加えられ、素材末端の鋸い縁辺を刃部として利用するもの(162)、素材の打面付近を除去し縁辺部を刃部として利用するもの(161、163~165)、ノッチ状



第47図 不定期石器 (160-203)

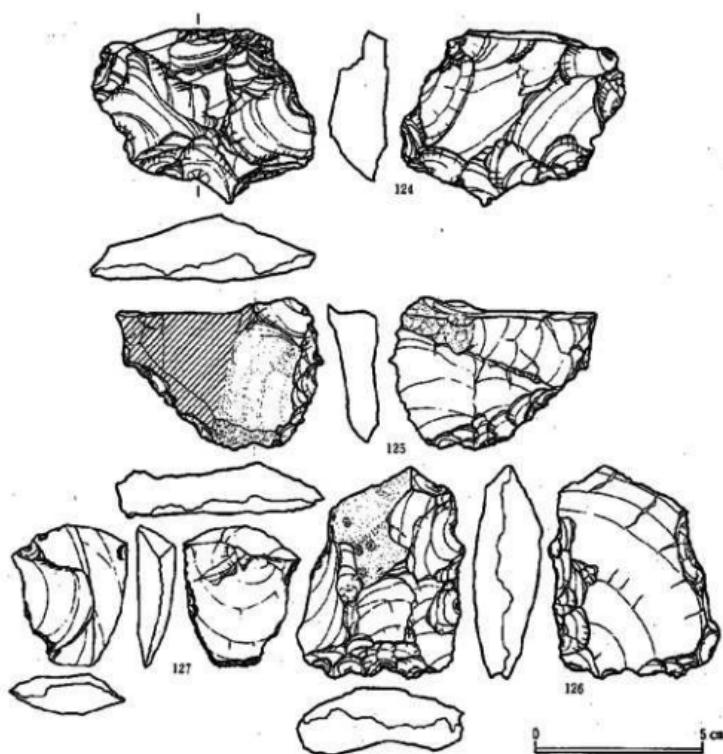
の二次加工をもつもの (166~169)、二次加工B~Dにより鋸歯状の正面観をもつ刀部を作出するもの (170~176)、二次加工B~Dにより小鋸歯状の立面観をもつ刀部を作出するもの (177~181、183~195)、主に二次加工Bにより交互剥離状の刃部を作出するもの (196~203)がある。

| 番号 | 形 | 質 | 分類 | 長さ(m) | 幅(m) | 厚さ(m) | 重さ(g) | 標 | 年 | 地 | 地 |
|-----|------|-----|------|-------|------|-------|-------|------|------------------------|-----|------|
| 169 | CL10 | 4 周 | II | 鉈頭荒面 | 54 | 30 | 18 | 49.3 | 上部はF。 | 162 | 9-14 |
| 170 | CD10 | 2 周 | II C | 培養荒面 | 48 | 74 | 18 | 44.0 | 表面凹凸。 | 172 | 9-16 |
| 171 | CO10 | 2 周 | II D | 培養荒面 | 49 | 35 | 18 | 33.5 | 上部はDで削り、下部はCで削り、表面は凹凸。 | 166 | 9-16 |
| 172 | CL10 | 3 周 | II F | 培養荒面 | 21 | 25 | 7 | 27.7 | 表面に複数の凹窓がある (S.T.)。 | 180 | 9-17 |
| 173 | CL10 | 1 周 | II G | 培養荒面 | 36 | 47 | 13 | 14.0 | 多孔の凹窓がある。 | 161 | 9-18 |
| 174 | CO10 | 2 周 | II F | 培養荒面 | 75 | 42 | 14 | 27.1 | | 268 | 9-13 |



| 番号 | 基 | 等 | 地 | 分類 | 山 | 村 | 山 | 村 | 山 | 村 | 山 | 村 | 山 | 村 | 山 | 村 |
|-----|------|---|---|-----|----|----|----|-----|------|----------------------------|---|---|---|-----|------|------|
| | | | | | 山 | 村 | 山 | 村 | 山 | 村 | 山 | 村 | 山 | 村 | 山 | 村 |
| 115 | CMB | 2 | 層 | III | 地質 | 47 | 26 | 11 | 39.5 | 山頂上端に石器跡あり。 | | | | | 319 | 3-20 |
| 116 | CMB6 | 1 | 層 | II | 地質 | 27 | 63 | 17 | 18.1 | 上段の中心に石器跡あり。刃部に擦痕 (S.T.)。 | | | | | 316 | 9-23 |
| 117 | CMB5 | 1 | 層 | II | 地質 | 43 | 60 | 12 | 33.6 | 刃部の擦痕 (S.T.)。右側を削除して石器を形成。 | | | | | 311 | 9-22 |
| 118 | CMB7 | 2 | 層 | II | 地質 | 36 | 17 | 7.6 | 5.0 | 上下端面に刃あり。 | | | | | 327 | 9-24 |
| 119 | CMB7 | 1 | 層 | II | 地質 | 18 | 20 | 4 | 2.6 | | | | | 316 | 9-23 | |
| 120 | CMB4 | 1 | 層 | II | 地質 | 24 | 20 | 17 | 17.4 | 刃部に擦痕 (S.T.)。 | | | | | 321 | 9-25 |
| 121 | CMB4 | 2 | 層 | II | 地質 | 30 | 44 | 12 | 32.4 | 刃部に擦痕。底部に擦痕 (S.T.)。 | | | | | 323 | 9-26 |
| 122 | CMB4 | 1 | 層 | II | 地質 | 44 | 45 | 21 | 34.6 | 刃部に擦痕 (S.T.)。 | | | | | 319 | 9-27 |
| 123 | CMB4 | 1 | 層 | II | 地質 | 49 | 26 | 6 | 37.6 | 刃部の一部に擦痕 (S.T.)。 | | | | | 331 | 9-28 |

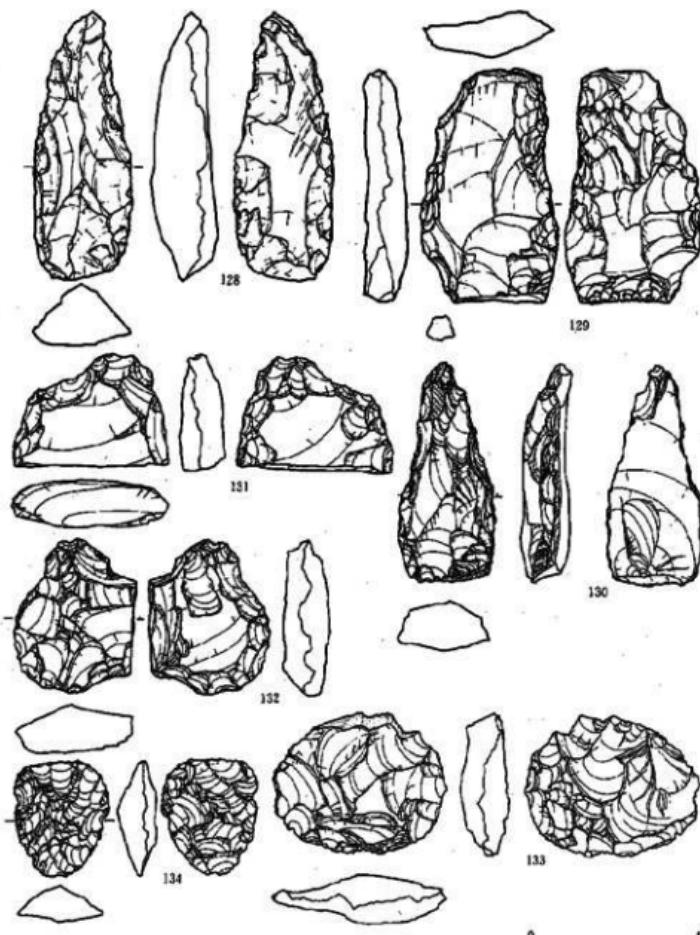
第48図 不定形石器 (I9-1層)



| 番号 | 区 | 層 | 台標 | 石 | 材 | 高さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 備考 | 番 | 号 | 層 | 区 |
|-----|------|---|-----|---|------|--------|-------|--------|-------|-----------------|-----|------|---|---|
| 124 | C008 | V | 8.1 | 燧 | 火打更利 | 48 | 66 | 15 | 50.0 | 上端127。 | 121 | 9-29 | | |
| 125 | C008 | V | 8.2 | 燧 | 火打更利 | 47 | 61 | 14 | 39.7 | 中間上部に火打更利。 | 122 | 9-18 | | |
| 126 | C008 | I | 8.7 | 燧 | 火打更利 | 69 | 53 | 70 | 48.5 | 火打更利。 | 123 | 9-33 | | |
| 127 | C008 | I | 8.7 | 燧 | 火打更利 | 46 | 36 | 12 | 15.1 | 火打更利の側面斜面に火打更利。 | 124 | 9-33 | | |

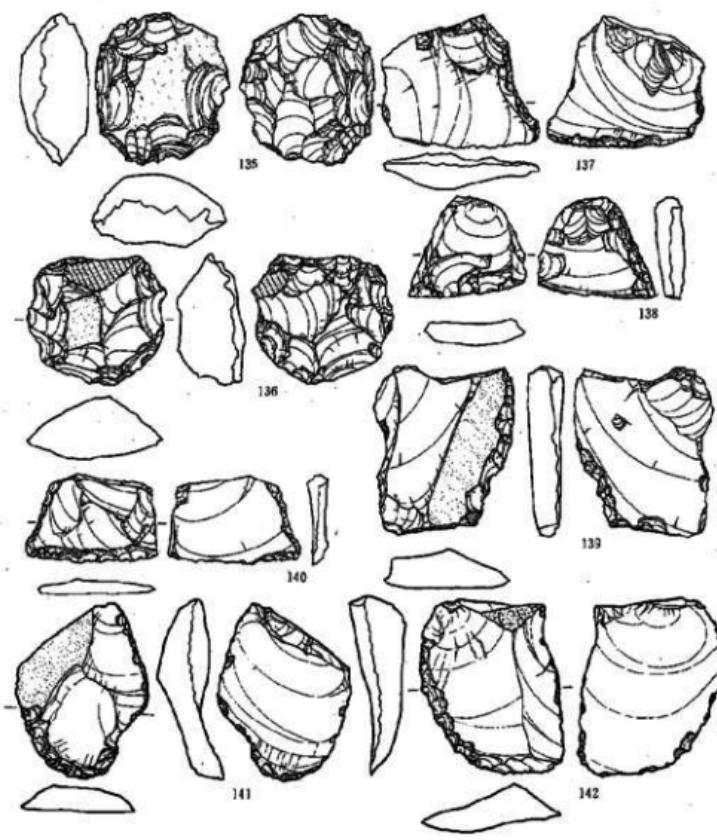
第49図 不定形石器 124-128

このうちV～I層出土品では検出できなかった特徴的な点としては、籠状石器に類似するものの中に尖頭部をもつものがあること(128、130)、スクレイバーエッジをもつもの中に大型なものがあること(147)、尖端部を作出するものの中に、連続する二次加工B～Dないし折断面を切る二次加工Dによる錐状の尖端部をもつものがあること(152、153、156～158、159)などがあげられる。また折断面に二次加工が加えられ、素材末端の鋭い縁辺を刃部とするもの(162)も所属時期のわかる資料中にはほとんどみられなかったものである。



| 品番 | 区 | 層 | 出處 | 面 | 片 | 厚さ mm | 幅 mm | 長さ mm | 重さ g | 名 | 層 | 出 | 出 处 |
|-----|------|---------|------|------|----|-------|------|-------|------|-----|------|------|-----|
| 128 | CN05 | 2 番 | IA | 地質調査 | 75 | 20 | 28 | 42.0 | | | 125 | 9-33 | |
| 129 | CL02 | 四段上 1 層 | IA | 地質調査 | 60 | 41 | 13 | 49.7 | | | 123 | 9-34 | |
| 130 | CAR4 | 3 番 | IA | 正 側 | 62 | 29 | 15 | 27.7 | | | 126 | 9-35 | |
| 131 | C004 | | IB | 地質調査 | 32 | 47 | 14 | 26.0 | | | 127 | 10-1 | |
| 132 | C00C | 1B | 地質調査 | 44 | 36 | 14 | 24.0 | | | 128 | 10-2 | | |
| 133 | C004 | 青 土 | IB2 | 地質調査 | 42 | 30 | 13 | 26.0 | | | 129 | 10-3 | |
| 134 | CL75 | | IC1 | 地 調 | 35 | 29 | 12 | 7.1 | | | 146 | 10-4 | |

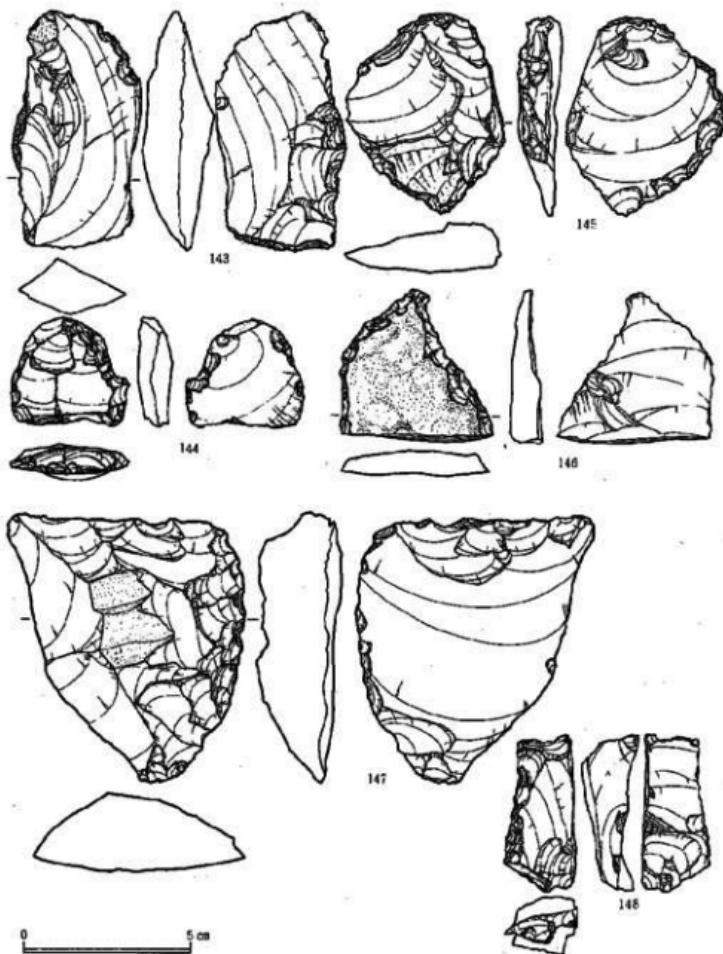
第50図 不定形石器 (20)-その他の層



5 cm

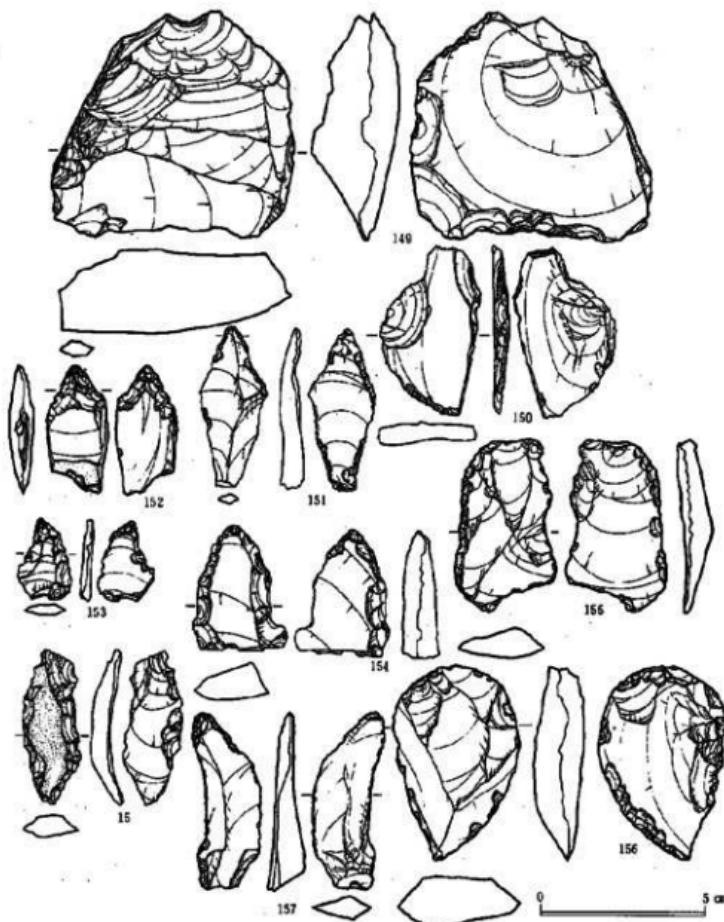
| 番号 | 区 | 層 | 地 | 分類 | 直 径 | 幅 mm | 厚 さ mm | 重 量 g | 性 格 | 番 号 | 層 | 地 | 分 類 |
|-----|------|----------|---|------|--------|---------|--------------|-------------|--------|--------|---|---|--------|
| 135 | CL75 | | | IC1 | | | | | | | | | |
| 136 | CQH | | | IC2 | | | | | | | | | |
| 137 | CMY9 | 4 | 層 | IIA2 | | | | | | | | | |
| 138 | COM9 | 1 | 層 | IIA2 | | | | | | | | | |
| 139 | COM8 | 皮ベルト | 層 | IIA2 | | | | | | | | | |
| 140 | CL14 | 皮ベルト 1 層 | 層 | IIA2 | | | | | | | | | |
| 141 | UHM | 皮ベルト 1 層 | 層 | IIA2 | | | | | | | | | |
| 142 | CMH8 | 皮ベルト | 層 | IIA2 | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | |

第51図 不定期石器(2)-その他の層



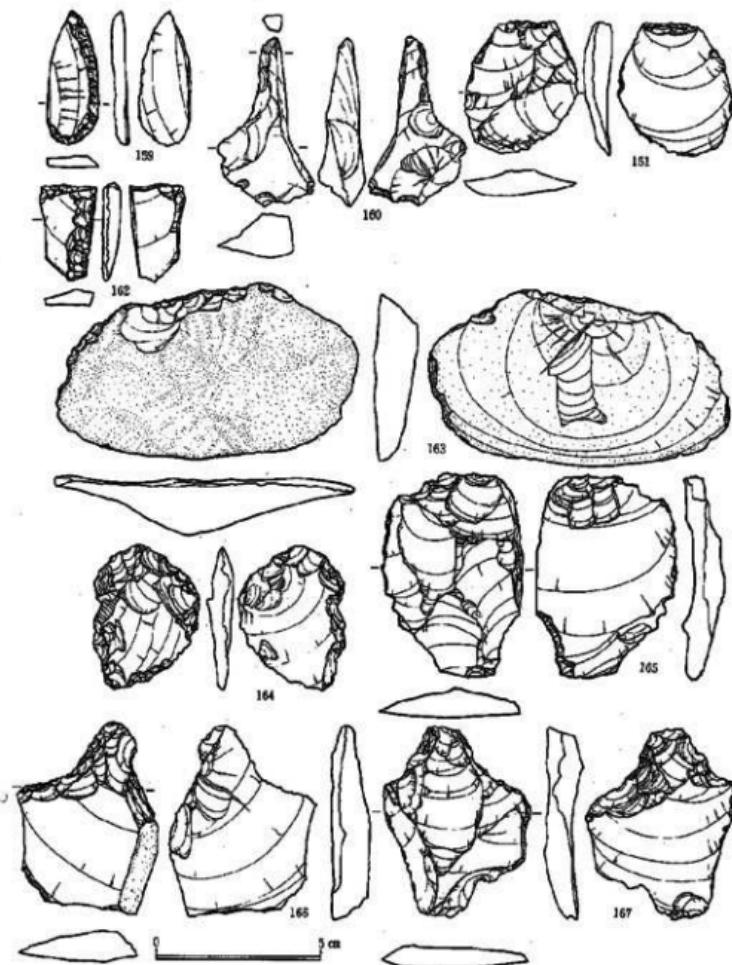
| 番号 | 種 | 層位 | 分類 | 刃 長 | 肩幅 | 厚さ | 重さ | 備考 | 番 号 | 種 | 層 位 |
|-----|---------|--------|-----|------|----|----|----|-------|-----------------------|-----|-------|
| 141 | CL-CM75 | 1 層 | HA2 | 追突尖器 | 68 | 27 | 22 | 45.5 | 東村の標・経石6万個+? | 141 | 18-22 |
| 142 | CM72 | | HA2 | 追突尖器 | 31 | 34 | 10 | 42.5 | | 142 | 18-22 |
| 143 | CN87 | 2~3層 | HA3 | 追突尖器 | 57 | 47 | 15 | 30.5 | 新潟市西区にP&G、左側面は円錐形の刃部。 | 143 | 18-22 |
| 144 | CN84 | - | HA3 | 追突尖器 | 44 | 46 | 10 | 19.5 | 頭下角部。 | 144 | 18-22 |
| 145 | DN88 | 青ペント1層 | HA3 | 追突尖器 | 77 | 71 | 10 | 130.0 | | 145 | 18-22 |
| 146 | CL75 | 2 層 | HA3 | 追突尖器 | 43 | 23 | 17 | 21.5 | 頭下部に尖端部作品。 | 146 | 18-22 |

第52図 不定形石器 03-その他の層



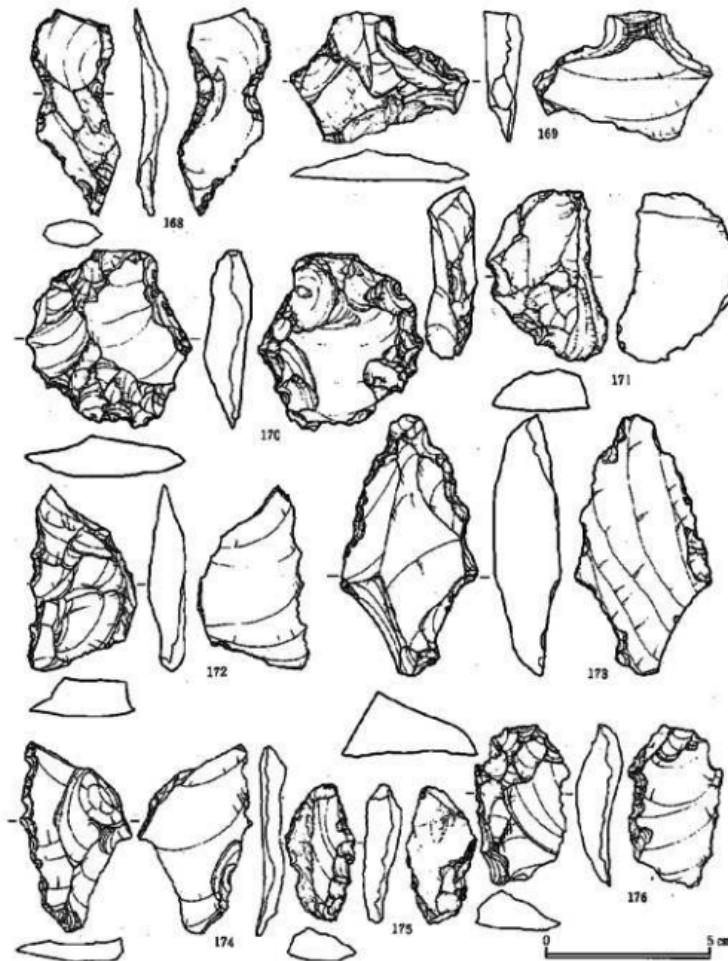
| 番号 | 区 | 層 | 分類 | 長 | 幅 | 厚 | 重 | 重 | 名 | 層 | 層 | 層 |
|-----|---------|---------|------|----|----|----|-------|--------------------------|-----|-------|---|---|
| 148 | CRBS | | 燧窓尖端 | 65 | 71 | 9 | 114.0 | 下限は、不規則な塊状の石核。 | 173 | 16-19 | | |
| 149 | CM72 | I層 | 燧窓尖端 | 49 | 21 | 9 | 5.8 | | 157 | | | |
| 150 | CPBS | 北ペルト I層 | 燧窓尖端 | 47 | 21 | 7 | 4.0 | | 261 | 16-21 | | |
| 151 | CM95 | | 燧窓尖端 | 26 | 19 | 7 | 3.9 | 初期石器である。先端部が剥離した (S.T.)。 | 222 | 16-21 | | |
| 152 | CPBS・BS | II層 | 燧窓尖端 | 32 | 16 | 3 | 6.0 | ビット付縫合尖端。 | 215 | 16-21 | | |
| 153 | CL48 | 西ペルト I層 | 燧窓尖端 | 26 | 23 | 11 | 5.0 | 下限はF. 大理岩尖端 (S.T.)。 | 165 | 16-24 | | |
| 154 | CM95 | | 燧窓尖端 | 30 | 21 | 9 | 10.0 | 下限はF. 大理岩尖端 (S.T.)。 | 166 | | | |
| 155 | CM95 | | 燧窓尖端 | 16 | 11 | 10 | 29.3 | | 220 | 16-25 | | |
| 156 | CM95 | 西ペルト I層 | 燧窓尖端 | 11 | 21 | 11 | 16.0 | | 219 | 16-24 | | |
| 157 | CJ21 | I層 | 燧窓尖端 | 45 | 18 | 9 | 4.0 | | 165 | 16-27 | | |

第53図 不定形石器 (20—その他の層)



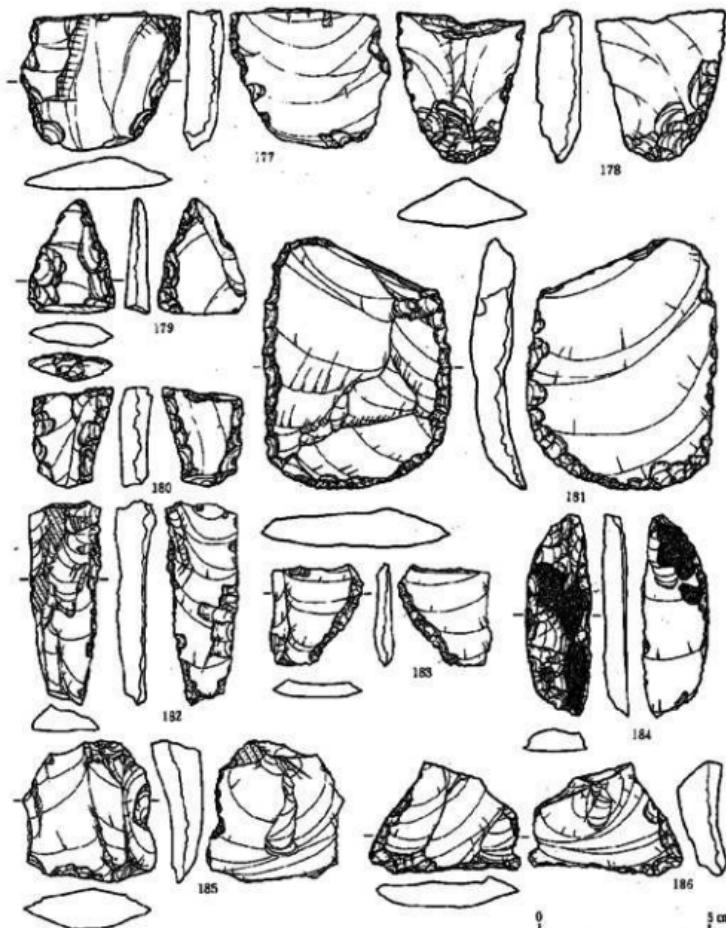
| 番号 | 区 | 種類 | 寸法 | 石 材 | 直立長 | 横幅 | 厚さ | 備考 | 番 号 | 形 式 | 直 立 | 横 幅 |
|-----|------|--------|----|--------|-----|------|----|----------------------|--------|--------|--------|--------|
| 159 | CNT6 | IFD | 30 | 30 | 4 | 2.5 | | 直立刃頭付。右側面にスケイバーニッジ付。 | 159 | 14-25 | | |
| 160 | CLU5 | 1号 | 40 | 30 | 14 | 3.7 | | 平行刃して直立頭付。左側面斜め削。 | 160 | 14-25 | | |
| 161 | CLU6 | 2-3号 | 30 | 24 | 6 | 2.5 | | 傾斜刃付直立頭。 | 161 | 14-25 | | |
| 162 | CDH6 | 近ヘムト2号 | 30 | 30 | 5 | 2.4 | | 傾斜刃付。 | 162 | 14-25 | | |
| 163 | CLU7 | 2号 | 50 | 50 | 13 | 32.5 | | 傾斜刃付直立頭。 | 163 | 14-25 | | |
| 164 | IFP | 直立 | 42 | 22 | 5 | 19.2 | | 傾斜刃付直立頭。 | 164 | 14-25 | | |
| 165 | IFP | 直立頭付 | 39 | 42 | 5 | 12.0 | | 直立刃・やや尖頭あり。 | 165 | 14-25 | | |
| 166 | IFC6 | IFC | 36 | 44 | 12 | 24.0 | | 直立刃頭付と下端にアカラ。 | 166 | 11-1 | | |
| 167 | CDH6 | 近ヘムト2号 | 55 | 40 | 5 | 29.5 | | 傾斜刃付直立頭。 | 167 | 11-1 | | |

第54図 不定形石器 OS-その他の型



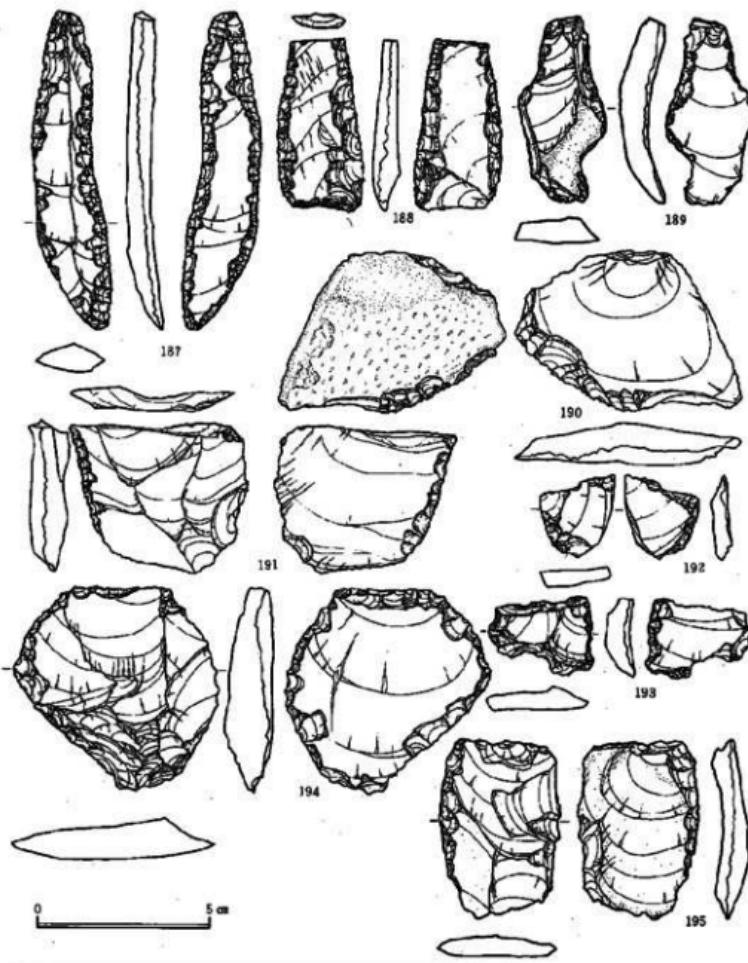
| 番号 | 名 | 基 | 材 | 特 | 形 | 質 | 厚 | 幅 | 長 | 重 | 備 | 年 | 地 | 年 |
|-----|------|--------|------|------|------|----|------|------|---------------------------|------------------|-----|------|-------|---|
| 168 | CN62 | 4 | 層 | IGa | 地質実物 | ◎ | 28 | 7 | 9.8 | 上部端-4F. 実物頭部。 | | 226 | 11-2 | |
| 169 | CPWF | 北ベルト3層 | IGG | 地質実物 | △ | 54 | 13 | 27.8 | 1 | | | 237 | 11-4 | |
| 170 | CN68 | IGG | 地質実物 | △ | 56 | 14 | 23.9 | 1 | | | 239 | 11-8 | | |
| 171 | | | 地質実物 | △ | 56 | 14 | 23.9 | 1 | | | 240 | 11-8 | | |
| 172 | | | 地質実物 | △ | 56 | 14 | 23.9 | 1 | | | 241 | 11-8 | | |
| 173 | | | 地質実物 | △ | 56 | 14 | 23.9 | 1 | | | 242 | 11-8 | | |
| 174 | | | 地質実物 | △ | 56 | 14 | 23.9 | 1 | | | 243 | 11-8 | | |
| 175 | | | 地質実物 | △ | 56 | 14 | 23.9 | 1 | | | 244 | 11-8 | | |
| 176 | | | 地質実物 | △ | 56 | 14 | 23.9 | 1 | | | 245 | 11-8 | | |
| 177 | CN65 | 北ベルト3層 | IGH | 地質実物 | △ | 57 | 12 | 26 | 27.4 | | | 246 | 11-8 | |
| 178 | CN66 | IGH | 地質実物 | △ | 58 | 14 | 28 | 26.6 | 上部端-3F. 実物に一部欠損あり (S.T.)。 | | 247 | 11-8 | | |
| 179 | CN72 | 2 | 層 | IGH | 地質実物 | △ | 23 | 12 | 7.3 | 右側刃-2Fの標本。IGH頭部。 | | 248 | 11-18 | |
| 180 | CP98 | 北ベルト3層 | IGH | 地質実物 | △ | 47 | 19 | 12 | 25.9 | | | 249 | 11-11 | |

第55図 不定期石器(4)-その他の層



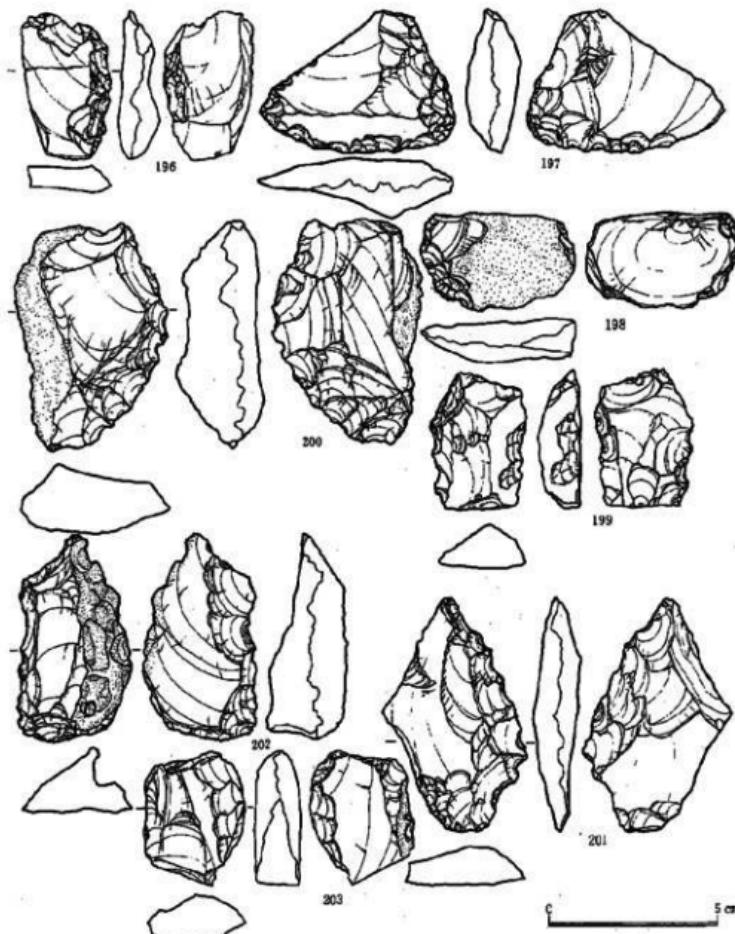
| 番号 | 形 | 層 | 地 | 分類 | 直 径 | 幅 度 | 厚 さ | 重 量 | 記 号 | 形 式 | 地 質 | 層 次 |
|-----|------|--------|------|------|--------|--------|--------|-----------------|-------------------------------|--------|--------|--------|
| 177 | CPI7 | 北ベント3層 | III | 地質頁岩 | 49 | 48 | 12 | 23.5 | お鉢形側面のスカラップ状マッピングに複数あり(3.T.)。 | 330 | 11-18 | |
| 178 | CPI8 | III | 地質頁岩 | 43 | 37 | 12 | 18.6 | 平面丸。 | 280 | 11-18 | | |
| 179 | CPI9 | 北ベント3層 | III | 地質頁岩 | 33 | 25 | 7 | 8.1 | 底下部にあります。刃部中央や縁部(5.T.)。 | 211 | 11-18 | |
| 180 | CPI7 | 4 層 | III | 地質頁岩 | 38 | 34 | 10 | 8.8 | 頭山形(4.T.)。 | 231 | 11-18 | |
| 181 | CPI9 | III | 地質頁岩 | 72 | 55 | 12 | 32.6 | 鋸上端には。 | 190 | 11-18 | | |
| 182 | CPI8 | III | 地質頁岩 | 38 | 31 | 12 | 12.0 | 片削形工具の母種を刀部を持つ。 | 347 | 11-17 | | |
| 183 | CPI8 | 北ベント3層 | III | 地質頁岩 | 29 | 27 | 6 | 4.9 | 頭上部にあります。 | 348 | 11-18 | |
| 184 | CPI9 | 3 層 | III | 地質頁岩 | 58 | 19 | 7 | 16.2 | お鉢形側面、側面追付(3.T.)。奥側はじり(5.T.)。 | 194 | 11-18 | |
| 185 | CPI6 | III | 地質頁岩 | 46 | 29 | 15 | 18.2 | 断面側面に複数を有する。 | 349 | 11-18 | | |
| 186 | CPI6 | 4 层 | III | 地質頁岩 | 23 | 43 | 12 | 11.3 | 側面斜付(4層)に複数あり(5.T.)。 | 190 | 11-18 | |

第56図 不定形石器(27)-その他の層



| 番号 | 式 | 厚 | 幅 | 形 | 高さ (mm) | 幅 (mm) | 厚さ (mm) | 重さ (g) | 備考 | 番号 | 式 | 厚 | 幅 | 備考 |
|-----|-----------|----|----|-------|---------|--------|---------|--------|---------------------------|-----|-------|---|---|----|
| 187 | CMS4 | 22 | 22 | 細葉 短角 | 33 | 20 | 7 | 14.0 | 尖端部が近尖形あり(ET)。 | 179 | 11-22 | | | |
| 188 | CL13 | 1 | 21 | 細葉 短角 | 49 | 20 | 6 | 12.3 | 頭上部に凹みあり、下端の刃部にツバれあり(ET)。 | 181 | 11-22 | | | |
| 189 | CMS5 | 21 | 21 | 細葉 短角 | 64 | 20 | 9 | 13.0 | 底面下部に内凹部による近尖形あり。 | 160 | 11-22 | | | |
| 190 | CL26 | 2 | 21 | 細葉 短角 | 46 | 25 | 11 | 35.5 | 断面形状に凹みあり。 | 147 | 11-24 | | | |
| 191 | CL25 | 2 | 21 | 細葉 短角 | 43 | 22 | 12 | 20.8 | 頭上部に凹みあり。 | 180 | 11-22 | | | |
| 192 | | | | | | | | | | | | | | |
| 193 | CMS4 | 1 | 21 | 細葉 短角 | 24 | 21 | 6 | 1.0 | 断面形状に凹みあり。それを利用した尖端部の出丸り。 | 166 | 11-22 | | | |
| 194 | CL44-2 2層 | 21 | 21 | 細葉 短角 | 33 | 21 | 7 | 4.0 | 断面丸みあり(ET)。 | 173 | 11-22 | | | |
| 195 | CMS4 | 1 | 21 | 細葉 短角 | 39 | 20 | 14 | 43.0 | 底面周辺部の刃部が近縦角形。 | 183 | 11-22 | | | |
| 196 | 20 | 5 | 21 | 西高麗山形 | 31 | 26 | 8 | 15.0 | 刃部は弧状(ハーフ)の粗糲なもの。 | 154 | 11-26 | | | |

第57図 不定形石器 (28-その他の層)



| 編号 | 種 | 層 | 地 | 大きさ | 切 | 材 | 長さmm | 幅mm | 厚さmm | 重さg | 備 | 号 | 層 | 地 |
|-----|------|---------|------|------|----|----|------|------|------|----------------------|-------------------|-------|-------|---|
| 196 | CD95 | 北ヘルト 6層 | IIJ | 地質実物 | 45 | 22 | 15 | 11.7 | | | 北ヘルト6層IIJ。 | 196 | II-20 | |
| 197 | CD94 | 3層上部 | IIJ | 地質実物 | 45 | 18 | 16 | 25.0 | | | | 197 | II-20 | |
| 198 | CP91 | IIJ | 地質実物 | 28 | 42 | 12 | 13.3 | | | 円錐底成 (G.T.)。右側左側はノフ。 | 198 | II-20 | | |
| 199 | CK91 | 3層上部 | IIJ | 地質実物 | 39 | 37 | 13 | 11.5 | | | ノフ下端はV。 | 199 | II-20 | |
| 200 | UJ94 | IIJ | 地質実物 | 68 | 45 | 20 | 65.0 | | | | | 199 | II-20 | |
| 201 | CN94 | IIJ | 地質実物 | 65 | 44 | 14 | 25.4 | | | アモルファスした表面加工作所。 | 201 | II-20 | | |
| 202 | CP91 | 北ヘルト 3層 | IIJ | 地質実物 | 29 | 34 | 30 | 49.0 | | | 右側にVが付立つ。 | 202 | II-20 | |
| 203 | CN97 | 3 層 | IIJ | 一塊 | 26 | 30 | 14 | 17.0 | | | 万葉の「かねが御事 (S.T.)。 | 203 | II-20 | |

第58図 不定形 (29-その他の層)

8. 石核(第59図～第70図)

【V層】 3点出土している(第59図)。作業面が表裏に設定され、剥片剥離が求心的に行われるもの(1、2)と作業面が三面あり、打面は任意に設定されているもの(3)がある。このうち1は剥片素材だが、他は粗割り片または原石を素材としている。

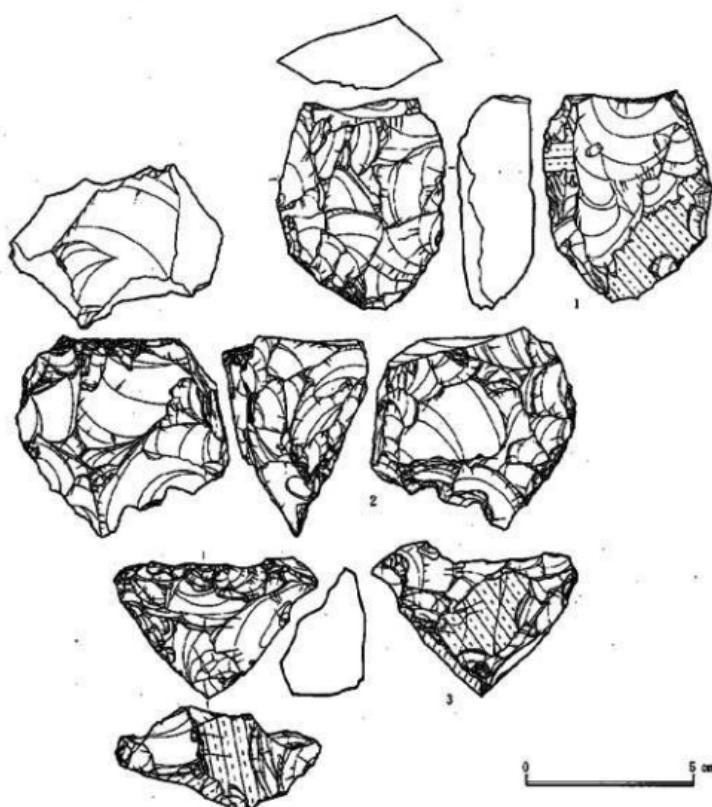
【IV層】 IV層出土と認定できた資料はない。

【III層】 4点出土している(第60図)。チョッピングトゥール状の形態をもち作業面が表裏に設定され、剥片剥離が求心的におこなわれるもの(4～6)と、三面の作業面に対して打面が任意に設定される多面体のもの(7)がある。前者には、上端の剥離面が打面としてやや固定的に用いられた傾向が認められるものがある(6)。6が剥片素材である他は粗割り片または原石を素材としている。

【II層】 6点出土している(第61図、第62図)。作業面が二面以上あって、それらに対し任意に打面が設定されるもの(8、9、12、13)と作業面が表裏に設定され求心的に剥片剥離が行われるもの(10、11)がある。前者は多面体、立方体、チョッピングトゥール状、後者はチョッピングトゥール状を呈する。剥片素材のもの(8、11～13)と原石素材(9)、粗割り片素材(10)のものがある。

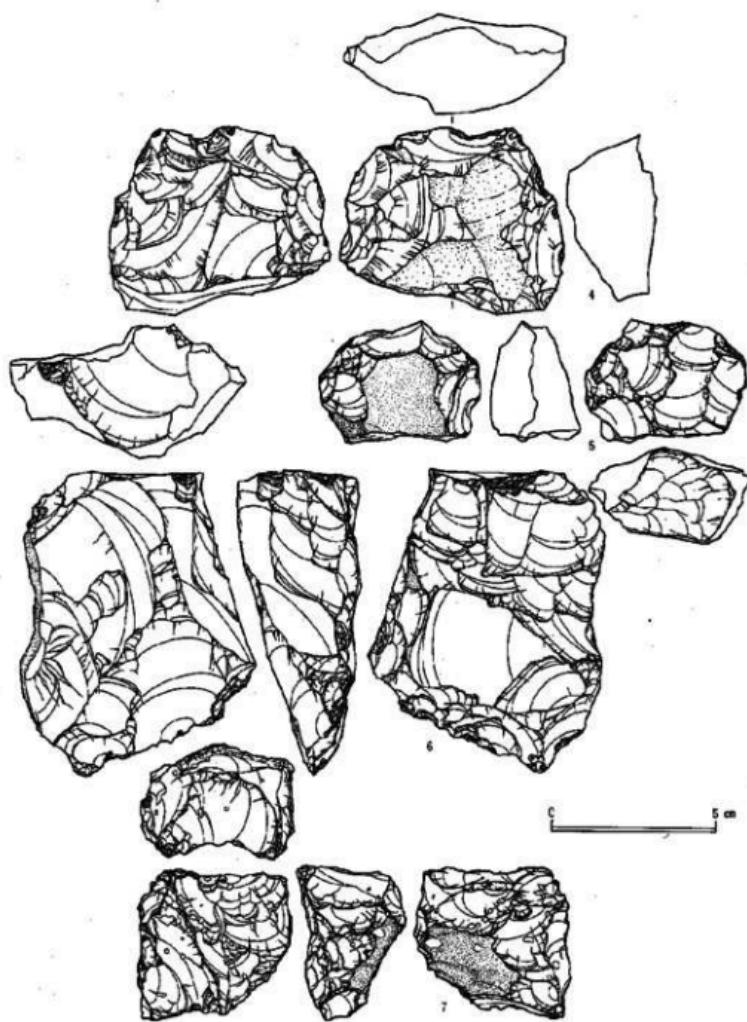
【I層】 9点出土している(6点図示、第63図、第64図)。作業面が表裏に設定され剥片剥離が求心的に行われるもの(15、16)と作業面が二面以上設定され、それらに対し任意に打面を設定して剥片剥離を行うもの(14、17～19)があり、前者はチョッピングトゥール状、後者は立方体、多面体を呈する。後者のうち多面体のものには船底形を呈するものがあり(18)、上端の平坦な節理面を固定的な打面とする三面の作業面がある。14、16が剥片素材である他は、原石また粗割り片を素材としている。

【その他の層】 19点ある(第65図～第69図)。作業面が一面で、打面は任意に設定されるもの(20)、作業面が表裏にあって求心的に剥片剥離が行われるもの(21～28)、作業面が二面以上あってそれらに対する打面が任意に設定されるもの(29～38)がある。このうち26～28は、上端の平坦な剥離面が固定的な打面として使用される傾向をもつ。また21は左図側面に二次加工があるため、不定形石器の可能性もある。20、22、23、38が剥片素材で、他は粗割り片か原石を素材としている。



| 番号 | 石種 | 厚さ | 片幅 | 面積 | 形 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重さ | 備考 |
|----|------|-----------|----|-----------|----|----|----|----|-------|-------|
| 1 | CL12 | 2 毫 | 11 | 16.2 平方ミリ | 圓形 | 30 | 33 | 22 | 47.0 | 13- 1 |
| 2 | CL14 | 2 毫 | 11 | 16.2 平方ミリ | 圓形 | 27 | 63 | 43 | 125.0 | 13- 2 |
| 3 | CPS3 | 20-30+1 毫 | 26 | 16.2 平方ミリ | 圓形 | 30 | 61 | 32 | 41.0 | 13- 3 |

第59図 石核 (1)- Y層

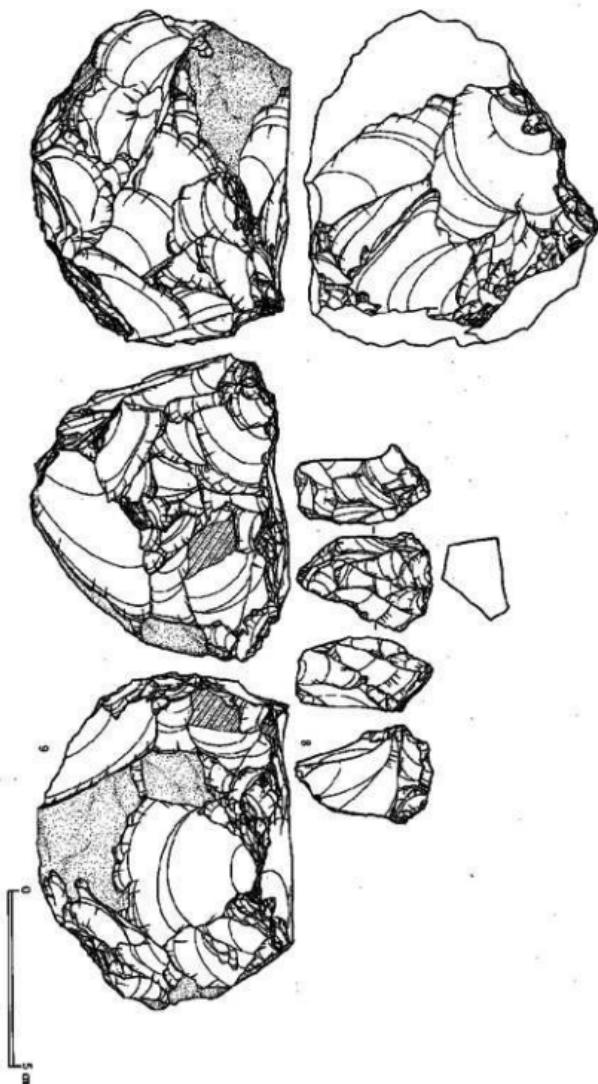


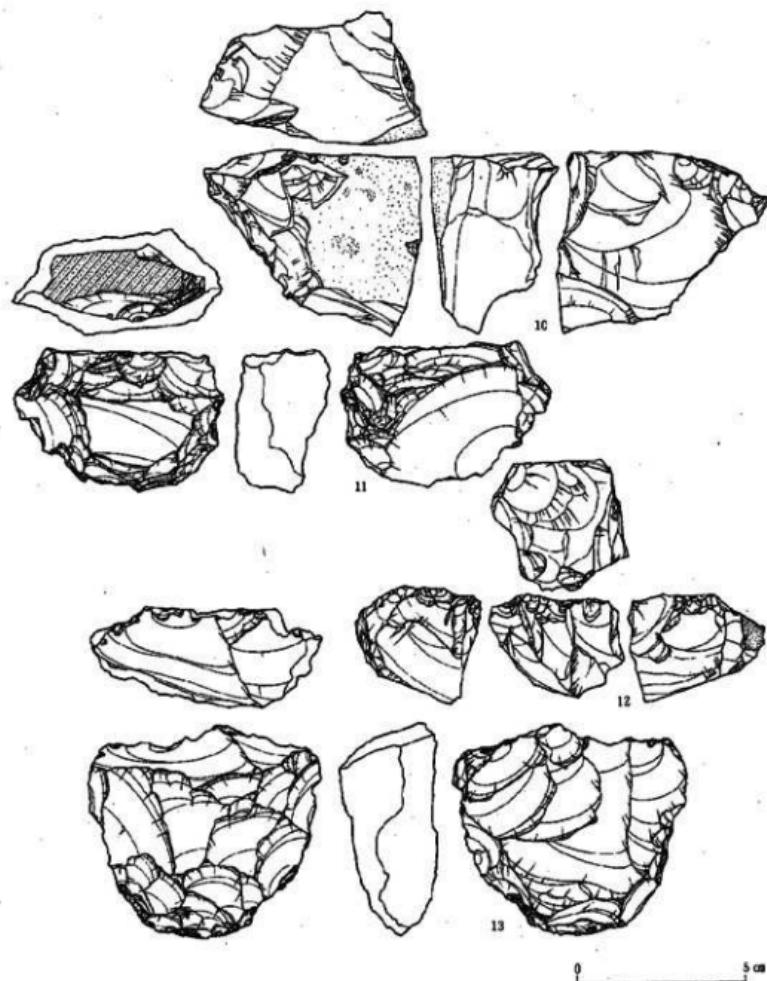
第60図 石核 (2) - III層

| 番号 | 区 | 層 | 分類 | 名 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重さ | 記号 | 番号 | 層 | 分類 |
|----|------|---|----|------|----|----|----|------|------|----|---|----|
| 4 | C1KC | 1 | 層 | 石質瓦砾 | 35 | 87 | 29 | 26.2 | 13-3 | | | |
| 5 | C1KC | 1 | 層 | 石質瓦砾 | 34 | 45 | 37 | 16.6 | 13-4 | | | |
| 6 | C1KC | 1 | 層 | 石質瓦砾 | 49 | 71 | 37 | 19.2 | 13-4 | | | |
| 7 | C1KC | 1 | 層 | 角 | 44 | 47 | 33 | 62.0 | 13-7 | | | |

第61図 石模(3)-II層

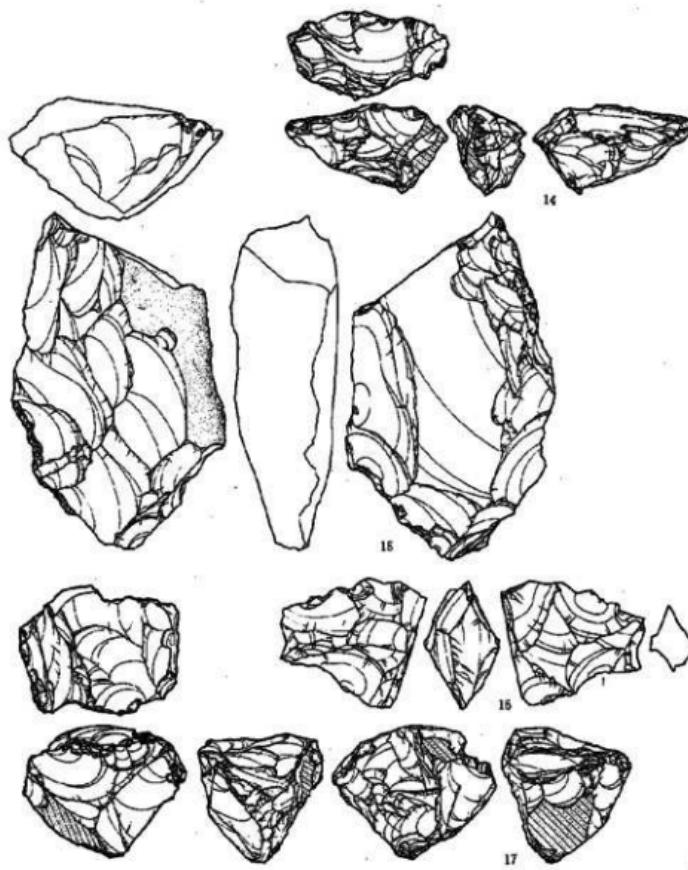
| 年 度 | 期 数 | 期 初 余 額 | 期 間 變 動 | | 期 末 余 額 |
|--------|--------|------------------|------------------|--------|------------------|
| | | | 增 加 | 減 少 | |
| 2012 | 1 | 1,000 | 100 | 100 | 1,000 |
| 2012 | 2 | 1,000 | 100 | 100 | 1,000 |
| 2012 | 3 | 1,000 | 100 | 100 | 1,000 |
| 2012 | 4 | 1,000 | 100 | 100 | 1,000 |
| 2012 | 5 | 1,000 | 100 | 100 | 1,000 |
| 2012 | 6 | 1,000 | 100 | 100 | 1,000 |
| 2012 | 7 | 1,000 | 100 | 100 | 1,000 |
| 2012 | 8 | 1,000 | 100 | 100 | 1,000 |
| 2012 | 9 | 1,000 | 100 | 100 | 1,000 |
| 2012 | 10 | 1,000 | 100 | 100 | 1,000 |
| 2012 | 11 | 1,000 | 100 | 100 | 1,000 |
| 2012 | 12 | 1,000 | 100 | 100 | 1,000 |
| 2013 | 1 | 1,000 | 100 | 100 | 1,000 |
| 2013 | 2 | 1,000 | 100 | 100 | 1,000 |
| 2013 | 3 | 1,000 | 100 | 100 | 1,000 |
| 2013 | 4 | 1,000 | 100 | 100 | 1,000 |
| 2013 | 5 | 1,000 | 100 | 100 | 1,000 |
| 2013 | 6 | 1,000 | 100 | 100 | 1,000 |
| 2013 | 7 | 1,000 | 100 | 100 | 1,000 |
| 2013 | 8 | 1,000 | 100 | 100 | 1,000 |
| 2013 | 9 | 1,000 | 100 | 100 | 1,000 |
| 2013 | 10 | 1,000 | 100 | 100 | 1,000 |
| 2013 | 11 | 1,000 | 100 | 100 | 1,000 |
| 2013 | 12 | 1,000 | 100 | 100 | 1,000 |





第62図 石核(4)-II層

| 番号 | 成 | 層 | 分類 | 石 | 厚 | 幅 | 高 | 重 | 層 | 成 | 層 | 分類 |
|----|------|-----------|----|-----|----|----|----|-------|---|---|---|-------|
| II | CP76 | 底-16-2-3層 | II | 磨質黑 | 36 | 46 | 25 | 113.8 | | | | 12-11 |
| II | CL10 | 底-16-2-1層 | II | 灰紅 | 41 | 52 | 29 | 71.6 | | | | 12-10 |
| II | CP75 | 3 層 | II | 磨質黑 | 33 | 38 | 40 | 26.6 | | | | 12-12 |
| II | CD99 | 4 层 | II | 磨質黑 | 61 | 70 | 39 | 119.1 | | | | 12-8 |



0 5 cm

| 番号 | 区 | 層 | 分類 | 石種 | 長さmm | 幅mm | 厚さmm | 圖 | 形 | 質 |
|----|------|---------|----|-----|------|-----|------|------|--------|---|
| 14 | CLM | 1 層 | 粗 | 片麻岩 | 25 | 48 | 33 | 14-1 | | |
| 15 | CIM | 5 層 | 粗 | 片麻岩 | 36 | 62 | 22 | 14-2 | | |
| 16 | CIM | 近ベルト 2層 | 粗 | 片麻岩 | 37 | 45 | 23 | 14-3 | 中國に下り。 | |
| 17 | ULST | 2 層 | 細 | 花崗岩 | 27 | 48 | 37 | 14-4 | | |

第63図 石核 (5)-I層

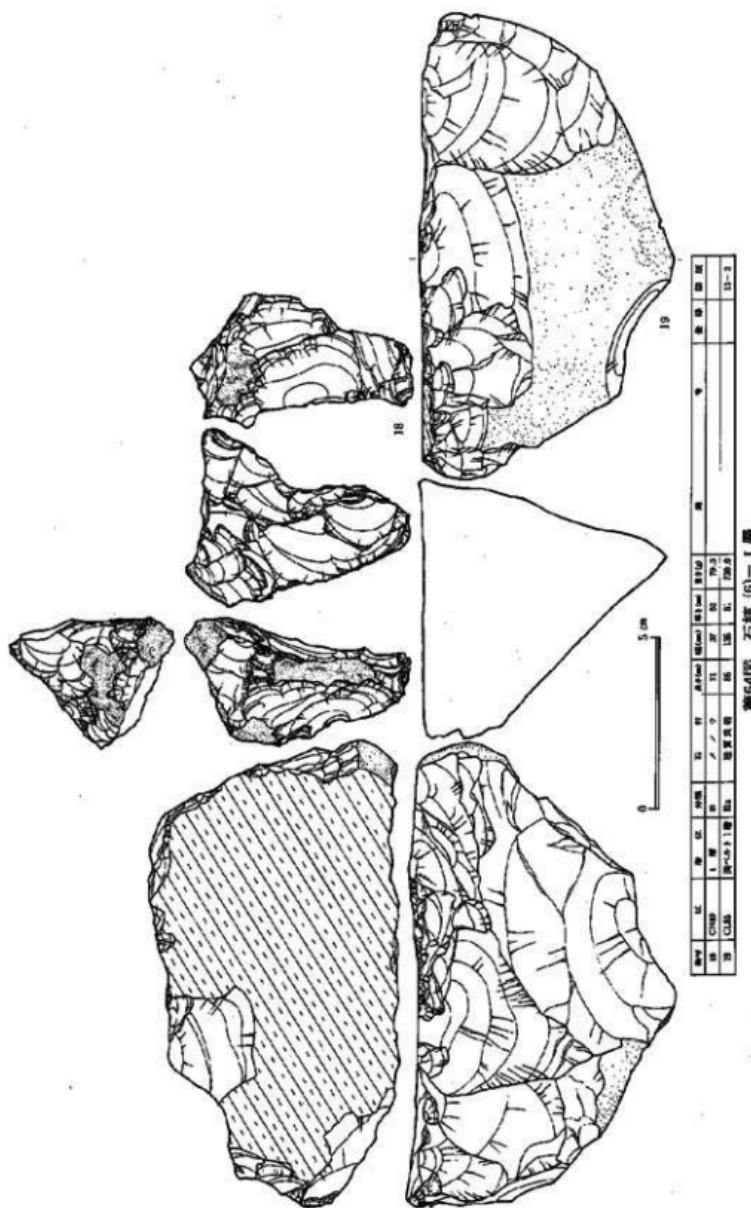
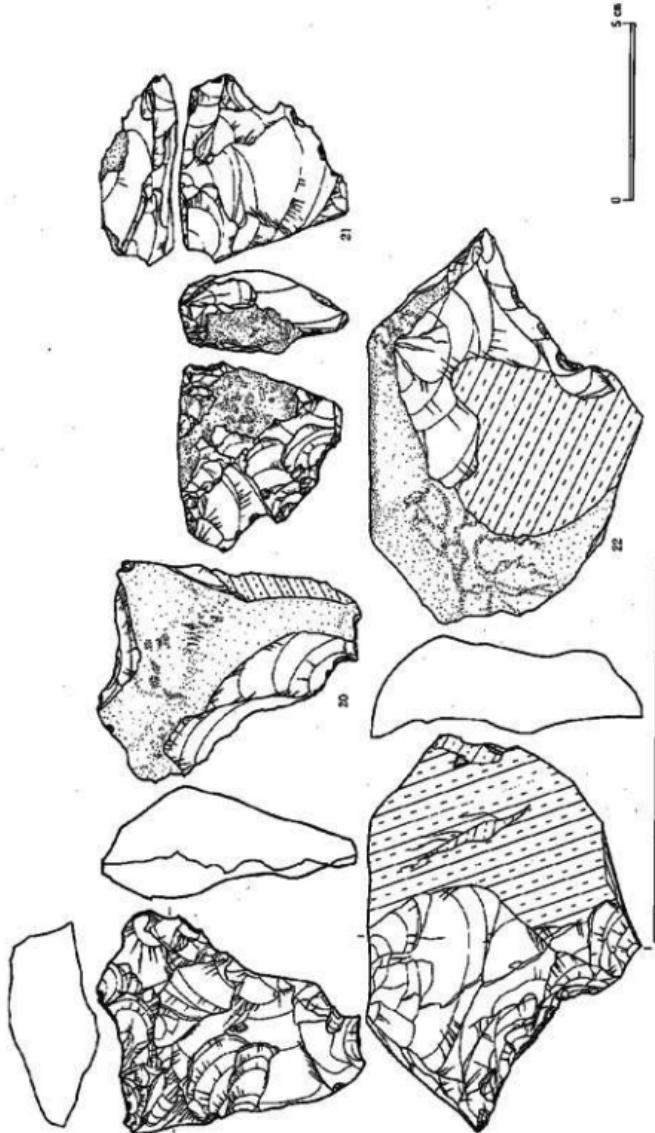
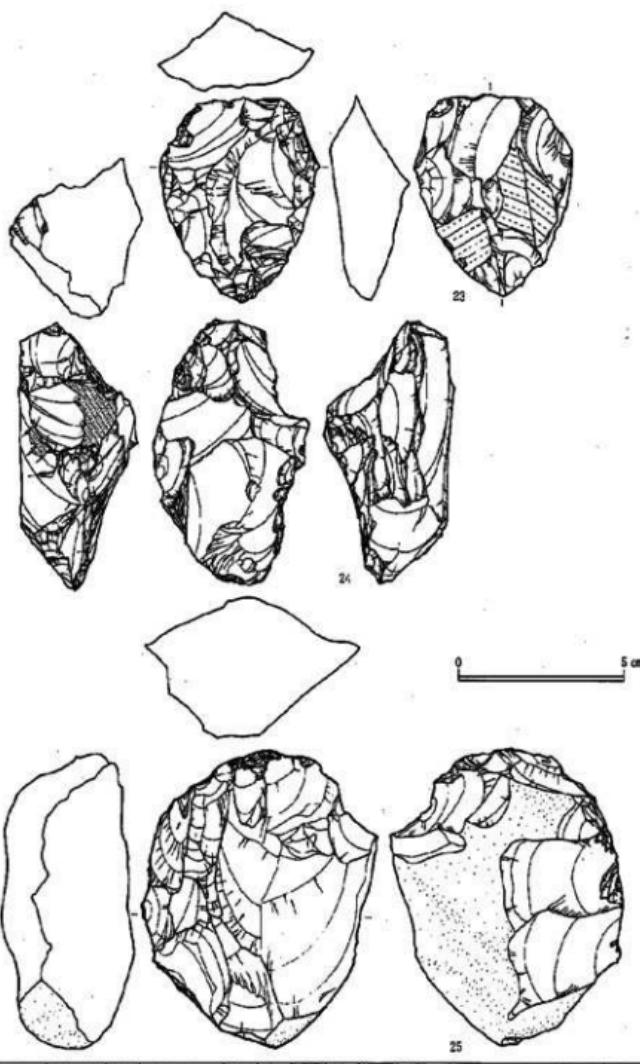


圖564圖 石核 (5) — 1 圖



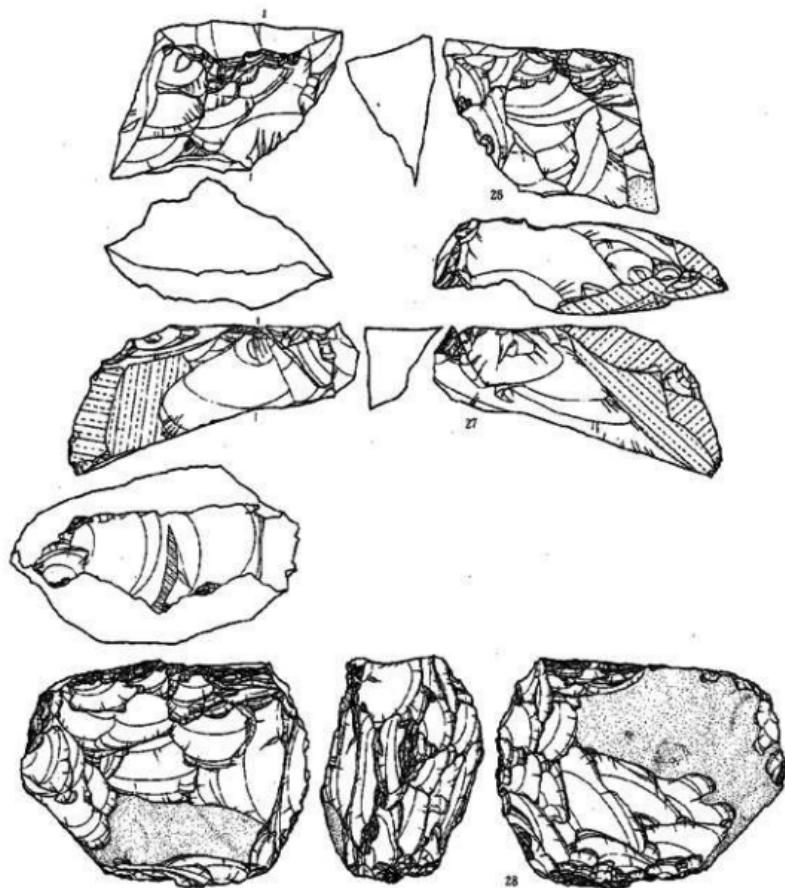
第65図 石核(7)ー(7)の他

| 番号 | 名 | 厚 | 幅 | 長 | 重 | 材質 | 出 | 年 | 地 | 層 |
|----|------|---|----|----|-----|----|--------|-----|----|-------|
| 20 | CH10 | 7 | 30 | 1 | 100 | 1 | 12.新石器 | 60 | 60 | 100 |
| 21 | CH15 | 1 | 30 | 11 | 15 | 青石 | 50 | 50 | 25 | 54.0 |
| 22 | CH16 | 1 | 30 | 11 | 15 | 青石 | 60 | 133 | 26 | 200.0 |
| 23 | CH17 | 1 | 30 | 11 | 15 | 青石 | 60 | 133 | 26 | 200.0 |



第66図 石核(8)-その他の層

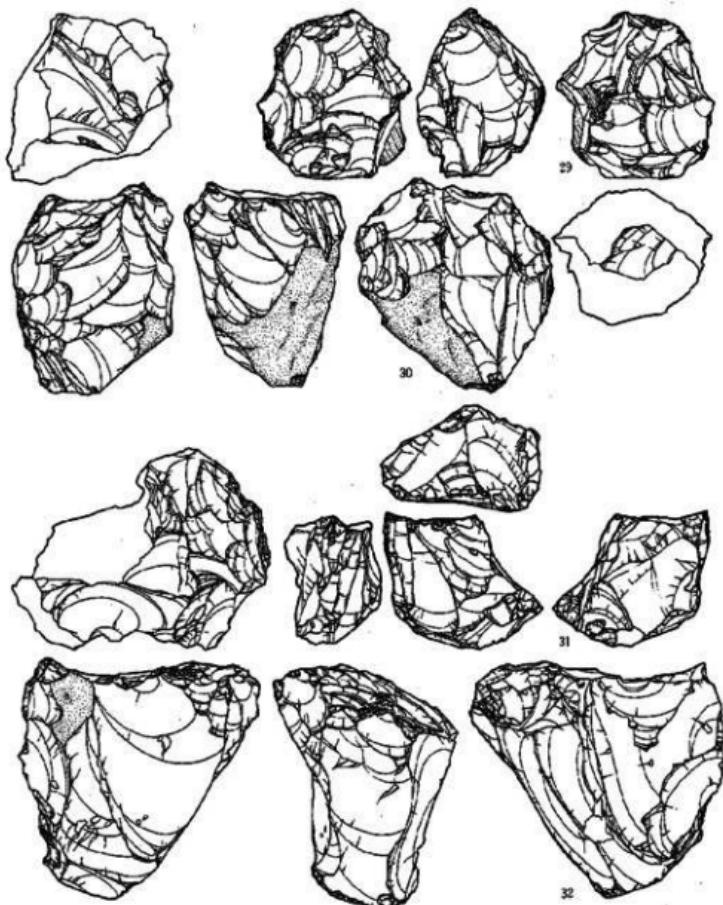
| 番号 | 正 | 横 | 高 | 幅 | 厚 | 重 | 側面 | 側面 | 側面 | 側面 | 側面 | 側面 |
|----|-----|--------|----|------|----|----|----|------|----|----|----|------|
| 23 | CLM | 厚い6-7層 | II | 後質薄者 | 36 | 48 | 25 | 35.7 | | | | 13-E |
| 24 | CMB | # | 薄 | 後質薄者 | 17 | 36 | 47 | 32.4 | | | | |
| 25 | CPT | 6-7層 | II | 後質薄者 | 36 | 71 | 41 | 29.0 | | | | 13-B |



0 5 mm

| 番号 | 名 | 層 | 分類 | 形 | 長 | 幅 | 厚 | 重 | 名 | 層 | 分類 | 形 |
|----|-----|-----|------|---|----|----|----|------|---|---|----|-----|
| 26 | DMS | 2 層 | 被子植物 | △ | 47 | 49 | 27 | 10.3 | | | | △ 5 |
| 27 | DMS | 2 層 | 被子植物 | △ | 45 | 49 | 28 | 11.3 | | | | △ 5 |
| 28 | COS | 4 層 | 被子植物 | △ | 45 | 49 | 29 | 20.0 | | | | △ 5 |

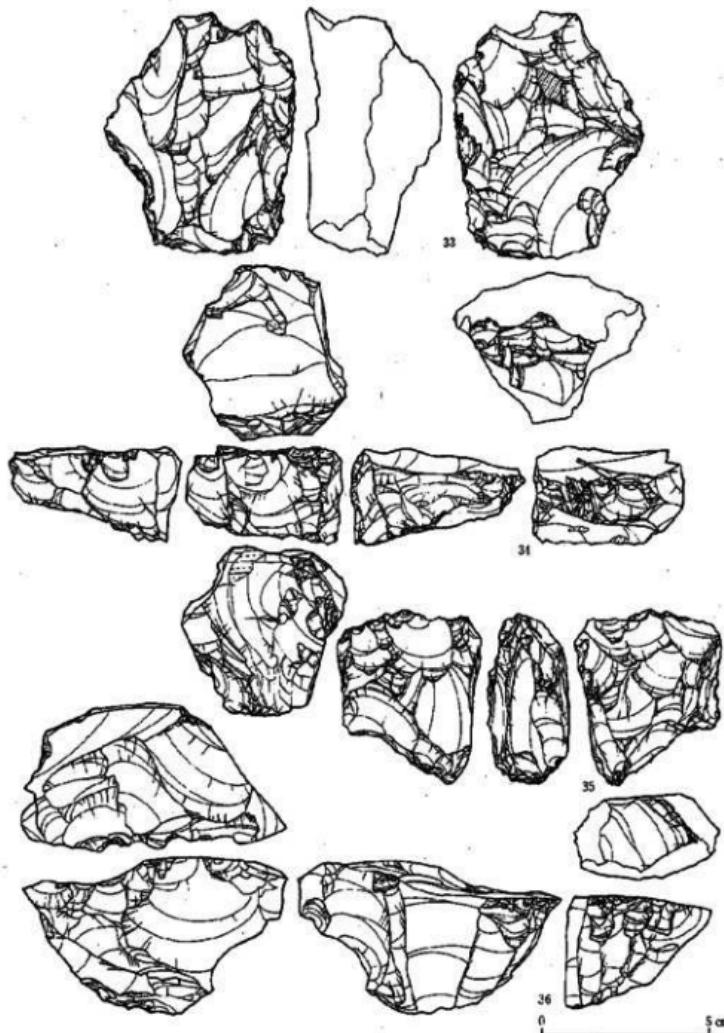
第67図 石核 (9) — その他の層



0 5 cm

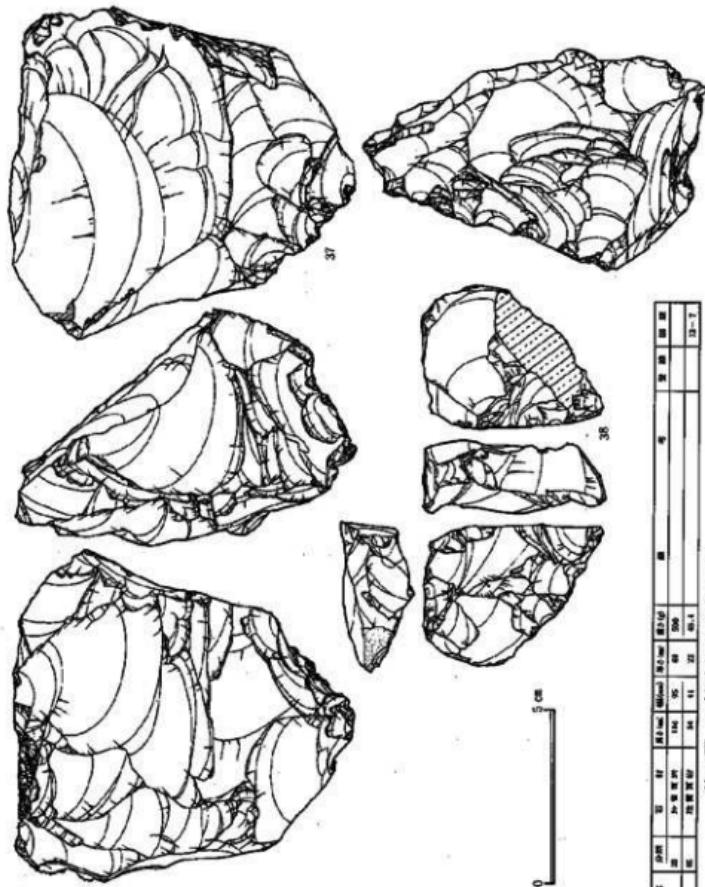
| 番号 | 区 | 層位 | 分類 | 石の種 | 厚さ(mm) | 幅(mm) | 長さ(mm) | 重さ(g) | 備考 | 番号 | 層位 | 分類 |
|----|-----|----|----|------|--------|-------|--------|-------|------------|----|----|-------|
| 29 | CLN | 上層 | 泥岩 | 泥質頁岩 | 17 | 48 | 38 | 79.2 | | | | 13-11 |
| 30 | CNT | 中層 | 泥岩 | 泥質頁岩 | 19 | 49 | 45 | 134.1 | | | | |
| 31 | CPR | 下層 | 泥岩 | 泥質頁岩 | 19 | 47 | 31 | 45.3 | ダイナマイトらしい。 | | | |
| 32 | CPR | 下層 | 泥岩 | 泥質頁岩 | 18 | 72 | 36 | 180 | | | | |

第68図 石核 (30)ーその他の層



| 番号 | 石核 | 層位 | 分類 | E. 寸 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 番 | 石核 | 層位 |
|----|-----|----------|------|------|--------|-------|--------|-------|---|-------|-------|
| 33 | CW1 | 2 層 | II | 波状刃核 | 71 | 37 | 41 | 120.0 | | | 13-2 |
| 34 | CW7 | 7 層 | II | 波状刃核 | 69 | 36 | 39 | 64.0 | | | 13-19 |
| 35 | CW5 | 波ヘルト 4 層 | II | 波状刃核 | 31 | 44 | 29 | 26.7 | | | 13-17 |
| 36 | CW1 | II | 波状刃核 | 45 | 34 | 30 | 34.4 | | | 13-17 | |

第69図 石核 (II)-その他の層



第70図 石核(1)－その他の断面

| 番号 | 長 | 幅 | 厚 | 打痕 | | 長 | 幅 | 厚 | 打痕 | 長 | 幅 | 厚 |
|----|-----|---|-----|----|----|----|----|-----|----|----|----|-----|
| | | | | 左 | 右 | | | | | | | |
| 37 | 16 | 5 | 1.5 | 10 | 10 | 14 | 10 | 1.5 | 10 | 16 | 10 | 1.5 |
| 38 | CPW | 5 | 1.5 | 10 | 10 | 14 | 10 | 1.5 | 10 | 16 | 10 | 1.5 |
| 39 | CPL | 5 | 1.5 | 10 | 10 | 14 | 10 | 1.5 | 10 | 16 | 10 | 1.5 |

9. 磨製石斧、石製品 (第71図、第72図)

磨製石斧は6点出土しており、V層出土が3点(第70図2、4、第71図7)、IV層出土が1点(第70図1)、II層出土が1点(第70図3)ある。完形品は小型の2のみで、他はすべて破損品である。2は直線的で明確な稜が形成される仕上がりで、基部は平坦である。6は刃部破損部にも摩滅があり、刃部再生が行われたことがわかる。7は基部付近の厚手な破片である。

5は垂飾品と考えられる破片で、一部環状を呈する。図上端が整形されているため破損品を再加工したものともみられる。

10. 磨石器 (第73図～第95図)

磨石器としてとりあげられた資料は510点あり、このなかから明らかに自然礫であるもの、使用痕が判別できないため磨石器か自然礫か判然としないもの、破損が著しいものを除外して309点を抽出し181点を図示した。これには、磨石、凹石、磨凹石、磨凹敲石、凹敲石、敲石、石棒、石皿などが含まれている。以下には磨石～敲石を遺物包含層層位順に示し、つぎに石棒、石皿その他を一括して提示する。

【V層】 33点出土している。(19点図示。第72図、第73図)。1～5が磨石、6～9が凹石、10～19が磨凹石である。ザラ面(pp. 747～748 参照)を持つものや磨面に棱が形成されるほど磨耗のすんだもの(1、5)がみられる。

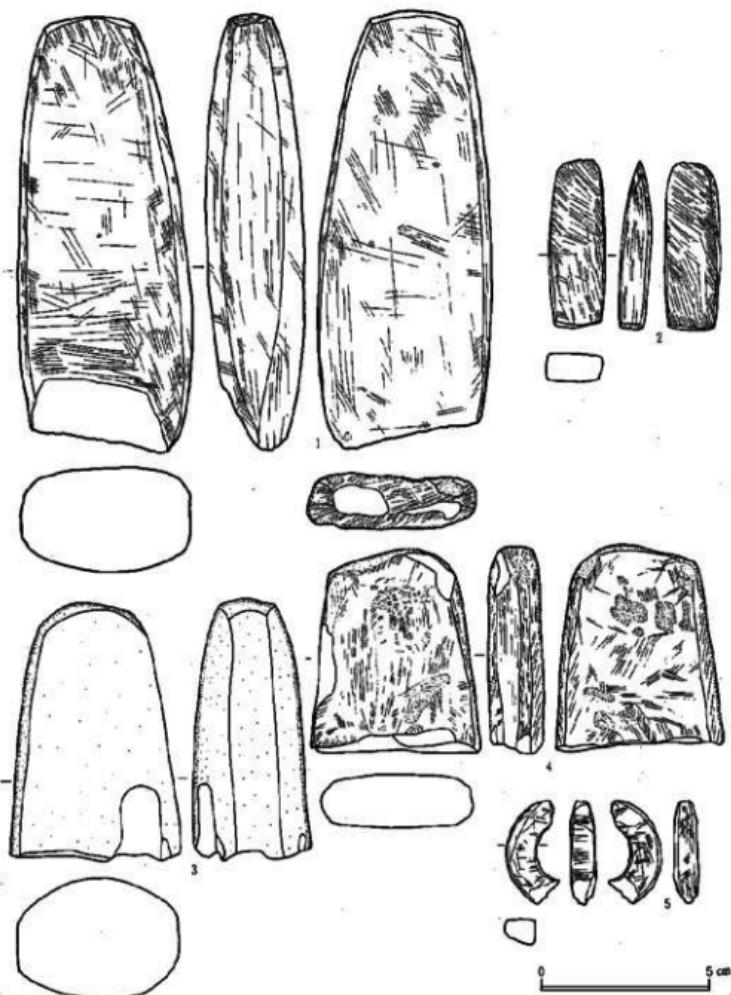
【IV層】 1点出土している(図示せず)。

【III層】 55点出土している(35点図示。第74図～第77図)。20～24、26～29、31が磨石、30、50が凹石、33～49、52が磨凹石、25、24が磨敲石、51、53が磨凹敲石である。長軸方向の先端部に磨面を持つもの(側や縁辺の比較的狭い範囲にザラ面が形成されるもの)、側辺のザラ面を切る敲打痕をもつもの(3)、磨面に棱が形成されているもの(38、42)などがある。

【II層】 91点出土している(58点図示。第78図～第83図)。56～61が磨石、62～74が凹石、80、87が磨敲石で、これらを除く75～101が磨凹石、102、103が磨敲石である。棒状の礫の側辺に磨面があるもの(56)、側辺にも凹をもつもの(62、69、74、85)などがある。磨敲石の敲打痕は、つぶれ状のもの(102)と点状で角のある断面形をもつもの(103)とが観察される。

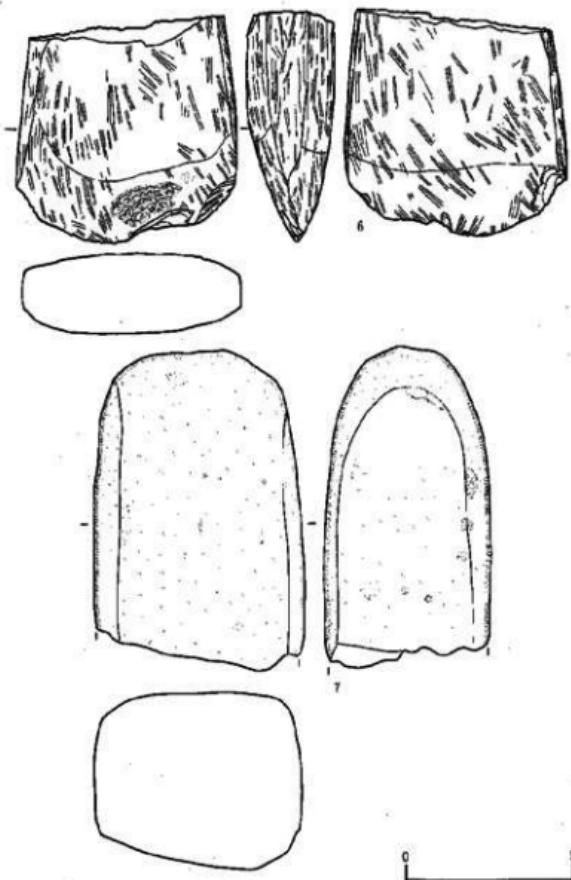
【I層】 51点出土している(20点図示。第84図～第86図)。104～108が磨石、109～111が凹石、112～122が磨凹石で123が磨凹敲石である。側辺にも磨面が形成されるもの(104)や線条痕が顕著なもの(113、117、119)などがある。

【その他の層】 138点ある(51点図示。第87図～92図)。124～130、133～137が磨石、138～142が凹石、143～146、148～169が磨凹石、131、172～174が磨敲石、132が敲石、147、170、171が



第71図 磨製石斧・石製品

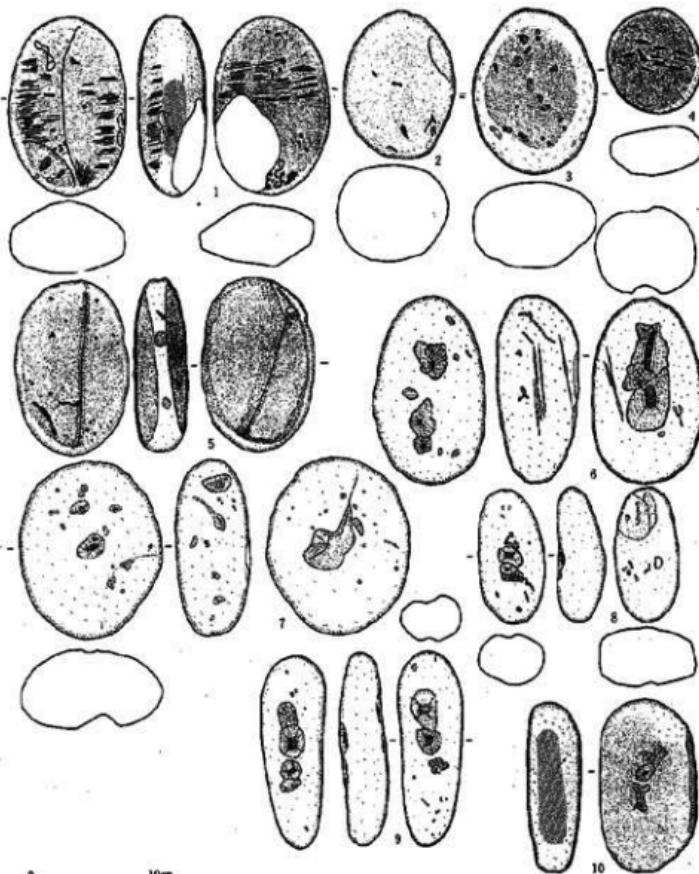
| 器号 | 五 | 層位 | 面 | 幅 | 厚 | 長さ(cm) | 幅さ(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 器 | 号 | 面 | 幅 |
|----|-----|-----|------|-----|-----|--------|--------|--------|-------|------------|------|---|---|
| 1 | CMB | 1 ■ | 磨製石斧 | 1.2 | 0.5 | 0.34 | 35 | 30 | 137.0 | W型刃。A面研磨。 | 22-4 | | |
| 2 | CMB | 7 ■ | 磨製石斧 | 0.8 | 0.5 | 1.5 | 27 | 9 | 14.0 | V型刃。B面磨り面。 | 22-5 | | |
| 3 | CPH | 4 ■ | 磨製石斧 | 0.8 | 0.5 | 0.40 | 0.80 | 0.50 | 10.0 | 磨製石斧。 | 22-6 | | |
| 4 | CPH | 1 ■ | 磨製石斧 | 0.8 | 0.5 | 0.40 | 0.80 | 0.50 | 10.0 | ▼型刃。B面磨り面。 | 22-7 | | |
| 5 | CLB | 5 ■ | 磨製石斧 | — | — | — | 7 | 13.7 | 10.0 | 磨製石斧。 | 22-8 | | |



第72図 磨製石斧

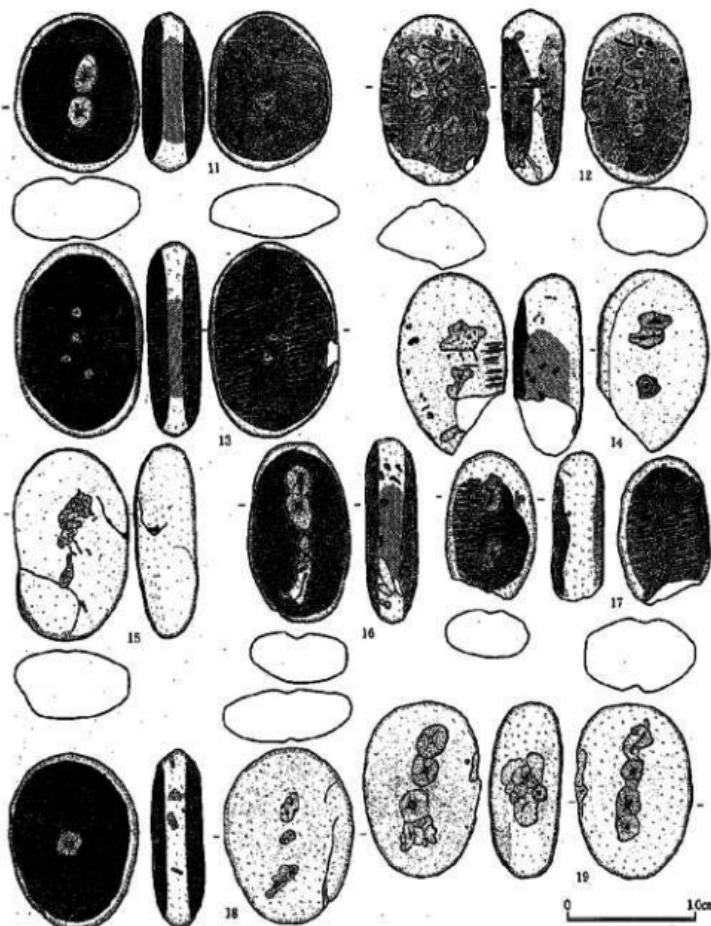
| 番号 | 区 | 面 | 分類 | 石 | 高さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 質 | 標 | 測定 | 測定 |
|----|------|---|------|----|--------|-------|--------|------|-------------------|------|----|
| 6 | CMTI | 2 | 磨製石斧 | 砂岩 | 100 | 480 | 122 | 1.12 | 刀部端擦痕の網状あり (S.T.) | 12-6 | |
| 7 | COM | 6 | 磨製石斧 | 砂岩 | 100 | 480 | 149 | 1.00 | V擦痕なし | 17-1 | |

磨凹敲石である。穂の側辺だけに磨面をもつもの (125)、磨面に稜が形成されるほど磨耗の進んだもの (136)、側辺にも凹をもつもの (163) などがある。



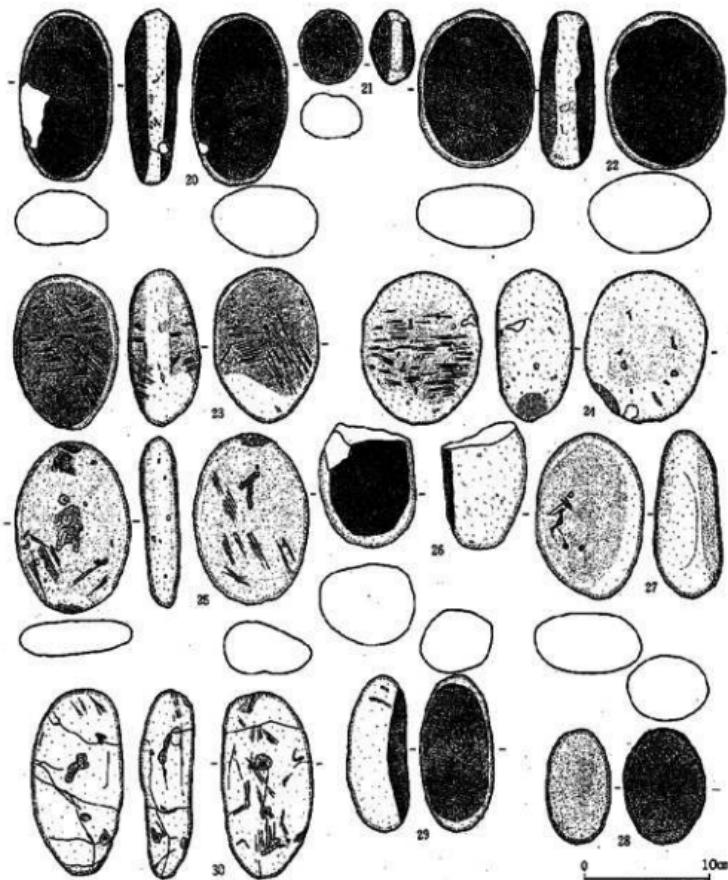
| 番号 | 式 | 層位 | 分類 | 目 | 科 | 属 | 種 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重さ(g) | 備考 | 地質 |
|----|------|--------|----|---------|-----|-----|----|-----|-----------------|----|-------|------|----|
| 1 | CMB | 8層 | 礁石 | 珊瑚礁相 | 124 | 34 | 34 | 804 | 2個組。1マテル。 | | | 14-3 | |
| 2 | CMB | 6層 | 礁石 | 珊瑚礁 | 123 | 33 | 22 | 592 | | | | 14-3 | |
| 3 | CLIN | ビーチト1層 | 礁石 | 珊瑚礁 | 124 | 30 | 40 | 945 | 1個組。 | | | 14-3 | |
| 4 | CMB | 4層 | 礁石 | 珊瑚礁 | 78 | 25 | 26 | 262 | 1個組。 | | | 14-3 | |
| 5 | CMB | 1層 | 礁石 | 珊瑚礁相混成相 | 123 | 33 | 47 | 547 | 1個組(表面に殻が散在する)。 | | | 14-3 | |
| 6 | CMB | 9層 | 礁石 | 珊瑚礁 | 145 | 33 | 35 | 820 | | | | 14-7 | |
| 7 | CP95 | ビーチト1層 | 礁石 | 珊瑚礁相混成相 | 132 | 110 | 30 | 907 | | | | 14-5 | |
| 8 | CMB | 10層ト1層 | 礁石 | 珊瑚片相 | 101 | 33 | 27 | 290 | | | | 14-5 | |
| 9 | CMB | 10層ト1層 | 礁石 | 珊瑚礁 | 145 | 33 | 34 | 340 | | | | 14-4 | |
| 10 | CP95 | ビーチト1層 | 礁石 | 珊瑚礁相 | 126 | 79 | 45 | 713 | 2個組。2マテル。 | | | 14-5 | |

第73図 磯石器(I)-V層



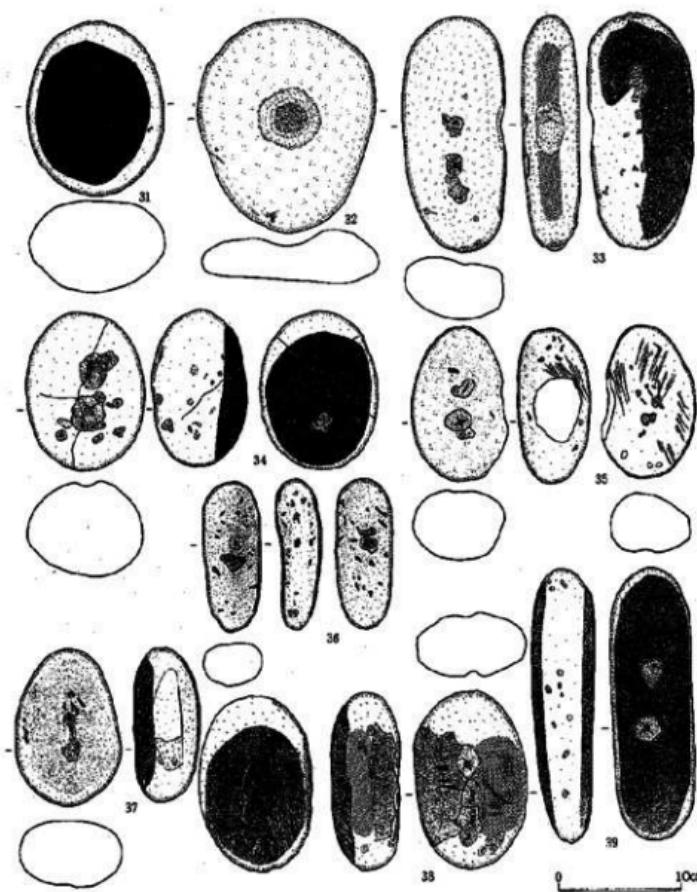
| 番号 | 名 | 層 | 性 | 分類 | 大きさ | 大きさ | 大きさ | 形 | 年 | 出 |
|----|------|----|---|-----|------|-----|-----|-----|---------------|-------|
| 11 | CP51 | 7 | 磨 | 磨片石 | 128 | 36 | 47 | 7.9 | 2面削。1イテル。 | 14-11 |
| 12 | CP48 | 7 | 磨 | 磨片石 | 129 | 47 | 35 | 6.8 | 4面削。1イテル。斜面削。 | 14-12 |
| 13 | CD97 | 8 | 磨 | 磨片石 | 146 | 101 | 60 | 6.8 | 2面削。1イテル。斜面削。 | 14-13 |
| 14 | CD97 | 4 | 磨 | 磨片石 | 1277 | 37 | 52 | 7.0 | 2面削。1イテル。 | 14-14 |
| 15 | CD98 | 4 | 磨 | 磨片石 | 149 | 74 | 52 | 9.0 | 2面削。 | 14-15 |
| 16 | CP96 | 1 | 磨 | 磨片石 | 158 | 81 | 36 | 6.8 | 2面削。1イテル+端刃削。 | 14-16 |
| 17 | CD93 | 2 | 磨 | 磨片石 | 1310 | 71 | 39 | 6.0 | 2面削。 | 15-3 |
| 18 | CL72 | 10 | 磨 | 磨片石 | 132 | 122 | 39 | 6.8 | 2面削。 | 15-2 |
| 19 | CD98 | 4 | 磨 | 磨片石 | 132 | 91 | 39 | 6.8 | 2面削。直角<45度。 | 15-2 |

第74図 磨石器(2)~V層



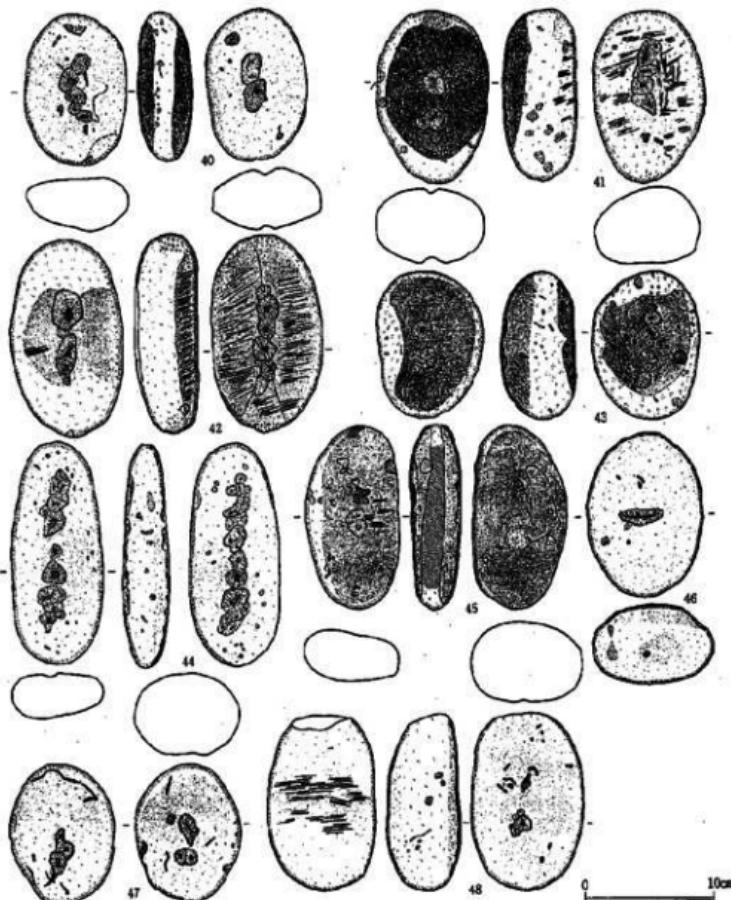
| 番号 | 区 | 場 | 地 | 石 | 河 | R1(cm) | R2(cm) | R3(cm) | R4(cm) | 目 | 年 | 記 |
|----|------|---|---|---|--------|--------|--------|--------|--------|----------------|-------|---|
| 10 | CORH | 1 | 場 | 石 | 安山岩 | 127 | 76 | 41 | 46 | 2脚鉄、頭に上条鐵丸あり。 | 15- 5 | |
| 11 | CL20 | 3 | 場 | 石 | 安山岩 | 46 | 51 | 23 | 106 | 2脚鉄、頭部に鐵丸あり。 | 15- 4 | |
| 12 | CL20 | 9 | 場 | 石 | 安山岩 | 12.0 | 8.5 | 4.0 | 9.0 | 2脚鉄。 | 15- 6 | |
| 13 | CKA1 | 1 | 場 | 石 | 安山岩(?) | 1.0 | 0.5 | 0.5 | 0.5 | 1脚鉄、頭部。 | 15- 7 | |
| 14 | CL22 | 9 | 場 | 石 | 安山岩 | 123 | 96 | 60 | 96 | 2脚鉄、頭部。1マサ鉄。 | 15-10 | |
| 15 | CL22 | 6 | 場 | 石 | 安山岩 | 126 | 91 | 56 | 100 | 2脚鉄、頭部。 | 15-11 | |
| 16 | CM02 | 4 | 場 | 石 | 安山岩(?) | 0.93 | 0.70 | 0.40 | 0.93 | | 15-12 | |
| 17 | CL22 | 6 | 場 | 石 | 安山岩 | 122 | 85 | 44 | 70 | 2脚鉄。(1回は光沢あり)。 | | |
| 18 | CL24 | 2 | 場 | 石 | 安山岩 | 36 | 66 | 40 | 66 | 全表面。 | 15- 8 | |
| 19 | CNM | 3 | 場 | 石 | 安山岩(?) | 113 | 58 | 47 | 64 | 1脚鉄。 | 15- 9 | |
| 20 | CL25 | 5 | 場 | 石 | 安山岩 | 126 | 73 | 38 | 80 | 頭部。 | 15-10 | |

第75図 横石器 (3)-Ⅲ層



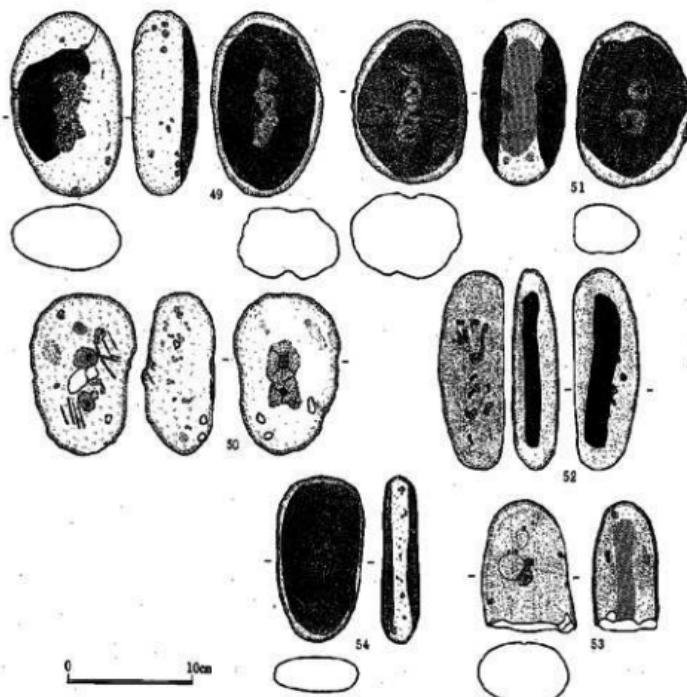
| 番号 | 種 | 周長 | 幅 | 厚さ | 重さ | 大きさ | 材質 | 地 | 年 | 記 |
|---------|----------------|--------|-----|-----|-----|-----|-------|-----------------|------|---|
| 31 CDM4 | 3 型 核 | 標本 | 安山岩 | 130 | 100 | 70 | 1.52g | | | |
| 32 CL12 | 3 型 核 | 石炭紀山麓層 | 標本 | 140 | 40 | 40 | 0.62g | 地にとくらがり跡あり。 | 16-2 | |
| 33 CL10 | 4 型 核 | 石炭紀山麓層 | 標本 | 70 | 50 | 40 | 0.62g | 1面打。側面にマツリ打痕あり。 | 16-1 | |
| 34 CDM4 | 5 型 核 | 石炭紀山麓層 | 標本 | 100 | 60 | 20 | 0.62g | | | |
| 35 CPD2 | 2 型 核 | 石炭紀山麓層 | 標本 | 117 | 100 | 24 | 1.62g | 1面打。核底凹。 | 16-5 | |
| 36 CL71 | 3 型 核 | 石炭紀山麓層 | 標本 | 115 | 40 | 30 | 2.62g | | | |
| 37 CL71 | 3 型 核 | 石炭紀山麓層 | 標本 | 119 | 40 | 30 | 2.72g | 2面打。 | 16-3 | |
| M C29 | 2 型 核 | 石炭紀山麓層 | 標本 | 100 | 35 | 40 | 1.70g | 2面打とも核底凹。1面打。 | 16-6 | |
| H C26 | 2型へむける 3型 核 | 石炭紀山麓層 | 標本 | 105 | 40 | 40 | 2.62g | 2面打。 | 16-7 | |

第76図 磨石器(4)-I层



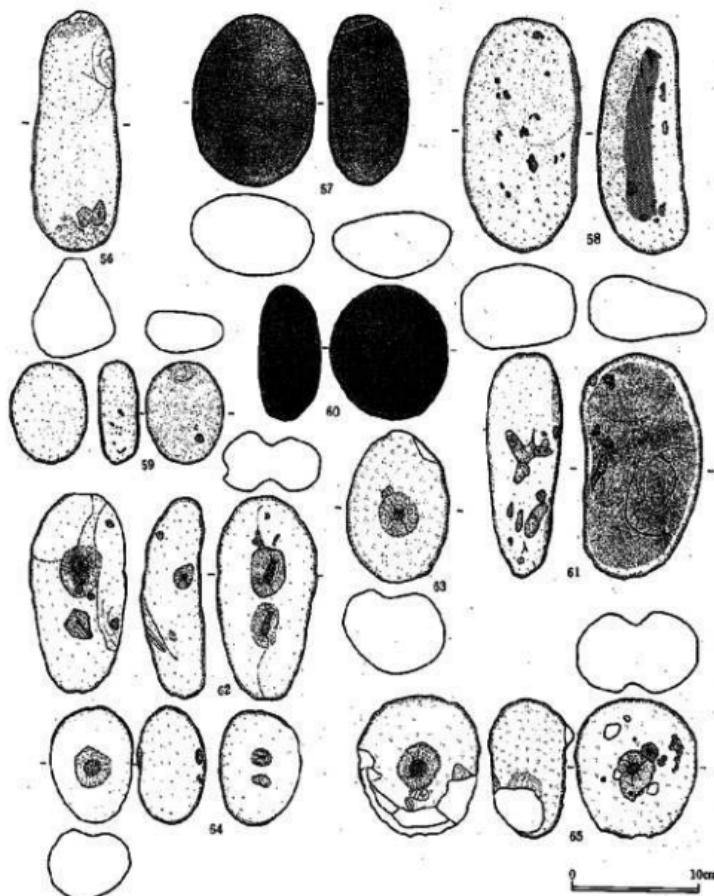
| 番号 | 区 | 面 | 底 | 内 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 |
|----|-----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 40 | CL2 | 2 | 面 | 底 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 |
| 41 | CL2 | 2 | 面 | 底 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 |
| 42 | CL2 | 1 | 面 | 底 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 |
| 43 | CGH | 1 | 面 | 底 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 |
| 44 | CTB | 3 | 面 | 底 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 |
| 45 | CGH | 1 | 面 | 底 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 |
| 46 | CLM | 2 | 面 | 底 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 |
| 47 | CLD | 2 | 面 | 底 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 |
| 48 | CPB | 2 | 面 | 底 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 | 石 |

第77図 磨石器(5)-III層



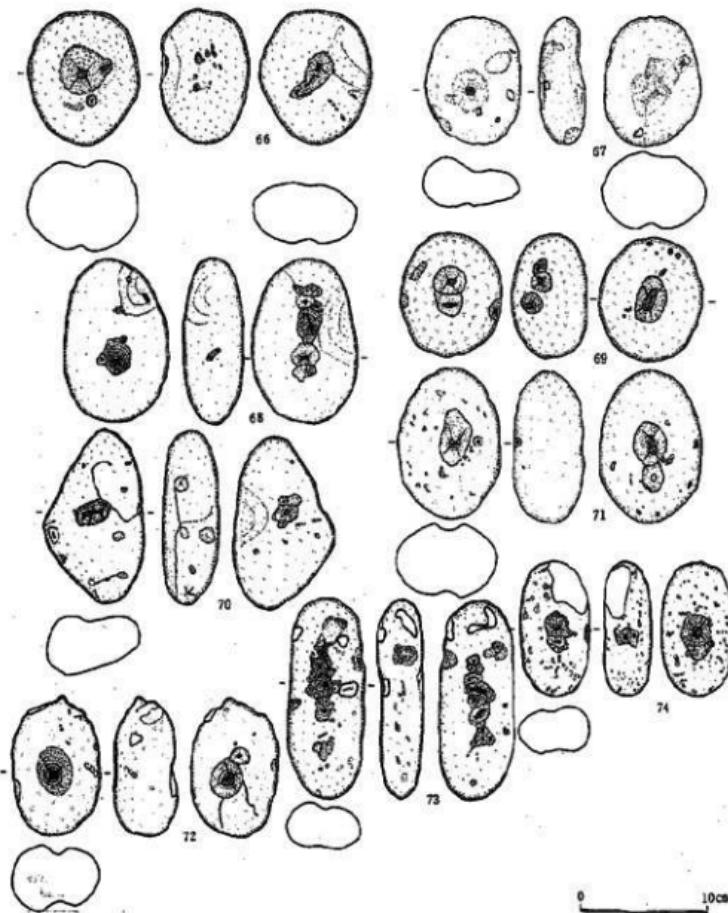
| 番号 | 北 | 緯 | 度 | 分 | 種 | 石 | 名 | 厚3mm | 厚4mm | 厚5mm | 厚6mm | 厚7mm | 厚8mm | 厚9mm | 厚10mm | 厚11mm | 厚12mm | 厚13mm | 厚14mm |
|----|------|---|---|----|---|---|---|------|------|------|------|------------------------|------|------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 49 | CL71 | 5 | 度 | 49 | 打 | 石 | 破 | 126 | 66 | 49 | 86 | 2面打。 | | | | | 16-12 | | |
| 50 | CL72 | 5 | 度 | 21 | 石 | 打 | 石 | 129 | 64 | 53 | 549 | 多孔の石。既存。 | | | | | 16-13 | | |
| 51 | CN11 | 2 | 度 | 49 | 打 | 石 | 破 | 121 | 63 | 57 | 86 | 2面打。ヤク打。既存。 | | | | | 16-14 | | |
| 52 | CP90 | 2 | 度 | 49 | 打 | 石 | 破 | 116 | 62 | 56 | 44 | 既存が何時かに変化した部分なり (S-T)。 | | | | | 16-15 | | |
| 53 | CL71 | 2 | 度 | 49 | 打 | 石 | 破 | 127 | 65 | 48 | 269 | | | | | | | | |
| 54 | CN11 | 4 | 度 | 49 | 打 | 石 | 破 | 123 | 70 | 56 | 220 | 2面打。既存。 | | | | | | | |

第78図 磨石器(6)-III層



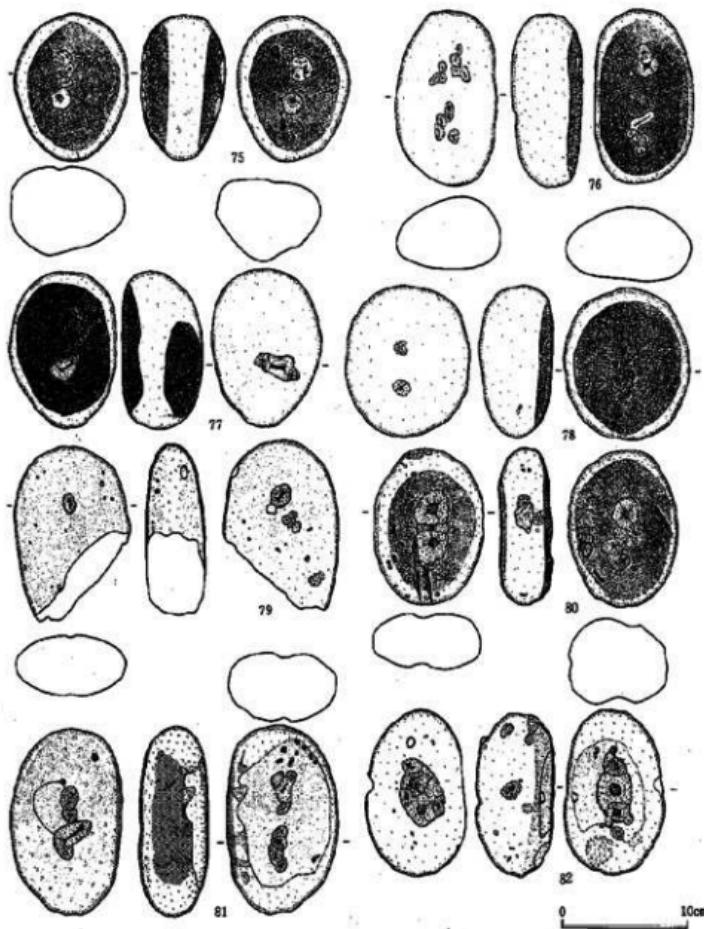
| 番号 | 品 | 用 | 立 | 分 | 種 | 目 | 材 | A(±1cm) | B(±1cm) | C(±1cm) | 重 | 量(g) | 圖 | 号 | 回 | 数 |
|----|------|--------|---|---|---|---|---|---------|---------|---------|-------|------------|---|------|------|---|
| 56 | CP16 | 2 | 等 | 砾 | 石 | 圓 | 角 | 130 | 20 | 76 | 1,240 | 上層部。 | | | 17-1 | |
| 57 | CP18 | 2 | 等 | 砾 | 石 | 圓 | 角 | 105 | 94 | 46 | 626 | 全層部。 | | | 17-4 | |
| 58 | CM26 | 2 | 等 | 砾 | 石 | 圓 | 角 | 134 | 92 | 65 | 1,418 | 1層部、14-9层。 | | | | |
| 59 | CM28 | 2 | 等 | 砾 | 石 | 圓 | 角 | 26 | 61 | 21 | 236 | 下層部。 | | | 17-4 | |
| 60 | CP19 | 3 | 等 | 砾 | 石 | 圓 | 角 | 127 | 96 | 61 | 1,110 | 全層部。 | | | 17-5 | |
| 61 | CD17 | 4 | 等 | 砾 | 石 | 圓 | 角 | 167 | 96 | 39 | 1,230 | 2層部。 | | | 17-2 | |
| 62 | CP16 | 3 | 等 | 砾 | 石 | 圓 | 角 | 126 | 76 | 44 | 545 | | | | 17-6 | |
| 63 | CM20 | 1 | 等 | 砾 | 石 | 圓 | 角 | 113 | 86 | 62 | 690 | | | | | |
| 64 | CD26 | 西ベルト4等 | 砾 | 石 | 圓 | 角 | 石 | 46 | 63 | 34 | 349 | | | 17-5 | | |
| 65 | CD26 | 西ベルト4等 | 砾 | 石 | 圓 | 角 | 石 | 105 | 96 | 41 | 1620 | | | 17-7 | | |

第79図 磨石器(7)-II層



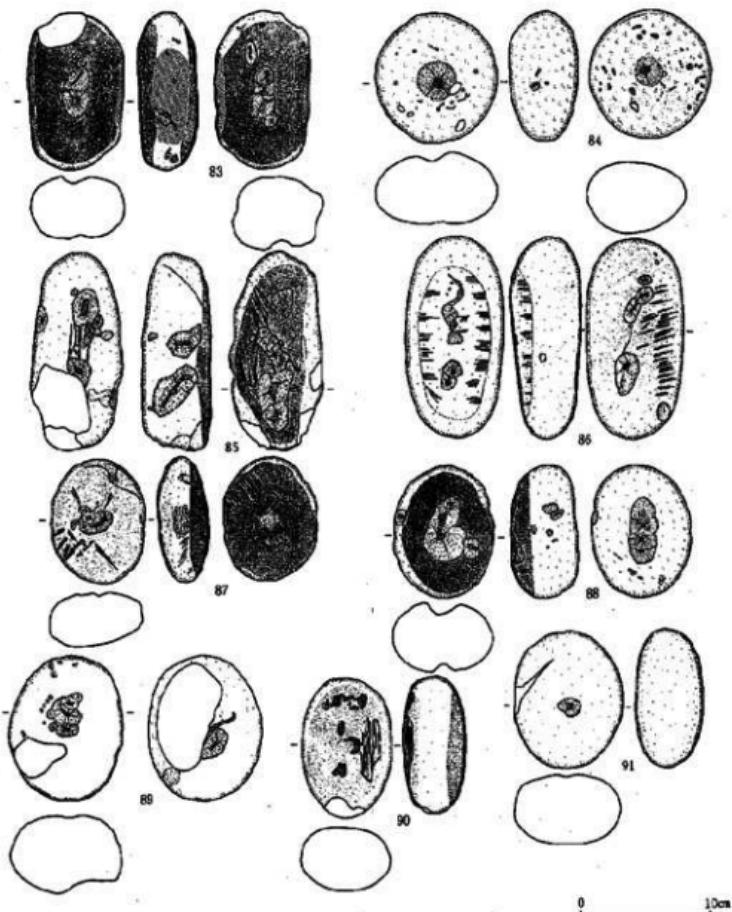
| 番号 | 試 | 原 理 | 分 類 | 石 灰 | 長 軸 | 短 軸 | 周 長 | 面 積 | 容 積 | 重 量 | 寸 法 | 形 狀 |
|----|---------|----------|--------|----------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 66 | C008 | 3 試 | 石 | 石灰岩山地質破片 | 99 | 87 | 87 | 729 | | | | |
| 67 | C1-C009 | 1 試 | 石 | 石灰岩山地質破片 | 95 | 75 | 76 | 540 | | | | |
| 68 | C005 | 7 試 | 石 | 變山岩 | 321 | 82 | 46 | 440 | | | (7-9) | |
| 69 | C006 | 3 試 | 石 | 變灰岩 | 112 | 82 | 56 | 160 | | | (3-11) | |
| 70 | C004 | 10ヘルト4 試 | 石 | 石灰岩山地 | 120 | 80 | 43 | 360 | | | (7-10) | |
| 71 | C007 | 7 試 | 石 | 石灰岩山地 | 123 | 81 | 55 | 380 | | | | |
| 72 | C005 | 3 試 | 石 | 石灰岩山地質破片 | 162 | 76 | 48 | 640 | | | (7-12) | |
| 73 | C006 | 4 試 | 石 | 石灰岩山地 | 147 | 85 | 54 | 490 | | | (7-15) | |
| 74 | C005 | 2 試 | 石 | 變山岩 | 150 | 85 | 56 | 540 | | | (7-14) | |

第80図 磯石器(8)-II層



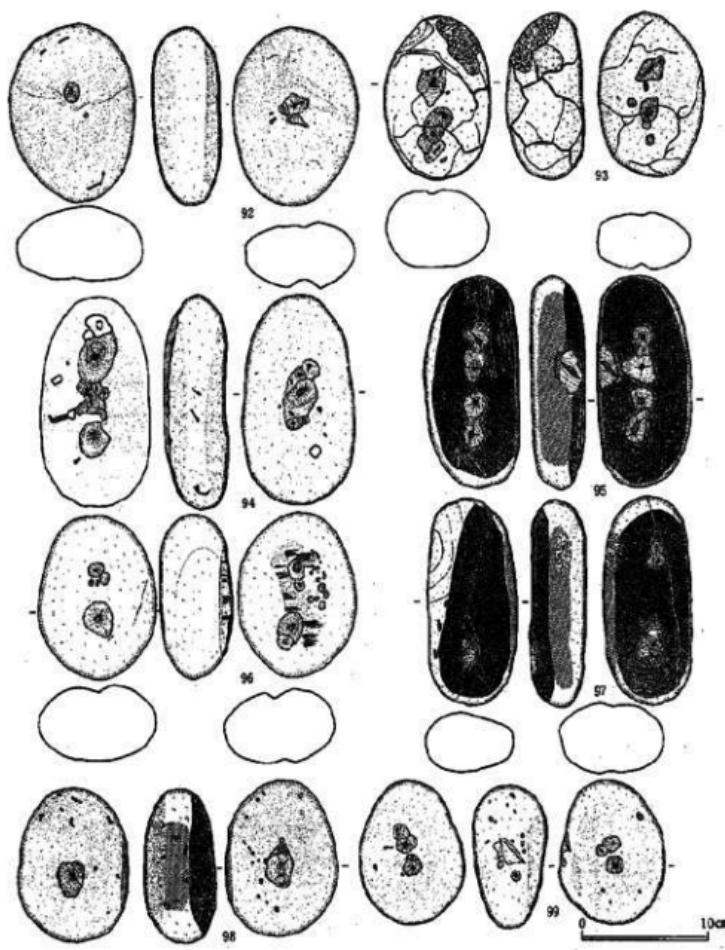
| 番号 | 次 | 種 | 年代 | 中 | 外 | 石 | 材 | 長さ(m) | 幅(m) | 厚さ(m) | 重さ(t) | 備 | 号 | 出 | 所 |
|----|------|--------------|------|------------|------|-----|----|-------|--------|---------------|-------|------|-------|---|---|
| 75 | CPIB | 松→砂→1層 砂岩 | 新第三紀 | 河内山地 | 108 | 31 | 45 | 740 | 2.70m. | | | | 17-15 | | |
| 76 | CPIB | 2層 砂岩 | 新第三紀 | 宮山 | 119 | 36 | 54 | 740 | | | | | | | |
| 77 | CDAE | 2層 砂岩 | 新第三紀 | 御園河谷 | 116 | 36 | 53 | 501 | | | | | | | |
| 78 | CPIB | 松→砂→2層 砂岩 | 新第三紀 | 花嶺村 | 1.2 | 160 | 25 | 823 | 1.70m. | | | | 17-16 | | |
| 79 | CDS | 2層 砂岩 | 新第三紀 | 宮山 | 1130 | 31 | 45 | 1000 | | | | | | | |
| 80 | CDS | 2層 砂岩 | 新第三紀 | 御園河谷 | 116 | 37 | 43 | 503 | 2.70m. | 表面に鉄打跡。鉄系灰あり。 | | 18-2 | | | |
| 81 | CDS | 2層 砂岩 | 新第三紀 | 宮山 | 147 | 39 | 52 | 643 | 3.00m. | 1ザケ灰。 | | 18-1 | | | |
| 82 | CDS | 2層 砂岩 | 新第三紀 | 御園河谷(御園河谷) | 127 | 79 | 64 | 603 | 1.70m. | | | | 18-2 | | |

第81図 磨石器(9)-II層



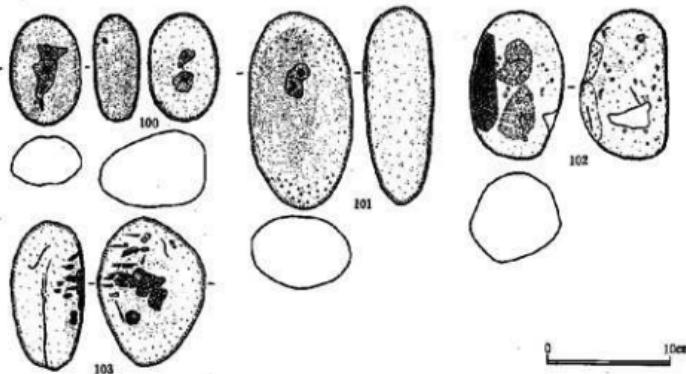
| 番号 | 区 | 形 状 | 分 類 | 石 器 | 周長(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 測 定 者 | 考 査 年 | 記 録 |
|----|------|----------|--------|--------|--------|-------|--------|-------|--------------------------|-------------|--------|
| 83 | CN83 | 3 型 | 刮削器 | 穿孔石器 | 114 | 25 | 46 | 460 | 1985. 2月9日。 | 18- 5 | |
| 84 | CN84 | 2 型 | 刮削器 | 穿孔石器 | 96 | 36 | 52 | 660 | 1985. | 18- 4 | |
| 85 | CN85 | 3 型 | 刮削器 | 穿孔石器 | 147 | 72 | 54 | 1020 | 1985. 3月10日。 | 18- 7 | |
| 86 | CN86 | 北ヘント 2 型 | 刮削器 | 穿孔石器 | 149 | 75 | 52 | 620 | 1985. 3月10日。 | 18- 6 | |
| 87 | CN87 | 1 型 | 刮削器 | 穿孔石器 | 97 | 74 | 58 | 340 | 1985. 2月10日と1985. 3月10日。 | 18- 6 | |
| 88 | CN88 | 3 型 | 刮削器 | 穿孔石器 | 98 | 79 | 54 | 480 | | 18- 6 | |
| 89 | CN89 | 2 型 | 刮削器 | 穿孔石器 | 107 | 46 | 58 | 720 | 1985. | | |
| 90 | CN90 | 3 型 | 刮削器 | 穿孔石器 | 103 | 71 | 48 | 440 | 1985. 3月10日。 | 18- 6 | |
| 91 | CN91 | 2 型 | 刮削器 | 穿孔石器 | 102 | 34 | 58 | 640 | 1985. | | |

第82図 磨石器 (I) - II層

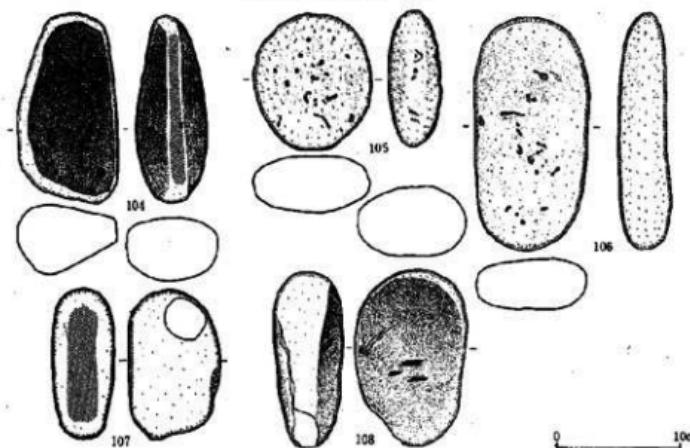


| 番号 | 城 | 層 | 江 | 中 | 層 | 江 | 層 | 高さ(cm) | 幅さ(cm) | 厚さ(cm) | 性質 | 号 | 記 |
|----|------|--------|-----|-------|-----|-----|----|--------|--------------|--------|----|-------|---|
| 92 | CN86 | 北ヘルト2層 | 御内石 | 花崗岩 | 131 | 380 | 36 | 1,000 | 2面鏡。 | | | 18-10 | |
| 93 | CN86 | 3-6層 | 御内石 | 安山岩 | 132 | 84 | 37 | 500 | 2面鏡。 | | | | |
| 94 | CN87 | 5層 | 御内石 | 安山岩 | 136 | 86 | 36 | 400 | 2面鏡。 | | | 18-8 | |
| 95 | CN86 | 3層 | 御内石 | 砂質凝灰岩 | 136 | 79 | 42 | 600 | 2面鏡。1マテル。無色。 | | | 18-9 | |
| 96 | CN86 | 4層 | 御内石 | 砂質凝灰岩 | 131 | 93 | 35 | 650 | 1面鏡。 | | | | |
| 97 | CN87 | 北ヘルト2層 | 御内石 | 花崗岩 | 132 | 76 | 41 | 710 | 2面鏡。1マテル。 | | | | |
| 98 | CN86 | 北ヘルト2層 | 御内石 | 砂質凝灰岩 | 134 | 88 | 36 | 600 | 2面鏡。1マテル。 | | | | |
| 99 | CN87 | 3層 | 御内石 | 安山岩 | 136 | 84 | 31 | 640 | 2面鏡。 | | | 18-11 | |

第83図 機石器 (I)-II層

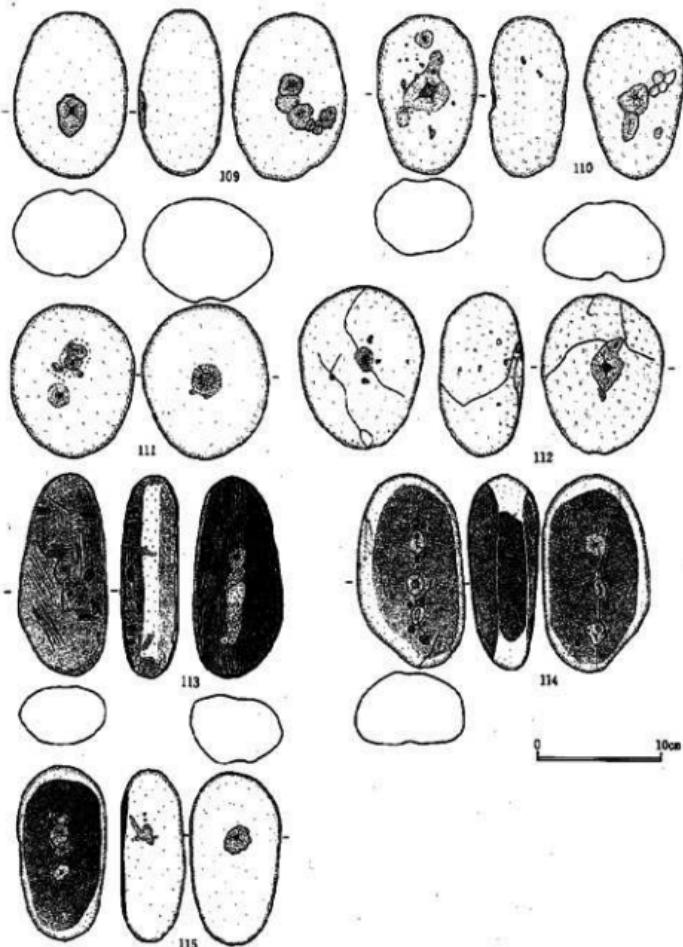


第84図 磨石器 (II- III層)



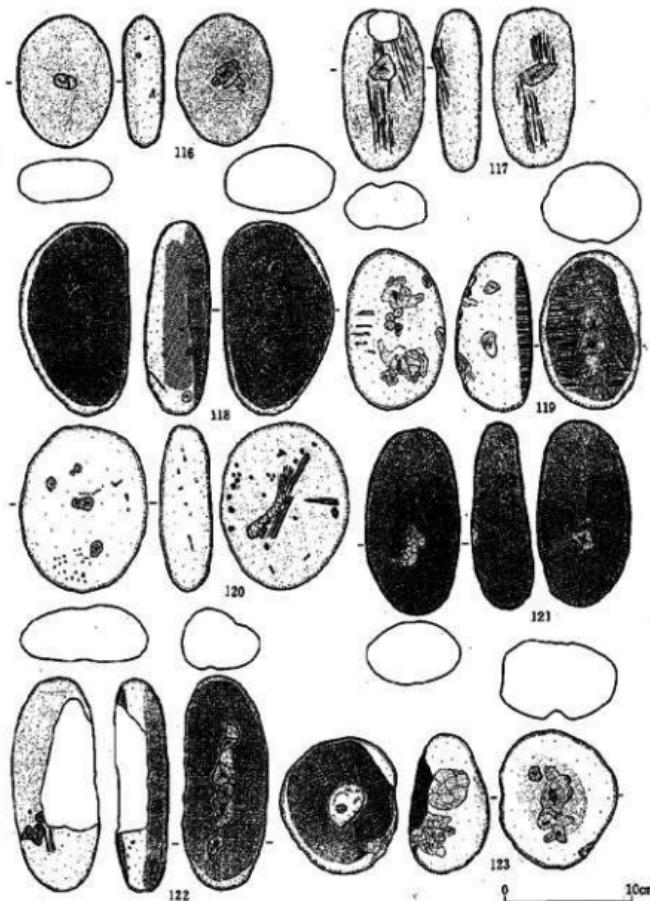
第85図 磨石器 (I-II層)

| 番号 | 区 | 場 | 分類 | 材質 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 備考 | 年 | 組成 |
|-----|-----|--------|-----|-------|--------|-------|--------|-------|----------|------|----|
| 104 | CMB | 2層 | 磨石器 | 玄武岩 | 145 | 32 | 21 | 900 | 2面削。 | | |
| 105 | CLB | 近(ル)1層 | 磨石器 | 玄武岩 | 130 | 37 | 15 | 600 | 2面削。 | | |
| 106 | CLB | 近(ル)1層 | 磨石器 | 砂質粘土岩 | 160 | 38 | 21 | 1,000 | 1面削。 | | |
| 107 | CMB | 2層 | 磨石器 | 玄武岩 | 115 | 74 | 45 | 900 | 2面削。1面削。 | M-12 | |
| 108 | CMB | 2層 | 磨石器 | 玄武岩 | 120 | 32 | 20 | 800 | 2面削。斜削。 | M-14 | |



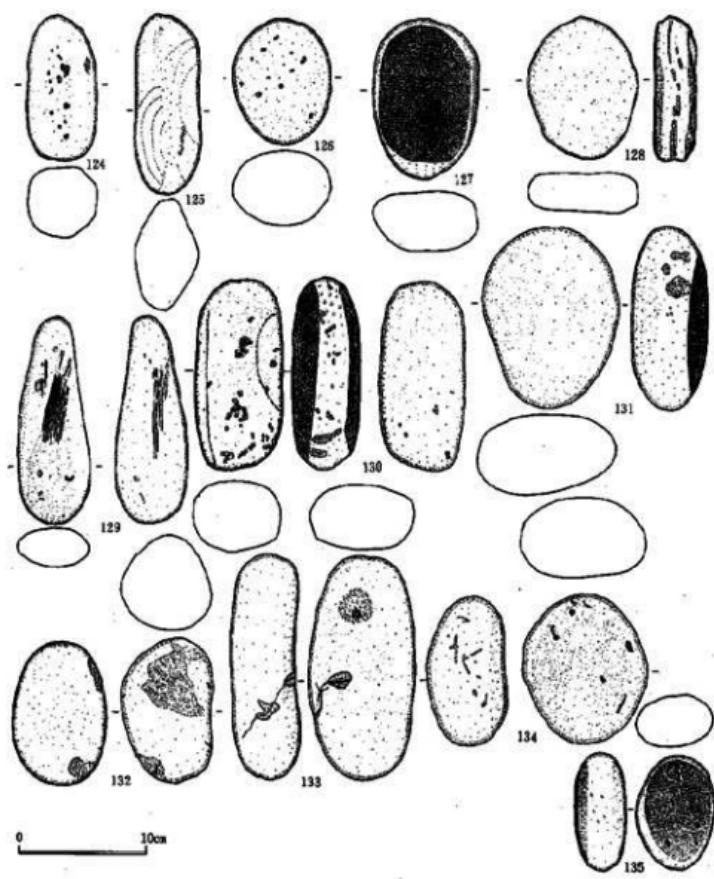
| 番号 | 区 | 原住 | 分類 | 石種 | 厚さmm | 長さmm | 幅mm | 重さg | 備考 | 号 | 備註 |
|-----|------|-----------|-----|--------|------|------|-----|-------|--------------------|---|------|
| 109 | CMB | 1 番 | 刮 石 | 砂質凝灰岩 | 122 | 37 | 35 | 360 | | | 10-1 |
| 110 | CMB | 4 番 | 刮 石 | 砂質凝灰岩 | 117 | 79 | 35 | 360 | | | 10-2 |
| 111 | CMB? | ←6-7 3 番 | 刮 石 | 砂 19 砂 | 112 | 101 | 25 | 1,000 | | | |
| 112 | CLF? | 5 番 | 刮削器 | 安山岩 | 118 | 58 | 34 | 360 | 1.断面。 | | 10-3 |
| 113 | CJW | 1 番 | 刮削器 | 砂質凝灰岩 | 145 | 29 | 41 | 540 | 2.断面。絞尖端。直線刃に向か刃頭。 | | 10-4 |
| 114 | CMB? | 北へ6-7 2 番 | 刮削器 | 花 砂 岩 | 141 | 66 | 32 | 1,000 | 3.断面。 | | 10-5 |
| 115 | CMB | 3 番 | 刮削器 | 砂質凝灰岩 | 126 | 72 | 35 | 360 | 1.断面。 | | 10-6 |

第86図 磨石器(10-1層)



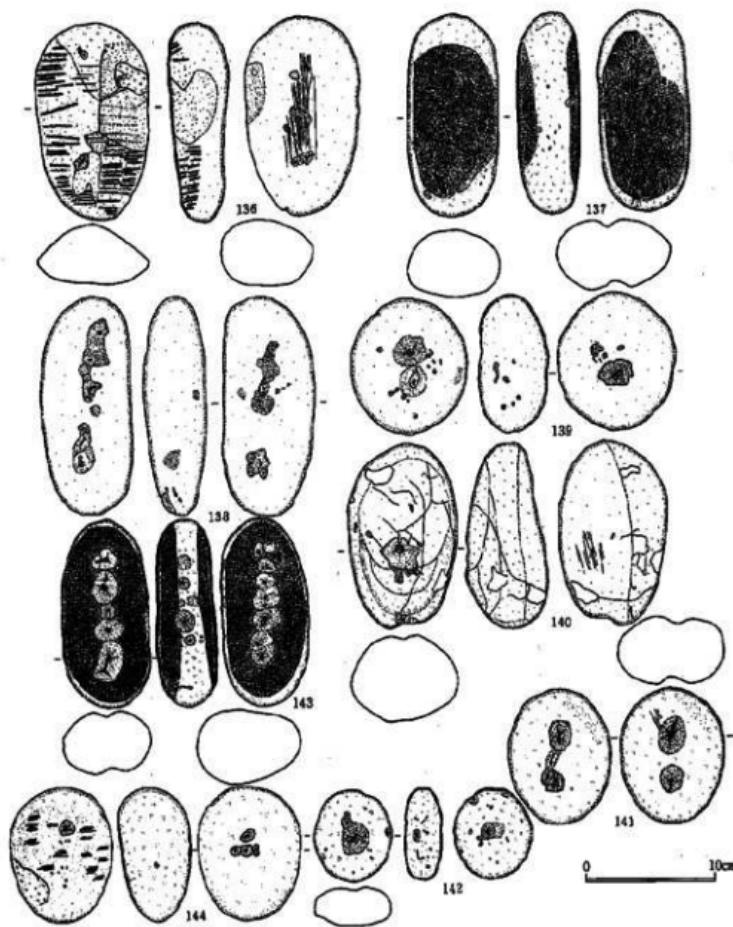
| 番号 | 紅 | 層 | 地 | 分類 | 石 | 河 | 高さ(cm) | 幅さ(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 記 | 号 | 註 |
|-----|-------|---|---|----|-----------|-----|--------|--------|--------|---------------|---|-------|---|
| 116 | CLM | 3 | 層 | 断面 | 安山岩 | 94 | 75 | 22 | 280 | 2面削, | | 19-1 | |
| 117 | CN-89 | 2 | 層 | 断面 | 石英安山岩 | 117 | 65 | 24 | 320 | 2面削, 鋸齿状。 | | 19-2 | |
| 118 | CN-88 | 3 | 層 | 断面 | 安山岩 | 141 | 87 | 49 | 380 | 2面削, 1サガリ, | | 19-3 | |
| 119 | CN-89 | 3 | 層 | 断面 | 石英安山岩等の複合 | 114 | 56 | 37 | 360 | 2面削 (1面に凸凹面)。 | | 19-7 | |
| 120 | CN-89 | 2 | 層 | 断面 | 石英安山岩等の複合 | 129 | 163 | 47 | 440 | 1面削, 鋸齿状。 | | 19-10 | |
| 121 | CN-89 | 3 | 層 | 断面 | 閃緑岩 | 135 | 74 | 45 | 640 | 全面削。 | | | |
| 122 | CN-89 | 4 | 層 | 断面 | 安山岩 | 156 | 68 | 45 | 1480 | 2面削。 | | 19-9 | |
| 123 | CN-88 | 4 | 層 | 断面 | 石英安山岩 | 206 | 95 | 39 | 700 | 2面削, 側面心窓打。 | | 19-11 | |

第87図 磚石器 (19-1層)



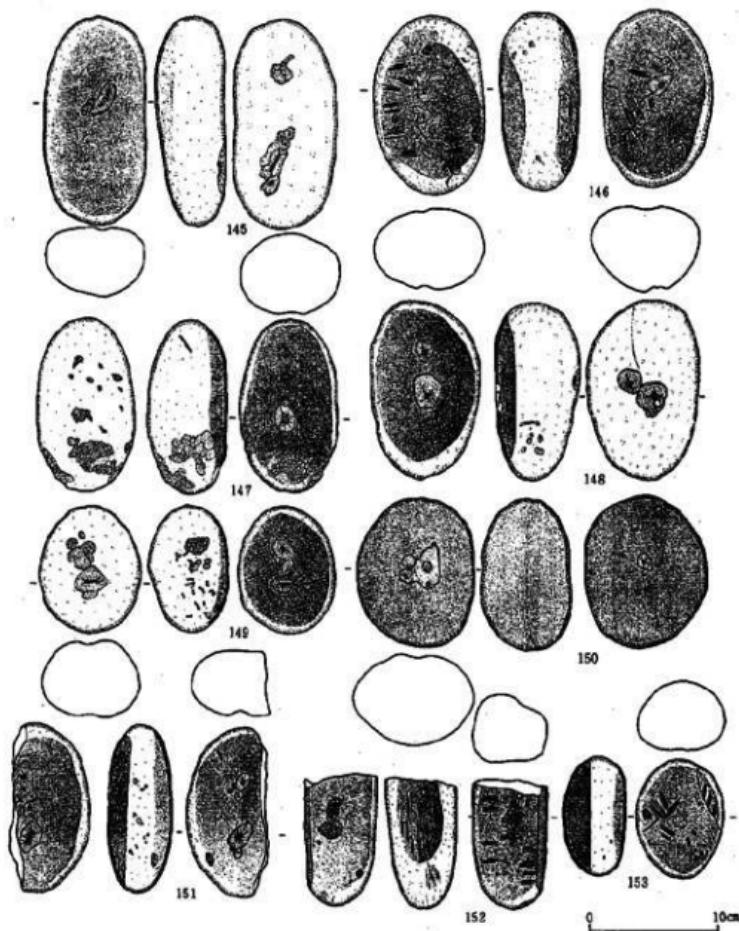
| 番号 | 石器 | 直徑 | 分類 | 石材 | 長さ (mm) | 幅さ (mm) | 厚さ (mm) | 重さ (g) | 備考 | 番号 | 直徑 |
|-----|-----|----------|----|-----|---------|---------|---------|--------|-------------|------|----|
| 124 | CMB | 6 | 縫合 | 花崗岩 | 160 | 65 | 55 | 430 | 1 縫合。 | | |
| 125 | CMB | 8 | 縫合 | 花崗岩 | 124 | 62 | 44 | 740 | 縫合に1縫合。 | 21-5 | |
| 126 | CMB | 2 | 縫合 | 花崗岩 | 98 | 77 | 56 | 540 | 1 縫合。 | 21-2 | |
| 127 | CMB | 5 | 縫合 | 花崗岩 | 120 | 64 | 45 | 630 | 1 縫合。1 マウル。 | 21-3 | |
| 128 | CMB | 2 | 縫合 | 花崗岩 | 108 | 67 | 31 | 240 | 2 縫合。 | 21-7 | |
| 129 | CMB | 3 | 縫合 | 花崗岩 | 153 | 37 | 30 | 230 | 2 縫合。縫合底。 | 21-5 | |
| 130 | CMB | 3 | 縫合 | 花崗岩 | 141 | 70 | 55 | 340 | 2 縫合。 | 21-6 | |
| 131 | CMB | 3 | 縫合 | 花崗岩 | 130 | 107 | 66 | 1,040 | 縫合に縫合底あり。 | | |
| 132 | CMB | 4 | 縫合 | 花崗岩 | 107 | 72 | 71 | 720 | 縫合に縫合底あり。 | | |
| 133 | CMB | 5 | 縫合 | 花崗岩 | 164 | 64 | 49 | 1,000 | 1 縫合。 | | |
| 134 | CMB | 2 | 縫合 | 花崗岩 | 111 | 66 | 59 | 790 | 1 縫合。 | | |
| 135 | CPH | 北へR > 2倍 | 縫合 | 花崗岩 | 85 | 61 | 36 | 240 | 2 縫合。 | 21-1 | |

第88図 構石器 (2) - その他の種



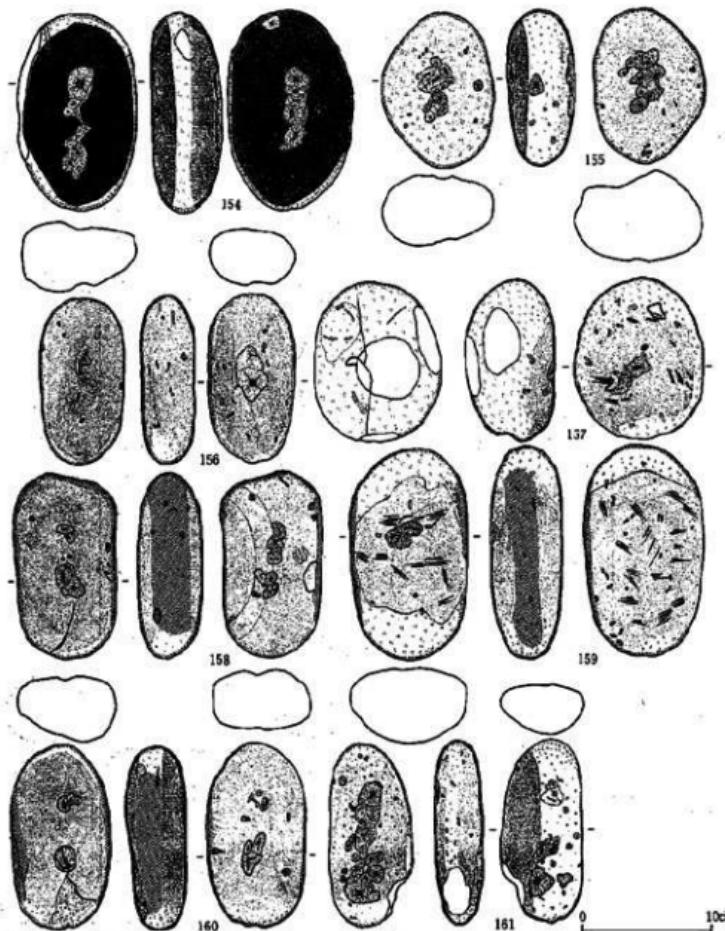
| 番号 | 名 | 層位 | 片 壁 | 石 片 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 備 考 | 年 | 出 所 |
|-----|------|-----|-----|------------|--------|-------|--------|-------|----------------|------|-----|
| 136 | CQH8 | 6 層 | 無 石 | 安山岩 | 1.0 | .70 | .40 | 240 | 1面削(斜面削除)。断面状。 | 20-1 | |
| 137 | CQH9 | 4 层 | 無 石 | 安山岩 | 1.0 | .77 | .40 | 360 | 2面削。 | 20-2 | |
| 138 | CPH9 | 6 层 | 四 石 | 安山岩 | 1.0 | .73 | .40 | 700 | | | |
| 139 | CPH8 | 4 层 | 四 石 | 石英安山岩(弱風化) | 1.0 | .82 | .53 | 280 | | | |
| 140 | COH8 | 4 层 | 四 石 | 石英安山岩(強風化) | 1.0 | .84 | .63 | 360 | | | |
| 141 | CPH8 | 4 层 | 四 石 | 安山岩 | .59 | .51 | .40 | 160 | | 20-1 | |
| 142 | CPH5 | 2 层 | 四 石 | 石英安山岩(弱風化) | .67 | .61 | .38 | 120 | | | |
| 143 | CNH8 | 3 层 | 無石 | 石英安山岩(強風化) | 1.0 | .88 | .40 | 320 | 2面削。 | 20-2 | |
| 144 | COH8 | 5 层 | 無石 | 安山岩 | .79 | .64 | .35 | 160 | 1面削。 | | |

第89図 碓石器(II)-その他の層



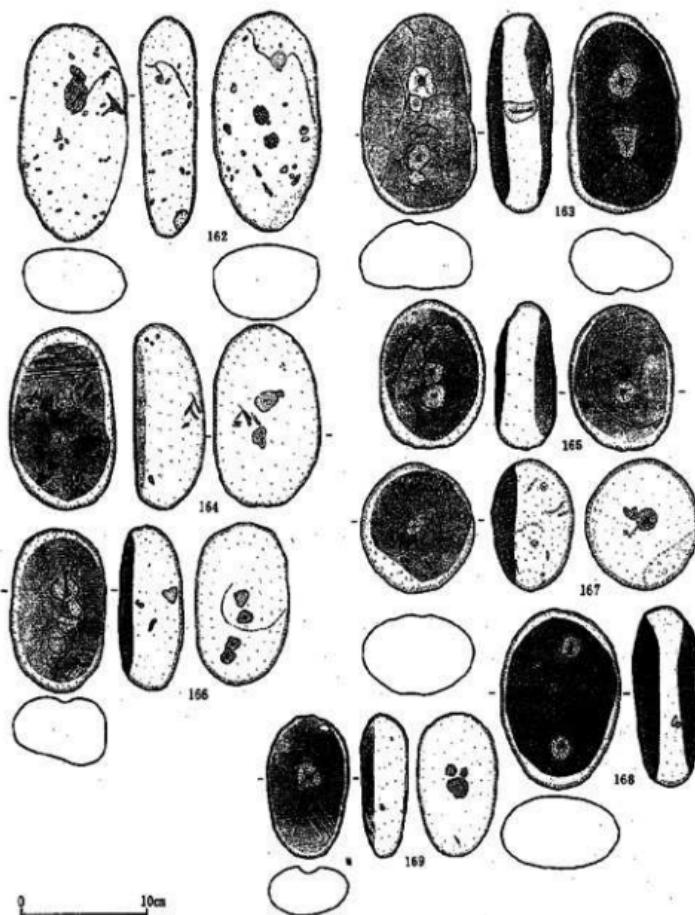
| 番号 | 名 | 層位 | 分類 | 石器 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 備考 |
|-----|---------|----------|-----|-----|--------|-------|--------|------------------------------|
| 145 | CUB | 3 層 | 細石器 | 尖状器 | 254 | 60 | 20 | 645 1面削。 |
| 146 | CL-CM75 | 1 層 | 細石器 | 石片 | 229 | 85 | 29 | 845 2面削。 |
| 147 | COM | 北ベルト 2 層 | 細石器 | 丸棒 | 255 | 76 | 29 | 825 1面削。両端刃部に粗打痕。 |
| 148 | COM | 北ベルト 3 層 | 細石器 | 石片 | 229 | 66 | 41 | 725 1面削。 |
| 149 | COM | 北ベルト 3 層 | 細石器 | 石片 | 93 | 19 | 26 | 650 1面削。 |
| 150 | COM | 1 層 | 細石器 | 石片 | 205 | 53 | 46 | 1,465 全面削。 |
| 151 | CM85 | 北ベルト 4 层 | 細石器 | 石片 | 177 | 56.0 | 47 | 1,465 1面削。 |
| 152 | CL72 | 2 层 | 細石器 | 石片 | 191.0 | 19 | 39 | 1,465 1面削。1 ダラ剥。両端刃部に粗打痕。 |
| 153 | COM | 北ベルト 3 层 | 細石器 | 石片 | 225 | 68 | 39 | 385 2面削。 |

第30図 穏石器 (10-その他の層)



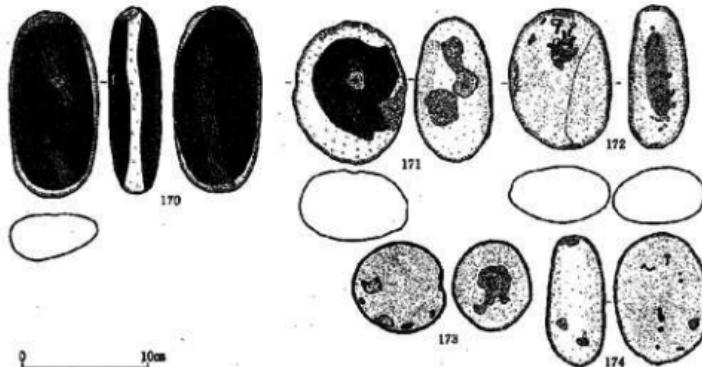
| 番号 | 石 | 層 | 作 | 分 | 種 | 石 | 形 | 直 | 横 | 厚 | 年 | 石 | 石 |
|-----|------|---|---|---|---|-----|----|-----|-----|----|--------|---------------|-------|
| 154 | CL17 | 1 | 層 | 無 | 石 | 玄武岩 | 柱状 | 145 | 95 | 42 | 450 | 2.00M. | 30-5 |
| 155 | CMB4 | 2 | 層 | 無 | 石 | 玄武岩 | 柱状 | 155 | 85 | 35 | 350 | 2.00M. | |
| 156 | CMB4 | 2 | 層 | 無 | 石 | 玄武岩 | 柱状 | 155 | 65 | 41 | 400 | 2.00M. | |
| 157 | CMB4 | 2 | 層 | 無 | 石 | 玄武岩 | 柱状 | 120 | 301 | 55 | 11,000 | 1.00M. | |
| 158 | CMB4 | 2 | 層 | 無 | 石 | 玄武岩 | 柱状 | 120 | 85 | 45 | 750 | 2.00M. 無鉄鉱化帶 | 30-10 |
| 159 | CMB4 | 2 | 層 | 無 | 石 | 玄武岩 | 柱状 | 220 | 24 | 35 | 1,200 | 2.00M. 2.00M. | |
| 160 | CMB4 | 2 | 層 | 無 | 石 | 玄武岩 | 柱状 | 120 | 75 | 44 | 700 | 2.00M. 2.00M. | 30-15 |
| 161 | CMB4 | 2 | 層 | 無 | 石 | 玄武岩 | 柱状 | 120 | 64 | 36 | 600 | 2.00M. | |

第91図 横石器 (9)-その他の層



| 番号 | 名 | 厚さ | 分類 | 石 片 | 石 片 | 石片長 | 石片幅 | 石片厚 | 石器 | 名 | 記載 |
|-----|------|-------|-----|-------|-----|-----|-----|-----|----------------|-------|----|
| 161 | CMB | 2.5mm | 打撲石 | 井山 | 124 | 57 | 47 | 7.0 | 1 種目。 | | |
| 162 | CMB | 5 mm | 打撲石 | 井山 | 145 | 80 | 50 | 7.0 | 2 種目。鋸刃にも凹み有り。 | 20-11 | |
| 163 | CMB | 5 mm | 打撲石 | 白糸河山帶 | 121 | 63 | 55 | 6.0 | 1 種目。 | | |
| 164 | CMB | 5 mm | 打撲石 | 花神 | 124 | 65 | 47 | 6.0 | 1 種目。 | | |
| 165 | CMB | 5 mm | 打撲石 | 井山 | 124 | 77 | 51 | 6.0 | 1 種目。 | | |
| 166 | CMB | 2 mm | 打撲石 | 井山 | 124 | 55 | 39 | 5.0 | 1 種目。 | 20-14 | |
| 167 | CLTS | 1 mm | 打撲石 | 白糸河山帶 | 26 | 55 | 39 | 5.0 | 1 種目。 | 20-13 | |
| 168 | CMB | 2.5mm | 打撲石 | 井山 | 124 | 64 | 50 | 7.0 | 1 種目。 | | |
| 169 | CMB | 5 mm | 打撲石 | 井山 | 122 | 65 | 55 | 6.0 | 1 種目。 | 20-15 | |

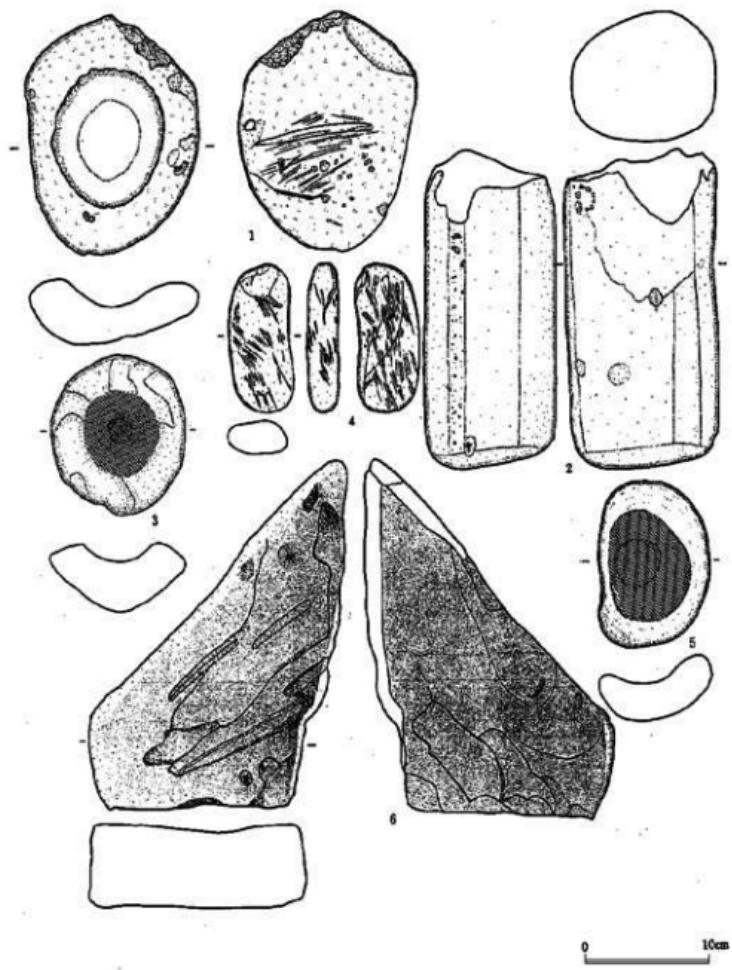
第92図 磨石器 (2) - その他の層



| 番号 | 区 | 形 | 寸 | 分類 | 石 | 厚 | 幅 | 長 | 重 | 記 | 寸 | 分類 |
|-----|------|---------|----|----|----|-----|----|----|-----|-------------------|------|----|
| 170 | C108 | 底へんこトシ型 | 石器 | 石器 | 石器 | 145 | 25 | 37 | 348 | 2面削。表面化。片側外縁に研削痕。 | 23-3 | |
| 171 | C109 | 2 型 | 石器 | 石器 | 石器 | 134 | 26 | 37 | 298 | 2面削。端部に研削等研打痕あり。 | 23-3 | |
| 172 | C112 | 2 型 | 石器 | 石器 | 石器 | 130 | 26 | 45 | 546 | 2面削。表面化。1面端部に研削痕。 | 23-4 | |
| 173 | C113 | 2 型 | 石器 | 石器 | 石器 | 123 | 24 | 33 | 428 | 全面削。底面に研打痕あり。 | 23-5 | |
| 174 | C109 | 4 型 | 石器 | 石器 | 石器 | 163 | 23 | 45 | 538 | 2面削。片側外縁に研削痕あり。 | 23-6 | |

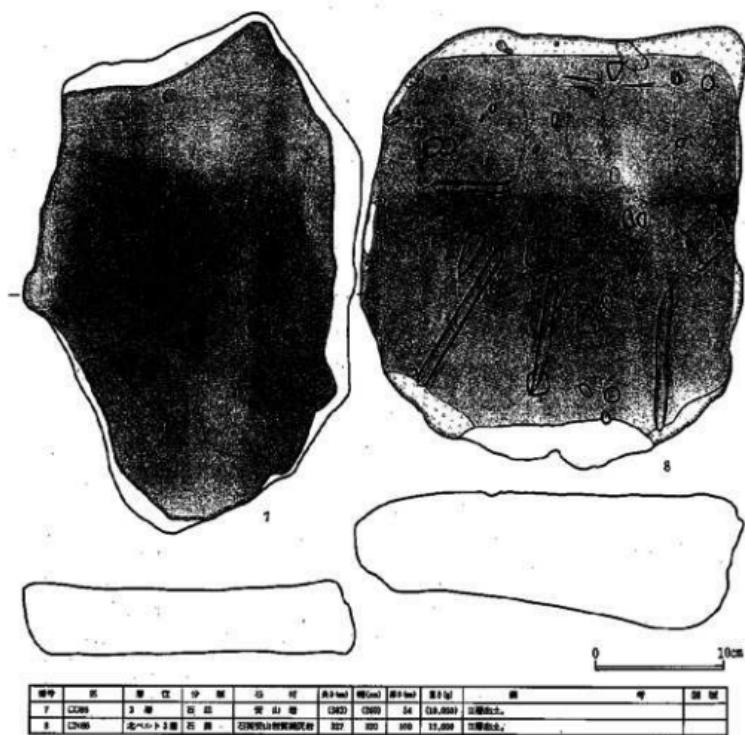
第93図 確石器(20)-その他の器

【石棒、石皿など】(第93図、第94図)。石皿は4点出土しており、3点が破損している(4点図示、第93図1、6、第94図)。裏面に溝状の磨痕を持つもの(1)、表裏に機能面をもつもの(6、9)がある。2は石棒の破片である。4は線条痕をもつ石器で、他の使用痕がみられないため砥石の一種と考えられる。3、5は凹をもつがこれは使用痕ではなく自然面で、その周囲が研磨によって整形されるものである。



| 番号 | 江 | 面 | 名 | 石 | 器 | 地 | 所 | 年 | 代 | 記 |
|----|------|---|-----|---|---|------|-----|-----|----|--------------------------------|
| 1 | CIMH | 北 | ペルト | 火 | 打 | 伊豆諸島 | 756 | 240 | 65 | 940 マテカル。表面に網状凹凸。 |
| 2 | CIMH | 北 | ペルト | 火 | 打 | 伊豆諸島 | 224 | 223 | 56 | 4,900 |
| 3 | CIMH | 4 | ペルト | 火 | 打 | 伊豆諸島 | 129 | 109 | 31 | 400 木板上。表面は磨きにより滑沢。芯は自然のもの。 |
| 4 | CIMH | 1 | ペルト | 火 | 打 | 伊豆諸島 | 120 | 54 | 25 | 200 木板上。 |
| 5 | CIMH | 1 | ペルト | 火 | 打 | 伊豆諸島 | 123 | 51 | 45 | 400 木板上。芯は自然のもの。芯は磨きにより滑沢。 |
| 6 | CIMH | 4 | ペルト | 火 | 打 | 伊豆諸島 | 202 | 180 | 65 | 3,000 木板上。表面に網状凹凸。 |

第94図 磨石器 22—石棒その他



第95図 磚石器 (3)-石皿

| 番号 | 長 | 幅 | 厚 | 石種 | 河川 | 測定者 | 標本 | 重 | 年 | 出 |
|----|-------|-----|-----|---------|-----|------|------|----------------|-------|---|
| 7 | 22.85 | 2.8 | 0.5 | 田代 | 安山岩 | EMD | CB99 | 34 (18.000) | 正徳12. | |
| 8 | 27.95 | 2.8 | 0.5 | 北ベントナイト | 五島 | CB99 | CB99 | 15.000 | 正徳12. | |

III. 考察

1. 分類と組成

東側遺物包含層出土石器の分類は原則として遺構出土石器の分類（本書所収「小梁川遺跡縄文時代遺構編一II」参照）に従って行い、必要に応じて細分項目を追加する方法をとった。表2には剥片石器の分類基準と追加した細分類型の分類基準とを示したが、大きな変更点はないため、以下には主として遺物包含層各層における各器種の変化を組成の点から述べ、必要な器種についてのみ分類の内容に触れることにする。また礫石器は後述のように使用痕の組み合わせによって分類し、特に細分は行わなかった。

〈石 織〉 石織はV～I層で48点出土しているがI類（凹基）が主体で、他にはII類（平基）が「その他の層」から1点出土しているにすぎない。I類の全体的な特徴としては、①重量は0.1～3.0gの間にあって、3.0g未溝のものがない・小型尖頭器とは明確に区別される。②長幅分布をみると（表4）、小形品（長さ13～17mm、幅9～13mm）と中・大形品（長さ19～31mm、幅13～23mm）に分けられる、という2点があげられる。細分類型にはIA1・IA2・IA3・IB1・IB2・IC2の6類型があり、これらの特徴を長幅分布（表4）・[抉り部の長さ（奥行き）／抉り部の幅] × 100で表される、基部の抉り度数（表3、伊藤・須田；1987）・長幅厚相関（長さ・幅・厚さの総和に対する長さ・幅・厚さ各点の比率－復元推定値も併用。表5）の3点から検討する以下のようにまとめられる。

IA1類：小形品と中形品があり前者は寸詰りの幅広で薄手、後者はやや細身で厚手である。

また前者は出土資料中最も小形な一群を構成する。抜り度数は6～36である。

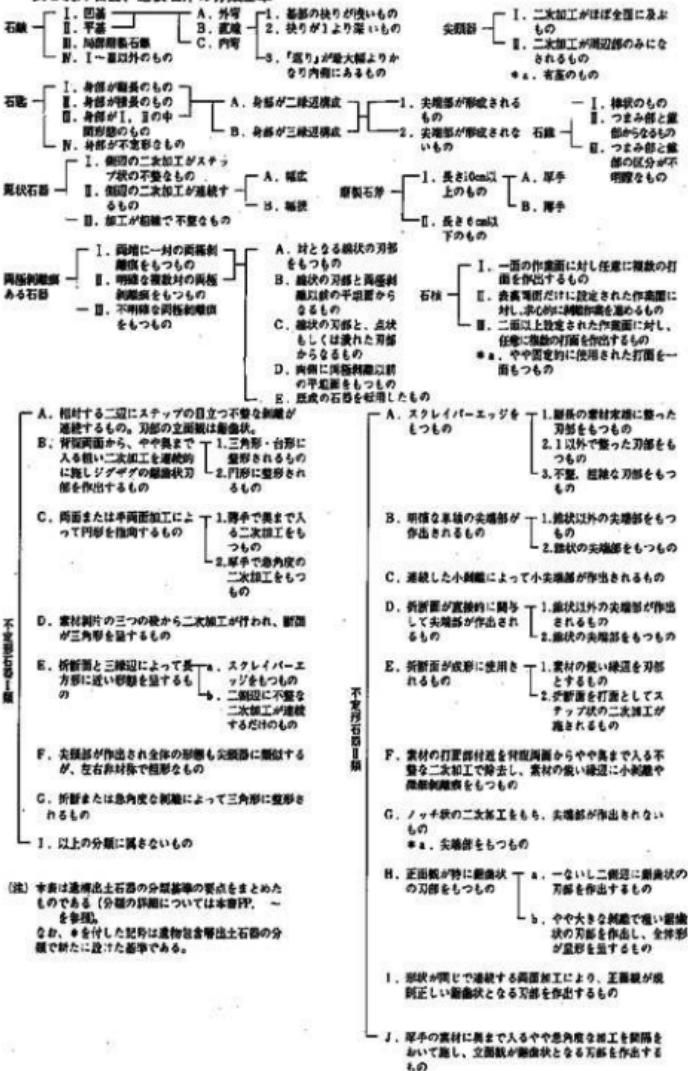
IA2類：中形品と大形品がある。IA1類と同様の長幅相関をもつものの外に、より細身なものがあるが厚さは薄手とやや厚手の中間にある。抉り度数は39～65でIA1類とは明確に区別される。

IA3類：大形品に属するが、幅は前記二類型より広い。薄手のものと、薄手・やや厚手の中間のものがあり、抉り度数は復元推定値も含め55～66と深い。

IB1類：中形品に属する。長幅厚相関では幅狭で細身な一群を構成する。厚さは薄手・やや厚手の中間にあり、抉り度数は25～35と浅い。

IB2類：大形である。長幅厚相関では寸詰りで幅広・極めて細身で幅狭の二種類がある。厚さはIB1類と同様で、抉り度数は47・60と深い。なお「その他の層」出土品には側辺が脚部末端付近で屈曲するものがあり（第8図64～65）、本類型は細分される可能性がある。

表2 刃片石器、磨製石斧の分類基準



IC2類；大形品に属するが長幅厚相間からみると寸詰りで幅広である。厚さはIB1・IB2類と同様で、抉り度数は58と深い。

次に各類型の組成比を層毎にみると、本遺跡に特徴的な、基部の抉りが深い中・大形品のIA2類はV・III・II層では組成の主体を占め各々石鏽組成の50~60%に達しているが、I層で33%と減少する。IA1類はV層では少ないがIII~I層では33%前後の安定した組成比を保つ。またIB1類はIV層を除く各層に少数ずつある。従つて、石鏽はV・III・II層で主体にあったIA2類が減少し、A類の組成が均質化するI層に組成上の変化を見出しうとができる。

大きさについてみると長幅分布に小形品と中・大形品の二つのまとまりがあることを先に指摘したが、このまとまりはIV層を除く各層を通じてあるため、大きさには時期による変化はないと考えられる。

二次加工と素材の変形度の関係には素材面が広く残るものと、ほとんど残らないもの（全く残らないものを含む）との二種類があり、石鏽全体では前者は56%（27点）、後者は44%（21点）である。これを各層ごとにみるとV・III・II層では前者が50~56%で僅かに多い状況のまま推移してい

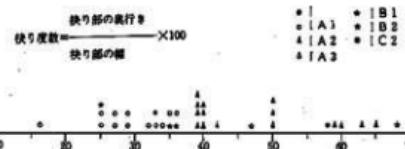


表3 石鏽の抉り度数分布

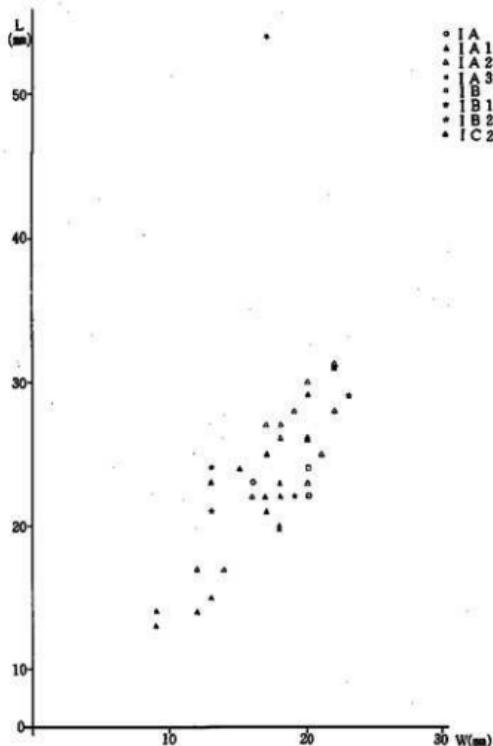


表4 石鏽の長幅分布

る。I層では前者が83%（5点）、後者が7%（1点）となるが、点数も少ないため実際の変化を反映するものかどうかは疑問がある。

素材に対する尖頭部の作出位置がわかる資料は30点あり、素材末端側にあるものが40%（12点）、素材の打面側、縁辺側にあるものが各々30%（9点）である。素材末端側に尖頭部を作出するものはIII～I層にあり、V層にはみられない。各類型ごとにみると、

I B類はすべて素材の縁辺側に尖頭部を作出し、IA類は素材末端側に作出すものがやや多いという傾向が認められる。IA類は前述の通り1～3類で大きさ、厚さに違いがあるが、尖頭部の作出位置との間に特に相関関係は認められない。

〈石錐〉 V～I層で30点出土している。長幅分布（表4）を層毎にみるとIII層出土品は小形品と大形品に分かれると、II・I層出土品は大きさにばらつきがあり特にI層でそれが目立ってくる。類型別組成を全体的にみるとII類が80%（24点）で組成の中心を占め、I類が16.6%（5点）、III類が3.4%（1点）となる。出土点数の少ないV層と該当資料のないIV層を除く各層の組成比もII類が8割以上を占めるため、石錐組成はIII～I層ではII類が組成の主体で変化なく推移しているといえる。

II類のうちで素材に対する錐部の作出位置がわかる資料は22点あり、素材末端側に錐部を作出するものが59%（13点）で最も多く、次いで素材の縁辺部に作出すものが22.7%（5点）となるが、層による錐部作出位置の変化は見出せない。また二次加工の及ぶ範囲をII類についてみると、錐部を中心とする二次加工のものと錐部の他につまみ部にも二次加工がなされるものとの二種類があり、I層では後者が87.5%に達している。これはI層の石錐につまみ部の大形なものが多いことと関係すると思われる。

〈石匙〉 V～I層で36点出土している。長幅分布をみるとばらつきがやや大きいが（表4）、層

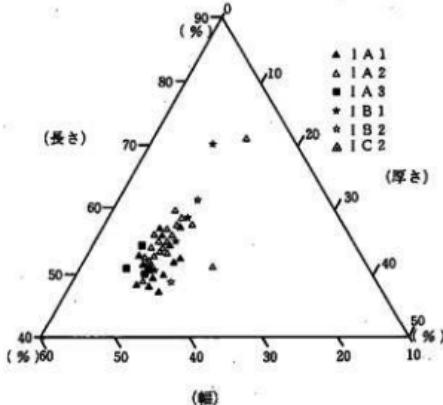


表5 石錐の長幅厚相関

毎にみるとV層には中形品が多いが、III・II層では大小に分かれ小形品に幅広のものがみられる。またI層には中形品の他に、出土品中最大のものが含まれている。

類型別の組成を全体的にみると、IA1類とIB2類が各点25%(9点)、次いでIA2類が16.7%(6点)、IB1、IIIB2類が各々11.2%(4点)、IIA2、IIB2類が各点5.6%（2点）で身部が縦長のI類が形成の主体を占める。層毎の組成比をみるといずれもI類が主体だが、V層は尖端部が作出されないものだけで構成されるのに対し、III層は尖端部が作出されるものとされないものがほぼ同率、II層では尖端部が作出されないものが石匙組成の8割に達し、I層で再び尖端部を作出するものが6割と多くなる。このように層毎の変化は大きいが、各類型の出土量は多いもので5点という状況であるため、縦長のものが主体である点を指摘するにとどめる。

二次加工はいずれも周辺部加工が主で、素材面がほとんど残されないものや両面加工に近いものは少なく、II・I層では認められない。刃部の加工状況を身部が二線辺構成のもの（A類）と三線辺構成のもの（B類）についてみると、A類では二側辺が両面加工されるものが80%(12

点)、一側辺のみ両面加工されるものが20%(3点)、B類では一側辺が両面加工されるものが55.5%(10点)、二側辺が両面加工されるものが28%(5点)で、两者ともV～I層を通じて両面加工の刃部が多いことが特徴である。

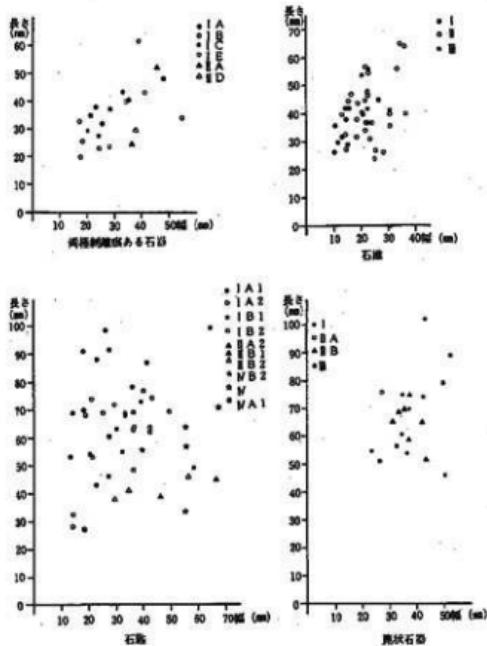


表6 両側刻離痕ある石器・石錐・石匙・範状石器の長幅分布

〈範状石器〉 V～I層で12点出土している。側辺の二次加工形状を基準にI、IIA、IIIB、III類に細分されており（表2）、長幅分布（表4）では各類型ともやや小形なものと大形なものに分けられる。IIA類とIIB類は幅30mmを境に区別されるが、後者はさらに幅40mm付近で幅広と幅狭に分けられる。

層毎にみた場合の大きさの変化はほとんどなく、形態は短冊形のものが主流を占めている。類型別組成比はII B類が66.6%（8点）で最も多いため、他類型の出土数が少ないので層毎の組成の変化は不明である。

二次加工と素材の変形度との関係をみると、I、II B類は素材面が片面ないし表裏にやや広く残されている。加工の粗雑なIII類では素材の背面構成が多く残るものがあるが、これは他類型に比べ厚手なことと関係すると思われる。また刃部の作出位置はほとんどが素材の末端側である。刃部の加工状態はIII類以外は両面加工が主体で、層による大きな変化は認められない。

〈石核〉 V～I層で12点出土している。作業面の数と形態によってI～III類に分類されるが（表2）、東側遺物包含層出土品を検討した結果、II類とIII類にやや固定的に使用されたと考えられる平坦な打面を一面持つものが認められたので、これをa類としII類、III類の細分類型として追加した。上記の打面には、打面調整がなされるもの（第60図6、第67図26）の他に粗削面（第67図28）や節理面（第64図19）を利用したものがあり、それらを打面とする作業面が二面以上設定されている。なお、この固定的な打面からの剥片剥離は他の打面から行なわれる剥離より新しい例が多いが、剥片剥離作業のありかたはII類、III類とほぼ同様で、形態上の違いもそれぞれ平坦面を一面持つ点だけである。

全体の組成はII類とIII類が主体であり、他には上記のIIa類とIIIa類が1点ずつあるにすぎず、I類は時期のわかる資料中には含まれていない。各層毎にこれをみても、II類、III類はIV層を除く各層にあって量的な変化は示さない。

長幅分布では（表7）、小・中・大の三種類がI類とIIIa類を除く各類型にある。これは作業面の数が多くなるに従ってその大きさもI～III類の順に小形化してゆく例（会田・山田他

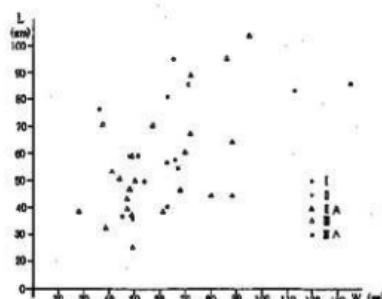


表7 石核の長幅分布

1986）とは合致しないが、II類、IIa類、III類のうち原石（礫）が素材でその本来の大きさがほとんど変わっていないと思われる資料（第60図5、第61図9、第66図25、第67図28、第68図29・30）の長幅分布も小・中・大に分かれている点から考えると、本遺跡における石核各類型の大きさの違いは作業面数の増加よりも、むしろもともとの素材の大きさの違いとの関係が深い可能性がある。しかし当然のことながら、個々の類型における小・中・大の大きさの変化が作業の進行度の違いによること

は明らかである。

素材を類型毎にみると I 類は剥片素材のものが 1 点あるのみで、他の各種類は原石または粗割り片が主体である（自然面が残る資料を除き、原石か粗割り片かを識別できる資料はなかつたため両者を一括して上のように表現した）。

〈両極剥離痕ある石器〉 V～I 層で 15 点出土している。IA 類、IB 類が各層で出土しているが、他類型の出土量が少なく組成上の変遷は不明である。

〈不定形石器〉 V～I 層で 174 点出土している。遺物包含層において追加した細分類型として II Ga 類（ノッチ状の二次加工を持ち尖端部が作出されるもの。第42図85、第55図168）があるが、これには石鍛の転用品が含まれる（第42図85）。他類型の分類に関しては遺構出土品の分析結果に追加すべき点はほとんどないので、以下で述べる II A 類以外についてはここでは触れない（pp. 741～747 参照）。

II A 類は後述の通り各層の不定形石器組成の中心を占めるもので、刃部形態により A 1～A 3 類に細分される（表2）。全体の長幅分布は大・小に分かれ（表9）、他類型と異なって大きさにまとまりをもつことがわかる。A 2 類と A 3 類が V～I 層出土の II A 類中 82% (32 点) を占めるが、A 1 類と大きく異なる点としてスクレイバーエッジの精粗以外に、刃部の作出位置が素材の側辺を主体とし丸凸刃が少ないと、他の機能部（尖端部、鋸歯状の刃部、不規則な交互剥離状の刃部など）をあわせもつ点があげられる。各類型の組成比の層毎の変化等は不明である。

次に組成についてみると、各層の組成（点数）は下表の通りで、各層とも II 類（素材の形態を大きく変えない部分的な二次加工のもの）が 8 割以上を占めている。

全体の組成では II A 類が最も多く 22.4%、次いで III 類が 21.8%、II J 類が 13.5% となり、II C 類～II H 類および I 類の各類型は 2～5.7% と低い。層毎にみても組成の主体を占めているのは II A 類で各層の不定形石器中 20～31% を占めており、次いで II I 類が 11～31%、II J 類

が 12～18% である。この他の各類型

| | IA | IB | IC | IF | DA | DB | EC | HD | HF | EG | HH | EI | HJ |
|------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| V層 | 1 | 0 | 6 | 6 | 5 | 2 | 0 | 0 | 2 | 1 | 0 | 5 | 0 |
| IV層 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 3 | 0 |
| III層 | 4 | 2 | 2 | 2 | 12 | 1 | 5 | 1 | 2 | 1 | 2 | 6 | 10 |
| II層 | 1 | 1 | 1 | 1 | 9 | 2 | 0 | 6 | 2 | 2 | 1 | 10 | 7 |
| I層 | 1 | 0 | 2 | 6 | 13 | 5 | 5 | 1 | 2 | 5 | 1 | 14 | 7 |

表8 不定形石器組成表

はいずれも III～I 層では少数にとどまる。出土量の少ない類型が多いいため、層毎の組成の変化は細かく検討できないが、V 層と III～I 層を比較した場合には後者の各層における不定形石器の比率の増加がますます指摘で

きる（表11）。これは組成比の低いI類やII G類などの多くの類型が出現するため、II A類、II I類はV層～I層で一貫して不定形石器組成の中心を占めている。従ってV層とIII～I層における不定形石器組成の変遷は、II A類、II I類からなる安定的な組成に多くの類型が少しづつ加わるという、組成の多様化としてとらえることができる。

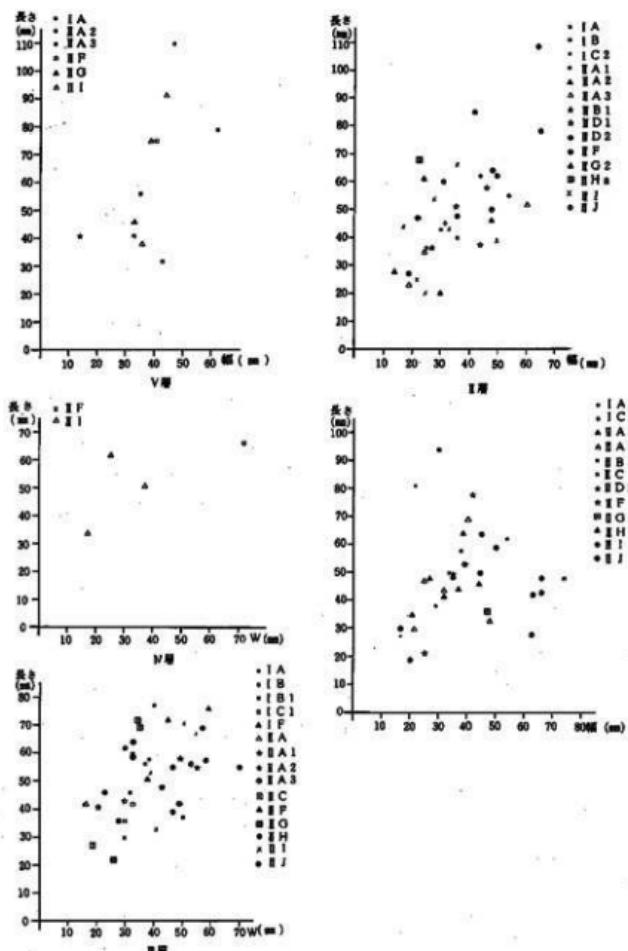


表9 不定形石器の長幅分布

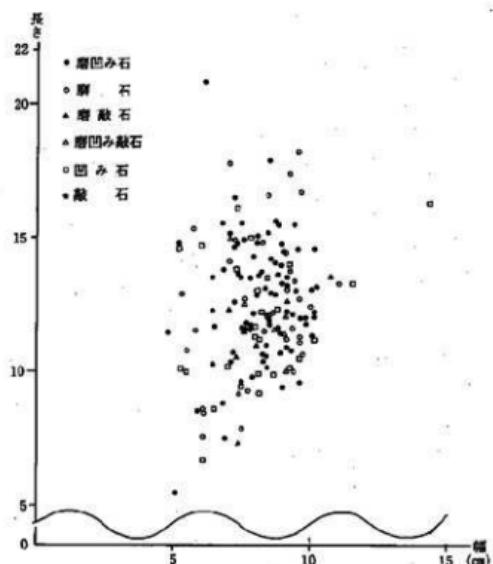


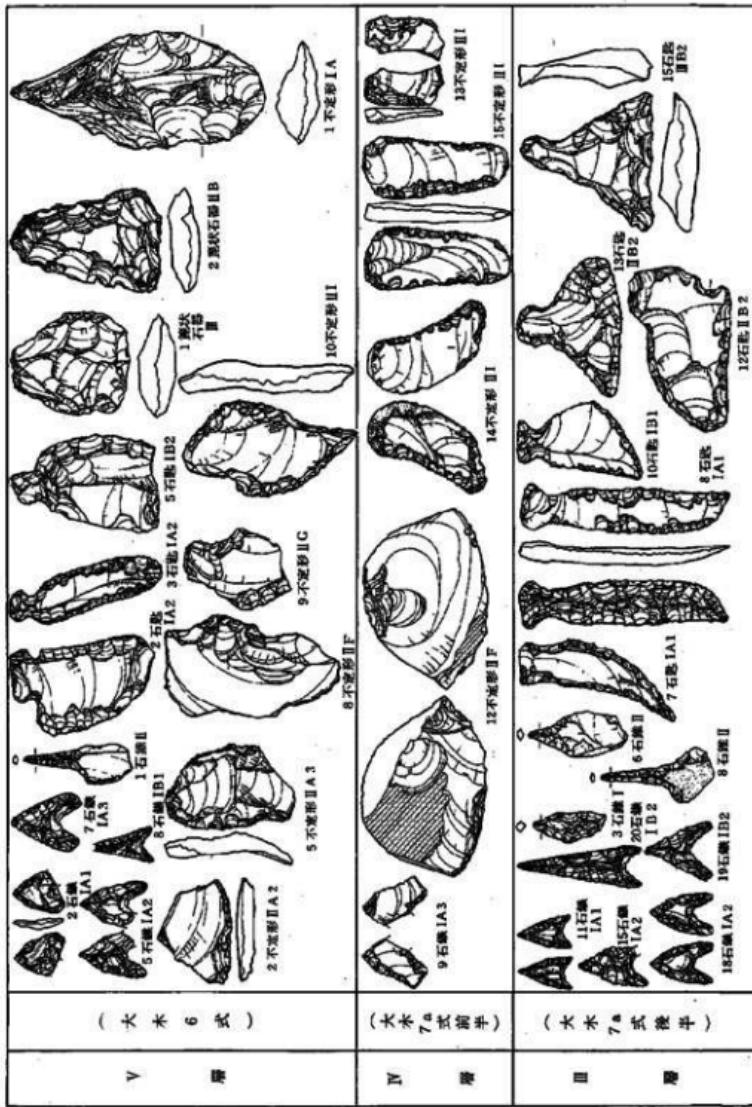
表10 磨石類の長幅分布

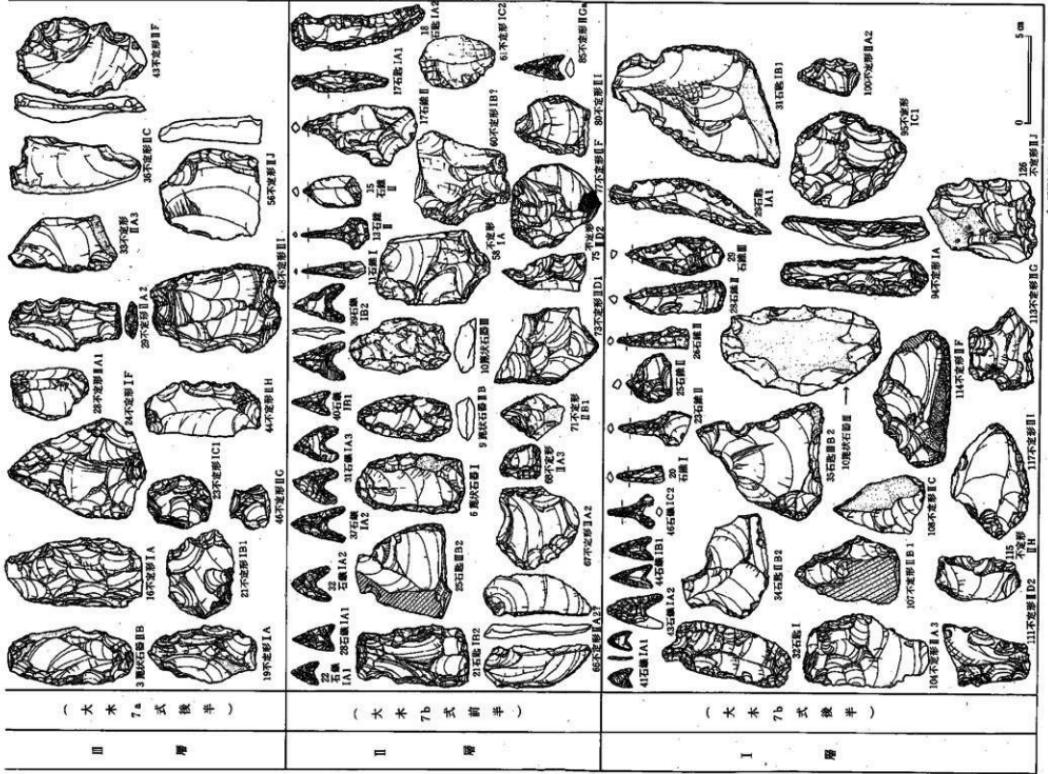
〈磨石類〉 V～I層で231点出土している。長幅分布(表10)では小形・大形に分かれる傾向があり、図示しなかつたが厚幅分布では厚幅比1.3付近、1.4～1.6、1.6～1.8、2.3～2.5という4つのまとまりを持つ。

分類は主として磨面、凹、敲打痕の三種類の使用痕の組み合わせにより行っているが、磨面には「ザラ面」(pp. 747～748 参照)が含まれている。これは前記三種類の使用痕と異なり単独で存在することはなく、磨面、凹と結び付いて認められ、特に磨凹石の側面に多くみられる。

次に凹石と磨凹石の凹の深さをみると(表11)、1～3mmが多く4mm以上の深さのものは少ない傾向を示している。凹の平面形には直径7～15mmの円形状(A)、直径2～5mmの小さな円形状(B)、幅3～5mmの溝状(C)の三種類があり、(A)は深さ4～10mmに達するものもあるのに対し、(B)、(C)は深さ4mm以下のものがほとんどを占めるという特徴を持つ。

全体の類型別組成は磨石、磨凹石が各点40%以上と主体を占めており、凹石がこれに次いでいるが敲石、磨凹敲石は極めて少ない。V層・III～I層の組成比も同様で磨石と磨凹石が一貫して主体を占め、変化は認められない。





卷之三

Glossary

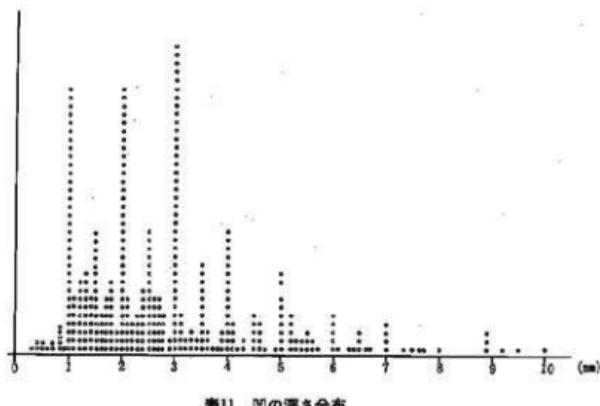


表11 凹の深さ分布

〈小 結〉

遺物包含層における石器の変遷は以下の通りにまとめられる。

1. 定形石器のうちで変化が認められたのは、I層における石鏃、石錐である。石鏃には組成の主体を占めていた、基部の抉りが深い中・大形品（IA2類）の減少、石錐には大きさのばらつきが生じている。
2. 不定形石器には、III層において組成の多様化（組成比の低い類型が新たに多く出現する）が認められる。但し各層の組成の主体は一貫してIIA類である。
3. 碓石器のうち磨石類は、各層とも磨石・磨凹石主体で組成に変化は認められない。

2. 各層における石器組成

遺物包含層各層の石器組成の実数を表12に、組成比を表13に示した（表中の「剥片類」は二次加工ある剥片を示す）。表13の右表は定形石器（石核を除く）の器種別組成比と不定形石器I・II類の組成比を層毎に示している。また第96図には各層出土の剥片石器を抄録した。

全石器組成に対する定形石器（両極剥離痕ある石器を含む）、不定形石器、磨石類を主体とする碓石器の組成比（いずれも出土量が極めて少ないIV層は除外する）は、定形石器が15~19.5%、不定形石器が14.3~26.9%、碓石器が22~29.5%で、石核は1.6~3.8%である。全体としては、特に突出した高比率のものがないことが特徴である。

IV層を除く各層の組成を比較するとV層からIII~I層で定形石器の比率が低下し、逆に不定形石器の比率が上昇しているが、これは前述したIII層以降における不定形石器の組成の多

様化を反映している。定形石器の組成比低下をもたらしているのも、前述の通り主として石鏃の減少であり、V層において定形石器組成の主体であった石鏃はI層では2.8%となり、主体は石錐と石匙に移っている。

近隣地域で同時期の資料を出土している遺跡としては、川崎町中ノ内A遺跡(古川他; 1987)がある。本遺跡の第III群、第IV群土器と併行関係にある土器群が遺物包含層から出土しており、これらに伴う石器が計214点出土している。その組成は定形石器(両極剥離痕ある石器、磨製石斧を含める)が27.4%(57点)、不定形石器(スクレーパー、ノッチを含める)が13.9%(29点)、石核が5.7%(12点)、磨石類(石皿、大形磨石を除く)が48.1%(100点)である。組成上の特徴としては、縄文時代に最も特徴的な石鏃(2.4%)・尖頭器(0.9%)などが多くなく、石錐(3.8%)・石匙(6.3%)・彫刻刀形石器(2.8%)・両極剥離痕ある石器(5.3%)・石核(5.8%)・不定形石器が多いこと、さらに剥片石器に比べて礫石器の出土量が非常に多いことが指摘されている。

次にほぼ同時期の石器群である本遺跡遺物包含層Ⅲ～Ⅱ層出土の石器群の組成を中ノ内A

表12 遺物包含層石器組成表

| 石器 | 尖頭器 | 小形尖頭器 | 石錐 | 石核 | 両極剥離痕 | 両頭器 | 石匙 | 不定形Ⅰ | 平頭器 | 磨削石斧 | 磨石器 | 小計 | 百分率 | |
|----|-----|-------|----|----|-------|-----|----|------|-----|------|-----|-----|-----|-----|
| 下層 | 0 | | | 1 | 6 | 2 | 3 | 3 | 1 | 15 | 3 | 30 | 38 | 112 |
| 中層 | 1 | | | | | | | | 1 | 4 | 1 | 15 | 20 | 29 |
| 上層 | 13 | 6 | 3 | | 8 | 10 | 3 | 8 | 4 | 10 | 45 | 55 | 96 | 250 |
| 合計 | 23 | | | 11 | 11 | 6 | 5 | 6 | 4 | 40 | 1 | 35 | 112 | 300 |
| I層 | 6 | | | 10 | 9 | 3 | 4 | 8 | 2 | 34 | 5 | 66 | 212 | 300 |
| 合計 | 48 | 6 | 3 | 20 | 24 | 12 | 10 | 21 | 19 | 146 | 5 | 221 | 224 | 300 |

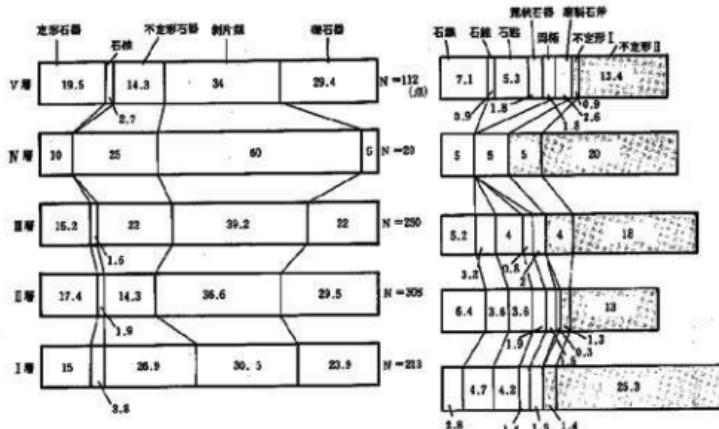


表13 各層における石器組成と定形石器・不定形石器の比率

遺跡出土の石器群と比較すると、本遺跡の定形石器の組成比は不定形石器を下回っている点で中ノ内 A 遺跡と異なり、またその組成も本遺跡では石鏃が主体であること、両極端離痕ある石器（1.6～2%）、石核（1.6～1.9%）の比率が中ノ内 A 遺跡に比べ非常に低いこと等の相違がある。しかし前述の通り、石鏃の減少、石錐、石匙の増加という傾向は V 層・III～I 層を通じて認められ、I 層の定形石器組成は石錐、石匙を主体とするものに変化しており中ノ内 A 遺跡と類似するものになっている。

磨石類は、組成の主体を磨石、磨凹石が占める点では共通するが、石器群に占めるその比率は中ノ内 A 遺跡に比べ非常に少ないという差異があり、定形石器の組成と異なり I 層に至ってもその差に変化はない。不定形石器は、II A 類に相当する器種が中ノ内 A 遺跡にも認められる（中ノ内 A 遺跡では定形石器に分類されている）等の類似点があるが、他の類型についての比較は不可能で、本遺跡の不定形石器組成が中ノ内 A 遺跡より高い点を指摘できるにとどまる。

両遺跡は距離にして 25 km 程度の位置関係にあり、立地条件にも大きな差異はないにも関わらず、石器の組成にはこのような相違点が認められる。これはフ拉斯コ状土壇の有無（中ノ内 A 遺跡では検出されていないのに対し、本遺跡では多く検出されている。）といった遺跡の構成や規模の相違にも起因すると思われるが、山麓丘陵部という同一の地域にあってもその生業活動には差があることを示すものといえよう。また一方では磨石、磨凹石を主体とする礫石器のありかたや、定形石器組成における石鏃の減少、石錐、石匙の増加傾向といった類似点も見出されたが、これは上記の地域における、縄文時代中期前葉の石器群の特徴のひとつを示すものと考えられる。

IV. まとめ

1. 小梁川遺跡東側遺物包含層では、縄文時代前期末葉（大木 6 式期）から中期前葉（大木 7b 式期）の石器群が V～I 層から層位的なまとまりを持って出土した。
2. これらの石器群は、石鏃、石錐、石匙等の定形石器と、スクレイバーエッジ等を持つ不定形石器、石核、磨石等の礫石器で構成される。
3. 各層の石器のうち石鏃は I 層において、基部の抉りが深い特徴的な大形品が減少している。また石錐は大きさのばらつきが大きくなっている。不定形石器はスクレイバーエッジを持つ II A 類が一貫して組成の主体を占めるが、III 層において組成比の低い類型が新たに出現し、組成の多様化が認められる。なお礫石器の主体は、一貫して磨石と磨凹石が占めている。
4. 各層の石器群は、不定形石器と礫石器の比率がやや高いが、全体としては特に高比率のものがない点に特徴があり、V 層（大木 6 式期）から III～I 層（大木 7a～7b 式期）にかけて定

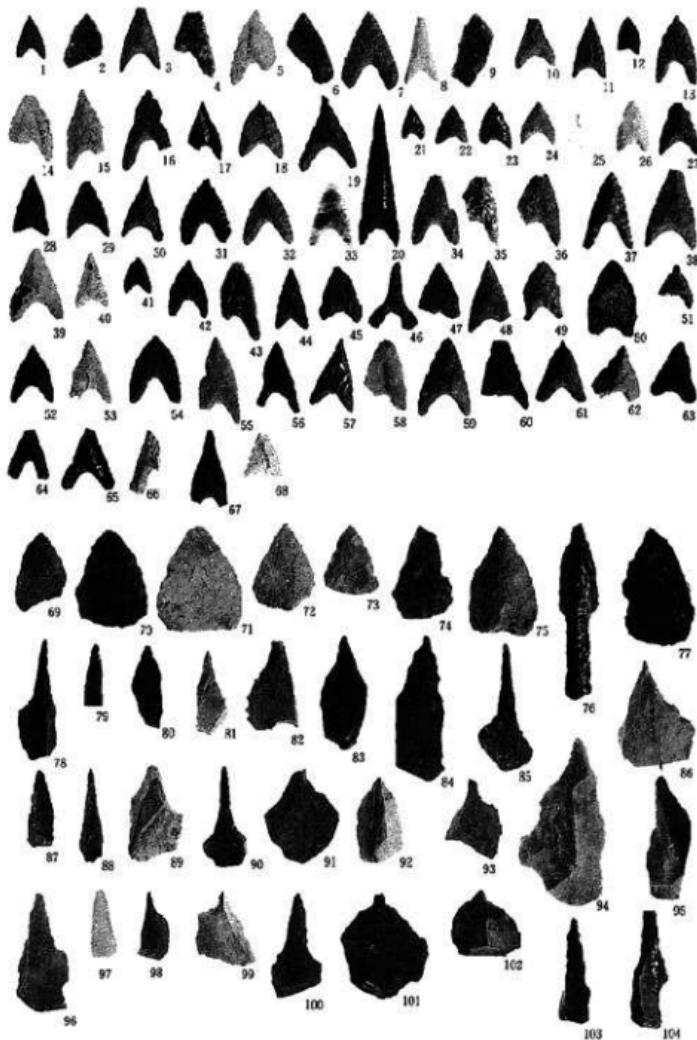
形石器の比率の低下と、不定形石器の比率の上昇が認められる。またⅠ層では、定形石器組成の主体が、石鏃から石錐、石匙に変化していることがわかる。

5. Ⅲ～Ⅱ層の石器群と、これと同一時期に属する中ノ内A遺跡の石器群とを比較すると、石鏃の減少、石錐、石匙の増加傾向と、磨石、磨凹石を主体とする礫石器組成の点では共通しており、山麓丘陵部に立地する縄文時代中期前葉の遺跡の石器群の特徴のひとつを示すと考えられる。また他の器種における組成比等の相違は、両遺跡の構成の相違や生業活動の差を示すことが推定できよう。

引用・参考文献（五十音順）

- 会田進・山田晃弘他（1986）；「梨久保遺跡（本編）」『郷土の文化財』15 長野県岡谷市教育委員会
相原淳一他（1986）；「小梁川遺跡遺物包含層土器編—七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書II」『宮城
県文化財調査報告書』 117
- 伊藤裕・須田良平（1987）；「中ノ内B遺跡—東北横断自動車道遺跡調査報告書II」『宮城県文化財調
査報告書』 121
- 古川一明他（1987）；「中ノ内A遺跡—東北横断自動車道遺跡調査報告書II」『宮城県文化財調査報告
書』 121
- 真山悟他（1987）；「小梁川遺跡—七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書III」『宮城県文化財調査報告
書』 122

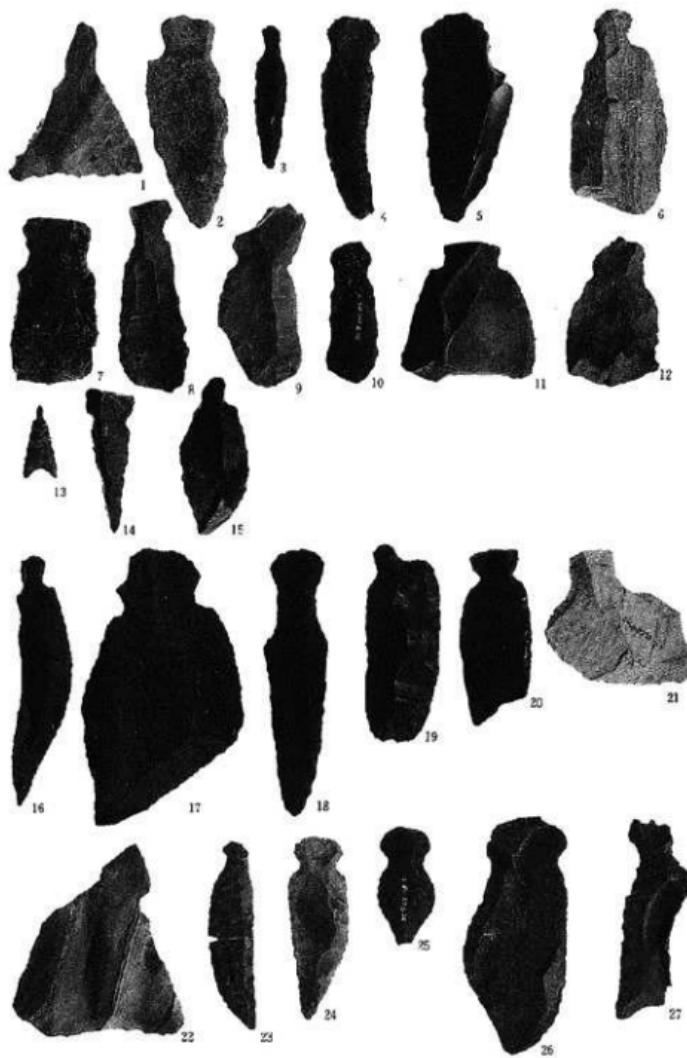
V. 写 真 図 版



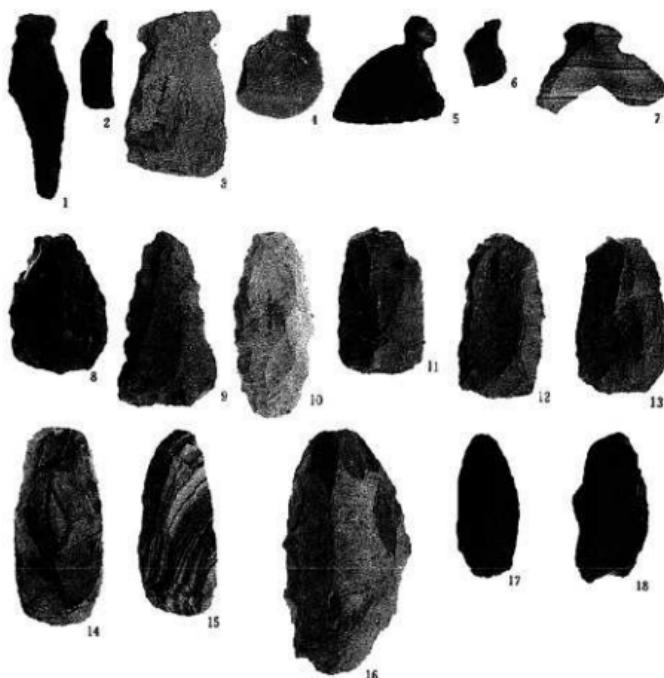
写真図版1 石鏃・尖頭器・小型尖頭器・石錐



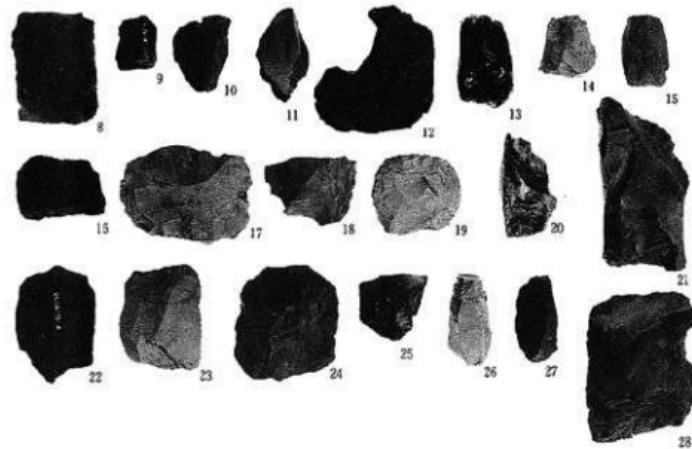
写真図版2 石錐・石匙



写真図版3 石 鮋



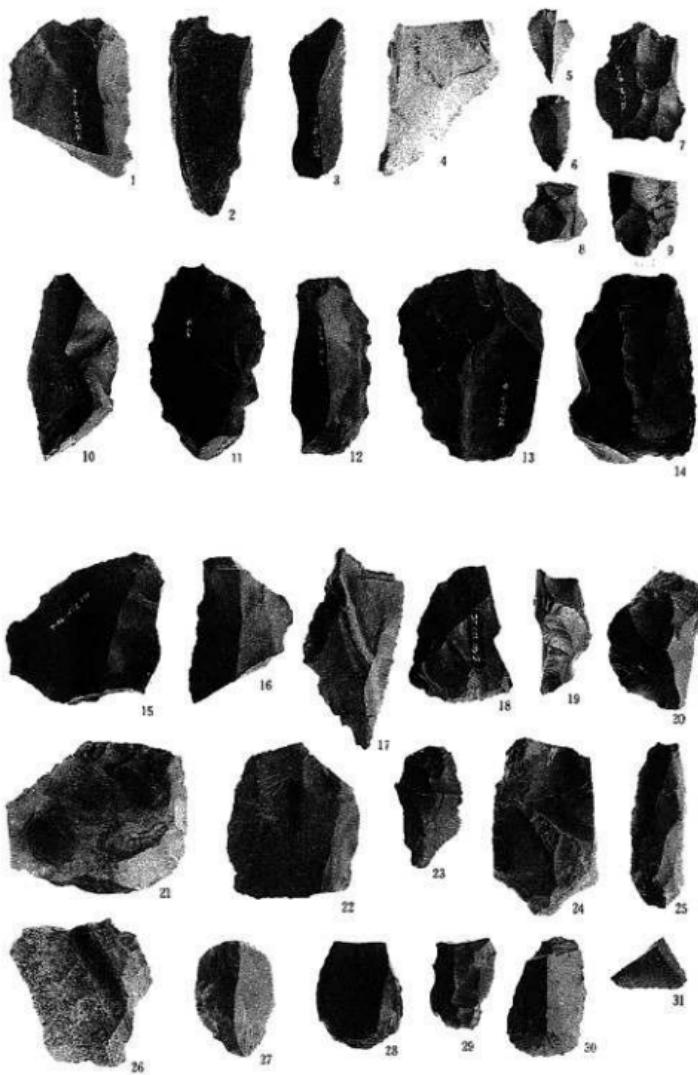
写真図版4 石些・箒状石器



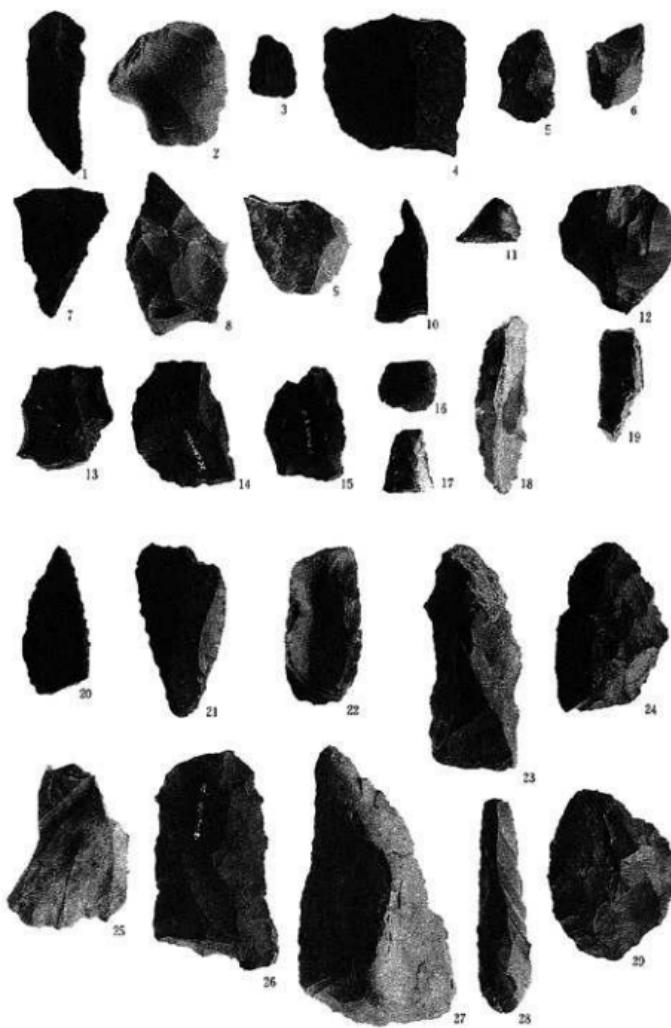
写真図版5 葫芦状石器・両極削離痕ある石器



写真図版6 不定形石器



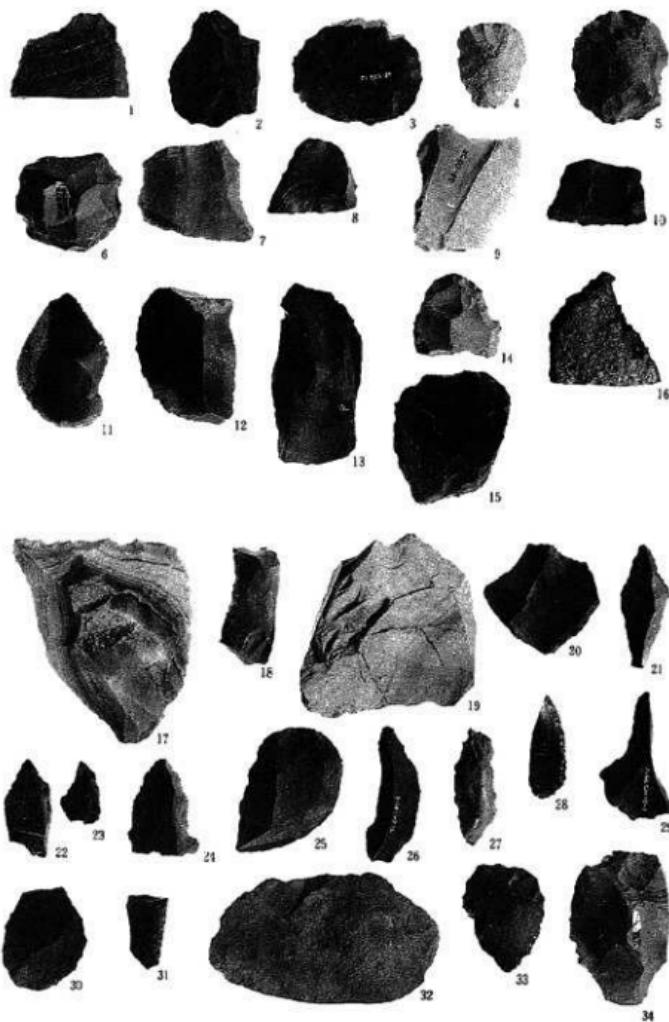
写真図版 7 不定形石器



写真図版 8 不定形石器



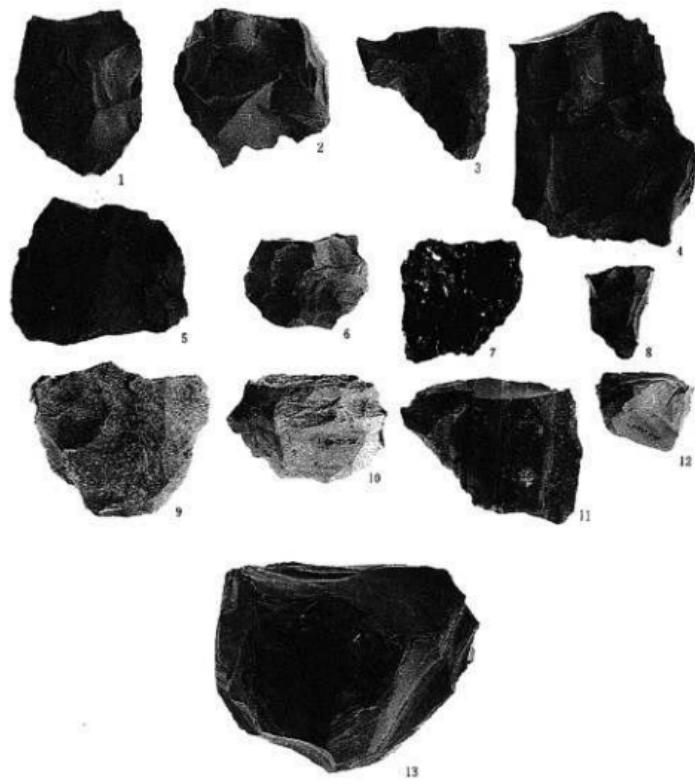
写真図版9 不定形石器



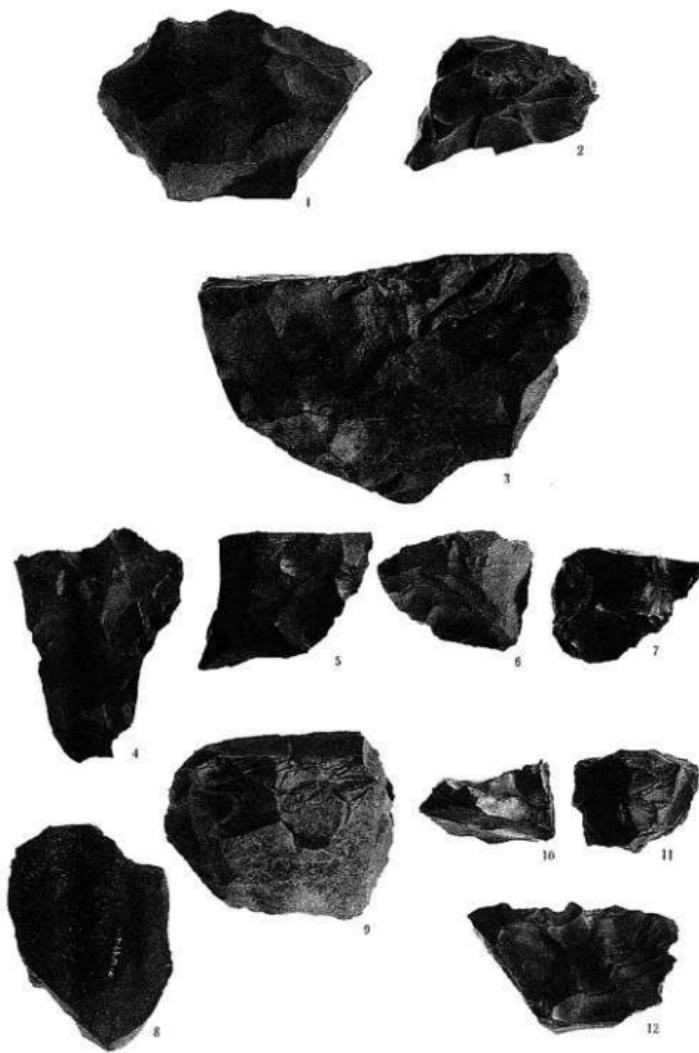
写真図版10 不定形石器



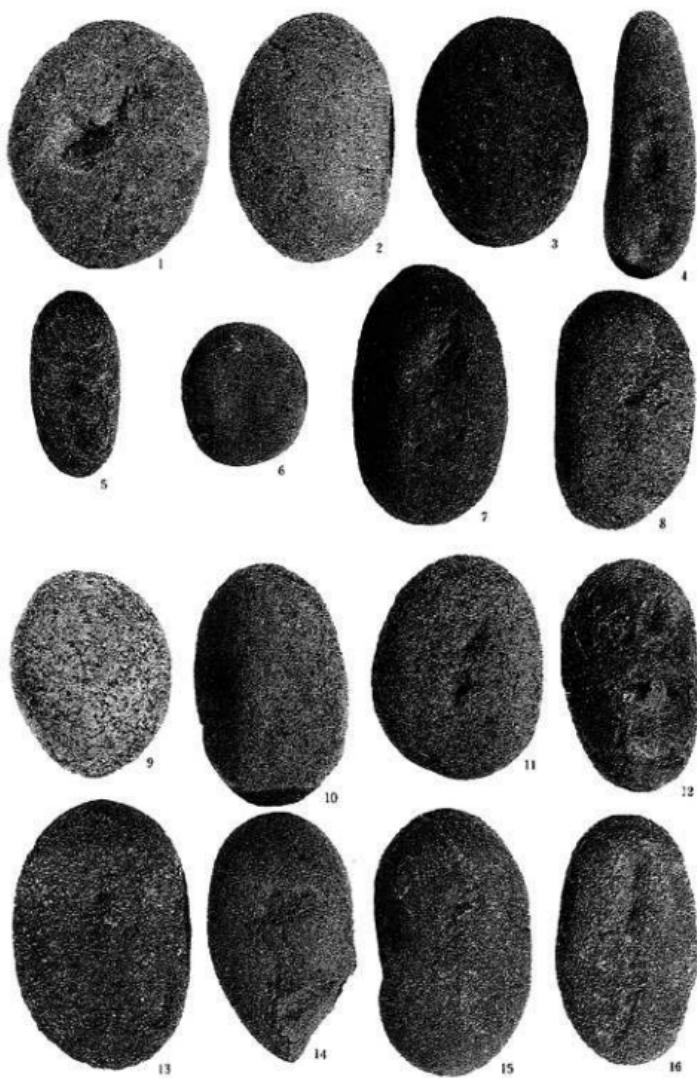
写真図版11 不定形石器



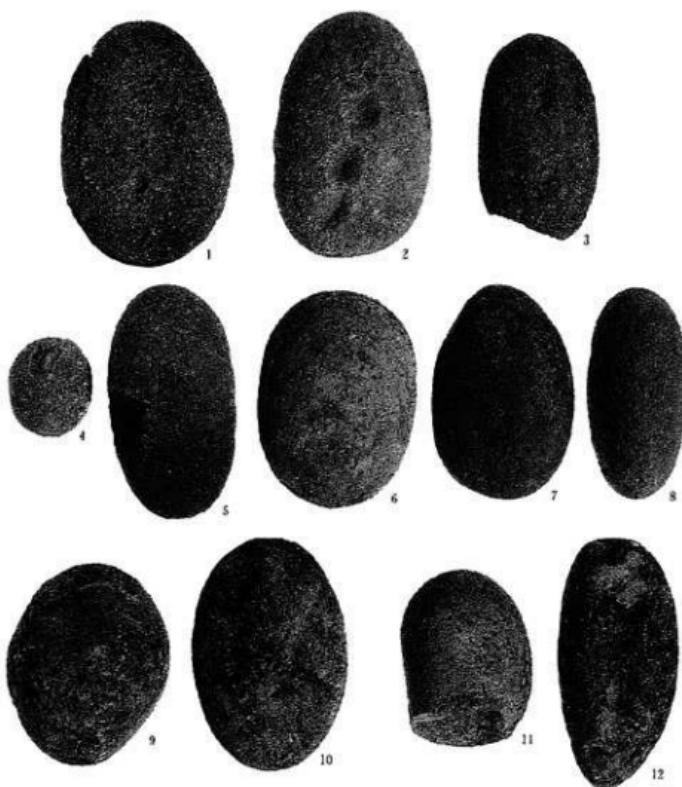
写真図版12 石 核



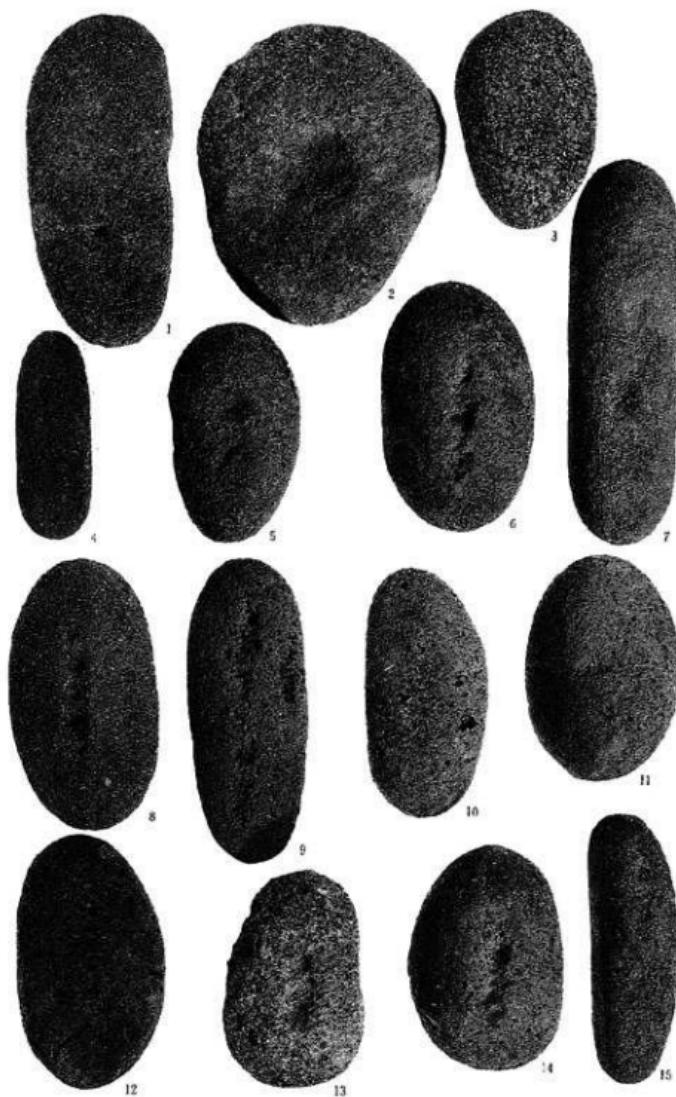
写真図版13 石 核



写真図版14 機 石 器



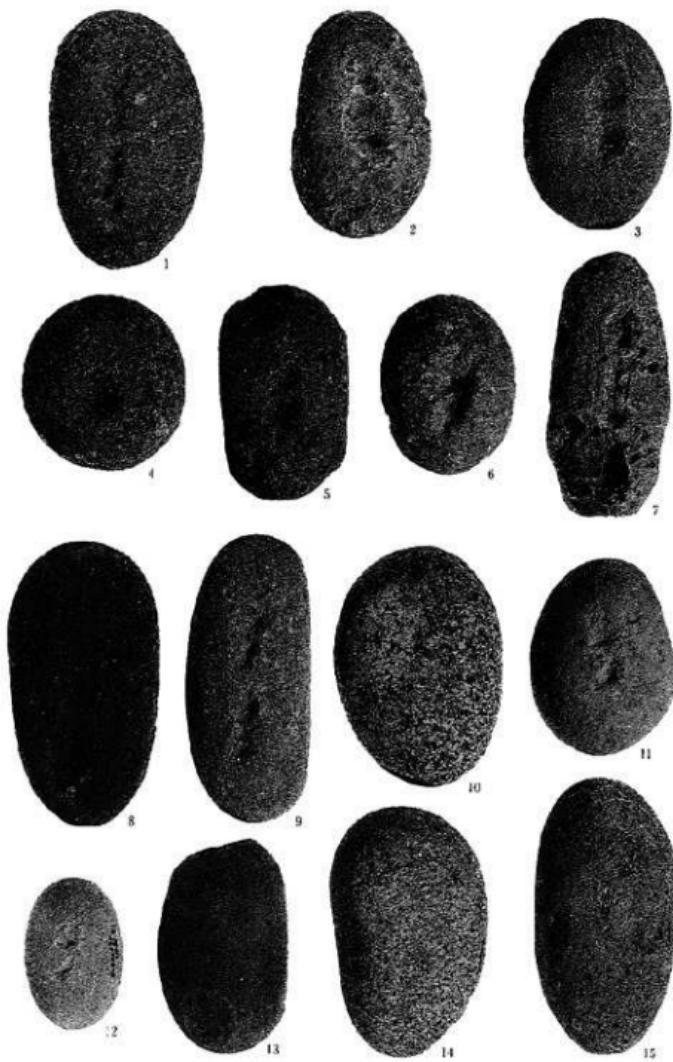
写真図版15 磨 石 器



写真図版16 磨石器



写真図版17 磨石器



写真図版16 雌石器



写真図版19 磨石器



写真図版20 積石器



写真図版21 石 器



写真図版22 磨石器・磨製石斧・石製品